牛頸窯跡群

- 総 括 報 告 書 I -

大野城市文化財調查報告書 第77集

2008

大野城市教育委員会

牛頸窯跡群

一総 括 報告 書 I -

大野城市文化財調查報告書 第77集

2008

大野城市教育委員会



(1) 牛頸地区航空写真 1



(2) 牛頸地区航空写真2



(1) かつての牛頸1



(2) かつての牛頸2



(1) 小田浦窯跡群79地点航空写真



(2) 梅頭窯跡覆屋

巻頭図版4



(1) 中通 A-2号窯跡



(2) 小田浦50 - [号窯跡



(1) 後田45 - [号窯跡



(2) 小田浦窯跡群38地点



(1) 後田60 - [号窯跡



(2) 後田窯跡群50地点



(1) 塚原古墳群



(2) 後田古墳群



(1) 中通古墳



(2) 後田3号墳鉄製 U 字型鋤先出土状況



(1) 塚原遺跡ピット



(2) 日ノ浦遺跡

巻頭図版10



(1) 小田浦40 - I 号窯跡須恵器出土状況

(2) 小田浦40 - I 号窯跡 出土須恵器



(3) ハセムシ窯跡群出土へラ書須恵器

大野城市は福岡平野の一角にあり、文化財に恵まれた街です。 市の東部には特別史跡大野城跡、中央部には特別史跡水城跡、 そして南部には須恵器生産地として九州最大規模を誇る牛頸窯 跡群があります。

牛頸窯跡群は本市教育委員会はもとより、福岡県教育委員会、 太宰府市教育委員会、春日市教育委員会、そして大学では立正 大学、国士舘大学、大谷女子大学(現大谷大学)など実に多く の機関によって発掘調査が行われてきました。各機関から調査 報告書が刊行されていますが、総括的なものは未刊でした。

このたび、大野城市教育委員会では牛頸窯跡群の重要性を踏まえ保存整備活用を図ることとし、同窯跡群の国史跡指定をめざすことにしました。そのために窯跡の存在が未確認であった山間部の分布調査を行い、また、発掘調査成果をまとめた総括報告書の作成に取り組みました。ここにその報告書が完成しましたのでご報告します。

本市はこれらを基に牛頸窯跡群の国史跡指定を受け保存整備 活用を図り、まちづくりに生かしていきたいと考えています。

また、本報告書によって牛頸窯跡群の重要性が広く世に知られ、その調査成果がさまざまに活用されることになることを願っております。

最後に、文化庁をはじめ福岡県教育委員会、関係市町村教育委員会そして地元の牛頸区や上大利区を含んだ大野城市南・中央地区コミュニティーの皆さま、さまざまな場でご指導、ご助言、ご協力をいただいた多くの皆さまに対しまして、厚く感謝申し上げます。

平成20年3月31日

大野城市教育委員会 教育長 古賀 宮太

例 言

1. 本書は牛頸窯跡群の総括報告書である。このため、福岡県教育委員会、大野城市教育委員会、 春日市教育委員会、太宰府市教育委員会並びに坂詰秀一編『筑前平田窯跡』等の発掘調査報告 書を資料としている。

本文中でこれらの調査成果に言及する際には、巻末掲載の牛頸窯跡群調査関係文献記載の 略番号を用いている(例えば、本文中の(市1)は、巻末文献リスト中の市1 副島邦弘・ 舟山良一 『牛頸中通遺跡群』を指す)。

また、「V.出土遺物の検討」の挿図には、中村浩監修『須恵器集成図録』第五巻西日本(雄山閣出版 1996)に収録されているものを多く利用させていただいている。

- 2. 本書に掲載した地形図は国土地理院発行の1/25,000地形図『福岡南部』・『不入道』・『太宰府』・『二日市』、1/50,000地形図『福岡南部』・『太宰府』、1/200,000地形図『福岡』、大日本帝国陸地測量部発行の1/25,000地形図『福岡南部』・『南畑村』・「太宰府』・「二日市』、及び、大野城市発行の1/5,000地形図『大野城市全図』を使用している。
- 3. 須恵器蓋杯については、奈良文化財研究所が使用している名称杯H(古墳時代通有の合子形蓋杯)、杯G(基本的にはつまみとかえりを持つ蓋と身のセット。ただし牛頸窯跡群産須恵器にはつまみのない蓋もある)、杯B(高台付きの杯)、杯A(無高台の杯)を使用する場合がある。
- 4. 本書の執筆は以下のとおりである。

5. 本書の編集は舟山良一・石川健が当たった。

本 文 目 次

I. はじめに	
1. はじめに	1
2. 牛頸窯跡群総括報告書作成の方針	2
3. 報告書の内容	2
4. 教育委員会の体制	3
II. 牛頸窯跡群調査研究史	
1. はじめに	5
2. 牛頸窯跡群調査史	5
(1) 牛頸窯跡群調査前史	
(2) 牛頸窯跡群における本格的調査の開始	
(3) 牛頸窯跡群における調査の進展	
3. 牛頸窯跡群研究史	9
(1) 牛頸窯跡群における須恵器編年研究	
(2) 牛頸窯跡群における支群の設定	
(3) 須恵器工人組織に関する問題	
4. 今後の課題-まとめにかえて	13
Ⅲ. 位置と環境	
1. 地理的環境	17
(1) 牛頸窯跡群周辺の地形	
(2) 牛頸山とその周辺の地質	
(3) 牛頸山の植生	
2. 歴史的環境	19
(1) 旧石器~縄文時代	
(2) 弥生時代	
(3) 古墳時代	
(4) 大宰府成立前後	
Ⅳ. 窯跡の分布	
1. 分布調査	29
(1) 平成17年以前の分布調査の経緯・方法	
(2) 平成18年・19年の分布調査	
(3) 牛頸窯跡群の範囲	
2. 窯跡の分布	31
(1) 時期ごとの分布	

V.出土遺物の検討	
1. 須恵器の編年	. 41
(1) 今までの研究と本書での考え方	
(i) 開窯期 (6世紀前半~中頃) から7世紀中頃まで	
a.『野添・大浦窯跡群』の編年案	
b. 本書での考え方	
(ii) 7世紀後半から閉窯期 (9世紀前半頃) まで	
a . 今までの編年案	
b. 本書での考え方	
(2) 編年案	
(3) 実年代観	
2. 器種構成	. 83
(1) はじめに	
(2) 対象と方法	
(3) 器種構成による窯跡・灰原の分類	
(4) まとめ	
(5) その他の器種	
3. 瓦·····	. 99
4. その他の遺物	120
VI. 窯体の検討	
1.時期ごとの変遷	129
2. 多孔式煙道	137
3. 溝	140
4 . 燃焼部	144
5. 窯体・窯体周辺の土坑・ピット	146
6. 付帯施設	152
Ⅲ. 自然科学的分析の成果	
1. はじめに	159
2. 考古地磁気年代測定	159
3. 樹種同定	162
4. 胎土分析	165
5. 窯焼成温度推定	168
6. 赤色顔料の同定	169
7. 鉄刀象嵌の分析	170
8. まとめ	171

Ⅷ.考察	
1. ヘラ記号から見た須恵器の流通範囲	177
2. ヘラ書須恵器	203
3. 甕	211
4. 瓦生産	231
5. 窯体規模と基数の変化-生産量の推定に向けて	235
(1) はじめに	
(2) 窯体規模の通時的変化	
(3) 窯の操業時期による規模と基数の通時的変化	
(4) まとめ	
6. 集落と古墳	245
(1) はじめに	
(2) 集落	
(3) 古墳・墳墓	
(4) 集落と古墳の関係	
7. 支群設定	259
(1) はじめに	
(2) 特徴的なグループの抽出	
(i) 時期と規模の異なる窯跡が2基並列する窯跡群	
(ii) 同時期で規模の異なる窯跡からなる窯跡群	
(iii) 排煙孔の形状に違いがある窯跡	
(iv) ヘラ書須恵器出土窯跡群	
(v) 瓦陶兼業窯	
(3) 検討	
IX.総括-牛頸窯跡群が占める位置-	
1 . はじめに	263
2. 牛頸窯跡群における須恵器生産	263
3. 九州の須恵器生産	264
(1) 8世紀中頃までの須恵器生産	
(2) 8世紀中頃以降の須恵器生産	
4. まとめ	275
V 空時但去。の奴別し人後の取り知るとついて	
X. 窯跡保存への経過と今後の取り組みについて 1.経過	001
	281
2. 今後の取り組みについて	282
付. 大谷窯跡群について	284
牛頸窯跡群詳細分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	285
牛頸窯跡群調査関係文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	313

巻頭図版目次

図版	1	(1)	牛頸地区航空写真 1
		(2)	牛頸地区航空写真 2
図版	2	(1)	かつての牛頸1
		(2)	かつての牛頸2
図版	3	(1)	小田浦窯跡群79地点航空写真
		(2)	梅頭窯跡覆屋
図版	4	(1)	中通A-2号窯跡
		(2)	小田浦50 - I 号窯跡
図版	5	(1)	後田45 - I 号窯跡
		(2)	小田浦窯跡群38地点
図版	6	(1)	後田60 - I 号窯跡
		(2)	後田窯跡群50地点
図版	7	(1)	塚原古墳群
		(2)	後田古墳群
図版	8	(1)	中通古墳
		(2)	後田3号墳鉄製U字型鋤先出土状況
図版	9	(1)	塚原遺跡ピット
		(2)	日ノ浦遺跡
図版	10	(1)	小田浦40 - I 号窯跡須恵器出土状況
		(2)	小田浦41 - I 号窯跡出土須恵器
		(3)	ハセムシ窯跡群出土へラ書須恵器

図版目次

図版	1	(1)	牛頸窯跡群遠景
		(2)	試掘調査状況
図版	2	(1)	小田浦40 - I 号窯跡出土須恵器
		(2)	日ノ浦遺跡SK20出土須恵器
図版	3	(1)	月ノ浦 I 号窯跡出土軒丸瓦
		(2)	野添7次2号窯跡出土陶棺
図版	4	(1)	中通A-2号窯跡
		(2)	同窯跡排煙部と溝
図版	5	(1)	中通B窯跡
		(2)	同窯跡排煙部

図版	6	(1)	中通D地点気球写真(窯跡と古墳)
		(2)	中通S3号墳墳丘断面(墳丘内灰層)
図版	7	(1)	平田D窯跡全景
		(2)	同窯跡最終床面と焼台
図版	8	(1)	平田D窯跡床面断面
		(2)	同窯跡(上部より地下式窯の様子)
図版	9	(1)	平田D窯跡灰原蓋杯配置状況
		(2)	同(蓋とした須恵器甕片除去後)
図版	10	(1)	後田63地点窯跡検出状況
		(2)	後田63 - I 号窯跡側壁工具痕
図版	11	(1)	小田浦37 - I 号窯跡
		(2)	同窯跡床面断面
図版	12	(1)	小田浦37 - I 号窯跡構築材の痕跡を示す穴(窯尻部分壁面)
		(2)	小田浦33 - I 号窯跡構築材の痕跡を示す穴(壁面)
図版	13	(1)	小田浦40 - I 号窯跡
		(2)	小田浦40 - I 号窯跡側壁補修痕
図版	14	(1)	後田60 - I 号窯跡全景
		(2)	同遠景
図版	15	(1)	石坂窯跡群E地点全景
		(2)	本堂5次6号窯跡
図版	16	(1)	塚原 5 号墳
		(2)	同全景
図版	17	(1)	中通古墳石室
		(2)	同遺物出土状況
図版	18	(1)	後田2号墳
		(2)	同遺物出土状況
図版	19	(1)	日ノ浦遺跡 S K13
		(2)	日ノ浦遺跡 S K16
図版	20	(1)	塚原遺跡
		(2)	同 2 号掘立柱建物
図版	21	(1)	大谷 3 号窯跡左側壁
		(2)	大谷 3 号窯跡右側壁
図版	22	(1)	大谷3号窯跡排煙部(内側から)
		(2)	大谷3号窯跡排煙部(外側から)

挿図目次

第	1	図	牛頸窯跡群の位置(1/200,000)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	18
第	2	図	福岡平野の主な遺跡(1/62,500)	…折り込み
第	3	図	牛頸窯跡群関係遺跡分布図(1/25,000)	…折り込み
第	4	図	Ⅲ A期の窯跡分布図	33
第	5	図	ⅢB期の窯跡分布図	33
第	6	図	ⅣA期の窯跡分布図	35
第	7	図	ⅣB期の窯跡分布図	35
第	8	図	V期の窯跡分布図	36
第	9	図	VI期の窯跡分布図	37
第	10	図	WIA期の窯跡分布図 ······	37
第	11	図	WIB期の窯跡分布図 ······	38
第	12	図	Ⅷ期の窯跡分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	38
第	13	図	杯Hと杯Bの窯跡分布図	39
第	14	図	小田浦40 · I 号窯跡遺物出土状態実測図 (1/20、遺物1/8) ······	46
第	15	図	野添 6 号窯跡出土須恵器実測図 (1/4)	51
第	16	図	野添 9 号窯跡出土須恵器実測図 (1/4)	53
第	17	図	野添12号窯跡出土須恵器実測図(1/4)	54
第	18	図	惣利1号窯跡出土須恵器実測図(1/4)	55
第	19	図	小田浦33 - I 号、後田45 - I 号窯跡出土須恵器実測図(1/4) ······	57
第	20	図	後田63 - I 号窯跡出土須恵器実測図 (1/4) ······	58
第	21	図	平田D号窯跡出土須恵器実測図(1/4)	59
第	22	図	月ノ浦 I 号窯跡出土須恵器実測図(1/4) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	61
第	23	図	後田46- I 号窯跡出土須恵器実測図(1/4)	62
第	24	図	中通D-1、D-2号窯跡出土須恵器実測図(1/4) ······	63
第	25	図	中通A-2号窯跡出土須恵器実測図(1/4)	64
第	26	図	大浦1、2号窯跡出土須恵器実測図(1/4)	66
第	27	図	小田浦50 - I 号、後田60 - I 号窯跡出土須恵器実測図(1/4) ·······	67
第	28	図	後田66 - Ⅰ号窯跡・SK01、篠振窯跡出土須恵器実測図(1/4)	69
第	29	図	井手X3号、後田66-I号窯跡出土須恵器実測図(1/4) ······	70
第	30	図	井手X1、2号窯跡出土須恵器実測図(1/4)	71
第	31	図	宮ノ本9号窯跡出土須恵器実測図(1/4)	72
第	32	図	石坂C-1号窯跡出土須恵器実測図(1/4) ····································	74
第	33	図	石坂 C - 1、 C - 2 号窯跡出土須恵器実測図(1/4) ······	75
第	34	図	井手24号窯跡出土須恵器実測図(1/4)	77
第	35	図	本堂5次6号窯跡出土須恵器実測図(1/4)	78
第	36	図	石坂E-3号窯跡出土須恵器実測図(1/4) ····································	79
第	37	図	日ノ浦遺跡土坑出土須恵器実測図(1/4)	80

第	38	図	蓋杯の変遷モデル(1) (1/4)	81
第	39	図	蓋杯の変遷モデル(2)(1/5)	82
第	40	図	水瓶・瓶子実測図 (1/4)	95
第	41	図	瓶子実測図 (1/4)	96
第	42	図	双耳瓶実測図 (1/4)	97
第	43	図	托・把手付甕・金属器模倣須恵器実測図 (1~7·15~21:1/4、8~14:1/8) ·······	98
第	44	図	神ノ前2号窯跡出土須恵器実測図(1/6)	100
第	45	図	神ノ前2号窯跡出土瓦実測図(1/6)	101
第	46	図	大浦2号窯跡出土須恵器実測図 (1/6)	102
第	47	図	大浦2号窯跡出土瓦実測図(1/6)	103
第	48	図	野添13号窯跡出土須恵器実測図(1/6)	104
第	49	図	野添13号窯跡出土瓦実測図(1/8)	105
第	50	図	野添 4 次 2 号窯跡出土須恵器実測図 (1/6)	106
第	51	図	野添 4 次 2 号窯跡出土瓦実測図 (1/6)	107
第	52	図	月ノ浦 I 号窯跡出土須恵器実測図(1/6)	108
第	53	図	月ノ浦 I 号窯跡出土瓦実測図(1/8) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	109
第	54	図	小田浦28地点出土須恵器実測図(1/6)	110
第	55	図	小田浦28地点出土瓦実測図(1/8)	111
第	56	図	小田浦79地点2号窯跡出土須恵器実測図(1/6)	112
第	57	図	小田浦79地点2号窯跡出土瓦実測図(1/8)	113
第	58	図	浦ノ原4号窯跡出土須恵器・瓦実測図(瓦:1/8、土器:1/6)	114
第	59	図	浦ノ原遺跡A地区竪穴状遺構出土須恵器・瓦実測図(瓦:1/12、土器:1/6)	115
第	60	図	惣利西遺跡2号住居跡出土須恵器・瓦実測図(瓦:1/10、土器:1/6)	116
第	61	図	惣利西遺跡 4 号住居跡出土須恵器・瓦実測図(瓦:1/10、土器:1/6)	117
第	62	図	春日平田窯跡出土瓦実測図(1/6)	117
第	63	図	日ノ浦遺跡17号住居跡出土須恵器実測図(1/6)	118
第	64	図	日ノ浦遺跡17号住居跡出土瓦実測図(1/8)	118
第	65	図	牛頸窯跡群内の瓦出土遺跡(1/25,000)	119
第	66	図	陶棺実測図	121
第	67	図	円筒状土製品実測図(1/8)	122
第	68	図	三足土器(棒状土製品)実測図(1/3)	123
第	69	図	硯実測図(1/4)	124
第	70	図	瓦塔・権・土馬実測図 (瓦塔・土馬:1/4、権:1/3)	125
第	71	図	窯跡実測図①(1/200)	130
第	72	図	窯跡実測図②(1/200)	131
第	73	図	窯跡実測図③(1/200)	133
第	74	図	窯跡実測図④(1/100)	135
第	75	図	窯跡実測図⑤(1/100)	136
第	76	図	窯跡実測図⑥(1/100)	138
第	77	図	陶邑窯跡群MT5-Ⅲ号窯跡実測図(1/150) ····································	139

第	78	図	溝付窯跡実測図①(1/200)	141
第	79	図	溝付窯跡実測図②(1/200)	142
第	80	図	溝付窯跡実測図③(1/200)	143
第	81	図	窯体の構造と燃焼部の位置	145
第	82	図	窯体内部土坑実測図①(1/100)	147
第	83	図	窯体内部土坑実測図②(1/100, 1/200)	148
第	84	义	窯体内部土坑実測図③(1/100, 1/200)	149
第	85	図	窯体ピット実測図(1/100)	150
第	86	図	付帯施設実測図(1/100, 1/200)	151
第	87	図	西南日本過去2000年間の地磁気永年変化 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	160
第	88	図	8世紀のハセムシ窯跡変化曲線(実線)および広岡曲線(破線)	160
第	89	図	石坂窯跡出土須恵器のRb-Sr分布図 ·····	166
第	90	図	石坂窯跡出土土師器のRb-Sr分布図 ······	166
第	91	図	梅頭1号窯跡出土甕類のK-Ca、Rb-Sr分布図 ······	167
第	92	図	梅頭1号窯跡出土杯類のK-Ca、Rb-Sr分布図 ·····	167
第	93	図	本堂3次窯跡出土須恵器のK-Ca、Rb-Sr分布図 ······	168
第	94	図	梅頭遺跡出土鉄刀象嵌部分の蛍光X線分析	172
第	95	図	複数産地からの製品流通と構成比のモデル	179
第	96	図	生産地と消費地におけるヘラ記号を有する杯類の構成	180
第	97	図	宗像窯跡群におけるヘラ記号の様相	181
第	98	図	牛頸窯跡群における杯器種別へラ記号の様相	181
第	99	図	各窯跡群出土へラ記号資料の構成 (杯H)	182
第	100	図	玄界灘沿岸部の諸地域における分布 (杯H)	184
第	101	図	博多湾沿岸部から筑後地方にかけての分布(杯H)	185
第	102	図	宗像市-地域Ⅱ-大野城市にかけての分布(杯H)	186
第	103	図	玄界灘沿岸部の諸地域における分布 (杯G)	187
第	104	図	博多湾沿岸部から筑後地方にかけての分布 (杯G)	188
第	105	図	宗像市-地域Ⅱ-大野城市にかけての分布(杯G)	188
第	106	図	玄界灘沿岸部の諸地域における分布 (杯B)	189
第	107	図	博多湾沿岸部から筑後地方にかけての分布 (杯B) ······	190
第	108	図	宗像市-地域Ⅱ-大野城市にかけての分布(杯B)	191
第	109	図	「外面」へラ記号の分布①(杯H)	193
第	110	図	「内面」へラ記号の分布①(杯H)	193
第	111	図	「外面」へラ記号の分布②(杯G)	194
第	112	図	「内面」へラ記号の分布②(杯G)	194
第	113	図	「外面」へラ記号の分布③(杯B)	195
第	114	図	「内面」へラ記号の分布③(杯B)	195
第	115	図	牛頸窯跡群出土へラ書須恵器(1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	205
第	116	図	牛頸窯跡群出土へラ書須恵器 (2)	206
第	117	义	牛頸窯跡群出土へラ書須恵器 (3)	207

第	118	図	甕の計測部位・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・212
第	119	図	容量計算に使用した甕① (1/10)
第	120	図	容量計算に使用した甕② (1/10)
第	121	図	容量計算に使用した甕③ (1/16)
第	122	図	口径×器高······216
第	123	図	胴部最大径×胴部高 · · · · · · 216
第	124	図	胴部最大径×器高216
第	125	図	口径×容量1 ················217
第	126	図	器高×容量1 ·······217
第	127	図	胴部最大径×容量2 ······217
第	128	図	胴部高×容量2 ····································
第	129	図	口径×頸部高と頸部文様との関係 ········219
第	130	図	甕頸部文様と文様帯の分類
第	131	図	牛頸窯跡群出土甕の変遷(1/15)
第	132	図	御陵3号墳・墳丘東側中位須恵器出土状況・・・・・・226
第	133	図	墳丘における甕の出土状況 (王城山 C 古墳群) · · · · · · · 227
第	134	図	時期別にみた窯体規模(1)
第	135	図	時期別にみた窯体規模(2)
第	136	図	焼成部面積の築窯期別推移
第	137	図	窯跡数と焼成部床面積の増減242
第	138	図	牛頸窯跡群内集落・古墳群位置図 (1/20,000) 折り込み
第	139	図	中通古墳、中通D - 1 · D - 2 窯跡出土蓋杯ヘラ記号一覧256
第	140	図	牛頸窯跡群分布と支群 (1/25,000)261
第	141	図	九州の須恵器窯跡分布図265
第	142	図	苅又窯跡群分布図並びに供給範囲図271
第	143	図	豊前の須恵器窯跡分布図273
第	144	図	牛頸窯跡群詳細分布図・対象範囲全体図 (1/40,000)285
第	145	図	牛頸窯跡群詳細分布図(1) (1/10,000)286
第	146	図	牛頸窯跡群詳細分布図 (2) (1/10,000)287
第	147	図	牛頸窯跡群詳細分布図 (3) (1/10,000)289
第	148	図	牛頸窯跡群詳細分布図 (4) (1/10,000)290
第	149	図	牛頸窯跡群詳細分布図 (5) (1/10,000)291
第	150	図	牛頸窯跡群詳細分布図 (6) (1/10,000)293
第	151	図	牛頸窯跡群詳細分布図 (7) (1/10,000)295
第	152	図	牛頸窯跡群詳細分布図(8) (1/10,000)297
第	153	図	牛頸窯跡群詳細分布図 (9) (1/10,000)299
第	154	図	牛頸窯跡群詳細分布図 (10) (1/10,000)302
第	155	図	牛頸窯跡群詳細分布図 (11) (1/10,000)305
第	156	図	牛頸窯跡群詳細分布図 (12) (1/10,000)306
pope.	157	図	牛頸窯跡群詳細分布図(13) (1/10,000)307
第	101		
第第	158	図	牛頸窯跡群詳細分布図 (14) (1/10,000)309

表目次

第	1	表	Ⅲ期~V期の窯跡・灰原の器種構成 ······84
第	2	表	VI期の窯跡・灰原の器種構成
第	3	表	VIIA期の窯跡における器種構成
第	4	表	WIIB期の窯跡における器種構成
第	5	表	WI期の灰原における器種構成89
第	6	表	VI期~VII期の窯跡・灰原における器種構成91
第	7	表	その他の器種出土遺跡一覧94
第	8	表	牛頸窯跡群內瓦出土遺構一覧表
第	9	表	九州の瓦塔出土地名表
第	10	表	その他の遺物出土遺跡一覧
第	11	表	窯体構造一覧表(煙道・溝・ピット) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
第	12	表	牛頸窯跡群における自然科学的分析
第	13	表	牛頸ハセムシ窯跡群(18~20地区)における考古地磁気年代推定結果161
第	14	表	牛頸窯跡群における考古地磁気年代推定結果
第	15	表	牛頸窯跡群における樹種同定結果
第	16	表	牛頸梅頭1号窯跡出土赤色顔料分析結果一覧169
第	17	表	宗像窯跡群におけるヘラ記号の様相 (杯H)181
第	18	表	牛頸窯跡群における杯各器種別へラ記号の様相181
第	19	表	各窯跡群出土へラ記号資料の構成(杯H)・・・・・・182
第	20	表	各市町村における杯Hにみられるヘラ記号変異の構成183
第	21	表	窯内における頸部文様と文様帯各分類の共伴状況221
第	22	表	大野城市内における消費地出土の中大型甕225
第	23	表	分析資料の法量一覧
第	24	表	瓦陶兼業窯一覧表 1
第	25	表	瓦陶兼業窯一覧表 2
第	26	表	各時期における窯体水平長 (上段) と窯体最大幅 (下段)237
第	27	表	焼成部面積の築窯期別推移
第	28	表	各時期窯数と焼成部面積241
第	29	表	各時期における焼成部面積の推定値
第	30	表	古墳群の使用期間252

I. はじめに

1. はじめに

牛頸窯跡群は大野城市上大利・牛頸を中心にして、春日市・太宰府市の一部を含む東西4キロ、南北4.8キロの範囲にある須恵器窯跡群の名称で、九州ではもちろん、兵庫県以西の西日本でも最大の窯跡群である。現在まで大野城市教育委員会をはじめ、福岡県教育委員会、春日市教育委員会、太宰府市教育委員会そして複数の大学によって発掘調査が実施され、調査基数は300基を超える。各窯跡の発掘調査報告書は一部を除きそれぞれの調査主体から刊行されているが、陶邑窯跡群やその他全国の窯跡群に比較して全体が把握できるような報告書が刊行されてこなかった。このことから、牛頸窯跡群の歴史的位置が必ずしも正確には評価されていないのが実情と言える。

また、発掘調査が完了した窯跡群のほとんどは造成等によって消滅し、梅頭窯跡と石坂窯跡群の一部を除き既に見ることはできない。

大野城市教育委員会としても、総括的な報告書の作成と、活用を重視した窯跡の保存整備を実現すべく、以前よりその意思を持ち続けてはいたが、具体的にどの窯跡を保存するかということも決まらず、なかなか実現できなかった。しかし、中学校の建設用地として市の開発公社が買収していた土地で発見された小田浦窯跡群79地点周辺の土地が中学校建設の必要がなくなり、保存整備をする窯跡を具体的に検討できるようになった。一方、文化庁も牛頸窯跡群の重要性から国史跡指定の可能性に言及され、当該窯跡群の確認調査を国庫補助事業として実施できた。

この間の状況をやや詳しく述べれば、旧大字牛頸区内には中学校(平野中学校)が1校しかないため生徒増加予測からして分離校の必要性が想定され、市はその準備に取り組んだ。そして平成4年には候補地を選定し、平成6・7年度に大野城市土地開発公社が牛頸2392-1番地周辺を約35,000㎡買収した。ここは後述するように良好な状態で須恵器窯跡が存在していると想定していた場所であったため、社会教育課では当初から中学校ができるならぜひ保存して学校教育だけではなく、社会教育面でも活用できるようにしてほしいとの要望をした。また、学校教育課の要望を受け、当該地の文化財分布状態を調べるための試掘調査を平成11年度の夏と冬に行い、窯跡の存在を確認した。

しかし、予測していた生徒数は意外に伸びなかったため、中学校建設が必要かどうかという論議も出始め、平成14年度には中学校建設が中止になった場合、当該地とその周辺の土地利用について検討する「平野中学校分離校用地等利用検討プロジェクトチーム」が作られ、検討が行われた。社会教育課からも1名がメンバーに選ばれ、窯跡を利用した史跡公園的な整備を強く主張した。報告書では明確な土地利用方法はうたわれなかったが、窯跡のある一帯については保存整備する方向性が載せられた。

これを受けて具体的な整備に向けて窯跡の数や規模等正確な情報を得るため、翌15年度末に第 1次の確認調査を実施した。その結果7世紀前半の窯跡2基を確認した。翌16年度には文化庁に 認められたため、第2次確認調査は国庫補助事業として実施した。平成16年9月から17年3月まで行ったが、2月には文化庁玉田芳英調査官(当時)の視察を受けた。そして、調査の指導とともに、牛頸窯跡群の国史跡指定には総括的な報告書の作成と窯跡の分布調査が必要であることの指導を受けた。さらに18年8月には坂井秀弥主任調査官、19年7月には渡辺丈彦調査官の現地指導と助言を受けた。

このように、本報告書は、以前より市教育委員会として刊行の必要性を痛感していたことに加え、 牛頸窯跡群の国史跡指定をめざすというテーマのもとに作成するものである。

2. 牛頸窯跡群総括報告書作成の方針

本総括報告書作成に際しては、以下のような方針を立てて作業に当たった。

【内容】

- ① 牛頸窯跡群の遺構・遺物の特徴を描き出すことを目的とするが、その方法としては牛頸窯跡群の主体性・独自性を重視しながらも他地域の須恵器窯跡群と比較することによってより鮮やかに描き出すことにしたい。
 - ア 陶邑窯跡群との比較を通して
 - イ 九州の他地域の窯跡群との比較を通して
- ② 須恵器編年案を示すこと
- ③ 牛頸窯跡群の九州 (西海道) における位置を明らかにすること
- ④ 牛頸窯跡群の日本史上における位置を明らかにすること

【体裁等】

- ① 窯跡の発掘調査報告書を刊行したものは、基本的にすべて収録する。 C D を利用する
- ② 窯体と遺物の実測図は引用できるような縮尺、線の明らかさを重視する

3. 報告書の内容

目次を立て、その項目ごとの目標は以下のとおりとする。

I. はじめに

作成目的、作成方針等を述べる。

- II. 牛頸窯跡群研究史
 - 方針(内容-①)に基づく研究史。
- Ⅲ.位置と環境

方針(内容-①)に基づく記述。

IV. 窯跡の分布

分布調査の経緯と方法、牛頸窯跡群の範囲、時期ごとの分布を明らかにする。

V. 出土遺物の検討

牛頸窯跡群出土須恵器の編年案―小田編年を基にしながらも合致点、相違点を検討する。 時期ごとの器種構成を示す。

時期ごとの流通範囲を示す。

瓦一出土窯跡の位置、特徴、時期、道具瓦の時期などについて検討する。

その他特徴的な遺物を取上げる。

VI. 窯体の検討

時期ごとの変遷を追う。多孔式煙道、溝、燃焼部、平面プラン等。地域によって違いがないか。

VII. 自然科学的分析の成果

燃料の樹種、地磁気測定等の自然科学的分析成果のまとめを行う。

Ⅷ.考察

ヘラ記号の付けられる時期、器種、場所等について検討する。

周辺の状況と交流範囲の推定。

ヘラ書須恵器について牛頸窯跡群内での出土状況を検討する。

甕一実測図から容量を計算:口径・胴部径・頸部高・胴部高との相関関係 大・中・小などの区別等について検討する。

瓦陶兼業窯の内容を集成。

窯体の規模と基数の変化を探る。

牛頸窯跡群内の集落と古墳の関係から当時の須恵器生産体制を探る。

拠点集落はあるか、集落構造の検討を行う。

牛頸窯跡群内の古墳群を比較 (窯跡群との関係)。

今までの支群設定と今後の見通しを探る。

IX. 総括

総括―九州の他の地域の窯跡群との比較を行い、合わせて陶邑窯跡群など全国の大規模窯跡群との様相比較をとおし、牛頸窯跡群の位置を検討する。

X. 窯跡保存への経過と今後の保存整備活用の取り組みについて検討する。

4. 教育委員会の体制

本報告書作成に取り組んだ平成18・19年度の大野城市教育委員会の体制は以下のとおりである。

教育長		古賀	宮太
教育部長	小嶋	健	
ふるさと文化	舟山	良一	
"	係長	中山	宏
"	主査	徳本	洋一
"	主査	石木	秀啓
//	主査	丸尾	博恵

```
"
       主任技師
                林
                    潤也
"
       主任技師
                早瀬
                    賢
"
       技師
                上田
                    龍児
"
       嘱託
                井上
                    愛子
//
       嘱託
                北川 貴洋 (18年度)
       嘱託
                岡田
                    裕之(18年度)
       嘱託
                城門
                    義廣(19年8月まで)
       嘱託
                遠藤
                    茜
"
       嘱託
                田尻 義了 (19年6月まで)
       嘱託
                石川 健
"
       嘱託
                大里 弥生
//
       嘱託
                吉井 美智恵
"
       嘱託
                大久保 玲子
       嘱託
                能塚 由紀
```

この他、今までの発掘調査や整理作業に取り組んでいただいた多くの作業員のみなさん、地元の 牛頸区と上大利区のみなさん、坂井秀弥、玉田芳英(現在奈良文化財研究所)、渡辺丈彦氏などの 文化庁調査官の方々、磯村幸男福岡県文化財保護課長をはじめ、新原正典、池辺元明、小池史哲、 伊崎俊秋、飛野博文、小田和利、重藤輝行、斎部麻矢、小沢佳憲、入佐友一郎氏や、太宰府市教 育委員会の城戸康利、山村信榮、中島恒次郎氏らの周辺市町村教育委員会、宮本一夫先生他九州大学、 小田富士雄先生他の福岡大学、坂詰秀一先生他立正大学、大川清先生他日本窯業史研究所、佐田茂 先生他大野城市文化財保護審議会、市役所の関係部局、そして最初に窯跡群の場所を教えていただ いた前田軍治氏など非常に多くの方々のお世話でこの報告書が出来上がっている。厚く感謝の意を 表したい。

II. 牛頸窯跡群調査研究史

1. はじめに

現在のところ、牛頸窯跡群において調査が行われた窯跡の総数はすでに300基を超えており、存在する窯跡は500基を超えるものと予想される。ここでは、牛頸窯跡群に関して実施されてきた調査および研究について、その成果の概略をまとめるとともに、今後の調査・研究の方向性について述べていきたい。

牛頸窯跡群の研究史については、1989年に、大野城市教育委員会が刊行した『牛頸ハセムシ窯跡群II』の中にも詳細なまとめがあり〈註1〉、本稿でもその内容を参考としたい。しかし、その後、15年以上が経過し、その間に新たな成果も追加されていることから、改めて検討しなおす点も多いと思われる。とくに、当時課題とされた点について、その後の調査・研究によってどの程度進展がみられたのかという点にも留意したい。また、2005年、大野城市教育委員会では『大野城市史』を刊行したが、その中でも牛頸窯跡群の調査成果をまとめている〈註2〉。

本章では、これらのまとめを参考にしながらも、本報告書作成に当たっての問題について再確認 する意味も含めて、あらためて調査・研究史を振り返っていきたい。

2. 牛頸窯跡群調査史

(1) 牛頸窯跡群調査前史

牛頸において須恵器窯跡の存在がはじめて学術的に認識されるのは、大正年間の中山平次郎氏による踏査を嚆矢とする。その後、1963年に、上大利の小水城築堤の採土にともない、崖面に窯跡の断面が露出し、若干の出土品があったとの通報を受けたことから、小田富士雄氏が現地踏査をおこなっている。それを踏まえて、小田氏は、1966年に「九州地方古代窯址地名表」をまとめ、牛頸窯跡群の名称も掲載している〈註3〉。同じ年、柳田康雄氏を中心とする福岡県教育委員会による分布調査では、牛頸における多くの窯跡の分布とその地点がはじめて明らかとなり、以後の窯跡群調査の基礎となっている〈註4〉。その後、小田氏は、奈良時代以降、急激に増加し、大群集を形成する筑前の窯跡として、宗像郡宗像町(現宗像市)河東字須恵、筑紫郡大野町(現大野城市)牛頸の2ヶ所を挙げ、『延喜式』に記載のある須恵器調納をおこなう生産地として比定した〈註5〉。このように、1960年代後半までには、牛頸に大規模な窯跡群が存在するという認識が得られるに至った。

(2) 牛頸窯跡群における本格的調査の開始

牛頸における最初の本格的調査は、1968年の福岡県教育委員会による大浦窯跡群の調査である。 発見された2基の窯跡のうち、大浦2号窯跡は、小田富士雄氏による編年(以下、「小田編年」と 略称させていただく)のNB期~V期の領恵器と瓦を同時に焼成した「瓦陶兼業窯」であることが明らかとなった。翌69年には、九州大学の小田富士雄・真野和夫両氏を中心として、すでに1966年に分布調査をおこなっていた上大利地区に所在する野添窯跡群の発掘調査を実施し、調査前には消滅していた2基の窯跡を含む、7基の窯跡を確認した。そのうち、6号窯跡と9号窯跡は、現在のところ、牛頸窯跡群内では最古式に当たる窯跡で、6号窯跡はⅢA期にまで遡る。これらの成果は、1970年に『野添・大浦窯跡群』の報告書として刊行されることによって、牛頸窯跡群の重要性が世に広められることとなる(県1)。

また、国士館大学の大川清氏によって、1968年に東浦窯跡群、翌69年に大谷窯跡群の調査がおこなわれた。未報告のため、詳細は明らかにされていないが、前者ではN期の窯跡3基が検出され、3本の煙道と排水施設を付設する窯体構造が確認されたほか、7世紀前半の須恵器に若干の瓦をともなって出土し、瓦陶兼業窯であることが明らかとなった。また後者では、窯跡6基が確認されたうち、4基について発掘調査がおこなわれた。そのうち、6世紀後半~7世紀前半の窯跡2基には3本の煙道が設けられ、7世紀後半~8世紀初頭の窯跡1基には、6本の煙道と焚口側面に石組をもつことが確認された〈註6〉。これら複数の煙道は、後に「多孔式煙道」〈註7〉と名づけられ、牛頸窯跡群独特の窯構造として知られるようになる。

その後、1971 ~ 72年には、遺跡分布図作成のため、大野城市教育委員会による踏査がおこなわれ、窯跡70数基の存在が確認されるに至り〈註8〉、1972年には、福岡県教育委員会による上平田窯跡群の調査や、立正大学の坂詰秀一氏らによる平田窯跡の調査がおこなわれる。そして1979年には、大野城市教育委員会による最初の窯跡調査である中通窯跡群の調査が開始される。この調査では、A~D地点において、V~V期に該当する計5基の窯跡が検出されたが、これに先立つ1972 ~ 73年の調査では、窯跡と同一の尾根筋に、後期の古墳群が近接して築造されていたことが明らかにされており、これらの古墳群と須恵器工人集団との関係も指摘されている(市1・市5)。

一方、牛頸山の東側に対峙する、御笠川東岸地域でも須恵器窯跡が確認されている。1972年に、福岡県教育委員会によって、裏ノ田窯跡2基、雉子ヶ尾窯跡2基の調査が実施され、III B~IV A 期の窯跡が確認された。とくに、裏ノ田窯跡には、隣接して竪穴住居跡群からなる集落跡があり、窯を営む集団との関連が想定された〈註9〉。これら牛頸の範囲外に立地する窯跡についても、牛頸窯跡群を評価する上で検討すべき対象といえよう。

(3) 牛頸窯跡群における調査の進展

従来の調査を基礎として、牛頸窯跡群では地形にもとづく支群が意識されるようになってきた。 上野精志氏は、牛頸窯跡群を川の流路を中心とした地形によって、平野川両岸丘陵地帯の平野川支 群、牛頸川両岸地帯の牛頸川支群、上大利~南ヶ丘の両丘陵地帯の上大利支群、牛頸丘陵の北端地 帯の春日支群、東方丘陵端周辺の大佐野支群、と五つの支群に大別した〈註10〉。そして、すでに 調査がおこなわれている上大利支群や牛頸川支群とは異なる平野川支群でも窯跡の調査が実施され ることとなった。1976年、立正大学の坂詰秀一氏を中心とする小田浦窯跡群の調査が最初である。 確認された4基の窯跡のうち、6世紀後半~末のA-1・2号(後に、38-I・II号と改称)窯跡、 6世紀末~7世紀前半のB-1号(後に、39-I号と改称)窯跡は、多孔式煙道に溝状遺構が取り付くとともに、焚口部周辺からは柱穴が確認され、小屋掛け施設の存在が推測された〈註11〉。このように、窯跡のほかに、それに付属する施設の実態についても次第に明らかとなってくる。

また、大野城市に隣接する春日市や太宰府市(旧太宰府町)域にも、牛頸窯跡群の範囲は及んでおり、窯跡の調査も実施されるようになる。春日市教育委員会による、1977~78年の浦ノ原窯跡群の調査では、窯跡8基と竪穴状遺構1基が確認された。この窯跡群では、NB~VII期の窯跡が近接した地点に順次築かれており、時期が下るにつれて窯が高位置に移動するという現象がみられることが指摘された。なお、竪穴状遺構からは7世紀後半代の平瓦も出土している(春1)。

その後、1978 ~ 79年、春日市惣利1号窯跡の調査(春2)、1979 ~ 80年、惣利2~9号窯跡の調査が実施され、春日支群に存在する窯跡の実態が明らかとなってきた。また、窯跡に近接して、古墳時代の竪穴住居跡群、竪穴状遺構、ピット群などが検出され、須恵器工人集団との関連が指摘されている(春3)。さらに、1982年、春日平田北遺跡で窯跡15基、住居跡、古墳の調査、1983年、春日平田西遺跡で窯跡4基、住居跡の調査、1984年、春日平田南遺跡で窯跡1基、古墳の調査、1985年、春日平田遺跡で窯跡1基の調査が実施されたが、いずれも未報告のため詳細は不明である。

さて、先述の神ノ前窯跡群の調査において特筆すべきは、須恵器の製作技法を用いて作られた 瓦が、ⅢB期に遡る可能性のある須恵器と共伴して出土しているという点である(春1)。その後、 1982年の大野城市月ノ浦 I 号窯跡の調査でも、灰原から軒丸瓦のほか、丸瓦・平瓦・鴟尾が出土 しており、神ノ前窯跡の瓦よりやや後出する時期と考えられている(市13)〈註12〉。また、神ノ 前2号窯跡で生産されたと考えられる軒丸瓦・平瓦や、月ノ浦 I 号窯跡で生産された軒丸瓦が、福 岡市那珂遺跡第22・23次調査において出土しており、初期瓦生産体制の問題のみならず、瓦の供 給先と初期瓦生産の目的をめぐっても注目すべき資料となった〈註13〉。

1979年の牛頸平田窯跡 D地点の調査では、Ⅲ B~IV期に該当する窯跡が確認され、灰原中からは生焼けの蓋杯40個、20セットが重ねられた状態で出土した。それらすべての器面には共通するへう記号が刻まれていたことから、後述するように、工人組織についての検討をおこなう上での手がかりとなった(市2)。

1982 ~ 86年には、牛頸川治水ダムの建設にともない、福岡県教育委員会によって、牛頸川上流域に存在する、井手・道ノ下・足洗川・笹原・長者原各窯跡群の調査がおこなわれ、70基にも

及ぶ窯跡が確認・調査された。いずれも奈良時代を中心とする時期の窯跡であり、牛頸山から派生する山系の谷筋を奥に進むにつれ、新しい時期の窯跡が築かれていくという実態が明らかとなった (県3・4)。

1983~86年、小田浦窯跡群の調査では、6地点9基の窯跡が確認されたが、そのうち33-I号、37-I号、50-I号窯跡では、多孔式煙道の窯構造が確認できた。また、40-I号窯跡において、焼成部~燃焼部の最終床面上には、蓋杯19セットが焼成時の状態を保って出土しており、操業当時の状況を知る上で注目された。さらに、全長10m以上で多孔式煙道をもつ40-I号窯跡と、5m未満で直立煙道をもつ40-II号窯跡が近接して築かれるという状況が確認されている(市12)。同様に、1986年の後田窯跡群の調査においても、63-I号窯跡とII号窯跡が並列する状況や、65-I号窯跡と66-I号窯跡が近接するという状況が確認された(市11)。このように、大型で多孔式煙道をもつ、時期的に古い窯構造と、小型で直立煙道をもつ、新しい窯構造とが近くに築かれるという状況は、平野川支群に特徴的なあり方と考えられる。

1987 ~ 88年と1992年には、大谷女子大学の中村浩氏を中心として、ハセムシ窯跡群の調査がおこなわれた(市8・10・15)。主に、奈良時代を中心として複数の窯跡が調査されたが、注目されるのは、12地区灰原において、「筑紫前國奈珂郡手東里」や「和銅六年」など、調納の際の文書体裁を直接刻んだ大甕片が出土したことである。これは、10世紀前半に編纂された『延喜式』の記載の中に、須恵器調納国として筑前国が数えられ、その品目として大甕・小甕等が挙げられることからみて、牛頸窯跡群で生産された須恵器が、すでに奈良時代前半には調として納められていたことを実際の考古資料からも示した例といえよう。

1995年、牛頸石坂窯跡群E地点において、窯跡3基の調査がおこなわれた。そのうち、1号窯跡は、13世紀第2~第3四半期とみられる白炭窯であった。また、2号窯跡は灰原から須恵器・土師器・黒色土器が出土し、うち土師器の年代は9世紀末~10世紀第3四半期とみられるほか、土師器窯の可能性もある。3号窯跡は須恵器小甕を焼成した可能性が高いが、灰原からは9世紀中頃~10世紀第3四半期とみられる土師器と黒色土器が多量に出土している(市16)。現在のところ、牛頸窯跡群内でもっとも新しい時期の窯跡と考えられるが、須恵器自体の出土量が少ないことから、牛頸窯跡群の終焉と、この時期の生産形態のあり方をめぐっても疑問を投げかけた。

2001年以降、上大利南土地区画整理事業地内の調査がおこなわれ、上大利支群および牛頸窯跡群の特徴を考える上で、いくつかの重要な発見がみられた。野添窯跡群第2次調査では、VI期の2号窯跡、およびIV期の竪穴住居跡が確認された(市18)。野添窯跡群4次調査では、IVA期の1・2号窯跡と8世紀前半の3号窯跡灰原が確認され、5次調査では、1980年に調査された11~13号灰原の一部が確認された。とくに、4次2号窯跡からは、神ノ前2号窯跡出土の軒丸瓦と同様な技法で作られた軒丸瓦が出土しており、瓦陶兼業窯および初期瓦生産の新資料を追加した(市20)。

また、野添窯跡群第7次調査では、2号窯跡灰原からIVA期の陶棺が出土した。九州の生産地の 事例では初出であり、消費地でもきわめて類例が少ないことから、当時の製作工人のあり方をめぐっ ても注目される資料である(市22)。

さらに、特異な窯跡の事例が、この上大利支群の範囲内で続出する。2001年の梅頭遺跡1次調

査において、1号窯跡の窯体内から鍔付きの鉄刀1、鉄鏃5、耳環1、須恵器杯蓋6・杯身5・提瓶1・土師質鉢1が大小の石の上に置かれた状態で出土しており、古墳の副葬品のあり方とも共通することから、窯の使用後に窯体内を墓として使用した可能性が指摘されている〈註14〉(市24)。同様に、梅頭遺跡2次調査の1号窯跡からも鉄鏃2、耳環2が出土した。そして、2003年の梅頭遺跡3次調査では、奈良時代の1号窯跡と、N期の2号窯跡が確認されたが、そのうち、2号窯跡では、燃焼部に炭の広がりと、その周囲を囲むように柱穴群、および柱穴群の両側に粘土壁が検出された。この遺構は、「カマド塚」と類似する可能性があることから、「カマド塚状遺構」と呼称されている〈註15〉。

2003年以降、上大利北土地区画整理事業地内の調査が、大谷女子大学の中村浩氏を中心におこなわれ、上大利支群の北側の様相が次第に明らかとなってきた。本堂窯跡群の第3·5次調査では、V期~8世紀代に至る総数9基の窯跡が確認され、2~5号窯跡の灰原からは瓦塔も出土した(市17·市19·市21)。

2004年から2006年にかけて、平野川支群に含まれる小田浦窯跡群79地点で、保存整備を前提とする確認調査(第 $1\sim3$ 次)が実施され、 $N\sim VI$ 期の5基の窯跡が確認された。このうち少なくとも3号と4号窯が多孔式煙道窯であり、2号窯は瓦陶兼業窯と考えられた(市23)。特筆すべきは、5基の窯跡のうち、4基がIV期に相当するが、当該期の窯跡が群集して確認されたはじめての事例であるという点であり、窯の組織形態を考える上で新たな示唆を与えてくれる。

以上のように、現在までの調査によって、牛頸窯跡群内の各支群の様相がかなり明らかとなっており、窯と関連する遺構や古墳・集落も多く確認されている。これらの調査にともない、牛頸窯跡群の須恵器生産に関する諸方面の研究の進展がみられた。以下、牛頸窯跡群の研究史についてみていきたい。

3. 牛頸窯跡群研究史

(1) 牛頸窯跡群における須恵器編年研究

九州における須恵器編年研究は、『対馬』における樋口隆康氏の古墳編年を端緒として〈註16〉、それを継承した小田富士雄氏による豊前地域の編年を基礎とし〈註17〉、その後、小田氏が筑後地域の八女窯跡群の調査をおこない追加した資料をもとに窯跡編年を提示したものが、それ以降の枠組みとなった。この窯跡編年では、6世紀~7世紀後半代についてⅢ~Ⅵ期に分期をおこない、Ⅲ期をA・B期に細分し、Ⅴ期からVB期を分離し、Ⅵ期をⅥA~C期に3区分した〈註18〉。さらに、真野和夫氏によって、8世紀代に該当するⅧ期もⅦA・B期に区分されている〈註19〉。しかし、小田氏の編年では、Ⅳ期が空白とされたままであり、筑前地域における編年も未確立であったことから、牛頸窯跡群における調査の進展を待つほかなかった。

牛頸窯跡群の資料を用いた編年案は、『野添・大浦窯跡群』の報告書において、真野和夫氏によってはじめて提示される。特筆すべきは、小田氏が空白としていたⅣ期の資料を追加し、ⅣA・B期に区分した点と、小田氏の編年ではⅢB期に含まれていた、つまみの付いた杯蓋と椀形の杯身のセッ

ト (蓋杯G) が、V期に出現するとした点である〈註20〉。しかし、真野氏は、このような分期に おける小田編年との相違点は、筑前と筑後との地域差あるいは個々の窯差と理解しているようであ る。

その後、福岡県教育委員会による向佐野、長浦窯跡の報告書の中で、小田編年VIB~VII期に該当する、牛頸窯跡群および大宰府政庁跡などの消費地出土資料をもとに、Ⅰ~Ⅲ期の編年案が提示された。そして、大宰府出土の須恵器と実年代資料との対比が試みられ、Ⅰ期が7世紀後半、Ⅱ期が8世紀前半~後半、Ⅲ期が9世紀と比定された〈註21〉。

同じく、雉子ヶ尾窯跡群の報告書の中では、御笠川東岸地域の古墳・窯跡・住居跡出土資料を対象として、小田編年に依拠しながら I ~ VI A 期の編年案が提示された。そして、陶邑や飛鳥・藤原宮など畿内編年との対応関係をもとに実年代の比定がおこなわれた。すなわち、 I 期が5世紀後半~末、II 期が6世紀前半、III A 期が6世紀中葉、III B 期が6世紀後半、IV 期が6世紀末、V 期が7世紀初頭~前半、VI A 期が7世紀前半代に比定された〈註22〉。

また、個別の窯跡の調査にもとづく編年観も提示されるようになり、それによって、小田編年の補完がなされるか、あるいは小田編年との対応関係が検討されている。春日市教育委員会による浦ノ原窯跡群の報告書の中では、当該窯跡群における須恵器生産の推移を3時期に区分し、浦ノ原1期を小田編年のIVB~V期、2期をVI期、3期をVII期に対応するとされた。そして、浦ノ原1期や2期の資料と小田編年とが対応しない点については、地域性や各窯個々の特殊性に求められた〈註23〉。

惣利窯跡群の報告書では、惣利9号窯跡における窯内床面の層序関係と、蓋杯の大小および調整手法とが対応することから、すでに指摘されているように、IV期がIVA期とIVB期とに2IV2IV3 るということを層位的にも確認できたとされる (春3)。しかしながら、大野城市教育委員会が刊行した『牛頸中通遺跡群II』の報告書の中では、中通IV4IV6 の中間の法量を示すものもあり、明確には二分できないことから、型式差をもって必ずしも先後関係を決定できないことが指摘されている〈註24〉。

さらに、つまみの付く蓋と椀形の身(蓋杯G)の出現についても、新たな知見が得られるようになる。牛頸小田浦40-I号窯跡最終床面上で出土した蓋杯19セットは、丸みのある蓋と立ち上がりのある身のセット(Aタイプ)と、かえりのある蓋と蓋受けのない身のセット(Bタイプ)とに分けられ、さらにBタイプは蓋につまみの付く B_1 タイプと、つまみのない B_2 タイプとに分けることができた。そして、①N期の中でBタイプの蓋杯が出現するのが再確認されたこと、②A、B両タイプの組み合わせとヘラケズリの有無の流れが一致すること、③法量は必ずしも変化の流れと一致しないことが指摘された(市12)。つまり、B0、B1においてB1の法量はB2の担略化が認められ、B3の主流であるB2の出現をB3の法量はB3の法量はB4の出りとは考えにくいものであるとした。そして、B2の出現をB3の出現をB4の出現をB5の出るに置づけている〈註25〉。

太宰府市教育委員会の調査・研究をとおして、いくつかの注目すべき成果も提示されている。

宮ノ本窯跡群の報告書の中で山本信夫氏は、牛頸窯跡群の資料を中心として、蓋杯について型式 分類し、小田編年のIVA~VI期に対応する時期を6段階に設定しなおした〈註26〉。詳細な型式分 類にもとづき、各型式が重複しながら移行するという点を明らかにしたことは評価されるが、蓋杯 以外の器種との関係、つまり土器相の検討は不十分である。したがって、分期の基準自体が明らか にされていない点は問題といえる。

また、山村信祭氏は、大宰府史跡周辺における須恵器編年の枠組み自体を問い直すとともに、実年代観についても再検討をおこなった。すなわち、同時性が認められる遺構出土資料をもとに、複数形式それぞれの「型式系列」をつくり、それらの量的変化から、6期に期を設定した。とくに、小田編年VI期に当たる7世紀後半代については、3時期に区分する編年案を提示している。そして、実年代については、小田IV型式における杯Hの年代の下限を7世紀第3四半期まで下げる見解を提示した〈註27〉。この年代観については、水城築造初期の遺構の中に、小田IV型式の杯Hが残存することからも補強されている〈註28〉。

さらに、中島恒次郎氏は、主に7世紀代を対象とする、牛頸窯跡群を含む大宰府周辺の資料について、窯跡・集落・都市・墓という遺跡別の一括資料を抽出して型式分類をおこない、「食器相」を明らかにすることによって、分期をおこなっている。そして、暦年代は、飛鳥編年の様相との類似性や、畿内産土師器の共伴事例から付与したが、飛鳥IV段階に相当する土器相が大宰府周辺では欠落することを指摘した。ただし、研究会報告紙上という都合上、7世紀代のみを扱っている点、各器種の型式分類の方法が明示されていない点が惜しまれる〈註29〉。

一方、岡田も牛頸窯跡群をはじめとする窯跡資料を中心として、まず主要器種を形式分類し、次に属性レベルでの型式分類をおこない、これら各型式を含む一括資料からなる土器群を抽出することで、編年をおこなった〈註30〉。しかし、属性抽出の方法や、土器様相の設定などについて、多くの問題を残している。

以上のように、小田編年を基礎として、それを補完し、対応させる形で、牛頸窯跡群における須恵器編年がおこなわれてきた。一方、大宰府史跡周辺では、小田編年の枠組み自体を問い直し、新たな編年も作成されるようになった。しかし、たとえば小田編年IV期の問題や蓋杯Gの出現時期の問題のように、いまだ議論の余地も残されるところであろう。このような問題を解消するためにも、牛頸窯跡群の資料を基礎として編年を組み直し、「牛頸編年」を確立する必要があろう。

(2) 牛頸窯跡群における支群の設定

牛頸窯跡群は、地形にもとづく窯跡の分布状況からいくつかの支群に分けられるという点は、先に述べたとおりである。上野氏の精力的な踏査にもとづくこの支群設定〈註31〉は、枠組みとしては現在でも通用するものといえよう。

その後、西村康氏は、牛頸窯跡群を地形およびⅢ・Ⅳ期からV期へのつながりから把握し、上野氏による支群をさらに細かくみることによって、8つの支群を設定した。すなわち、牛頸川沿いの谷では①大牟田池・惣利・春日平田窯をあわせた群、②牛頸平田・東浦・中通・ハセムシ・城ノ山・原・井手の群、平野川沿いの谷では③畑ヶ坂・胴ノ元・月ノ浦・小田浦の群、この谷の北の谷に分布する④浦ノ原・後田の群、野添・大浦の谷では⑤野添・大浦・筑前平田・上平田の群、御笠川をのぞむ丘陵では⑥神ノ前・尊田・長浦・向佐野・宮ノ本の群、平野川谷奥の⑦大谷・石坂の群、牛頸川

谷奥の \otimes 道ノ下・長者ヶ原・笹原・足洗川の群を設定した。そして、 \otimes と⑦・ \otimes 群を除けば、いずれも \square B~ \square A期に生産を開始し、各群の中で奈良時代初まで連続して生産をおこなうとした。また、各群で共通して瓦を焼き、共通する窯構造がみられることから、各群が相互に密接な関係にあることも指摘した〈註32〉。

また岡田は、「ある範囲に複数の窯が同時あるいは連綿と営まれる場合、それを窯群という一つの単位として捉え、その一つのまとまりをもって窯群単位と呼ぶ」とし、自然地形による区分を前提として単位設定をおこない、野添・惣利・小田浦・浦ノ原・中通・牛頸ダム地区窯群を具体例として挙げた。そして、「牛頸窯跡群は成立当初より、各製作者集団にある一定の範囲の土地が割り当てられ、その範囲内で築窯→使用→廃棄というサイクルがくり返された」ことから、各窯群が「須恵器製作者集団の一つの単位として捉えられる可能性が高い」とした〈註33〉。

これに対して、『牛頸野添遺跡群II』では、上大利地区の区画整理事業地内の調査にもとづき、まず野添4次2号窯跡出土軒丸瓦と神ノ前2号窯跡出土軒丸瓦とが同タイプであることが指摘された上で、岡田の設定した「野添窯群」に該当する範囲よりも広い範囲を設定すべきとした〈註34〉。そして、『牛頸野添遺跡群III』では、上大利周辺に同一工人集団(同一工房)の存在が想定され、工人集団内には複数の操業単位が存在していた可能性が高いことも指摘されている〈註35〉。今後、遺構・遺物の検討によって、支群の再設定をおこない、支群内での窯の変遷を明らかにする必要があろう。

(3) 須恵器工人組織に関する問題

牛頸窯跡群における須恵器工人組織は、まだ不明な点も多い。中通遺跡群の調査では、窯跡と古墳群が同一の尾根筋に立地することが指摘され、古墳が工人集団の墓域であった可能性も指摘されている。報告書の中では、牛頸窯跡群における窯体構造はA~Cに3分類され、A:6世紀中頃まで、B:6世紀後半~7世紀前半、C:7世紀後半~8世紀とされ、6世紀中頃~後半に窯の増加と構造的な変化がみられることが指摘されている。そして、この頃に全国的な生産地の増加、器形の分化の進行、地方差の生じることから、部民制の形成を必要としなかったと指摘される〈註36〉。

実際の遺構の検出状況において注目されたのは、牛頸平田窯跡 D 地点における生焼けの蓋杯40個、20セットの出土である。報告者は、これらのヘラ記号を施した工人の利き腕などに着目して検討をおこない、一つのヘラ記号が複数の工人によって共有されていることなどを示唆した(市2)。さらに、この資料を詳細に分析した山田元樹氏は、ヘラ記号の意義について、工人同志の識別のためではなく、一つの窯を共同で営む複数の工房間を識別するために利用されたと論じた〈註37〉。

牛頸窯跡群における須恵器工人の問題を考えるうえで、近年、注目されるのは、先述した野添遺跡群第7次2号窯跡出土の陶棺と、梅頭遺跡1次調査における鉄刀・鉄鏃・耳環などを出土した1号窯跡、および鉄鏃・耳環を出土した2次調査1号窯跡である。また、梅頭遺跡3次調査2号窯跡の「カマド塚状遺構」も関係するだろう。

まず、野添第7次2号窯跡の陶棺であるが、WA期新段階に位置づけられる四柱式であり、福岡 市浦の田2号墳からも、形態・技法上の差異があるものの、陶棺が確認されている。このことから、 牛頸窯跡群と畿内の技術的交流やその管理者について示唆を与えてくれるものである〈註38〉。

また、梅頭1次1号窯跡や2次2号窯跡の事例は、窯廃絶時の祭祀の可能性もあるが、古墳の副葬品と共通することや赤色顔料の入った土器が出土することから、窯の操業停止後に墳墓として転用された可能性も高い。そうすると、梅頭3次2号窯跡についても、「カマド塚」に類似する墳墓であった可能性が捨てきれない。そして、窯内に埋葬されたのは一人であったとみられることから、その被葬者は須恵器工人集団を管理する長であったことが想定されている〈註39〉。

4. 今後の課題―まとめにかえてー

以上、牛頸窯跡群の調査・研究史を振り返ってきたが、さいごに今後の課題を提示してまとめにかえたい。1989年時点の牛頸窯跡群における調査・研究の課題は次のとおりであった。すなわち、①牛頸窯跡群における須恵器生産の実態に即した画期の設定をおこない「牛頸編年」を確立すること、②生産集団の系譜・構造・居住地の解明、③須恵器の製作技法・消費地への流通に関する諸問題、④牛頸窯跡群の発掘成果と大宰府出土資料の比較検討などを挙げている〈註40〉。

まず、①については、窯内における良好な一括資料が出土してきており、床面間や灰原の層位的関係も明らかになってきた。一方、編年自体は、小田編年の枠組みを踏襲しながらも、部分的に補正がおこなわれてきており、新たに編年の枠組みを設定する研究もみられるようになった。しかし、牛頸窯跡群の全期間をとおして型式学的検討を試み、編年をおこなった研究は少ない。とくに、蓋杯Gの出現時期をIV期あるいはV期と考えるのかという点、蓋杯Hについて必ずしも法量の小形化をもって型式組列上の先後関係とみなせないという点も検討課題であろう。今後は、各器種の型式分類をおこない、型式組列をつくり、各時期の土器相を明らかにし、一括資料によって検証をおこなうという方法をとって、「牛頸編年」を確立する必要があろう。同時に、実年代についても、大宰府や藤原宮、平城宮などの良好な基準資料を用いて検討する必要があろう。

次に、②の問題であるが、近年発見された陶棺は、詳細に製作技法を検討することで、生産集団の系譜を理解するうえで重要な資料となりうるものであろう。そして、牛頸窯跡群において特徴的な窯構造である「多孔式煙道」もこの問題を考える上で示唆を与えてくれるものである。また、生産集団の実態を把握する上で、近年、上大利地区で確認された、鉄刀・耳環など古墳の副葬品と同様な遺物を出土する窯跡や「カマド塚状遺構」の存在は手がかりを与えるものとなろう。

一方、窯跡内における製作者集団の単位についても、へラ記号の分析などから検討されているが、 牛頸窯跡群では焼成時の状態を保って、窯跡内に須恵器が一括して出土した事例は少ない。この点 は、他地域の事例なども踏まえながら考える必要があろう。

さらに、須恵器工人の居住地については、その可能性があるとされる集落は存在するが、その証拠を把握するのはむずかしい。須恵器工人が半農半工的なあり方を示すとすれば、一般集落に居住していたと考えられるのであり、「工人集落」などの抽出にあたっては、厳密な規準を設定しておかなければならないだろう。また、陶邑のように、製作された須恵器の集荷や仕分けの場と考えられる遺構は、現状では確認されていない。

今後、須恵器生産集団の解明に当たっては、窯跡のみならず、古墳や集落など周辺遺跡との時間

的・分布的関係を検討し、他地域の事例との比較も含めて総合的に評価していく必要があろう。

③については、牛頸窯跡群の須恵器の形態的特徴や製作技法を検討し、消費地との比較をおこなうほかない。牛頸産であることが明らかな資料からはじめて、分布状況を把握し、流通の実態の理解へと発展させていく必要があろう。これまで、胎土分析などもおこなわれてきたが、やはり考古学的な方法によって判断するのが望ましい。この問題については、現在のところ、それほど進行していないと思われるので、今後、より精力的な研究を進めることが望まれる。

④について、牛頸窯跡群は大宰府への供給窯と考えられることから、牛頸窯跡群と大宰府出土資料を比較・検討することで、生産地と消費地における須恵器の様相を明らかにする必要がある。とくに、これまで各窯跡における器種構成の分析はあまりおこなわれておらず、ある窯で限定的に生産されている製品の把握や、それが大宰府とどう関わるのかについて、より具体的な理解をするためにも必要である。

また、牛頸窯跡群で出土する刻書須恵器は、奈良時代の調納制の問題を理解する上で重要な資料である。これらの文字資料や『延喜式』などの文献史料と、実際の出土資料における器種構成とを対比することによって、牛頸窯跡群における生産の実態とその目的の解明に近づけるであろう。

以上の4点に加えて、牛頸窯跡群において6世紀末頃から出現する初期の瓦陶兼業窯の問題についても解明する必要があろう。とくに、大宰府や国分寺に供給をおこなった瓦窯は、牛頸窯跡群内にはないことから、7世紀後半以降、須恵器生産と瓦生産とに生産体制が分化する可能性がある。このことからも、須恵器および瓦生産における管理主体の問題や、工人組織の問題の解明が必要となろう。

また、②の問題とも関連するが、牛頸窯跡群における支群は、それぞれ須恵器工人の活動範囲に 該当する可能性があることから、個々の窯構造や出土須恵器の形態・製作技法を手がかりとして、 支群の範囲を検討することによって、須恵器工人組織の実態が明らかにできよう。

さらに、当時の列島社会において、牛頸窯跡群はどのように位置づけられたのだろうか。その解明のためには、牛頸窯跡群の開始と終焉の問題、および他の窯跡群、とりわけ畿内の陶邑窯跡群との比較をおこなうことが必要となろう。また、牛頸窯跡群周辺の地域社会の実態とそれらの関連について、考古学的にも文献史学的にも解明されなければならない。そのようにして、当時の社会において、なぜ牛頸窯跡群のような拠点的窯群の形成が必要であり、どのようにして成立し、継続できたのか、すなわち牛頸窯跡群の目的と意義について、理解をおこなうことが最終的な課題となろう。

- 註1. 余語琢磨「牛頸窯跡群研究史」『牛頸ハセムシ窯跡群II』大野城市文化財調査報告書第30集 大野城市教育委員会 1989
- 註2. 舟山良一「牛頸窯跡群」『大野城市史』上巻 大野城市史編さん委員会 2005
- 註3. 小田富士雄「九州古代窯址(須恵器・瓦)地名表(第一稿)」『九州考古学』29・30 1966
- 註4. 文化財保護委員会編『全国遺跡分布地図―福岡県―』 1968
- 註5. 小田富士雄「古代・中世窯の地域的特質―九州―」『日本の考古学』VI 河出書房新社 1967
- 註6. 大野町教育委員会『大野町の文化財』第2集 1971
- 註7. 第VI章「多孔式煙道」参照。

- 註8. 横田賢次郎・川述昭人・酒井仁夫「福岡県大野城市牛頸における奈良時代窯跡」『九州考古学』49・50 1974
- 註9. 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XⅦ』 1977
- 註10. 上野精志「須恵器と牛頸窯跡群」『大野城市の文化財』第9集 大野城市教育委員会 1977 坂詰秀一・上野精志「福岡県小田浦窯跡の調査」『考古学ジャーナル』146 1978
- 註11. 大野城市教育委員会『大野城市の文化財』第9集 1977 坂詰秀一・上野精志「福岡県小田浦窯跡の調査」『考古学ジャーナル』146 1978
- 註12. 石松好雄・舟山良一「月ノ浦窯の小型瓦」『古代研究』25・26 元興寺文化財研究所 1983
- 註13. 福岡市教育委員会『那珂遺跡3』福岡市埋蔵文化財調査報告書第253集 1991 福岡市教育委員会『那珂遺跡4』福岡市埋蔵文化財調査報告書第290集 1992
- 註14. 石木秀啓「須恵器工人の墳墓」『大野城市史』上巻 大野城市史編さん委員会 2005
- 註15. 前掲註14.
- 註16. 樋口隆康他『対馬』東方考古学叢刊乙種 第6冊 東亜考古学会 1953
- 註17. 小田富士雄「九州の須恵器序説-編年の方法と実例(豊前の場合)-」『九州考古学』22 1964
- 註18. 八女市教育委員会『塚ノ谷窯跡群』八女古窯跡群調査報告 I 1969
- 註19. 八女市教育委員会『立山山窯跡群』八女古窯跡群調査報告N 1972
- 註20. 真野和夫「須恵器の編年」『野添・大浦窯跡群』福岡県文化財調査報告書第43集 福岡県教育委員会 1970
- 註21. 亀井明徳「向佐野, 長浦窯跡の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』VI 福岡県教育委員会 1975
- 註22. 川述昭人・酒井仁夫・岩瀬正信「御笠川東岸における須恵器の編年について」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 X VII 福岡県教育委員会 1977
- 註23. 平田定幸・佐藤昭則「浦の原窯跡群の推移について-須恵器を中心として-」『浦ノ原窯跡群』春日市文化財調査報告書第11集 春日市教育委員会 1981
- 註24. 舟山良一「中通窯跡群出土須恵器について」『牛頸中通遺跡群II』大野城市文化財調査報告書第9集 大野城市教育委 員会 1982
- 註25. 舟山良一「須恵器の編年 2九州」『古墳時代の研究』第6巻 土師器と須恵器 雄山閣出版 1991
- 註26. 山本信夫「型式の設定と編年」『宮ノ本遺跡II 窯跡篇 』太宰府市の文化財第10集 太宰府市教育委員会 1992
- 註27. 山村信榮「八世紀初頭の諸問題」『大宰府陶磁器研究』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会 1995
- 註28. 山村信榮「7世紀後半の諸問題」『古文化談叢』第41集 九州古文化研究会 1998
- 註29. 中島恒次郎「7世紀の食器-九州消費地-」『古代の土器研究-律令的土器様式の西・東 5~7世紀の土器-』古代の土器研究会 1997
- 註30. 岡田裕之「北部九州における須恵器生産の動向」『古文化談叢』第49集 2003
- 註31. 前掲註11.
- 註32. 西村 康「陶邑・猿投・牛頸ー須恵器生産の進展ー」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 同 朋舎 1983
- 註33. 前掲註30.
- 註34. 石木秀啓「野添4・5次調査と周辺遺跡の状況について」『牛頸野添遺跡群II-第4・5次調査-』大野城市文化財調査報告書第66集 大野城市教育委員会 2005
- 註35. 石木秀啓「野添6・8次調査周辺窯跡の分布と支群設定について」『牛頸野添遺跡群Ⅲ − 第6・8次調査 − 』大野城市文 化財調査報告書第69集 大野城市教育委員会 2006
- 註36. 副島邦弘「牛頸窯跡群の編年的研究に関する覚書」『牛頸中通遺跡群』大野城市文化財調査報告書第4集 大野城市教育委員会 1980
- 註37. 山田元樹「須恵器窯業生産の様相解明にヘラ記号が果たし得る役割の検討」『九州考古学』第62号 1988
- 註38. 石木秀啓「野添遺跡7次調査2号窯跡出土陶棺の意義について」『牛頸野添遺跡群Ⅳ-第7次調査-』大野城市文化財調査報告書第70集 大野城市教育委員会 2006
- 註39. 前掲註14.
- 註40. 前掲註1.

Ⅲ. 位置と環境

1. 地理的環境

(1) 牛頸窯跡群周辺の地形

牛頸窯跡群は、福岡平野の東南部、牛頸山北麓の低丘陵上に位置し、現在の行政区分では、大野城市牛頸を中心として、春日市、太宰府市、那珂川町の広範囲に分布する数百基からなる窯跡群を総称する。

福岡平野は、南西方向を背振山塊、東方向を三郡山塊によって隔てられ、北方向は博多湾に面している。平野の中央部には、西側から那珂川、御笠川がおよそ南から北に向けて貫流しており、広大な沖積平野を形成している。背振山塊は、標高 1,055 mの背振山を主峰とし、その北側には油山 (569m) と片縄山 (293 m)、北東側には牛頸山 (448 m) と天拝山 (258 m)、東側には基山 (405 m) など低山地が派生している。福岡平野の西側は、油山および片縄山から断続的に派生し鴻巣山 (101m) を最高位とする丘陵を早良平野との境とし、東側は四王寺山の北西方向に位置する月隈丘陵を粕屋平野との境とする。

また、三郡山塊の南限には宝満山 (830 m)、その南東側に宮地岳 (339 m) が連なっており、宝満山の西側では、大城山 (410 m) を主峰とする四王寺山脈が独立する。四王寺山では、尾根筋に沿うように、7世紀後半に築かれた大野城の土塁および石塁が巡っており、四王寺山西麓から牛頸山北側低丘陵にかけての地狭部には水城が築かれていた。さらに、四王寺山南麓の二日市低地帯は、福岡平野と筑後平野との境に位置しており、古くから交通の要衝であった。古代には、そこに大宰府が設置され、その南方に位置する基山には基肄城が築かれていた。このように、大宰府の立地は、周囲を山地が取り囲み、福岡平野と筑後平野との境は狭い地形となっているため、博多湾方面からの敵に対する防御に適した自然地形にあったと考えられる。

(2) 牛頸山とその周辺の地質

牛頸窯跡群の立地する牛頸山は、二日市低地帯のすぐ西側に接する。牛頸山の地質〈註 1〉は、背振山塊およびそこから北側に派生した山地や丘陵の地盤である、中生代白亜紀末の早良型花崗岩類に属し、表層は風化が激しい真砂土となっている。また、侵食が激しく、急峻な地形であることから、表土の浅い部分が多く、水流のある谷部では岩盤の露出が多くみられる。北側山麓部から平地丘陵部にかけては河岸段丘が発達しているが、いずれも新生代第四紀更新世の堆積層である。そのうち、高位段丘である春日面(標高 60 m前後)はよく開析され凹凸が明瞭であり、中位段丘である須玖面(標高 30 m前後)は平坦部分も多い。そして、御笠川の支流である牛頸川と、牛頸川の支流である平野川の開析作用によって、牛頸山北麓から低丘陵部にかけて無数の谷がつくられ、複雑な地形を形成していたことが、窯の操業をおこなうにあたり好条件となったといえる。

一方、福岡平野の中央部をみると、御笠川および那珂川に挟まれた下流域では、ASO- IV火砕流



第1図 牛頸窯跡群の位置 (1/200,000)

によって形成された鳥栖ローム層と八女粘土層からなる中位段丘が発達する。このような中位段丘である板付丘陵(標高 $10 \sim 12~\mathrm{m}$)、諸岡丘陵(標高 $23~\mathrm{m}$)、那珂丘陵(標高 $6 \sim 10~\mathrm{m}$ 前後)上には、縄文時代晩期以来、集落が継続し、その東側の沖積地では水田が営まれ、可耕地となっていた。さらに東側の月隈丘陵は山地性の丘陵地で、第三紀層の堆積岩により構成されており、丘陵

斜面は開析作用を受け、丘陵頂部を独立丘状に画している。

(3) 牛頸山の植生

現在は全域が照葉樹林帯となっているが、縄文時代晩期頃から人手の加えられた雑木林、二次林による里山的環境となり、古墳時代当時は人工的にマツ林化されていたとみられるため、典型的な照葉樹林帯自然林はほとんど残存していない。しかし、窯を操業する際に、アカマツを大量に薪として使用したと予想されることから、薪を入手する利便性からみても須恵器生産に適した場所であったといえる。現在では、一部のアカマツ林を残して、コナラ、ハゼノキなどの落葉樹、アラカシ、クスノキなどの常緑樹による常緑・落葉混交林、あるいはスギやヒノキの植林地と化している。また、近年の牛頸窯跡群の調査における、窯跡出土炭化材の樹種同定の一連の結果からは、コナラ属アカガシ亜属やシイ属などが多くみられることが明らかとなっている。いずれも温帯下部の暖温帯の照葉樹林を形成する主要高木とされ、コナラ属アカガシ亜属のうちアラカシやシイ属は二次林生とされる〈註 2〉。

このように、自然科学的な樹種同定の結果は、コナラやアラカシなどの照葉樹による二次林を中心とする、現在の植生と類似した状況を示している。これは、先述のように、古墳時代にはマツ林化しており、アカマツを薪として使用したとする見解とは異なる結果を示すといえる。一方で、サンプルとなる炭化材が、6世紀後半以降のものであることを踏まえるならば、早い段階にアカマツが枯渇した可能性も考えられるだろう。牛頸山の当時の植生については、今後より詳細な検討が必要である。

以上のような、牛頸周辺の地理的環境を踏まえた上で、次に歴史的環境について検討していきたい。

2. 歷史的環境

(1) 旧石器~縄文時代

福岡平野周辺の山麓や台地・丘陵部を中心に遺跡の分布がみられるが多くはない。ナイフ形石器文化期の遺跡として、諸岡丘陵に位置する福岡市南区諸岡遺跡〈註 3〉、牛頸山北麓に位置する大野城市出口遺跡〈註 4〉などがある。出口遺跡では、約 22,000~21,000年前のAT降灰直後に出現する石器として特徴的なサヌカイト製の剥片尖頭器が出土している。また、細石刃文化期には、春日丘陵上の春日市門田遺跡〈註 5〉、乙金山山麓の大野城市釜蓋原遺跡〈註 6〉、松葉園遺跡〈註 7〉などがある。門田遺跡では、細石刃核・細石刃などの細石刃文化層と、ナイフ形石器文化層とを層位的に分けて確認できた。

縄文時代も主に丘陵上に遺跡が分布するが、低地部の遺跡もわずかながら確認されている。春 日丘陵上の門田遺跡谷地区では、草創期と前期の土器が出土したほか〈註 8〉、乙金山山麓に位置 する大野城市釜蓋原遺跡では、早期の押型文土器に加え、多量の石鏃が出土し〈註 9〉、石勺遺跡 G地点では、落とし穴状遺構が検出されるなど〈註 10〉、狩猟の痕跡もうかがえる。中期~後期の 遺跡はほとんどみられず、牛頸山北麓の牛頸塚原遺跡では、後期後半〜晩期前半の竪穴住居跡2棟と土坑12基が検出されたほか、浅鉢・深鉢片が出土した〈註11〉。

(2) 弥生時代

沖積地にも遺跡が分布するようになる。主に、春日丘陵、那珂川中~上流域、那珂川・御笠川下流域、御笠川中流域東岸の月隈丘陵または乙金山西側に遺跡が分布する。御笠川下流域西岸の低台地上に位置する福岡市博多区板付遺跡では、前期の環濠集落や貯蔵穴が検出されたほか、台地西側の沖積地では、弥生開始期の水田跡も検出された。出土遺物の中には、大陸系磨製石器や木製農具、炭化米があり、日本列島における初期農耕を解明する上で学史的にも重要な位置を占めている〈註12〉。

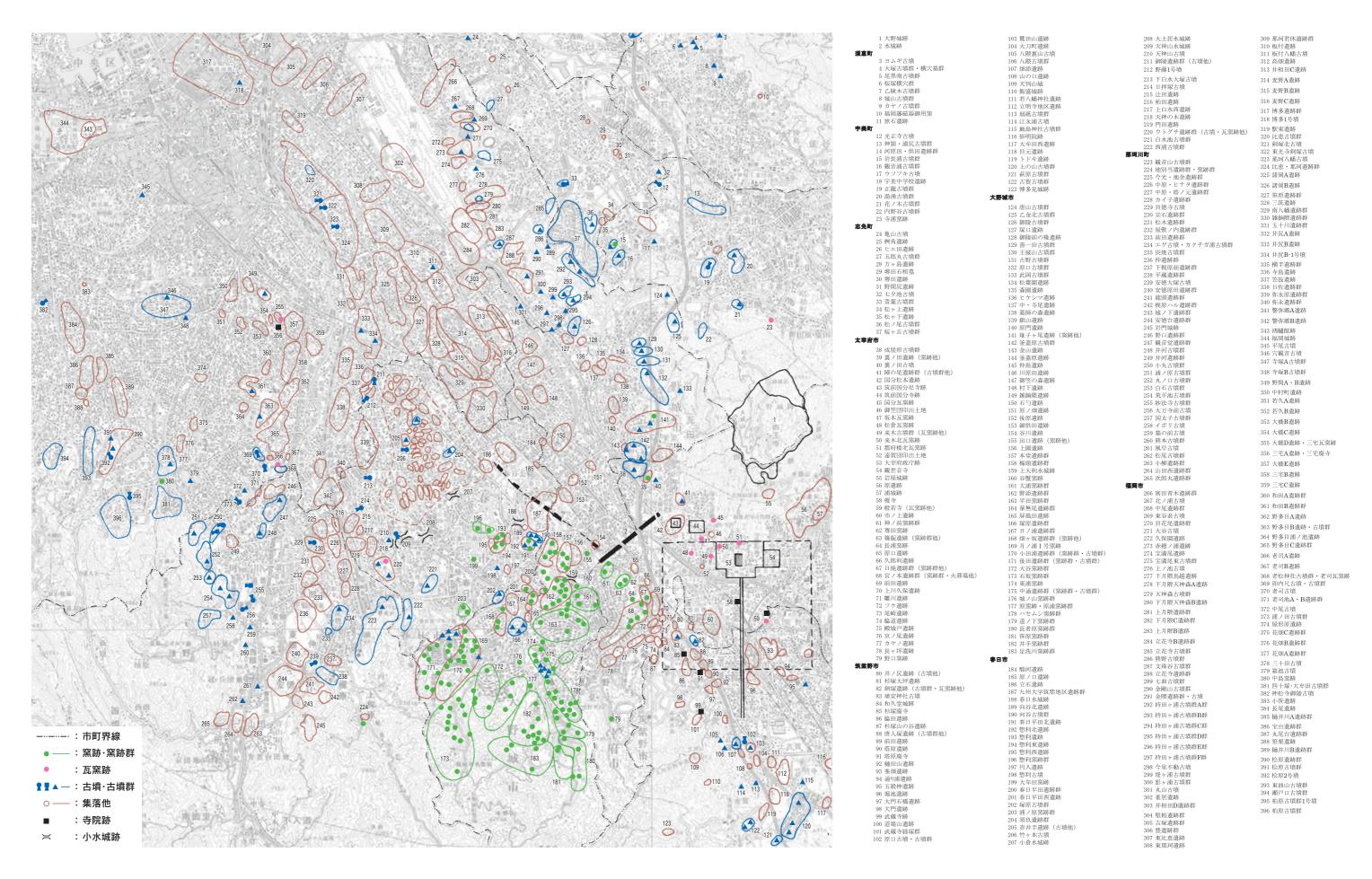
墓域をみると、前期からの墓域が弥生時代全期間をとおして継続し、墓群を形成する事例が多く みられる。那珂川中流域では、春日丘陵に位置する春日市伯玄社遺跡において、前期から後期にか けての甕棺墓、木棺墓、土壙墓からなる墓群が検出された〈註13〉。

一方、御笠川中流域東岸地域では、月隈丘陵西側に位置する大野城市御陵前ノ椽遺跡において、前期の甕棺墓 19 基が検出され、その中に供献小壺を伴う墓もみられた〈註 14〉。その付近の塚口遺跡でも、前期後半~末の甕棺墓、木棺墓、土壙墓からなる墓群が検出された〈註 15〉。

また、乙金丘陵西側の低丘陵上に位置する大野城市中・寺尾遺跡では、前期~中期の甕棺墓 59 基、土壙墓 87 基、箱式石棺墓 1 基と、後期の石蓋土壙墓 2 基からなる墓域のほか、弥生中期の竪 穴住居跡および貯蔵穴からなる集落域も検出された。前期の甕棺墓や土壙墓では、副葬小壺や磨製 石鏃・石剣を出土する墓もあった〈註 16〉。この遺跡の北側に小谷を挟んで対峙する森園遺跡では、 中期中葉~後葉の住居跡 19 基が検出され、銅矛とみられる鋳型 1 片が出土したほか、中期前半~ 後半の甕棺墓 45 基、石棺墓 3 基、木棺墓あるいは土壙墓 13 基からなる墓域や祭祀遺構も検出さ れている〈註 17〉。さらに、その東側の松葉園遺跡では、溝や祭祀土壙から、中期後半の祭祀土 器をはじめとする土器群が出土している〈註 18〉。これら三つの遺跡は、一つの集団のまとまりと 捉えられる可能性も指摘されている。

中期後半以降、福岡平野の中心に位置づけられるのは春日丘陵である。春日市須玖岡本遺跡 D地点の大石下甕棺からは前漢鏡片、青銅武器、ガラス璧などが出土し、その付近では墳丘墓および甕棺墓群が検出された〈註 19〉。また、須玖永田遺跡で鋳型・銅矛の中子・取瓶・鞴羽口・銅滓などが出土し、青銅器工房の存在が指摘された〈註 20〉のをはじめ、須玖坂本遺跡〈註 21〉、須玖磐石遺跡〈註 22〉、須玖タカウタ遺跡〈註 23〉など、青銅器生産と関連する遺跡が確認されている。さらに、須玖五反田遺跡では、ガラス勾玉鋳型・坩堝・勾玉未製品など、ガラス製品の鋳造関連遺物が出土したほか〈註 24〉、赤井手遺跡〈註 25〉では鉄器生産がおこなわれていた。このことから、春日丘陵一帯は、『後漢書』倭伝や『魏志』倭人伝に記載のある「奴国」の中心とみられ、王墓の可能性がある須玖岡本遺跡の周りに各種手工業生産に関連する遺跡が集中していたと考えられる。

他地域をみると、那珂川中~上流域では、片縄山から派生する低丘陵上に位置する那珂川町観音堂遺跡群〈註 26〉において、弥生中期の甕棺墓、木棺墓からなる墓域が確認され、那珂川上流



第2図 福岡平野の主な遺跡(1/62.500)

域東岸台地上に位置する那珂川町安徳台遺跡〈註 27〉でも中期後半の甕棺墓群が確認されている。 とくに、安徳台遺跡では、巨大な墓壙内に2基の甕棺が並列して埋置され、そのうち2号甕棺内からゴホウラ貝製腕輪、ガラス製塞杆・勾玉・管玉、甕棺外から鉄剣と鉄戈が出土したほか、同じ台地上には、中期~後期初の集落が検出され、漢式鏃、天河石製管玉、壁玉製勾玉などが出土した。

一方、御笠川中流域西岸の沖積地上に位置する大野城市仲島遺跡では、弥生中期初頭~後期の竪 穴住居跡・溝などが検出され、土坑や溝などから、中国「新」代の貨布、青銅製鋤先、銅矛鋳型片、 鏡片、銅鏃など多くの青銅製品が出土した〈註 28〉。

また、御笠川と牛頸川が合流する付近の旧台地上に位置する大野城市石勺遺跡G地点では、中期の竪穴住居跡4軒が検出され〈註29〉、A~C・E地点では、土壙や溝から中期の土器片、石包丁、磨製石剣、砥石が出土したことから〈註30〉、集落域の存在が考えられる。これに対して、H地点では、中期後葉~後期の甕棺墓、土壙墓、木棺墓、石棺墓からなる墓域が存在していた〈註31〉。

さらに、春日丘陵からは、博多湾に向かって断続的に台地が延びており、那珂川および御笠川下流域の間に挟まれた那珂台地上には、福岡市博多区比恵遺跡群〈註 32〉と那珂遺跡群〈註 33〉が位置しており、弥生時代から奈良時代に至る集落および弥生中期の甕棺墓群が連綿と営まれていた。両遺跡における弥生時代の集落は、円形竪穴住居跡および貯蔵穴と、後期の掘立柱建物跡が中心であり、中期~終末期の環濠の一部や、青銅器生産関連遺構も検出された。また、御笠川下流域東岸の沖積地に立地する雀居遺跡〈註 34〉では、弥生時代全期間をとおしての集落と環濠集落が検出され、農具などの木製品も多量に出土した。

(3) 古墳時代

(i) 前半期の古墳

前期の首長墳系列は、 弥生時代以来の中心的な集落単位を反映するような形で分布する。 那珂川・御笠川下流域の那珂台地上には、那珂八幡古墳(約75 m)が築かれ、2号主体部には三角縁神獣鏡1面が副葬されていた〈註35〉。中期後半には、さらに下流域で博多1号墳(56 m以上)が築かれる〈註36〉。その後、この地域では首長墳系列が一時みられない。

また、那珂川上流域では、前期後半に安徳大塚古墳(約 64 m)〈註 37〉が築かれるが、その後、前方後円墳は築かれない。 那珂川中流域では、三角縁神獣鏡を出土したと伝えられる卯内尺古墳 (円・約 30 m)〈註 38〉、前期末頃に位置づけられる老司古墳 (76 m)がある。老司古墳の4つの埋葬主体はいずれも初期横穴式石室であり、鏡のほか短甲・武器・農工具など豊富な鉄製品を副葬していた〈註 39〉。

那珂川中流域一帯では、妙法寺古墳群〈註 40〉をはじめ、観音堂古墳群〈註 41〉、井河古墳群〈註 42〉、油田古墳群〈註 43〉、炭焼古墳群〈註 44〉のように、より小規模の円墳や低方墳からなる「古式古墳群」が多く分布し、いずれも割竹形木棺や箱式石棺を埋葬主体としていた。妙法寺古墳群は、前方後円墳の1号墳、前方後方墳の2号墳、方墳の3号墳から構成される。2号墳は、割竹形木棺を納める1号主体部と、箱式石棺の2号主体部からなり、1号主体部から三角縁六神四獣鏡が出土した〈註 45〉。

一方、御笠川中流域東岸地域の月隈丘陵西側斜面をみると、御陵古墳群では、4世紀中頃~5世紀前半の割竹形木棺や箱式石棺などを主体部とする小円墳群が確認されたが、その付近の赤坂山支群では三角縁四神四獣鏡が出土したと伝えられ、この時期の前方後円墳が存在した可能性も指摘されている〈註 46〉。また、笹原古墳(円・約 30 m)は、竪穴式石室を埋葬主体とし、墳丘から壺形埴輪、石室内から三角板革綴短甲・冑、鉄剣、鉄鏃などが出土しており、5世紀前半に位置づけられる〈註 47〉。近接する成屋形古墳(36.5 m)は帆立貝式の前方後円墳であり、5世紀後半の古段階に位置づけられるが〈註 48〉、その後、この地域では首長墳系列が継続しない。

このように、福岡平野における前半期の首長墳系列は後半期まで継続せず、5世紀中頃にはみられない。再度、首長墳系列が確認できるのは、成屋形古墳をはじめとする5世紀後半以降である。

(ii)後半期の古墳

牛頸窯跡群は、古墳時代後期の6世紀中頃に操業を開始すると考えられるが、次に後半期の古墳の分布様相をみてみよう。

福岡平野における後期の前方後円墳は、那珂川・御笠川下流域と那珂川中流域の春日丘陵周辺に 分布がまとまるようになる。那珂川・御笠川下流域では、5世紀後半の剣塚北古墳(30 m以上)〈註 49〉につづき、東光寺剣塚古墳が築かれる。東光寺剣塚古墳は、全長 75 mの前方後円墳で、複 室横穴式石室の玄室に石屋形を設置しており、6世紀中葉に位置づけられる〈註 50〉。

一方、那珂川中~上流域の春日丘陵周辺では、5世紀後半に全長 47.2 mに復元される野藤 1号墳〈註 51〉、5世紀末~6世紀初頭に全長 47.2 mの貝徳寺古墳〈註 52〉が築かれる。つづく日拝塚古墳(46m)からは、獣形鏡・環頭大刀・馬具類・装飾須恵器など豊富な副葬品が出土し、6世紀前半に位置づけられる〈註 53〉。また、那珂川中流域西岸の片縄山山麓に位置する小丸 1号墳(25m)は、羽子板状プランの横穴式石室を主体とし、墳丘には器台様の土製品を並べており、6世紀中頃に位置づけられる〈註 54〉。

このように、福岡平野における5世紀後半~6世紀代の首長墳系列は、大きく2地域に分布の中心がまとまっていくとともに、6世紀後半以降、築造を停止していく。

これに対して、5世紀後半~6世紀中頃の前方後円墳を除く古墳の様相をみると、牛頸川流域の河岸段丘上に位置する牛頸塚原古墳群は、竪穴系横口式石室または初期横穴式石室を埋葬主体とする〈註 55〉。同様に、那珂川中~上流域一帯にも、この時期の古墳群がみられる。片縄山東麓の井河1号墳〈註 56〉、那珂川上流域東岸のカクチガ浦古墳群〈註 57〉がそれに該当する。カクチガ浦古墳群の中には、初期横穴式石室に古式須恵器をともなう古墳もみられる。

さて、6世紀後半以降、福岡平野でも他地域と同様、群集墳が爆発的に増加するという現象がみられ、平野周辺の丘陵部では多くの群集墳が造営されている。

那珂川上流域東岸の観音山山麓に位置する観音山古墳群では、中原支群・平石支群・瀬戸支群・ 上白水支群からなる、総数約300基近い古墳が確認されている〈註58〉。また、西岸地域の片縄 山東麓の低丘陵上にも多くの群集墳が分布している。片縄山古墳群は、丸ノ口支群と白石支群か らなり、計41基の古墳によって形成されていた〈註59〉。御笠川東岸地域では、月隈丘陵や乙金 山・大城山西麓に群集墳が分布する。月隈丘陵には、堤ヶ浦古墳群〈註 60〉や持田ヶ浦古墳群〈註 61〉があり、総数 200 基を超えると推定される古墳が分布している。乙金山・大城山西麓では、乙金古墳群〈註 62〉、王城山古墳群〈註 63〉、古野古墳群〈註 64〉などがみられる。

また、牛頸川流域の古墳としては、胴ノ元古墳〈註 65〉、後田・小田浦古墳群〈註 66〉、中通 古墳群(市1・市9)がある。いずれも牛頸窯跡群の位置する丘陵上に位置し、須恵器製作者集団 との関係が指摘されてきた。一方で、これらの古墳は牛頸川流域およびその西側地域に集中する傾 向があり、それより東側の上大利地区では古墳が確認されていなかったが、近年、梅頭遺跡 1 次調 査 1 号窯跡や 2 次調査 1 号窯跡では、窯廃絶後に墓として使用した状況が確認され、須恵器製作者 集団を率いる管理者の墓の可能性も指摘されている〈註 67〉。

さらに、先述の堤ヶ浦古墳群や持田ヶ浦古墳群の付近に位置する大型円墳である今里不動古墳は、巨石づくりの横穴式石室を埋葬主体としており、東光寺剣塚古墳のような首長墳クラスの前方後円墳につながる可能性がある〈註 68〉。同様に、鴻巣山麓に位置する穴観音古墳も巨石づくりの横穴式石室を埋葬主体とする円墳であり、首長クラスの墓の可能性がある。

(iii) 古墳時代の集落

古墳時代の生活域についてみてみよう。牛頸周辺における当該期の集落をみると、上園遺跡において、5世紀後半および6世紀中頃~後半の住居跡5軒および溝状遺構〈註 69〉、そのすぐ東側に隣接する出口遺跡において、6世紀末~7世紀初頭の竪穴住居跡1軒が検出されたほか〈註 70〉、牛頸塚原遺跡群〈註 71〉と牛頸日ノ浦遺跡〈註 72〉では古墳時代後期~奈良時代を主体とする一連の集落が検出されている。これらの集落は、須恵器生産にかかわる人々の生活域の可能性もあろう。集落の性格を考える上で手がかりとなる事例として、春日市惣利西遺跡では、6世紀後葉~7世紀前半の竪穴住居跡 15 軒が検出されたが、その住居内では須恵器が主体を占めており、瓦や不明土製品、滑石製臼玉なども出土した〈註 73〉。一方、牛頸川を挟んで対岸に位置する円入遺跡では、5世紀代および6世紀中頃~後葉の竪穴住居跡7軒が検出されたが、この場合、土師器が主体を占めていた〈註 74〉。さらに、惣利北遺跡では、7世紀後半に位置づけられる竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡1 軒以上が検出され、牛頸産の把手付中空円面硯を含む須恵器や土師器が出土している〈註 75〉。このように、集落内における須恵器を主体とする使用のあり方は、集落と須恵器製作者集団との関わりを考える上で参考となろう。

牛頸以外の集落をみると、御笠川中流域西岸の微高地上には、古墳初頭の古式土師器を多量に出土した原ノ畑遺跡〈註 76〉、4世紀後半に位置づけられる瑞穂遺跡〈註 77〉が確認されている。また、御笠川中流域東岸の仲島遺跡では、古墳時代前期の溝、後期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝が検出され、6世紀後半の大溝SD13からは、下駄のほか、馬の下顎骨や、その付近から刀子・子持勾玉・有孔円板などの滑石製模造品、ほぼ完形に復元できる須恵器の大甕2点、鍔形土器・移動式竈が出土しており、犠牲馬の祭祀がおこなわれた可能性も指摘されている〈註 78〉。さらに、那珂川・御笠川下流域の比恵・那珂遺跡群では、弥生時代からの集落が継続しており、那珂君休遺跡〈註 79〉では水田跡が検出されている。

(4) 大宰府成立前後

さて、6世紀代の福岡平野周辺は、『日本書紀』継体紀 21 年に筑紫君磐井の乱が起こり、その翌年、磐井の子である葛子が「糟屋屯倉」を献上して、罪一等を免れたとする記事がみられる。一方、宣化紀元(536)年五月辛丑条には、「那津之口」に「官家」を修造したとする記事がみられる。これについては、比恵遺跡群第8次および第72次調査において、南北を柵状遺構によって区画された空間内に、北側で5棟以上、南側で3棟以上の総柱建物群からなる倉庫群が検出され、その年代は6世紀後半から7世紀後半頃までと考えられることから、「那津官家」と関連する遺構群である可能性も指摘されている〈註80〉。

また、「那津官家」は、推古 17 (609) 年初見の「筑紫大宰」が常駐した施設とする説もあり、この「筑紫大宰」が大宰府の前身的役割を果たした官司機構の長とされることから、那津官家を大宰府の淵源と考える見解もある。牛頸窯跡群は、6世紀中頃に操業を開始するが、それ以前より周辺地域で操業をおこなう一部の窯群とは異なり、集約的に窯群を形成するという点や、後の大宰府への供給窯として発展するという点からみて、その成立の契機は「那津官家」の設置と関連する可能性もあるだろう。

大宰府の成立は7世紀後半頃と考えられ、発掘調査からも政庁第 I 期の建物の年代がこの時期に該当することが明らかとなっている。また、大宰府の立地をみると、政庁の背後の四王寺山には、朝鮮式山城である大野城、その南方の基山には基肄城が築かれており、政庁の南東方向に位置する宮地岳にも神籠石式山城が存在することが確認されている。さらに、東の四王寺山麓と西の牛頸山北側丘陵を結ぶ地峡部に水城大堤を築いて水を堰き止め、その西側にも小規模の土塁によって築いた小水城が数ヶ所で確認されている。大野城市上大利水城跡〈註81〉、春日市大土居水城跡〈註82〉、天神山水城跡などが小水城に該当する。このように、大宰府の周囲には防御施設が築かれているが、これは663年の白村江の戦いで敗れた後、唐・新羅連合軍の侵攻を想定して防衛体制が整えられたためと考えられる。

また、大宰府からは、水城の東門と西門を通って、鴻臚館へとつづく官道が通っていた。大野城市谷川遺跡や池田遺跡〈註 83〉では、官道およびその側溝とみられる遺構が検出され、発掘調査からもその存在が明らかとなった。奈良時代には、この官道沿いを中心に、官衙、寺院、集落などが営まれたとみられる。仲島遺跡では、竪穴住居跡・井戸などを検出したほか、権が出土した〈註84〉。隣接する福岡市井相田C遺跡〈註 85〉とは一連の遺跡に含まれる可能性があり、御笠川中流域における東門を通る官道沿いのこの一帯に「仲嶋郷」の中心施設が存在した可能性も指摘されている。一方、石勺遺跡 J 地点では、8世紀中頃~後半に位置づけられる火葬墓および蔵骨器が検出されたが〈註 86〉、その立地は、西門を通る官道より東側に離れた平坦地に位置する。太宰府市宮ノ本遺跡では、火葬墓2基、土坑(木棺)墓2基が検出され、1号墓からは鉛板に墨書された買地券が出土した(太2)。

このように、古代の福岡平野では、大宰府と官道沿いを中心に遺跡が分布する。このような時期 に、牛頸窯跡群における活発な須恵器生産がおこなわれたのであるが、これまでの調査によれば、 9世紀中頃の牛頸石坂窯跡群E地点がもっとも新しい時期の窯跡であることが確認されている(市 16)

牛頸窯跡群の操業停止以降の遺跡として、小水城周辺遺跡では、11世紀中頃~12世紀前半の掘立柱建物跡や土壙、溝が検出されたほか、八稜鏡が出土し〈註87〉、牛頸川流域の上園遺跡では、11世紀後半~12世紀前半の掘立柱建物跡2棟が確認された〈註88〉。また、塚口遺跡では、10世紀前半頃と12世紀中頃~13世紀代に位置づけられる土壙墓5基、11世紀以降の溝が検出された〈註89〉。これらの遺跡では、土師器、瓦器、貿易陶磁器、木器などが食器構成の中心となっており、牛頸窯跡群がその役割を終えたことを示していよう。

以上のように、牛頸窯跡群の歴史的位置は、古墳時代と大宰府成立以降ではやや趣を異にする。 古墳時代では、首長墳の様相について、「那津官家」設置前後の動きを含めて検討し、群集墳造営 の盛行と須恵器生産の拡大との関係を理解する必要があろう。また、大宰府成立以降、官衙や寺院 など、消費遺跡の性格が変化するのにともない、須恵器生産の性格がどのように変化するのか、古 墳時代からの継続性のあり方も含めて検討する必要があろう。さらに、牛頸窯跡群の終焉の問題 も、大宰府をとりまく遺跡との関係から明らかにしなければならない。

- 註1. 牛頸山の地質および植生に関する記述は、次の文献を参考としている。 冷川昌彦「自然環境の特徴」『大野城市史』上巻 大野城市史編さん委員会 2005
- 註2. 株式会社古環境研究所「大野城市野添遺跡第2~4次調査における樹種同定」『牛頸野添遺跡群II-第4・5次調査-』 大野城市文化財調査報告書第66集 大野城市教育委員会 2005

株式会社古環境研究所「野添遺跡6・7次調査における樹種同定」『牛頸野添遺跡群IV-第7次調査-』大野城市文化 財調査報告書第70集 大野城市教育委員会 2006

株式会社古環境研究所「梅頭遺跡第1次調査における樹種同定」『牛頸梅頭遺跡群I-第1次調査-』大野城市文化財 調査報告書第60集 大野城市教育委員会 2007

株式会社古環境研究所「牛頸小田浦窯跡群における樹種同定」『牛頸小田浦窯跡群II-79 地点の調査-』大野城市文化財調査報告書第 73 集 大野城市教育委員会 2007

- 註3. 福岡市教育委員会『諸岡遺跡-第14・17次調査報告-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第108集 1984
- 註4. 大野城市教育委員会『出口遺跡』大野城市文化財調査報告書第28集 1989
- 註5. 木下修「先土器時代の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第3集 福岡県教育委員会 1977
- 註6. 大野城市教育委員会『釜蓋原遺跡』大野城市文化財調査報告書第25集 1988
- 註7. 大野城市教育委員会『松葉園遺跡 I』 大野城市文化財調査報告書第59集 2003
- 註8. 福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第11集 1979
- 計9 前掲計6
- 註 10. 大野城市教育委員会『石勺遺跡II』大野城市文化財調査報告書第 50 集 1997
- 註 11. 大野城市教育委員会『牛頸塚原遺跡群』大野城市文化財調査報告書第 44 集 1995
- 註 12. 福岡市教育委員会『板付-市営住宅建設にともなう発掘調査報告書-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 35 集 1976
- 註 13. 春日市教育委員会『伯玄社遺跡』春日市文化財調査報告書第 35 集 2003
- 註 14. 大野城市教育委員会『御陵前の椽遺跡』大野城市文化財調査報告書第 48 集 1997
- 註 15. 大野城市教育委員会『塚口遺跡』大野城市文化財調査報告書第 58 集 2002
- 註 16. 大野町教育委員会『中・寺尾遺跡』大野町の文化財第3集 1971 大野城市教育委員会『中・寺尾遺跡』大野城市文化財調査報告書第1集 1977 大野城市教育委員会『中・寺尾遺跡Ⅲ』大野城市文化財調査報告書第54集 1999
- 註 17. 大野城市教育委員会『森園遺跡 I』大野城市文化財調査報告書第 26 集 1988 大野城市教育委員会『森園遺跡 II』大野城市文化財調査報告書第 55 集 1999
- 註 18. 前掲註 7.

- 註 19. 京都帝国大学文学部考古学研究室『筑前須玖史前遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告 11 1930 春日市教育委員会『須玖・岡本遺跡』春日市文化財調査報告書第7集 1980
- 註 20. 春日市教育委員会『須玖永田遺跡』春日市文化財調査報告書第 18 集 1987
- 註 21. 春日市教育委員会編『須玖岡本遺跡』吉川弘文館 1994
- 註 22. 春日市教育委員会『須玖磐石遺跡』春日市文化財調査報告書第 29 集 2001
- 註 23. 春日市教育委員会『須玖タカウタ遺跡』春日市文化財調査報告書第 32 集 2002
- 註 24. 春日市教育委員会『須玖五反田遺跡』春日市文化財調査報告書第 22 集 1994
- 註 25. 春日市教育委員会『赤井手遺跡』春日市文化財調査報告書第6集 1980
- 註 26. 那珂川町教育委員会『観音堂遺跡群』那珂川町文化財調査報告書第 20 集 1989
- 註 27. 那珂川町教育委員会『安徳台遺跡群』那珂川町の文化財 X Ⅲ 2004
- 註 28. 大野城市教育委員会『仲島遺跡Ⅲ』大野城市文化財調査報告書第 10 集 1983 大野城市教育委員会『仲島遺跡Ⅷ』大野城市文化財調査報告書第 27 集 1989
- 註 29. 大野城市教育委員会『石勺遺跡II』大野城市文化財調査報告書第 50 集 1997
- 註 30. 大野城市教育委員会『石勺遺跡Ⅲ』大野城市文化財調査報告書第 52 集 1998
- 註 31. 大野城市教育委員会『石勺遺跡 I』 大野城市文化財調査報告書第 47 集 1996
- 註32. 福岡市教育委員会『比恵遺跡-第6次調査・遺構編-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集 1983
- 註 33. 福岡市教育委員会『那珂遺跡-那珂遺跡群第8次調査の報告-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第153集 1987
- 註 34. 福岡市教育委員会『雀居遺跡2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 406 集 1971
- 註 35. 福岡市教育委員会『那珂八幡古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 141 集 1986
- 註 36. 福岡市教育委員会『博多Ⅶ-博多遺跡群第 28 次発掘調査報告-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 406 集 1987
- 註 37. 井上裕弘「安徳大塚古墳」『教育福岡』 260 1971
- 註 38. 福岡市教育委員会『卯内尺古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 690 集 2001
- 註 39. 福岡市教育委員会『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 209 集 1989
- 註 40. 那珂川町教育委員会『妙法寺古墳群』那珂川町文化財調査報告書第7集 1981
- 註 41. 前掲註 26.
- 註 42. 那珂川町教育委員会『井河古墳群』那珂川町文化財調査報告書第 10 集 1983
- 註 43. 那珂川町教育委員会『油田古墳群』那珂川町文化財調査報告書第1集 1969
- 註 44. 福岡県教育委員会『炭焼古墳群』福岡県文化財調査報告書第 37 集 1968
- 註 45. 前掲註 40.
- 註 46. 大野城市教育委員会『御陵古墳群』大野城市文化財調査報告書第 13 集 1984
- 註 47. 大野城市教育委員会『笹原古墳』大野城市文化財調査報告書第 15 集 1985
- 註 48. 太宰府市教育委員会『成屋形古墳』太宰府市の文化財第 38 集 1998
- 註 49. 福岡市教育委員会『東光寺剣塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 267 集 1991
- 註 50. 前掲註 49.
- 註 51. 春日市教育委員会『野藤遺跡』春日市文化財調査報告書第 27 集 2000
- 註 52. 那珂川町教育委員会『貝徳寺古墳』那珂川町文化財調査報告書第 16 集 1987
- 註 53. 中山平次郎・玉泉大梁・島田寅次郎「日拝塚」『史蹟名勝天然記念物調査報告書』第5輯 福岡県 1930 春日市教育委員会『国指定史跡日拝塚古墳・環境整備事業に伴う調査』春日市文化財調査報告書第8集 1981
- 註 54. 那珂川町教育委員会『小丸古墳群』那珂川町文化財調査報告書第 13 集 1985
- 註 55. 前掲註 11.
- 註 56. 前掲註 42.
- 註 57. 那珂川町教育委員会『カクチガ浦遺跡群』那珂川町文化財調査報告書第 23 集 1990
- 註 58. 那珂川町教育委員会『観音山古墳群』那珂川町文化財調査報告書第 8 集 1982 那珂川町教育委員会『観音山古墳群II』那珂川町文化財調査報告書第 14 集 1986

那珂川町教育委員会『観音山古墳群Ⅲ』那珂川町文化財調査報告書第17集 1988

那珂川町教育委員会『観音山古墳群IV』那珂川町文化財調査報告書第 30 集 1992

那珂川町教育委員会『観音山古墳群VI』那珂川町文化財調査報告書第63集 2003

註 59. 那珂川町教育委員会『片縄山古墳群』那珂川町文化財調査報告書第 61 集 2003

- 註 60. 福岡市教育委員会『堤ヶ浦古墳群発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 151 集 1987
- 註 61. 福岡市教育委員会『持田ヶ浦古墳群 1・2 号調査報告』 1971 福岡市教育委員会『持田ヶ浦古墳群 2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 445 集 1996
- 註 62. 大野城市教育委員会『乙金古墳群-北支群-』大野城市文化財調査報告書第 11 集 1984
- 註 63. 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 IX 1977
- 註 64. 前掲註 63.
- 註 65. 大野城市教育委員会『牛頸胴ノ元古墳』大野城市文化財調査報告書第 38 集 1993
- 註 66. 大野城市教育委員会『牛頸後田・小田浦古墳群』大野城市文化財調査報告書第 36 集 1992
- 註 67. 石木秀啓「須恵器工人の墳墓」『大野城市史』上巻 大野城市史編さん委員会 2005
- 註 68. 福岡市教育委員会・九州大学考古学研究室「福岡市・今里不動古墳の調査」『九州考古学』第 63 号 1989
- 註 69. 大野城市教育委員会『上園遺跡 I』大野城市文化財調査報告書第 18 集 1986 大野城市教育委員会『上園遺跡 II』大野城市文化財調査報告書第 21 集 1987
- 註 70. 前掲註 4.
- 註 71. 前掲註 11.
- 註72. 大野城市教育委員会『牛頸日ノ浦遺跡群』大野城市文化財調査報告書第42集 1994
- 註 73. 春日市教育委員会『春日地区遺跡群Ⅲ』春日市文化財調査報告書第 15 集 1985
- 註74. 春日市教育委員会『春日地区遺跡群N』春日市文化財調査報告書第16集 1986
- 註 75. 前掲註 74.
- 註 76. 大野城市教育委員会『瑞穂・原ノ畑遺跡』大野城市文化財調査報告書第 57 集 2001
- 註 77. 前掲註 76.
- 註 78. 大野城市教育委員会『仲島遺跡 X』大野城市文化財調査報告書第 34 集 1992
- 註 79. 福岡市教育委員会『那珂君休遺跡 II』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 106 集 1984
- 註80. 福岡市教育委員会『比恵29 比恵遺跡群第72 次調査概要-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第663 集 2001
- 註81. 大野城市教育委員会『水城跡 I』 大野城市文化財調査報告書第43集 1995
- 註82. 春日市教育委員会『大土居水城跡』春日市文化財調査報告書第28集 2000
- 註83. 大野城市教育委員会『谷川・池田・池ノ上遺跡』大野城市文化財調査報告書第51集 1998
- 註84. 大野城市教育委員会『仲島遺跡V』大野城市文化財調查報告書第17集 1986
- 註 85. 福岡市教育委員会『井相田 C遺跡』福岡市埋蔵文化財報告書第 152 集 1987
- 註 86. 大野城市教育委員会『石勺遺跡Ⅳ』大野城市文化財調査報告書第 56 集 1999
- 註 87. 大野城市教育委員会『小水城周辺遺跡 I』 大野城市文化財調査報告書第 45 集 1995
- 註 88. 前掲註 69.
- 註 89. 前掲註 15.

IV. 窯跡の分布

1. 分布調査

(1) 平成17年以前の分布調査の経緯・方法

II 章の研究史にも述べているとおり、学問的な意味での須恵器窯跡群の分布調査は大正時代に九州大学の中山平次郎氏がおこなったのが最初と言える。収集資料は多くが8世紀代のものだったとされている。

昭和30年代になって、現在の春日市在住であった鈴木基親氏の収集資料の中に牛頸で採集された須恵器が含まれており、それに注目した小田富士雄氏らが踏査を試みられている。

しかし、組織的に調査を行なったのは、昭和41年(1966)の福岡県教育委員会柳田康雄氏が福岡大学附属大濠高校考古学部生徒の助力を得て実施したのが最初と言える。多くの窯跡が初めて地図上に明らかにされ、牛頸窯跡群の実態把握の基礎となった。

昭和54年 (1979)、大野城市に嘱託ながら専任の埋蔵文化財担当者が配置され、それまで県教育委員会に依存していた発掘調査を市独自でも行うことになった。そして、この時自衛隊春日基地に勤務するかたわら、休日ごとに山野に分け入り須恵器窯跡の探査を続けていた前田軍治氏に多くの窯跡の所在地について教示を受けた。後に小田浦窯跡群79地点とした窯跡群は当時竹林で須恵器が点々と落ちている状況であったが、前田氏は灰原が見えないことと須恵器が集中して見つからないことは地下の窯跡の残存状態が良いはずだと言われた。確認調査でここに窯跡が5基も見つかった〈註1〉。

その後は各種の開発ごとにその範囲を調査することになった。1万㎡ほどの小規模な開発から、II章で上げた数10haに及ぶような大規模な開発まで多種の開発があった。

開発を前提にした分布調査は、広いとは言え範囲が限られていることから、やり易い一面がある。この場合の方法は試掘調査を含めて3段階で行うことが多かった。まず第1段階が踏査と軽易な試掘調査である。数人規模の調査隊を作り谷ごとに入り込む。水が流れていないと土器片を見つけるのは困難な場合が多い。窯跡がありそうな場所ではスコップで坪掘りを試みる。灰原に当たれば窯跡の存在が確実になる。第2段階では、土器片を表採できたり地形的に見て窯のありそうな場所を選んで、一定程度の面積を伐採のうえトレンチ掘りを行う。この場合、重機が入れる場所であれば重機を入れるが、全面伐採前では重機が入れない場合も多く、この場合は人力に頼らざるを得ない。しかし、第1段階が坪掘りであるのに対し、第2段階では等高線に沿った長いトレンチを入れることができ、格段に精度が上がる。第3段階は全面伐採後に行う試掘調査である。開発で地形全体が姿を変えることになるため、窯跡の可能性のある斜面を重機で表土を剥ぐことになる。全面を剥ぐのは無理にしても、牛頸窯跡群では窯跡は斜面上位にあることが多いことから、灰原を発見するため、斜面上位まで調査する必要があった。ただし、開発予定地が既に過去に大きな改変を受けた場所の場合はほとんど全部盛土部分を除去しないと窯跡を発見できない恐れがある。上大利南・北土

地区画整理事業の場合がそれに当てはまる。膨大な土量の移動が必要になる。

分布調査や試掘調査は全面伐採の後に重機を導入して行うのが早いが、何段階かに分けて行うのは、広い面積の開発の場合は工事と調査が数年に及ぶことが多くなり、それに伴い、豪雨等の災害により近隣の住家や田畑に被害を与えないよう、開発者と防災工事等について充分協議し、協力を得て進めなければならないことと、早めの発見をし、保存の協議も行える場合があるからである。

以上のように、窯跡の分布調査は主に開発に先立って行ってきており、開発の及ばない山の奥地 の方は未調査であった。ただ、そのような場所でも谷川をさかのぼると須恵器片が良く拾えたこと から、相当数の未確認の窯跡のあることが予想できた。

(2) 平成18年・19年の分布調査

そして、 I 章で記述したように平成16年2月に文化庁のヒアリングにより牛頸窯跡群の国史跡指定の可能性があることがわかり、さらに平成17年2月に文化庁玉田調査官(当時)の視察を経て、分布調査と総括報告書の作成がその前提であることを再確認した。

分布調査に際しては、土地所有者の了解が必要なことから、まず最初に1筆ごとに所有関係を調査することから始めた。当該地は、市が森林保護のためトラスト運動を行っており、市有地も比較的多くあった。このようなことから市有地などの公有地から始めること、調査時期は草木が少なくなる冬季とすることにした。牛頸窯跡群国史跡指定問題については、福岡県教育庁文化財保護課も積極的に応援体制をとってくれたことや、牛頸窯跡群が本市だけではなく太宰府市や春日市にも及んでいることなどから、県と周辺市町村技師の応援をいただくこととなった。平成18年当初は多忙のためなかなか始められず、3月と5月に行わざるを得なかった。応援を受けることから、より多く都合を付けることのできる土曜日や日曜日に実施した。おおむね3人1班とし3~4班を編成し、谷頭から奥へ進み、また戻り、次の谷に入るという形で悉皆調査を行なった。平日の場合は本市教育委員会が作業員を雇用して行った。

2,500分の1の地図に調査結果を落としていったが、①須恵器片を表採できただけの地点、②やや集中して見つかり、中に焼けひずみのあるものや、窯壁片が含まれて、近くに窯の存在を強く予想させる場所、③灰原を確認した地点を分けて記入した。②と③を窯跡あるいは窯跡の近くと判断した。須恵器の採集は時期の判明するものや特徴的なものに留めた。

暑い時期はできないため、続きは次の冬である平成19年当初に行うこととし、それまでに私有地の所有者調べを継続したが、調査のための立ち入り依頼文書は約470通必要であった。

平成19年は2月から開始し、5月まで行った。やはり県教育委員会文化財保護課の職員の協力を得たが、今年度は主に本市の技師や嘱託職員で行った。その結果は第3図に示すとおりである。この調査によって、今まで窯跡が未確認であった山地内の様相がかなり判明した。

2,500分の1地形図には近世あるいは近代と思われる炭窯の類なども入れたため、文化財の可能性のある地点として111ヶ所を記したが、須恵器窯跡関係に絞れば80ヶ所であった。さらに、灰原を確認できた地点、あるいはやや集中して須恵器片が見つかり、中に焼けひずみのあるものや窯壁片が含まれて、近くに窯の存在を強く予想させる場所は合わせて約25ヶ所であった。また、表

採した須恵器は古墳時代のものは含まず、7世紀後半から8世紀代のものであった。本報告書に付録として付けたCDには、報告されたすべての窯跡の実測図と、群として把握できる地点の地形実測図を収録しているが、7世紀後半から8世紀代の窯跡群では、長者原窯跡群の1ヶ所16基は極端な例としてはずすと、30ヶ所で121基の窯跡が検出されていることがわかる。平均すると1ヶ所に約4基という基数である。従って単純にではあるが、分布調査で新たに確認されたのは、約25ヶ所ということから、約100基ほどの窯跡が見つかったことになる。また、灰原は確認できなかったが、須恵器片を表採できたうちの何ヶ所かの近くには窯跡のある所も相当あるであろうし、分布調査ですべての窯跡を見つけたということはないであろうから、合わせてさらに数十基あると考えられる。約150基の窯跡を想定してもあながち荒唐無稽な数字ではないと考える。

また、今回の分布調査で判明した窯跡の分布状態は決して一様ではなく、集中している所とそうでない所があった。

(3) 牛頸窯跡群の範囲

以上のことから、牛頸窯跡群の範囲は以下のように考えることができる (第3図)。

北は従来どおり、春日市の大牟田池窯跡群や惣利窯跡群を境として良いだろう。

西は平成18・19年度の分布調査で新たに窯跡が確認されているが、大野城市の後田窯跡群や石坂窯跡群が境になると考えて良いだろう。両窯跡群のすぐ西は那珂川町との境界になる。那珂川町部分すべてについて調査を行なっているわけではないが、比較的近くを九州新幹線が通るため、それに伴い福岡県教育委員会による埋蔵文化財分布調査や発掘調査が行われている。しかし、須恵器窯跡の存在を示すようなものは発見できていない。また、那珂川町教育委員会からも窯跡の存在する可能性は少ないことを教示していただいている。確認されているのは市境付近ではなく、後田窯跡群の西約1kmにあって同町教育委員会の手で発掘調査された地別当窯跡群である。この周辺ではまだ窯跡の可能性の考えられる地点はあるとのことである。

南は平成18・19年度の分布調査により、多くの窯跡の存在を確認したが、今まで南限と考えてきた範囲を大きく越えるものではなかった。笹原窯跡群・足洗川窯跡群・石坂窯跡群を南限の窯跡群とすることができる。

東は今までとおり、太宰府市の神ノ前窯跡群や宮ノ本窯跡群、野口窯跡群として良いだろう。

以上のことから、牛頸窯跡群の規模はおおむね東西4km、南北4.8km で、ゆがんだ長方形型の 範囲と言える。従来は南北を4.6km としてきたが、修正したい。

瓦窯として福岡県の指定文化財になった春日市のウトグチ窯跡群は煙道が多孔式になるなど、構造は牛頸窯跡群の須恵器窯跡と似ているが、牛頸窯跡群として想定した範囲からは約1km ほど西にはずれる。同窯跡を牛頸窯跡群に含めるかどうかはもう少し検討の余地がある。

2. 窯跡の分布

(1) 時期ごとの分布

次章の遺物の項で詳述する牛頸窯跡群出土須恵器の編年に従い、6世紀中頃から9世紀前半頃までを9期に分ける(第4~12図)。

ⅢA期(6世紀中頃)

ⅢB期(6世紀後半頃)

IVA期(6世紀末頃~7世紀初頭頃)

Ⅳ B期 (7世紀初頭頃~前半)

V期(7世紀前半~中頃)

VI期 (7世紀後半)

ⅥA期 (8世紀前半)

ⅦB期(8世紀後半)

Ⅷ期(8世紀末~9世紀前半頃)

また、牛頸窯跡群の支群は学史的に小字名を使ってきたため、記述はそれらの名称を使用する。 支群よりやや大きな範囲で述べたい場合は、次の4グループにわける。たとえば、野添窯跡群や本 堂窯跡群・梅頭窯跡などは上大利グループ、中通窯跡群・後田窯跡群・小田浦窯跡群などは牛頸グ ループ(さらに河川によって牛頸川流域グループと平野川流域グループに分ける場合がある)、惣 利窯跡群は春日グループ、宮ノ本窯跡群や神ノ前窯跡群などは太宰府市にあり、佐野グループとす る。これらは地理的な意味合いだけで、歴史的な意義付けはない。これらの前提のもとに、以下に 時期ごとの窯跡分布状態について述べたい。

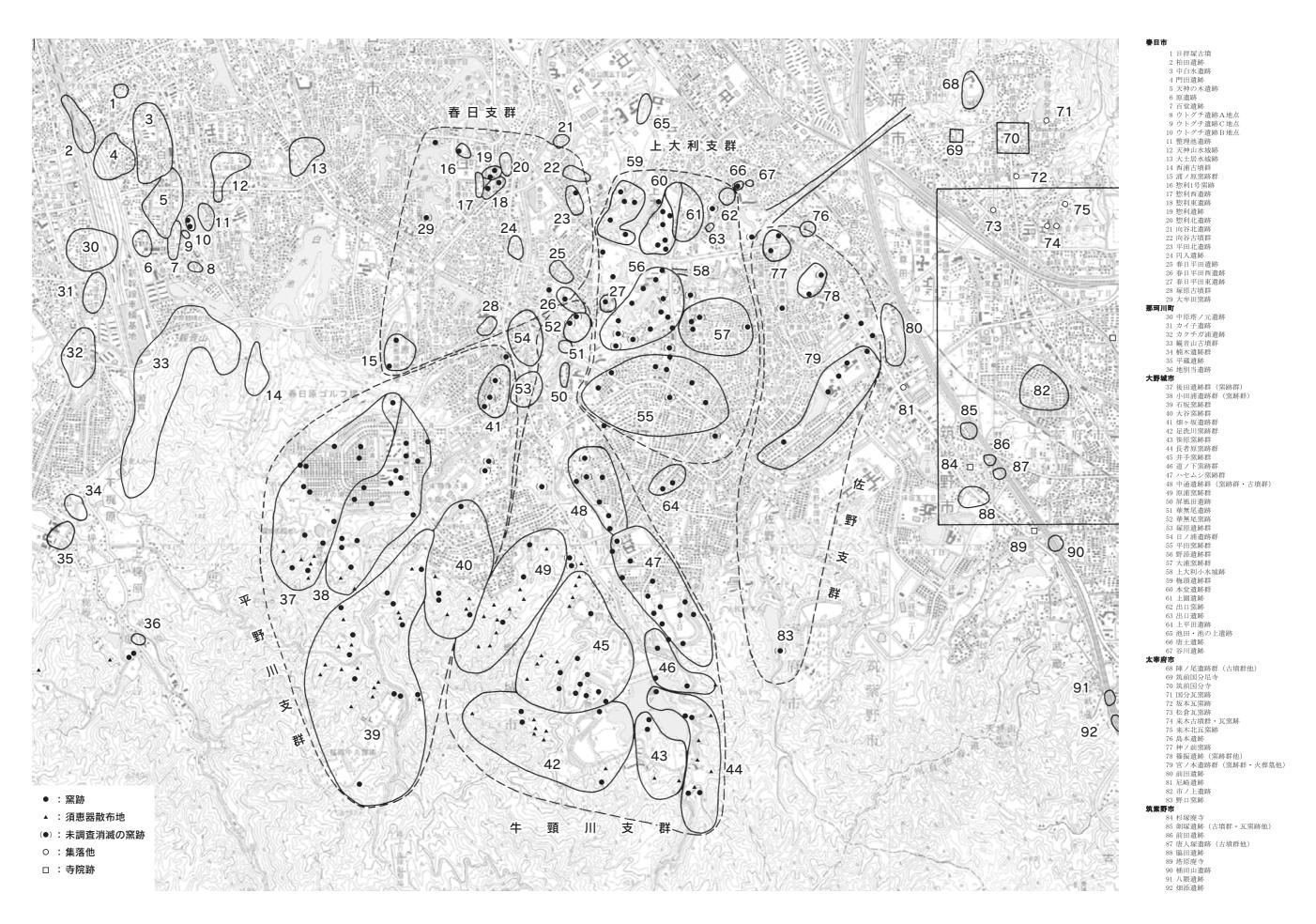
ⅢA期(6世紀中頃)は牛頸窯跡群開窯期である。この時期の窯跡は大野城市上大利の野添6号 窯跡と本堂遺跡14次調査1号窯跡が知られている。第4図に示すように平野部から平田川沿いの 谷へ入る入り口部に造られている。この時期は上大利グループのみであると言える。

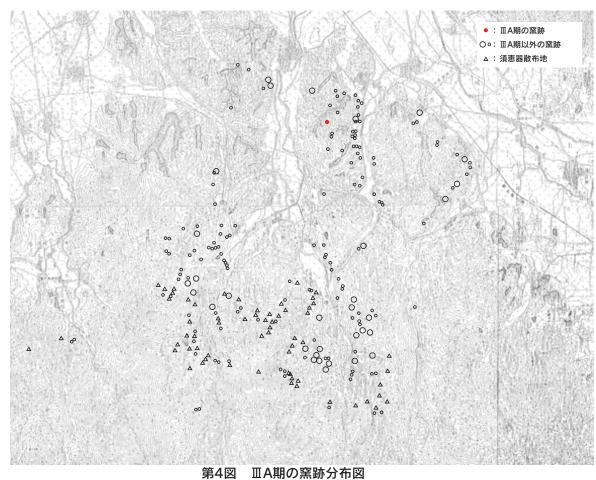
Ⅲ B期(6世紀後半頃)になると、野添6号窯跡周辺に野添9号窯跡をはじめとして、野添11・12号窯跡や梅頭1号窯跡が造られるが、拡散化への萌芽が認められる。すなわち、北西1.3km ほど離れた牛頸川沿いの平野入り口部に惣利1号窯跡、北東0.8km には神ノ前2号窯跡が造られるようになる。上大利グループのみの状態から春日グループと佐野グループに広がることになる。

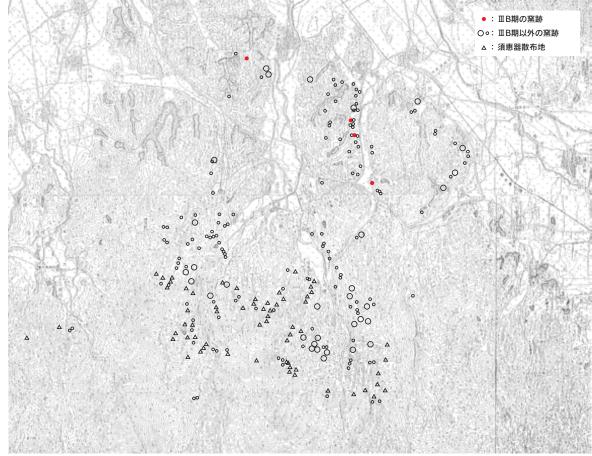
NA期(6世紀末頃~7世紀初頭頃)には平野部から見ると奥になる牛頸地区に小田浦窯跡群や 後田窯跡群などが造られ始め、範囲が前代に比べ格段に大きく広がるとともに基数も大幅に増える。 牛頸グループが操業を始める。

Ⅳ B 期 (7世紀初頭頃~前半) にもその傾向は変らず、牛頸窯跡群では東端に当たる宮ノ本窯跡群などが形成されはじめ、さらに基数が増える。また、平田 D − 1 号窯跡や浦ノ原 4 号窯跡、宮ノ本4号窯跡などこの時期に造られ Ⅵ 期まで継続して操業される窯跡が見られる。

NA・NB期は古墳時代においては最も多くの場所に多くの窯が築かれ、4つのグループすべてで須恵器生産がさかんな時期である。この時期には古墳が福岡平野を中心に非常に多く造られるが、それらに供給するためのものであろう。また、福岡平野周辺の窯跡群と比較すれば、これまで各地でせいぜい2基程度で散発的に須恵器生産が行われてきたのに対し、この時期に牛頸窯跡群に収斂される様相が見られる。







第5図 IIB期の窯跡分布図

しかし、次のV期(7世紀前半~中頃)になると新しく操業を開始する窯の数が急に減る。ただ し前代から継続して操業を続けているものもあることから、窯場の地理的かたよりはない。この時 期は直立煙道が現れ、窯構造の上で大きな変革期であると同時に、製品でも杯Gが主流になり器種 の減少や小型化が最も進んだ時期でもあるなど製品の上でも変革期に当たる。生産量が減少するこ とになるが、その理由については、必ずしも明らかではない。

また、この時期に窯のプランに地域的な違いの見られる可能性がある。すなわち、牛頸窯跡群の中では西部に当たる後田50-I号窯跡は従来からの寸胴プランを持ち、後続する後田60-I号窯跡では直立煙道を採用する。そのプランは寸胴ではあるが両端をやや絞った形で小型化が始まる。一方野添窯跡群の近くの本堂5次8号窯跡は上半分が削平されていたが、胴張りプランを持つ窯跡である。

続くVI期(7世紀後半)にはふたたび窯の数が増える。窯場もさらに奥へ広がり、牛頸グループの中でも奥側のハセムシ窯跡群や井手窯跡群が操業を開始する。しかし、この時期にも地域的に違いが見られる。すなわち、西部に位置する後田63地点や小田浦窯跡群79地点などではIVA期の大型窯跡のすぐそばにVI期の小型の窯を造り、大小2基の窯跡が並存するような例が見られるのに対して、東側に位置する窯跡群では見られない。

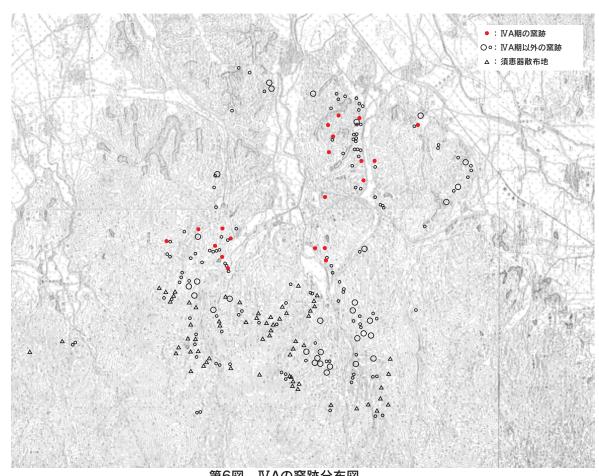
▼II A期 (8世紀前半) は牛頸窯跡群の操業期間中で最も多くの窯が造られる時期である。範囲も 奥側に広がり、牛頸窯跡群全体の南側3分の1を占めるほどである。そして発掘調査を実施してい ないことから断定はできないが、この南側3分の1ほどの範囲内には杯Hを出す窯跡はない可能性 がある。しかし、当該期の窯跡は奥(南)側だけではなく、平野に近い側である本堂窯跡群などの 上大利グループや浦ノ原窯跡群の春日グループ、宮ノ本窯跡群などの佐野グループにも見られる。 良く言われるように、薪とするための森林が回復してきたのを物語るものなのか、政治的な意図が あるものなのかはただちに明らかにすることは難しい。

この時期にも地域的な違いが見られる。すなはち、1ヶ所の窯場で大甕類を焼く大型の窯と杯・ 皿類を中心に焼く小型の窯を造り、器種を焼き分けた状態が観察される場合があるが、それは牛頸 グループ東南部のハセムシ窯跡群と井手窯跡群に限られ、他には今のところ見当たらない。

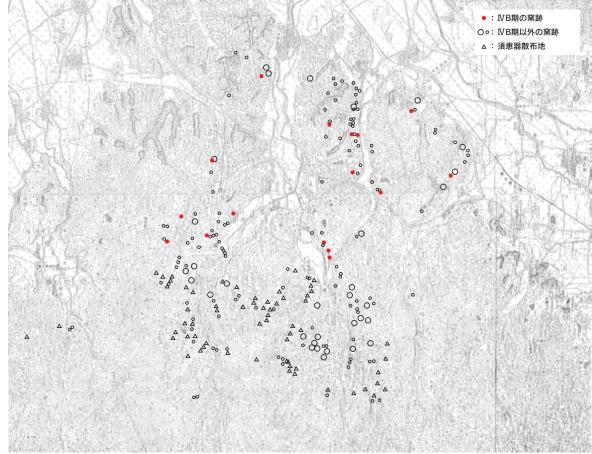
また、ヘラ書須恵器を出した窯跡もハセムシ窯跡群と井手窯跡群である。しかもハセムシ12地 点IX号窯跡と井手4号窯跡は規模や形態、床面の傾斜角などが極めて良く似ている。両窯跡群は谷 をはさんで隣接する位置にあり、官窯的なものとして選地・設計・築造された可能性もある。

ⅥB期(8世紀後半)にもまだ範囲が拡大する。この時期に開窯するのは足洗川窯跡群、笹原窯跡群など牛頸グループ最南端部に位置する窯跡群である。そして、主に7世紀後半以降に操業を開始したハセムシ窯跡群、井手窯跡群、道ノ下窯跡群、長者原窯跡群、石坂窯跡群など南部諸窯も操業を続ける。

Ⅷ期 (8世紀末~9世紀前半頃) は牛頸窯跡群の終焉の時期であるが、現在4基の窯跡が知られる。井手24号窯跡、惣利5号窯跡、本堂5次6号窯跡そして、時期が明瞭ではないが、石坂E−3号窯跡である。今まで述べてきたことから、おおむね平野に近い所から山の奥側へという流れがあったが、当該期の窯跡は井手24号窯跡と石坂E−3号窯跡が牛頸グループの奥、惣利5号窯跡



第6図 IVAの窯跡分布図



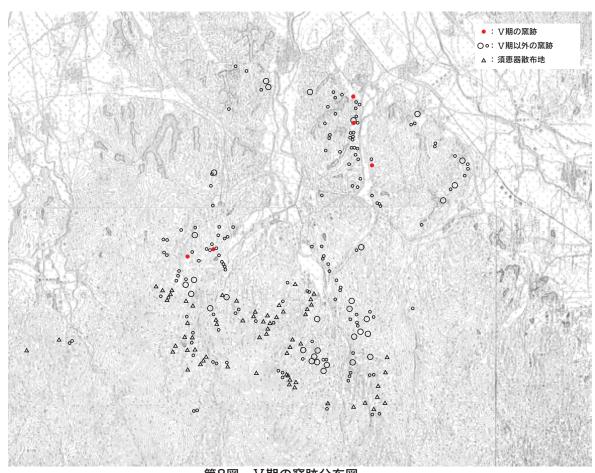
第7図 IVB期の窯跡分布図

が春日グループ、本堂5次6号窯跡が上大利グループと平野に近い所と半々であることが特徴と言える。ただし、牛頸グループ南側はまだ発掘調査を実施していないことから、山の奥側には当該期の窯跡の存在していることが充分に予想できる。

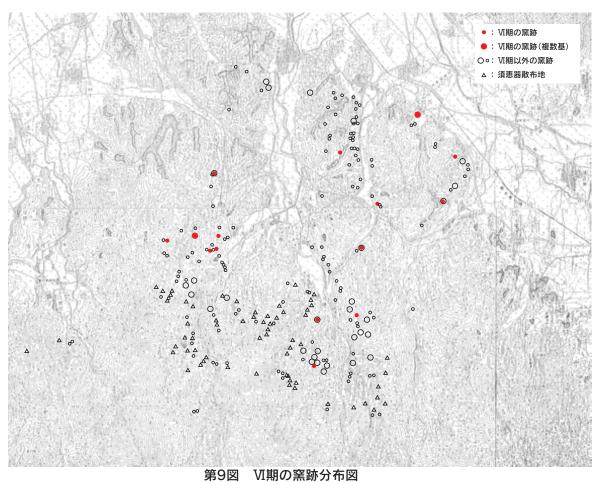
以上をまとめれば、牛頸窯跡群はIII A期(6世紀中頃)に上大利地区で開窯し、III B期(6世紀後半)には拡散(拡大)を始め、IV A期(6世紀末頃~7世紀初頭頃)、IV B期(7世紀初頭頃~前半)に古墳時代の最盛期を迎える。V期(7世紀前半~中頃)には一旦減少し、VI期(7世紀後半)に再度拡大を始める。VII A期(8世紀前半)とVII B期(8世紀後半)は最大の範囲と窯数を誇り、VIII (8世紀末~9世紀前半頃)に終焉を迎える。

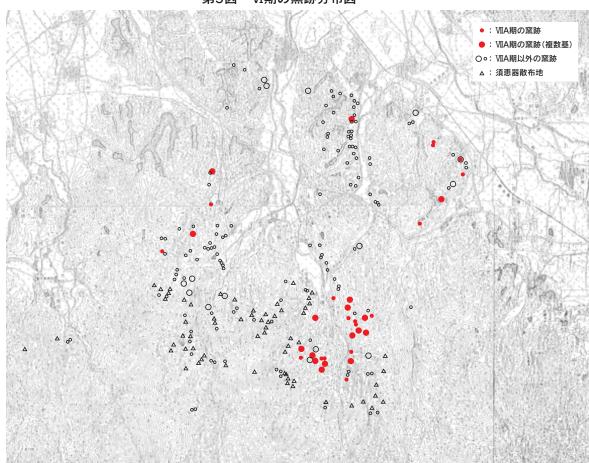
なお規模的な面から見れば、古墳時代の10mを超える大型の窯跡は牛頸グループの小田浦窯跡群・後田窯跡群とハセムシ窯跡群の北端付近を結んだ線以北に分布し、それ以南は大甕用でも10mを超えることはなく小型の窯跡のみとなる。

- 註1. 『小田浦窯跡群 II』 大野城市教育委員会 2007
- 註2. 応援していただいた方は福岡県教育委員会池辺元明氏、伊崎俊秋氏、斎部麻矢氏、重藤輝行氏、小沢佳憲氏、 太宰府市教育委員会城戸康利氏、中島恒次郎氏、山村信榮氏である。
- 註3. 福岡県教育委員会飛野係長のご教示による。
- 註4. 那珂川町教育委員会茂技師、吉岡技師のご教示による。

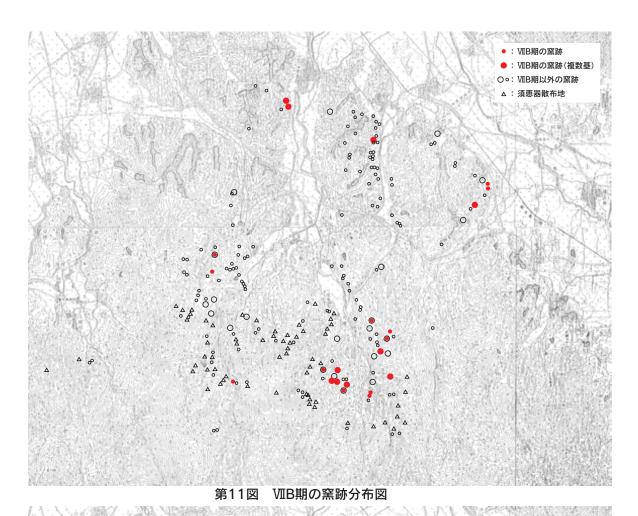


第8図 V期の窯跡分布図



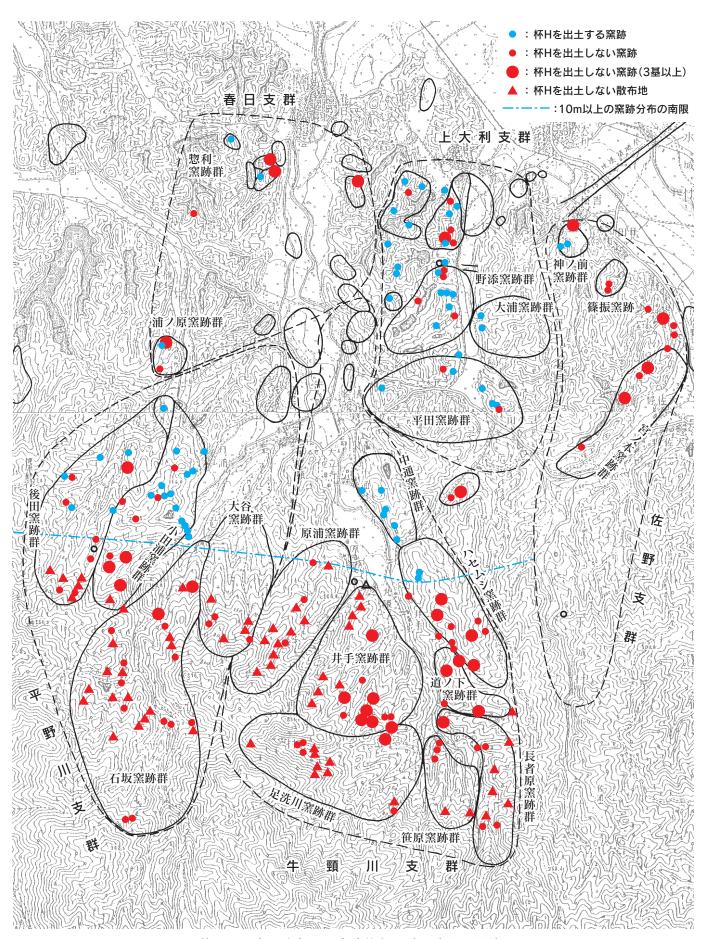


第10図 VIIA期の窯跡分布図



○: V順明の系跡
 ○: V順明の系跡
 △: 須那器散布地
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※
 ※

第12図 湿期の窯跡分布図



第13図 杯Hと杯Bの窯跡分布図(1/25,000)

V. 出土遺物の検討

1. 須恵器の編年

牛頸窯跡群出土須恵器の編年は、1970(昭和45)年発行の『野添・大浦窯跡群』(福岡県文化 財報告書第43集)の小田富士雄氏と真野和夫氏による「総括の2」を嚆矢とする(以後「野添大浦 編年」と呼ぶ)。同報告書では6世紀中頃~7世紀初め頃までの須恵器をⅢA~V期の5期に分けた。

編年の研究史については、第II章で述べているので詳述はしないが、記述の関係上いくつかの編年案であったが、それ以降の時期の須恵器については1975(昭和50)年発行の『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 VI』で亀井明徳氏が7世紀後半から9世紀の須恵器について I~Ⅲ期に分けた編年案を提示している。また1989(平成2)年には、福岡県教育委員会が牛頸ダム関連の発掘調査報告書として刊行した『牛頸窯跡群 II』で森田勉氏と川述昭人氏が7世紀後半から9世紀初頭頃までを I~IV期に分けた編年案を示している。他には舟山がおおむね小田富士雄氏らの編年案を踏襲する形で牛頸窯跡群出土須恵器の紹介を何度か行っている。また、太宰府市教育委員会の山本信夫氏・山村信榮氏・中島恒次郎氏、さらに岡田裕之がおのおの自説を展開している。

一方、全国的な須恵器の編年は良く知られているように樋口隆之氏の『対馬』(1953年)での編年を嚆矢とする。研究の流れとしては、古墳出土須恵器の編年から始まったが、追葬等のため同時性を欠く場合のあることから、より一括性の高い生産遺跡すなわち窯跡出土須恵器の編年へと変遷した。現在全国的に影響を及ぼしているのは、陶邑窯跡群出土須恵器で行われた田辺昭三氏の編年案〈註1〉(窯式編年と言われる)と中村浩氏の編年案〈註2〉(床式編年と言われる)である(以後田辺昭三氏の編年を使用する場合はTK73など、中村浩氏の場合はI-1などと記す)。

さて、牛頸窯跡群の編年案の提示に当たっては、おおむね野添大浦編年を踏襲する。37年前の提示であるが、須恵器変化の流れは特に大きく変更する必要はないし、北部九州地域においては最も多く用いられる編年案として定着していると考えるからである。しかし、当時と違い、今は発掘調査した窯跡が300基を超え資料も大幅に増え新たな知見が加わっている。従って、まず1970年の報告書である『野添・大浦窯跡群』を再検討し、変更すべき点を提示するという方法をとりたい。また、野添大浦編年は7世紀初頭までの編年であり、それ以後はその他の文献も参照していくことになることや、特に8世紀は大消費地である大宰府での土器編年と対比することが必要になるなど、編年案を組み立てる考え方に違う要素を組み込む必要があることなどから、開窯期から7世紀中頃までとそれ以後の2項目に分けて編年への考え方を述べていくことにしたい。そして、それを受けて全体の編年案を提示したい。

なお、須恵器編年は古墳出土品から一括性の高い窯跡出土品へと対象を変えたが、窯跡出土須恵器といえども、窯によっては操業年数が長かったと推定される場合もあり、逆に床が数枚あっても、最初と最後の床面出土須恵器の型式差の見られない場合や、蓋杯の口径もすべてが下層床面出土品

より上層床面出土品が小さくなるわけでもない。また、床ごとに器種がそろって出てくるわけではなく、最も多いのが灰原出土須恵器である。このようなことから、窯跡調査によってすぐ精密な編年案が立てられるわけではない。窯跡出土資料の等級的位置付けについては、石木秀啓が『牛頸野添遺跡群 I』(大野城市教育委員会2004)で以下のように述べている。

等級A:操業時に天井等が落下し、窯内に焼成中の製品が廃棄された資料

(例 牛頸後田68地点-未報告)

等級B: 貼床内からの出土資料 (例 牛頸中通D-1号窯跡等)

等級C:操業終了後、窯の床面上に残された資料(例 牛頸小田浦40-Ⅰ号窯跡等)

等級 D: 灰原が明確な間層でもって明瞭に分層される資料

等級 E: 灰原が明瞭な層界で分層される資料

等級F:灰原の間層・層界が明瞭でない資料

本書でもこの観点を引き継ぎたい。ただ、上位の等級に属するものは決して多くはない。このため、それらだけを使って編年することはできず、遺物を選択する場合も多い。従って、編年の1モデル案を呈示することになる。

(1) 今までの研究と本書での考え方

(i) 開窯期(6世紀前半~中頃)から7世紀中頃まで

a.『野添・大浦窯跡群』の編年案

野添大浦編年案は「総括」として報告書の41~44ページに掲載されている。発掘調査の結果出土した須恵器杯蓋がわずかずつ形態を重複させながら変遷を遂げているとし、野添第6号窯出土須恵器と9号窯出土須恵器が第Ⅲ型式に、大浦1号出土須恵器はⅣ型式に、大浦2号出土須恵器はV型式に属すとした。さらに野添第6号須恵器と9号窯須恵器の主体はそれぞれ古い様相と新しい様相を持つとした。このことから野添第6号窯跡は第Ⅲ期前半(Ⅲ A期)、9号窯跡は第Ⅲ期後半(Ⅲ B期)、大浦1号窯が第Ⅳ期、同2号窯が第Ⅴ期に属すとした。出土須恵器の「型式」分類を行うとともに、時期を示すものとして「期」を使用した。さらに、まとめとして、第Ⅳ期の段階までは全国的な傾向と大きく異なるものではないが、非常に保守的で変化が漸進的であると言う事ができるとした。また、Ⅳ期についても、Ⅲ期同様前半をA期、後半をB期とした。

b. 本書での考え方

前述したとおり、小田氏らによる野添大浦編年をほぼ踏襲する。蓋杯においては、蓋の形状が比較的大きめで天井部と体部の境が明瞭なものをⅢA期、天井部と体部の境が完全になくなり、かつ口径も小さくなりへラケズリ等技法が粗くなるものをⅣ期、その中間的なものをⅢB期とするが、ⅢB期とⅣ期の境目の須恵器はどちらか見分けにくい。そして、新たな蓋杯(奈良文化財研究所で杯Gと分類するもの)が主体となるものをⅤ期とする。Ⅳ期は後述のように細分する。

最初にⅢA期について述べる。牛頸窯跡群で最古とされるⅢA期に属する須恵器を焼成した窯跡は1969(昭和44)年調査の野添第6号窯跡以降発掘調査することはなかったが、36年後になる

2005年(平成17年度)に上大利北土地区画整理事業地内本堂遺跡14次発掘調査でその機会があった。位置としては野添第6号窯跡と同じ丘陵に面していて、500mほど東(平野)よりである。本市教育委員会が1987年に刊行した『野添窯跡群』の「II位置と環境」で、県立春日高校郷土史研究部員がIII A期の須恵器を表採したことから、当該期の窯の存在を確実視していたまさにその窯跡であると考えられる。窯本体は既に削平されて完全になくなっていて灰原のみ残った状態であったが、そこから同時期の須恵器が出土した。最もこの灰原からは奈良時代の須恵器も見つかっており、III A期の窯跡1 基だけがあったのかは不明であることから、出土須恵器の共伴関係も断定できない弱点がある。また、現在報告書の刊行をめざし整理中であるため詳細は今後判明することになる。しかし、出土須恵器には短脚気味の高杯や長脚一段透かしの高杯などがあり、野添第6号窯跡より古い様相を持つ須恵器も見かけられるようである。これをIII A期内に収めるか、II 期にするか問題があるが、牛頸窯跡群で最古の窯跡の可能性があると考えられる。しかし、断定は報告書の刊行後に行うこととして、ここでは一応III A期内に収めて考えておく。当該時期の窯跡の発掘調査例が少ないのは、やはり牛頸窯跡群開窯期に当たり、基本的に操業された窯の基数が少なかったことを物語るものであろう。

さて、このようなことから、牛頸窯跡群開窯期と考えられるⅢA期の須恵器は野添第6号窯跡出土須恵器でしか語れないことになる。小田氏らは、器種によって古式の特徴が長く残存しているものと、新しい傾向への変化をみせているものがあるものとする。前者では蓋杯や聴、後者では高杯・小形の甕で、高杯の長脚二段透かしはⅢ期後半に比定される日拝塚古墳からも出土しているが、6号窯跡出土資料では脚端がさまざまに変化した形態がある。八女窯跡群でも見られ、この時期の一般的傾向であろう、蓋杯では、ほとんどの場合内面に同心円タタキを有している。ただし、丁寧に消したものとそうでないものがある。外面のヘラケズリは比較的入念に行われているが、その際に生じる砂粒の回転走行は左右ともあるが、左回転の方がはるかに高いようだ。その他、この時期に横瓶が生産された形跡がある、他に有蓋壺と甑があるとされた。

これについては変更する必要がないと考える。

①蓋杯の蓋は沈線を廻らすものから、それが消滅し天井部と体部が一体化してしまうものへと変化すること、

- ② 聴は頸部が伸びて文様を廻らすものから、文様を施さないものへと変化すること、
- ③大甕頸部の文様は波状文から、斜線文へと変化すること、
- ④無蓋高杯杯部外面には刺突文が見られること、

次にN期の須恵器について検討したい。野添大浦編年では大浦1号窯跡出土須恵器を当該期の須 恵器としている。蓋杯の大小が時期差としてとらえられ、NA・NBの2小期に分けている(本文) では蓋の場合の大小は13cmと11cmぐらいとされる)。しかし、中通窯跡群の発掘調査では、出土須 恵器の口径の変化は漸移的であって明確に2つのグループに分けるのは困難であった。中通窯跡群 以外でも資料数が増えるに従って口径12cm前後の蓋も多くなった。このことは当該期を細分しな い方が良いという考え方と、2小期を口径によって11cm、12cm、13cm前後を中心にして3小期程 度にさらに細分した方が良いのではという相反する考え方ができることになる。小田氏は2004(平 成16) 年7月4日に北九州市で行われた古文化研究会の須恵器基礎講座第3回で、N期を3小期に 分けた方が良いと考えていると話された〈註3〉。従来のNA期をNA・NB期に細分し、従来の NB期をNC期にするという考え方である。中通窯跡群の発掘調査成果で想定した3小期案はこの 考えに合致する。しかし、当該期の牛頸窯跡群出土須恵器を口径で3小期に分けようとすると機械 的には可能であるが、実際にはかなり困難である。1基の窯跡を調査して蓋杯類を計測すると口径 が2~3cm程度違う場合が比較的多くある。これら大きさの違う須恵器を時期差ととらえることも 方法的に間違っていない。しかし、1つの窯跡で操業面が多く見られた場合でも、最終床面出土須 恵器と操業時床面出土須恵器の口径が理屈どおりにならないこともあるし、口径順に並べて見ても ヘラケズリ等技法の粗略化と合わない場合も出てくる〈註4〉。これらのことから、筆者は法量に ついてはあまり厳密に考えない方が良いのではと思っている。つまり、古墳時代の蓋杯は基本的に は1法量であると考えられているが、実際は口径が1cm程度あるいはそれをやや超える誤差をもっ て作られる場合もあったのではと考えている。さらに許されるなら、当該期は小型化や技法の粗略 化が進む時期と言われているが、それなら法量もそれほど厳密ではなかったのではと言って良いの ではないだろうか。発掘調査の結果は、むしろそれが当該期の1つの特徴と考えて良いことを示し ているのではないかと思う。もちろん相対的には蓋杯をはじめとして小型化の傾向は間違いなく続 くと考える〈註5〉。

ではIV期の細分についてどう考えたら良いだろうか。高杯や腿など器種ごとに見ると小型化が進むと同時に、各部位のシャープさが失われていくことがわかる。たとえば、高杯の場合は脚端部がきちんと端面を持つものから持たずにそのまま終わる状態になり、腿の場合は口頸部の段がなくなってラッパ状に開くだけになるなどの現象が見られる。これらから、将来3小期に分けることを考えながらも、今回は比較的分類しやすいという観点から、法量、シャープさそしてヘラケズリ等の技法から、IV期を2小期に分ける案を提示する。ただし、すべての器種を2期に分けることは難しい。以上のことから、IV期はIVA期とIVB期に分けることとする。結論的には今までと変わらないが、分ける考え方を法量を考慮しながらも技法とシャープさをより重視したことになる。

他にこの期で考えなければならない重要なことは、いわゆる新しい杯の出現についてである。従来からあった杯身に立ち上がりのある丸い合子形の蓋杯(杯日)に対し、立ち上がりがない身に身受けのかえりを持つ蓋からなるタイプのもの(杯G)が現われる。牛頸窯跡群出土須恵器ではつまみのない蓋があることから、近畿地方の土器分類に完全に合致するものではないが、おおむね該当するとして良いと考える。このタイプの杯は野添大浦編年ではV期に置かれているが、Ⅳ期の後半には出現すると考えられていたものである。小田浦40-I号窯跡から従来の蓋杯と同時に焼成されている一群が見つかり、この考え方が正しいことが証明された。出現の詳細な時期については、まだ不明瞭な点もあるが、小田浦40-I号窯跡で共伴した従来の蓋杯は口径が比較的大きいのに対して、ヘラケズリがなされているものと、省略されているものがあった。出現当初のものは身の場合まだ全体に丸みを持つが、その後角張って箱形になっていく。小田浦40-I号窯跡出土須恵器を編年上どこへ位置付けるかは問題であるが、ここではNB期の前半頃としておきたい。

この蓋杯(杯G)と従来の蓋杯(杯H)が同時に焼成される場合、前者の量が少ないことがこの時期の特徴としてあげられる。正確な数値は出せないが、1割を超えることはないと思われる〈註 6〉。

また、IV期を考える上で重要なことの1つに蓋杯におけるいわゆる逆転現象があげられる。小田氏は『天観寺山窯跡群』の中の向野山窯跡群A窯で22セットの蓋杯を発見し、半分の11セットが従来の蓋杯と逆の状態で置かれていたことから、これらを逆転現象の初源期と考えられた。牛頸窯跡群の場合は前述した小田浦40-I号窯跡で取残されたようにして杯H12セットと杯G7セットが見つかったが、杯H12セットの内正位で置かれたもの3セット、逆転したもの9セットであった。また、杯Gはすべて正位であった(第14図)。杯Hは正位のものでも、逆転して置かれていたものでも、法量的にはほとんど差がなかった。技法的に見ると、正位に置かれた3セットのうち蓋と身両者がヘラケズリされていたものは2セット、両者ともにあるいはどちらかがヘラケズリされていないものは1セット、逆転していたもの9セットのうち前者が4セット、後者が5セットという内容であった。取上げれば、正位のものでも逆転していたものでも見分けはつかない。後田65-I号窯跡でも蓋杯3セットと短頸壺1個が最終床面から一括して見つかった。蓋杯はやや動いた形跡もありはっきりしないが、正位のもの1セット、逆転したもの2セットであった。これらも見分けはつかない。以上のことから、焼成時にどちらが蓋か、どちらが身かということを厳密に意識して

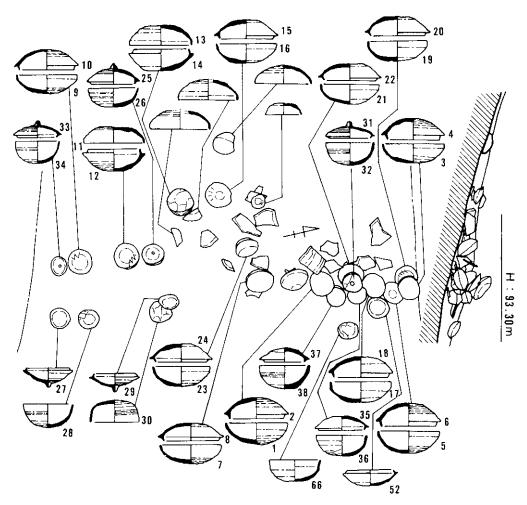
いたかはなかなかわからない。

V期については、期の設定自体が可能かという意見や、あっても短期間であろうと考えられてきた。牛頸窯跡群では後田窯跡群60-I号窯跡でほぼその単純期と見て良い須恵器群が見つかり、大浦2号窯跡須恵器に加えて資料が増え、期の設定は妥当と考えて良いと思う。V期はそれまで長く作られてきた古墳時代の杯蓋(杯H)が消滅し新しいタイプの杯蓋(杯G)が主流になる。言い換えれば、窯跡からの杯Gの出方として、IV期では杯Hに比べかなり少量であったものが、V期では基本的にほぼそれだけになるということが言える。また、当期の特徴として、器種も少なくなり、あってもたとえば高杯などは前後の時期と比較しても最も小さく、脚端部などが極めて雑に仕上げられる時期として設定できる。

(ii) 7世紀後半から閉窯期(9世紀前半頃) まで

a. 今までの編年案

7世紀後半以降は野添大浦編年では扱われていない。調査例がなかったためである。しかし、小田氏らは筑後の八女窯跡群や豊前の天観寺山窯跡群でⅥ期を設定している。通常この成果を牛頸窯跡群でも準用している。八女窯跡群では小田氏らはⅥ期をA・B・Cの3小期に分けている。Ⅵ期



第14図 小田浦40 - I 号窯跡遺物出土状態実測図 (1/20、遺物1/8) (『牛頸小田浦窯跡群』1992より)

は外側に張り出した付け高台の出現で特徴づけられる。歴史時代に普遍的になる蓋付椀の出現の時期として重要であるとする。小田氏は高台の付くものを椀と表現し、高台付の杯とは言わない。しかし、筆者は今までの報告書で高台付杯と表現してきたため、ここでも杯としておきたい。

小期は蓋にあるかえりが退化することと、つまみが扁平になることからA式とB式を考え、さらにかえりがなくなり、椀の高台がはねあがらず下端面が完全に接地するようになるC式を考え、A \to B \to C と変遷するとした。ただし、『天観寺山窯跡群』付図6の豊前地域古窯跡出土須恵器編年図では小期の設定はされておらず、かえりのあるものとないものを別系統として両者並存する時期が示されている。

WI・WI期も天観寺山窯跡群で編年表が発表され、その考え方が準用されている。WI期はトギバ窯跡出土須恵器が該当し、上層と下層があることから2時期あると考えられた。椀の蓋にかえりはなく、高台は前代に比べ短い。薬壺形の壺、皿、盤、片口状鉢、瓶などが出現する。2007年福岡大学考古学研究室から『豊前・トギバ窯跡の調査』が刊行され、詳細な分析によって8世紀後半から9世紀にかけての窯跡であると報告された。

牛頸窯跡群の当該期の須恵器の変遷については、前述のとおり森田氏と川述氏が『牛頸窯跡群Ⅱ』の結語でⅠ~Ⅳ期に分けている。

I期は蓋杯の蓋はかえりを持ち、身は体部はやや内湾気味に伸び、器高は大である。底部と体部の境は明瞭ではなく、丸味を持ち、底端部より少し内側に高台が付く。7世紀後半(670年以降)のものである。

II 期の蓋杯では、蓋のつまみが扁平なボタン状である。身はほぼ直線状に伸び、底部と体部の境は丸く、短い断面四角形の高台が底端部よりやや内側に付けられている。他に短頸壺や長頸壺、鉄鉢などがある。8世紀前半のものである。

Ⅲ期の蓋杯では、蓋に付くつまみが扁平なボタン状のものであり、頂部は水平かわずかに尖る。 身は底部と体部が明瞭なものや高台が底端部に付けられるものが現れる。 8世紀中頃のものである。

N期は井手24号窯跡出土品に好資料がある。蓋杯の蓋の端部は退化している。身は底部と体部の境が明瞭となり、高台が底端部に付けられるが、新しいものは体部と高台が一体化したような形態になる。8世紀後半から9世紀初頭頃のものである。

一方、この時期は消費地である大宰府史跡出土土器が森田氏〈註8〉や山本氏〈註9〉によって編年されている。森田氏による標式遺構を使用した編年、山本氏による型式分類による編年がよく知られている。山本氏は7世紀後半を I 期(大宰府政庁跡第 1 次整地層出土土器を標式)、8世紀初頭~前半を II 期(大宰府政庁跡中・南門基壇出土長短頸壷を標式)、8世紀前半を II 期(8 K 1280・1285を標式)、8世紀後半を V 期(8 E 1081、8 K 1084を標式)、8世紀後半~9世紀初頭を VI期(8 E 1340、筑前国分寺 S K 053を標式)、9世紀初頭前後を VII期(8 E 400を標式)とした。生産地より細かな編年となっている。木簡等が共伴することもあり、窯跡出土須恵器の編年に際しても充分に参考にしなければならない。もちろん大宰府という役所の性格

上、出土須恵器がすべて牛頸産とは限らないことから注意が必要である。

生産地である牛頸窯跡群における森田・川述編年と、消費地である大宰府における山本編年等を 合わせて、舟山が研究会資料で当時期の編年を述べたことがある〈註10〉。

また、最近石木が牛頸窯跡群だけではなく、当該時期の九州全体の須恵器生産体制について述べたが、その中で出土須恵器の時期設定を行っている〈註11〉。

b. 本書での考え方

これらを受けVI期以降については次のように考える。IV期に現れ、V期に主流になった蓋杯(杯G)以外に、新たに高台付きの杯身(杯B)が出現する。蓋に付くかえりは明瞭なものと退化したものがあり、ついにはなくなって口縁部を折り曲げた形態になる。小田氏らは八女窯跡群ではこれらを3小期に分け、天観寺山窯跡群では分けなかったことは前述した。かえりのある蓋とない蓋は窯跡からは良く共に出る。しかし、牛頸窯跡群の井手窯跡群X地点では、3基の窯跡が見つかり、3号窯跡からはかえりがある大き目の蓋とかえりのない小さ目の蓋が出土し、その窯跡を切って造られた2号窯跡からはかえりのない蓋ばかりの須恵器群が出土している。そして、2・3号窯跡のそばに造られた1号窯跡からもかえりのない蓋ばかりが見つかり、かつその形態から2号窯跡出土須恵器より古いと考えられた。すなわち、窯跡の切りあいと須恵器の形態から3号窯跡→1号窯跡→2号窯跡の順が推定された。このことからかえりのある時期とない時期をわけることが可能と判断される。かえりのあるなしは視覚的に大きな違いであることから、本書では両者の時期を分けて考えたい。また、いわゆる法量分化の観点から、井手3号窯跡出土蓋杯の大小をその端緒と考え、小形の杯蓋が早くかえりを消失したものと見られる。以上から、かえりのあるものをVI期に、ないものをVII期にしたい。ただし、両者が共伴する窯跡も多く、機械的に分けていいか疑問も残る。

Ⅷ期は消費地で編年の細分が進んでいる大宰府出土土器の編年を参考にすべきと考える。原則的には生産地と消費地の土器編年はそれぞれ行うべきであろうが、大宰府史跡関連遺跡から出土する須恵器は牛頸窯跡群以外の窯で焼かれたものも含まれるが、平城京のように陶邑産を中心にしながらも日本各地から運ばれたものではなく、多くが牛頸産として良いと考えられること、大宰府史跡関連遺跡出土須恵器の場合は一括遺物として良い出土状況もあり、さらに木簡と伴ったり、実年代を推測できる場合もあることなどから、大宰府の編年を参考にすることは問題がなく、かつ有意義と考える。しかし、現段階では窯跡出土須恵器を4~5小期に分けることはやや無理があり、ⅦA~ⅧB期の2小期の設定を行い、可能な部分について古相と新相を分けたい。この結果次のⅧ期を含めると、前述した森田・川述編年案と同じような時期設定となるが、土器様相は後述する。

なお、7世紀後半以降は窯が大変小型になり、器種の焼き分けも見られることから、1つのの窯跡で同時期の器種がなかなかそろわない場合が多くなる。従って、今まで以上に同じ時期と考えられる複数の窯跡出土遺物で論じなければならなくなる。

(2)編年案

Ⅲ A期

野添6号窯出土須恵器の多くを標式とする(第15図)。蓋杯の場合、大きめで深い。蓋は口径が14cmを超えるものもあるが、13cm台のものもある。陶邑のように15cmを超えるような大きいものは多くない。両窯跡群の違いである。蓋には体部と天井部の境に段または沈線を持ち、口縁端部には段を持つ。ただし、退化して痕跡的になっているものもある。杯身は立ち上がりが内傾するが1cmを超え、かつ口縁端部に古式の段を持つものが多い。段は退化したものや、消滅したものもある。蓋よりも身のほうが早く段が消滅する傾向にある。身も最大径が15cmを超えるものは少ない。また、蓋・身ともに内面に同心円の当て具痕が観察される場合が多い。蓋に見える段を持つものと沈線を持つもの、杯身に見える口縁端部の段の明瞭さと退化したものがそれぞれ古い様相と新しい様相を示す。

高杯には有蓋高杯と無蓋高杯がある。有蓋高杯は大小2種類があって、大形は最大径17.4cmで立ち上がりは高く、口唇内面には古式の特徴を持つ。底部内面には当て具痕を有する。小形のものは最大径14cmを測り口縁端部には段がない。いずれも体部下半に2~4条の沈線を巡らす。蓋は天井部と体部の境は沈線状になる。口縁部内面に細い沈線が入る。天井部外面はカキメ整形した後櫛状施文具による刺突文が二重に廻らされている。内面には当て具痕が部分的に残る。

無蓋高杯杯部は全体に丸みを持ち、口縁部が外側に向かって開く。底部外面に刺突文を持つ。

有蓋か無蓋か断定できないが、脚部のみの破片にも大小がある。透孔は1段と2段がある。大形には千鳥式に方形と三角形の透孔を上下2段に入れ、波状文を施すものがある。透孔は基本的には 貫通させている。

高杯の蓋は中央が窪んだつまみが付き、蓋杯と同様天井部と体部の境に沈線を持ち、口縁端部は 沈線等を廻らす。天井部に刺突文を施すものが見られる。

聴は口頸部径が胴部径より大きいもので、口唇部には段を有する。頸部には波状文を施し、胴部には沈線に画された部分に刺突文を廻らすものである。胴部との接合部分の頸部径は後の時期のものに比べやや太い。

壺にはいくつかの種類があるが、短頸壺はほぼ直立した短い口頸部をもつ壺で、胴部との境が明瞭なものと不明瞭なものがある。また、大小がある。小形には胴部上位に沈線を廻らし、その下に刺突文を廻らせるものがある。また、破片ながらやや頸の長い壺と広口壺がある。広口壺は刺突文などが施されている。

鉢は底部が欠けていて全形が不明であるが、通常すり鉢と呼んでいる器種で、外側に開き、口縁端部を外に折り曲げるようなものと、平坦面を作って終わるものの違いがある。

横瓶の破片もあるが、破片のため詳細は不明である。

提瓶は肩部に把手の痕跡を持つものであるが、痕跡がそれぞれ1つであることから環状にはならず、ゆるやかな鍵状のものになるだろう。

器台は脚のみが報告されている。『野添大浦窯跡群』では、脚裾が直線的であることから高杯形ではなく、筒状の器台と想定されている。

甕は大小があるが、大甕の場合沈線により上下3区画に分け、上の2段に波状文を施している。

ШВ期

野添 9 号窯跡、同12号窯跡、惣利 1 号窯跡出土須恵器の多くがこの期のものと考える (第16 ~ 18図)。

蓋杯の蓋の場合、口径はまれに14cmを超えるものがあるが、多くは13cm台である。天井部と体部の境に痕跡的に沈線を持つものと、消滅して一体化しているものがある。口縁端部の古式の特徴は失われて丸く終わっている。天井部内面に当て具痕の見られるものもある。天井部と体部の境に沈線を持つもの、内面に当て具痕を持つものを古い様相と見てよい。

杯の場合は立ち上がりが比較的高く、基部から先端まで細いものが多い。内面には当て具痕を有するものもある。後の時期にはこの当て具痕が見られないことから、見られるものを古相と考えて良い。

高杯には有蓋と無蓋があり、有蓋高杯の杯部は蓋杯杯身と同様であるが、蓋杯より立ち上がりが 高い傾向にある。脚は長脚2段透しが主流になるが、透しが貫通しない場合もある。

無蓋高杯の場合の杯部は浅めの感じを持たせ、やや角張るものが多い。そして、外面下部に刺突 文など文様を持つものも多い。文様はⅣ期には基本的には見られなくなるものと思われる。

V期に主流になる杯に似ていて我々が椀と呼んでいる器種が登場してくるのもこの頃であろう。 口径や器高にバラエティーがあり、体部に沈線を施す場合が多い。

大甕の頸部は前代では波状文が施されたが、IV期以降はヘラによる連続斜線文が施されるようになる。当期はその中間に当たり両者が見られる。従って、波状文を施すのが古相で、斜線文を施すのが新相と見て良いだろう。野添12号窯跡や惣利1号窯跡で両者が出土している。

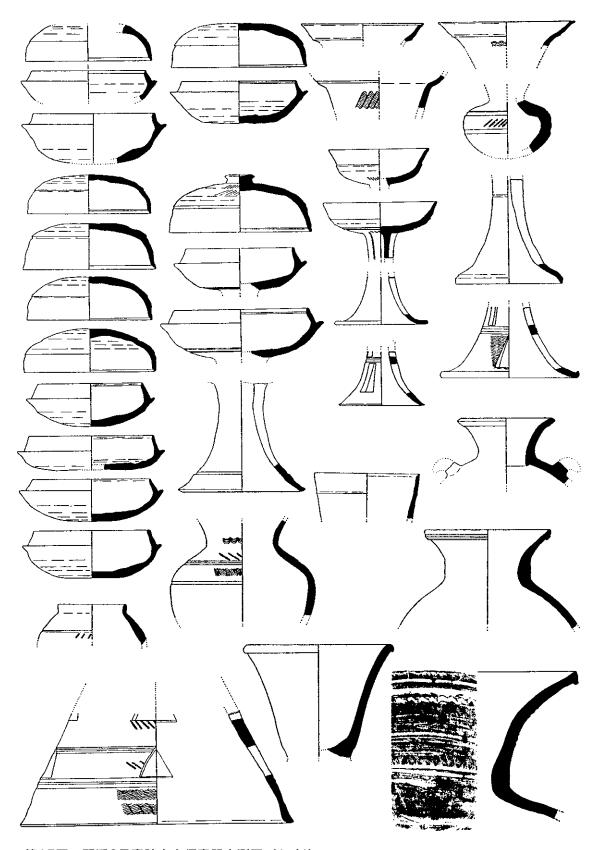
NA期

小田浦33-1号窯跡、後田45-I号窯跡、後田63-I号窯跡、平田D窯跡出土須恵器の多くをこの期のものと考える(第19~21図)。

蓋杯の蓋は天井部と体部の境はなくなり、丸みを持って一体化したものばかりとなる。口径が前代より小さめとなり、器高も低くなる。また、体部が丸みを持つものばかりではなく、天井部から一旦窪んで口縁部に至るものもある。これは、ヘラケズリが粗くなり、天井部の厚さが厚いものが見られることと連動しているように思う。口径は12~13.5cmぐらいのものが多い。杯の立ち上がりは1cmに満たないが、基部から先端まで厚味があまり変わらなく細身のものが多い。

平田F-1号窯跡の蓋の場合、口径は12cm台後半から14cmまでと大きめであるが、器高が比較 的低く扁平な感じをもたせるもので、他の窯跡出土須恵器と比べても特異である。

高杯は有蓋と無蓋の両者あるが、脚部の透孔が貫通しないものが多くなる。有蓋高杯には通常の脚部を持つものと、脚部が途中で段を持つものがある。蓋のつまみは中央がやや窪む。天井部や杯部底部にカキメを施すものがある。無蓋高杯の場合は杯部が角張るものもあるが、全体に丸みを帯



第15図 野添6号窯跡出土須恵器実測図 (1/4) (『野添・大浦窯跡群』1970、『須恵器集成図録』第5巻 1996より)

びるものが多くなる。脚端部は基本的にシャープに作られている。

聴は、口径と器高が前代の末期に最大になった後、徐々に小さくなっていく。胴部の底部が平坦 になってやや押しつぶされたようになり、前代に比較して扁平さを感じさせるようになる。

壺は、後田63-I号窯跡の場合脚付きの短頸壺が、小田浦38-I号窯跡では脚付の長頸壺が出土している。後者では短頸壺が多く出土しているが、丸みのあるもの、やや扁平なものの両者がある。

椀はこの時期も底部の丸いもの、やや平坦のものなどがあり、形は一定していない。後田63− Ⅰ号窯跡で高台付きの椀が出土しているが、Ⅵ期以降に普通になる高台付きの杯の先がけになるも のかは断言できない。

提瓶は小田浦33- I 号窯跡で肩部に鍵形の退化した把手が付いたものが見つかっている。

蓋の中で全体に扁平で口縁部を外側に少し跳ね上げたような形態のものが小田浦37-I号窯跡と38-I号窯跡で見つかっている。時期的にも場所的にも限定されたものかもしれない。

甕の場合、特に大甕の口頸部に付けられる文様はすべてへラによる連続斜線文のみである。2段にわたって施すものもあるが、小田浦37-I号窯跡では、上下に沈線を巡らせた間に長めに1段施した後に、上下の沈線の途中にもう一本沈線を廻らすことによって、あたかも当初から2段に分けて斜線文を施したように見せているものもある。この時期は技法等が粗略化していく時期として捉えられているが、その流れに沿った施文方法と言える。

他に小田浦38- I 号窯跡から金属器写しと思われる高台付きの椀(杯)が出土している。

IVB期

月ノ浦 I 号窯跡、後田46-I 号窯跡、中通 D-2号窯跡、中通 A-2号窯跡、神ノ前 1 号窯跡出 土須恵器などの多くが該当すると考える(第22 ~ 25図)。

蓋杯は口径が11cm台から13cmであるが相対的に前代より小さめとなり、ヘラケズリも粗略になるか、まったく行わないものもある。しかし、行わなくてもナデ等によって整える。新しいタイプである蓋杯(杯G)がかなり普遍的に含まれるようになるが、従前の蓋杯(杯H)に比べ比率は低い。せいぜい1割以内と思われる。

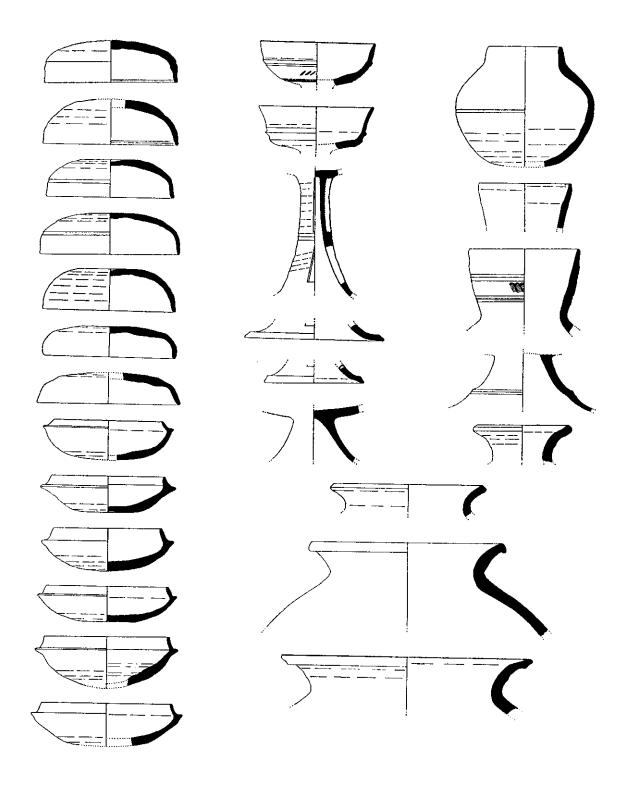
腿は口頸部の段が不明瞭になり、消滅してラッパ状に開くだけのものが現れる。

壺は短頸壺が多いが、変化がとらえにくい。また、出土数が少ないのは製品も少ないことを示す ものであろう。神ノ前1号窯跡では長頸壺が出土している。中通A-2号窯跡でも長頸壺そのもの は出土していないが、蓋と思われるものが見つかっている。この時期の長頸壺は後代に比べてそれ ほど頸部が長くない惣利9号窯跡出土品のように脚の付くものを想定している。

椀は前代同様やはり大きさも細部も違う多様なものが出土している。

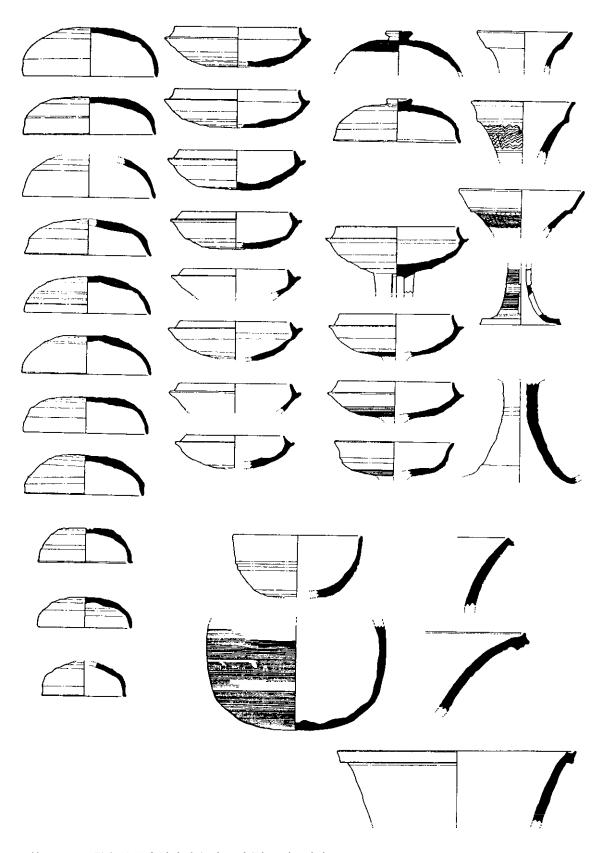
提瓶は出土例は多くないが、胴部肩部の取っ手が退化して瘤状になったものが神ノ前1号窯跡で出土している。口縁端部に突帯を廻らすか肥厚させている。普遍的ではないが、平瓶の口縁部と見分ける際の目安の1つと考えて良いだろう。

平瓶も決して多くないが、出土している。しかし、前代との違いを明確にすることはできない。

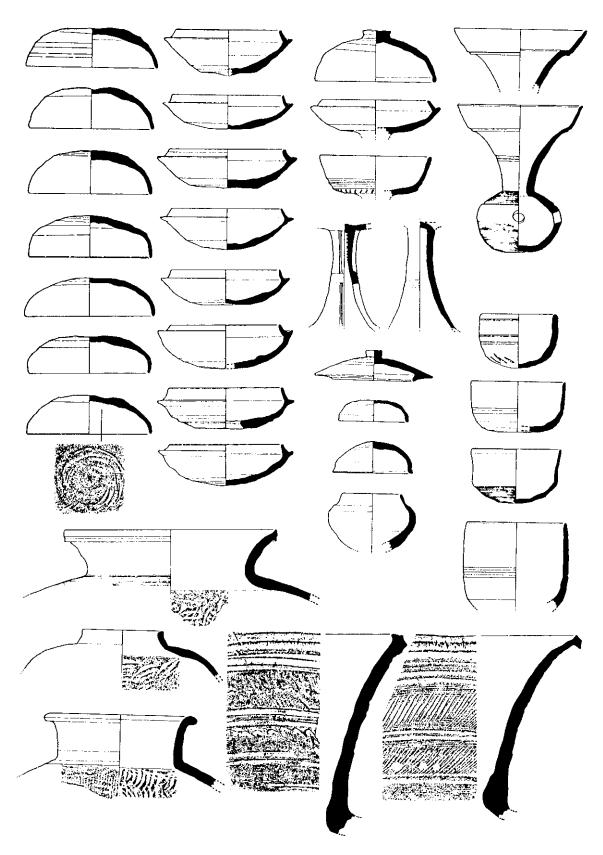


第16図 野添9号窯跡出土須恵器実測図(1/4)

(『野添・大浦窯跡群』1970、『須恵器集成図録』第5巻 1996より)



第17図 野添12号窯跡出土須恵器実測図 (1/4) (『野添窯跡群』1987、『須恵器集成図録』第5巻 1996より)



第18図 **惣利1号窯跡出土須恵器実測図(1/4)** (『春日地区遺跡群』I 1982、『須恵器集成図録』第5巻 1996より)

前代のものも含めて、胴部の片寄った位置に頸部が付くが、頸部の主軸が斜めのものより垂直方向 のものが多いようだ。

甕特に大甕の口頸部にはやはりへラによる連続斜線文が付けられるが。中通D-1号・D-2号 窓跡では、ヘラによって粗い単線の波状文が付けられたものが混ざるが、次期のものか。

他に小田浦46-I号窯跡からは金属器写しと思われる高台付きの椀(杯)とその蓋が見つかっている。前代と考えた小田浦38-I号窯跡出土のものとともに、後の杯Bの先行形態であろうか。

V期

大浦2号窯跡に加えて小田浦50-I号窯跡、後田60-I号窯跡出土須恵器を標式とする。従前からの蓋杯(杯H)が基本的に姿を消す時期である(第26・27図)。また、器種も減少する。

蓋杯は最小となり、小田浦50-I号窯跡の蓋の場合ほとんどが11cm以下、中には9.2cmというのもある。つまみの付くものと付かないものがあり、前者は天井部をヘラケズリするが、後者はヘラ切り後ナデるだけである。ただし、つまみの付かないものは身と考えるものが丸みを持ち、蓋とするか杯とするか迷うものが多い。後田60-I号窯跡の場合は丸みのある杯が減少し、角張るものが多くなる。小田浦50-I号窯跡より後出するものであろう。ただし、蓋杯は最も小型化した後に徐々に大型化するが、それらをV期の新しい様相とするか、VI期に入れるか迷うところである。高杯はおそらく有蓋がなくなり、無蓋のものだけになると思われる。小型化が進みすべての時期に比べて最小になる。ほとんどの脚先端部が極めて雑な仕上げとなる。

腿は極めて少ないと考えられるが、平田E-1号窯跡出土品のように刺突文も持たず、孔が上向きに付けられたようなものが該当するかもしれない。

壺は小田浦50-I号窯跡で出土しているが、口が比較的広く開いた形である。また、後田60-I号窯跡では口頸部と胴部の境が不明瞭な短頸壺が出土している。

甕は大甕もあるが、頸部に斜線文が付けられていない。

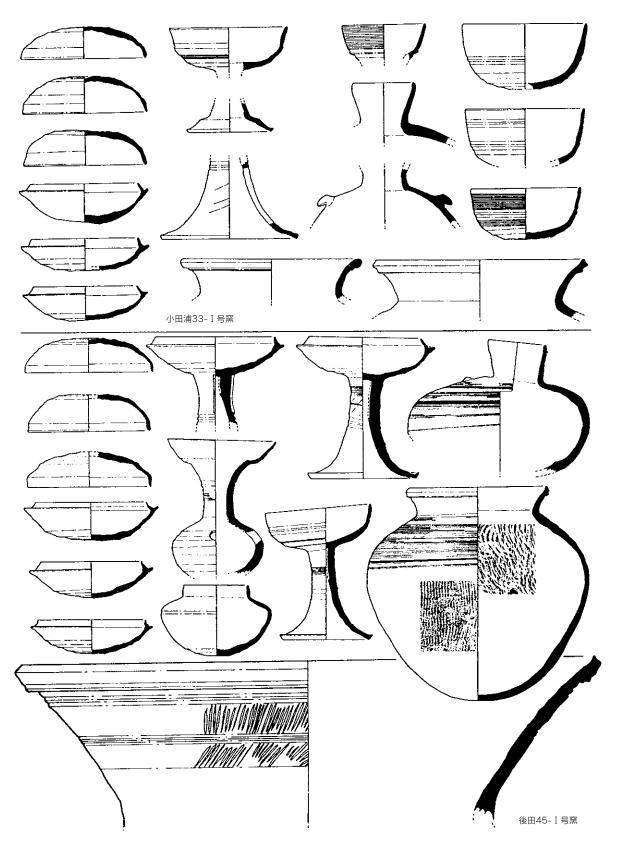
他に平瓶が作られた可能性はあるが、他の器種は不明である。

川期

高台の付いた蓋杯 (杯B) が出現すると同時に、従来の蓋杯 (杯H) は消滅している時期と考えられる時期である。

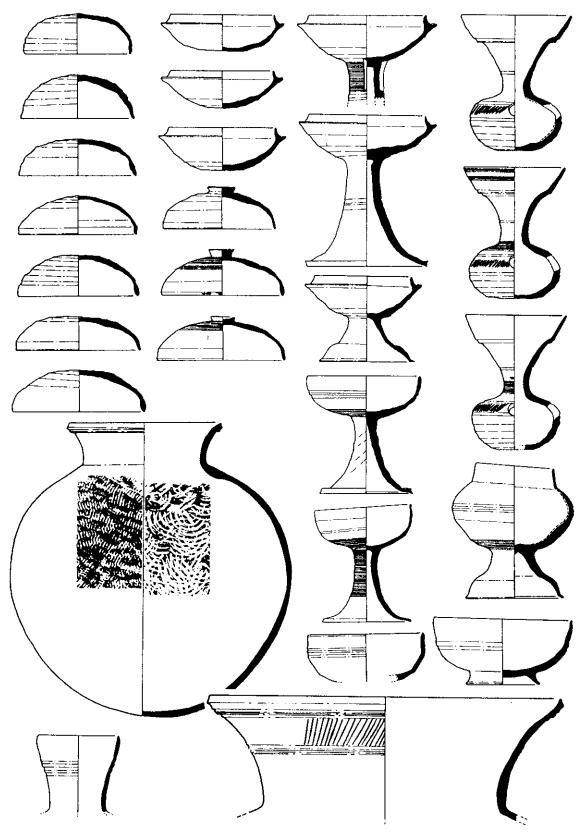
蓋杯の杯には高台が付けられ、蓋には見受けのかえりがある。口径は前代に比べ大きくなる。杯は次の時期に比べやや浅く体部中位で屈曲するものが多い。また高台は高い。ただし、出現期のものと思われるものは、形態が一定しておらず、角張ってやや深いものや丸みのあるもの(平田E-1号窯跡)、体部が外に向かって開くもの(宮ノ本4号窯跡)、口縁部がやや屈曲気味に外反するもの(浦ノ原4号窯跡)などがあるが、高台が高く外側に大きく開いているのが共通している。この期の終わり頃から次期にかけて体部の屈曲がなくなり外方に直線的に開くタイプの杯が現れる。後代に比べ高台の高さと外側への踏ん張り方が強い。

蓋はほとんどにつまみが付くが、付かないものも少しある。つまみは高いが、形態的にはやや押しつぶしたような低い宝珠形と言える。あるいはシャープさが失われ丸みを帯びたものもある。かえりは体部より下方に出るものもあるが、体部に収まるものが多い。型式的には前者が後者より古



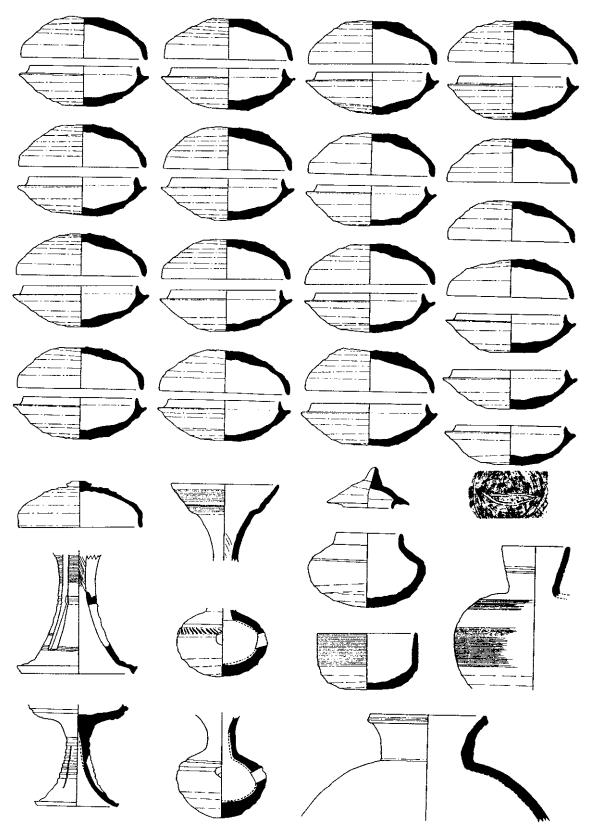
第19図 小田浦33 - I 号、後田45 - I 号窯跡出土須恵器実測図(1/4) (『牛頸小田浦窯跡群』1992・『牛頸後田窯跡群』1991、『須恵器集成図録』第5巻 1996より)

- 57 -



第20図 後田63 - I 号窯跡出土須恵器実測図 (1/4) (『牛頸後田窯跡群』1991、『須恵器集成図録』第5巻 1996より)

- 58 -



第21図 平田D号窯跡出土須恵器実測図(1/4) (『牛頸平田窯跡-D地点-』1980、『須恵器集成図録』第5巻 1996より)

- 59 -

いと言える。出現期のものと考えた前記3基の窯跡出土須恵器ではおおむねかえりが体部より下方 に出ることより、そのような変化の流れはあると考えて良いだろう。

また、蓋杯は口径15~16cmほどのものが多いが、12cm程度のものが含まれる。奈良時代に見られる法量分化がこの時期から始まったと考えられる。まず小型のものが現れたと見られる。

高台の付かない杯(杯A)もあるが、比率は非常に低い。形態的には高台付きの杯と比べ体部があまり外側に開かない。

高杯は高台の付かない杯に脚を付けた形である。杯部口径に比較して脚部径は小さくて高さも低い。大小がある(小田浦61地点灰原)。

皿はこの時期から現れる。大きさにバラエティーがある。

平瓶も引き続き作られる。古墳時代のものと形態的な違いはあまり感じられないが、底部の平坦 部分が広くなる感じがある。

横瓶は少ないが、後田66-I号窯跡灰原の下で検出されたSK01から平瓶とともに出土したものはこの時期のものと考える(第28図)。

長頸壺は後代に比べて頸部の長さが短めと考える。また、胴部はまだ丸みを持つものと稜の付く ものがある (太宰府市篠振窯跡群)。篠振窯跡群出土品には肩部に浅い櫛描波状文が付けられてい る (第28図)。

甕については、出土数が比較的少ないと思われるが、大甕の頸部には粗い波状文が施されたものがある。前代に見られたヘラによる連続斜線文は見られないようだ。

なお、大宰府関連遺跡の場合、この期に当たる時期のものとしてSX2480出土須恵器があげられる。

WIA期

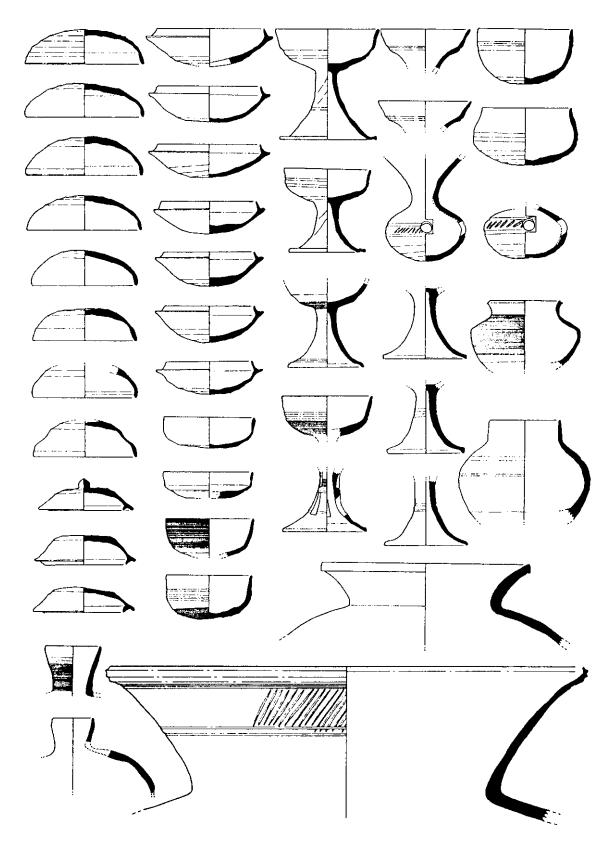
蓋杯の蓋のかえりが消滅し、端部を下方に折り曲げる形態に変わった時期と考える。

蓋のつまみが大きく杯の器高が高い古相と、つまみが扁平な(押しつぶしたような付け方でつまみにくい)蓋と器高が低くなる新相を考えたい。井手1号窯跡(大野城市調査分)(第30図)、後田61-II号窯跡出土須恵器などが古相として、また、太宰府市に属する宮ノ本9号窯跡出土須恵器(第31図)を次の段階のものと考える。

古相の場合、前述のように蓋杯の蓋に付くつまみは前代に引き続き、中央部が尖る低い宝珠形を呈するものと、中心部がやや尖るボタン状を呈するものがある。つまみの径が大きいのが特徴で、3cmほどのものがある。天井部はヘラケズリする。杯は体部が直線的に外方へ開き口縁端部がやや外反し、器高は高い。高台は高く外側に踏ん張るが、前代に比べ高さも踏ん張りの程度もやや弱くなる。

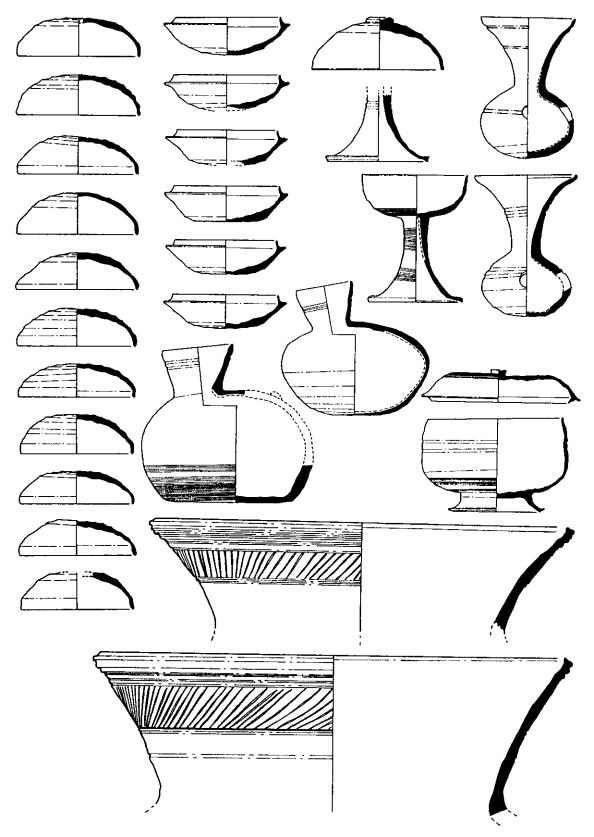
新相の場合は杯の器高がやや低くなり、蓋のつまみが極端に扁平で実際にはつまめないようなものがある。

高杯は前代と似た形態を示し、見分けがつきにくい。しかし、この時期には後代に主流となる体部がほぼ垂直に立ち上がるタイプのものも出現したと考える(井手6号窯跡東一括土器)。さらに垂直に立ち上がらずゆるやかに湾曲しながら外に開くタイプの杯部を持つものもある。



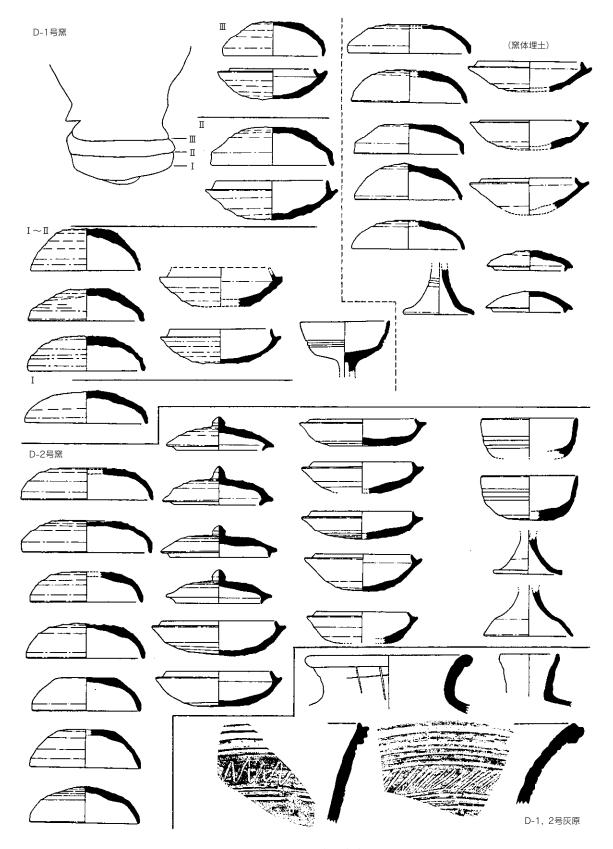
第22図 月ノ浦 I 号窯跡出土須恵器実測図(1/4) (『牛頸月ノ浦窯跡群』1993、『須恵器集成図録』第5巻 1996より)

- 61 -



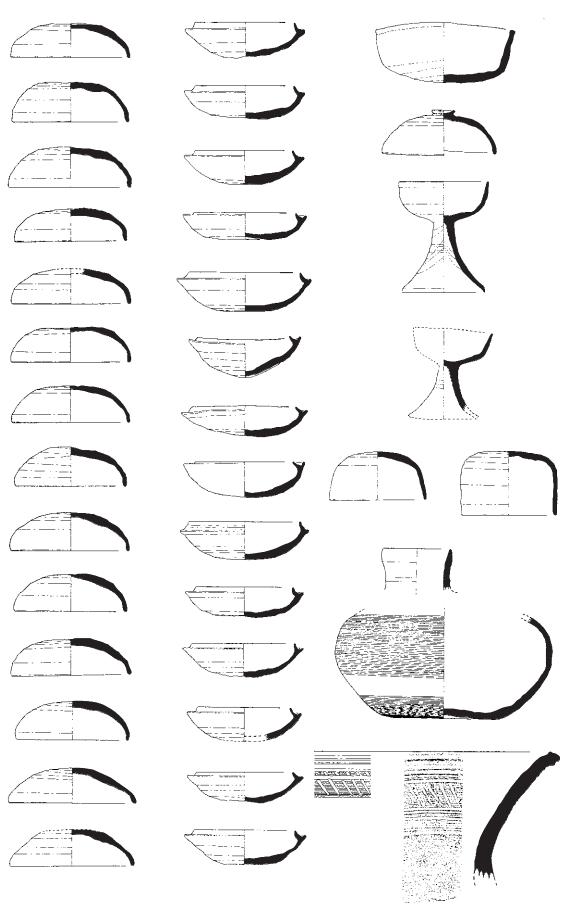
第23図 後田46 - I 号窯跡出土須恵器実測図 (1/4) (『牛頸後田窯跡群』1991、『須恵器集成図録』第5巻 1996より)

- 62 -



第24図 中通D-1、D-2号窯跡出土須恵器実測図 (1/4) (『牛頸中通遺跡群』I・II 1980・1982、『須恵器集成図録』第5巻 1996より)

- 63 -



第25図 中通A-2窯跡出土須恵器実測図(1/4) (『牛頸中通遺跡群』1980より)

長頸壺は口縁端部が外側に屈曲して水平面を作り出す。頸部中央に沈線を廻らす。

短頸壺は窯跡からの良好な資料に恵まれない。大宰府史跡南門や中門跡出土品が該当するものと 考えるが、肩が胴部上位にあって全体的にやや扁平さを感じさせるものと考える。

鉢は植木鉢的な形態をしたものが出土している。平坦な底部に直線的に外側に開く体部が続き、 口縁端部がやや外反して終わっている。

当該期の大宰府史跡関連遺構出土須恵器では、政庁のII 期南門基壇に伴うS X 020 〈註12〉出土短頸壺、S X 015 〈註13〉出土の長頸壺があり、またS K 4141 〈註14〉出土須恵器が該当すると考える。S K 4141にはやや深めの蓋杯など古相に近い蓋杯とやや器高が低くなる新相のものの両者がある。さらに SD2340出土須恵器は天平6年(734年)、天平8年(736年)銘木簡と共伴しており実年代を知る手がかりとなっている〈註15〉。

WIB期

牛頸窯跡群出土須恵器の編年上わかりにくい時期である。蓋杯の場合形態的にはそれほど大きな違いを見つけにくい。石坂C-1・2号窯跡出土須恵器(第32・33図)、井手42号窯跡やハセムシ18-Ⅲ号窯跡出土須恵器を当てたい。この期は蓋杯の法量分化が最も進む時期と考える。

蓋杯の蓋の場合、つまみの形態はボタン状を呈しやや大きめのものが古く、径が小さいものが新しい。新しいものにはつまみが蓋の中心部を大きくはずれるものもあって作りかたが粗いことを物語る。また、天井部のヘラケズリは徐々に行わなくなる。ただ、井手42号窯跡やハセムシ18-Ⅲ号窯跡の場合でも、ヘラケズリするものもわずかに含まれることから、完全にヘラケズリをしなくなるかは問題である。

杯は全体に器高が低く、高台も低い。さらに体部下半が丸みを持って底部との境が不明瞭なものがより古く、底部が平坦で高台が端部より内側に付き、体部との境が明瞭なものが新しい。その後やや深味があって、高台が底部端部に付くものが現れる。杯はこの時期最も法量分化が進み、石坂 $C-1\cdot 2$ 号窯跡の場合は口径14cm台と15cm台のものが5~6割を占め、 $11\sim 12$ cm、18cmのものが小ピークを作り出す。

蓋が付かないと考えられる高台のない杯(杯A)は牛頸窯跡群では非常に少ないものであるが、体部があまり外に開かないものが古相で外に開くものが新相と考える。また、比較的新しいと考える井手42号窯跡やハセムシ18-Ⅲ号窯跡の場合、この種の杯が比較的多く出土する。次期のⅧ期と考える窯跡からも多く見つかっていることから、杯Aの多寡は時期差を示すかもしれない。

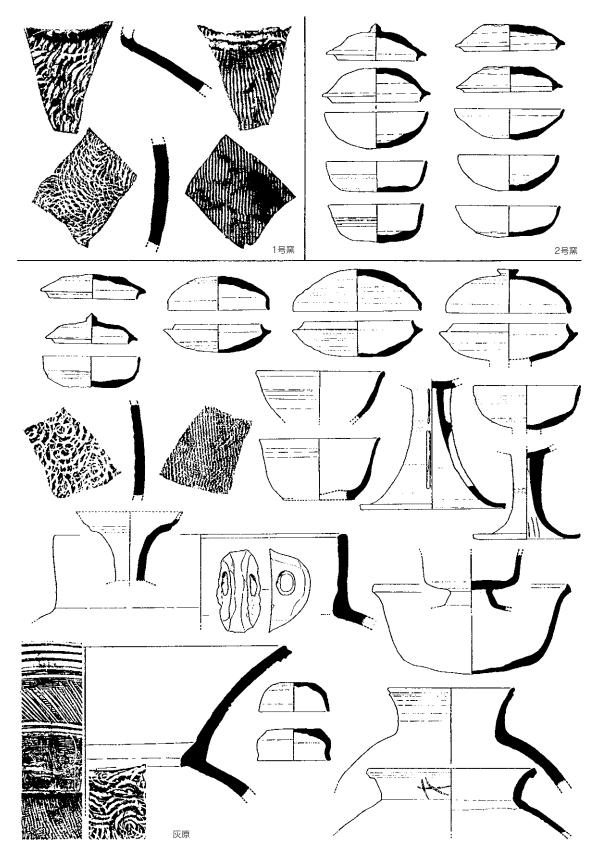
高杯は杯部の体部が垂直に立ち上がるもので、時期差を見出しにくい器種である。大型と小型がある。

鉄鉢は底部が丸いか尖底気味になるものである。

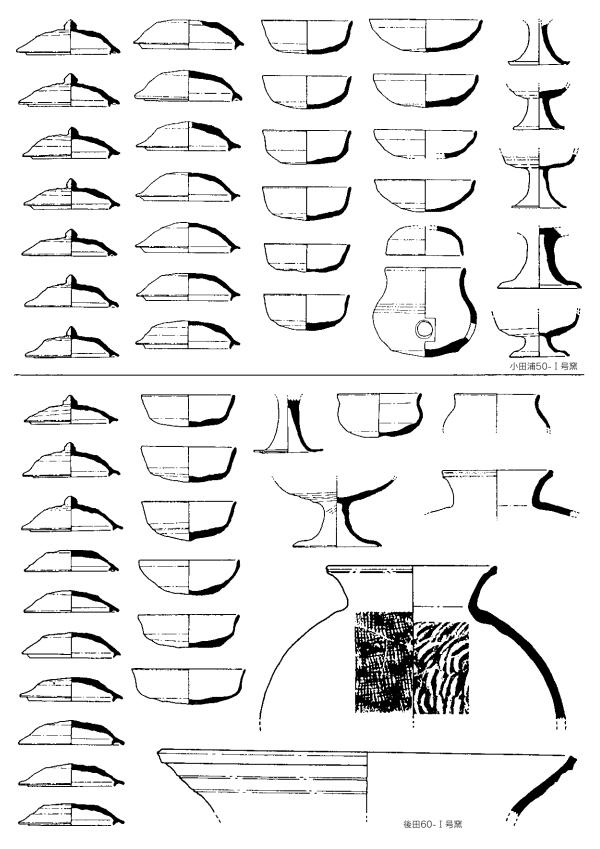
短頸壺は口縁部が垂直よりやや外開き気味のものや、胴部高が前代に比べて高いものが見られる。 長頸壺はそれほど形態的な変化を見つけ出しにくい。

鉢は体部が外側に直線的に開くもので、口縁端部を肥厚させるものとそのまま平坦面を作って終わるものがある。

皿は体部と底部が比較的明瞭で、体部が斜めに外に開く。高台が付けられるものは底部をヘラケ



第26図 大浦1、2号窯跡出土須恵器実測図 (1/4) 『野添・大浦窯跡群』1970、『須恵器集成図録』第5巻 1996より)



第27図 小田浦50 - I 号、後田60 - I 号窯跡出土須恵器実測図 (1/4) (『牛頸小田浦窯跡群』1992・『牛頸後田窯跡群』1991、『須恵器集成図録』第5巻 1996より)

ズリする場合がある。石坂 $C-1\cdot 2$ 号窯跡出土品の場合は口径が14cm前後のものと $19\sim 22$ cm のものの大小2種類がある。

甕は基本的に少なくなり、特に大甕は焼成されなくなると考える。外面に格子目タタキを施すも のがある。

大宰府史跡ではSX2999〈註16〉が1つの指標となる。

川川

当該期の窯跡は非常に少なく、牛頸窯跡群が終息を向かえる時期である。井手24号窯跡や本堂 5次6号窯跡出土須恵器が該当する(第34・35図)。また、最終末の資料として石坂E-3号窯 跡出土須恵器をあげたい(第36図)。

蓋杯の蓋は天井部が平坦でヘラケズリは行わない。口縁部は折り曲げずにそのまま丸く終わるもの、端部近くの内面に細い沈線を廻らすものがある。このような端部の特徴は牛頸窯跡群出土須恵器のこの時期の特徴と考えて良い。つまみは井手24号窯跡の場合付くものが多いが、前代と同様径が小さいものである。本堂5次6号窯跡の場合は付かないものが多い。つまみの付かない蓋の比率の違いは牛頸日ノ浦遺跡の廃棄土坑SK13・16・19出土須恵器の比較でも新しい段階では少なくなる傾向が見られたことから、時期差と捉えられる可能性が強いと考える。杯は高台が底部端に付けられるが、付け方は非常に雑である。また、付けられる位置のため高台と体部が一体化して見えるものがある。

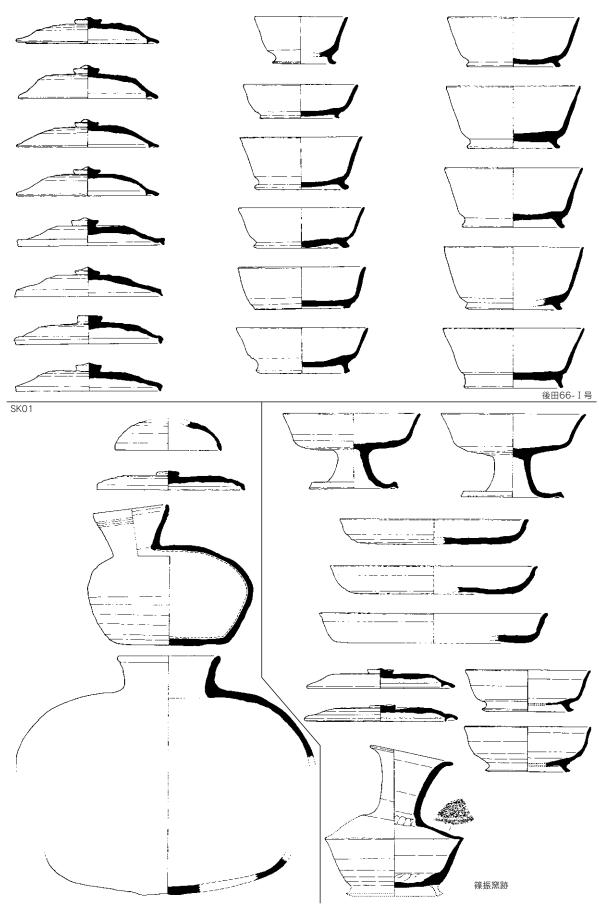
高台の付かない杯(杯A)は体部が外側に直線的に開く。ヘラケズリは行わない。前述のとおり 牛頸窯跡群ではこの杯が非常に少ないのが特徴の1つと言えるが、両窯とも比較的多く出土する。 VII期でも述べたが時期差と捉えて良いのでないだろうか。

その他の器種はあまり出土していない。井手24号窯跡からは高杯や鉄鉢が出土しているが、必ずしもこの窯で焼成されたかは明らかでないものもあることからこの時期として良いかは不明である。本堂5次6号窯跡出土須恵器には短頸壺や椀があるが、焼成器種の少ないことも当該期の特徴であろう。

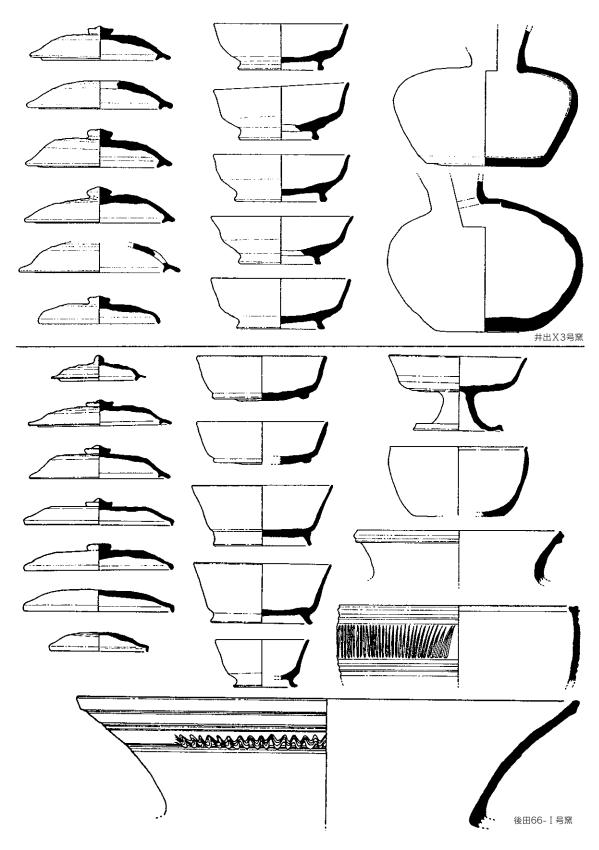
石坂E-3号窯跡出土須恵器には蓋杯以外に大甕があるが、口縁部が二重口縁を呈するもので、 熊本県荒尾窯跡群などで生産されるものと形態・技法ともに似ている。同時に出土したへラ描きの 波状文を持つ鉢なども肥後産須恵器に似たものである。蓋杯は牛頸で生産された須恵器として違和 感はないが、大甕など肥後系統の製品も含まれていることや、時期的に新しいと考えられている土 師器なども出土していて、位置付けが難しい資料である。

窯跡出土須恵器としては以上であるが、牛頸窯跡群の範囲内にある集落遺跡である日ノ浦遺跡では、多くの廃棄土坑が見つかっており、8世紀から9世紀にかけての好資料が出土している(第37図)。この中のSK13・16出土須恵器には本堂5次6号窯跡出土須恵器より新しい様相を持つ杯が含まれている。従ってこの時期の未知の窯跡の存在も充分予想でき、SK13・16で出土したような須恵器が見つかる可能性も考えられる。

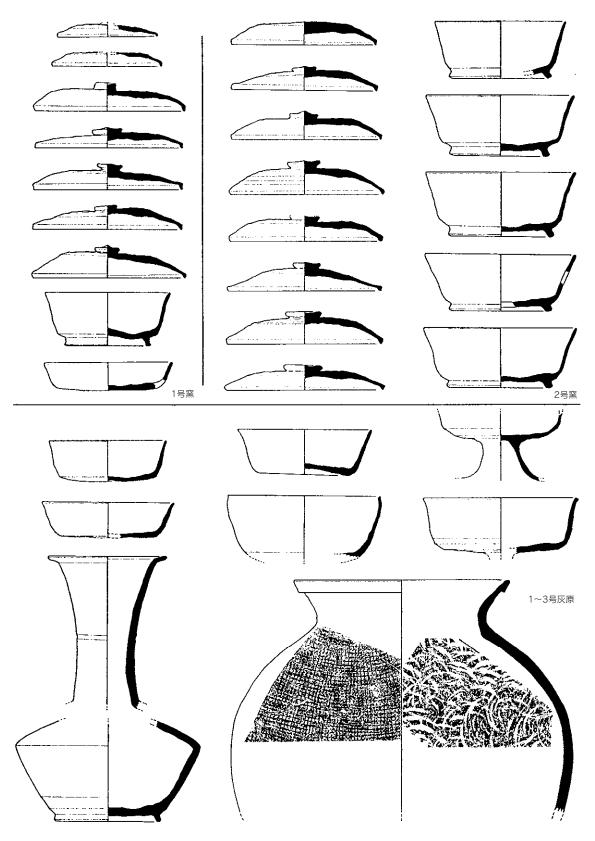
当該期の大宰府史跡関連遺構出土須恵器では、大宰府史跡SE400出土須恵器〈註17〉があげられる。ここでは、胴部上位に突帯を持つ長頸壺や蓋杯の蓋をさかさまにしたような杯部を持つ土



第28図 後田66 - I 号窯跡·SK01、篠振窯跡出土須恵器実測図 (1/4) (『牛頸後田窯跡群』1991・『篠振窯跡群』1987)

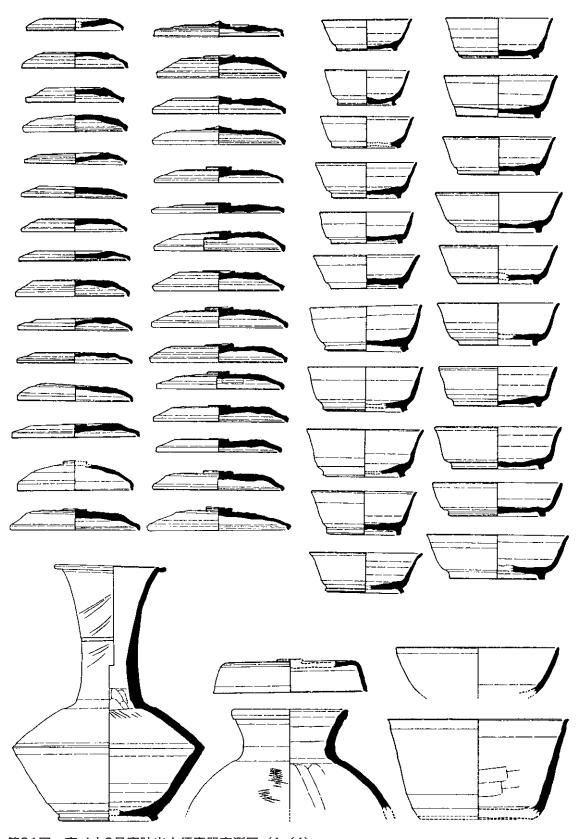


第29図 井出 X 3号、後田66 - I 号窯跡出土須恵器実測図 (1/4) (『牛頸井手窯跡群』1989・『牛頸後田窯跡群』1991、『須恵器集成図録』第5巻 1996より)



第30図 井手 X 1、2号窯跡出土須恵器実測図(1/4) (『牛頸井手窯跡群』1989、『須恵器集成図録』第5巻 1996より)

- 71 -



第31図 宮ノ本9号窯跡出土須恵器実測図 (1/4)

(『太宰府佐野地区遺跡群』II 1991、『須恵器集成図録』第5巻 1996より)

- 72 -

師器高杯などが共伴している。ただ、SE400出土須恵器はこの時期の古手に位置付けられるだろう。

以上のことから、主に蓋杯の変遷を第38・39図に示し、全体の編年案を付図に示した。すでに述べたようにモデル案として示したもので、細分も含めて検討する余地は多い。

(3) 実年代観

実年代を知る資料は8世紀を中心にする大宰府史跡関連遺構出土須恵器以外にそれほど多くはない。九州に限らず全国的にも言えることだが、特に古墳時代ではそれが顕著である。このことから、 当該時期は従来から言われている小田氏の説を踏襲することと陶邑窯跡群で考えられている年代を 参考にしたい。

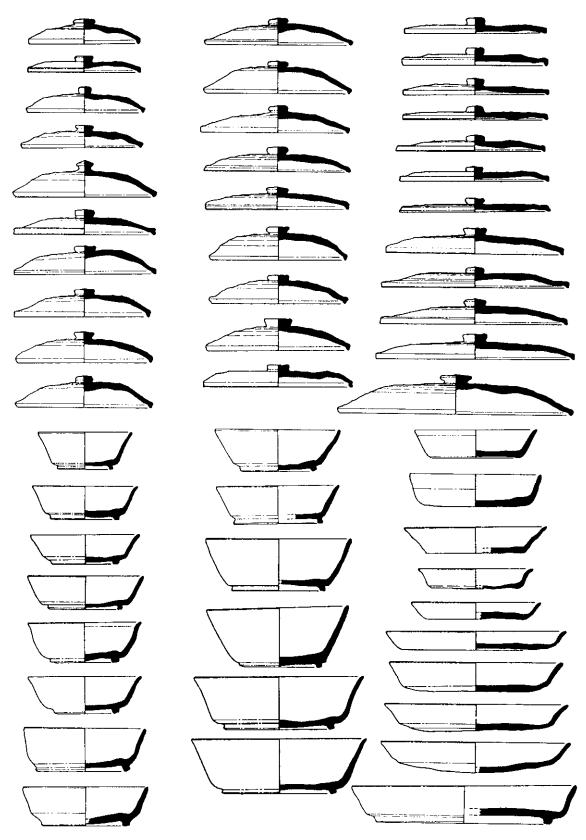
IIII A期は蓋杯の内面に当て具痕が多く見られることなど陶邑窯跡群出土須恵器と共通性があり、MT15~TK10 (III-1~3) の時期と並行するものと考えられる。MT15の時期は八女市の磐井の墓とされる岩戸山古墳が造られた時代とされていることから6世紀前半の年代が与えられており、TK10はその後の6世紀中頃とされている。 IIII A期の土器にはMT15に並行するものも含まれるが、主流はTK10と思われることから一応6世紀中頃としておきたい。

Ⅲ B期はT K 43 (II - 4) に並行するものと考える。飛鳥寺下層の須恵器に似ていることから6世紀後半とされている。これに従いたい。

IVA・IVB期については、小田氏はかつては6世紀内に収まるものとされていたが、現在は西暦 600年を前後する時期と考えられているようだ。本書における実年代については次のV期と同時に述べたい。

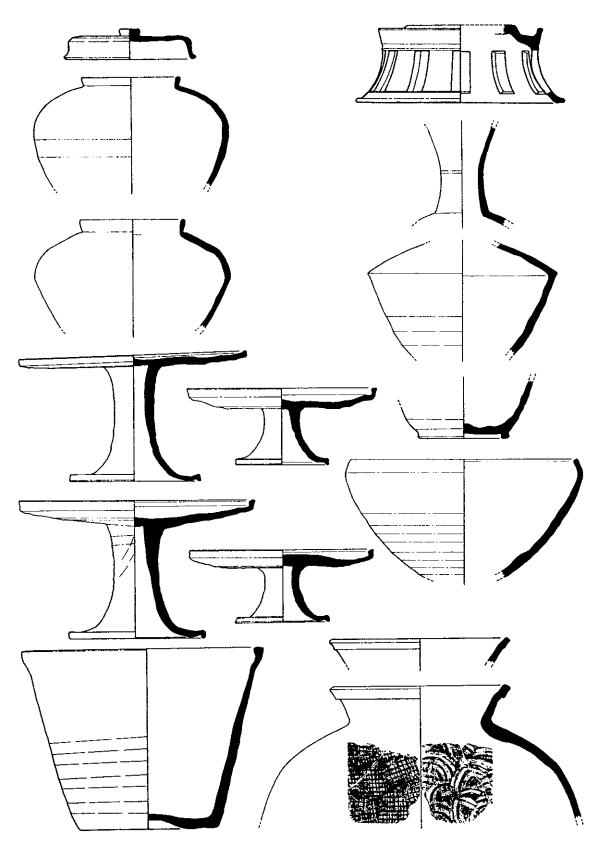
V期は7世紀前半とされていたが、当該期の単独の窯跡は非常に少ない。このため、あまり長期間は考えにくい。春日市のウトグチ窯跡群からは2基の瓦窯が見つかり、そのうちの2号窯跡と溝状遺構から当該期のものとやや新しめの杯と蓋が出土している。春日市教育委員会の報告書では下限を7世紀後半としているが、『春日市史』で渡辺正気氏は瓦が山田寺系とし、杯類は飛鳥皿と考え、窯の築造年代を斉明朝(655~661年)と考えられた。本書でもこの説を取り、V期の年代を7世紀中頃(斉明朝の時期まで含む)まで下げたい。その結果V期の年代が長くなる感じになるが、IV期とした須恵器を焼成した窯跡は非常に多く、一定期間の需要が多かっただけではなく、3小期の設定も考慮されるほどであることから、この時期を少し長めに考えた方が合理的なのではないかという思いを持たせる。このことからIVA期を6世紀末頃に、IVB期を7世紀初頭から前半頃と少し幅を持たせ、同時にV期を7世紀前半から中頃(斉明朝も含む)と考えておきたい。

Ⅵ期はそれに続く時期になるが、終わりの年代については、ハセムシ窯跡群12地点で出土した「和銅六年」(713年) 銘のヘラ書須恵器が参考になる。すなわち12地点では10基の窯跡が見つかったが、ヘラ書須恵器のような大甕を焼成できた窯はV号窯跡とIX号窯跡しかない。従来の編年観で言えば、V号窯跡は8世紀中頃、IX号窯跡は8世紀初頭から前半と言える。従ってIX号窯で焼成した確立が高いと考える。ここからはごく少数ながらかえりが消失していない蓋も出土しているが、基本的にはかえりのない蓋の時期と考えられる。このことから、かえりが基本的に消失するのは7世



第32図 石坂C-1号窯跡出土須恵器実測図(1/4) (『牛頸石坂窯跡群』1985、『須恵器集成図録』第5巻 1996より)

- 74 -



第33図 石坂C-1、C-2号窯跡出土須恵器実測図(1/4) (『牛頸石坂窯跡群』1985、『須恵器集成図録』第5巻 1996より)

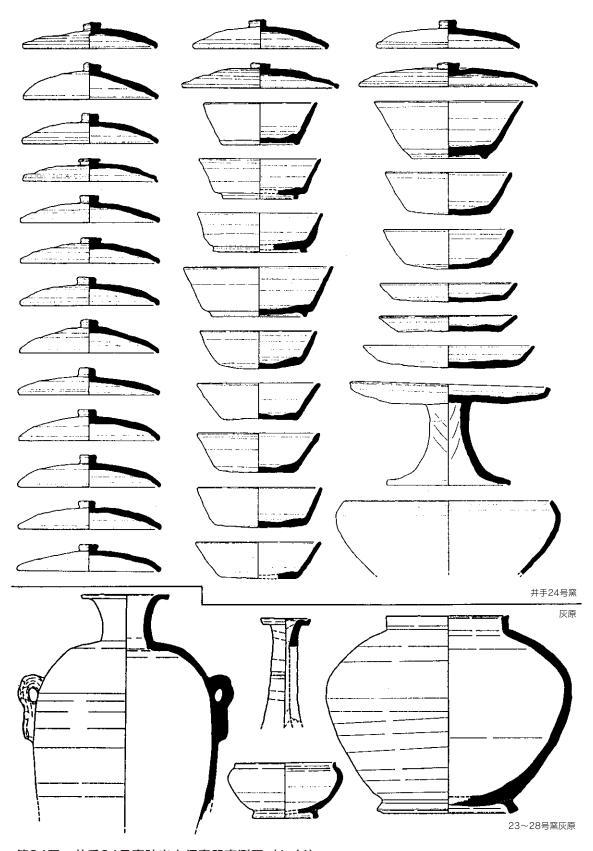
- 75 **-**

紀と8世紀の境頃と考え、VI期の時期を7世紀後半としておきたい。

WIA期は大宰府史跡出土須恵器を参考に考えたい。宮ノ本9号窯跡出土須恵器は、天平6・8年 (734・736年) 銘の木簡と共伴したSD2480出土須恵器に近い。従ってやや古く考えた井手1号窯跡、後田61−II号窯跡出土須恵器を8世紀初頭頃と考える。すなわちVIIA期は8世紀初頭から前半頃と考える。

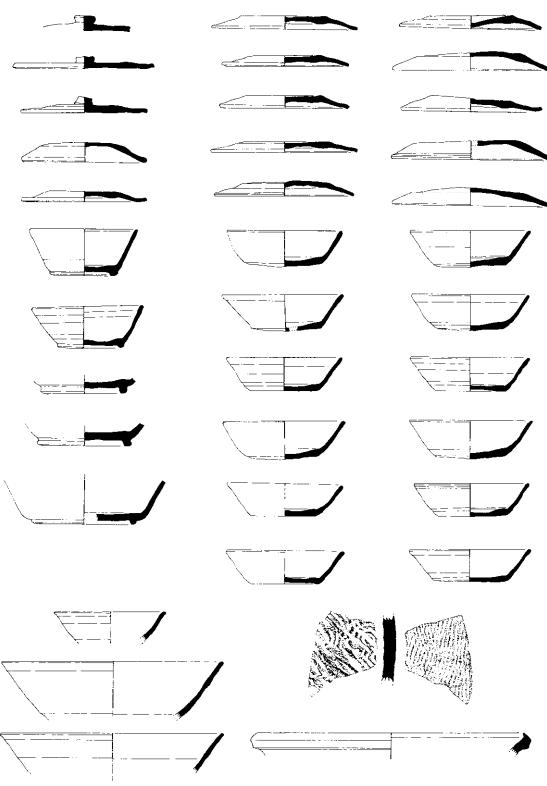
WIB期は石坂窯跡群 C地点では窯跡下方のトレンチからではあるが、底部外面をヘラケズリした土師器の杯(大宰府で杯 d と呼ぶもの)が出土している。また、大宰府史跡 S X 2999はこの期の後半に属するものであろうが、やはり同種の土師器の杯が出土している。そしてこの杯と同種のものが中島氏の研究によって長岡京(784~794年)から出土していることがわかった〈註18〉。このことから年代の1点を想定できることになる。本書ではこの期の石坂 $C-1\cdot 2$ 号窯跡出土須恵器を8世紀中頃から後半、井手42号窯跡やハセムシ18-III 号窯跡出土須恵器を8世紀後半頃としておきたい。

- 註1. 田辺昭三『陶邑古窯址群』1966、『須恵器大成』 1981
- 註2. 中村浩『陶邑窯跡群』I 1976、『陶邑窯跡群』Ⅲ 1978、『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』 2001
- 註3. 小田氏のⅣ期を3小期に分類する考え方の萌芽は、既に1977年刊行の『天観寺山窯跡群』第三部総括の第2天観寺山窯跡群の須恵器 5 小結に示されている。
- 註4. 春日市の惣利9号窯跡出土須恵器の場合は、5回以上のかさ上げが見られ、最終床面出土須恵器と第2次床面出土須恵器に従来どおり口径の大小、技法の料略化が見られたという結果が出ている。『春日地区遺跡群』II 1983
- 註5. 筆者は一時Ⅳ期は細分しない方がよいのではと考え、その考えを基に窯跡の報告書等を書いたことがある。
- 註6. 隼上り窯跡群を調査報告された宇治市教育委員会杉本氏のご教示によれば、同窯跡群でも須恵器杯日が整理箱200箱 に対し、杯Gは1箱であったとのことである。
- 註7. 豊前の須恵器については、2006年『行橋市史』が刊行され、小田富士雄氏と長直信氏が変遷を述べている。
- 註8. 森田勉「大宰府の出土品③土器、陶磁器」『仏教芸術』146 1983
- 註9. 山本信夫『大宰府条坊跡』 I · Ⅲ 太宰府市教育委員会 1983、1984他
- 註10. 舟山良一「牛頸窯跡群と大宰府」『古代の土器研究会第2回シンポジューム 古代の土器研究 律令的土器様式の西・東2 須恵器』1993
- 註11. 石木秀啓「牛頸窯跡群と九州の須恵器生産体制」『国立歴史民俗博物館研究報告』134 2007
- 註12. 『大宰府政庁跡』 九州歴史資料館 2002
- 註13. 『大宰府政庁跡』九州歴史資料館 2002
- 註14. 『大宰府史跡-平成6年度概報』九州歴史資料館 1995
- 註15. 『大宰府史跡-昭和58年度概報』 九州歴史資料館 1984
- 註16. 『大宰府史跡-昭和61年度概報』 九州歴史資料館 1987
- 註17. 森田勉・横田賢次郎「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館研究論集』2 1976他
- 註18. 中島恒次郎「都へ行った土器」『古文化談叢』第28集 1992



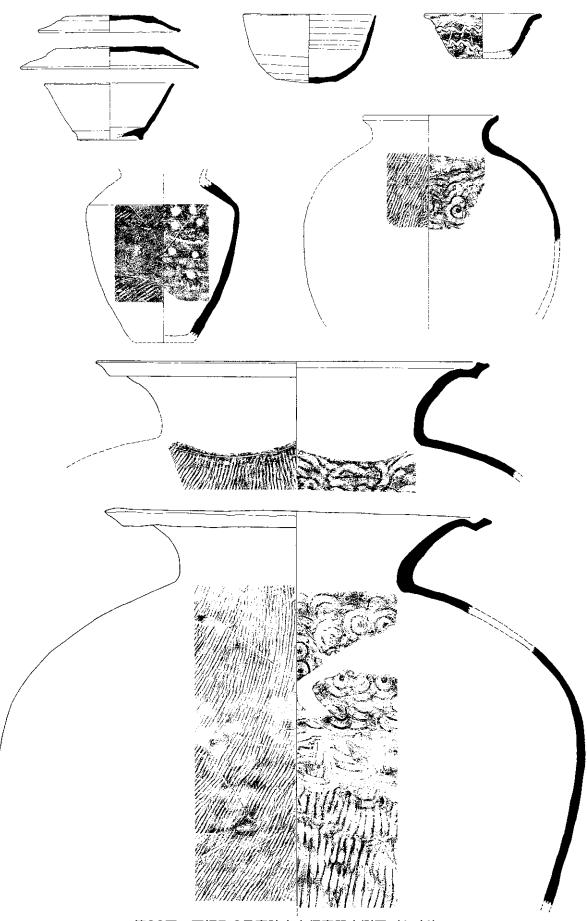
第34図 井手24号窯跡出土須恵器実測図(1/4) (『牛頸窯跡群』I 1988、『須恵器集成図録』第5巻 1996より)

- 77 -

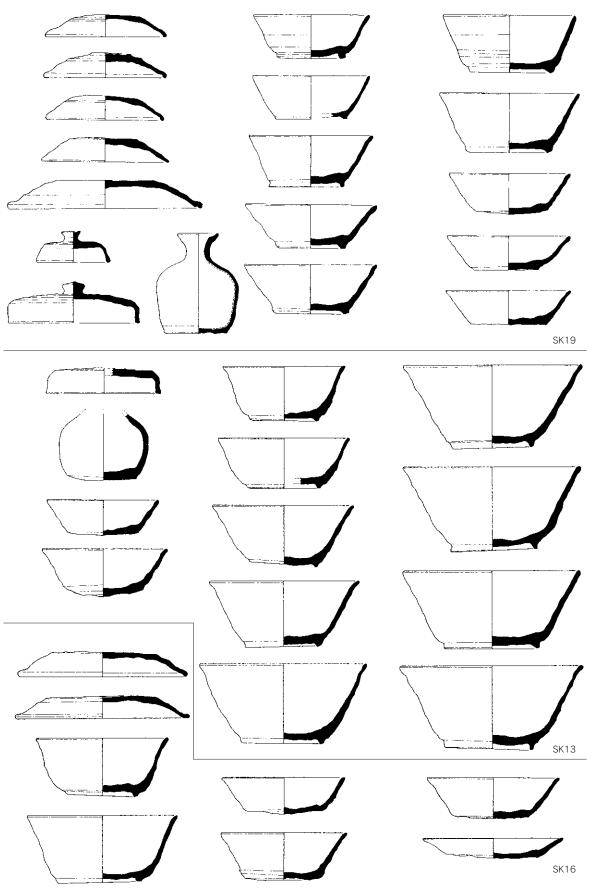


第35図 本堂5次6号窯跡出土須恵器実測図(1/4) (『牛頸本堂遺跡群Ⅲ』2005)

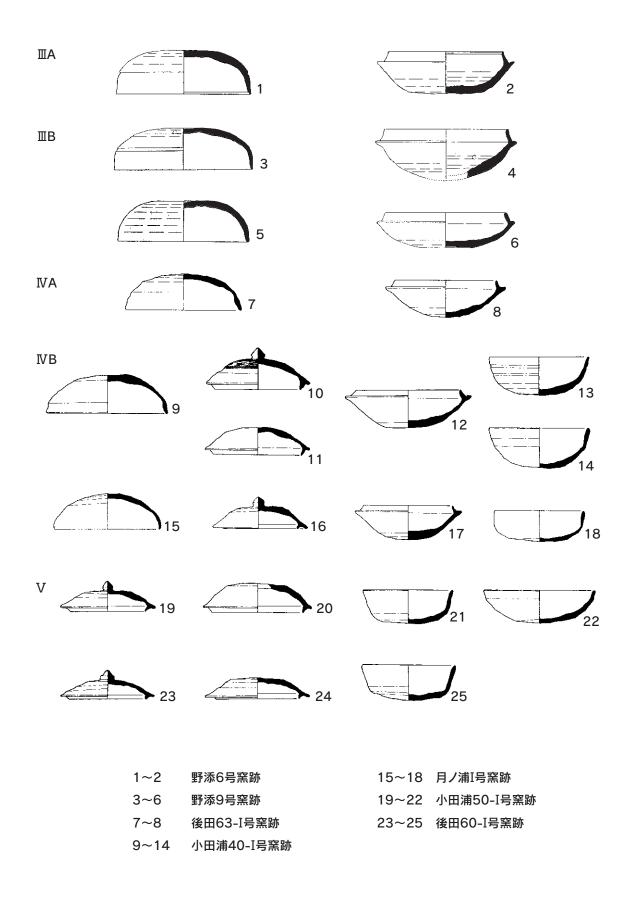
- 78 -



第36図 石坂E-3号窯跡出土須恵器実測図(1/4) (『牛頸石坂窯跡-E地点-』1997)

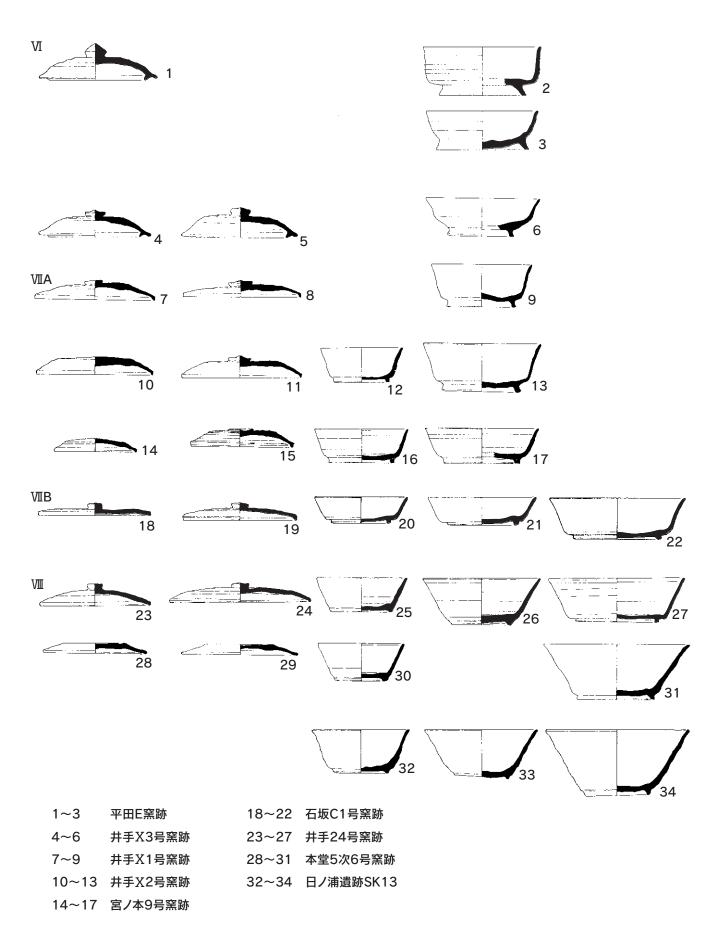


第37図 日ノ浦遺跡土坑出土須恵器実測図(1/4) (『牛頸日ノ浦遺跡群』1994)



第38図 蓋杯の変遷モデル(1)(1/4)

- 81 -



第39図 蓋杯の変遷モデル(2)(1/5)

2. 器種構成

(1) はじめに

前節の編年にのっとり、器種の変化と各時期における窯による器種構成について検討する。これまでにも編年作業において、器種構成の変化について諸見解がみられる(註1)。とくに、古墳時代的な器種構成から奈良時代へと続く器種への移行が大きな画期と考えられる。このような器種の変遷についても、時期設定の一つの基準として前節において検討がなされている。

また、7世紀後半以降とくに8世紀からは、牛頸窯跡群においては窯体の変化とともに甕類などの大形の須恵器を焼成する窯と、蓋杯など小形の器種を中心に焼成する窯というように、窯の使い分けが行われているとの指摘がなされてきた(市10)〈註2〉。このような器種構成に関する既存の諸見解を踏まえ、以下ではまず、各窯跡を分析単位として、器種の有無からみた、各時期における窯跡および灰原での器種の構成の有り方について検討することとする。

(2)対象と方法

対象資料は、牛頸窯跡群窯跡集成(PDF集成)に掲載されている窯跡資料(206基)に月ノ浦1号窯跡、後田46-I号窯などを加えたものである。各資料の時期については、前節の編年についての検討に依拠する。窯跡資料においては、出土位置や層位など詳細な調査に基づき報告されている事例が多いが、以下の検討においては、窯単位あるいは灰原単位で器種の構成を取り上げた。

窯跡・灰原出土資料による器種構成の把握に関連する問題としては以下のようなものをあげることができる。窯跡や灰原に遺存する遺物は、実際に焼成された須恵器のうち焼成終了後出荷されず遺棄・廃棄された遺物が主体である(註3)。そのため、実際に焼成された須恵器の全体像を知るには限界をもつ。また、時期によって資料状況に相違がみられる点についても考慮する必要がある。V期までは、窯の造営が単独で行われる場合が多く、結果として窯本体と灰原の対応関係を把握することが可能な事例が多い。VI期以降は、複数の窯が近接して築造される。そのため複数基の窯に由来する廃棄物により一つの灰原が形成される場合が多くを占める。このような窯造営のありかたの相違により、古墳時代においては1基の窯と灰原を総合的に検討することにより、各窯で焼成された可能性の高い須恵器の器種構成を把握することが可能となる。一方、7世紀後半以降においては、複数の近接する窯群それぞれにおいて焼成されていた須恵器の器種の構成を同様の質で復元することは困難となる。そのため、次善の策として、VI期以降においてはまず窯跡と灰原を別個に取り扱い、双方での出土器種の構成にもとづく類型化を行うこととしたい。

以上のような対象資料の特性に留意しつつ、以下分析作業を行う。時期区分は前節に依拠するが、 Ⅲ期からV期までは窯跡と灰原の対応関係が把握可能な事例が多いこと、また、構成器種が基本的 に類似していること、窯の数量が比較的少ない点などから、一括して器種構成の類型を検討するこ ととした。Ⅵ期以降については、資料数はⅥ期のみは同様に少ないものの、後続のⅧ期の窯数は非 常に多い点からⅥ期、ⅧA期、ⅧB期に分けて検討を行った。なお、Ⅷ期についてはⅧA期、Ⅷ B期双方の窯跡について類型化を行い、灰原に関してはⅧ期と一括して取り扱った。このように窯

第1表 Ⅲ期~V期の窯跡·灰原の器種構成

窯跡名	時期	蓋	州身	材蓋	₹G 身	基	₹B 身	杯A 杯	高杯 有蓋	無蓋	璲	蓋	壺 類	頁 短頭	長頸	瓶舞 平船	横瓶	提瓶	その 他	把手 付麂	甕	大甕	Ⅲ· 盤等	碗	鉢類	硯	托	分類	その他	備考
野添第6号窯・灰原	III A	•	•						0	0	•		0	•	0	0		0			0	0		П	0				高杯脚部・器台 (灰)	
野添第9号窯	ШВ	•	•			(•)	(•)			•		Γ	•		•			•			•			П						
梅頭1号窯・灰原	III B− IV A	•	•	•					0	•	•	0	•	•	0		•	•		0	•	•		•			1		脚棺 (脚部片・1 点) (灰)	
神ノ前第2号窯・灰原	III B− IV A	•	•						0	0	0	0	•	0		•		0			0	0		•	0		1		瓦(軒丸瓦・丸瓦・平 瓦)	
小田浦38- I 号窯・灰原	IV A	0	0						0	0	0	Г	0	0		0		0			0	0		0			٦		高杯脚部	
野添第7次2号窯・灰原	IVB	•	•	•	•				0	•	0	Г	•		0	0	0	0		0	•	•	0	0	0		٦		陶棺(2個体)	
神ノ前第1号窯・灰原	IVB	•	•	0	•					•	0	•	•		0	0		0			0			0			1		高杯脚部(灰)	*平瓶:頸部のみ(灰)
後田45- I 号窯・灰原	IVA	•	•			0	0	0	•	•	•		0	•	0	0					0	0		П			1	(+)		
春日平田東窯・灰原	IV A- IV B	•	•						•	•	•	0	0	0	0	0				0	•	0		•	0		٦	(1)		
小田浦37- I 号窯・灰原	IV A- IV B	•	•						•	•	•	•	0	•		•					0	•		•			1			*平瓶:頸部片
小田浦39- I 号窯・灰原	IV A- IV B	•	•	•	•				0	0	0	•	•	0		•					0	•		•			1			
平田F-1窯	IV A- IV B	•	•						蓋●	•			•	•		•					•	•		•			1			
平田D-1窯・灰原	IVA	•	•						蓋〇	0	0	•		0		0					0			0			1			
月ノ浦Ⅰ号窯	IVB	•	•	•	•					•	•			•		•					•	•		•			1		瓦:軒丸瓦・平瓦・丸 瓦・鴟尾	
後田46地点灰原	IVB	•	•						蓋●	•	•	•				•					•	•		•			1			*碗:金属器の影響
中通C窯	IVΑ	•	•	•(焼台)			蓋●	•		•	•			•						•		•			1			*杯G蓋は3点とも焼台
小田浦33- I 号窯・灰原	IVA	•	•							•	•	Ī				0		•			•	0		•		Ī	Ī			
小田浦79地点3号窯	IV A 新	•	•	•					盖●	•							•				•	•		П			1	/- \	瓦(平瓦・丸瓦)	
中通B窯	IV A- IV B	•	•						蓋●	•	•					•						•		П			1	(2)		
中通D-1窯・灰原	IVB- V	•	•	•						•						0					0	0		•			1			*杯G混入?
惣利1号窯・灰原	ⅢB 新	•	•						•	0	•	0		0							•	•		•		Ī	Ī			
野添12号窯・灰原	ШВ	•	•						•	0	0		0								0			П	0		1			
平田A第1号窯・灰原	III B− IV A	•	•							•	•	•	0	0	0						0			П			1			
野添第7次1号窯・灰原	IV A	•	•						蓋●	•	•		0		0						•	•		•			1	(-)		
後田65- I 号窯・灰原	IV A- IV B	•	•	•	0					•	0	Γ	•	0							•	0		П	•		\exists	(3)		
後田60- I 号窯	v			•	•							Γ	П	•							•	П		П		\top	7		高杯脚部	
野添11号窯・灰原	III B− IV B	•	•							0	0	•									0			П			7			
惣利9号窯・灰原	IVB	•	•	•	0				0	•	0	0	0								•	•		0			7			
中通D-2窯・灰原	IVB	•	•	•	•					•	•	Π									0	0?		•		Ī	j	(4)		
野添第4次2号窯	IVA	•	•									Ī	П							ĺ	•			П	T	T	j	(5)	瓦(軒丸瓦:焼台)	

^{*●:}窯跡出土、〇:灰原出土

跡と灰原を分離して検討した結果と比較するため、一つの灰原出土の土器と各灰原を形成した複数 基の窯跡出土の器種構成とを統合して、近接して造営されている窯跡の小群と灰原のセットにおけ る器種構成についても検討を行った。

器種の類型化においては、7世紀後半以降について甕などの大形器種の焼成が行われる窯と小形の器種を中心に焼成する窯との弁別がなされていた点について指摘されていることから(註4)、甕類を主要な分類基準とすることが望ましい。しかし、後述の通り、Ⅲ期からV期にかけての時期は、ほとんどの窯跡で甕類の焼成が行われている。そのため時期を通じてなるべく基準を均等にするため、高杯や壺類あるいは瓶類などの器種を類型化に際しての基準とした。

検討対象とした器種の区分は、蓋杯は杯 H·G·B·A 類の区分に従い(註5)、高杯を有蓋・無

第2表 VI期の窯跡・灰原の器種構成

窯跡名	時期	蓋	和 身	参蓋	FG 身	を 蓋	ÑB 身	杯A 杯	高杯 有蓋	無蓋	蒾	蓋	壺類 壺	〔 短頭	長頸	瓶舞 平瓶	横瓶	提瓶	その 他	把手 付甕	甕	大甕	Ⅲ· 盤等	碗	鉢類	硯	托	分類	その他	備考
浦ノ原4号窯・灰原	IV B - VI	0	0	0	0	•	•			0		0			0			0		Γ		0	0		0	0			瓦(平瓦・丸瓦)	
宮ノ本4号窯・灰原	IV B - VI			•	•	•	•	•		•		0	0			0	0			•	•	0	•		•	•		(1)		*砚:円面砚,瓶:剪部片
平田E-1窯	IV B - VI			•	•	•	•			•	•	•	•	•	•	•				Г	•		•	•	•			(1)		
小田浦39-Ⅱ号窯	VI	(•)	(•)			•	•			•		•	•	•		•														
長浦窯	VI					•	•	•		•		Ī	•							Ī								(2)		
上平田窯跡群第2号窯	VI新					•	•			•		Τ								Π					•			(3)		
平田B第2号窯・灰原	VI	0		0	0	•	0			0		Τ								Г									高杯脚部	
平田B第1号窯・灰原	IV B - VI	•	•	•	•	0	•					Ť		0	0	Ī				İ	•		•	Ī						
神ノ前第5号窯	VI					•	•	•					•								•							(4)		
神ノ前第4号窯	VI					•	•					Ī								Π	•									
宮ノ本1号窯	VI					•	•					Τ				Г				Г	• (焼台	?)					(5)		
野添第2次2号窯	VI					•	•					Τ								Γ		•								
本堂3次窯(上層)	V-VI		•		•	•	•					T								Γ				Γ				(6)		

^{*●:}窯跡出土、○:灰原出土

(3) 器種構成による窯跡・灰原の分類

(i) Ⅲ期からV期の様相

出土した器種により、以下のように類型化ができる。なお、第1表中の●は窯跡出土、○は各窯跡に対応する灰原からのみ出土したものを示している(総数31基)。

- (1) 蓋杯、高杯、壺類、瓶類、甕類によって構成される窯・灰原:16基(53.3%)
- (2) 蓋杯、高杯、瓶類、甕類によって構成される窯・灰原:4基(13.3%)
- (3) 蓋杯、高杯、壺類、甕類によって構成される窯・灰原:8基(内1基は高杯無し)(26.7%)
- (4) 蓋杯、高杯、甕類によって構成される窯・灰原:1基 (3.3%)
- (5) 蓋杯、甕類によって構成される窯・灰原:1基 (3.3%)

最も基数の多いのは (1) であり、その次が瓶類の出土をみない (3)、最も基数の少ないのは蓋杯と高杯や甕類など相対的に出土する器種の少ない (4) や (5) である。また、このⅢ期からV期にかけては、(1) から (5) とした全ての類型の窯跡・灰原の多くにおいて甕類が認められることから、類型の如何に関わらず甕類が比較的多くの窯で一般的に焼成されているものといえる。また、全体の9割以上の窯跡・灰原が比較的器種構成の広範な (1)・(2)・(3) に含まれることから、多くの窯跡において多種類の器種を焼成しているという傾向がみられ、逆により限定的な器種のみを焼成した可能性のある窯跡は比較的少ないものといえる。

以上のような結果から、器種構成の類型化自体はかなり粗いものであるが、古墳時代の窯跡での 須恵器の焼成においては、多くの窯跡で広汎な器種を焼成することが一般的であったものと考える ことができる。また、瓦や陶棺などの焼成も、上記の類型化においてより幅広い器種の認められる 窯跡で焼成される傾向を看取することができる。

(ii) VI期の様相

次にVI期の窯跡・灰原の様相をみる。VI期の資料として取り扱ったものには、各窯の使用期間が出土土器の時期からIV期以降VI期にまたがるものを比較的多く含む。そのため、VI期の特徴を明確に把握することは難しいものと考えられる。これは、窯体の規模や基数などの変遷(WI章5参照)の上でVI期が古墳時代からVII期以降の様相への移行的な時期であることによるものと考えられる。IV期~VI期までの期間にわたって使用される窯・灰原(第2表・総数13基)については、出土器種の構成にもとづき、次のような6種類に区分が可能である。

- (1) 蓋杯、高杯、壺類、瓶類、甕類によって構成される窯・灰原:4基(内1基では甕類が見られない)(30.8%)
- (2) 蓋杯、高杯、壺類によって構成される窯・灰原:1基(7.7%)
- (3) 蓋杯、高杯によって構成される窯・灰原:2基(内1基では鉢あり)(15.4%)
- (4) 蓋杯、壺類、甕類によって構成される窯・灰原:2基(15.4%)
- (5) 蓋杯、甕類によって構成される窯・灰原: 3基 (23.1%)
- (6) 蓋杯のみによって構成される窯・灰原:1基(7.7%)

最も基数の多いのは (1) とした類型で蓋杯のほかに高杯・壺類・瓶類・甕類が主要な構成器種である窯跡、加えて蓋杯・甕類が主要な構成器種である窯跡 (5) も比較的多くみられ、これら2種類の窯跡は対象の半数を占める。しかし、(1) とした類型に含まれる窯跡からも分かるように、器種の比較的多様な類型にはIV期以降からの使用が認められるものが多く、このような比較的長期に及ぶ使用期間と、古墳時代的な窯経営のあり方が大きく影響した結果と考えられる。一方、VI期のみに限定できる資料の多くは、蓋杯と高杯のセット、あるいは蓋杯と壺類・甕類などの組み合わせ、あるいは蓋杯と甕類のみのセットなど比較的構成器種が少ない事例が多い。

以上のような窯跡・灰原の使用期間の問題を考慮するならば、VI期においては多様な器種を焼成する窯跡に加え、より少数の器種のみを焼成した窯跡も含まれるものと考えることができよう。

(iii) VII期の窯跡および灰原における様相

Ⅷ期以降についてみるが、この時期以降は各窯跡と灰原の対応関係が不明瞭であり、近接して造営される複数の窯跡が一つの灰原を形成する場合が多く、両者の個々の対応関係を把握することができない。そのため、まず窯跡出土資料のみについての器種構成を概観し、後に灰原出土土器の器種構成をみることとする。

まずWIA期の窯跡(第3表・総数68基)は次のように類型化できる。

- (1) 蓋杯、高杯、(壺類)、(瓶類)、(甕類)、皿・盤類によって構成される窯:10基(14.7%)
- (2) 蓋杯、壺類、(甕類) によって構成される窯:17基 (25.0%)
- (3) 蓋杯、皿・盤類あるいは碗によって構成される窯:13基 (19.1%)
- (4) 蓋杯、甕によって構成される窯: 4基(5.9%)
- (5) 蓋杯のみによって構成される窯:24基(35.3%)
- () で表記している器種は、各類型内の全ての窯跡で見られる器種ではないが、これらの器

第3表 VIIA期の窯跡における器種構成

窯跡名	杯		料	FG 身	本	不B 。此	杯A 杯	高杯 有蓋	無数	醚	蓋	遊	領知	長頭	瓶類	横瓶	提術	その 他	把手付班	甕	大赛	皿・ 盤等	碗	鉢箱	砚 :	ŧſ	分類	その他	備考
道ノ下50号窯 (J地区)	100	7	368	78		•	711	11 300			•			1交到	丁瓜	199,7724		1世 ● (岩		•	3%	186 VY		981		+	Fict		
井手32号窯 (B-1地区)	Н	H		H		•	•		•		┪	۲		•				● (消			H	•	Н		+	\dashv	ŀ		
井手28号窯 (B-2地区)	Н					•	•		•		\vdash	†		_	\vdash			(治				•			\vdash	┨	ı		*窓の遺物か不明
足洗川34号窯 (C地区)	Н	Н		Н		•	Ť		•	\vdash	\vdash	\vdash		•				- 0/12		П	•	•	Н		\dashv	\dashv	ł		
本堂5次9号窯	Н	Н				•		<u> </u>	•	\vdash	+	T		•	\vdash				\vdash	H	Ť	Ť	•	H	+	\dashv			
本堂5次7号窯	Н	Н				•			•	\vdash	•	+		_	\vdash				_	Н		•	Ť		+	1	(1)		
浦ノ原3号窯	Н	\vdash		Н		•	•	_	•	\vdash	ا			•	┢	\vdash			_	•		•	Н	•	+	┨	ŀ		
後田66地点灰原	Н	\vdash			0		•		0	\vdash	╁	•		_	<u> </u>	\vdash	_		_	0	0		Н	0	+	┨	ŀ		
	Н	Н		H		•	•	_	•	 	⊢	╁			<u> </u>	_			_	Н		$\overline{\bullet}$			+	\dashv	ŀ		
ガセムシ20-1 号 道ノ下17号窯 (K地区)	Н	\vdash						_	•	 	⊢	\vdash			<u> </u>	-	_		_	Н	_	•	Н		+	\dashv	ŀ		
	H	Н		\vdash	•	+	•		•	_	 	₩			_				_			•		_	+	+	4		
宮ノ本9号窯・灰原	Н	\vdash	_	/ Lond		•	_	_	-	<u> </u>	0	\vdash	-	0	_	0	_		_	Н		Land I	$^{\circ}$	0	\rightarrow	4	ı		
井手43号窯 (B-4地区)	Н	Ш		(煙		•	_			<u> </u>	╄	╄		0	<u> </u>				_	Ш	• (Н		\perp	4			
本堂5次3号窯		Ш				•	•	_		_	⊢	⊢		•	_	_			_	Ш		•	Ш		\perp	4	-		
道ノ下16号窯 (K地区)					•					_	<u> </u>	_		•	_							•			\perp	4			
浦ノ原8号窯						•	•			_	•	_	•									•		•	\perp	4	-	高杯脚部	
ハセムシ20-Ⅱ号						•					╙		•							•				•		╝			
ハセムシ12-Ⅲ号窯						•				_	┖	╙	•							Ш		•				╛	١		
長者原61号窯 (I地区)	\Box	Ш	_			•				L	L	L	•		\Box	_			_	Ш			\Box			╝			
ハセムシ12-IX号窯		J	_			•					\perp	•								•		•				_]-	(2)		
長者原59号窯 (I地区)					•	•	•				Г	•											•	•		7	- 1		
宮ノ本3号窯		П				•					П	•								П			П			7	- 1		
井手44号窯 (B-4地区)		П				•					•	Т						(煌	() •	•						7	- 1		
井手46号窯 (B-4地区)	П	Н		П		•					•	T								•		0	П	•	\top	┨	Ì		
長者原64号窯 (I地区)	П	\forall		П	•						•	T								П	П		П	•	\top	┨	ı		
ハセムシ19- I 号窯	Н	Н			•					\vdash	•	T			\vdash					Н	Н	•	Н		+	\dashv	ł		
井手29号窯 (B-1地区)		Н			•			_		\vdash	•	+			\vdash				\vdash	\Box		Ť			+	\dashv	ŀ		
# / 原7号窯	\vdash	Н				•	•	_		\vdash	•	+			\vdash		H	H	\vdash	\vdash	Н	•	•	\vdash	+	\dashv			※続:(※1)図35-
ハセムシ20-Ⅲ号窯	Н	Н		Н		•			\vdash		۳	₩	\vdash		_				_	Н	•	•			+	┿	ᅱ		W 88 . (4617)5630
	\vdash	\vdash		\vdash		•	-	-		\vdash	+	+			\vdash	-	\vdash	H	-	\vdash	-	•	\vdash	H	+	\dashv			
ハセムシ6-1号窯	\vdash	Н		\vdash			_	_		\vdash	\vdash	\vdash			\vdash	_	\vdash	\vdash	\vdash	\vdash	Н		\vdash	\vdash	+	-1			-
ハセムシ6-Ⅱ号窯	\vdash	Н		\vdash		•		_	\vdash	<u> </u>	\vdash	-	-		<u> </u>	<u> </u>		_	<u> </u>	\vdash	Н	•	-		+	\dashv			-
小田浦34-1号窯	\vdash	Н		\vdash		•	_	<u> </u>	-	<u> </u>	₩	1	-	_	<u> </u>	_			<u> </u>	Н	Ш	_	•		\perp	4			1
ハセムシ12-V号窯	Ш	Ц				•			_	_	1	-	_		_				_	Ш	Ш	•	Ш		\perp	4	ļ		
道ノ下14号窯 (K地区)	Ш					•	•				╙	╙										•	Ш		\perp	4			
長者原53号窯 (I地区)					•					_	┖											•				_ .	(3)		
ハセムシ29- I 号窯					•	•					┖											•				╝	`		
ハセムシ7- I 号窯・灰原					•	0	0															0				1			
(採)					_	\square	_																			╝	ı		
ハセムシ26-Ⅱ号窯					•	•																•				╝			
浦ノ原5号窯					•						Г											•				٦	- 1		
向佐野1号窯	П				•	•	•				П	П										•	П			٦	- [
長者原62号窯 (I地区)					•						Т	Т											•			7	- 1		*碗:(県4)図111-
ハセムシ27号窯	П				•	Ť			İ	İΠ	Ť	T	İ	İ	İ	İ				П	•				一	Ť	T		İ
ハセムシ22-Ⅱ号窯	П	П				•	•				T	T								•	•		П			┨			
笹原69号窯 (M-2地区)	П			П							\vdash	\top								П	•		П		\top	7	(4)		*甕破片有
浦ノ原1号窯	Н	H				•				\vdash	\vdash								-	•	Ħ		Н		+	┨	ŀ		1
# 手33号窯 (B-1地区)	Н	Н	_	\vdash	•				\vdash	\vdash	t	t	\vdash		\vdash		\vdash	\vdash	\vdash		Н		Н	Н	+	+	\dashv		†
# 于30 5 無 (B-1 地区) 後田66- I 号窯	Н	Н		Н		•		\vdash		\vdash	+	+			\vdash	_	H	H	\vdash	H	H	-	Н	H	+	\dashv	ŀ		1
	\vdash	Н	_	\vdash		•		_	\vdash	\vdash	+	+	\vdash		\vdash	_	\vdash	\vdash	-	\vdash	Н	_	\vdash		+	\dashv	ŀ		1
ハセムンb-Ⅲ号無 長者原65号窯 (I地区)	Н	Н		\vdash				-		\vdash	\vdash	+		\vdash	\vdash	-	Н	H	\vdash	Н	Н	_	Н	Н	+	\dashv	ŀ		
	\vdash	Н		\vdash		•		_	\vdash	\vdash	+	+	\vdash	\vdash	\vdash	-	-	\vdash	\vdash	\vdash	\vdash		\vdash		+	\dashv	-		-
長者原63号窯 (I地区)	Н	Н		\vdash	•		_			<u> </u>	⊢	\vdash			├-	-		\vdash	<u> </u>	Н	H		Н		+	-1			-
ハセムシ20-1号窯	\vdash	Н				•	•	_	-	<u> </u>	1	1	-	_	_	-			<u> </u>	\sqcup	\vdash		\vdash		\perp	\dashv			-
宮ノ本2号窯	Ш	Ц				•				<u> </u>	⊢	1			<u> </u>	_			_	Ш	Ш		Ш		\perp	4			
宮ノ本10号窯	Ш	Ц		\vdash	•			_	_	<u> </u>	1	\perp	_		<u> </u>	_			_	Ш	Ш		\vdash		\perp	4			
浦ノ原2号窯	Ш	Ц			•					<u> </u>	\perp									Ш	Ш		Ш			_	ļ		1
篠振1号窯	Ш	Ш		\perp		•	•			_	_	1	_							Ш			\Box		Ш	_[
ハセムシ28号窯	\Box					•													_	Ш			\Box			╝			
ハセムシ18- I 号窯	LĪ	╚		L	•	•	•			L	L	L		L	匚				L	LĪ						_].	(5)		
井手X-2号窯					•	•					Г															7	(0)		
ハセムシ22- I 号窯		П				•					П	Т								П						7	- 1		
後田61-Ⅱ号窯		П				•	•				1														\top	7	ı		1
ハセムシ12- I 号窯	П	Н		П		•					\top	T	Т							П	П		П		\dashv	7	ı		1
ハセムシ22-IV号窯		\forall			•					\vdash	\vdash	+							-	Н					+	\dashv	ŀ		
井手30号窯 (B-1地区)	\vdash	Н			•	+		_	\vdash	\vdash	\vdash	+			\vdash		\vdash	\vdash	\vdash	\vdash	\vdash		\vdash		+	\dashv	ł		1
井手8号窯 (A-3地区)	\vdash	Н		\vdash	-	•		-		\vdash	\vdash	+			\vdash		\vdash	\vdash	\vdash	\vdash	Н	_	Н	\vdash	+	\dashv	ŀ		1
ガナ6号窯 (K地区)	\vdash	Н		\vdash	_	•		_	\vdash	_	\vdash	+	\vdash		_	\vdash	\vdash	\vdash	_	\vdash	Н	_	\vdash	\vdash	+	\dashv			1
	\vdash	Н		\vdash			_	_		\vdash	\vdash	\vdash			\vdash	_	\vdash	\vdash	\vdash	\vdash	Н	_	\vdash	\vdash	+	-1		1	-
井手X-1号窯	\vdash	Н		\vdash		•	•	_	\vdash	<u> </u>	\vdash	-	-		_	-		_	_	\vdash	\vdash		\vdash		+	\dashv			-
井手45号窯 (B-4地区)	Ш	Ц		\vdash		•		_	_	<u> </u>	1	1			<u> </u>	_			<u> </u>	Н	Ш		Ш		\perp	4	ļ		
後田61- I 号窯				\vdash	•				_	<u> </u>	1	\vdash		_		_			_	Ш					\perp	4	I		
井手9号窯 (A-3地区)																													

種を含む窯跡も一定度認められる器種である。

この時期の様相を見ると、前時期までと対照的に蓋杯のみの出土する窯跡が全体の35%ほどを占め、ついで蓋杯・壺類を主に一部の窯で甕の出土が見られる(2)としたものが25%を占める。また、蓋杯のみあるいは蓋杯と皿・盤類の出土する窯((3)と (5))は全体の半数以上 (54%)を占め、小形器種に限って出土する窯跡が過半数を占めるということになる。一方、これらに高杯や壺類あるいは甕類などが加わる器種構成である (1)・(2) は、合わせて全体の40%近くを占める。また、甕類は (1) や (2) とした壺類や高杯などの出土する窯跡から出土する傾向が高い。蓋杯と甕類のみが出土する窯跡も少数みられるが全体の基数からすると6%に満たない。

第4表 ⅥB期の窯跡における器種構成

窯跡名	杯蓋	H 身	杯蓋	G 身	杉	ÑB 身	杯A 杯	高相有記	不 監無	蓋	蒾	蓋	壺類 壺	[短到	長野	瓶 類 平弟	頁 横船	ī. 提舶	その (他	把手付到	. 甕	大甕	皿・ 盤等	碗	鉢類	硯:	Æ	分類	その他	備考
石坂C-2(灰原のみ)	Г				•	•			•	T			•	•	•						•		•		•		Т			
井手1号窯 (A-1地区)					•	•			•	,		•		•	•								•		•					
石坂C-1号窯(灰原)					•	•	•		•	,		•		•	•						•		•		•	•	7			*砚:円面砚
足洗川36号窯 (C地区)	Т				•	•	•	Т	•	1					•					•	T	•	•	Τ			7			
後田59-Ⅲ号窯	T				•	-	_		•	1				•	T	\top				T				T		П	┪			
長者原66号窯 (I地区)	T	П			•	-	_	T	•	_				•	T					T	\top			$^{+}$			٦.			
井手27号窯 (B-2地区)	\vdash	Н			Ť	Ť		\vdash	•	-				•	+	\vdash				✝	+		•	+		\vdash	\dashv	1)		
井手4号窯 (A-3地区)	1	H			•	•		+	•	_		•		Ť	+	+				+	+		Ť	╁			┪			
惣利6号窯	\vdash	Н			•	•	_	┢	•	-		Ť			+	╁				╆	+		•	╁			┨			
惣利7号窯	\vdash	Н			•	•	-	\vdash		_					+	+				╆	+		•	╁			\dashv			
井手48号窯 (B-4地区)	\vdash	Н			•	•	-	\vdash		_	_	_			+	+	+			╫	+		•	╁		\vdash	\dashv			
	╁	Н			•	+		╁		_					+	+	+			╁	+		-	╁	-		\dashv			
ハセムシ18-VII号窯	┾	Н		┢	-	-	+	₩	+	+		_			+	┿	+-	+-	1	╄	+			╄	⊨	\vdash	+	_		
井手25号窯 (B-2地区)	⊢	\vdash			-	-	•	\vdash	-	+				_	•	₩	+	-		⊢	+		•	╀	-	\vdash	-			
井手22号窯 (B-1地区)	\vdash	Н			•	-	_	⊢	_	+		_		•	-	-				╀	-		•	╀			-			
井手42号窯 (B-4地区)	⊢	Ш			•	•	_	┢	-	+				•	₩	-	-			╄	-		•	╄		\vdash	4			
井手31号窯 (B-1地区)	_	Ш			•	•	-	_		4				•	1	1	1		_		1		_	1		\sqcup	4			
長者原57号窯 (I地区)		Ш			•	•	-	_	1	1				•		1	1	1		ــــــــــــــــــــــــــــــــــــــ	1		<u> </u>	1		\sqcup	_			
井手41号窯 (B-4地区)	_	Ш			•	•	-	_	1	┸			•			1	1	1		ــــــــــــــــــــــــــــــــــــــ	1		•	1			4	2)		
惣利4号窯	_	Ш			•	•	-	\vdash	\perp	⊥			•			_	1	_		\perp	1		•	1		Ш	⅃`	-/		
ハセムシ18-Ⅱ号窯	_	Ш			•	•	-		\perp	\perp			•			_		_		_	1		•	_		Ш				
ハセムシ18-Ⅲ号窯	\perp	Ш			•	•	-					•	•						• ()	低子)			•		•					
後田59-Ⅱ号窯					•	•		П		Т		•	•								•		•	П					高杯脚部	
并手49号窯(B-4地区)					•	•				Т		•											•	Τ			╗			
ハセムシ18-VI号窯					•	•	•	Т		T		•								T			•	T	•	П	7			
後田59- I 号窯	İ				•	•		Ť	İ	Ť			Ī		T	Ť	İ	İ	• ()	钣子:			•	Ť	•		Ť		高杯脚部	
宮ノ本8号窯	T	П			•	•				T										Т		•	•	T	•		╗			
宮ノ本6号窯		П			•	•				†										T			•	T	•		┪			
足洗川37号窯 (C地区)	t	Н			•	+-	-	T	+	$^{+}$					\vdash	\vdash				\vdash			•	T	•	\Box	┪			
井手7号窯 (A-3地区)	\vdash	Н			•	-	-	\vdash		$^{+}$					1	-	1			╆	+		•	+	Ť		┨			
長者原56号窯 (I地区)	\vdash	Н			•	-	-	\vdash		$^{+}$					+	+	+	-		+	+		•	+		\vdash	┨			
ハセムシ12-IV号窯	\vdash	\vdash			•	-	-	\vdash	+	+	_	_			+	\vdash	+	_	+	\vdash	+		•	+		\vdash	\dashv			
ハセムシ22-Ⅲ号窯	\vdash	Н			•	•	_	\vdash	+	+	_	_			+	+	+			⊢	+		•	╁	-	\vdash	\dashv			
	┢	Н			•	•	_	⊢	+	+					+	₩	+	-		╁	+		•	╁		\vdash	\dashv			
ハセムシ23- I 号窯	\vdash	Н			_	-	_	\vdash		+					+	-				╀	+		_	╀			\dashv			
井手20号窯(B-1地区)	┢	Н			•	•	_	┢	-	+					+	-	-			┢	+		•	╄		\vdash	-			
惣利8号窯	╀	Н			•	•	_	⊢		+					-	-				╀	+		•	╀			\dashv	3)		
ハセムシ18-VII号窯	┞	Н			•	-	-	┺	_	+					₩	₩	-	-	-	╄	_		•	╄		\vdash	4			
本堂5次4号窯	⊢	Ш			•	-	-	⊢	_	4		_			_	₩	_			╄	_		•	╄		\sqcup	4			
道ノ下11号窯 (G地区)	┞				•	•	-	┺	_	4					_	_	_			┺	_		•	╄		ш	4			
道ノ下12号窯 (G地区)	_				•		•	\perp		4					_	_	_			┺			•	┺		Ш	4			
宮ノ本5号窯	_	Ш			•	•	-	\perp		⊥						_	_	_	_	_	_		•	1			_			
向佐野4号窯	\perp	Ц			•	•	_	\perp	1	\perp			Ш			_				\perp	_		•	\perp		Ш	_			
向佐野5号窯		Ш			•	•	_			L										\perp			•							
井手23号窯(B-2地区)		Ш			•	•	•			\perp													•							
笹原51号窯 (M-1地区)					•	L																	•				_]			
笹原52号窯 (M-1地区)	L^{T}				•	•	•	Γ	I	J										Γ			•	Γ		$\Box \top$	_1			
ハセムシ18-V号窯					•	•	•			Ι															•					
長者原54号窯 (I地区)	П	Π			•	Т	Г	П	Т	Ť						П				П	П			Т		П	Ť			
長者原55号窯 (I地区)	Π	П			•	Т		Π		\top						T				1	T			Τ		\Box	\neg			
井手19号窯 (B-1地区)	T	\Box			•	T		Т	\top	十							1	1		\top	\top			\top		\Box	\neg			
井手26号窯 (B-2地区)	t	Н			•	t		\vdash	\top	\dagger						t	1			T	T			T		\Box	\dashv			
井手40号窯 (B-4地区)	Т	\vdash			•	$^{+}$	\vdash	\vdash	+	†					\vdash	t	+	\vdash		+	+			+		\vdash	\dashv			
井手47号窯 (B-4地区)	\vdash	Н			•	+		\vdash	+	+					1	1	+	1	1	\vdash	+		\vdash	+		+	\dashv	4)		
	\vdash	\vdash			 	•	\vdash	\vdash	+	+		_	\vdash		+	+	+	1	+	+	+		\vdash	+	1	\vdash	⊢'	-1/		
後田61-V号窯	\vdash	Н			\vdash	-	-	\vdash	+	+	-	-	\vdash		1	+	+	1	1	+	+		\vdash	+	-	+	\dashv			
本堂5次2号窯	\vdash	$\vdash \vdash$		-	-	•	-	\vdash	+	+		-			-	-	+	\vdash	+	+	+		\vdash	╀	-	\vdash	\dashv			
本堂5次5-Ⅱ号窯	\vdash	\sqcup		-	•	-	•	\vdash	+	+		_	\vdash	_	\vdash	₩	+	1	-	\vdash	+	\vdash	-	\vdash	-	\vdash	\dashv			
本堂5次5号窯	_	Ш			•	-	_	\vdash	_	1			\perp		_	_	_	_	_	_	_	_	_	1	_	\sqcup	_			
道ノ下13号窯(G地区)	1				•	•		1		1					1	1		1		1			1	1						

つづくⅦB期(第4表・総数57基) は各窯跡から出土する器種の構成により、以下のように類型化できる((器種)表記はⅧA期と同様)。

- (1) 蓋杯、高杯、(壺類)、皿・盤類によって構成される窯:12基 (21.1%)
- (2) 蓋杯、壺類、皿・盤類によって構成される窯:12基(21.1%)
- (3) 蓋杯、皿・盤類によって構成される窯: 22基 (38.6%)
- (4) 蓋杯のみによって構成される窯:11基(19.3%)

VII A 期に最も多くの窯跡が占めた蓋杯のみ出土するという類型 ((4)) は比較的少なく (19.3%)、蓋杯と皿・盤類の出土する窯跡が全体の38.6%を占める。これら出土した土器の器種が少数であ

る窯跡は全体の58%近くを占める。一方これらの器種に高杯や壺類が加わる (1) や (2) は合わせて 42%程度を占める。小形器種のみの出土する窯と壺・高杯などの器種の含まれる窯の割合は、Ⅵ A 期の有り方とほぼ類似したもので、およそ6:4という構成比になる。

以上の様相はVII A・B 期の双方で窯跡から出土した器種のみを用いた傾向であったが、次にVII期全体の灰原から出土した土器群による器種構成について概観する。VII A/B 期の灰原の総数は27例である(第5表)。

- (1) 蓋杯、高杯、壺類、甕類、皿・盤類によって構成される窯:19基(70.4%)
- (2) 蓋杯、壺類、(甕類)、皿・盤類によって構成される窯:6基(22.2%)
- (3) 蓋杯、皿・盤類のみによって構成される窯: 2基 (7.4%)

Ⅷ期の窯跡のみを用いた場合とは対照的に、灰原では蓋杯や皿・盤類など小形器種のみが出土する灰原は極めて限られたものであり、逆にこれらの器種に高杯・壺類・甕類などが加わる事例 ((1)) が7割を超える。また、蓋杯と壺類を中心とした構成の灰原 ((2)) を加えると、ほぼ9割を超える灰原が蓋杯・皿・盤類以外の器種を含み、残りの約1割程度の灰原においては蓋杯、あるいは蓋杯

第5表 Ⅷ期の灰原における器種構成

窯跡名		身	杯蓋	iG 身	杯蓋	·B 身	杯A 杯	高杯 有蓋	無蓋	融	蓋	壺類 壺	短頭	長野	瓶类 頁 平并	頁 横角	1. 提船	その i 他	把手 付甕	甕	大甕	Ⅲ· 盤等	碗	鉢類	硯	托	分類	その他	備考
道ノ下14~18灰原(K地 区)					•	•	•		•		•	•	•	•	• 9	?		• ()	瓶子)	•		•		•					*平瓶:頸部のみ
ハセムシ26地区灰原					•	•			•		•	•	•	•	•			• ()	瓶子)			•	Г	•					
ハセムシ6地区灰原					•	•			•		•		•	•	•			• ()	瓶子)	•		•	Г		•	•			*砚:亀形砚
本堂5次2~5号窯灰原	•	•			•	•	•	蓋●			•	•	•					•		•		•	Г	•				瓦(丸瓦)・瓦塔,高杯 脚部	
井手23~26号窯灰原					•	•	•		•		•		•				(瓶	子) •	•			•		•					
井手22·30~32号窯灰原					•	•	•		•		•		•	•								•		•					*鉢:把手付
足洗川C地区灰原					•	•	•		•		•		•	•							•	•		•		•			
笹原51・52号灰原					•	•	•		•		•	•	•							•	•	•	Γ	•					
ハセムシ22地点灰原					•	•			•		•	•	•									•	•						
ハセムシ18地区灰原					•	•	•		•		•	•	•								•	•	Г	•			(1)		
後田61地点灰原	Г				•	•	•		•		•	Τ		•	T				T	•	•	•	•	•					
後田59地点灰原					•	•	•		•		•		•		T				T			•		•					
井手X地点灰原					•	•			•					•						•			•	•					
井手40~42号窯灰原					•	•	•		•				•						•			•		•					
ハセムシ12地区灰原					•	•			•			•								•	•	•	•	•					
本堂5次8・9号窯出土	•	•	•	•	•	•			•		•				T				T	•		•	•						
井手5号灰原6号窯東一括					•	•	•		•		•	T			T								Γ			T			
井手4~9号窯灰原					•	•			•															•					
本堂5次7号前庭部・灰原	•	•			•	•	•		•						T				T			•	T	•					
井手43~46号窯灰原	İ				•	•					•	•		•	T				•	•		•	T			T			
井手29・33号窯灰原					•	•	•				•	T		•	T					•			T	•		T			
井手19~21号窯灰原	Г				•	•	•				Г			•									T	•					
井手19~22・30~32号窯 灰原上層					•	•	•						•									•					(2)		
本堂5次6·7号窯灰原					•	•						•			T				T		•	•	T						
ハセムシ18-Ⅲ~V号窯 灰原					•	•	•				•	T			T				T			•				\exists		高杯脚部	
道ノ下10~12号灰原 (G 地区)	T				•	•	•			İ	Г	T			Ť		T	T	T			•	T			T			
篠振1・2号窯灰原					•	•									\dagger				T				L			_	(3)		
 ■ . ØPDFILL . ○ . DEBEL 												1		1			1	1	1									I	<u> </u>

^{*●:}窯跡出土、○:灰原出土

と皿・盤類が認められるということになる。

以上のような窯跡と灰原のそれぞれにおける器種構成の様相から、当該期の窯跡から出土する器種はより小形の器種に偏る傾向が高く、一方灰原では壺・甕その他の雑多な器種も含まれるということになろう。先にWIA期、WIB期の窯跡のみを取り上げた様相において述べたように、蓋杯・皿・盤類を中心とした器種が出土する窯跡とそれ以外のより大形の器種を含む窯の比率はほぼ6:4程度であった。このような傾向からは、以下のような二つの可能性を想定することができる。全体の6割を占める窯跡においては蓋杯や皿・盤などの比較的小形器種のみが焼成されそれ以外の器種は焼成されなかったという可能性、あるいは、これら小形の器種のみの出土する窯跡でも他の器種の焼成が行われていたが焼成終了後次の使用までに大形器種の破片は全て灰原に廃棄され窯跡には遺存しなかったという可能性である。

一方、灰原での器種構成の様相では、蓋杯などの小形器種のみの出土する灰原は1割に満たない 状況であり、それ以外の器種を含む灰原は全体の9割を占めるという傾向であった。

蓋杯、皿・盤類 : 高杯・壺・甕類などを含む

窯跡 (VII A/B 期) 約60% : 約40% **灰原** (VI期 - VII期) 約10% : 約90%

これらの構成比について単純に数値的な比較をするならば、少なくとも灰原の 9割を占める (1)・(2) としたものの内約 4割ほどの灰原は、蓋杯や皿・盤類に加え高杯・壺類・あるいは甕類などの器種の焼成を行っていた窯跡に対応する灰原と考えることができる。その結果残りの 5割ほどの灰原が、窯跡全体の 6割を占める蓋杯や皿・盤類のみの出土した窯跡から掻き出された器種を含む灰原と考えることができる。このような単純な比較を行うならば、窯跡、灰原ともに蓋杯あるいは蓋杯と皿・盤類のみの出土するものの割合は全体の 1割前後ということになる。すなわち蓋杯や皿・盤など小形器種のみを焼成した窯跡である可能性の高いものは、灰原の様相も踏まえるならば、VII期全体の窯跡の 1割程度を占めるものと考えることができる。しかし、実際には、以上のような窯跡と灰原双方の類型が、個々に近接して造営されている窯の小群においてどのような組み合わせであるのかを検討する必要がある。

(iv) Ⅵ期からⅧ期における灰原・窯跡を統合した様相

以上は、VII期における窯跡と灰原を別個に取り扱ったものであるが、一部VII期以降の窯・灰原も含めて、実際の灰原とそれに対応する複数基の窯跡を統合した器種の構成をみることとする。

これらの灰原と関連する窯跡から出土した土器の器種構成により、これまで同様に大きく4つに 類型化すると以下のようになる(第6表・総数34例)。

- (1) 蓋杯·高杯と壺類がほぼ出土し、それに甕類や皿·盤類、鉢類などが多くの場合伴う (24例・70.6%)。
- (2) 蓋杯・壺類が出土し、それらに加えて甕類や皿・盤類、鉢類が伴う (7例・20.6%)。壺類 以外の器種は (1) に比べ若干共伴する率が低い。
- (3) 蓋杯と皿・盤類のみによって構成されるもの (2例・5.9%)。
- (4) 蓋杯のみによって構成されるもの (1例・2.9%)。

第6表 VI期~VII期の窯跡・灰原における器種構成

窯跡名	時期	杯蓋		杯蓋		整	B 身	杯A 杯	高杯 有蓋	無蓋		重類 重		長頸	瓶類 平瓶	横瓶	提瓶	その 他	把手 付箋	甕	大甕	Ⅲ· 盤等	碗	鉢類	硯 :	£	分類	その他	備考
道ノ下14~18灰原(K地区)	VII A					•	•	•		•	•	•	•	•	•?			瓶		•		•		•					*平瓶:頸部のみ
本堂5次2~5号窯跡灰原	WIA·WI B	•	•			•	•	•	蓋●		•	•	•	0				•		•		•		•				瓦(丸瓦)	• 瓦塔, 高杯脚部
ハセムシ26地区灰原	VII A	П				•	•	0		•	•	•	•	•	•			瓶				•		•		1			
石坂C-2(灰原のみ)	VII B	П				•	•			•		•	•	•						•		•		•	П	1			*長頸壺:肥後系
ハセムシ6地区灰原	VI~VII A	П				•	•			•	•		•	•	•			瓶		•		•			•	•			*砚:亀形砚
井手22・30~32号窯灰原 (B-1)	VII A∼VII B	П				•	•	•		•	•		•	•				瓶				•		•		1			*鉢:把手付
井手23~26号窯跡灰原(B- 2)	VII B	П				•	•	•		•	•		•	0				瓶	•			•		•		1			
足洗川C地区灰原	VII A ~ VII B	П				•	•	•		•	•		•	•					0		•	•		•	Π,	•			
石坂C-1号窯・灰原	VIIB	П				•	•	•		•	•		•	•						•		•		•	•	1			*硯:円面硯
後田61地点灰原	VI~VIB	П				•	•	•		•	•			•						•	•	•	•	•		1			
本堂5次8・9号窯跡出土	V · VII A	•	•	•	•	•	•			•	•			0						•		•	•						
井手X地点灰原(X地点)	VI~VIIA	П				•	•	0		•				•	0					•	П		•	•	П		(4)		
本堂5次6・7号窯跡灰原	VII A • VIII	П				•	•	0		0	0	•	0								•	•	0			٦,	(1)		
ハセムシ22地点灰原	VII A~VII B	П				•	•	0		•	•	•	•							0	0	•	•			1			
ハセムシ18地区灰原	VII A~VII B	П				•	•	•		•	•	•	•								•	•		•	П	1			
笹原51・52号灰原	VII B	П				•	•	•		•	•	•	•							•	•	•		•	П	1			
後田59地点灰原	VII B	П				•	•	•		•	•	0	•					瓶		0		•		•		1			
ハセムシ12地区灰原	VIIA∼VII B	П				•	•	0		•		•	0							•	•	•	•	•		1			
井手40~42号窯灰原(B-4)	VII B	П				•	•	•		•		0	•						•			•		•		1			
本堂5次7号前庭部・灰原	VII A	•	•			•	•	•		•	0											•		•	П	1			
ハセムシ18-Ⅲ~V 号窯跡 灰原	VII B	П				•	•	•			•							瓶				•				1		高杯脚部	
井手5号灰原6号窯跡東一括 (A-3)	VII A	П				•	•	•		•	•															1			
井手4~9号窯跡灰原(A-3)	VII A∼VII B	П				•	•			•	0										0	0		•		1			
後田66地点灰原	VI~VIIA	П				•	•			•										•	•	•		•		1			
井手43~46号窯灰原(B-4)	VII A	П		İ	Ì	•	•	0	İ		•	•		•					•	•		•		0		Ť			
宮ノ本9号窯灰原	VII A	П				•	•				•			•		•							•	•		1			
井手29・33号窯灰原(B-1)	VII A	П				•	•	•			•			•						•				•		1			
井手19~21号窯灰原(B-1)	VII B	П				•	•	•						•								0		•		7	(2)		
井手43号灰原(B-4)	VII A	П				•	•							•							0 (煙)	П						
井手19~22・30~32号窯灰 原上層(B-1)	VIIA∼VII B	П				•	•	•					•									•	П						
井手46号窯跡灰原(B-4)	VII A	П		1		•	•	•			•									0		•		•					
ハセムシ7-1号窯灰原採集	VIIA新	П		T		•	•	•	İ		Ĺ				Ì						П	•	П		П	Ť			
道ノ下10~12号灰原 (G地区)	VII B	П				•	•	•													П	•	П			1	(3)		
作振1・2号窯灰原	VII.A	H		T		•	•	0	İ		Ť				İ								Ħ			Ť	(4)		

(1)と(2)の区分は、高杯を伴うかどうかという器種の有無による質的相違にもとづく。加えて、 (1) に含めた資料24基中甕類は19例 (79.1%) でみられ、Ⅲ・盤類22例 (92%)、鉢類18例 (75%) みられるのに対し、(2) とした灰原7例においては甕類4例 (57%)、皿·盤類4例 (57%)、鉢類 5例(71%)と甕類、皿・盤類を中心としてその頻度が(1)に比して相対的に低いという量的な 相違も認められる。

また、上述の通り™期の窯跡と灰原を別個に検討した場合、蓋杯と皿・盤類など小形の器種のみ を焼成していた可能性の高い窯跡・灰原の比率は全体の1割程度の可能性を考えたが、個々の灰原 とその形成に関連した窯跡群を統合した場合においては、蓋杯のみあるいは蓋杯と皿・盤類の構成

瓶:瓶子・水瓶 *●:灰原出土資料、○:関連窯跡出土資料。(煙):煙道部出土資料

は表6のように34例中合わせて3例で1割を若干下回る(8.8%)。一方、蓋杯や皿・盤類以外に高杯や壺類、甕類・鉢類などより多くの器種が出土する資料、すなわち(1)や(2)をあわせると全体のほぼ9割程度(31例、91.2%)を占めるということになる。

以上の結果から、VII期における窯跡と灰原を別個に取り扱った場合と、VII期からVII期にかけての一灰原の形成に関連した複数基の窯跡の単位を考慮して器種構成をみた場合で、ほぼ同様の結果がえられたものと考えることができる。すなわち、全体の約9割程度の窯跡においては多様な器種が焼成されており、残りの1割程度の窯跡で蓋杯や皿・盤類など比較的小形の器種に限った焼成が行われていた可能性を考えることができる。しかし、このような傾向はあくまで出土器種の有無にもとづくものであり、各器種の量的側面については不明である。ただし、該期の窯跡についてのこれまでの調査・整理の成果にもとづき、多様な器種が焼成されている窯跡の場合でも、焼成される器種の中心あるいは量的に大勢を占めるのは蓋杯や皿などであるものと考えられており、そのような意味では、雑多な器種の出土がみられる9割の窯跡においても中心的に焼成されていたのは蓋杯や皿・盤などであったものということになろう。

(4) まとめ

以上窯跡および灰原出土の土器の器種構成についてその有無にもとづく検討を行った。

Ⅲ期からV期のおおよそ7世紀中頃までの様相については、一つの窯跡で広範な器種の焼成が行われている。また、瓶類や壺類等については焼成を行っている窯跡とそうではない窯跡 (類型(2)・(3) など) があるようであるが、甕類については器種構成にもとづく類型のいずれにおいても焼成されており、特に甕の焼成を行う窯とそうではない窯跡の区分は明確には認められない。

一方、後続するVI期の様相は窯跡数が少ない点やIV期やV期等先行する時期から使用されている 窯跡が比較的多くその実態は不明であるが、限られた資料によるならば、VI期に限定される窯跡に おいては比較的焼成器種が少ない傾向がうかがえるようである。

VII期においては、窯跡と灰原を別個に取り扱った結果、VII A・B 期の窯跡のみによると両期でともに、蓋杯のみあるいは蓋杯と皿・盤類という器種の構成をみる窯跡とこれらの器種に高杯、壺類あるいは甕類を含む窯跡の相対的な比は約6:4であり、灰原のみにもとづく場合であれば約1:9という比率であった。これらに加えVI期、VII期の近接する複数基の窯跡とそれらによって形成された灰原双方から出土した器種を合わせた場合の器種構成においても、蓋杯や蓋杯と皿・盤類というより限定的な器種構成のみられる事例は全体のほぼ1割程度であり、残りの約9割程度の事例においてはこれらの器種に壺類・高杯、甕類、あるいは鉢類などの器種が伴っており、より幅広い器種の焼成が行われているものと考えられる。

これまでにも既に先学により、7世紀後半以降、窯の造営の有り方がそれまでと大きく変化するのに伴い、大形の製品と小形の製品を焼成するための規模の異なる窯跡が存在する点についての指摘がなされている(註6)。このような窯による焼成器種の相違については、道ノ下窯跡群 K 地区においても指摘されており、17号窯跡において高杯や盤が多くみられることからこれらの器種を専門に焼成したものとの指摘がなされている(県3)。今回の検討においては、個別の窯跡出土資

料あるいは灰原出土資料を細かに検討せず、大まかな類型化による時期ごとの傾向を概観したにとどまり、これまで指摘されてきたような器種による焼分けについて詳細に検討を加えるにはいたらなかった。しかし、資料に限界があるものの、おおよその傾向を把握することができたものと考える。今後上記のような窯による器種の焼分けといった問題については、より詳細かつ量的な観点も踏まえ、また窯の規模との相関関係も含めた検討が必要であろう。

(5) その他の器種

器種構成についてまとめたが、ここでは牛頸窯跡群で生産された土器のうち、比較的出土量が少ないものについて触れておきたい。なお、瓦は次項で、陶棺、硯、瓦塔などはV-4で取上げ、ここでは供膳具、貯蔵具、煮炊具を取上げる。第40~43図に示したものがそれに当たる。

第40図と第41図は通常瓶あるいは瓶子と呼ばれているものである。特に第40図の1~8はいわゆる水瓶である。第40図1・2・8と9以降並びに第41図を見比べると、水瓶は高台が付きその他は高台が付かない。このことから5・6も水瓶と考えた。瓶には器高と胴部最大径によって高くスマートに見えるものと、低くずんぐりしたものがある。また、通常の大きさのもの以外に第40図14・17・22のように小形のものも見られる。WIA期とVIB期の8世紀代に見られる。

第42図は双耳瓶である。高台は付かず、肩部に耳が一対付けられるものである。6は耳の形が違うがここで紹介する。これも1~6のようにスマートなものと、7のようにややずんぐりしたものが見られる。基本的にVIIB期(8世紀後半代)に属するものが多い。

第43図の1~7は托である。3は集落遺跡である塚原遺跡から、他の6個はハセムシ窯跡群6地 区灰原からの出土である。3と共伴した須恵器は7世紀後半としたVI期の蓋杯類である。ハセムシ 窯跡群6地区灰原からはVI期からVIIA期の須恵器が出土している。このことから托は7世紀後半か ら8世紀前半頃に作られたとして良いだろう。また、現在のところ焼成した窯跡もきわめて限られ ている。

 $8 \sim 14$ は把手の付いた甕である。 $10 \cdot 11$ は内外面ともナデと回転ナデである。その他は内面に同心円タタキ、外面に格子目タタキを施す。WIB期でも古手の蓋杯に伴うことから8世紀中頃に作られたものであろう。

 $15 \sim 21$ は、金属器を模倣したと思われるものや杯Bの祖形になった可能性のあるものである。 $15 \cdot 16$ は \mathbb{N} A期、 $17 \cdot 18$ は \mathbb{N} B期のものと考えられる領恵器と伴っていることから、6世紀後半~7世紀前半頃のものと思われる。 $19 \sim 20$ は稜椀と呼ばれるものとその蓋である。身は杯の体部中央に稜を持ち、口縁端部が外反して平坦面を作り出している。蓋はつまみと口縁部に向かう体部の形状が他と違っている。これらは \mathbb{N} B期の領恵器と伴っていることから8世紀中頃から後半にかけてのものと思われる。15から18は窯跡から、 $19 \sim 21$ は集落遺跡である日ノ浦遺跡の廃棄土坑からの出土である。集落遺跡からの出土は必ずしも牛頸窯跡群産のものとは断言できないが、その可能性が高いことは間違いないことであろう。

以上であるが、未報告ながら上大利北土地区画整理事業地内に当たる本堂遺跡から環状瓶や多口瓶が出土している。前者は山陽地方などから多く見つかっているもので、後者は大宰府史跡でもあまり例のないものである。

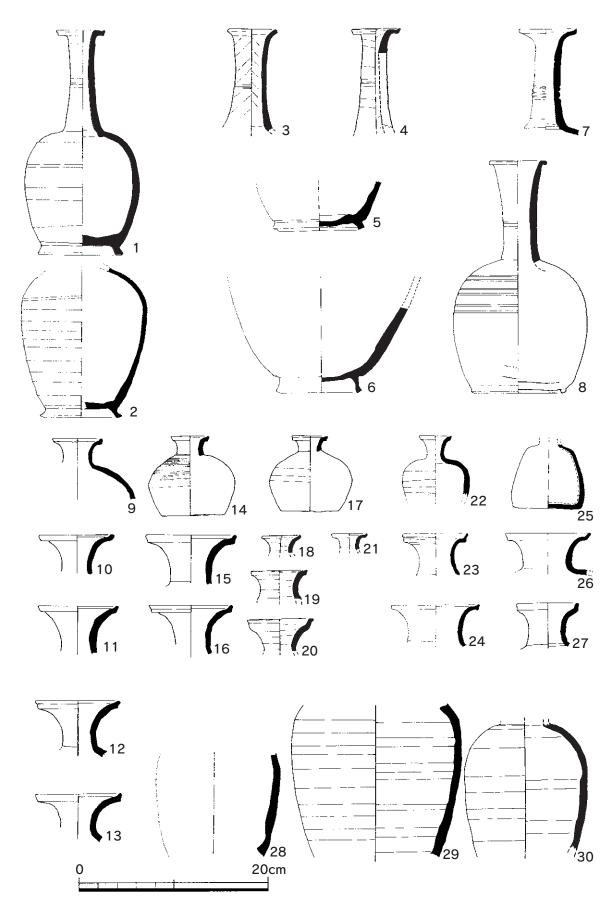
- 註1. 小田富士雄「九州の須恵器」『世界陶磁全集』 2 日本古代 小学館 1979 舟山良一「須恵器の編年-2九州-」『古墳時代の研究』第6巻 土師器と須恵器 雄山閣 1991 舟山良一「北部九州-生産地の様相-」『古代の土器研究会-第5回シンポジウム立調的土器様式の西・東 5 ~ 7世紀 の土器-』1997 など
- 註2. 舟山良一「第四章 牛頸窯跡群」『大野城市史』上巻 大野城市史編さん委員会 2005 石木秀啓 「牛頸窯跡群と九州の須恵器生産体制-八世紀以降を中心として-」『国立歴史民俗博物館研究報告([共同研究] 律令国家転換期の王権と都市)』第134集、pp.299-353. 2007
- 註3. 遺棄・廃棄の要因は多様であろうが、くわえて「祭祀」によって残された場合などもある(平田 D-1号窯跡(市2)においてその可能性が指摘されている)。なお、このような窯跡および灰原から出土する土器群の資料価値については石木により整理されている(市18)。
- 註4. 前掲註2. 文献
- 註5. 西弘海 「七世紀の土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 II』 1978
- 註6. 中村浩1989「第6章 考察」『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ』大野城市文化財調査報告書第30集

第7表 その他の器種出土遺跡一覧

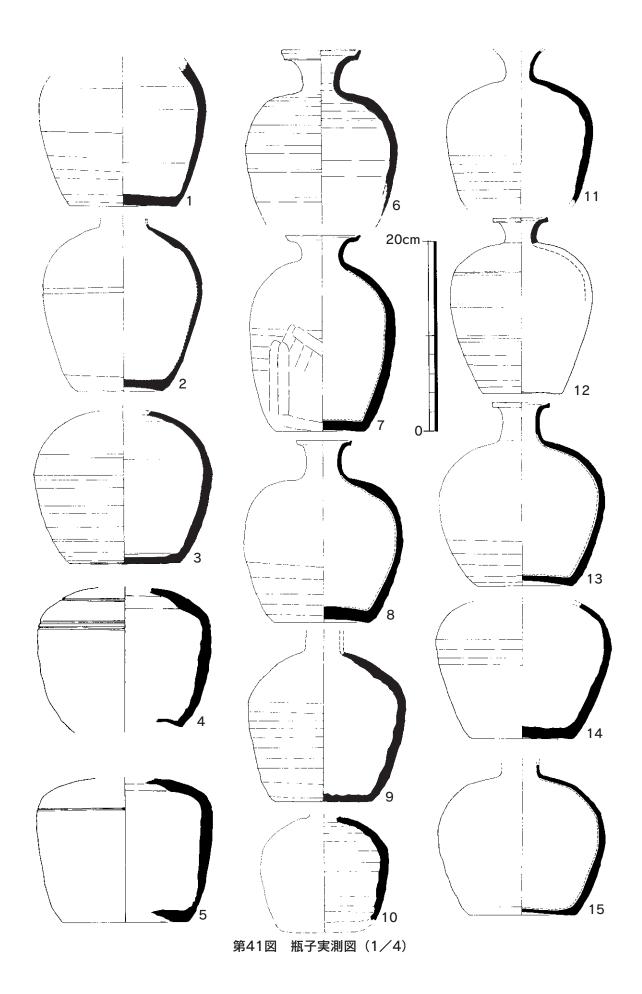
第40図	遺跡名	遺構名	文献		遺跡名	遺構名	文献
1	牛頸井手窯跡群	28号窯跡	県3	9	牛頸足洗川窯跡群	36号窯前面	県3
2	牛頸塚原遺跡群		市44集	10	牛頸本堂遺跡群5次	1~5号窯灰原	市19
3	牛頸井手窯跡群	19~21号窯灰原	県4	11	牛頸後田窯跡群	59-Ⅱ 窯灰原	市11
4	牛頸井手窯跡群	23~26号窯灰原	県3	12	牛頸道ノ下窯跡群	K地区灰原	県3
5	牛頸本堂遺跡群5次	1~5号窯灰原	市19	13	牛頸塚原遺跡群	SK12	市44集
6	宮ノ本遺跡	3号窯跡	太2	14	牛頸後田窯跡群	58-1 窯灰原	市11
7	牛頸本堂遺跡群5次	1~5号窯灰原	市19	15	牛頸塚原遺跡群	SK12	市44集
8	牛頸井手窯跡群	44号南側土坑	県4	10	一块	3K12	111117
9	牛頸ハセムシ窯跡群	26地区灰原	市15	第42図	ī.		
10	牛頸ハセムシ窯跡群	22地区 Ⅲ・Ⅳ 号窯灰原	市10	9542 IS	- 牛頸塚原遺跡群	SK12	市44集
11	牛頸ハセムシ窯跡群	22地区Ⅲ·IV号窯灰原	市10	2	牛頸井手窯跡群	23~26号窯灰原	県3
12	牛頸ハセムシ窯跡群	22地区Ⅲ·IV号窯灰原	市10	3	十頭升十羔 助群 牛頸塚原遺跡群	23~20万羔灰原 SK10	県3 市44集
13	牛頸ハセムシ窯跡群	22地区Ⅲ·IV号窯灰原 22地区Ⅲ·IV号窯灰原	市10		十頭塚原退跡群 牛頸塚原遺跡群	SK10 SK12	□44乗 市44集
13	牛頸ハセムシ窯跡群	18地区Ⅲ号窯跡	市8	4	1 . 2 4 . 4		
15	牛頸ハセムシ窯跡群	22地区Ⅲ·Ⅳ号窯灰原	市10	5	牛頭日ノ浦遺跡群	4号竪穴	市42集
	牛頸ハセムシ窯跡群	22地区Ⅲ·IV 亏黑灰原 22地区Ⅲ·IV 号窯灰原	市10	6	牛頸道ノ下窯跡群	J地区灰原	県3
16			市10	7	牛頸塚原遺跡群	SK07	市44集
17	牛頸ハセムシ窯跡群	18地区Ⅲ号窯跡		66 to 100			
18	牛頸井手窯跡群	23~26号窯灰原	県3	第43図			
19	牛頸井手窯跡群	23~26号窯灰原	県3	1	牛頸ハセムシ窯跡群	6地区灰原	市10
20	牛頸井手窯跡群	23~26号窯灰原	県3	2	牛頸ハセムシ窯跡群	6地区灰原	市10
21	牛頸道ノ下窯跡群	K地区灰原	県3	3	牛頸塚原遺跡群	SK05	市44集
22	牛頸日ノ浦遺跡群	SK07	市42集	4	牛頸ハセムシ窯跡群	6地区灰原	市10
23	牛頸本堂遺跡群5次	1~5号窯灰原	市19	5	牛頸ハセムシ窯跡群	6地区灰原	市10
24	牛頸本堂遺跡群5次	1~5号窯灰原	市19	6	牛頸ハセムシ窯跡群	6地区灰原	市10
25	牛頸塚原遺跡群		市44集	7	牛頸ハセムシ窯跡群	6地区灰原	市10
26	惣利窯跡群	4号住居址	春3	8	牛頸井手窯跡群	23~26号窯灰原	県3
27	牛頸ハセムシ窯跡群	6地区灰原	市10	9	牛頸足洗川窯跡群	36号前面	県3
28	牛頸本堂遺跡群5次	1~5号窯灰原	市19	10	牛頸日ノ浦遺跡群	SK14	市42集
29	牛頸本堂遺跡群5次	1~5号窯灰原	市19	11	牛頸塚原遺跡群	SK10	市44集
30	牛頸井手窯跡群	23~26号窯灰原	県3	12	牛頸塚原遺跡群	SK10	市44集
				13	牛頸井手窯跡群	23~26号窯灰原	県3
第41図				14	牛頸井手窯跡群	44号南側土坑	県4
1	牛頸笹原窯跡群	51・52号窯灰原	県4	15	牛頸小田浦窯跡群	38- I 号窯跡跡灰原	市14
2	宮ノ本遺跡	SX02	太2	16	牛頸後田窯跡群	63- I 号窯跡跡	市11
3	牛頸井手窯跡群	32・33号窯跡	県4	17	牛頸後田窯跡群	46地点灰原	市11
4	牛頸ハセムシ窯跡群	22地区Ⅲ・Ⅳ号窯灰原	市10	18	牛頸後田窯跡群	46地点灰原	市11
5	牛頸ハセムシ窯跡群	22地区Ⅲ·Ⅳ号窯灰原	市10	19	牛頸日ノ浦遺跡群	SK20	市42集
6	牛頸井手窯跡群	3号窯灰原	県3	20	牛頸日ノ浦遺跡群	SK17	市42集
7	牛頸塚原遺跡群		市44集	21	牛頸日ノ浦遺跡群	SK20	市42集
8	牛頸塚原遺跡群	SK12	市44集				

〈挿図第40~43図文献註〉

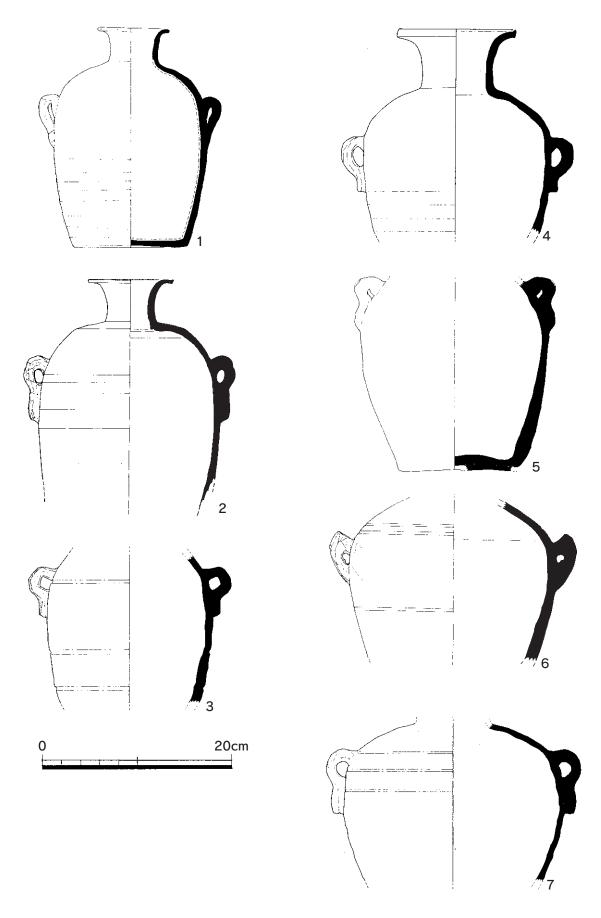
市42集: 德本洋一編『牛頸日ノ浦遺跡群』大野城市教育委員会 1994 市44集: 德本洋一編『牛頸塚原遺跡群』大野城市教育委員会 1995



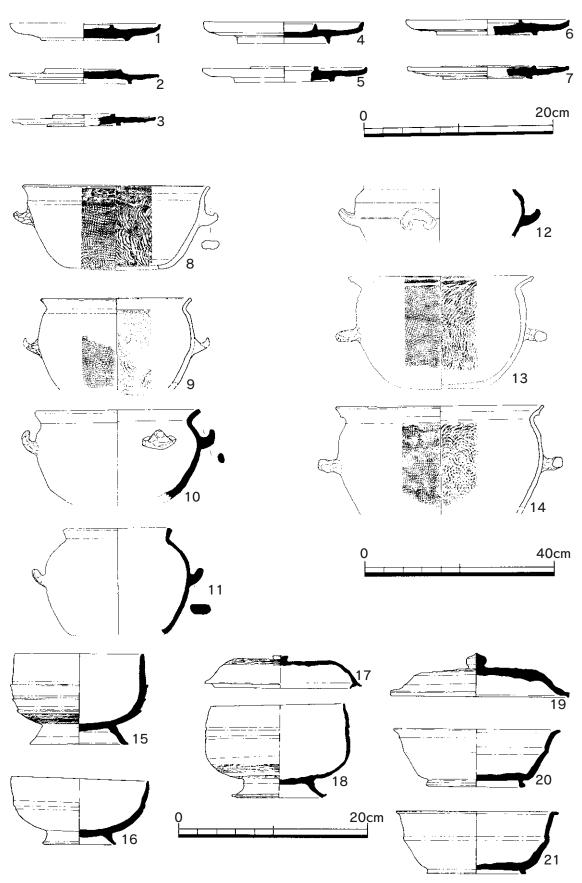
第40図 水瓶・瓶子実測図(1/4)



- 96 -



第42図 双耳瓶実測図 (1/4)



第43回 托·把手付甕·金属器模倣須恵器実測図(1~7·15~21:1/4、8~14:1/8)

3. 瓦

牛頸窯跡群では6~7世紀前半頃を中心にして、須恵器だけではなくいわゆる初期瓦を焼成した 瓦陶兼業窯が見られる。神ノ前窯跡群や月ノ浦窯跡群が良く知られているが、1993年に『月ノ浦窯跡群』刊行時には窯跡8例、関連する集落出土例3遺跡4例を数えることができた。その後上大利土地区画整理事業に伴う梅頭遺跡群、野添遺跡群、本堂遺跡群などの発掘調査等で増えているため、本書の性格上あらためて集成したい。新たに見つかったのは、日ノ浦遺跡17号住居跡、野添窯跡群4次調査2号窯跡、小田浦窯跡群79地点2号窯跡、本堂遺跡7次調査谷部(窯跡灰原の可能性が高い)(未報告)、梅頭遺跡2次調査住居跡(未報告)、梅頭遺跡3次調査土坑(未報告)、本堂遺跡17次調査ピット、である。ただ、上大利土地区画整理事業に伴う発掘調査の整理作業は完了していないため、その進展によってはさらに増える可能性がある。確実に窯跡からの出土としていいのは野添窯跡群4次調査2号窯跡、小田浦窯跡群79地点2号窯跡の2ヶ所で、窯跡の可能性が高いのが本堂遺跡7次調査谷部の1ヶ所、住居跡や土坑出土など集落関係で3遺跡10遺構である。以前の分と合計すると窯跡10例、窯跡の可能性が高いものが1例、集落関係遺構が6遺跡14例になる。一覧表で示す(第8表)。

上大利土地区画整理事業地内の各遺跡の出土状況を見ると、少数の瓦なら今後も相当見つかることが予想できる。従って、単なる出土遺跡・遺構の集成ならあまり意味を持たなくなり、一定程度の出土量がある遺跡や遺構を取上げ、それらの性格を問題にする必要があるだろう。すなわち、生産遺構としての窯跡、集荷等の作業場的な遺構としての住居跡や土坑などである。なお、瓦を使用した遺跡、いわゆる消費地は周辺では今のところ見つかっていない。

第8表 牛頸窯跡群内瓦出土遺構一覧表

		遺構名	所在地	瓦の種類	参考文献等
	1	神ノ前2号窯跡	太宰府市	軒丸瓦・丸瓦・平瓦	神ノ前窯跡
	2	大浦 2 号窯跡	大野城市	丸瓦・平瓦・熨斗瓦	野添・大浦窯跡群
	3	野添13号窯跡	大野城市	丸瓦・平瓦・熨斗瓦	野添窯跡群
窯	4	野添 4 次調査 2 号窯跡	大野城市	軒丸瓦	牛頸野添窯跡群Ⅱ
跡出	5	月ノ浦 I 号窯跡	大野城市	軒丸瓦・丸瓦・平瓦・鴟尾	牛頸月ノ浦窯跡群
土	6	小田浦28地点	大野城市	丸瓦・平瓦・その他	同上
例	7	小田浦79-2号窯跡	大野城市	丸瓦・平瓦・熨斗瓦	牛頸小田浦窯跡群Ⅱ
	8	大谷窯跡	大野城市	丸瓦・平瓦	春日地区遺跡群Ⅲ
	9	浦ノ原4号窯跡	春日市	平瓦	浦ノ原窯跡群
	10	春日平田窯跡	春日市	平瓦	野添・大浦窯跡群
	11	本堂7次調査谷部	大野城市	平瓦	未報告
	12	浦ノ原A地区竪穴状遺構	春日市	平瓦	浦ノ原窯跡群
	13	惣利西遺跡2号住居跡	春日市	平瓦	春日地区遺跡群Ⅲ
	14	惣利西遺跡 4 号住居跡	春日市	丸瓦・平瓦	春日地区遺跡群Ⅲ
集	15	九州大学筑紫地区キャンパス内遺跡	春日市	平瓦	
来落	16	日ノ浦遺跡17号住居跡	大野城市	平瓦	牛頸日ノ浦遺跡群
関	17	梅頭遺跡2次調査SX07	大野城市	丸瓦・平瓦	未報告
係遺	18	梅頭遺跡2次調査SX08	大野城市	平瓦	未報告
堪 構	19	梅頭遺跡2次調査SX25	大野城市	平瓦	未報告
出	20	梅頭遺跡2次調査SX21	大野城市	平瓦	未報告
土例	21	梅頭遺跡2次調査SX27	大野城市	平瓦	未報告
ניען	22	梅頭遺跡 3 次調査 S X 12	大野城市	平瓦	未報告
	23	梅頭遺跡 3 次調査 S X 13	大野城市	丸瓦	未報告
	24	本堂遺跡17次調査SP89	大野城市	平瓦	未報告
	25	本堂遺跡17次調査SP150	大野城市	平瓦	未報告

神ノ前2号窯跡出土瓦

- 1. 所 在 地 太宰府市 (調査当時は町) 大字吉松
- 2. 調査年 1978 (昭和53) 年10~11月
- 3. 調査主体 太宰府町教育委員会 (福岡県文化課から技師派遣)
- 4. 瓦の種類 軒丸瓦・丸瓦・平瓦
- 5. 文献『神ノ前窯跡』 太宰府町教育委員会 1979
- 6. 遺 構

窯跡は地下式窯で、焼成部上半と煙道部は削平されていた。それでも残存長12.0m を測る大型の窯跡である。焼成部は約2m 幅でほぼ一定である。

7. 出土状態

焼成部第1次床面上から軒丸瓦が、その他は窯内崩壊土堆積層中から出土。

8. 瓦の概要

軒丸瓦 瓦当は無文で、全長44.1cm、直径15.7cm、中心部での瓦当厚1.4cm である。玉縁を持つ。 瓦当面はナデ、胴部凸面は細かな格子目の叩きのあと横方向のハケ目調整。凹面は全体に強い横 方向のナデ。側縁はていねいなヘラケズリ。玉縁は両面ともにヨコナデ。端部が丸く仕上げられ ている点が特徴的。

丸瓦 10点出土。軒丸瓦と同じ技法に よったと考えられるが、凸面が格子目の ままのものがある。

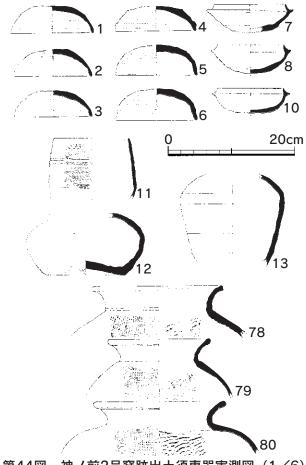
平瓦 45点出土。全体に薄手で厚さは1~1.5cm。粘土板らしきものによるものと粘土紐によるものがある。調整は両面とも指ナデによるもの、凸面をハケ目によって仕上げるもの等がある。模骨の痕跡を明らかにするものはない。

9. 共伴資料

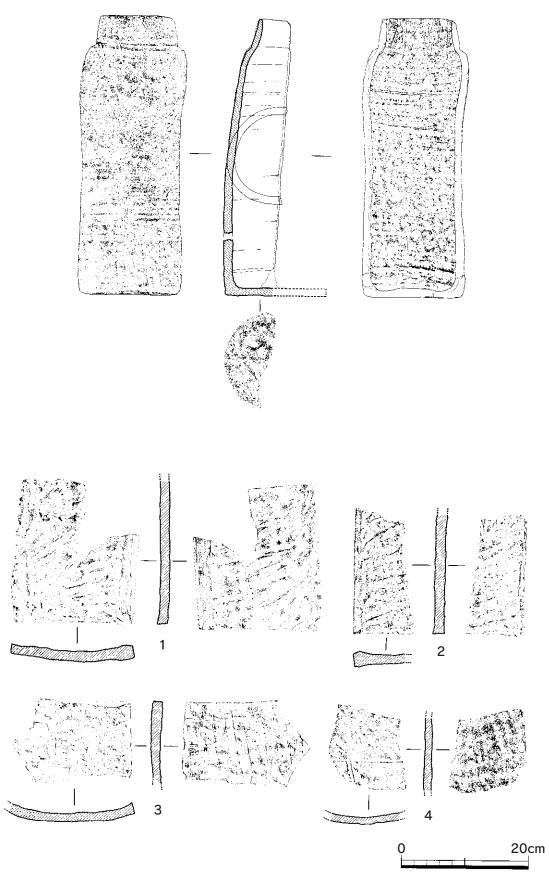
須恵器は小田氏編年のIVA期のものがほとんどであるが、一部ⅢB期にさかのぼる可能性があるとしている。

10. 小結

瓦は AD600年をさかのぼるとされる。



第44図 神ノ前2号窯跡出土須恵器実測図(1/6) (『神ノ前窯跡』1979より)



第45図 神ノ前2号窯跡出土瓦実測図(1/6) (『神ノ前窯跡』1979より)

大浦2号窯跡出土瓦

- 1. 所 在 地 大野城市(当時は大野町)大字上大利
- 2. 調 査 年 1968 (昭和43) 年6~8月
- 3. 調查主体 福岡県教育委員会
- 4. 瓦の種類 丸瓦・平瓦・熨斗瓦
- **5. 文** 献 『野添·大浦窯跡群』福岡県教育委員会 1970
- 6. 遺 構

窯は地下式の可能性が高いもので、焼成部の約半分から上部が消滅していた。残存長は5.5mである。焼成部はやや胴張り気味のプランで、1~3次の床面が観察できた。壁面にはスサ入り粘土による塗り壁が残っている。

7. 出土状態

瓦は第1次床面からの出土が多い。完形の宝珠形つまみを持つ蓋が共伴している。

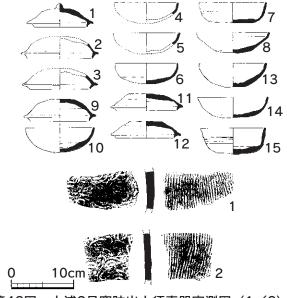
8. 瓦の概要

丸瓦 玉縁を持つものは発見されていない。凹面に模骨と布目の痕跡がある。

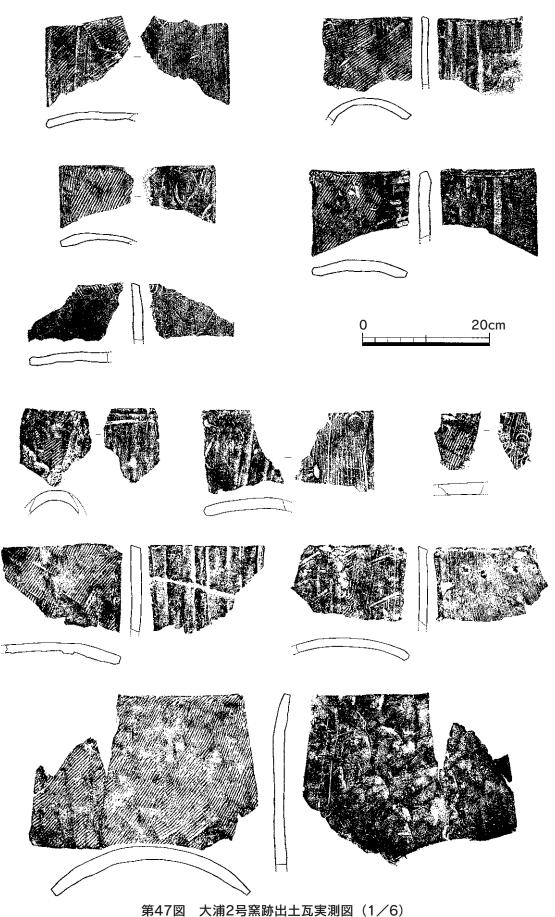
平瓦 凸面には平行叩きがあるもの、ナデを行うものがある。凹面は①糸切痕と思われる平行条痕が全面にありその中に一部布目が見えるもの、②条痕、布目の後から同心円の叩きを行うもの、③条痕、布目の後から円形体のもので叩きしめられているもの、④布目を不規則なヘラケズリで消すものがある。凸面の平行叩きは伴出する甕外面の叩きと同種のものである。また、凹面には模骨の痕跡のあるもの、粘土の継ぎ目が縦に走るものがあり、粘土板桶巻作りの方法がとられたと考えられる。

熨斗瓦 1点だけの出土である。凸面には平行叩きがあり、凹面は模骨の痕跡と思われる縦の凹みの線しか残っていない。

- **9. 共伴資料** 須恵器はⅣ B 期から V 期 に及ぶ時期である。
- 10. 小結 瓦の年代は6世紀末~7世紀 前半代が考えられ、畿内の飛鳥寺や幡枝 窯と同時期、少なくともこれよりは下ら ない時期に北九州でも瓦の生産が始まっ ていたことが判明した。



第46図 大浦2号窯跡出土須恵器実測図 (1/6) (『野添・大浦窯跡群』1970より)



第47図 大浦2号窯跡出土瓦実測図 (1/6) (『野添・大浦窯跡群』1970より)

野添13号窯跡出土瓦

- 1. 所 在 地 大野城市大字上大利
- 2. 調 査 年 1986 (昭和61) 年8~9月
- 3. 調查主体 大野城市教育委員会
- 4. 瓦の種類 丸瓦・平瓦・熨斗瓦
- 5. 文 献 『野添窯跡群』 大野城市教育委員会 1987
- 6. 遺 構

燃焼部のごく一部しか残らない窯跡であった。

7. 出土状態

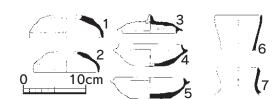
窯体内から2点出土した他は灰原と近くの溝の中から出土している。

8. 瓦の概要

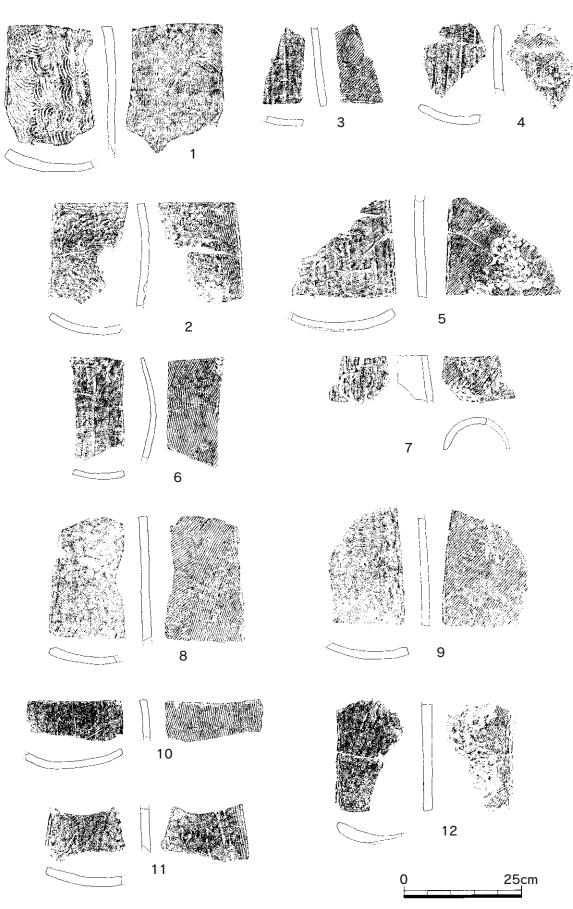
丸瓦 行基瓦で、凸面は平行タタキの後ナデ、凹面は布目が残るがナデている。模骨痕がある。

平瓦 凸面はすべて平行タタキを行なうが、部分的にナデを加えるものが多い。凹面は同心円文タタキのあとナデるもの、布目があってその上をナデるもの、ケズリのあるものがある。模骨痕のあるものも多い。また糸切り状の痕跡のあるものも見られ、粘土板桶巻作りを想定させる。

- 9. 共伴遺物 須恵器はⅣ~Ⅴ期のものである。
- **10. 小結** 野添13号窯跡は大浦2号窯跡と大きな谷をはさんで相対する位置にある。時期的にも同じで瓦の調整法にも類似点が見られるなど、同一工人集団の製作を思わせる。



第48図 野添13号窯跡出土須恵器実測図 (1/6) (『野添窯跡群』1987より)



第49図 野添13号窯跡出土瓦実測図 (1/8) (『野添窯跡群』1987より)

野添窯跡群4次2号窯跡

- 1. 所 在 地 大野城市上大利
- 2. 調 **資 年** 2002 (H14) 年4~10月
- 3. 調查主体 大野城市教育委員会
- 4. 瓦の種類 軒丸瓦
- 5. 文 献 『牛頸野添遺跡群II-第4·5次調査-』 大野城市教育委員会2005
- 6. 遺 構

天井部分が失われた地下式の窯で、焚き口から灰原にかけては以前行われた道路築造の際に削平されている。窯体残存長10.74mであるが、本来は12m 弱と考えられた。平面プランは幅があまり変らない寸胴プランで、排煙孔には弧状の溝が附設される。貼り床は薄かったが2枚認められた。

7. 出土状態

燃焼部床面近くから出土。割れ口に降灰が認められることから二次焼成を受けたと考えられる。 このことから焼台として使用されたものと思われ、この窯の製品でない事もありうる。

8. 瓦の概要

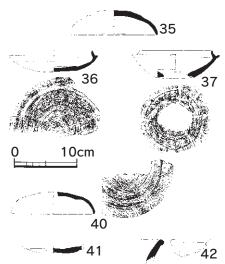
軒丸瓦 凸面部は平行タタキ後カキメを施す。凹面部は横方向のナデが施される。側縁部はていねいなへラきりを行っている。

9. 共伴遺物

須恵器はNA期でもⅢB期からの過渡的な時期に位置付けられる。

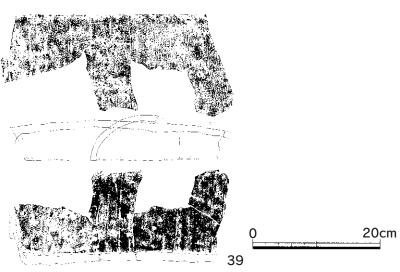
10. 小結

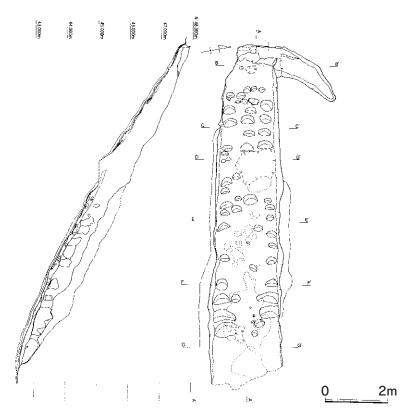
瓦の型式的特徴と共伴須恵器の時期が神ノ前窯跡群2号窯跡出土例と類似している。



第50図 野添4次2号窯跡出土須恵器実測図 (1/6) (『牛頸野添遺跡群 II 』2005より)







第51図 野添4次2号窯跡出土瓦実測図 (1/6) (『牛頸野添遺跡群II』 2005より)

月ノ浦 | 号窯跡

- 1. 所 在 地 大野城市牛頸
- 2. 調査年 1982 (S57) 年5~6月
- 3. 調查主体 大野城市教育委員会
- 4. 瓦の種類 軒丸瓦・丸瓦・平瓦・鴟尾
- 5. 文 献 『牛頸月ノ浦窯跡群』 大野城市教育委員会1993
- 6. 遺 構

窯体は土取りによって完全に消滅していた。その下方の斜面に灰原が広がっていた。

7. 出土状態

灰原からの出土である。また、斜面下方の人家から採集須恵器の提供があったが、聞き取り調査から同窯跡の出土品としたものがある。

8. 瓦の概要

軒丸瓦 2点出土している。花弁が間弁より低く作られるものと、窪みで表現されるものがある。 粘土紐巻き上げ技法で作られている。また一本作りである。「泥条盤築技法」によって作られた軒 丸瓦の例とされる。

丸瓦 玉縁式と行基式がある。一部に竹状模骨 痕を持つものと板状模骨を持つものがある。ま た、粘土板を巻きつけるものと粘土紐を巻き上 げるものがあるなど、製作技法が混在している。 平瓦 400以上の破片がある。狭端部断面が「逆 U字形」を呈するものがある。やはり粘土紐桶 巻き作りと粘土板桶巻き作りのものがある。

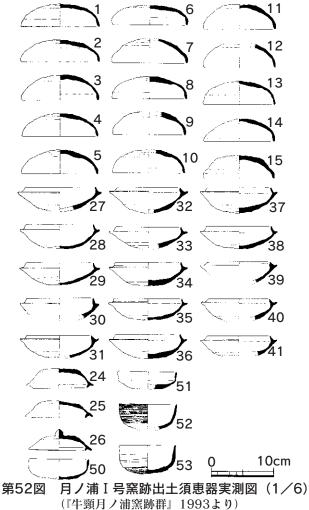
鴟尾 厚手に作られており、他の瓦類から選別 するのは比較的容易である。整理箱 1 箱分ほど の出土量であるが、かなり大型の鴟尾になりそ うなことから部品が足りず全体のイメージが描 けない。

9. 共伴遺物

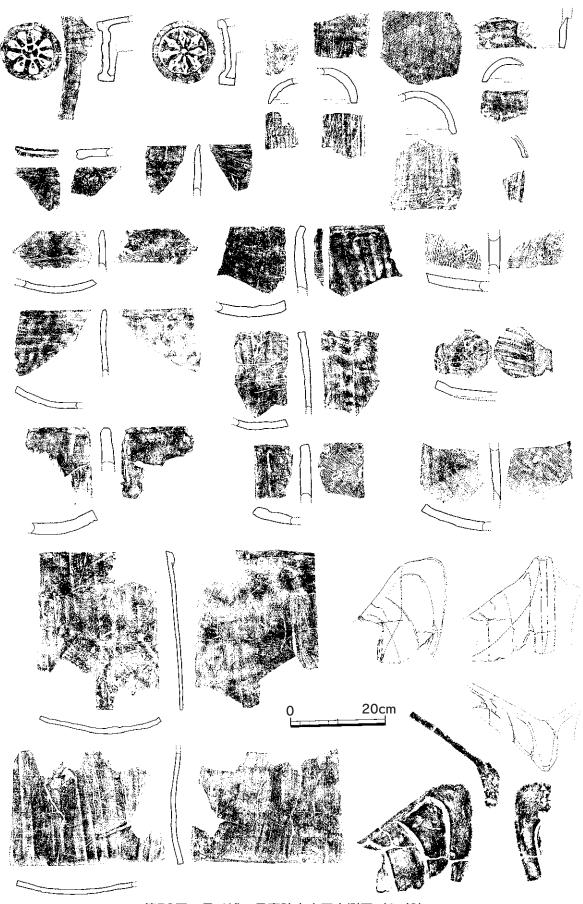
須恵器はNA期の中でも新しい時期~NB期の時期と考えられるが、NB期の時期が多いと考える。

10. 小結

軒丸瓦は蓮弁が窪むきわめて珍しいもので、 丸瓦や平瓦の製作技法が混在している。



- 108 -



第53図 月ノ浦 I 号窯跡出土瓦実測図 (1/8) (『牛頸月ノ浦窯跡群』1993より)

小田浦28地点

- 1. 所 在 地 大野城市牛頸
- 2. 調査年 1986 (S61) 年10月
- 3. 調查主体 大野城市教育委員会
- 4. 瓦の種類 丸瓦・平瓦
- 5. 文 献 『牛頸月ノ浦窯跡群』 大野城市教育委員会1993
- 6. 遺 構

斜面下方に灰層があったため窯跡を想定して発掘調査したが、窯跡は検出できなかった。斜面 自体それほど崩壊しているようには見えないため、窯跡が流失したとは考えにくく、小田浦28号 窯跡とするには躊躇して28地点としたものである。

7. 出土状態

整理箱30箱分の出土量であるが、ほとんどが須恵器で少量の土師器と瓦類そして用途不明の土製品が出土した。すべて灰層からの出土である。

8. 瓦の概要

丸瓦 2個出土した。玉縁式である。凹凸面ともヨコナデを行う。

平瓦 17個分である。粘土紐桶巻き作りか粘土板桶巻き作りか判断できない。凸面はタタキ、へ

ラケズリ、ナデを行うものがある。凹面は模骨痕が明瞭なもの、 ナデるものがある。

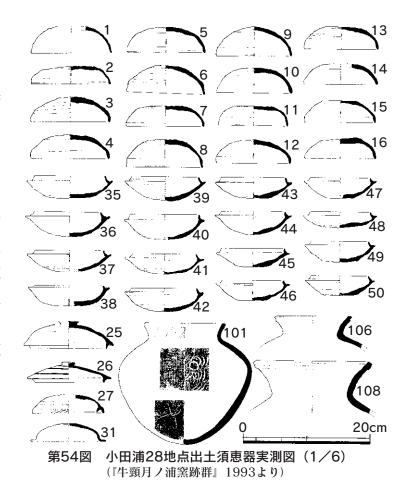
円筒状土製品 さまざまな土製品がある。一部は「V-4その他の遺物」の項で取上げた。

9. 共伴遺物

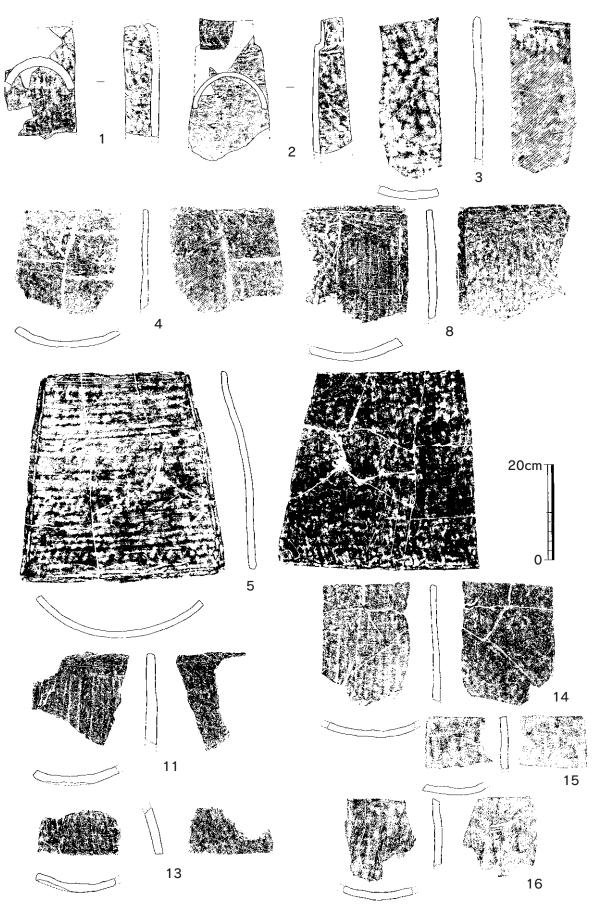
須恵器はNA期、NB期、V期、N期のものを含む。無蓋高杯などは一部ⅢB期としても良いと考える。報告書作成時は複数の窯跡のあったことも可能性として考えていた。しかし、出土量的にはNA期~NB期の須恵器が多い。

10. 小結

用途不明な土製品が多いが、 瓦を含め検討を要する遺物群で ある。



- 110 -



第55図 小田浦28地点出土瓦実測図(1/8) (『牛頸月ノ浦窯跡群』1993より)

小田浦79-2号窯跡

- 1. 所 在 地 大野城市牛頸
- 2. 調 查 年 2004 (H16) 年3月
- 3. 調查主体 大野城市教育委員会
- 4. 瓦の種類 丸瓦・平瓦
- 5. 文 献 『牛頸小田浦窯跡群II』 大野城市教育委員会2007
- 6. 遺 構

窯跡の確認を行い、保存措置を講ずるためトレンチ調査を行なったものであるが、1号窯跡と2 号窯跡が検出された。

7. 出土状態

瓦は1号窯跡の排煙部と2号窯跡関連のトレンチなどから出土しているが、1号窯跡関連のトレンチから瓦は見つかっておらず、焼成は2号窯で行なわれたものと推定される。

8. 瓦の概要

丸瓦 行基式である。凸面は平行タタキ、凹面は布目痕の後にナデかケズリを行う。

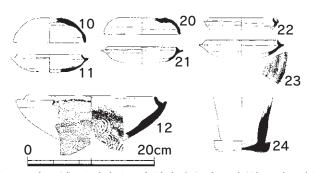
平瓦 凸面は平行あるいは擬格子タタキ、凹面は模骨痕·布目痕を残す。その後ナデるものがある。 凹面に同心円当て具痕のあるものがある。また、糸切り痕の残るものがあることから、粘土板桶巻 き作りのものがある。

9. 共伴遺物

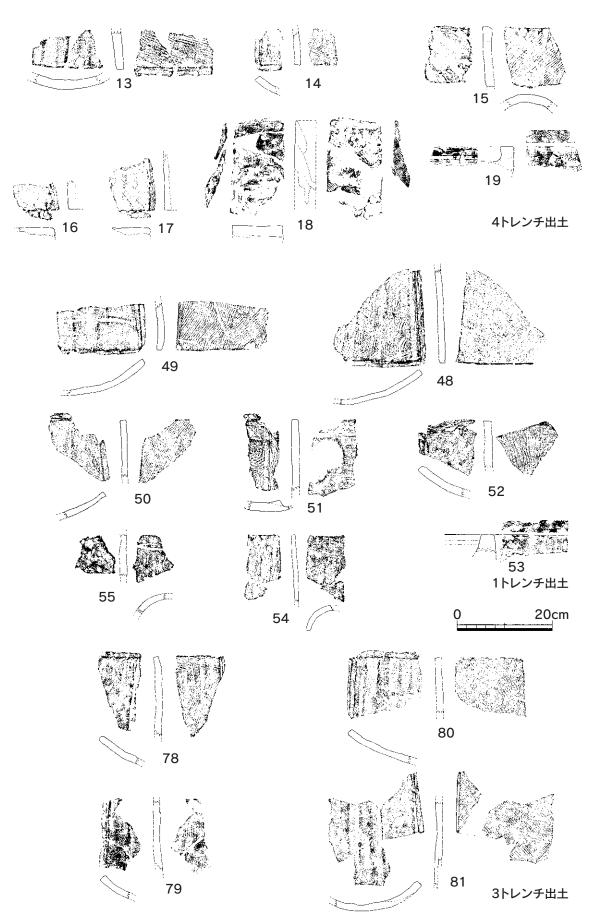
確認調査のため確実ではないが、2号窯跡出土須恵器はNB期のものと考えられる。

10. 小結

窯体の調査は行なっていないため、トレンチなどの状況からの判断になり、推定が多い。



第56図 小田浦79地点2号窯跡出土須恵器実測図(1/6) (『牛頸小田浦窯跡群II』2007より)



第57図 小田浦79地点2号窯跡出土瓦実測図(1/8) (『牛頸小田浦窯跡群II』2007より)

浦ノ原4号窯跡出土瓦 (A 地区竪穴状遺構出土瓦 〈註1〉)

- 1. 所 在 地 春日市下白水
- 2. 調 查 年 1977 (昭和52) 年12月~1978 (昭和53) 年3月
- 3. 調查主体 春日市教育委員会
- 4. 瓦の種類 丸瓦・平瓦
- 5. 文献『浦ノ原窯跡群』 春日市教育委員会 1981年
- 6. 遺 構

4号窯跡は大型の部類に属すが、焼成部上半が削平され、6.05m しかなかった。焼成部の中央付近がやや広がり、1.5m を測る。2回以上のかさ上げの可能性がある。A 地区竪穴状遺構は長方形のプランを有し、柱穴6個を持つ。上部構造として堀立柱建物が考えられている。

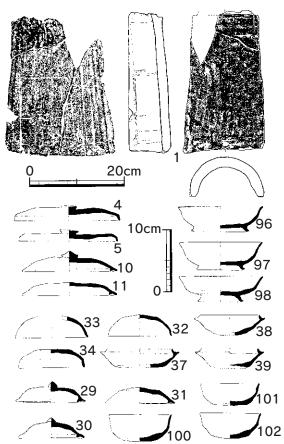
- 7. 出土状態 4号窯跡は燃焼部と灰原上層から、竪穴状遺構は壁に添って出土した。
- 8. 瓦の種類

丸瓦 玉縁の付くもので、模骨痕があり、粘土紐巻き付けが考えられる。叩きは消されている。

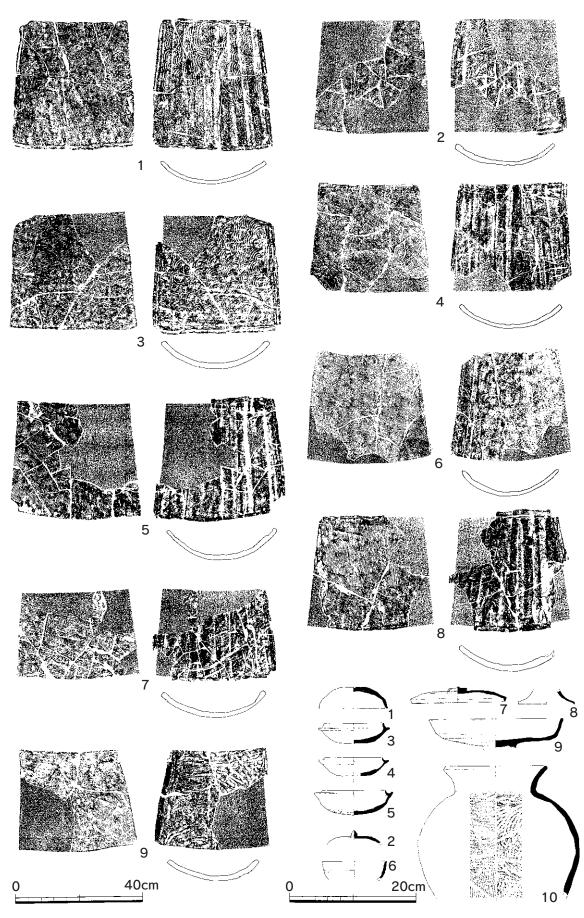
平瓦 粘土紐と粘土板両者があり、凹面には同心円文圧痕の残るもの、ナデのものがある。

- 9. 共伴遺物 出土須恵器はNB~VI期に属するものである。
- 10. 小結 瓦は7世紀後半代のものと考えられる。

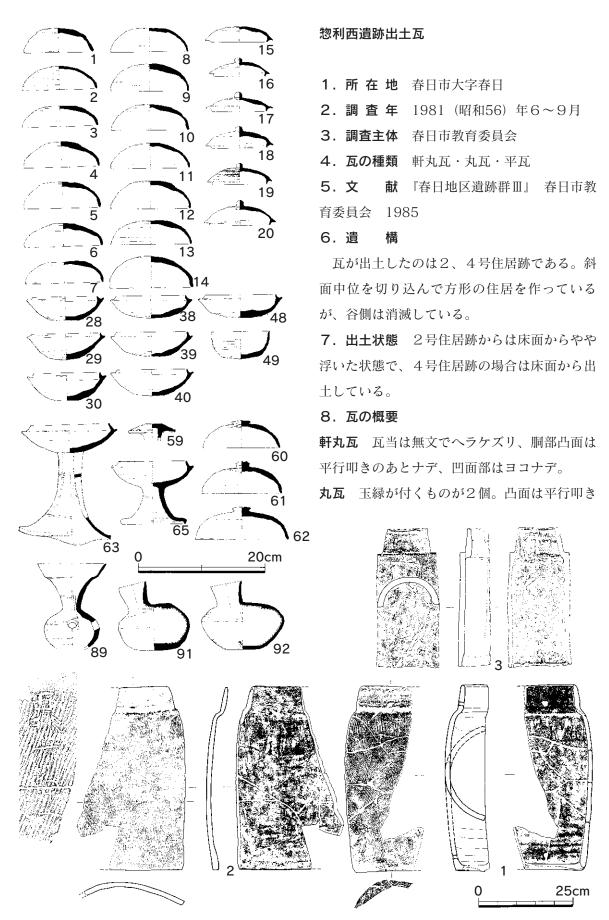
註1. 調査者はA地区竪穴 状遺構出土瓦も4号窯で焼 かれた可能性が高いと考え ている。



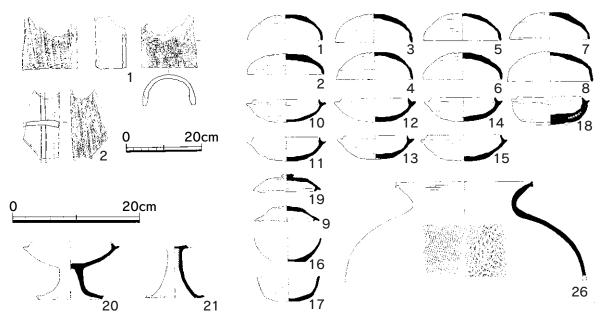
第58図 浦ノ原4号窯跡出土須恵器・瓦実測図(瓦:1/8、土器:1/6) (『浦ノ原窯跡群』1981より)



第59図 浦ノ原遺跡A地区竪穴状遺構出土須恵器・瓦実測図(瓦:1/12、土器:1/6) (『浦ノ原窯跡群』1981より)



第60図 惣利西遺跡2号住居跡出土須恵器・瓦実測図 (瓦:1/10、土器:1/6) (『春日地区遺跡群Ⅲ』1985より)



第61図 惣利西遺跡4号住居跡出土須恵器・瓦実測図 (瓦:1/10、土器:1/6) (『春日地区遺跡群Ⅲ』1985より)

のあとナデ、凹面はナデ、又は布目の残るものがある(2号住居跡出土)。また、凸面をヘラ削り、凹面に模骨痕・布目が残りナデを行うものがある(4号住居跡出土)。

平瓦 凸面へラケズリ、凹面は強いナデを行な うが、布目が残る。平瓦とするには疑問もある。

 共伴遺物 2・4号住居跡ともIV~V期の 須恵器が伴う。

10. 小結 瓦は共伴須恵器から7世紀前半代と

10cm 2

第62図 春日平田窯跡出土瓦実測図(1/6) (『野添・大浦窯跡群』1970より)

考えられる。また、惣利西遺跡自体が須恵器工人集団と関係の深いことが考えられる。

春日平田窯跡表採瓦

近くに灰原のある畑で採集されたものである(第62図)。平瓦で、凸面は平行叩き、凹面には 糸切り痕や同心円文叩きが見られる。共伴須恵器は不明だが、同じく表採資料として杯身があり、 IV期末~V期のものとされる(『野添・大浦窯跡群』p.38)。

大谷窯跡出土瓦

詳細は不明だが、平瓦が出土している。凸面に平行叩き、凹面に布目を残し、IVB期の須恵器と共伴するとのことである(福岡県文化課参事補佐高橋章氏による)。

九州大学筑紫キャンパス内遺跡出土瓦

当遺跡からは凸面に平行条線のある平瓦等が出土しているが、現在整理中(九州大学助手西健 一郎氏による)。

日ノ浦遺跡

- 1. 所 在 地 大野城市牛頸
- 2. 調査年 1988~2000 (S63.9~H2.3) 年
- 3. 調查主体 大野城市教育委員会
- **4. 瓦の種類** 平瓦
- 5. 文 献 『牛頸日ノ浦遺跡群』 大野城市教育委員会 1994
- 6. 遺 構

日ノ浦遺跡は集落跡であるが、17号住居跡からの出土である。

7. 出土状態

瓦は須恵器、土師器とともに出土した。

8. 瓦の概要

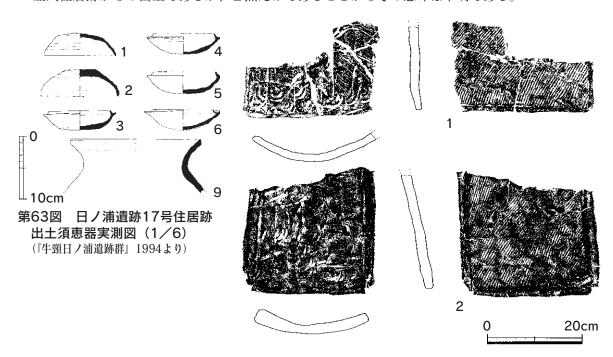
平瓦 2点出土している。凸面は平行タタキ、凹面は模骨痕・布目痕を残す。また、糸切り痕の残るものがあることから、粘土板桶巻き作りと考えられる。凹面の端面付近には同心円文タタキがある。

9. 共伴遺物

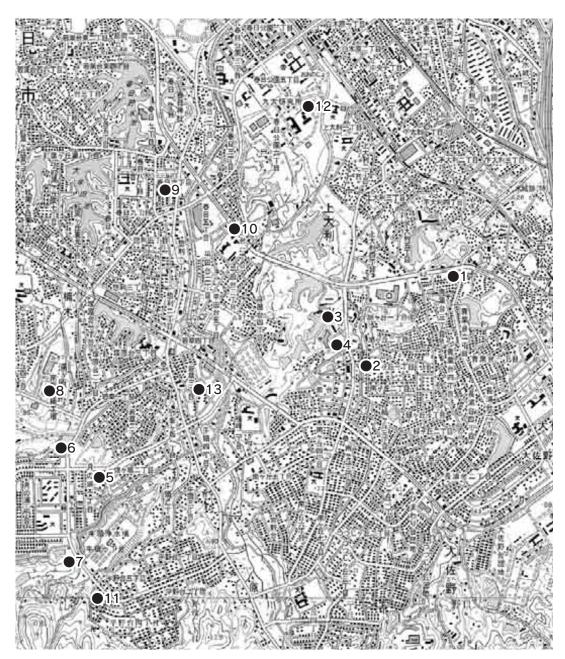
出土須恵器には7世紀後半以降の皿が含まれるが、出土状況から後世の混入の可能性が高い。これを除くとIVB期の須恵器として良い。

10. 小結

竪穴住居跡からの出土であるが、2点だけであることからその意味は不明である。



第64図 日ノ浦遺跡17号住居跡出土瓦実測図(1/8) (『牛頸日ノ浦遺跡群』1994より)



第65図 牛頸窯跡群内の瓦出土遺跡(1/25,000)

- 1. 神ノ前2号窯跡
- 2. 大浦2号窯跡
- 3. 野添13号窯跡
- 4. 野添窯跡群4次調査2号窯跡
- 5. 月ノ浦I号窯跡
- 6. 小田浦窯跡群28地点
- 7. 小田浦窯跡群79地点2号窯跡

- 8. 浦ノ原4号窯跡・A地区竪穴状遺構
- 9. 惣利西遺跡2・4号住居跡
- 10. 春日平田窯跡
- 11. 大谷窯跡
- 12. 九州大学筑紫地区キャンパス内遺跡
- 13. 日ノ浦遺跡

4. その他の遺物

牛頸窯跡群からは須恵器の一般的な供膳具・供献具・貯蔵具・煮炊具以外のものとして瓦、陶棺、円筒状土製品そして三足土器の脚部と考えられる棒状土製品、硯、瓦塔・権・土馬などが出土している。瓦は前項で扱っているので、その他の製品についてまとめておきたい。

陶棺 (第66図)

牛頸窯跡群内の日ノ浦遺跡で見つかった陶棺の破片(第66図5)は棺身の一部であるが、当初は何かわからずにいたもので、現在東北芸術工科大学准教授北野博司氏がその可能性に言及された。しかし、梅頭窯跡1次調査1号窯跡からの底部破片(同6)の出土、そして、野添7次調査2号窯跡からは2個の棺身と1個の蓋(同1~4)が出土するに及んで、確実なものとなった。九州では牛頸窯跡群出土例以外に佐賀市帯隈山神籠石山、同じく佐賀市久保泉町川久保、福岡市南区の浦の田古墳群出土例が知られるのみである。牛頸窯跡群出土例の場合、梅頭窯跡例は比較的しっかりとしたものであるが、野添窯跡群例は作りがあまりうまくなく、補強のためと思われる粘土帯や椀型をした脚部の多さが目立つ。つまり一定した技法が確立されておらず個体ごとに大きな差があるのが特徴的である。

円筒状土製品 (第67図)

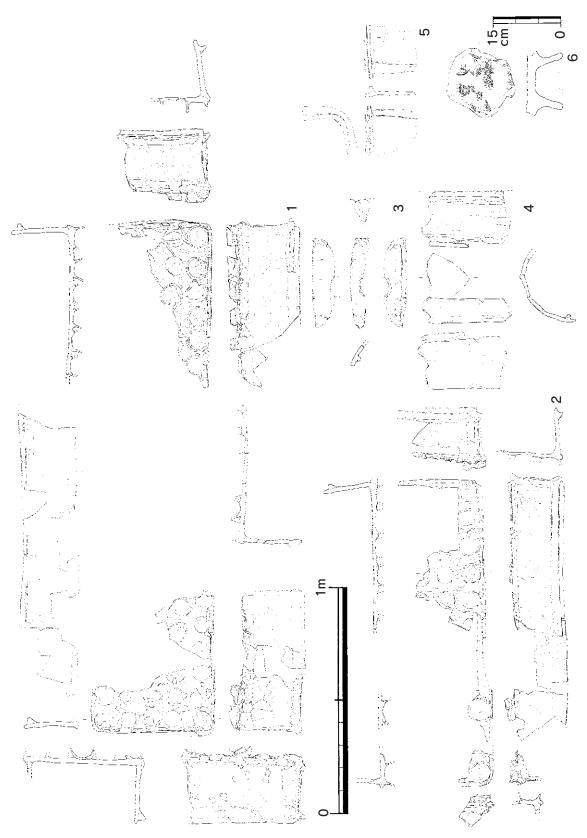
小田浦窯跡群28地点や惣利西遺跡(第67図1・3)、塚原遺跡(同6)で湾曲したものが出土している。土師質であるが、黒斑がほとんど見られないことから、窯で焼成した可能性が強い。用途については、かまどの煙突などとも言われるが、確定的ではない。韓国でふいごで起こした風を炉に送る送風管と言われるものに似ている〈註1〉。小田浦窯跡群28地点と塚原遺跡では直立した製品や、平瓦用として製作した粘土円筒を平瓦として分割せずにそのまま焼き上げたような大型の土製品も出土している。2個以上接続させるような形状をしているものもあるが、基本的な用途は不明である。

三足土器の脚部と考えられる棒状土製品 (第68図)

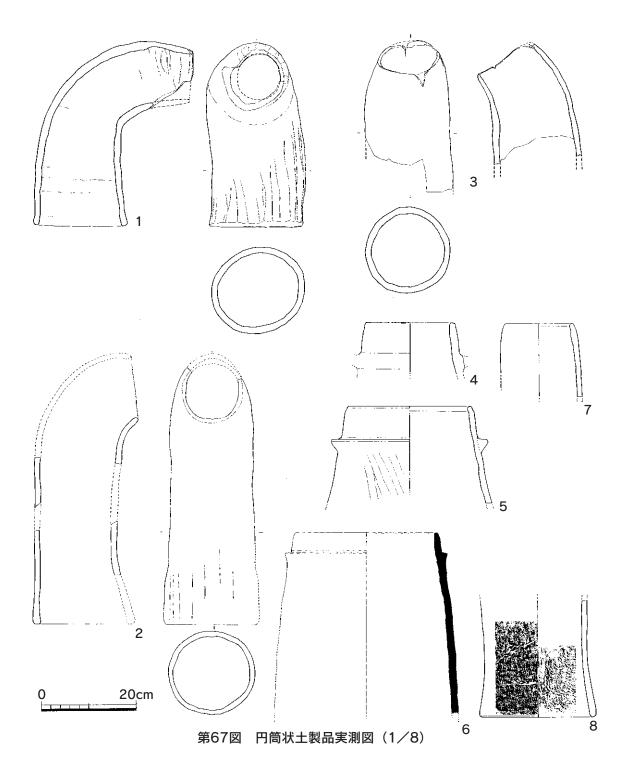
長いものは福岡市の高崎古墳群出土例のような壷形土器の脚部と考えられるものが多いと考えるが、参考に掲示した土師器皿形土器や硯の脚になるものなどもあり、脚の上に付く器形は多様である可能性がある。韓国の三国時代百済に見られる三足土器とは形状等異なっているが、器形のヒントは得ているものかもしれない。集落遺跡からも出土するが、牛頸窯跡群でこの種の土器を生産していたことは確実である〈註2〉。

硯 (第69図) 〈註3〉

硯は製法に特殊な技法を必要とするものではないが、比較的出土数が少ない。蹄脚硯と亀型硯それと携帯用かと思うような小型の異形のものが見つかっている。赤司善彦氏が『牛頸窯跡群Ⅱ』の



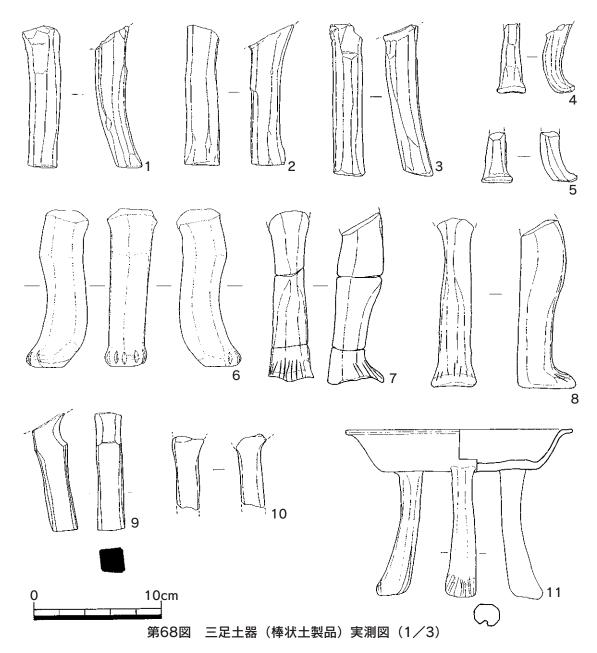
第66図 陶棺実測図



中で、窯跡を70基も調査した割りには硯が4個(実測できたのは3個)しか見つからなかったことを取上げ、需要者側の要求が少なかったことによるものであろうとされ、至近の距離にある大宰府関連遺跡でも少なく、須恵器甕などの転用硯が多いこと、そしてこれらの現象がその他の官衙遺跡でも見られることを指摘されている。

瓦塔 (第70図1 ~ 4)

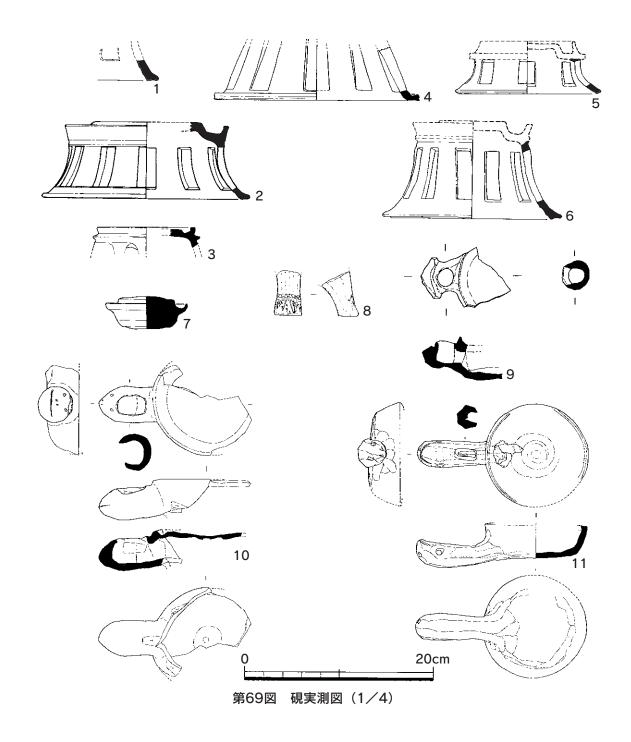
瓦塔は本堂5次調査灰原から出土したものである。焼成した窯跡を特定できないが、8世紀中頃



から後半の時期と考えられる。牛頸窯跡群からの出土は1例に留まるが、九州全体でも18例を数えるのみである。『牛頸本堂遺跡群Ⅲ』(大野城市教育委員会刊行2005)に掲載されている石木秀啓が作成した地名表を再録する(第9表)。トギバ3号窯跡群〈註4〉他北九州市天観寺山窯跡群の5例が目を引く。

権 (第70図5)

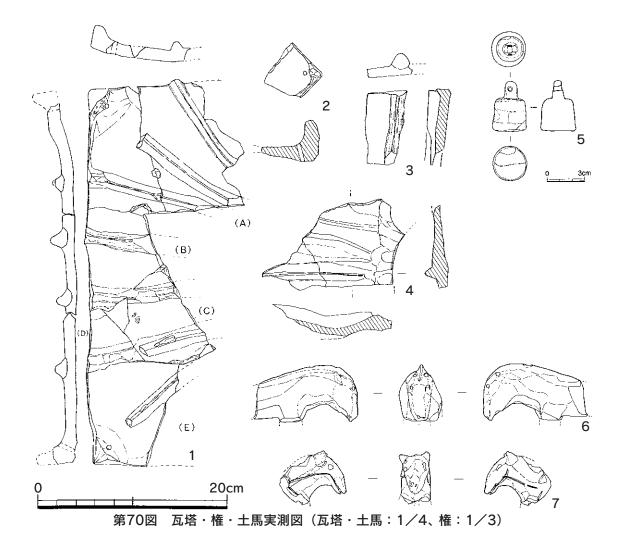
野添窯跡群2次調査2号窯跡から出土したもので、7世紀後半の時期と考えられる。重さの基準とするものを焼き上げて作ることはやや奇異に感じる。焼き上がり時に決まった重さにすることはかなり困難であると考えるためである。しかし、福岡県内でも2004年段階で89例中10例を数えるし〈註5〉、北陸でも同時期36例中25例を占めたという〈註6〉。したがって、絶対的な重さの基準としたものではなく相対的な重さの基準にしたものか、あるいは他の用途を考えることも必要で



あろう。もちろん他に基準となるものがあって、それとの比較によりそれぞれ権の重さが測られ、 その権があらためて重さの基準となるということも想定される。

土馬 (第70図6・7)

集落遺跡であるが、日ノ浦遺跡で2個体出土している。表土層の剥ぎ取り中の出土で、確証はないが、須恵質であることから牛頸窯跡群で焼成したものと考えたい。窯場からの出土例としては、 宗像市の日焼原窯跡群、飯塚市の井手ケ浦窯跡群例が知られる。



- 註1. たとえば忠清北道鎮川石帳里遺跡がある。図録『国立清洲博物館』 国立清洲博物館 2001
- 註2. 嶋田光一「須恵器有蓋三足壷考」『古文化談叢』第30集(中) 1993
- 註3. 自井克也「筑紫出土の獣脚硯」『九州考古学』第79号 2004
- 註4. 小田富士雄・下原幸裕編『豊前・トギバ窯跡の調査』福岡大学人文学部考古学研究室 2007
- 註5. 吉村靖徳「権衡に関する一考察」『九州歴史資料館研究論集』20 1995
- 註6. 望月精司「古代権状錘に関する一考察」『北陸古代土器研究』第10号 2003

第9表 九州の瓦塔出土地名表 (『牛頸本堂遺跡群Ⅲ』 2005より)

No.	遺跡名	所在地	出土遺跡	出土部分	焼成	類	型	共伴遺物	遺構の時期	遺跡の性格	文献	備考
IVO.	退跡石	別征地	·番号	四工品刈	がルス	屋蓋形状	丸瓦表現	共計退初	退件が特別	退跡が注信	又 附 人	
1	本堂遺跡5次 調査	福岡県大野 城市大字上 大利	2~5-Ⅱ号 窯跡灰原	屋蓋	須恵質	方形	棒状粘土 貼付	須恵器	8世紀後半?	須恵器窯跡	中村浩ほか2004 『牛頸本堂 遺跡群Ⅱ』 大野城市文化財 調査報告書第64集	
2	宝満山遺跡	福岡県筑紫野市									亀田修一2002「吉備の瓦塔」 『環瀬戸内海の考古学 – 平井勝氏 追悼論文集』 古代吉備研究会	
3	般若寺跡	福岡県太宰府市									亀田修一2002「吉備の瓦塔」 『環瀬戸内海の考古学 – 平井勝氏 追悼論文集』 古代吉備研究会	
4	大宰府条坊跡 157次	福岡県太宰 府市五条二 丁目	SK005黒灰 色砂	屋蓋	緑釉		半裁竹管	土師器·滑石 製品·石鍋	12世紀中後半 ~13世紀後半	条坊街区	井上信正2002 『大宰府条坊 跡21』 太宰府市の文化財第 61集	
5	トギバ3号窯跡	福岡県北九州市小倉南区	3号窯内上 層	屋蓋	須恵質	円形·方 形	棒状粘土 貼付	須恵器	9世紀初頭?	須恵器窯跡	小田富士雄ほか1977 『天観 寺山窯跡群』 北九州市埋蔵 文化財調査会	
6	籾ノ粉池窯跡 群	福岡県北九州市小倉南区	A地区灰原 採集	屋蓋	須恵質		棒状粘土 貼付	須恵器	8世紀後半	須恵器窯跡	小田富士雄ほか1977 『天観 寺山窯跡群』 北九州市埋蔵 文化財調査会	
7	御祖窯跡群	福岡県北九州市小倉南区	表採	屋蓋	須恵質	方形	棒状粘土 貼付	須恵器	8世紀後半	須恵器窯跡	小田富士雄ほか1977 『天観 寺山窯跡群』 北九州市埋蔵 文化財調査会	
8	山方里窯跡群	福岡県北九州市小倉南区	表採	屋蓋·水 煙·刹	須恵質	方形	棒状粘土 貼付		8世紀後半	須恵器窯跡	小田富士雄ほか1977 『天観 寺山窯跡群』 北九州市埋蔵 文化財調査会	
9	洗子窯跡	福岡県北九州市小倉南区	窯跡灰原	屋蓋·水 煙·九輪· 風鐸	須恵質	方形·五 角形	棒状粘土 貼付	須恵器	8世紀後半~末	須恵器窯跡	田村和裕2003 『洗子窯跡』 北九州市埋蔵文化財調査報 告書第299集	
10	上和泉遺跡9 区B地区	佐賀県佐賀 市久保泉町 大字上和泉	SK9281	初重軸部	土師質			須恵器	8世紀後半~ 9世紀前半	集落	楠本正士ほか2002 『上和泉 遺跡 9 区』 佐賀市文化財調 査報告書第135集	赤彩
11	上和泉遺跡6区	佐賀県佐賀 市久保泉町 大字上和泉	DQ-187 グ リット検出 面、SK6703	屋蓋	土師質		半裁竹管			集落	木村愼治ほか1999『上和泉 遺跡6区』佐賀市文化財調 査報告書第107集	
12	上和泉遺跡7区	佐賀県佐賀 市久保泉町 大字上和泉	SK7008	屋蓋	土師質		半裁竹管	須恵器·土師 器	8世紀後半	群集土坑	楠本正士2004 『上和泉遺跡 7区』 佐賀市文化財調査報 告書第146集	
13	徳永遺跡15区	佐賀県佐賀 市久保泉町 大字上和泉	SD15067	屋蓋	土師質		半裁竹管	須恵器·土師 器	8世紀後半	集落	楠本正士2004 『徳永遺跡15- 18区』 佐賀市文化財調査報 告書第145集	
14	陳内廃寺3次調査	熊本県城南町陳内	北回廊 I t	屋蓋	瓦質		棒状粘土 貼付	瓦·土師器	奈良時代中期以前?	寺院	松本雅明編1965『城南町史』 城南町史編纂会	
15	櫨場遺跡	熊本県八代市					半裁竹管	須恵器·土師器·瓦器·石器	平安時代?	寺院?	江上敏勝1990「熊本県八代 市妙見中宮跡出土の瓦等及 び塔心礎等について」『九州 上代文化論集』	
16		熊本県上益 城郡甲佐町									亀田修一2002「吉備の瓦塔」 『環瀬戸内海の考古学-平井勝氏 追悼論文集』古代吉備研究会	
17	瓦塚遺跡 2次調査	大分県宇佐 市大字石田	SD-2	屋蓋		方形	棒状粘土 貼付	須恵器·土師器·瓦	8世紀後半	郡衙かその関連遺跡	佐藤良二郎1995「V瓦塚遺跡2次調査」『宇佐地区遺跡群発掘調査概要W』	
18	塔ノ熊廃寺	大分県下毛 郡三光村									亀田修一2002「吉備の瓦塔」 『環瀬戸内海の考古学 - 平井勝氏 追悼論文集』古代吉備研究会	

第10表 その他の遺物出土遺跡一覧

第66図	遺跡名 1 牛頸野添窯跡群 2 牛頸野添窯跡群 3 牛頸野添窯跡群 4 牛頸野添窯跡群 5 牛頸日ノ浦遺跡群 6 牛頸梅頭遺跡群	遺構名 2号窯(1号陶棺) 2号窯(2号陶棺) 2号窯(棺蓋) 2号窯(棺蓋) 大溝 1号窯跡	文献 市22 市22 市22 市22 市22 市42集 市24
第67図	 惣利西遺跡 牛頸小田浦窯跡群 惣利西遺跡 牛頸小田浦窯跡群 牛頸塚原遺跡群 牛頸小田浦窯跡群 牛頸小田浦窯跡群 牛頸小田浦窯跡群 	2号住居跡 28地点 4号住居跡 28地点 28地点 28号住居跡 28地点 28地点	春日市Ⅲ 市13 春日市Ⅲ 市13 市13 市44集 市13
第68図	1 牛頸小田浦窯跡群 2 牛頸小田浦窯跡群 3 牛頸小田浦窯跡群 4 牛頸小田浦窯跡群 5 牛頸小田浦濱跡群 6 牛頸塚原遺跡群 7 牛頸塚原遺跡群 8 牛頸塚原遺跡 9 惣利西原遺跡 10 牛頸塚原遺跡群 11 牛頸塚原遺跡群	38- I 号窯 38- I 号窯 38- I 号窯 38- I 号窯 38- I 号窯 表土 SK12 SK12 10号住居跡 22号住居跡 SK08	市14 市14 市14 市14 市44集 市44集 市44集 市44集
第69図	 牛頸井手窯跡群 牛頸石坂窯跡 牛頸日ノ浦遺跡群 牛頸日ノ浦遺跡群 牛頸井手窯跡群 牛頸井月浦遺跡群 牛頸塚原遺跡群 牛頸塚原遺跡部群 牛頸が窓跡群 惣利遺跡 浦ノ原窯跡群 	40~42号窯灰原 C-1号窯 SK04 SK01 19~21号窯灰原 40~42号窯灰原 大溝 SD04 6地区灰原 1号住居跡 4号窯跡	県4 市6 市42集 市42集 県4 市44集 市44集 市10 市IV
第70図	1 牛頸本堂遺跡群5次 2 牛頸本堂遺跡群5次 3 牛頸本堂遺跡群5次 4 牛頸本堂遺跡群5次 5 牛頸野添遺跡群2次 6 牛頸日ノ浦遺跡群 7 牛頸日ノ浦遺跡群	1~5号窯灰原 1~5号窯灰原 1~5号窯灰原 1~5号窯灰原 2号窯 表土 表土	市19 市19 市19 市19 市18 市44集 市44集

〈挿図第66 ~ 70図文献註〉

市42集: 徳本洋一編『牛頸日ノ浦遺跡群』大野城市教育委員会 1994 市44集: 徳本洋一編『牛頸塚原遺跡群』大野城市教育委員会 1995

春日市Ⅲ: 丸山康晴・平田定幸編『春日地区遺跡群Ⅲ』春日市教育委員会 1985 春日市N: 丸山康晴・平田定幸編『春日地区遺跡群N』春日市教育委員会 1986

VI. 窯体の検討

1. 時期ごとの変遷

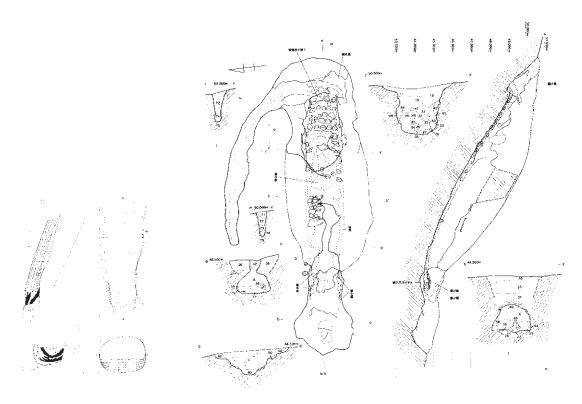
須恵器窯は基本的には燃焼部、焼成部、煙道部からなる単純な構造であるとも言えるが、地域や時期によって多様な姿を見せている。牛頸窯跡群の場合は全国的に見ても他地域にない多孔式煙道が良く知られているし、そこに取り付く溝も特徴的である。しかし、すべての時代にわたって同じではなく、時期ごとに規模や構造を変えている。以下に時期ごとに見ていきたい。ただし、牛頸窯跡群の場合、開窯期から終焉まで基本的に掘り抜きの地下式であることから、要所以外そのことには触れない〈註1〉。また、視点としては、規模、平面形、排煙部の構造、排煙部に取り付く溝の有無と形態、燃焼部の上屋の有無、舟底状ピット等である。平面形については焼成部に最大幅を持ち燃焼部や窯尻の幅が狭いものを胴張りプラン、全体的にほぼ幅が変らないか、窯尻に行くに従って細くなるものを寸胴プランと表現したい。

なお、地下式であることによって必然的に生じる構造もある。すなわち、地下式の場合は天井の厚さが一定以上ないと強度が保てない。あまり薄いと天井が落ちる。この点について、土木関係者に尋ねたところ、土質や空洞部分の大きさによっても違うが、花崗岩バイラン土に幅2 m、高さ1.4 m程度の窯を掘るような場合は1.5~2 mあれば充分で、梅頭1次1号窯跡のような窯の場合は土質がしっかりしており、1 mでも大丈夫かもしれないとのことだった〈註2〉。このことから煙が焼成部を通って多孔式煙道部分を出たら、さらに地上に出るに1.5~2 mの煙突状の空間を通ることになる。

以下に時期ごとの変遷について述べる。

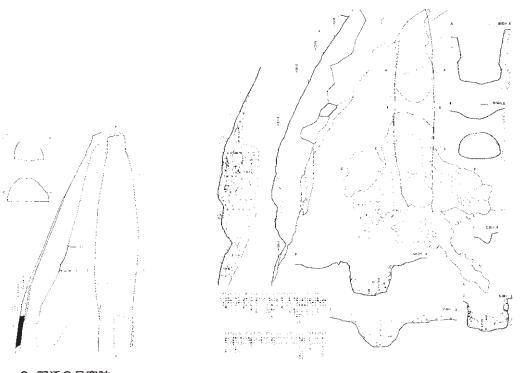
ⅢA期(6世紀前半から中頃)では野添6号窯跡(第71図1)のみになるが、採土等により上下両端が切断されており不詳部分が多い。しかし、地下式であることが確認されている。同窯跡出土須恵器が陶邑窯跡群と関連が深いことは先に述べたが、開窯期から地下式であることは窯築造技術の系譜面から見ると、陶邑窯跡群の場合半地下式が多いことから遺物と矛盾していることになる。また、平面形は焼成部が胴張りのタイプで無段である。

Ⅲ B期(6世紀後半)は野添9号窯跡(第71図2)がある。ほぼ全体が調査された。全長が10m ほどで、やはり焼成部が胴張りのタイプである。溝は見つかっていない。出土遺物の一部がⅢ B期 と考えられる梅頭 1 次 1 号窯跡(第71図3)は極めて残りの良い窯跡であったが、全長13.37m、最大幅2.03m で胴張りプランを呈し、排煙部に弧状に伸びる溝が付けられていた。また、排煙部は多孔式煙道と推測された。溝は深さ1.8mであったが、本来は2mを超えると想定された。同窯跡の場合操業期間はⅢ B期からⅣ A期にかけてとされることから、当初から多孔式煙道で溝が付けられていたかは断定できないが、多孔式煙道と排煙部に付く溝を持つ窯としては牛頸窯跡群で最古の部類に属することになる。この他少量でもⅢ B期の須恵器を出した窯跡を見ると、野添12号窯跡・惣利 1 号窯跡(第71図4)が胴張りプラン、神ノ前 2 号窯跡・小田浦38- I 号窯跡・後田45- I



1. 野添6号窯跡

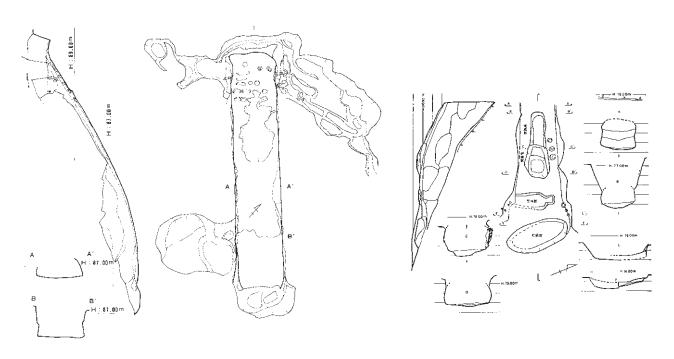
3. 梅頭 1 号窯跡



2. 野添9号窯跡

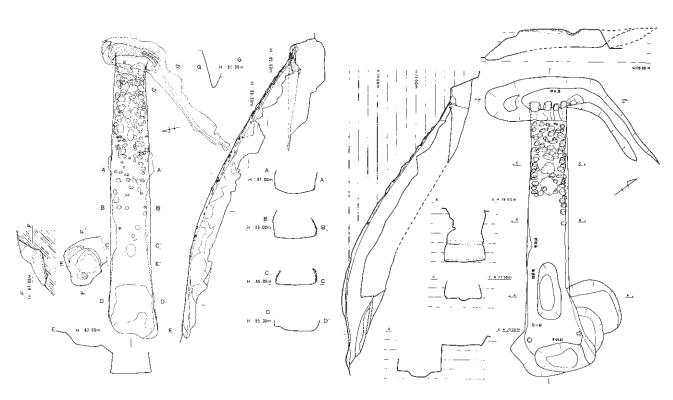
4. 惣利1号窯跡

第71図 窯跡実測図① (1/200)



1. 小田浦 37 - 1 号窯跡

3. 中通 A - 1 号窯跡



2. 後田 45 - 1 号窯跡

4. 中通 A - 2号窯跡

第72図 窯跡実測図②(1/200)

- 131 -

号窯跡(第72図2)が寸胴プランを持つ。また、これらの窯跡のうち小田浦38-I号窯跡・後田 45-I号窯跡の煙道部が残存しているが、多孔式か多孔式と推定でき、溝が取り付く。前代の資料数が少なく不確定要素もあるが、多孔式煙道と溝の採用がⅢB期の終わり頃、あるいはⅢB期からNA期にかけての時期にあったと見ておきたい。

また、平面形については胴張りプランが多い。ただし、寸胴プランも出現している。これについては牛頸窯跡群内の地域差も考慮しなければならない可能性もあるようだ。

他には、惣利1号窯跡の場合、燃焼部でほぼ床幅いっぱいの不整形のピットが検出された。規模は1.5m×1.7m、深さ25cmである。これを舟底状ピットと考えると牛頸窯跡群では最古の例となる。ただし、この時期はこれ1例だけで、後述するようにIVB期にならないと一般化しないものであるので、同列に論じていいか疑問がある。

NA期(6世紀末頃)の窯は多くある。小田浦33-I、37-I(第72図1)、38-I、後田63-I、平田D、平田F-1号窯跡などが当たると考える。基本的に平面形は寸胴タイプで排煙部は多孔式煙道になりそこに取り付く溝を有する。全長も10mを優に超えるが、最大幅はそれぞれ差がある。規模的には最も大きな窯が造られる時期と考えて良いのではと思う。後田45-I号窯跡のように全長が14mを超えるものがある。また、中通A-1号窯跡(第72図3)はVA期からVB期にかけての時期のものと考えるが、舟底状ピットがある。前述したように一般化するのは次の時期である。

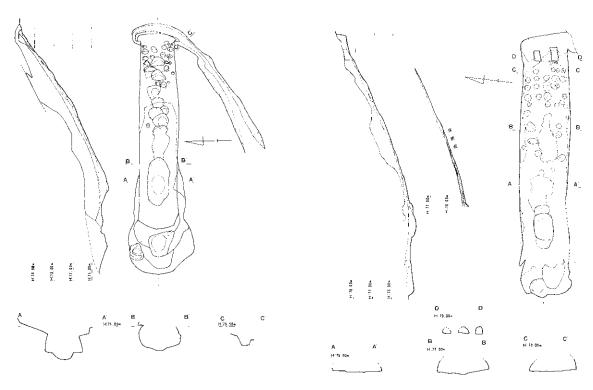
また、この時期から地域的な違いが生じた可能性がある。

NB期(7世紀初頭から前半頃)も多くの窯がある。中通D-1・2号窯跡などが該当するが(第73図1・2)、やはりこの時期も全長は10mを超えるもので、寸胴プランを呈し、多孔式煙道に溝を持つものである。ただ、全長が14mを超えるようなものはなくなり、わずかに短くなる。舟底状ピットがかなり一般化する。

なお、この期だけではなくV期までの窯体側壁に掘削工具の痕跡が観察される場合があることから、貼壁はないと思われるが、床面には薄く貼床があったようだ。地山面の上に硬い粘土質の土層がかぶせられている場合がある。

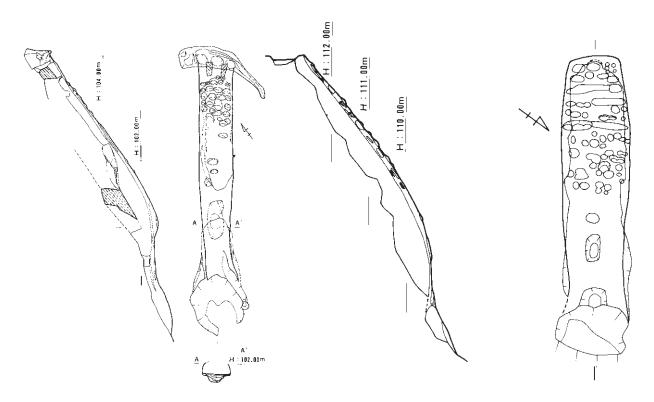
V期(7世紀前半から中頃)は窯が急に少なくなるし、まったく違うタイプの窯が現れる。この期の初め頃と考えた小田浦50-I号窯跡(第73図3)は全長が11.2mあり、依然として寸胴タイプで多孔式煙道と溝を持つものであるが、遺物から見てそれに後続すると考えた後田60-I号窯跡(第73図4)はまったく違うタイプのものである。すなわち煙道は円筒形を呈し、直立するもので、いわゆる直立煙道である。また平面形は胴張りタイプになる。しかし、梅頭1次1号窯跡のような胴張りではなく、両端があまり狭まらないゆるやかな胴張りである。さらに全長も6.65mと小型化し、最大傾斜角度は40°と急傾斜となる。この時期の遺物はいわゆる杯Hではなくなり、杯Gタイプとなり、その他の器種も少なく、高杯等は最小化する。V期は須恵器、窯体ともに大きな変革を迎える時期と言える。

VI期(7世紀後半)はV期に現れた直立煙道タイプの窯が主流になっていくが、多孔式煙道タイプの窯も少し残る。ハセムシ1 - II号窯跡(第74図1)、上平田2号窯跡(第74図3)などが知ら



1. 中通 D - 1 号窯跡

2. 中通 D - 2号窯跡



3. 小田浦 50 - [号窯跡

4. 後田 60 - [号窯跡 (1/100)

第73図 窯跡実測図③ (1/200)

- 133 -

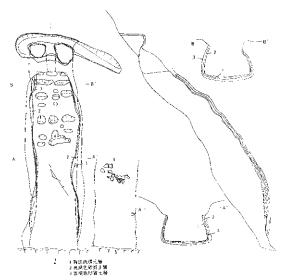
れている。また、大谷3号窯跡は、孔が1段に3個ずつ2段にわたって開けられており、合計6個の煙出しがあるという極めて珍しい構造の窯であり、VI期の終末頃の可能性もあるが、時期の確定は今後の資料の検討が必要である(「付・大谷窯跡群について」を参照)。おそらく上平田2号窯跡(3孔)が多孔式煙道の最終の姿であろう。また、ハセムシ1-II号窯跡は傾斜角度が50度を超え、普通には立っていられない。ハセムシ6-I・II号窯跡(第74図2)もこの期か次の期に属するものであろうが、上平田2号窯跡とともに傾斜角度が45度以上と極めて急である。この期の特徴の1つとして良いであろう。後田63-II号窯跡(第74図4)はこの期の最終末から次期にかけての領恵器を出す窯跡であるが、直立煙道タイプの窯を造っても溝は付ける。一方、後田61-IV号窯跡(第74図5)はこの期の最終末か次期に入る頃の窯であるが溝はない。以上のように、当期はV期に出現した直立煙道タイプの窯を主流にしながらも、前代の多孔式煙道や溝を完全には捨てずにさまざまな窯を造った時期と捉えられる。さらに、この期の煙道には多孔式ではないが直立しないものも見られる。ハセムシ27号窯跡(第75図1)はこの期の末頃に造られたと思われるものであるが、この窯の煙道は焼成部床面の傾斜角をそのまま保ち1孔の排煙口に出る。これは傾斜煙道〈註3〉と言った方が良いのではないだろうか。

このことに触発されて他の窯跡の煙道傾斜角を測ると第11表のようになる。第11表で内傾と表記するのは煙道が鉛直線に対し焼成部側(谷側)に傾いているものを言い、外傾と言うのは逆に山側に傾いているものを言う。 $VI \sim VIIB$ 期の窯跡について時期にこだわらず20度以上外傾しているものを上げると、神ノ前第4号窯跡(約20度)、ハセムシ6-III号窯跡(約40度)、井手X-2号窯跡(約25度)、浦ノ原7号窯跡(約25度)、同8号窯跡(約25度)があり、9世紀以降のものとして石坂E-2号窯跡(約30度)、未焼成窯では長者原68号窯跡(約28度)がある。外傾度だけで判断するのは疑問があるが、野添9号窯跡が約25度外傾していることから、少なくとも25度以上外傾しているものは直立煙道と言ってよいか検討をしてみたほうが良いだろう。この時期の窯跡が基本的に直立煙道であることからこれらが直立煙道の1 亜種か、明らかに傾斜煙道かは窯築造技術の系譜を含めて今後の課題にすべき事柄であろう。

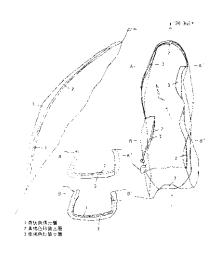
なお、ハセムシ27号窯跡(第75図1)は尾根近くに位置する窯であるが溝を附設する。その溝が窯体のある斜面ではなく、反対側の斜面に伸びるという特異な窯である。溝の用途を考える際に 考慮しなければならないことと思う。

また、V期以前は側壁等に掘削に使った工具痕が見られる場合があり、壁には貼壁は基本的になかったと思うが、直立煙道の小型の窯は貼壁が普通のようだ。ただし、地山とあまり色の違わないものでわかりにくい。窯体の側壁は熱の強さと還元の程度によって内側から灰色、黄色、赤色に変色しているが、中にはその内側にやや違った灰色の土壁のあることがあり確認できる。しかし、花崗岩のバイラン土であることから、どのようにして貼り付けたのか疑問に思う。

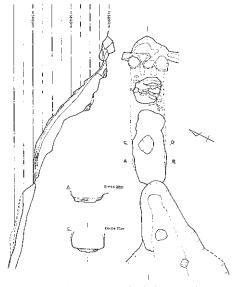
WIA期 (8世紀前半)には古墳時代に普遍的であった長さが10mを超えるようなものはなく基本的に全長が4m以下の小型である。また、多孔式煙道を持つ窯はなくなり、直立煙道タイプのみとなる。平面プランはほとんどが煙道付近で丸く終わる。幅をあまり変えずに煙道付近で丸くなるタイプもあるが、胴張りタイプが多い。ただし最大幅が窯尻近くに位置するもの、中央部にあるも



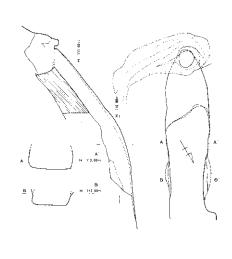
1. ハセムシ1 - Ⅱ号窯跡



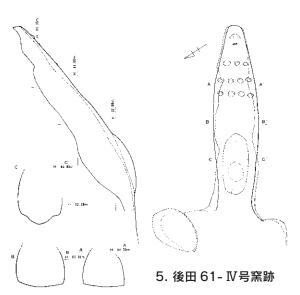
2. ハセムシ6 - Ⅱ号窯跡



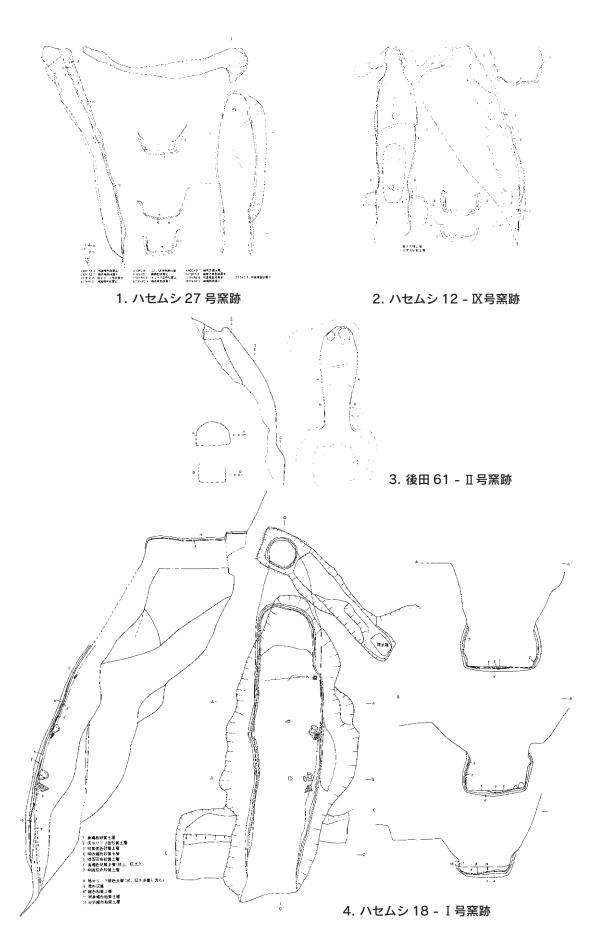
3. 上平田2号窯跡 (1/200)



4. 後田 63 - Ⅱ号窯跡



第74図 窯跡実測図④ (1/100)



第 75 図 窯跡実測図⑤ (1/100)

のがあり形態は多様である。床面の傾斜角度は前代が急だったのに対し緩やかになる。排煙部の溝については、ハセムシ12-IX号窯跡(第75図2)のように痕跡的に付設するものもあれば、この期の始め頃の窯跡と思われる後田61-II号窯跡(第75図3)の場合、窯体の上の地山を屛風のように削り出していて、一見溝を思わせるような例も知られる。それらに続く時期と思われるハセムシ18-I号窯跡(第75図4)は溝を付ける。この期になっても少しであるが溝を持つものがある。

また、この時期は窯の大小によって器種を焼き分ける場合がある。1つの窯場に大型と小型の窯が並存し、大型では大甕とその他の器種を、小型では小型の食器類を焼く。ただし、大きさに関係なく両者とも直立煙道を持つ窯である。現在のところ、このような窯場は地域的な偏りがあって、牛頸川流域に限られている。

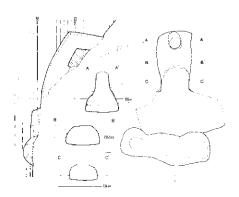
WIB期(8世紀後半)も構造は基本的には変らない。ただし、大甕を焼くような大型の窯はなくなる。

W期(8世紀末から9世紀前半)も直立煙道で小型の窯のみである。井手24号窯跡(第76図 1)を8世紀末から9世紀初頭、本堂5次6号窯跡出土須恵器を9世紀初頭から前半に考えた。井手24号窯跡の平面プランはやや角張っており、横断面形は天井と床が平坦で両側壁が弧状をなす。床の傾斜角度は29度、長さ1.6m、幅0.9m、高さ0.5mを測る小型の窯である。貼床、貼壁等はない。本堂5次6号窯跡(第76図2)は胴張りプランで長さ3.45mの大きさの窯跡であった。天井が半分程度残存していたが、横断面形は天井と床が比較的平らで側壁がやや弧状をなし台形に近い形状を呈する。床の傾斜角度は下方で10度、上位で35度である。床の傾斜は緩い。貼床、貼壁がある。須恵器の編年的位置付けに困る石坂E−3号窯跡(第76図3)は胴が大きくふくらむプランを持つものであるが、煙道の付き方が定かではなく、全長3.93mである。床面の傾斜ははじめ39度と急で後半が23度と緩やかになる。プランや傾斜角度ともに前代までの牛頸窯跡群の窯跡とは違っている。

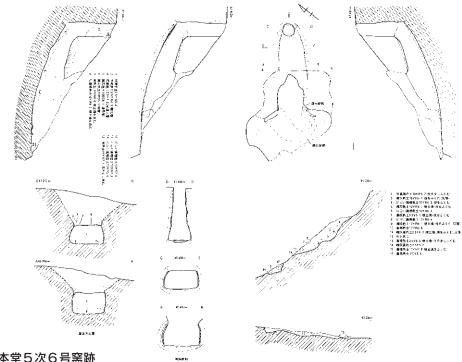
2. 多孔式煙道

現在のところ牛頸窯跡群特有のものである。直径30~40cmほどの孔を横に3ないし4孔並べるものが多い。上下2段にわたって孔が開けられることがあり、大谷窯跡群では6孔の例もあった。報告されていて窯体上部が残存しているものだけ取上げると、多孔式と確認できるものが13基、痕跡的にそうであると推測できるものが10基で合計23基である。最も古い例として出土須恵器の一部がⅢB期(6世紀後半)と考えられる梅頭1次1号窯跡、最も新しい例としてVI期後半(7世紀後半から末頃)と考えられる上平田2号窯跡があげられるが、6世紀末から7世紀中頃までは基本的にすべてこの煙道であった可能性が高い。そして、7世紀中頃に直立煙道を持つ窯が現れ、7世紀後半はそれらが主流になるが、7世紀末頃までわずかながら存続する。

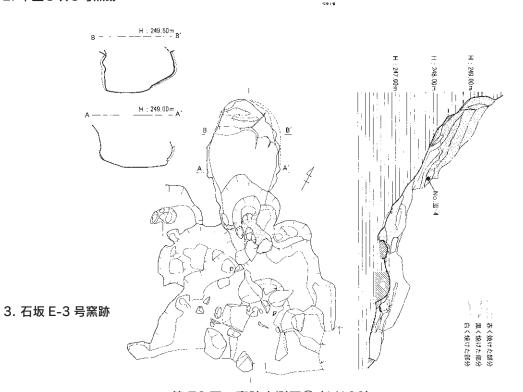
非常に残りが良かった中通A -2号窯跡(第72図4)の場合、4孔あり、1孔ごとの大きさを見ると幅が30~50cmで不ぞろいであった。高さは約40~50cm、長さは50cmほどである。構築方法は掘りぬきと粘土による構築の2種類あったと思われる。小田浦37地点では2基の窯跡が見



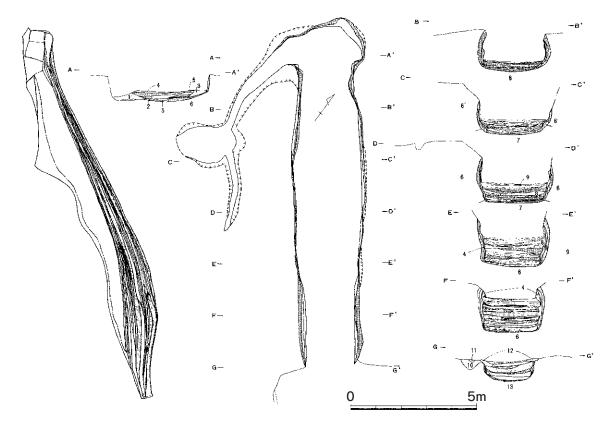
1. 井手 24 号窯跡



2. 本堂5次6号窯跡



窯跡実測図⑥ (1/100) 第76図



第77図 陶邑窯跡群MT5-Ⅲ号窯跡実測図 (1/150) (『陶邑』1971より)

つかった。 I 号窯跡はかなり操業した窯跡で、II 号窯跡はおそらく空焚き段階で崩壊し、一度も操業しなかったものである。 I 号窯跡は多孔式煙道であったが調査中に崩れた。そしてその部分の両側の側壁部には構築材の存在を示す小孔が横方向に向いてあいており、煙道部を後で構築したことが観察された。もちろん最初からそうであったかは証明できないが、未操業のII 号窯跡には多孔式の痕跡が認められなかったことから、空焚きを行って、強度を確保した上で多孔式の煙道部を造るという手順も想定することが可能である。一方前述の中通A - 2 号窯跡や中通B窯跡の場合は煙道部の天井とそれに続く土層の観察から掘り抜きの可能性が高いと思われる。

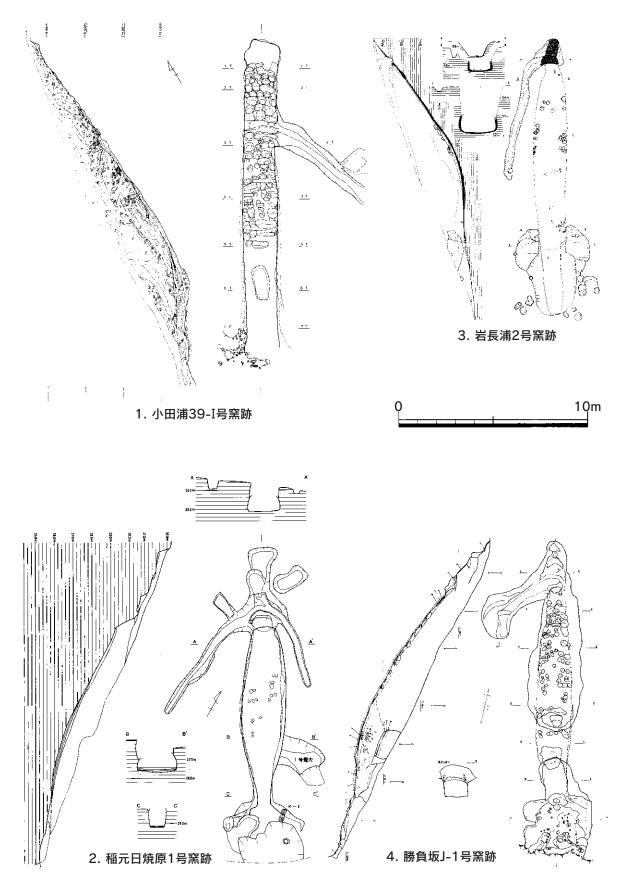
多孔式にする理由は、燃え方を制御しやすいということが考えられる。小田浦37-I号窯跡ではこの部分から須恵器大甕の破片が出土している。ひとつひとつの孔径が小さいことから、大甕の破片などで塞ぐことが可能になる。孔のいくつかを塞いで燃え方を調節し、最終的にはすべて塞いで還元状態を作り出すことができる。同窯跡では溝を付設しているが、弧状に伸びる溝の反対側を窯体幅から少しはみ出させ、その部分では階段状に土を掘り残していた。操業時は相当な高温になったであろうから降りられたかは疑問であるが、排煙部に対するなんらかの工夫であろう。

牛頸窯跡群特有のものであるが、その発生理由あるいは技術系譜についての明確な解答はない。藤原学氏は朝鮮半島の瓦窯からの影響ではないかと考えられている〈註4〉。また、遺物面で陶邑窯跡群との関係が深いと考えているが、このような煙道構造の窯は陶邑窯跡群では知られていない。ただし、MT5-III号窯跡(第77図)〈註5〉は6世紀後半の窯跡であるが、溝が付く寸胴タイプの構造で牛頸窯跡群のものと良く似ている。ただ、煙道部の詳細な構造は不明である。

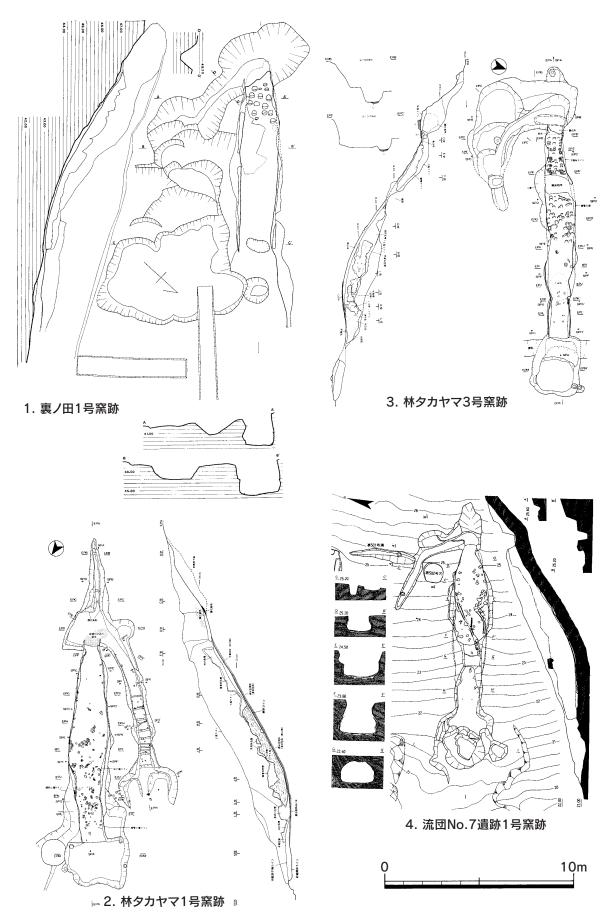
3. 溝

排煙部から弧状に伸びる溝の付けられる窯跡がある。牛頸窯跡群ではⅢB期(6世紀後半頃)の 後半頃から末頃に付けられ始め、NA期(6世紀末頃)・NB期(7世紀初頭から前半頃)に最も 普遍的に見られ、V期(7世紀前半から中頃)以降少なくなりながらも、VI期(7世紀後半頃)や WIA期(8世紀前半頃)にもわずかに見られる。牛頸窯跡群の場合は基本的な特徴として、片側 に付けられて幅が狭いことがあげられる。底部幅は30cm以下である場合がほとんどである。また、 深さが30cm程度しか残っていない場合が多いが、梅頭窯跡1次1号窯跡では深さが1.8mあった。 上部が少し削平されていることが明らかであることから本来は2m程度はあったものであろう。こ こでも大変狭く、底幅が14~28cmであった。上端幅も崩れている部分を除けば0.6m程度である。 大人が普通の歩き方はできずに、横になっていわゆるカニ歩きをするか、先に出した足のつま先の 延長上に次の足を出さないと歩けない。小田浦37-Ⅰ号窯跡のようにやや幅広の溝も検出されて いるが、窯体の改修の結果のようだ。また、小田浦39-I号窯跡(第78図1)の場合は窯体の途 中から伸びていて、他と様相を異にするが、梅頭4次1号窯跡の調査結果(現在整理中)から、窯 体を上部に伸ばした結果使用しなくなったものが残ったということを示すものとしていいようだ。 やはり溝は排煙部に付けられる。この溝については望月精司氏によって精緻な考察が行われ、最近 では渥美賢吾氏によってまとめられている〈註6〉が、牛頸窯跡群の場合について私見を述べたい。 この種の溝は片側に付くものと、両側に伸びるものがあり、北部九州、山陰、北陸、近畿北部、東海、 関東東部などで見られるが、北部九州や北陸など日本海沿海部で密度が高い。また、陶邑窯跡群で は初期須恵器の窯跡に見られる場合があるが、全国的に最も多く見られる6世紀後半から7世紀前 半にかけては非常に少ない。現在最古と考えられているのは島根県門生山根1号窯跡や福岡県宗像 市の稲元日焼原1号窯跡(第78図2)で6世紀初頭頃とされている。北部九州でその次に知られる のは福岡県宇美町の岩長浦窯跡群(第78図3)で6世紀中葉頃とされる。次は同じく小郡市の苅又 窯跡群(第78図4)や太宰府市の裏ノ田窯跡群(第79図1)、そして牛頸窯跡群で6世紀後半から 末頃に現れる。牛頸窯跡群に限らず北部九州ではおおむねその形態から排水用と考えられ、排水溝 と称されることが普通であった。しかし、望月氏は溝の取り付き状況から見て、山側から流れ込 んでくる水はそのまま焼成部へ流れ込み、うまく溝に逃がすことはできないと考え排水溝とは考え にくいとされた。そして、通路あるいは作業路ではないかと考えられた〈註7〉。しかし、その後、 作業通路としての機能を持ち合わせながらも、溝を通ってくる風を利用して排煙を調整する用途が 強いと考えを変えられた〈註8〉(第79図1・2など)。そして溝を排煙調整溝と命名された。以上 のことから、この種の溝の用途として3つの説が提出されたことになる。排水溝説、通路(作業路) 説、排煙調整溝説である。

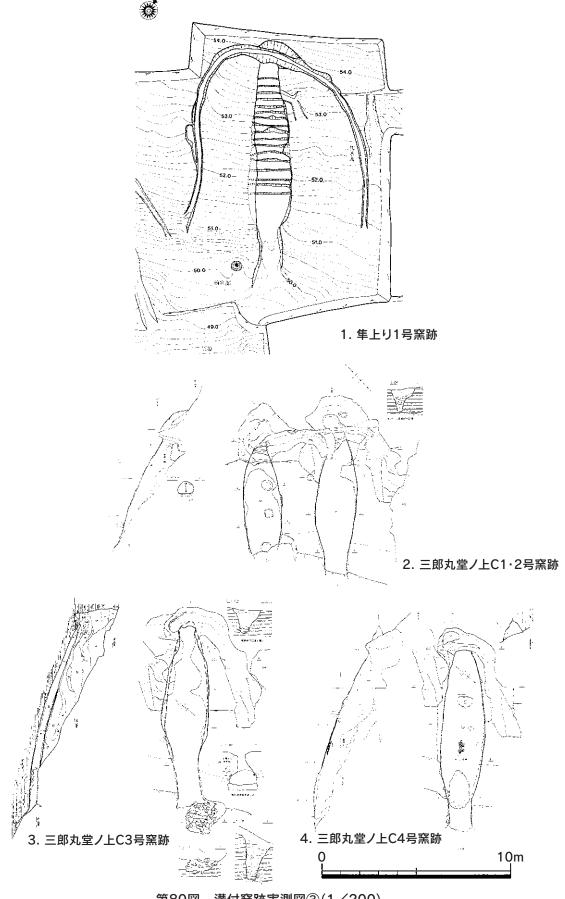
牛頸窯跡群では前述のように当初は排水溝と考えていた。しかし、望月氏の言うとおり排水施設としては不完全である。排水用なら、窯体から少し離して窯体を取り囲むように設置するのが効果的である。実際このような溝に囲まれた窯も存在する。宇治市の隼上り1号窯跡(第80図1)などは煙道部と接点を持つがこの例として良い。もちろん溝は谷側が低くなるから、それなりの排水の



第78図 溝付窯跡実測図①(1/200)



第79図 溝付窯跡実測図②(1/200)



第80図 溝付窯跡実測図③(1/200)

- 143 -

役も果たしたことは間違いない。特に窯を使用していな時は排煙孔を板かなにかで被って水が入ら ないようにしていたことであろうから、すき間を通して流れ込む水などの排水の役にはたったこと であろう。しかし、それは主要な用途ではない。それでは通路としてはどうであろうか。これは前 述のとおり狭いことからかなり考えにくい。梅頭窯跡1次1号窯跡の例に限らず普通の歩き方では 歩きにくい。通れれば良いという考えから、なるべく掘削土量を減らして結果として狭くなったと いう見方もできるが、そのように狭く深い溝は通りにくいだけではなく、大変掘りにくい。また、 通路としてだけの用途なら、溝を掘らずに地表面に階段を付けた方が良いのではという考えもでき る。溝の底部が硬く締まっている例のあることからそれなりに作業路として使用した場合もあった ろうが主要な用途としてはやはりこれも考えにくい。梅頭窯跡1次1号窯跡のような状況から、む しろ狭く深く掘る必要があった可能性を考えた方が良いのではないだろうか。狭い溝に風が入って きたらそれなりに強い風が排煙部に行き、その勢いで煙を吹き上げ、燃えを良くするという期待が できそうに思う。このことから望月氏の、溝に風を呼び込み排煙を調整する説は魅力的である。氏 は北陸の窯跡で見られる弧状の溝(横連結溝)を風の取り入れ溝、窯の上部に直線的に伸びる溝を 風を逃がす溝(縦連結溝)として窯内で発生した煙を強制的に引っ張り上げ、燃えを良くすると考 えた。弧状に伸びた溝の反対側の上部の被熱具合が高いのは風の流れを物語るものだとされた。た だし、他に装置もない溝で調整ができるかという疑問がある。風を呼び込んで煙の出を良くし、ひ いては燃焼効率を高めるものと考えるのは可能でも、調整するというのは逆に燃焼を抑えるという ことも含まれているはずであるから、その場合風が入らなくするための工夫が必要となる。牛頸窯 跡群の場合は北陸で見られる縦連結溝もないことなどから、望月氏の説に魅力を感じながらも、な お検討や実験が必要と考える。

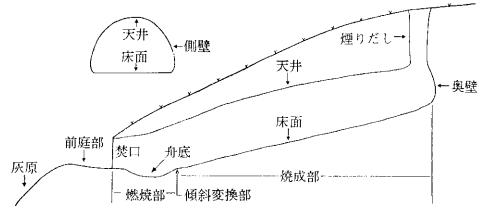
なお、中村浩氏はこの溝について「陶芸界でいうところのダンパーの可能性が濃い」と表現されている〈註9〉。

また、宗像市で発掘調査された三郎丸堂ノ上C窯跡群(第80図2~4)の場合も溝が検出されているが、幅がやや広くそのあり方からこの場合は通路(作業路)として良いのではないかという例もあり〈註10〉、すべての溝を同じ用途で考えるのは避けるべきではないかと思う。

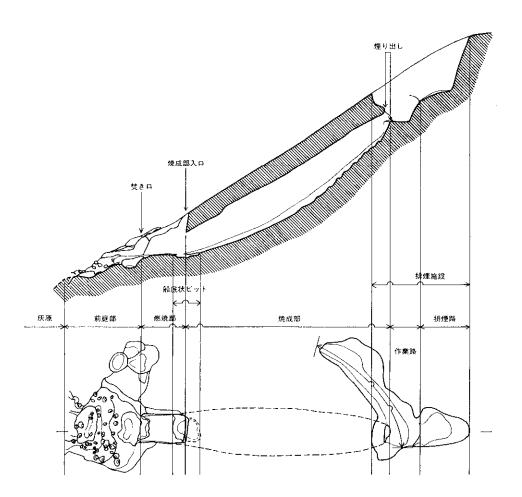
これらのことから、用途を特定した名称は現段階ではふさわしくなく、排煙部に取り付く溝という表現にとどめておきたい〈註11〉。

4. 燃燒部

須恵器を焼き上げる燃料を燃やした部分で、第81図上図に示すような陶邑窯跡群での模式図が有名である〈註12〉。燃焼効率を上げるためにも、また、還元状態を造り出すためにも、天井があって口が狭い方が良いと考えるのが普通である。しかし、実際の発掘調査成果は必ずしもそうとは言えないことを示している。8世紀代の窯跡は小型であるがその結果残りが非常に良く、ほぼ完存しているのではないかと思われる窯跡に出会うことがある。その場合天井のある部分の外側の側壁や床面も良く熱を被り、還元を受けている場合がある。また、古墳時代の窯跡でも天井の始まる地点



(1)『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ1966より



(2)『苅又地区遺跡群V小郡市文化財調査報告書第106集』1996より

第81図 窯体の構造と燃焼部の位置

- 145 -

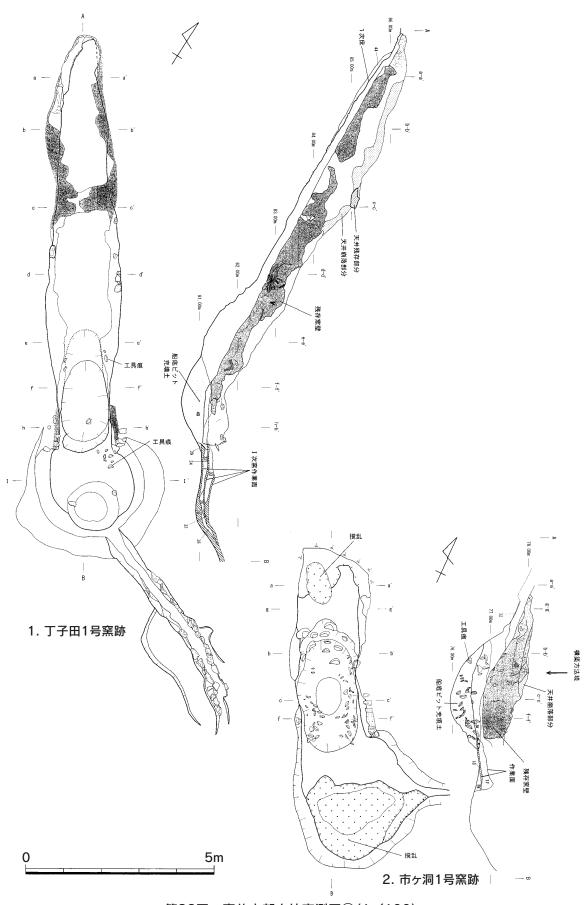
が残っていたり、あるいは壁の状況から天井の始まりを推測できる場合がある。そこでもその外側 の天井のない部分の側壁が被熱し、下部が還元されている状況を観察できる場合がある。そのよう な場合は側壁の横断面は上部でも弧状を呈さずほぼ直立する。また、側壁の還元部分は灰原寄りの 床面から徐々に上がっていく。つまり、詳しい状況は不明ながら天井のない部分で燃料を燃やして いると考えざるを得ない状況である。福岡県小郡市の苅又窯跡群でも同様なことが観察されたこと から、窯跡の模式図を第81図の下図のようにし、天井のない部分から一部天井のある部分にかか る部位を燃焼部と考えている〈註13〉。この点について、石川県小松市の望月氏は発掘調査の結果 この部分に仮設天井が架けられていたとされる〈註14〉。しかし、牛頸窯跡群では仮設天井があっ た痕跡を示すものは発見されていない。実験では、天井がなくとも一旦窯本体に炎が吸い込まれる と、そのまま燃えるという成果もあるようだ〈註15〉。須恵器の窯跡では灰原が厚く広く形成され ている場合が多いが、現代の窯では薪を燃やしても須恵器窯跡ほど多くは出ない。いちがいには言 えないが、このような燃焼部のため灰が多く出ると考える人もいる〈註16〉。天井のない燃焼部を 想定した場合、還元状態を作り出すための閉塞をどのように行うのだろうかという疑問も起きる。 高温で燃えている場所をふさぐのは非常に困難で危険であろう。天井部のない燃焼部を想定するの は非合理的ではある。しかし、調査の結果はそのような状況を物語っている。今後とも追求すべき 課題である。

5. 窯体・窯体周辺の土坑・ピット

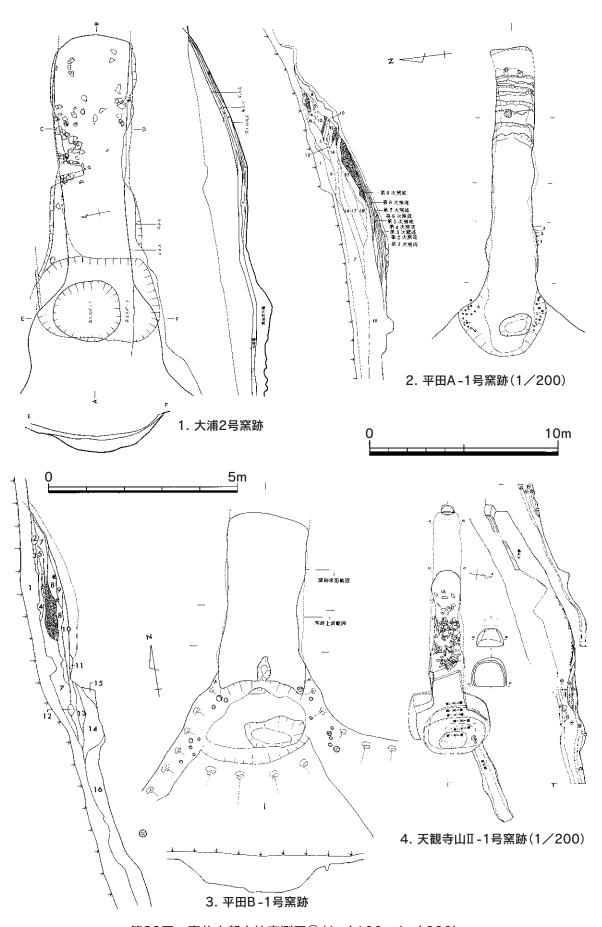
窯体内あるいは前庭部にはピットや土坑が見られる場合がある。位置と規模から大きく見て5種類ある。

1つめは燃焼部から焼成部にかけての部分に掘り込まれた土坑状の窪みで舟底状ピットと言われているものである。すべての窯に見られるものではないため、その用途や機能については推定の域を出ない〈註17〉。牛頸窯跡群では、ⅢB期とⅣA期の一部にも見られるが、ⅣB期に最も多い。また、Ⅵ期やⅧ期にも見られるが、大型の窯に多く、小型の窯に少ない傾向にある。操業時には埋められている状況が観察されることより、焼成部の入り口が狭いため、製品の出し入れの際の利便性を考慮したものとするのが考えやすい。窯内の低い場所に位置することから、除湿機能を兼ねたものとする考えもある。ただし、中にはそれほど大きくないものもあり、やはり機能について迷う。猿投窯跡群の丁子田1号窯跡〈註18〉や市ケ洞1号窯跡(第82図)で検出された当該遺構は操業のたびに土の掘り返しと充填が繰り返された痕跡があり、ピット底面の焼成部側にはステップ状の窪みまで見つかった。大型製品の搬入に便利なように掘り込んだものと報告されている。

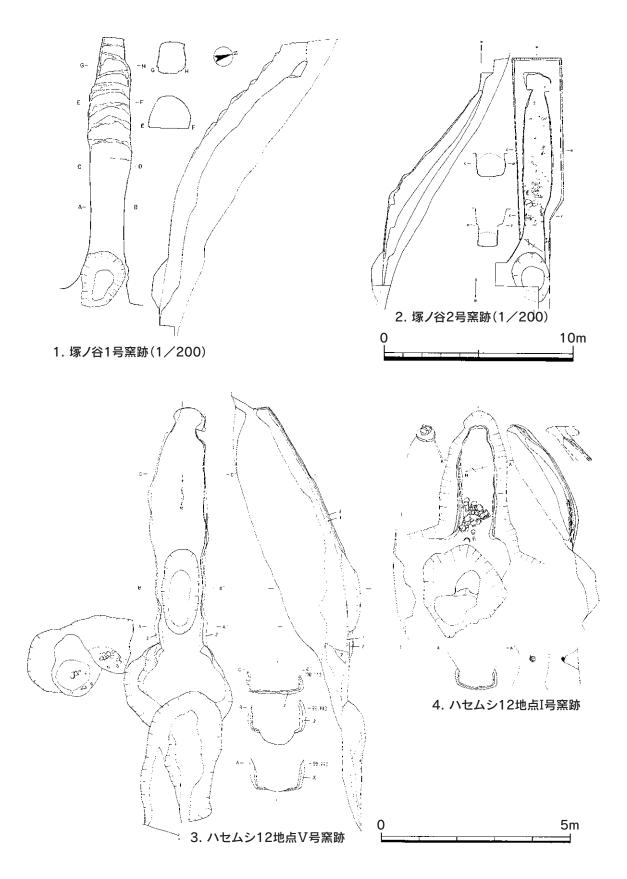
2つめは前庭部にある大きな土坑で、大浦2号窯跡や平田A-1・B-1号窯跡に見られる(第83図1~3)。不整形でそれほど深くはない。八女窯跡群の塚ノ谷1・2号窯跡(第84図1・2)〈註19〉や天観寺山窯跡群(第83図4)の6・7世紀の窯跡でも見られる。小田富士雄氏は前者では側壁に貼る粘土をこねた場所の可能性を、後者では、窪みから排水溝と思われる溝状遺構が接続していたことから、前庭部凹穴と称し窯内排水受け場の機能を考えられた。ただし、どちらかの機能



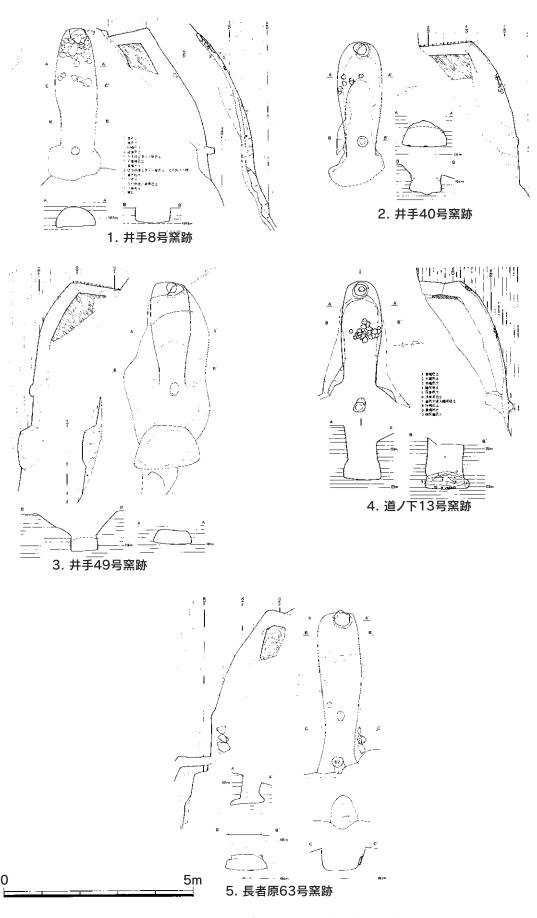
第82図 窯体内部土坑実測図①(1/100)



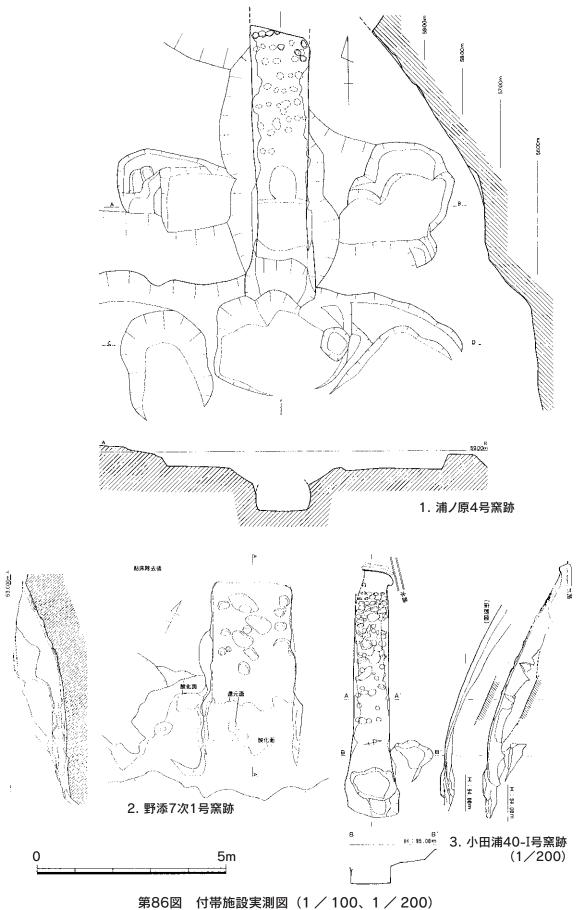
第83図 窯体内部土坑実測図②(1/100、1/200)



第84図 窯体内部土坑実測図③(1/100、1/200)



第85図 窯体ピット実測図 (1/100)



に絞るのではなく、両者とも考慮すべきとされた〈註20〉。図面で判断する限り牛頸窯跡群の場合 と似ている。

3つめは2つめの前庭部凹穴と似ているが、前者が6・7世紀代であったものに対してこれは8世紀代の窯跡に見られるもので、ハセムシ12地点のように燃焼部から少し下がった地点に設けられる(第84図3・4)。ほとんど灰が詰まっていることから、灰を捨てるための掘り込みと考えている。ただし、灰はそのまま下方に捨てれば良いものをなぜ土坑を造る必要があったのかは不明である。

4つめは前記3種類がやや規模が大きいのに対し、ピットと呼ぶにふさわしいもので、窯体主軸上にあるものである。ただし、検出時のピット上面が還元されていたかなどは不明である。井手8・40・49号窯跡(第85図1~3)ではほぼ天井が始まる部分にあり、8号窯跡の場合は径20cm、深さ22cmである。40・49号窯跡はそれより浅いがよく似た位置にある。これらは舟底状ピットと報告されているものもあるが、前述したように機能を製品の出し入れ用とした場合には当てはまらない。他に道ノ下13号窯跡(第85図4)では、前庭部の主軸上に造られていた。さらに、長者原63号窯跡(第85図5)では同様な規模のピットが焼成部主軸上にあった。道ノ下例と長者原例は浅いものであった。これらは主軸上にあることと、小さいことが共通している。操業時の状態が不明なことから推定に留まるが、位置からだけ考えれば道ノ下例を除いては天井を支えるための支柱の可能性があると思う。窯築造時に不安定なことから支柱を立てた可能性である。支柱は木製であろうから、操業を開始すれば燃えてしまう。その見方が当たっていれば、道ノ下例は燃焼部の項で否定した仮設の天井を支える支柱の可能性もある。例は少ないことから断定は控えたい。

5つめは、燃焼部の両脇で発見される4番目のピットと同規模のものである。中通A-2号窯跡などに見られるが、操業時の雨を避けるためなどに架ける小屋を支えるためのものだろう。

6. 付带施設

窯体に接するようにして燃焼部と焼成部の境付近に平場を造り出す場合がある。山側を削り谷川に向かって平坦面を造り出すものである。小田浦37− I 号窯跡や後田45− I 号窯跡(第72図1・2)の場合、窯の左側にあって当初の床面に比べ1.5mほど高い場所にあった。そしてここには焼土や焼台そして須恵器片などが置いてあった。当初の床面からすれば高い位置であるが、最終床面からすればほぼ同じ高さであることが多いことから、当初は燃焼部そばにあった作業場(窯焚きに関連する道具やものの置き場)に灰がたまったり、床のかさ上げによって不都合になった結果作り直した作業場(置き場)であると考えられる。左側に造られる窯として前記2者と野添7次1号窯跡(第86図)、右側に造られる窯として中通A−2号窯跡、小田浦40−I号窯跡(第86図)、惣利1号窯跡があり、浦ノ原4号窯跡(第86図)は左右両側にある。ⅢB期の後半からⅣB期にかけて多く見られる。なお、これらが位置する場所は排煙部から伸びる溝と見比べた場合、溝の伸びる方向に作られるもの2、溝と反対側に作られるもの2である。溝の向きは考慮されていないことがわかる。

- 註1. 『牛頸窯跡群』に一部半地下式の窯と報告されているものがある。
- 註2. 株式会社ジオテック技術士事務所矢野健二氏からご教示を得た。
- 註3. 窯跡研究会では直立煙道に対して、焼成部床面の傾斜角度を保ったまま、あるいはやや反りながら煙道へと続くものをこう呼ぶ。
- 註4. 藤原学「須恵器窯の構造と系譜-その技術と源流-」『窯跡研究会第2回シンポジューム須恵器窯の技術と系譜』窯跡 研究会 1999
- 註5. 中村浩編『陶邑』財団法人大阪文化財センター 1971
- 註6. 渥美賢吾「古墳時代須恵器窯の構造とその築窯技術の系譜-いわゆる「溝付窯」をめぐって-」『筑波大学 先史学・ 考古学研究』第17号 2006
- 註7. 望月精司「須恵器窯構造から見た7世紀の画期-特に南加賀古窯跡群の様相を中心にして-」 『北陸古代土器研究』第3号 1993
- 註8. 望月精司「排煙調整溝付窯構造考」『林タカヤマ窯跡群』小松市教育委員会 1999
- 註9. 中村浩『泉北丘陵に広がる須恵器窯跡』(シリーズ「遺跡を学ぶ」28) 2006
- 註10. 白木英敏編『三郎丸堂ノ上C』宗像市教育委員会 2001
- 註11. 本市教育委員会の担当者間でも意見の相違があるため、筆者の意見とするものである。
- 註12. 田辺昭三『陶邑古窯址群 I 』 平安学園考古学クラブ 1966
- 註13. 中島達也他編『苅又地区遺跡群II』小郡市教育委員会 1995他
- 註14. 望月精司編『林タカヤマ窯跡』小松市教育委員会 1999他
- 註15. 小郡市教育委員会佐藤雄史氏のご教示による。
- 註16. 本市教育委員会石木秀啓の教示による。
- 註17. 文責望月精司「凡例及び用語解説」『須恵器窯構造資料集2』窯跡研究会 2004
- 註18. 穐田和樹編『丁子田窯跡・市ケ洞窯跡』長久手町教育委員会・瀬戸市文化振興財団 2007 調査者の穐田和樹氏のご教示による。
- 註19. 『塚ノ谷窯跡群』八女市教育委員会 1969
- 註20. 小田富士雄編『天観寺山窯跡群』北九州市埋蔵文化財調査会 1977

VI. 窯体の検討 挿図出典一覧

第71図	1. 野添 6 号窯跡	小田富士雄・柳田康雄編『野添・大浦窯跡群』福岡県教育委員会
		1970
	2. 野添 9 号窯跡	小田富士雄・柳田康雄編『野添・大浦窯跡群』福岡県教育委員会 1970
	3. 梅頭1号窯跡	石木秀啓編『牛頸梅頭遺跡群I』大野城市教育委員会 2007
	4. 惣利1号窯跡	丸山康晴・平田定幸編『春日地区遺跡群Ⅰ』春日市教育委員会
	- 1 NEW 4 - 4 NWW	1982
第72図	1. 小田浦37-1号窯跡	舟山良一編『牛頸小田浦窯跡群』大野城市教育委員会 1992
	2. 後田45-1号窯跡	舟山良一編『牛頸後田窯跡群』大野城市教育委員会 1991
	3. 中通A-1号窯跡	副島邦弘・舟山良一編『牛頸中通遺跡群』大野城市教育委員会
	4 内区4 0 日本財	1980
	4. 中通A-2号窯跡	副島邦弘・舟山良一編『牛頸中通遺跡群』大野城市教育委員会 1980
第73図	1. 中通D-1号窯跡	1980 副島邦弘・舟山良一編『牛頸中通遺跡群』大野城市教育委員会
MIOM	1. 1 20 1 7 米喇.	1980・舟山良一編『牛頸中通遺跡群Ⅱ』大野城市教育委員会 1981
	2. 中通D-2号窯跡	舟山良一編『牛頸中通遺跡群Ⅱ』大野城市教育委員会 1981
	3. 小田浦50-I 号窯跡	舟山良一編『牛頸小田浦窯跡群』大野城市教育委員会 1992
	4. 後田60- I 号窯跡	舟山良一編『牛頸後田窯跡群』大野城市教育委員会 1991
第74図	1.ハセムシ1−Ⅱ号窯跡	中村浩編『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ』大野城市教育委員会 1989
	2.ハセムシ6-Ⅱ号窯跡	中村浩編『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ』大野城市教育委員会 1989
	3. 上平田2号窯跡	副島邦弘・舟山良一編『牛頸中通遺跡群』大野城市教育委員会
		1980
	4. 後田63-Ⅱ号窯跡	舟山良一編『牛頸後田窯跡群』大野城市教育委員会 1991
444	5. 後田61-IV号窯跡	舟山良一編『牛頸後田窯跡群』大野城市教育委員会 1991
第75図	1. ハセムシ27号窯跡	中村浩編『牛頸ハセムシ窯跡群III』大野城市教育委員会 1993
	2. ハセムシ12-IX号窯跡	中村浩編『牛頸ハセムシ窯跡群II』大野城市教育委員会 1989
	3. 後田61-Ⅱ号窯跡	舟山良一編『牛頸後田窯跡群』大野城市教育委員会 1991
	4. ハセムシ18- I 号窯跡	中村浩編『牛頸ハセムシ窯跡群 I 』大野城市教育委員会 1988

第76図		井出24号窯跡 本堂5次6号窯跡	池辺元明編『牛頸窯跡群Ⅰ』福岡県教育委員会 1988 中村浩・石木秀啓編『牛頸本堂遺跡群Ⅲ』大野城市教育委員会 2005
第77図 第78図		石坂E-3号窯跡 陶邑窯跡群MT5-Ⅲ号窯跡 小田浦39-Ⅰ号窯跡	石木秀啓編『牛頸石坂窯跡群-E地点-』大野城市教育委員会 1997 中村浩編『陶邑』財団法人大阪文化財センター 1971 舟山良一編『牛頸小田浦遺跡群』大野城市教育委員会 1993
先10 凶	2. 3.	和元日焼原1号窯跡 相元日焼原1号窯跡 岩長浦2号窯跡 勝負坂J-1号窯跡	所口及一編『午頭小口相遺跡辞』入野城川教育委員会 1995 伊崎俊秋編『稲元日焼原』宗像市教育委員会 1989 平ノ内幸治編『宇美観音浦』宇美町教育委員会 1981 進村真之・中野聡子・中島達也・佐藤雄史編『苅又地区遺跡群Ⅲ』
第79図		裏/田1号窯跡	小郡市教育委員会 1996 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 X Ⅶ 福岡県教育委員 会 1977
	3.	林タカヤマ1号窯跡 林タカヤマ3号窯跡 流団No. 7遺跡1号窯跡	望月精司編『林タカヤマ窯跡』小松市教育委員会 1999 望月精司編『林タカヤマ窯跡』小松市教育委員会 1999 望月精司「越中の須恵器窯」『須恵器窯構造資料集1』窯跡研究会 1999
第80図	2. 3.	隼上り1号窯跡 三郎丸堂ノ上C1・2号窯跡 三郎丸堂ノ上C3号窯跡 三郎丸堂ノ上C4号窯跡	杉本宏編『史跡 隼上り瓦窯跡』宇治市教育委員会 1989 白木英敏編『三郎丸堂ノ上C』宗像市教育委員会 2001 白木英敏編『三郎丸堂ノ上C』宗像市教育委員会 2001 白木英敏編『三郎丸堂ノ上C』宗像市教育委員会 2001
第81図	1. 2.		田辺昭三『陶邑古窯址群 I 』平安学園考古学クラブ 1966 佐藤雄史・中島達也編『苅又地区遺跡群 V』小郡市教育委員会 1996
第82図		丁子田1号窯跡	穐田和樹編『丁子田窯跡・市ヶ洞窯跡』長久手町教育委員会・瀬戸 市文化振興財団 2007
	2.	市ヶ洞1号窯跡	穐田和樹編『丁子田窯跡・市ヶ洞窯跡』長久手町教育委員会・瀬戸 市文化振興財団 2007
第83図		大浦 2 号窯跡	小田富士雄・柳田康雄編『野添・大浦窯跡群』福岡県教育委員会 1970
	3. 4.	平田A-1号窯跡 平田B-1号窯跡 天観寺山Ⅱ-1号窯跡	坂詰秀一編『筑前平田窯跡』 1974 坂詰秀一編『筑前平田窯跡』 1974 小田富士雄編『天観寺山窯跡群』北九州市埋蔵文化財調査会 1977
第84図	2. 3.	塚ノ谷1号窯跡 塚ノ谷2号窯跡 ハセムシ12地点V号窯跡	小田富士雄編『塚ノ谷窯跡群』八女市教育委員会 1969 小田富士雄編『塚ノ谷窯跡群』八女市教育委員会 1969 中村浩編『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ』大野城市教育委員会 1989
第85図	1. 2. 3.	ハセムシ12地点 I 号窯跡 井出8号窯跡 井出40号窯跡 井出49号窯跡	中村浩編『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ』大野城市教育委員会 1989 池辺元明編『牛頸窯跡群Ⅰ』福岡県教育委員会 1988 池辺元明編『牛頸窯跡群Ⅱ』福岡県教育委員会 1989 池辺元明編『牛頸窯跡群Ⅱ』福岡県教育委員会 1989
第86図	5. 1. 2.	道ノ下13号窯跡 長者原63号窯跡 浦ノ原4号窯跡 野添7次1号窯跡 小田浦40-I号窯跡	池辺元明編『牛頸窯跡群 I』 福岡県教育委員会 1988 池辺元明編『牛頸窯跡群 II』 福岡県教育委員会 1989 平田定幸・丸山康晴編『浦ノ原窯跡群』 春日市教育委員会 1981 石木秀啓編『牛頸野添遺跡群IV』 大野城市教育委員会 2006 舟山良一編『牛頸小田浦窯跡群』 大野城市教育委員会 1992

- 154 -

第11表 窯体構造一覧表(煙道・溝・ピット)(1)

時期	No.	窯跡名	文献	窯体水平長 (残存長)	排煙部 煙道の種類	溝状 遺構	ピット 類	備考
III A	98	野添第6号窯跡	県1	(4.92m)	_	_	_	
ⅢB	15	野添12号窯跡	市7	(6.51m)	_	_	_	
ШВ	99	野添第9号窯跡	県1	10.00m	単孔・平面長方形 (約25°外傾)	_	_	
ⅢB新	177	惣利1号窯跡	春2	(10.75m)	_	_	0	
III B∼IV A	87	梅頭1号窯跡	市24	13.37m	多孔式 (3 孔)	0	?	
III B∼IV A	186	神ノ前第2号窯跡	太1	(8.64m)	_	_	_	
III B∼IV A	203	平田A地点第1号窯跡	そ1	12.45m	多孔式(3孔以上)	?	?	
III B∼IV B	14	野添11号窯跡	市7	(2.34m)	_	_	_	
IV A	4	中通C窯	市1	(8.40m)	多孔式(4孔?)	0	_	
IV A	8	平田D-1窯	市2	(9.90m)	=	_	_	
IV A	17	野添第4次2号窯跡	市20	(10.74m)	多孔式	0	-	
IV A	18	野添第7次1号窯跡	市22	(4.85m)	_	_	_	
IV A	60	後田45- I 号窯跡	市11	14.15m	多孔式?	0	0	
IV A	70	後田63- I 号窯跡	市11	(10.85m)	多孔式 (3孔)	0	_	
IVA	74	小田浦33- I 号窯跡	市12	12.70m	多孔式 (5孔?)	0	_	
IV A	78	小田浦38- I 号窯跡	市14	14.10m	多孔式 (3孔)	0	0	
IV A ~ IV B	1	中通A-1窯	市1	(7.00m)	_	_	0	
IV A~IV B	3	中通B窯	市1	14.90m	多孔式 (3孔)	0	0	
IV A~IV B	10	平田F-1窯	市4	(6, 85m)	-	_	_	
IV A~IV B	76	小田浦37- I 号窯跡	市12	13. 44m	多孔式 (3孔)	0	_	
IV A~IV B	80	小田浦39- I 号窯跡	市14	16.50m	多孔式?	0	0	
IV A~IV B	184	春日平田東窯跡	春4	(10.53m)	-	_	0	
IVA~IVB主	72	後田65- I 号窯跡	市11	11.65m	多孔式 (3孔)	0	_	
IV A~IV B	100	大浦第1号窯跡	県1	(7.00m)	-	_	0	
IVA新	82	小田浦40- I 号窯跡	市12	11.50m	多孔式?	0	_	
IVA新	86	小田浦79地点3号窯跡	市23	11.50m	多孔式 (5孔?)	0	_	
IV B	2	中通A-2窯	市1	13, 50m	多孔式(4孔)	0	0	
IVB	6	中通D-2窯	市5	12.15m	多孔式 (3孔)	0	0	
IVB	19	野添第7次2号窯跡	市22	(4.15m)		_	0	
IVB	183	惣利9号窯跡	春3	6. 48m	_	0	_	
IVB	185	神ノ前第1号窯跡	太1	(7.60m)	_	_	0	
IV B ~ V	5	中通D-1窯	市1・5	10.90m	多孔式?	0	0	
IV B ~ VI	9	平田E-1窯	市3	(2, 80m)	910FC:		_	
IV B ~ VI	171	浦ノ原4号窯跡	春1	(6. 05m)	_	_	_	
IV B ~VI	193	宮ノ本4号窯跡	太5	9. 48m	多孔式(2孔)	0	_	
IV B ~ VI	204	平田B地点第1号窯跡	え ₃ そ1	(4. 60m)	91LF((21L)	_	_	
								
V	64	後田60- I 号窯跡	市11	6.65m	直立 (5° 内傾)	_	0	
V	84	小田浦50- I 号窯跡	市12	11.2m	多孔式(3孔)	0	0	
V	96	本堂5次8号窯跡	市21	(4.69m)	_		_	
V	101	大浦第2号窯跡	県1	(5.56m)	_		_	
V ~VI	88	本堂3次窯跡(上層)	市17	4.60m	_	_	_	
VI	16	野添第2次2号窯跡	市18	3.32m	直立(ほぼ直立)		_	
VI	59	井手X-3号窯	市9	(3.40m)	_	_		
VI	81	小田浦39-Ⅱ号窯跡	市14	3.70m	直立(ほぼ直立)	_	_	
VI	85	小田浦50-Ⅱ号窯跡	市12	(4.00m)	_	0	_	
VI	102	長浦窯跡	県2	(3.54m)	直立(約15°外傾)		_	
VI	188	神ノ前第4号窯跡	太7	(1.44m)	直立(約20°外傾)		_	
VI	189	神ノ前第5号窯跡	太7	(3.65m)	_	_	_	
VI	190	宮ノ本1号窯跡	太2	(2.30m)	_	_	_	
VI	205	平田B地点第2号窯跡	そ1	(3.70m)	_	_		
VI~VII A	22	ハセムシ6- I 号窯跡	市10	2.52m	直立(ほぼ直立)	_		
VI~VIIA	23	ハセムシ6-Ⅱ号窯跡	市10	3.32m	_	_	_	
VI∼VII A	24	ハセムシ6-Ⅲ号窯跡	市10	4.60m	傾斜(40°外傾)	_	_	

窯体構造一覧表(煙道・溝・ピット)(2)

時期	No.	窯跡名	文献	窯体水平長 (残存長)	排煙部 煙道の種類	溝状 遺構	ピット 類	備考
VI~VII A	54	ハセムシ27号窯	市15	8.00m	直立(傾斜か)	0	_	
VI~VII A	73	後田66- I 号窯跡	市11	3.69m	直立 (25° 内傾)	_	_	
VI~VII A	75	小田浦34- I 号窯跡	市12	(1.66m)	直立	_		
VI~VII A	170	浦ノ原3号窯跡	春1	(3.35m)	直立 (10° 内傾)	_	_	
VI新	7	上平田窯跡群第2号窯跡	市1	7.80m	多孔式 (3孔)	0		
VI新	67	後田61-Ⅲ号窯跡	市11	(3. 14m)	_	_	_	
VI新	68	後田61-IV号窯跡	市11	5. 16m	直立?	_	0	
VI新	71	後田63-Ⅱ号窯跡	市11	4.72m	直立	0	_	
VII A	26	ハセムシ12- I 号窯跡	市10	3.00m	直立(ほぼ直立)		<u> </u>	
VII A	28	ハセムシ12-Ⅲ号窯跡	市10	4. 55m	直立 (21° 内傾)	0	_	
VII A	30	ハセムシ12-V号窯跡	市10	6. 30m	直立(約7°内傾)	_		
VII A	34	ハセムシ12-IX号窯跡	市10	7. 05m	直立 (17° 内傾)	0	0	
VIIA	43	ハセムシ19- I 号窯	市8	4. 20m	直立(ほぼ直立)	0	_	
VII A	45	ハセムシ20-Ⅱ号窯	市8	2. 44m	直立(約40°内傾)	_		
VII A	46	ハセムシ20-Ⅲ号窯	市8	(8. 60m)	—————————————————————————————————————	_	0	
VII A	47	ハセムシ22- I 号窯跡	市10	4. 80m	直立(ほぼ直立)	_	0	
VIIA	48	ハセムシ22-Ⅱ号窯跡	市10	6. 32m	直立(約20°内傾)	_	0	
VII A	50	ハセムシ22-IV号窯跡	市10	3. 08m	直立(3°内傾)		0	
VII A	50	ハセムシ26- I 号窯	市15	3. 36m	直立 (7°外傾)	<u> </u>		
VII A	53	ハセムシ26-I 号窯 ハセムシ26-II 号窯	市15	2.84m	直立(4°外傾)		_	
VIIA	55	ハセムシ28号窯	市15	(2. 36m)		_	_	
VIIA	57	#手X-1号窯	市9	(2. 56m)	直立 (10° 外傾)	_		
VII A	58	井手X-2号窯	市9	5. 36m	直立(25°外傾)	?	0	
VII A	_	後田61- I 号窯跡			直立(ほぼ直立)	1		
	65		市11	3. 20m			_	
VII A	66	後田61-Ⅱ号窯跡	市11	4.16m	直立(2孔、ほぼ直立)		_	
VII A	90	本堂5次3号窯跡	市19	3. 24m	直立(ほぼ直立) 直立(約5°外傾)		_	
VII A	95	本堂5次7号窯跡	市21	2.88m		_	0	
VII A	97	本堂5次9号窯跡	市21	(3.72m)	直立	_	_	
VII A	106	井手5号窯跡 (A-3)	県3	3.52m	直立(約5°外傾)		_	
VII A	108	井手8号窯跡(A-3地区)	県3	3. 28m	直立(約13°内傾)	?	-	
VII A	109	井手9号窯跡(A-3地区)	県3	(2.48m)	直立(約5°外傾)	_		
VII A	119	井手28号窯跡 (B-2)	県3	(4. 20m)	直立?	?	_	
VII A	120	井手29号窯跡 (B-1)	県4	3. 25m	直立(ほぼ直立)		0	
VII A	121	井手30号窯跡 (B-1)	県4	3.64m	直立(ほぼ直立)	_	-	
VII A	123	井手32号窯跡 (B-1)	県4	3.00m	直立(ほぼ直立)	_	_	
VII A	124	井手33号窯跡 (B-1)	県4	(2.86m)	直立 (20° 内傾)		_	
VII A	128	井手43号窯跡 (B-4)	県4	3. 24m	直立(約5°内傾)	_	_	
VII A	129	井手44号窯跡 (B-4)	県4	3.04m	直立(約10°内傾)		-	
VII A	130	井手45号窯跡 (B-4)	県4	3.00m	直立(約8°内傾)		_	
VII A	131	井手46号窯跡 (B-4)	県4	(3, 68m)		_	0	
VII A	147	道ノ下18号窯跡(K)	県3	2.52m	直立(5°内傾)	_	-	
VII A	149	長者原53号窯跡(I)	県4	3.04m	直立(約3°内傾)	_	0	
VII A	155	長者原59号窯跡(I)	県4	2.56m	直立(ほぼ直立)	_	_	
VII A	157	長者原61号窯跡(I)	県4	(2.64m)	直立(約4°内傾)	_	_	
VII A	158	長者原62号窯跡(I)	県4	(2.84m)	直立(ほぼ直立)	_	_	
VII A	159	長者原63号窯跡(I)	県4	3.80m	直立(約13°内傾)		0	
VII A	160	長者原64号窯跡(I)	県4	3.56m	直立(ほぼ直立)		-	
VIIA	161	長者原65号窯跡(I)	県4	3.68m	直立(約10°外傾)	_	-	
VII A	168	浦ノ原1号窯跡	春1	2.96m	直立 (10° 内傾)	_	_	
VII A	169	浦ノ原2号窯跡	春1	(2.70m)	_	_	_	
VII A	172	浦ノ原5号窯跡	春1	(2.30m)	_	_	-	
VIIA	174	浦ノ原7号窯跡	春1	2.07m	直立(約25°外傾)	_	_	
VII A	175	浦ノ原8号窯跡	春1	(3.34m)	直立(約25°外傾)	0	-	
VII A	176	浦ノ原2次調査窯跡	春5	3.30m	直立 (ほぼ直立)		0	

窯体構造一覧表(煙道・溝・ピット)(3)

野瀬 No. 医療各 文献 「秩序長」 強速の磁動 遊離 別 間 1 1 1 1 1 1 1 1 1					窯体水平長	排煙部	溝状	ピット	
VIA 191 宮ノ本2号寒時 大2 (2.49a) 直立 (ほぼ直立) VIA 192 宮ノ本3号楽時 大2 (1.66a) 直立 (ほぼ直立) VIA 199 株配1号窓跡 大3 (2.95a) 直立 (ほぼ直立) VIA 199 株配1号窓跡 大3 (2.95a) 直立 (ほぼ直立) VIA 199 株配1号窓跡 大3 (2.95a) 直立 (ほび直立) VIA 198 宮ノ木10分家跡 大6 (2.95a) 直立 (おび 74g) VIA 198 宮ノ木10分家跡 大6 (2.95a) 直立 (おび 74g) VIA 198 宮ノ木10分家跡 大6 (2.95a) 直立 (おび 74g) VIA 198 宮ノ木10分家跡 大6 (2.95a) 直立 (おび 74g) VIA 198 20 ハセムシ18・V号窓跡 市10 (3.20a) 直立 (おび 75g) VIA VIB 20 ハセムシ28-1号家跡 市10 (3.85a) 直立 (おび 75g) VIA VIB 49 ハセムシ28-1号家跡 市10 (2.45a) 直立 (3.18亩立) VIA VIB 107 井手3号窓跡 (3.38a) 第3 (3.56a) 直立 (3.18亩立) VIA VIB 107 井手3号窓跡 (3.38a) 第3 (3.66a) 直立 (3.18亩立) VIA VIB 107 井手4号窓跡 (3.38a) 第3 (3.66a) 直立 (4.12亩立) VIA VIB 151 長者販55号途跡 (1) 第4 (2.05a) VIA VIB 152 長者販55号途跡 (1) 第4 (3.66a) VIA VIB 162 長者販56号途跡 (1) 第4 (3.66a) VIA VIB 162 長者販56号途跡 (1) 第4 (3.66a)	時期	No.	窯跡名	文献					備考
WIA 192 宮ノ木39字葉除 大2 (1.88a)	VII A	191	宮ノ本2号窯跡	太2	(2.49m)		_	_	
VIA 199	VII A	192		太2	(1.65m)	直立(ほぼ直立)	_	_	
WIA 198	VII A	197	宮ノ本9号窯跡	太4	(3.10m)	直立(約10°内傾)	_	_	
WIA 198	VII A	199	篠振1号窯跡	太3	(2.08m)	_	_	_	
WIA〜WIB 40	VII A	200	篠振2号窯跡	太3	(2.48m)	_	_	_	
VIIA~VIIB	VII A	198	宮ノ本10号窯跡	太6	2.95m	直立(約15°外傾)	_	_	
WIA~WIB	VII A ~ VII B	40	ハセムシ18-VI号窯	市8	(3.20m)	直立(約10°内傾)	_		
WIA〜WIB 105	VII A ~ VII B	29	ハセムシ12-IV号窯跡	市10	2.80m	直立(10°内傾)	_	_	
WIA~WIB	VII A∼VII B	49	ハセムシ22-Ⅲ号窯跡	市10	3.64m	直立(ほぼ直立)	_	0	
WIA〜WIB 107 井手7号温蘇(A-3地区) 県3 3.36m 直立(5° 内頼) 一 一 一 WIA〜WIB 122 井子31号温蘇(B-1) 県4 4.12m 直立(5° 内頼) 一 ○ WIA〜WIB 137 足洗旧36号温蘇(C) 県3 (6.24m) 直立(5° 内頼) 一 ○ ○	VII A∼VII B	51	ハセムシ23- I 号窯跡	市10	2.45m	直立(8°内傾)	_	_	
WIA〜WIB 122	VII A∼VII B	105	井手4号窯跡(A-3地区)	県3	7.56m	直立(ほぼ直立)	0	0	
WIA~WIB 137 足売川36号窯跡 (C) 県3 (6.24m) 直立 (約11° 内領) ? ○ ○	VII A∼VII B	107	井手7号窯跡(A-3地区)	県3	3.36m	直立(5°内傾)	_	_	
WIA〜WIB 150 長者原5号景跡 (1)	VII A∼VII B	122	井手31号窯跡(B-1)	県4	4.12m	直立(5°内傾)	_	0	
VIIA ~ VIIB 151 長者原55分窯跡 (1) 県4 2,72m 直立 (約47 内額 直立) 152 長者原56分窯跡 (1) 県4 2,72m 直立 (ほぼ直立) 一 一 一 一 一 一 一 一 一	VII A∼VII B	137	足洗川36号窯跡 (C)	県3	(6.24m)	直立(約11°内傾)	?	0	
VIIA ~ VIIB 152 長者原56号窯跡 (I) 県4 3.30m 直立 一 一 一 一 一 一 一 一 一	VII A∼VII B	150	長者原54号窯跡 (I)	県4	(2.08m)	_	_	0	
VII A ~ VII B 153 長者原57号窯跡 (1) 県4 (3.68m)	VIIA∼VIIB	151	長者原55号窯跡 (I)	県4	3.36m		_	0	
VII A ~ VII B 162 長著原66号窯跡 (I)	VII A∼VII B	152	長者原56号窯跡 (I)	県4	2.72m	直立(ほぼ直立)	_	0	
VII A * VII B 104	VII A∼VII B	153	長者原57号窯跡 (I)	県4	(3.68m)	-	-	_	
VII A新 25	VII A∼VII B	162	長者原66号窯跡 (I)	県4	4.56m	_	_	_	
VII A 新 44	VIIA • VIIB	104	井手1号窯跡(A-1地区)	県3	3.18m	直立(約5°外傾)	_	_	
VII A新	WIA新	25	ハセムシ7- I 号窯跡	市10	3.00m	直立(ほぼ直立)	_	_	
VII A新 56	WIA新	36	ハセムシ18- I 号窯	市8	(9.40m)	直立(ほぼ直立)	0		
VII A新 103 向佐野1号窯跡 県2 (1.40m) 直立 (約10° 外傾)	VIIA新	44	ハセムシ20- I 号窯	市8	3.70m	直立(ほぼ直立)	_	_	
VII A新 135 足洗川34号窯跡 (C) 県3 (6,60m) 直立 (約7° 内傾) ○ ○ VII A新 143 道ノ下14号窯跡 (K) 県3 5.38m 直立 (15° 外傾) ○ ○ ○ VII A新 145 道ノ下16号窯跡 (K) 県3 2.92m 直立 (13° 内傾) ○ ○ ○ VII A新 146 道ノ下17号窯跡 (K) 県3 4.56m 直立 (12° 内傾) ○ ○ ○ VII A新 148 道ノ下17号窯跡 (J) 県3 3.40m 直立 (12° 内傾) ○ ○ ○ VII A新 148 道ノ下50号窯跡 (J) 県3 3.40m 直立 (12° 内傾) ○ ○ ○ VII A新 167 笹原69号窯跡 (W-2) 県4 3.75m 直立 (約7° 内傾) ○ ○ ○ ○ VII B 11 石坂C-1号窯 市6 3.68m 直立 (10° 内傾) ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	VIIA新	56	ハセムシ29- I 号窯	市15	3.44m	直立(ほぼ直立)	_	_	
VII A新 143 道/下14号窯跡 (K)	VIIA新	103	向佐野1号窯跡	県2	(1.40m)	直立(約10°外傾)	_	_	
VII A 新 145 道/下16号窯跡 (K)	WIA新	135	足洗川34号窯跡(C)	県3	(6.60m)	直立(約7° 内傾)	0	0	
VII A新	WIA新	143	道ノ下14号窯跡 (K)	県3	5.38m	直立(15°外傾)	0	_	
VII A新 148	ⅦA新	145	道ノ下16号窯跡(K)	県3	2.92m	直立(13°内傾)	_	_	
WIA新 167 笹原69号窯跡 M-2 県4 3.75m 直立 (約7° 内傾) - - WIB 11 石坂C-1号窯 市6 3.68m 直立 (10° 内傾) - - WIB 37 ハセムシ18-II号窯 市8 3.20m 直立 (ほぼ直立) - WIB 38 ハセムシ18-IIJ号窯 市8 1.88m 直立 (ほぼ直立) - - WIB 39 ハセムシ18-V号窯 市8 2.94m 直立 (ほぼ直立) - - WIB 41 ハセムシ18-VI号窯 市8 (2.45m) 直立 (ほぼ直立) - - WIB 42 ハセムシ18-VII号窯 市8 3.20m 直立 (ほぼ直立) - - WIB 42 ハセムシ18-VII号窯 市8 3.20m 直立 (ほぼ直立) - - WIB 61 後田59-II号窯跡 市11 2.97m 直立 (ほぼ直立) - WIB 62 後田59-II号窯跡 市11 2.99m 直立 (ほぼ直立) - WIB 63 後田59-III号窯跡 市11 2.74m 直立 (3° 内傾) - WIB 69 後田61-V号窯跡 市11 3.24m 直立 (約5° 内傾) - WIB 89 本堂5次5号窯跡 市19 (1.80m) - - WIB 91 本堂5次4号窯跡 市19 (1.20m) - - WIB 92 本堂5次5号窯跡 市19 (1.60m) - - WIB 93 本堂5次5-II号窯跡 市19 (2.45m) - - WIB 110 井手19号窯跡 B-1) 県4 3.12m 直立 (10° 内傾) - - WIB 111 井手20号窯跡 B-1) 県4 3.32m 直立 (10° 内傾) - WIB 113 井手25号窯跡 B-2) 県3 3.08m 直立 (約5° 内傾) - WIB 116 井手25号窯跡 B-2) 県3 3.04m 直立 (ほぼ直立) -	WIA新	146	道ノ下17号窯跡(K)	県3	4.56m	直立 (12° 内傾)	_	_	
WII B 11 石坂C-1号窯 市6 3.68m 直立 (10° 内傾) 一 一	WIA新	148	道ノ下50号窯跡 (J)	県3	3.40m	直立(12°内傾)	_		
WIB 37 ハセムシ18-Ⅱ号窯 市8 3.20m 直立 (ほぼ直立) ○ ○ WIB 38 ハセムシ18-Ⅲ号窯 市8 1.88m 直立 (ほぼ直立) ○ ○ WIB 39 ハセムシ18-Ⅵ号窯 市8 2.94m 直立 (ほぼ直立) ○ ○ WIB 41 ハセムシ18-Ⅶ号窯 市8 (2.45m) 直立 (ほぼ直立) ○ ○ WIB 42 ハセムシ18-Ⅶ号窯 市8 3.20m 直立 (ほぼ直立) ○ ○ WIB 61 後田59-Ⅱ号窯跡 市11 2.97m 直立 (ほぼ直立) ○ ○ WIB 62 後田59-Ⅲ号窯跡 市11 2.99m 直立 (ほぼ直立) ○ ○ WIB 63 後田59-Ⅲ号窯跡 市11 2.74m 直立 (3° 内傾) ○ ○ WIB 69 後田61-Ⅴ号窯跡 市11 3.24m 直立 (約5° 内傾) ○ ○ WIB 89 本堂5次2号窯跡 市19 (1.80m) ○ ○ ○ WIB 91 本堂5次4号窯跡 市19 (1.20m) ○ ○ ○ WIB 92 本堂5次5号窯跡 市19 (1.60m) ○ ○ ○ WIB 93 本堂5次5-Ⅲ号窯跡 市19 (2.45m) ○ ○ ○ WIB 110 井手19号窯跡 (B-1) 県4 3.12m 直立 (10° 内傾) ○ ○ WIB 111 井手20号窯跡 (B-1) 県4 3.32m 直立 (10° 内傾) ○ ○ WIB 113 井手25号窯跡 (B-2) 県3 3.08m 直立 (約1° 内傾) ○ ○ WIB 116 井手25号窯跡 (B-2) 県3 3.04m 直立 (ほぼ直立) ○ ○	WIA新	167	笹原69号窯跡 (M-2)	県4	3.75m	直立(約7°内傾)	_	_	
WIB 38	VII B	11	石坂C-1号窯	市6	3.68m	直立 (10° 内傾)	_	_	
VII B 39 ハセムシ18-V号窯 市8 2.94m 直立(ほぼ直立) VII B 41 ハセムシ18-VII号窯 市8 (2.45m) 直立(ほぼ直立) VII B 42 ハセムシ18-VII号窯 市8 3.20m 直立(ほぼ直立) VII B 61 後田59-I号窯跡 市11 2.97m 直立(21°内傾) - ○ VII B 62 後田59-II号窯跡 市11 2.99m 直立(ほぼ直立) ○ VII B 63 後田59-II号窯跡 市11 2.74m 直立(3°内傾) VII B 69 後田61-V号窯跡 市11 3.24m 直立(約5°内傾) VII B 89 本堂5次2号窯跡 市19 (1.80m) VII B 91 本堂5次4号窯跡 市19 (1.20m) VII B 92 本堂5次5号窯跡 市19 (1.60m) VII B 93 本堂5次5-II号窯跡 市19 (2.45m) VII B 110 井手19号窯跡 (8-1) 県4 3.12m 直立(15°内傾) VII B 111 井手20号窯跡 (8-1) 県4 3.32m 直立(10°内傾) VII B 113 井手22号窯跡 (8-2) 県3 3.08m 直立(約5°内傾) VII B 116 井手25号窯跡 R-2) 県3 3.04m 直立(お10°内傾) VII B 118 井手27号窯跡 (8-2) 県3 3.04m 直立(お10°内傾)	VII B	37	ハセムシ18-Ⅱ号窯	市8	3.20m	直立(ほぼ直立)	0	_	
VII B 41	VII B	38	ハセムシ18-Ⅲ号窯	市8	1.88m	直立(ほぼ直立)	_	_	
VII B 42	VII B	39	ハセムシ18-V号窯	市8		直立(ほぼ直立)	_	_	
VII B 61 後田59-I号窯跡 市11 2.97m 直立(21°内傾) - ○ VII B 62 後田59-II号窯跡 市11 2.99m 直立(ほぼ直立) - ○ VII B 63 後田59-II号窯跡 市11 2.74m 直立(3°内傾) - - VII B 69 後田61-V号窯跡 市11 3.24m 直立(約5°内傾) - - VII B 89 本堂5次2号窯跡 市19 (1.80m) - - - VII B 91 本堂5次4号窯跡 市19 (1.20m) - - - VII B 92 本堂5次5号窯跡 市19 (1.60m) - - - VII B 93 本堂5次5-II号窯跡 市19 (2.45m) - - - VII B 110 井手19号窯跡 (B-1) 県4 3.12m 直立(15°內傾) - - VII B 111 井手20号窯跡 (B-1) 県4 2.16m 直立(10°內傾) - - VII B 116 井手25号窯跡 (B-2) 県3 3.08m 直立(約10°內傾) - - VII B 11	VIIB	41	ハセムシ18-VII号窯	市8	(2.45m)	直立(ほぼ直立)	_		
VII B 62 後田59-II 号窯跡 市11 2.99m 直立(ほぼ直立) - ○ VII B 63 後田59-III 号窯跡 市11 2.74m 直立(3°内傾) - - VII B 69 後田61-V号窯跡 市11 3.24m 直立(約5°内傾) - - VII B 89 本堂5次2号窯跡 市19 (1.80m) - - - VII B 91 本堂5次4号窯跡 市19 (1.20m) - - - VII B 92 本堂5次5号窯跡 市19 (1.60m) - - - VII B 93 本堂5次5-II 号窯跡 市19 (2.45m) - - - VII B 110 井手19号窯跡 (B-1) 県4 3.12m 直立(15°内傾) - - VII B 111 井手20号窯跡 (B-1) 県4 3.32m 直立(10°内傾) - - VII B 116 井手25号窯跡 (B-2) 県3 3.08m 直立(約10°内傾) - - VII B 116 井手26号窯跡 (B-2) 県3 2.24m 直立(約10°内傾) - - VII B		42							
VII B 63 後田59-Ⅲ号窯跡 市11 2. 74m 直立(3°内傾) - - - VII B 69 後田61-V号窯跡 市11 3. 24m 直立(約5°内傾) - - VII B 89 本堂5次2号窯跡 市19 (1. 80m) - - - - VII B 91 本堂5次4号窯跡 市19 (1. 20m) - - - - VII B 92 本堂5次5号窯跡 市19 (1. 60m) - - - - VII B 93 本堂5次5号窯跡 市19 (2. 45m) - - - - VII B 110 井手19号窯跡 (B-1) 県4 3. 12m 直立(15°内傾) - - VII B 111 井手20号窯跡 (B-1) 県4 3. 32m 直立(10°内傾) - - VII B 116 井手25号窯跡 (B-2) 県3 3. 08m 直立(約10°内傾) - - VII B 116 井手26号窯跡 (B-2) 県3 2. 24m 直立(約10°内傾) - - VII B 118 井手27号窯跡 (B-2) 県3 3. 04m								 	
VII B 69 後田61-V号窯跡 市11 3. 24m 直立(約5° 内傾) - - VII B 89 本堂5次2号窯跡 市19 (1. 80m) - - - VII B 91 本堂5次4号窯跡 市19 (1. 20m) - - - VII B 92 本堂5次5号窯跡 市19 (1. 60m) - - - VII B 93 本堂5次5-II 号窯跡 市19 (2. 45m) - - - VII B 110 井手19号窯跡 (B-1) 県4 3. 12m 直立 (15° 内傾) - - VII B 111 井手20号窯跡 (B-1) 県4 3. 32m 直立 (10° 内傾) - - VII B 113 井手22号窯跡 (B-1) 県4 2. 16m 直立 (10° 内傾) - - VII B 116 井手25号窯跡 (B-2) 県3 3. 08m 直立 (約10° 内傾) - - VII B 117 井手26号窯跡 (B-2) 県3 2. 24m 直立 (約10° 内傾) - - VII B 118 井手27号窯跡 (B-2) 県3 3. 04m 直立 (ほび直立 (おば直立) - -									
VII B 89 本堂5次2号窯跡 市19 (1.80m) - - ○ VII B 91 本堂5次4号窯跡 市19 (1.20m) - - - - VII B 92 本堂5次5号窯跡 市19 (1.60m) - - - - VII B 93 本堂5次5-II号窯跡 市19 (2.45m) - - - - VII B 110 井手19号窯跡 (B-1) 県4 3.12m 直立 (15° 内傾) - - VII B 111 井手20号窯跡 (B-1) 県4 3.32m 直立 (10° 内傾) - - VII B 113 井手22号窯跡 (B-1) 県4 2.16m 直立 (10° 内傾) - - VII B 116 井手25号窯跡 (B-2) 県3 3.08m 直立 (約5° 内傾) - - VII B 117 井手26号窯跡 (B-2) 県3 2.24m 直立 (約10° 内傾) - - VII B 118 井手27号窯跡 (B-2) 県3 3.04m 直立 (ほぼ直立) - -				-				_	
VII B 91 本堂5次4号窯跡 市19 (1. 20m) - - - - VII B 92 本堂5次5号窯跡 市19 (1. 60m) - - - - VII B 93 本堂5次5-II 号窯跡 市19 (2. 45m) - - - - VII B 110 井手19号窯跡 (B-1) 県4 3. 12m 直立 (15° 内傾) - - VII B 111 井手20号窯跡 (B-1) 県4 3. 32m 直立 (10° 内傾) - - VII B 113 井手22号窯跡 (B-1) 県4 2. 16m 直立 (10° 内傾) - - VII B 116 井手25号窯跡 (B-2) 県3 3. 08m 直立 (約10° 内傾) - - VII B 117 井手26号窯跡 (B-2) 県3 2. 24m 直立 (約10° 内傾) - - VII B 118 井手27号窯跡 (B-2) 県3 3. 04m 直立 (ほぼ直立) - -						直立(約5°内傾)	_	-	
VII B 92 本堂5次5号窯跡 市19 (1.60m) - - - VII B 93 本堂5次5-II号窯跡 市19 (2.45m) - - - - VII B 110 井手19号窯跡 (B-1) 県4 3.12m 直立 (15° 内傾) - - VII B 111 井手20号窯跡 (B-1) 県4 3.32m 直立 (10° 内傾) - - VII B 113 井手22号窯跡 (B-1) 県4 2.16m 直立 (10° 内傾) - - VII B 116 井手25号窯跡 (B-2) 県3 3.08m 直立 (約10° 内傾) - - VII B 117 井手26号窯跡 (B-2) 県3 2.24m 直立 (約10° 内傾) - - VII B 118 井手27号窯跡 (B-2) 県3 3.04m 直立 (ほぼ直立) - -				<u> </u>		_		-	
VII B 93 本堂5次5-Ⅱ号窯跡 市19 (2. 45m) -						_	_	_	
VII B 110 井手19号窯跡(B-1) 県4 3.12m 直立(15°内傾) - - VII B 111 井手20号窯跡(B-1) 県4 3.32m 直立(10°内傾) - - VII B 113 井手22号窯跡(B-1) 県4 2.16m 直立(10°内傾) - - VII B 116 井手25号窯跡(B-2) 県3 3.08m 直立(約5°内傾) - - VII B 117 井手26号窯跡(B-2) 県3 2.24m 直立(約10°内傾) - - VII B 118 井手27号窯跡(B-2) 県3 3.04m 直立(ほぼ直立) - -				-		_	-	_	
VII B 111 井手20号窯跡(B-1) 県4 3.32m 直立(10°内傾) - - VII B 113 井手22号窯跡(B-1) 県4 2.16m 直立(10°内傾) - - VII B 116 井手25号窯跡(B-2) 県3 3.08m 直立(約5°内傾) - - VII B 117 井手26号窯跡(B-2) 県3 2.24m 直立(約10°内傾) - - VII B 118 井手27号窯跡(B-2) 県3 3.04m 直立(ほぼ直立) - -							_	_	
VII B 113 井手22号窯跡(B-1) 県4 2.16m 直立(10°内傾) - - VII B 116 井手25号窯跡(B-2) 県3 3.08m 直立(約5°內傾) - - VII B 117 井手26号窯跡(B-2) 県3 2.24m 直立(約10°內傾) - - VII B 118 井手27号窯跡(B-2) 県3 3.04m 直立(ほぼ直立) - -							_	_	
VII B 116 井手25号窯跡 (B-2) 県3 3.08m 直立 (約5° 内傾) - - VII B 117 井手26号窯跡 (B-2) 県3 2.24m 直立 (約10° 内傾) - - VII B 118 井手27号窯跡 (B-2) 県3 3.04m 直立 (ほぼ直立) - -									
VII B 117 井手26号窯跡(B-2) 県3 2.24m 直立(約10°内傾) - - VII B 118 井手27号窯跡(B-2) 県3 3.04m 直立(ほぼ直立) - -								-	
VII B 118 井手27号窯跡 (B-2) 県3 3.04m 直立 (ほぼ直立)							_	\longmapsto	
								_	
(MDD 1.10E 井子40日双床 (D 4) 旧4 (0.00.) 古子(45e。中居) 田平				_			_	— —	
VII B 125 井手40号窯跡 (B−4) 県4 (3.02m) 直立 (約5° 内傾) − 円形 VII B 126 井手41号窯跡 (B−4) 県4 1.92m 直立 (ほぼ直立) − − −							_	円形	

窯体構造一覧表(煙道・溝・ピット)(4)

時期	No.	窯跡名	文献	窯体水平長 (残存長)	排煙部 煙道の種類	溝状 遺構	ピット 類	備考
VIIB	127	井手42号窯跡(B-4)	県4	3.32m	直立(約4°内傾)	0	_	
VIIB	132	井手47号窯跡(B-4)	県4	(2.72m)	直立(約15°内傾)	_	_	
VIIB	133	井手48号窯跡(B-4)	県4	2.86m	直立(約4°内傾)	_	_	
VII B	134	井手49号窯跡(B-4)	県4	2.72m	直立(約10°内傾)	_	0	
VII B	138	足洗川37号窯跡(C)	県3	(2.48m)	直立 (5~20° 内傾)	_	_	
VII B	140	道ノ下11号窯跡(G)	県3	2.26m	直立(5°外傾)	_	-	
VII B	141	道ノ下12号窯跡(G)	県3	2.12m	直立(12°内傾)	_	_	
VIIB	142	道ノ下13号窯跡(G)	県3	2.76m	直立(10°内傾、上 半は5°外傾)	_	_	
VIIB	165	笹原51号窯跡 (M-1)	県4	2.04m	-		0	
VII B	166	笹原52号窯跡(M-1)	県4	(3.24m)	-		0	
VIIB	178	惣利4号窯跡	春3	2.94m	直立(約5°内傾)	_	0	
VIIB	180	惣利6号窯跡	春3	(2.60m)	_	_	_	
VIIB	181	惣利7号窯跡	春3	2.44m	_	_	_	
VIIB	182	惣利8号窯跡	春3	(1.86m)	直立(約10°内傾)	_	_	
VIIB	194	宮ノ本5号窯跡	太5	(1.92m)	_	_	_	
VII B	195	宮ノ本6号窯跡	太5	(1.83m)	_	_	_	
VII B	196	宮ノ本8号窯跡	太5	(4.50m)	単孔式	_	_	
VII B	201	向佐野4号窯跡	太8	(2.88m)	-	_	_	
VIIB	202	向佐野5号窯跡	太8	(1.76m)	-	_	_	
VIIB新	114	井手23号窯跡(B-2)	県3	3.52m	直立(5°内傾)	_	_	
VIII	13	石坂E-3号窯	市16	3.93m	_	_	0	
VIII	94	本堂5次6号窯跡	市21	(2.44m)	直立(ほぼ直立)	_	_	
VIII	115	井手24号窯跡(B-2)	県3	1.60m	直立(約10°内傾)	_	_	
VIII	179	惣利5号窯跡	春3	(2.65m)	_	_	0	
不明	20	ハセムシ1- I 号窯跡	市10	(2.40m)	直立(ほぼ直立)	_	_	
不明	21	ハセムシ1-Ⅱ号窯跡	市10	(5.72m)	多孔式 (2孔)	0	_	
未焼成	33	ハセムシ12-Ⅷ号窯跡	市10	2.06m	_	-	_	
未焼成	35	ハセムシ12-X号窯跡	市10	(2.76m)	_	?	_	
未焼成	77	小田浦37-Ⅱ号窯跡	市12	(12.60m)	多孔式?	0	_	
未焼成	79	小田浦38-Ⅱ号窯跡	市14	10.60m	多孔式(下段3、上 段1)	0	_	
未焼成	83	小田浦40-Ⅱ号窯跡	市12	4.46m	直立?	_	_	
_	27	ハセムシ12-Ⅱ号窯跡	市10	2.90m	直立(5°外傾)	_	_	
_	31	ハセムシ12-VI号窯跡	市10	3.80m	直立 (12° 内傾)	_	0	
	32	ハセムシ12-WI号窯跡	市10	5.15m	直立(ほぼ直立)	_	0	
_	112	井手21号窯跡(B-1)	県4	2.68m	直立 (20° 内傾)	_	_	
_	136	足洗川35号窯跡(C)	県3	(2.05m)	直立(約18°内傾)	_	_	
	139	道ノ下10号窯跡(G)	県3	(2.28m)	直立 (12° 内傾)			
_	144	道ノ下15号窯跡(K)	県3	2.92m	直立(約5°内傾)	_		
	154	長者原58号窯跡(I)	県4	(1.80m)	直立(約3°内傾)	?	_	
_	156	長者原60号窯跡(I)	県4	(1.12m)	直立(約3°内傾)	_	_	
_	163	長者原67号窯跡(I)	県4	3.26m	直立(約5°内傾)	_		
_	164	長者原68号窯跡(I)	県4	(2.60m)	直立 (28° 外傾)	_	_	
_	173	浦ノ原6号窯跡	春1	(3.15m)	直立(約10°内傾)	_	_	
_	187	神ノ前第3号窯跡	太7	(1.98m)	直立(ほぼ直立)	_	_	
	206	平田B地点第3号窯跡	そ1	(4.00m)	_		-	
_	12	石坂E-2号窯	市16	3.76m	直立 (30° 外傾)	_	0	

WI. 自然科学的分析の成果

1. はじめに

これまでの牛頸窯跡群の調査・報告においては、さまざまな自然科学的分析が行われてきた。具体的には、考古地磁気年代推定・樹種同定・胎土分析・窯焼成温度推定・顔料同定・象嵌調査などが当窯跡群の調査において行われている(第12表)。以下では、牛頸窯跡群において行われてきたこれらの自然科学的分析の成果について整理する。なお、個々の分析原理・方法の詳細については、各分析の報告の際に行われているので、以下ではその概略のみふれることとし、分析の成果を中心に記述することにする。

2. 考古地磁気年代測定

(1)目的

須恵器の編年に限らず考古学的方法により構築される編年体系は相対的な新旧関係を示すものであり、実年代あるいは数値年代を知るには、文献史料、考古資料上に残された年代の判明する文字記録、及び自然科学的方法に基づく分析などが必要となる。

(2) 方法

自然科学的手法にもとづく年代推定の一つである熱残留磁気による年代推定法は、岩石や土が高温で被熱しその冷却の過程で獲得される残留磁気を測定することにより年代の推定を行うことから、須恵器窯跡はその対象として好適なものといえる。資料は、資料採取位置の現在の方位を測定した後、石膏で固めて採取される。熱残留磁気による地磁気年代推定では、資料の偏角と伏角を測定し、これまでに年代の分かっている遺跡出土の焼土や火山岩などの残留磁気測定結果による地磁気・年変化の標準曲線と比較し、年代の推定が行われる(市8)〈註1〉。このような原理・方法による地磁気年代推定法は、これまでにも陶邑窯跡群をはじめ牛頸窯跡群でも用いられ、データの蓄

第12表 牛頸窯跡群における自然科学的分析

報告書番号	発行年	報告書名	自然科学的分析の種類
第23集	1988	『牛頸ハセムシ窯跡群 I 』	地磁気年代推定
第30集	1989	『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ』	地磁気年代推定
第41集	1993	『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅲ』	地磁気年代推定・樹種同定
第49集	1997	『牛頸石坂窯跡』	胎土分析・窯焼成温度推定
第60集	2007	『牛頸梅頭遺跡群 I 』	樹種同定・胎土分析・顔料分析・ 鉄刀象嵌調査
第61集	2003	『牛頸本堂遺跡群 I 』	胎土分析
第66集	2005	『牛頸野添遺跡群Ⅱ』	地磁気年代推定・樹種同定
第70集	2006	『牛頸野添遺跡群IV』	樹種同定
第73集	2007	『牛頸小田浦窯跡群Ⅱ』	樹種同定

積が行われている。

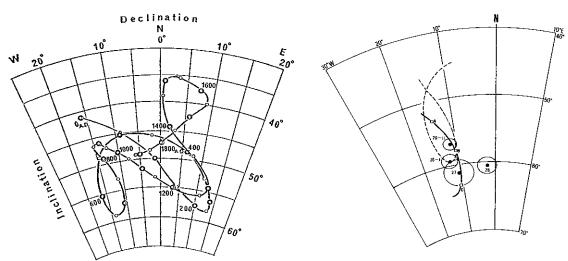
(3) 成果

牛頸窯跡群では、1987年調査の牛頸ハセムシ窯跡群(市8)での年代推定をはじめ、野添遺跡群(市20)などにおいても熱残留磁気測定に基づく年代推定が蓄積されている。1987年の牛頸ハセムシ窯跡群調査においては8基の窯跡から合計115個のサンプルが採取され、最終的に112個の資料について熱残留磁気の測定が行われた。これらの測定結果と、西南日本での過去2000年間にわたる地磁気永年変化の標準曲線(第87図)との比較から、第13表のような年代値がえられている〈註2〉。

この結果では18-7号窯で 560 ± 10 年という他の窯より古い年代がえられたほかは、ほぼ650年前後の年代値がえられている〈註3〉。また、これらの推定年代は出土須恵器から推定されている年代とおおよそ100年のずれを生じていることが明らかにされている〈註4〉。このような考古地磁気推定年代と考古学的に推定された年代とのずれは、中津市所在の伊藤田窯跡群などにおいても指摘されていたものであり〈註5〉、地磁気永年変化にみられる地域差がこのような地磁気推定年代と考古学的な推定年代とのずれの主な要因とされている〈註6〉。

このような地磁気永年変化にみられる地域性の問題に対して、その後も牛頸ハセムシ窯跡群(市 10・市15)の資料を中心とした考古地磁気測定結果の蓄積が進められてきたことにより〈註7〉、8世紀を中心として地域差を補正する作業が進められてきた(第88図)。その結果、第14表にみられるように考古学的な年代推定とほぼ整合的な年代をうるにいたっている〈註8〉。

その後も、熱残留磁気測定による年代推定は継続して行われており、野添遺跡群4次2号窯跡など6世紀末から7世紀はじめとされる、それまでの分析事例より古い時期の窯跡を対象とした測定及び地磁気永年変化曲線との比較検討が行われている〈註9〉。これまで牛頸窯跡群で測定された8世紀以降の偏角・伏角と標準曲線のずれの程度や、標準曲線にみられる変化の方向性を検討した結果、分析値から推定される年代と考古学的に推定される窯跡の年代とは大きく矛盾するものではない可能性が指摘されている〈註10〉。



第87図 西南日本過去2000年間の地磁気永年変化 第88図 8世紀のハセムシ窯跡変化曲線(実線) および広岡曲線(破線)

第13表 牛頸ハセムシ窯跡群 (18~20地区) における考古地磁気年代推定結果

遺跡名 • 調査	窯名	資料数	推定年代	報告書
牛頸ハセムシ窯跡群	18-2号窯	15	660 ± 10	第23集
牛頸ハセムシ窯跡群	18-5号窯	15	640 ± 20	第23集
牛頸ハセムシ窯跡群	18-6号窯	15	610 ± 30	第23集
牛頸ハセムシ窯跡群	18-7号窯	14	560 ± 10	第23集
牛頸ハセムシ窯跡群	18-8号窯	12	610 ± 30	第23集
牛頸ハセムシ窯跡群	19号窯	13	675 ± 25	第23集
牛頸ハセムシ窯跡群	20-1U号窯	9	_	第23集
牛頸ハセムシ窯跡群	20-1L号窯	5	650 ± 50	第23集
牛頸ハセムシ窯跡群	20-2号窯	14	650 ± 10	第23集

第14表 牛頸窯跡群における考古地磁気年代推定結果

遺跡名・調査	窯名	資料数	推定年代	考古学的推定年代	報告書
牛頸野添4次	2号窯	12	_		第66集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	12-IX号窯	12	700 ± 10	7世紀末	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	1-Ⅱ号窯	12	700 ± 10	7世紀末	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	6-Ⅲ-B窯	12	710 ± 10	7世紀末	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	12-Ⅱ号窯	11	700 ± 10	8世紀前半	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	12-Ⅲ号窯	12	700 ± 10	8世紀前半	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	12-V号窯	12	700 ± 10	8世紀前半	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	12-VI号窯	12	700 ± 10	8世紀前半	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	12− Ⅶ 号窯	13	690 ± 10	8世紀前半	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	∗18−5号窯	15	710 ± 10	8世紀前半	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	*19号窯	13	700 ± 10	8世紀前半	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	6- I 号窯	12	730 ± 10	8世紀中から後期	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	6-Ⅱ号窯	11	720 ± 10	8世紀中から後期	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	1- I 号窯	12	720 ± 10	8世紀中から後期	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	12- I 号窯	12	730 ± 10	8世紀中から後期	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	∗18−2号窯	15	730 ± 10	8世紀中から後期	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	*18-6号窯	15	740 ± 10	8世紀中から後期	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	∗18−8号窯	12	740 ± 10	8世紀中から後期	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	∗ 20−1L号窯	5	740 ± 30	8世紀中から後期	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	*20-2号窯	14	730 ± 10	8世紀中から後期	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	22-Ⅱ号窯	12	730 ± 10	8世紀中から後期	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	23- I 号窯	9	730 ± 10	8世紀中から後期	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	*18-7号窯	14	780 ± 10	8世紀中から後期	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	22-IV号窯	12	775 ± 10	8世紀中から後期	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	22-Ⅲ号窯	11	765 ± 10	8世紀中から後期	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	12-IV 号窯	12	760 ± 10	8世紀中から後期	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	7- I 号窯	11	750 ± 10	8世紀中から後期	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	6-Ⅲ-A号窯	10	750 ± 10	8世紀中から後期	第30集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅲ	26- I 号窯	10	720 ± 10	8世紀中から後期	第41集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅲ	26-Ⅱ 号窯	10	740 ± 10	8世紀中から後期	第41集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅲ	27号窯	10	710 ± 10	7世紀末から8世紀前半	第41集
牛頸ハセムシ窯跡群Ⅲ	28号窯	10	710 ± 20		第41集

*:ハセムシI調査窯跡採取資料

以上のように、牛頸窯跡群における熱残留磁気測定による年代推定が蓄積される過程で、近畿および東海地方のデータを基礎とする西南日本の永年変化曲線と九州地方の地磁気変化との間の地域差が明らかにされてきた。このような点から、牛頸窯跡群における継続的な考古地磁気年代推定の蓄積は、8世紀前後を中心とした九州地方における地磁気永年変化曲線の確立に非常に大きな役割を果たしたものということができる。

3. 樹種同定

(1)目的

須恵器窯跡出土炭化材を用いた樹種同定は陶邑において1970年代後半から行われている。牛頸窯跡群の調査においても、1992年に調査された牛頸ハセムシ窯跡群調査(26~29地区)(市10)における窯跡出土炭化材の樹種同定をその古い分析例として、その後も継続的に資料の採取と樹種同定の蓄積が行われてきた。木材の樹種同定からは、それが自然木であれば当時生育していた樹種を知ることができ森林復元へとつながり、加工材からは過去の人びとがどのような目的でどのような樹種を用いていたのかを知ることができる〈註11〉。須恵器の生産においては、その焼成において多量の燃料を必要とすることから、燃料採集によって周囲の森林が大きな影響を受けた可能性が想定されている〈註12〉。窯跡出土の炭化材の樹種同定からは、遺跡周辺の森林相をうかがい知ることができ、また樹種の通時的変化を検討することにより周囲の森林の変化等を知ることも可能となる。

牛頸窯跡群では、6世紀中頃から9世紀前半ごろの窯跡がこれまで調査されており、長期間にわたり須恵器を主とする生産活動が行われた窯跡群であることが明らかにされている〈註13〉。このように長期にわたって須恵器生産が継続して行われているが、窯の構造や立地には変化がみられ〈註14〉、なかでも窯跡の立地に見られる推移については、森林資源の枯渇との関連が想定されている(市23)。窯跡出土炭化材の樹種同定は、遺跡周辺の森林復元を行い、人の生産活動と周囲の自然環境との相互関係について復元する際に、有益な情報を提供するものと考えることができる。

(2) 方法

樹種の同定は、資料の基本三断面である横断面(木口)・放射断面(柾目)・接線断面(板目)の 切片を作成し、顕微鏡観察を行ったうえで、解剖学的形質および現生標本との対比にもとづいて行 われる〈註15〉。

(3) 成果

これまで窯跡出土の炭化材を用いた樹種同定は、牛頸ハセムシ窯跡群・牛頸梅頭遺跡群(市24)・牛頸野添遺跡群(市20・市22)・牛頸小田浦窯跡群(市23)などにおいて行われており、これら諸遺跡での樹種同定の結果をまとめると第15表のとおりとなる。

これまでの報告にもとづき樹種同定結果を概観すると、常緑樹・落葉樹ともにさまざまな樹木が 燃料材として使用されていることがわかる。とくに、先の4窯跡群のいずれからも出土しているも のとして、コナラ属アカガシ亜属(アカガシ・イチイガシ・アラカシ・シラカシなど)があげられる。

第15表 牛頸窯跡群における樹種同定結果

科・属	(ツツジ科)	(ツバキ科)	(ツバキ科)	(ツバキ科)	(ブナ科)	(サンマク科)	(ヤマモモ科)	シイ属
[種]	シャシャンボ	サカキ	ヒサカキ	ヤブツバキ	ツブラジイ	イスノキ	ヤマモモ	
梅頭遺跡群1次 1号窯跡	1	4	0	0	1	0	0	4
野添遺跡群2次SB01	0	0	0	1	0	0	0	0
野添遺跡群4次1号窯跡	0	0	0	3	0	0	0	0
野添遺跡群7次灰原	0	0	0	0	0	0	1	0
野添遺跡群7次1号窯	1	0	0	0	1	0	0	0
小田浦窯跡群Ⅱ 3号窯跡灰原	0	0	0	0	0	2	0	4
野添遺跡群7次2号窯	1	0	0	0	2	0	1	2
野添遺跡群2次2号窯	0	0	0	0	0	0	0	0
ハセムシ窯跡群26地区	0	0	1	0	0	0	0	0
合計	3	4	1	4	4	2	2	10

科・属	(ブナ科) コナラ属ア	ユズリハ属	(ブナ科)	ブナ科	ハイノキ属		(ムクロジ科)	カキノキ属
1	カガシ亜属		スダジイ			クリ	ムクロジ	
梅頭遺跡群1次 1号窯跡	7	0	9	0	0	0	0	0
野添遺跡群2次SB01	0	0	0	0	0	1	0	0
野添遺跡群4次1号窯跡	7	0	0	0	0	1	0	0
野添遺跡群7次灰原	0	1	0	0	3	0	1	1
野添遺跡群7次1号窯	7	3	0	0	0	0	0	0
小田浦窯跡群Ⅱ 3号窯跡灰原	3	0	0	1	0	0	0	0
野添遺跡群7次2号窯	5	0	0	0	0	0	0	0
野添遺跡群2次2号窯	5	0	0	1	0	1	0	0
ハセムシ窯跡群26地区	1	0	0	0	0	0	0	0
合計	35	4	9	2	3	3	1	1

科・属	(バラ科) サクラ属				散孔材	不明	サンプル数
1		ラ属コナラ節	ヤブニッケイ				
梅頭遺跡群1次 1号窯跡	1	2	1	0	0	0	30
野添遺跡群2次SB01	0	0	0	0	0	0	2
野添遺跡群4次1号窯跡	0	0	0	0	2	0	13
野添遺跡群7次灰原	0	0	0	0	0	2	9
野添遺跡群7次1号窯	0	0	0	0	0	1	13
小田浦窯跡群Ⅱ 3号窯跡灰原	0	0	0	0	0	0	10
野添遺跡群7次2号窯	0	0	0	1	0	1	13
野添遺跡群2次2号窯	0	0	0	0	0	0	7
ハセムシ窯跡群26地区	1	1	0	0	0	0	4
合計	2	3	1	1	2	4	101

また、同定された樹種の多くは高木に分類される樹木であり、低木にはシャシャンボなどが少数みられるということがいえよう。また、これまで樹種同定の分析が行われてきた窯跡は、野添遺跡群 4次 Aso-4火砕流堆積層出土の炭化材や野添遺跡群 6次洞窟壕床面構築材などを除くと、6世紀後半から7世紀前半までの時期と7世紀後半から8世紀代までの窯跡(牛頸ハセムシ窯跡26地区・野添遺跡2次2号窯)に大別可能といえる。樹種同定された資料が6世紀後半から7世紀前半までの時期に偏ることから、須恵器の焼成に使用された木材に通時的変化がみられるのかどうかについては不明な部分が多い。しかし、いずれの時期においても、コナラ属アカガシ亜属が量的に多い点、樹脂を多く含み薪に適しているとされるアカマツがみられない点は共通している。またクリその他の二次林性の樹木も、両時期においてともに認められる。

以上のような樹種同定結果にもとづき遺跡周辺の環境について以下のような知見がこれまでにえられている。コナラ属アカガシ亜属、シイ属など照葉樹林を構成する主要高木が認められる点から、遺跡周辺には照葉樹林が分布しており〈註16〉、また、野添遺跡の同定結果ではクリ、ツブラジイなど二次林性の樹木もみとめられることから、遺跡周辺が二次林化していた点が明らかにされている〈註17〉。野添遺跡群の北に位置する梅頭遺跡群の分析結果においても、同様にスダジイ・ツブラジイなど二次林性の樹木がみられることから遺跡周辺が二次林化していた可能性が指摘されており〈註18〉、近接して立地する両遺跡群間で整合的な結果がえられているものと考えられる。

一方、上述のようにこれまでの樹種同定結果では、牛頸野添遺跡群6次調査における洞窟壕床面 構築材以外には、アカマツは認められない。陶邑においては、窯跡出土炭化材の樹種同定の結果から、 7世紀ごろを境にそれまで広葉樹が主体的に認められていたのに対し、一部の窯跡ではアカマツが 多く認められるようになるという傾向が指摘されている〈註19〉。このような結果について、アカ マツが多く認められた窯跡は、以前より窯が操業され続けてきた地域に分布することから、燃料採 集により森林伐採がくり返し行われたため照葉樹林にかわり陽性樹木であるアカマツやクヌギが増 加し、結果としてアカマツの二次林になっていったものとされている〈註20〉。また、このような 窯跡出土炭化材による樹種同定の結果にくわえ、花粉分析による陶邑周辺の環境復元も行われてい る。これらの結果によると、陶邑内の複数にわたる地点全体で古墳時代に照葉樹林が縮小すること が明らかとなっており、燃料採集による森林伐採がその一因とされている〈註21〉。さらに、この ような照葉樹林の縮小と併行して二次林要素のマツ属が増加するという傾向は認められないことか ら、照葉樹林伐採後は裸地化していた可能性やコナラ属も含め二次林が形成されていた可能性が指 摘されている〈註22〉。アカマツを中心とした二次林の拡大は中世以降顕著にみられる現象であり、 また、アカマツ二次林の拡大には陶邑窯跡群内の小地域間で時期差がみられるという指摘がなされ ている〈註23〉。このようにアカマツの二次林が形成される時期に地域差がみられる点やアカマツ 二次林が形成される以前にコナラ属等を含む二次林が形成されていたという結果は、上記の炭化材 樹種同定結果から指摘されている窯跡周辺の森林相に見られる小地域間での様相の違いについての 見解とも整合するものといえるであろう〈註24〉。

牛頸窯跡群においては、これまでの樹種同定結果にもとづく限り、アカマツがさほど利用されていないと考えられる。このような状況は、「山頂部以外は緩傾斜地が比較的多いため、このような場所では土壌層が深くなっており、植物相は市内他所に比べて豊である。」〈註25〉点、すなわち貧土壌な痩せ地を好むアカマツには向かない〈註26〉という牛頸山塊の自然環境上の特徴も少なからず関係しているものと推測される。また、このような自然環境上の条件に加え、時代が下るにつれ窯分布の比重が牛頸窯跡群内でもより南の牛頸山側へ移るという指摘がなされている(市23: p. 6)〈註27〉。このようなことを考慮するならば、度重なる森林伐採によるアカマツの二次林が形成される段階以前に、より南の山側へと窯場が移行したため、牛頸窯跡群においてこれまでアカマツが検出されていないという可能性も考えられよう。

このような点を踏まえ、牛頸窯跡群と先に紹介した陶邑において指摘されている二通りの森林利用の様相を比較するならば、それまでさほど窯場として利用されなかった場所において新たに須恵器窯を築く場合と類似した状況が想定される。しかし、これまで窯跡出土炭化材資料の蓄積が継続的に進められてきたとはいえ、依然資料採取地点が少ない点などから憶測の域を出ない。今後花粉分析なども活用した、より包括的な森林復元が必要であろう。

須恵器生産においては燃料として多量の木材を使用する必要があることから、窯跡の歴史的展開や意義については森林資源との関わり抜きでは考えることのできないものといえる。牛頸窯跡群出土の炭化材樹種同定の蓄積により、陶邑での森林相やその資源利用の有り方と比較可能な状況となりつつあるものといえる。今後、窯跡の立地やその変化などと周囲の森林との関係に関するさらな

る研究の進展が期待される。

4. 胎土分析

(1)目的

胎土分析は、蛍光 X 線分析などにより土器の胎土中に含まれる化学特性(K・Ca・Rb・Sr・Na などの含有量にみられる特徴)の解析を行い、分析対象である土器の産地推定を行うために有効な分析である。牛頸窯跡群から供給された須恵器の消費地の範囲等を把握する際、重要な情報を得ることのできる分析方法といえよう。このような特定産地の製品の流通範囲を把握するには、その前提として生産地における土器の胎土特性が把握されている必要がある。牛頸窯跡群で生産された須恵器に関しては、これまでその化学的特性の把握がなされている。さらに、これまで牛頸窯跡群の諸遺跡における胎土分析においては、窯跡出土の土器群を分析対象とすることから、上記のようなこれまで明らかにされてきた牛頸で作られた製品の胎土の特性を追証するという点以外にも、同一窯跡から出土するさまざまな土器の胎土の比較という観点から分析が行われている。詳細は後述するが、土師器と須恵器の胎土比較、陶棺の産地についての検討、須恵器杯と甕の胎土比較などさまざまな角度から、同一窯跡出土の土器についての分析が行われてきた。これらの分析の目的は、それぞれの窯跡での調査所見に依拠する部分が大きいため、各報告の概要においてそれぞれ述べることにする。いずれにしても、このようにさまざまな観点から生産地において出土する土器の化学特性に関する比較検討を行うことは、牛頸窯跡群での須恵器生産の様相を把握する際の基礎的成果となるものと考えられる。

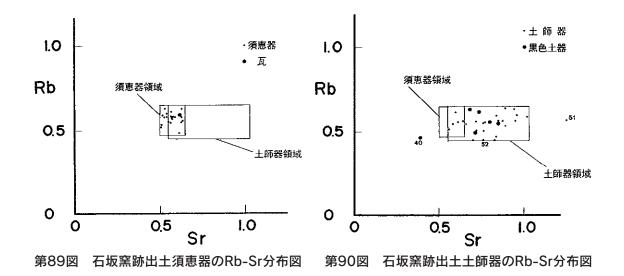
(2) 方法

須恵器に限らず土器に用いられる粘土中には K、Ca、Na、Fe などの主成分元素と Rb、Sr、Sc、La などの微量元素が含まれる〈註28〉。これらの元素のうち、地域差を有効に示すと考えられる元素はこれまでの分析の蓄積によって K、Ca、Sr、Rb であることが明らかにされている〈註29〉。そのためこれらの主成分元素・微量元素の含有量にみられる特徴を、蛍光 X 線分析によって解析するという方法がとられている。資料は、胎土中の化学的特性を均質にするため、須恵器などの土器片を粉末にし高圧を加えることにより錠剤資料にしたうえで、分析される〈註30〉。

(3) 成果

牛頸窯跡群出土須恵器の蛍光 X 線分析による胎土分析は、これまで牛頸石坂窯跡 E 地点(市 16)・牛頸本堂遺跡 3 次調査(市17)・牛頸梅頭遺跡 1 次調査(市24)出土資料について行われて いる。以下各窯跡出土の須恵器及び土師器の胎土分析の成果についてまとめる。

石坂窯跡 E 地点では、3基の窯跡が調査された。1号窯跡は窯壁にカーボンの付着がみられることなどから白炭窯と考えられている(市16)。2号窯跡・3号窯跡についても窯内が黒く、また窯内焼成温度推定の結果から900℃を超えない窯内温度であったことが明らかとなっている〈註31〉。また、これらの窯跡の灰原からは須恵器のほかに土師器・黒色土器が出土している。とくに多量の土師器・黒色土器の出土した3号窯跡に関しては、須恵器との併焼窯、土師器や黒色土器の



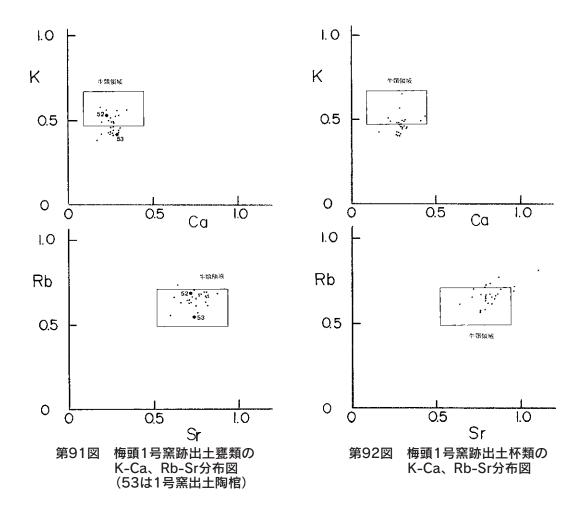
窯、土師器や黒色土器を持ち込んだ可能性などが挙げられている。最終的には、灰原出土の須恵器 甕類が完形品に近い状態で投棄されたと考えられる点や焼け歪みなどがみられる点から、須恵器大 甕や小形の甕の焼成に用いられた窯跡と考えられている(市16:pp.44-46)。

上記のようなさまざまな可能性の考えられる石坂窯跡 E 地点の性格を明らかにするため、当窯跡出土須恵器及び土師器に関する胎土分析が行われている。資料数は52点で、須恵器21点・土師器24点・黒色土器6点・瓦1点である。これらの分析対象資料には若干数1号窯跡・2号窯跡出土土器が含まれるが、大半は3号窯跡及び灰原より出土した遺物である〈註32〉。

主成分元素である K、Ca の分布の検討により、全ての須恵器とほとんどの土師器が同一の胎土を用いたものであることが明らかにされている。同様に両元素の分布から土師器と黒色土器についても、一部の例外はみられるものの、同じ胎土を用いたものとされている〈註33〉。

微量元素である Rb、Sr の分布からは、Rb 量においては須恵器・土師器の間で大きな相違は認められず、Sr 量で両者間に相違が認められるという結果がえられている(第89・90図)。このような Sr 量にみられる須恵器と土師器の相違に関しては、土師器により多くの石粒が含まれていることに起因する可能性が指摘されている。砂粒の含有に影響を受ける Na 量の比較や Ca と Sr の相関からも、このような砂粒の含有が須恵器と土師器の胎土中の Sr 量にみられる相違の原因であることが明らかとなっている〈註34〉。このような Sr や Na などとは対照的に、胎土中に含まれる砂粒の多寡に左右されにくい K や Rb では須恵器と土師器間でほぼ同様な分布を示すことから、同一の粘土を素材としていたものとされている。このような検討結果にもとづき、分析対象とした須恵器及び黒色土器も含めほとんどの土師器は石坂窯の製品であるとの指摘がなされている〈註35〉。この結論を冒頭に紹介した報告書中で提起されている3つの可能性と対応させるならば、須恵器・土師器の併焼窯という可能性を支持する結果ということになろう。

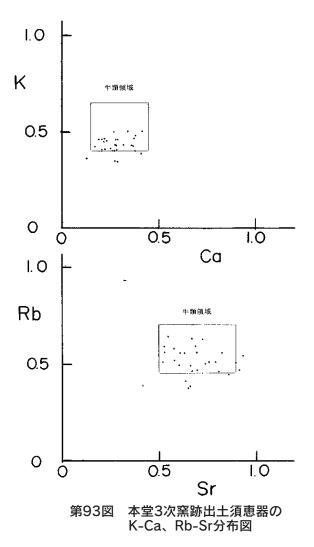
梅頭遺跡 1 次調査においては、1 号窯跡灰原より陶棺 1 点が出土している(市24)。当資料には陶棺底板内面に星形の当て具痕がみられるが、牛頸窯跡群出土遺物ではそれまで確認されていなかったものである(市24)。また、1 点のみの出土であり、梅頭 1 号窯跡で焼成されたものとする



には積極的根拠が乏しいこと(市24)などから、1号窯跡出土の他の須恵器も含め胎土分析が行われている。

分析対象資料は合計53点である。蛍光 X 線分析による胎土の化学特性の測定結果を、これまでの分析により明らかにされている牛頸領域と比較した結果、甕・杯ともに K-Ca の分布では牛頸領域からやや外れるものもみられるが、Rb-Sr の分布では牛頸領域とほぼ対応するという結果が得られている(第91・92図)〈註36〉。これらにより、梅頭1号窯跡出土の須恵器には、牛頸窯跡群の須恵器と類似する胎土が使用されていたものとされている。また、上記陶棺にみられる当て具痕は、天観寺山窯跡群で類似したものが確認されていることから〈註37〉、当窯跡出土須恵器と天観寺山窯跡群出土須恵器および牛頸窯跡群出土須恵器双方との類似性について分析が行われた。その結果、梅頭1号窯跡出土須恵器の胎土は牛頸窯跡群出土須恵器の胎土とより類似するという結果がえられ、梅頭1号窯跡出土陶棺についても当窯跡で焼成されたものとの結論に至っている〈註38〉。

本堂遺跡3次調査出土の須恵器は、報告にあるとおり灰原裾部出土や採集の須恵器と窯出土の須恵器で明らかに時期が異なり、窯での生産品以外のものが含まれる可能性が想定されている(市17)。この点については、付近に他の窯の所在が確認されず、窯の位置する丘陵下位に遺跡(本堂2次遺跡)が展開していることから、そこから持ち込まれたものと想定されている(市17:



pp.13-15)。

蛍光 X 線分析による胎土に含まれる微量元素 (K・Ca・Fe・Rb・Sr・Na) の測定は、本堂3次 調査検出の窯で生産された須恵器と他所から持ち込まれた可能性の高い須恵器の双方について行われた。資料数は合計29点である。これらの測定結果は牛頸領域内にほぼ収まるというものであった (第93図)。この結果にもとづき、本調査出土及び採集の須恵器に関しては、牛頸窯跡群一帯に分布していると想定される同じ化学的特性を持つ粘土を使用し、牛頸窯跡群において生産されたものという点が指摘されている〈註39〉。

また、上記のような分析・検討にもとづき、現 段階においては同一の窯跡群内における窯間の相 互識別は一般的に難しいというこれまでの知見を 再確認するとともに、今後牛頸窯跡群などの同一 窯跡群を母集団とし他の窯跡群との相互識別をお こなうことにより、牛頸産製品の伝播を追跡する ことが有効である点についての指摘がなされてい る〈註40〉。これまでの胎土分析によって8世紀 以降の牛頸産製品は、朝倉町大迫遺跡、大分県直 入郡久住町石田遺跡などにおいて認められること

が明らかとなっており、加えて肉眼観察によると佐賀県東部や熊本県北部においても牛頸産の須恵器が認められる〈註41〉。上記のような指摘を踏まえ、胎土分析を中心に、牛頸窯跡群の製品の流通範囲等、供給の実態についての把握が、今後も進められることが期待される。

5. 窯焼成温度推定

(1)目的

窯の焼成温度の推定は、牛頸石坂窯跡 E 地点を対象として行われている(市16)。本地点では 1号~3号窯跡の3基が検出されている。先述のように1号窯は白炭窯と考えられており、3基 とも窯壁は黒く、須恵器窯で見られるような窯壁と異なる様態であった。そのため窯内温度が高 温ではなかったものと推測されたことから、窯壁の薄片観察による窯の焼成温度に関する知見を うる目的で分析が行われている〈註42〉。

(2) 方法

焼成温度の推定にあたっては、窯から採取した資料を切断し、薄片プレパラートを作成した上で、

偏光顕微鏡にて鉱物片・岩片・素地における鉱物組成の観察が行われる〈註43〉。各資料に含まれる鉱物の組成と多寡を中心とした観察にもとづき、角閃石・セリサイト・石英などさまざまな鉱物にみられる、高温焼成の際の温度条件や化学組成に対応した鉱物の晶出、溶融・非晶質化などの現象がみられるかどうかにより、温度の推定が行われる。焼成温度の推定の指針としては8つが挙げられている〈註44〉。

(3) 成果

石坂窯跡 E 地点 1 号~3 号窯跡の燃焼部及び煙道付近から合計 6 個の資料を採取し、窯の焼成温度等の推定が行われている〈註45〉。

各資料の鉱物組成の観察にもとづき、6資料中1例を除ききわめて類似した鉱物組成である点が明らかにされている。石坂窯跡の窯壁観察においては、セリサイトに加熱変化がみられない点から、900℃以下の焼成温度と判断されている〈註46〉。石坂窯跡においては先に述べたように、窯内が通常みられる須恵器窯とは異なり黒色を呈していることから窯内温度が高温ではなかったとの所見がもたれていたが(市16)、鉱物の加熱変化を指標とした上記のような薄片観察によって、より客観的指標にもとづいた焼成温度に関する知見がえられたものといえる。

6. 赤色顔料の同定

(1)目的

梅頭1号窯跡からは、窯体内埋土中から出土した遺物(焼成部出土遺物 B 群: IV 期古段階)中に赤色顔料が付着した須恵器杯が認められたため、顔料の同定が行われた。墓から出土する赤色顔料については、北部九州における弥生時代以降その通時的な使用の有り方が把握されており、古墳時代においては6世紀中頃まで、埋葬施設にベンガラ、遺骸に朱という顔料の種類による使い分けが明確である点が指摘されている〈註47〉。その後、6世紀中葉以降は顔料の多様な使い方がこれまでの事例から伺われるため〈註48〉、顔料の種類の同定が当時の葬送習俗の一端を知るうえで重要な情報といえる。

第16表 牛頸梅頭1号窯跡出土赤色顔料分析結果一覧

試			the sale	顕微	鏡観察	蛍光X	線分析	赤色顔料	
試料No	注記	部位	時期	朱	ベンガラ	76 20 20	の種類	備考	
1-1	1 焼成部出土遺物 B 群-18 (1地点 1号窯焼成部 1左 No.17)	須恵器 内面	6C末~	×	0	×	0	ベンガラ	須恵器内に入っ ている
1-2		須恵器 外面	7C初	×	0	×	0	ベンガラ	試料1須恵器内 から拡散?
2-1	焼成部出土遺物B 群-20 (1地点 1号窯焼成部1左 No.20)	須恵器 内面	6C未~	×	0	×	0	ベンガラ	試料1須恵器内 から拡散?
2-2		須恵器 外面	7C初	×	0	×	0	ベンガラ	試料1須恵器内 から拡散?

(2) 方法

赤色顔料の種類には、これまでの研究によって酸化第二鉄(Fe_2O_3)等を主成分とするベンガラ、赤色の硫化水銀(HgS)を主成分とする朱の二種のあることが判明している。また、これ以外に古代の赤色顔料として四酸化三鉛(Pb_3O_4)を主成分とする鉛丹がある〈註49〉。これらの弁別を行うため、顕微鏡観察(実体顕微鏡観察・生物顕微鏡観察・電子顕微鏡観察)および蛍光 X 線分析が行われている〈註50〉。

(3) 成果

上記各観察および分析の結果、4つの資料全てがベンガラであることが明らかにされている(第16表)〈註51〉。このような「赤色顔料入り須恵器」〈註52〉の副葬は、これまでにも6世紀中頃の事例として岡山県岡山市西山3号墳〈註53〉・愛媛県松山市葉佐池古墳2号石室〈註54〉などで確認されている。これらの古墳出土顔料には朱、ベンガラあるいは朱とベンガラが混じった例などがあり、その種類に規則性がみられず多様なあり方をすることが指摘されている〈註55〉。本遺跡出土の「赤色顔料入り須恵器」も6世紀中頃以降みられるようになる赤色顔料の多様な使われ方の一つを示すものと評価されている〈註56〉。

梅頭1号窯跡出土の赤色顔料付着須恵器は、その出土状況や帰属時期から遺体埋葬時に伴う遺物と考えられている(市24:pp.91-92)。また、当窯跡は、報告にあるとおり窯の操業終了後に埋葬施設として転用された窯跡であり、これまで例をみない特殊な埋葬方法を採用した墓である〈註57〉。さらに、その後の近隣の調査区からは「カマド塚状遺構」なども調査されており、被葬者像について近畿地方とかかわりの深い人物との推定がなされている〈註58〉。このように特異な葬法を採用した葬送行為の一部を構成する赤色顔料使用の有り方は、これまでの古墳出土の「赤色顔料入り須恵器」との比較という意味から非常に興味深い資料といえよう。

7. 鉄刀象嵌の分析

(1)目的

象嵌を施された鉄刀の研究においては編年、技術系譜や製作地、佩用者の性格などさまざまな問題について、考古学的手法を中心とした検討が進められている。また、X線透過装置による調査、電子顕微鏡などの精密機器による形状分析や理化学的分析など、自然科学的手法にもとづく研究も蓄積されつつある〈註59〉。象嵌部分の顕微鏡観察や、蛍光 X線分析による象嵌の材質についての分析は、上記のような技術系譜や製作地の問題を検討する際、考古学的手続きによって導かれた結論あるいはその結論の一部を検証する上で重要な情報となるものと考えられる。

(2) 方法

梅頭遺跡1号窯跡出土鉄刀に施された象嵌について、顕微鏡観察および蛍光 X 線分析による材質調査が行われている。

(3) 成果

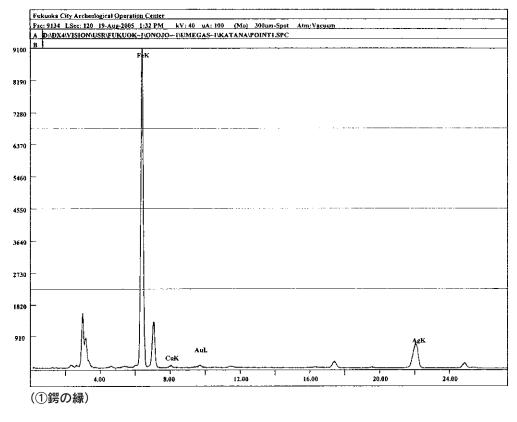
象嵌の調査においては、顕微鏡観察により文様を構成する貴金属線の一部において長軸方向に平

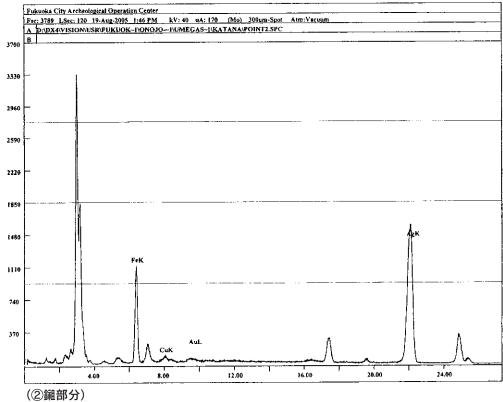
行する皺状の痕跡が認められ、何らかの製作技法を示す痕跡の可能性があるものとして報告されている〈註60〉。また、蛍光 X 線分析による材質の調査結果からは、鉄、銅、金、銀といった元素が検出されている(第94図)〈註61〉。これらの諸元素のうち鉄については地金の成分が強く反映された結果と考えられており、その他の成分では銀が組成の大半を占めていることから銀象嵌とされている〈註62〉。一方で、銀のほかにも微量ではあるものの銅や金が含まれており、人為的に添加された可能性と不純物である可能性の双方を考える必要があるが、先の製作技法の問題とも合わせて象嵌技術・素材の系譜などを考える上での手がかりとなる可能性も考えられる〈註63〉。銀象嵌鉄刀は、福岡県内でも出土事例が少なく、梅頭遺跡 1 号窯跡被葬者の性格を考える上で重要な遺物である〈註64〉。上記のように微細な痕跡や微量に含まれる元素が明らかにされたことは、今後この鉄刀の性格を明らかにする上で他の資料にみられる象嵌技術との比較材料となりうる調査成果といえる。

8. まとめ

以上牛頸窯跡群においてこれまで行われていた自然科学的な分析について、その成果を中心に整理してきた。各分析による成果をまとめると、以下のような知見がこれまで各種の自然科学的分析によってえられているものといえる。

- ・地磁気年代推定においては、近畿地域におけるデータを基礎とする地磁気永年変化標準曲線と、 九州地方における地磁気変化にみられる地域差が明らかとなり、その補正が行われてきた。そ の結果、8世紀代を中心としてほぼ考古学的年代と整合的結果をうることができるようになっ た。
- ・複数遺跡から採取された窯跡出土炭化材の樹種同定によって、牛頸窯跡群における遺跡周辺の 環境について、暖温帯照葉樹林が分布し、一部は二次林化していることが明らかにされてきた。
- ・胎土分析においては、牛頸窯跡群の諸窯跡から出土する須恵器を中心として、同一窯出土の土 師器や陶棺なども含めた胎土特性の比較が行われてきた。その結果、同一窯跡出土遺物の胎土 は、ほぼ他の牛頸窯跡群出土須恵器の胎土特性と同様である点が明らかにされてきた。
- ・窯の焼成温度推定においては、窯壁の鉱物にみられる加熱変化の観察にもとづき、石坂窯跡の 焼成温度についての推定が行われている。観察結果から、窯の焼成温度は900℃以下と推定され、 窯の焼成温度が高温ではなかったという調査所見と一致した結果がえられている。
- ・赤色顔料の同定においては、梅頭遺跡1号窯跡出土須恵器に付着した資料の分析が行われた。 4点の資料の全てがベンガラと同定され、6世紀中葉以降多様化する赤色顔料の葬送儀礼での 使用の有り方の一端を示す貴重な資料といえる。
- ・梅頭遺跡1号窯跡出土の鉄刀に施された象嵌の調査により、製作技法を示す可能性のある微細な痕跡が明らかとされた。また、材質分析においては、銀を主体とする銀象嵌であることが明らかにされるとともに、ごく微量ではあるが金・銅が含まれ、これまでの事例と異なる特徴がみられることが明らかとなった。





第94図 梅頭遺跡出土鉄刀象嵌部分の蛍光X線分析

- 172 -

- 註1. 浜頭政幸「さまざまな年代測定・判定法:考古地磁気法」『考古学と年代測定学・地球科学』(考古学と自然科学④) 松浦秀治・上杉陽・藁科哲男編(pp.143-161) 同成社:東京 1999
- 註2. 中島正志・長谷川千恵・三田村憲一・夏原信義「第5章 牛頸ハセムシ窯跡群の考古地磁気年代推定」『牛頸ハセムシ 窯跡群 I 』 大野城市文化財調査報告書第23集 (pp.75-81) 大野城市教育委員会 1988
- 註3. 前掲註2.
- 註4. 前掲註2.
- 註5. 時枝克安・伊藤清明「付論2 伊藤田城山窯跡 A 地区2号窯及び3号窯の考古地磁気年代について」『伊藤田城山窯跡 群』中津市文化財調査報告第5集 (pp.115-120) 中津市教育委員会 1985
- 註6. 前掲註2・5
- 註7. 中島正志・谷崎有里・林昌代・夏原信義・宮崎義信「第7章 牛頸ハセムシ窯跡群の考古地磁気推定年代(その2)」『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ』大野城市文化財調査報告書第30集(pp.127-136)大野城市教育委員会 1989 株式会社 夏原技研「付2 牛頸ハセムシ窯跡群の考古地磁気年代推定(その3)」『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅲ』大野城市文化財調査報告書第41集(pp.38-42)大野城市教育委員会 1993
- 註8. 前掲註7.
- 註9. 鳥居雅之・中野千恵・白石一平・藤重祐樹「1. 牛頸野添4次2号窯跡の熱残留磁化測定結果」『牛頸野添遺跡群II』 大野城市文化財調査報告書第66集(pp.43-48)大野城市教育委員会 2005
- 計10. 前掲計9
- 註11. 鈴木三男「木材」『考古学と植物学』(考古学と自然科学③)(pp.151-187) 辻誠一郎編 同成社:東京 2000
- 註12. 西田正規「和泉陶邑と木炭分析」『陶邑I』 大阪府文化財調査報告書第28輯(pp.178-187)財団法人大阪文化財センター 1976
- 註13. 舟山良一「牛頸窯跡群」『大野城市史』上巻 (pp.317-400) 大野城市史編さん委員会 2005
- 註14. 副島邦弘「牛頸窯跡群の編年的研究に関する覚書」『牛頸中通遺跡群』大野城市文化財調査報告書第4集 (pp.181-196) 大野城市教育委員会 1980

前掲註13, p.321

- 註15. 株式会社 古環境研究所「大野城市野添遺跡第2~4次調査における樹種同定」『牛頸野添遺跡群II』大野城市文化財調査報告書第66集(pp.49-51)大野城市教育委員会 2005 株式会社 古環境研究所「野添遺跡6・7次調査における樹種同定」『牛頸野添遺跡群IV』大野城市文化財調査報告書第70集(pp.95-99)大野城市教育委員会 2006 前掲註11. 文献
- 註16. 株式会社 古環境研究所「野添遺跡6・7次調査における樹種同定」『牛頸野添遺跡群V』大野城市文化財調査報告書第70集 (pp.95-99) 大野城市教育委員会 2006

株式会社 古環境研究所「梅頭遺跡第1次調査における樹種同定」『牛頸梅頭遺跡群I』大野城市文化財調査報告書第60集 (pp.72-75) 大野城市教育委員会 2007a

株式会社 古環境研究所「牛頸小田浦窯跡群における樹種同定」『牛頸小田浦窯跡群II』大野城市文化財調査報告書第73集 (pp.58-60) 大野城市教育委員会 2007b

- 註17. 前掲註15.
- 註18. 前掲註16. 株式会社 古環境研究所 2007b 文献
- 註19. 前掲註12.

西田正規「須恵器生産の燃料について」『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30輯 (pp.132-136) 財団法人大阪文化 財センター 1978

- 註20. 前掲註19.
- 註21. 川崎地質株式会社 渡辺正巳・古谷正和「陶邑北部における縄文時代以降の植生変遷」『野々井遺跡II』(財) 大阪府 文化財調査研究センター調査報告書第20-2集 (pp.124-141) 大阪府教育委員会 1997
- 註22. 大阪府教育委員会『陶邑窯跡群発掘調査概要』(pp.4·5) 1995 前掲註21.
- 註23. 前掲註21.
- 註24. 前掲註22.
- 註25. 冷川昌彦「自然環境の特徴」『大野城市史』上巻 (pp.3-23) 大野城市史編さん委員会 2005

- 註26. 前掲註25.
- 註27. 前掲註14.
- 註28. 三辻利一「産地同定 元素分析による須恵器の産地推定」『考古学と年代測定学・地球科学』(考古学と自然科学④) (pp.294-313) 松浦秀治・上杉陽・藁科哲男編 同成社:東京 1999
- 註29. 前掲註28.
- 註30. 前掲註28.
- 註31. パリノ・サーヴェイ株式会社「2. 窯内の焼成温度の推定 牛頸石坂窯跡窯壁薄片作製鑑定」『牛頸石坂窯跡』大野城市文化財調査報告書第49集 (pp.30-43) 大野城市教育委員会 1997
- 註32. 三辻利一「牛頸石坂窯出土土器の蛍光 X 線分析」『牛頸石坂窯跡』大野城市文化財調査報告書第49集(pp.25-29)大野城市教育委員会 1997
- 註33. 前掲註32.
- 註34. 前掲註32.
- 註35. 前掲註32。結果として上記のような石坂窯跡調査者との見解の相違がみられることになっているが、本窯跡は9世紀中頃の窯跡の初例であることから、今後同時期の窯跡の調査例が増加し出土遺物の構成等についてのさらなる情報の蓄積が期待される。
- 註36. 三辻利一「梅頭1号窯跡出土須恵器の化学特性」『牛頸梅頭遺跡群 I 』大野城市文化財調査報告書第60集(pp.68-71) 大野城市教育委員会 2007
- 註37. 前掲註36.
- 註38. 前掲註36。なお、当報告において陶棺は梅頭1号窯跡で焼成されたものとされている (p. 68)。一方調査者の見解としては、牛頸窯跡群内のいずれかの窯跡で生産された陶棺が何らかの理由で当窯跡に持ち込まれたとの結論となっており (市24: p.93)、両者で若干見解に相違がみられる。
- 註39. 三辻利一「牛頸窯跡群の須恵器の化学的特性」『牛頸本堂遺跡群 I 』大野城市文化財調査報告書第61集(pp.30-32) 大野城市教育委員会 2003
- 註40. 前掲註39, p.30
- 註41. 前掲註13.
- 註42. 前掲註31.
- 註43. 前掲註31.
- 註44. 前掲註31, p.36
- 註45. 前掲註31.
- 註46. 前掲註31.
- 註47. 本田光子「赤色顔料の資料化」『考古学ジャーナル』No.438 (pp.2-3) 1998
- 註48. 前掲註47.
- 註49. 志賀智史・本田光子「梅頭遺跡出土の赤色顔料」『牛頸梅頭遺跡群 I 』大野城市文化財調査報告書第60集(pp.65-67) 大野城市教育委員会 2007
- 註50. 前掲註49.
- 註51. 前掲註49.
- 註52. 前掲註49, p.66
- 註53. 本田光子「西山3号墳出土の赤色顔料について」『西山古墳群』(pp.261-264) 岡山県教育委員会 2006
- 註54. 志賀智史・本田光子「葉佐池古墳出土の赤色顔料とその関連遺物」『葉佐池古墳』 (pp.191-199) 松山市教育委員会 2003
- 註55. 前掲註49.
- 註56. 前掲註49.
- 註57. 石木秀啓「古墳時代 須恵器工人の墳墓」『大野城市史』(pp.304-315) 大野城市史編さん委員会 2005
- 註58 前掲註57
- 註59. 橋本博文「金銀象嵌装飾円頭大刀の編年」『考古学ジャーナル』No.266 (pp.23-28) 1986 吉田寛「(2) 鉄器 (ア) 刀装具の銀象嵌装飾文様について」『上ノ原横穴墓群II』一般国道10号線中津バイパス発掘調査報告書 (II) (pp.415-418) 大分県教育委員会 1991
 - 横田義章「古墳時代の象嵌文様-九州の諸例紹介を中心に-」『九州歴史資料館 研究論集』10 1985

- 横田義章「古墳時代の銀象嵌二例」『九州歴史資料館 研究論集』18(pp.55-60) 1993
- 福岡県教育委員会『朝田塚花遺跡』福岡県文化財調査報告書第185集 2004
- 齋藤努・田口勇・西山要一「X線CTなどを用いた象嵌資料の非破壊分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』第26集 (pp.97-111) 1990
- 註60. 比佐陽一郎「大野城市梅頭遺跡出土鉄刀に施された象嵌の調査」『牛頸梅頭遺跡群 I 』大野城市文化財調査報告書第60集(pp.76-77) 大野城市教育委員会 2007
- 註61. 前掲註60.
- 註62. 前掲註60.
- 註63. 前掲註60.
- 註64. 当窯跡被葬者の性格について、梅頭1次1号窯跡窯体内出土の銀象嵌鉄刀を大和政権から下賜されたものとの前提に立ち、牛頸窯跡群の首長としての地位を大和政権より直接認められたものである可能性が指摘されている(市24, p.96)。

Ⅲ. 自然科学的分析の成果 挿図・表出典一覧

- 第87図 中島正志・長谷川千恵・三田村憲一・夏原信義「第5章 牛頸ハセムシ窯跡群の考古地磁気年代推定」『牛頸ハセムシ窯跡群 I 』大野城市教育委員会 1988
- 第87図 中島正志・谷崎有里・林昌代・夏原信義・宮崎義信「第7章 牛頸ハセムシ窯跡群の考古地磁気推 定年代(その2)」『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ』大野城市教育委員会 1989
- 第89図 三辻利一「牛頸石坂窯出土土器の蛍光X線分析」『牛頸石坂窯跡-E地点-』大野城市教育委員会 1997
- 第90図 三辻利一「牛頸石坂窯出土土器の蛍光X線分析」『牛頸石坂窯跡-E地点-』大野城市教育委員会 1997
- 第91図 三辻利一「梅頭1号窯跡出土須恵器の化学特性」『牛頸梅頭遺跡群Ⅰ』大野城市教育委員会 2007
- 第92図 三辻利一「梅頭1号窯跡出土須恵器の化学特性」『牛頸梅頭遺跡群Ⅰ』大野城市教育委員会 2007
- 第93図 三辻利一「牛頸窯跡群の須恵器の化学的特性」『牛頸本堂遺跡群 I 』大野城市教育委員会 2003
- 第94図 比佐陽一郎「大野城市梅頭遺跡出土鉄刀に施された象嵌の調査」『牛頸梅頭遺跡群 I 』大野城市教育委員会 2007
- 第16表 志賀智史・本田光子「梅頭遺跡出土の赤色顔料」『牛頸梅頭遺跡群 I 』大野城市教育委員会 2007

Ⅷ. 考察

1. ヘラ記号から見た須恵器の流通範囲

(1) はじめに

本章では、須恵器にみられるヘラ記号の特徴の一つである、器面「外面」あるいは「内面」のいずれにヘラ記号が施されるのかという点に着目し、牛頸産須恵器の供給範囲の把握を目的とする。

これまでにも牛頸産の須恵器は、ヘラ記号が「内面」・「外面」のいずれにみられるのかという同様の観点から、ヘラ記号の見られる7世紀中頃までについては福岡平野を中心として、南は夜須町(現筑前町)、西は糸島地区、東は新宮町あたりを縁辺部とする比較的狭い地域が流通範囲として把握されている〈註1〉。また、それに続く8世紀以降においては、胎土分析の結果により、朝倉町大追遺跡や直入郡久住町石田遺跡〈註2〉、佐賀県塩田町大黒町遺跡〈註3〉において牛頸産と考えられる須恵器が認められ、古墳時代に比べより広範な範囲に供給されていることが指摘されている〈註4〉。一方、九州における8世紀以降の各地の窯跡の消長についての検討により、7世紀末から8世紀にかけて筑前では牛頸窯跡群における一国一窯体制が認められるとの指摘がなされている〈註5〉。以上のようなこれまでの調査・研究の蓄積に基づくならば、7世紀後半から末以降において牛頸窯跡群を取りまく生産体制と供給範囲に大きな変化が認められるようになるということであろう。

牛頸窯跡群におけるこのような生産の性格と産品の供給範囲が変化する以前の様相については、上記のようにこれまでその概況については指摘がなされているが、定量的な分析はなされていない。そのため、ヘラ記号の付された資料に限定したものではあるものの定量的な分析を行うことにより、牛頸産須恵器の供給範囲の把握を試みることとする。その際、福岡平野や筑後平野 (太宰府を含む)などの周辺地域から出土する須恵器が、全て牛頸からの供給によるものなのかどうかについての把握が一つの課題となる。また、この点についての検討の際に、他の窯からの供給についても合わせて検討する必要がある。そのため、方法の詳細については後述するが、対象とする地域における生産地である窯跡遺跡と消費地である集落遺跡や墳墓に大別して分析を行うこととする。

(2) 資料と方法

(i) 対象地域

以下の行政体を分析対象地域とする。宗像市・津屋崎町・福間町・古賀市・新宮町・久山町・粕 屋町・篠栗町・志免町(対象時期においてへラ記号がみられなかったことから、分析からは除外し た。)・須恵町・宇美町・福岡市・大野城市・春日市・那珂川町・太宰府市・筑紫野市・小郡市・夜 須町(現筑前町)・朝倉町・杷木町・甘木市・前原市・志摩町・二丈町

(ii) 対象資料

上記各市町村の報告書および福岡県による調査報告書掲載資料を対象として、ヘラ記号を付され

た須恵器蓋杯の集計を行った。集計に際しては、窯跡出土資料とその他の資料を区分し、生産地と 消費地でのそれぞれの様相把握を行った。

資料点数は、消費地遺跡出土資料・4918点、窯跡出土資料・1258点、計・6176点である。

(iii) 方法

これまでのヘラ記号に関する研究においては、ヘラ記号の意味に関する検討から製作者集団の問題について言及するもの(市2)〈註6〉や、消費者側の要請によって付されたとする議論など多岐にわたる。また、蓋杯の「外面」あるいは「内面」のいずれにヘラ記号が付されるのかという点に着目し、牛頸窯跡群において生産される須恵器蓋杯のほとんどが「外面」にヘラ記号を付されることが明らかにされ、一方で宗像窯跡群や小郡市苅又地区窯跡群〈註7〉においては蓋杯「内面」にヘラ記号が付されるという傾向が把握されている。

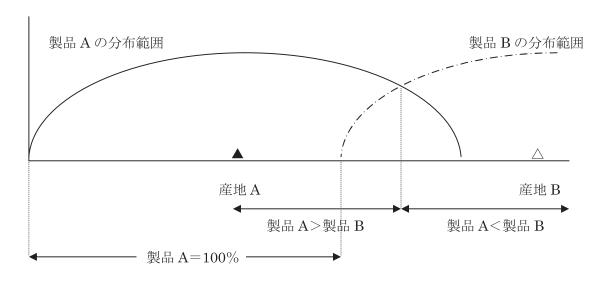
そのため、対象地域に分布する蓋杯の「外面」・「内面」のいずれにヘラ記号が施されているのかという点を手がかりとすることにより、牛頸産の須恵器と宗像地域や小郡地域の窯で生産された須恵器との弁別がある程度可能になるものと考えられる〈註8〉。

対象とする蓋杯の器種区分は、西氏による分類〈註9〉に従い、杯H、G、Bに分け器種ごとに分析を行った。第V章においては、杯HはIII期 $\sim IV$ 期、杯GはIV期後半 $\sim V$ 期、杯GはII期以降に位置づけられており〈註10〉、これら各器種の検討を行うことにより、おおよそ6世紀中頃から7世紀代までの様相を通時的に把握することが可能となる。

また、消費地や各窯においては、杯蓋と身それぞれにへラ記号の施されている数量がいずれかに偏っている場合、逆に遺跡単位でへラ記号の施される蓋と杯の数量がほぼ同量である場合などさまざまである。このような蓋と身に施されるへラ記号の数量上のばらつきには、生産過程、流通・消費の際の諸過程、堆積後の盗掘や撹乱等によるものなどさまざまな要因が介在しているものと予想される。現状では、個々の遺跡から出土する蓋杯に対してこれらの複雑な諸要因を全て明らかにすることは不可能であることから、各地におけるへラ記号を有する蓋と身の合計にもとづき、分布をみることとした。

さらに今回の分析対象は須恵器蓋杯のうちへラ記号を有するもののみであることから、以下検討を行う「内面」あるいは「外面」へラ記号の地域ごとの構成比、および「内面」あるいは「外面」へラ記号を有する蓋杯それぞれの分布の多寡が、そのまま特定の産地からの流通量を直接反映しているわけではない。しかし、「外面」あるいは「内面」へラ記号の分布様態をみることにより、ある程度流通範囲やその中における濃淡のありようと生産地との関係について推定をおこなうことは可能と考えられる。

このような点をふまえ、以下においては、蓋杯を対象として生産地と消費地それぞれにおけるへ ラ記号の様相を検討する。須恵器の流通範囲を考える際には、消費地における分布相と生産地との 関係を把握する必要がある。つまりどの生産地からどれくらいの範囲に製品が流通しているのかが 問題となる。生産地については、対象地域内で主要な窯跡群と考えられる牛頸窯跡群、宗像窯跡群 に加え、苅又窯跡群におけるヘラ記号の特徴把握を行う。特にこれらの窯跡群においてはそれぞれ



◆ : 該当範囲における産地の異なる製品 A・B の構成比の諸パターン

第95図 複数産地からの製品流通と構成比のモデル

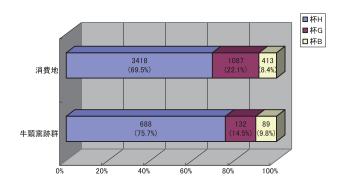
「外面」あるいは「内面」のいずれに付けるのかという点で窯により特徴が明確に分かれることが これまでにも指摘されている。そのため、対象とする窯跡群における両者の構成比を検討する。

消費地におけるへラ記号の分布の様相については2つの視点から検討を行う。一つは、各市町村におけるへラ記号の施された資料中における「外面」、「内面」および「内面・外面」へラ記号の構成比の分析を行うというものである。もう一つは、対象地域全体における「外面」へラ記号、あるいは「内面」へラ記号を施された蓋杯の分布にみられる濃淡についてそれぞれ検討を行うというものである。

分布を考える際、理念的には生産地を分布密度の最も高いピークとして、そこからの距離に相関 して次第に分布が希薄になるというモデルを想定することができる(第95図)。

各市町村における産地の異なるへう記号付き蓋杯の組成比からは、それぞれの場所における複数産地からの製品の受容量の相対的多寡をみることができる。複数の産地からの製品の流通範囲が重複する場合、産地Aに近い場所ほど製品Aの組成比が主体となり、より遠隔の産地(産地B)の製品の組成比は低くなることが予想される。そのため、各市町村における組成比の空間的広がりは、各産地との関係を把握する際の一つの手がかりとなるものと考えられる。一方このような分析によっては、一つの産地(産地A)の製品しか分布しない地域では製品Aが組成比の100%を占めることになり、製品Aあるいは製品Bそれぞれの分布の濃淡を知ることができず、製品の分布上のピークがどこになるのか判断できないということになる。

このような点に対し、後者の観点である製品 A あるいは製品 B それぞれの総量のどの程度の割合が各市町村に分布しているのかという点を検討することによって、産地の異なる製品それぞれの分布の濃淡を知ることができる。このような作業により、分布のピークと生産地とが理念型と同様に一致するかどうかといった点についての検討が可能となる。しかし、このような観点からの分析においては、地域による発掘件数、遺跡密度、各地域の面積などさまざまなファクターが介在した



第96図 生産地と消費地におけるヘラ記号を有する杯類の構成

上での出土量による点に留意して結 果を検討する必要がある。

なお、分析に際しては生産地・ 消費地におけるへラ記号の有り方 を「内面」/「外面」/「内面・外面」 へラ記号に区分した。また、報告書 の図面・写真図版や記述等から「外 面」あるいは「内面」のいずれにへ ラ記号が施されているのか判別でき なかったものを、「不明」とした。

(3) 結果

(i) 生産地および消費地におけるヘラ記号を有する杯類の構成比 (第96図)

須恵器に施されるヘラ記号は、時期が新しくなるほど施される資料数は減少してゆくことがこれまでにも指摘されており、おおよそ7世紀の中頃くらいまでのようである〈註11〉。

対象地域間でこのような一般的傾向が共通してみられる現象であるのかどうかについて概観する。その際、消費地での様相と生産地での様相を比較することにより、両者の対応関係についても把握することができる。

まず須恵器の生産遺跡における様相からみると、対象地域内における窯跡群でデータがある程 度まとまって抽出できたのは、宗像市の須恵須賀浦窯跡群、牛頸窯跡群、苅又地区窯跡群である。

- ・牛頸窯跡群では第96図のように、杯 H:75.7%、杯 G:14.5%、杯 B:9.8%であり、新しい時期に属する器種ほどへラ記号を有する個体の割合が減少する。宗像や小郡の窯跡では、今回取り扱うことのできた資料は全て杯 H であり、ヘラ記号を有する杯 $G\cdot B$ は含まれていない。
- ・消費地での様相は、対象地域全体において、杯H:69.5%、杯G:22.1%、杯B:8.4%となり、時期が新しくなるほどへラ記号を施された蓋杯が減少する点で、牛頸窯跡群においてみられた傾向とほぼ一致する。
- ・以上から、これまでに指摘のあるとおり、新しい時期ほどへラ記号を有する蓋杯は少なく、蓋杯 全体のうちのより限定された資料のみを検討対象とすることになるものといえる。

(ii) 生産地におけるヘラ記号の様相

1) 宗**像窯跡群** (第17表·第97図)

対象窯跡:稲元日焼原遺跡・三郎丸堂ノ上 C 遺跡・須恵須賀浦遺跡群・稲元黒巡遺跡である。

- ・ヘラ記号の施された蓋杯は杯 H に限られる。
- ・この地域で最も古い窯跡である稲元日焼原遺跡では、「外面」へラ記号が中心である。また、こ の窯跡ではごくわずかではあるが「内・外面」の両面にヘラ記号を施したものもみられる。
- ・須恵須賀浦遺跡群や稲元黒巡遺跡窯跡出土の蓋杯では、「内面」へラ記号が中心である。

・以上から、杯Hの中でも より新しい時期においては 「内面」へラ記号が中心に なるものといえる。

2) 牛頸窯跡群(第18表· 第98図)

対象遺跡:梅頭遺跡群·本 堂遺跡群(3・5次)・野添 遺跡群(2~7次)・小田浦 遺跡群・中通遺跡群(I)・ 神ノ前窯跡(宮ノ本遺跡)・ 浦ノ原窯跡群・惣利東遺跡(II 区)・牛頸ハセムシ窯跡群(II) である。

- ・杯 H・G・B いずれの器種 においても、「外面」にへ ラ記号が施されるものがほ とんどである。
- ・杯Bではわずかに1点「内面」へラ記号がみられる。
- ・「内・外面」へラ記号は、いずれの器種においても認められない。

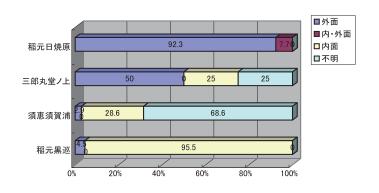
3) 苅又窯跡群 (第19表 · 第99図)

対象遺跡:三枝地区遺跡群・ 上田町遺跡 A 地点・勝負坂 遺跡 J 地点・ハサコノ宮遺跡 A 地点・北山遺跡 E 地点で ある。

・ヘラ記号を有する杯は杯日 第98に限られ、杯G・Bでヘラ記号を有する資料はみられなかった。

・以上から、杯Hの中でも 第17表 宗像窯跡群におけるへラ記号の様相 (杯H)

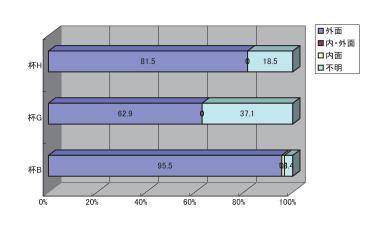
	外面 内	・外面	内面	不明	合計(個)
稲元日焼原	12	1	0	0	13
三郎丸堂ノ上	2	0	1	1	4
須恵須賀浦	1	0	10	24	35
稲元黒巡	3	0	64	0	67
宗像合計	18	1	75	25	119



第97図 宗像窯跡群におけるへう記号の様相

第18表 牛頸窯跡群における杯各器種別へラ記号の様相

	外面	内・外面	内面	不明	合計(個)
杯H	561	0	0	127	688
杯G	83	0	0	49	132
杯B	85	0	1	3	89

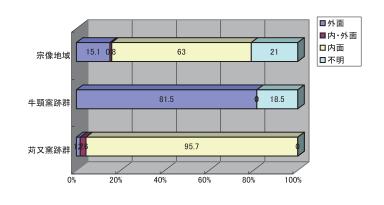


第98図 牛頸窯跡群における杯器種別へラ記号の様相

- ・杯Hでは、わずかに「外面」、「内・外面」へラ記号が認められるが、主体は「内面」へラ記号である。
- ・「内・外面」へラ記号は、宗像窯跡群・牛頸窯跡群ではほとんどみられないことから、消費地出 土資料のうち「内・外面」へラ記号を施した資料は、苅又産の可能性が高いものと推測される。

第19表 各窯跡群出土へラ記号資料の構成(杯H)

地域	外面 内	・外面	内面	不明	合計(個)
宗像地域	18	1	75	25	119
牛頸窯跡群	561	0	0	127	688
小郡地域	4	6	220	0	230
合計	583	7	295	152	1037



第99図 各窯跡群出土へラ記号資料の構成(杯H)

以上のような須恵器生産地で のへラ記号の様相をまとめると 以下のとおりである。

- 杯H・G・Bそれぞれにおけるへラ記号の様相を把握できたのは牛頸窯跡群に限られるが、牛頸窯跡群では、器種を問わず「外面」へラ記号がほとんどを占める。
- 杯日のみの様相しか把握できないが、宗像窯跡群では稲元日焼原遺跡など古い時期の窯跡を除くと「内面」へラ記号が主体である。
- 同様に杯 H のみの様相では

あるが、小郡市苅又窯跡群においても、少数の「外面」へラ記号を除くと、主体は「内面」へラ 記号といえる。

● 苅又地区窯跡群では、少ない割合ではあるが「内・外面」にヘラ記号を施す資料が認められ、 牛頸窯跡群や宗像窯跡群(稲元日焼原窯跡を除く)と異なる特徴といえる。

(iii) 各市町村におけるヘラ記号変異の構成比からみた消費地の様相

集落や古墳等から出土した蓋杯を対象とし、各市町村におけるへラ記号が「外面」/「内面」/「内・外面」のいずれに施されるかその構成比についてのべる。

対象地域を、便宜的に以下のような地域に区分する。

地域 I : 宗像市・津屋崎町・福間町・古賀市・新宮町

地域Ⅱ:久山町・粕屋町・篠栗町・須恵町・宇美町

地域Ⅲ:福岡市・那珂川町・大野城市・春日市・太宰府市・筑紫野市

地域Ⅳ:小郡市・夜須町・朝倉町等(杷木町・三輪町を一部含む)・甘木市

地域V:前原市·志摩町·二丈町

以上の各地域を、東西軸および南北軸に沿ってみることにより、対象地域全体を通じたへラ記号の分布様態の特徴を把握することにする。東西軸は地域 I ~福岡市~地域Vの玄界灘沿岸部の地域とする。南北軸は地域II ~地域IVに相当する博多湾沿岸から筑後地方にかけての諸地域とした。地域II については、宗像市-新宮町・古賀市-久山町-宇美町-大野城市という範囲の中での傾向をみることとした。このような比較軸の設定は、対象地域内における窯跡の分布と次に分析を行う「外面」あるいは「内面」へラ記号それぞれの施された蓋杯の対象地域全体における分布を考慮してのものである。このような範囲設定により、対象地域において東側に位置する宗像

第20表 各市町村における杯Hにみられるヘラ記号変異の構成

地域区分	市町村	外面	内・外面	内面	不明	合計(個)
地域 I	宗像市	2	0	39	0	41
	津屋崎町	5	0	31	0	36
	福間町	1	0	11	0	12
	古賀町	6	0	2	1	9
	新宮町	2	0	1	0	3
地域Ⅱ	久山町	9	0	0	0	9
	篠栗町	9	0	7	0	16
	粕屋町	18	0	1	1	20
	須恵町	19	0	6	5	30
	宇美町	43	0	1	116	160
地域Ⅲ	福岡市	1432	4	89	55	1580
	春日市	116	0	0	62	178
	那珂川町	118	1	0	112	231
	大野城市	35	0	0	2	37
	太宰府市	114	1	1	2	118
	筑紫野市	167	0	10	0	177
地域IV	夜須町	41	1	7	0	49
	小郡市	331	2	15	30	378
	甘木市	208	1	5	8	222
	朝倉町等	72	0	9	2	83
地域V	前原市	18	0	0	0	18
	志摩町	3	0	1	0	4
	二丈町	5	0	2	0	7
	合計	2774	10	238	396	3418

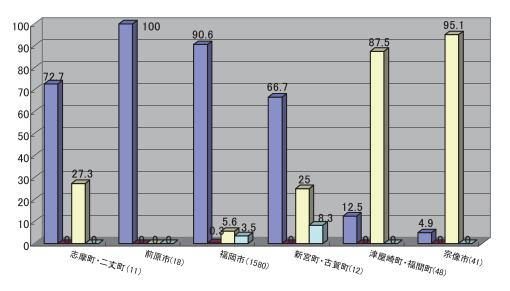
市宗像窯跡群から最も西に位置する前原市までの分布様態、牛頸窯跡群が位置する大野城市を挟む福岡市から筑後地方にかけての分布、さらに宗像窯跡群から牛頸窯跡群の間に相当する宗像市から久山町-宇美町、大野城市へ至る地域での分布を把握することが可能となる。

なお、地域 I や地域 V においては時期が新しくなるに伴い資料数の少ない市町村が認められたので、一部資料数を統合している(津屋崎町と福間町、新宮町と古賀町、二丈町と志摩町をそれぞれ統合した)。

1) 杯 H の様相: Ⅲ期~Ⅳ期 (第20表)

玄界灘沿岸部の様相 (第100図)

- ・宗像市において「内面」にヘラ記号を施す個体が全体の95.1%に達し、隣接する福間町・津屋 崎町では、若干少ないものの「内面」ヘラ記号が86.1%~91.7%に達する。
- ・地域 I において対象資料数が最も少ない古賀市と新宮町では、「内面」に対し「外面」のほうが 優勢である。
- ・地域Ⅲの北端ともいえる福岡市では「内面」へラ記号は5.6%、「外面」へラ記号は90%を超え、 新宮町・古賀市よりさらに「外面」へラ記号が主体を占める。
- ・福岡市の西側である地域Vでは、ヘラ記号を有する資料が他の地域に比べ全般的に少ない。そのため「外面」・「内面」の構成比をそのまま読み取るには数量的に不十分と考えられるが、少なくとも福岡市の西側の地域においても若干数「内面」ヘラ記号が認められる点、また、「外面」にヘラ記号を施す資料が主体である点などは指摘できるものと考えられる。



■外面 ■内·外面 □内面 □不明

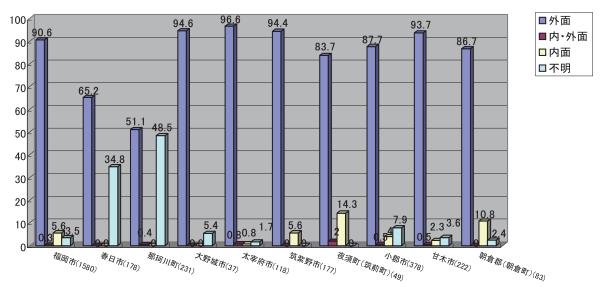
第100図 玄界灘沿岸部の諸地域における分布(杯 H)

以上の結果をまとめると次のとおりとなる。

- 宗像から福岡市にかけて東から西へ「内面」へラ記号の割合が減少し、「外面」へラ記号の割合が増加するという地理勾配が認められる。
- 二丈町や志摩町など福岡市よりも西方において、再度「内面」へラ記号の割合が増加する。このような現象の背景については別途より詳細な検討を要するが、資料数が少なく今後の課題といえる。
- 福岡市より東側に限ってみるならば、「外面」へラ記号主体と「内面」へラ記号主体の地域 の境は、新宮町・古賀市と福間町・津屋崎町の間付近と考えられる。

博多湾沿岸から筑後地方の様相 (第101図)

- ・地域Ⅲでは、春日市・那珂川町などを除く福岡市・大野城市・太宰府市・筑紫野市において「外面」へラ記号が主体で、いずれもへラ記号を有する杯H全体の90%前後を「外面」へラ記号が占める。また、那珂川町・春日市においては、ヘラ記号を施した場所の不明な資料が多いが、「内面」・「外面」の判別可能な資料のほとんどは「外面」へラ記号であることから、本来「外面」へラ記号が中心であるものと推測される。
- ・地域IVにおいても「外面」にヘラ記号を施す資料が主体であり、いずれの市町村においても90% 前後を「外面」ヘラ記号が占める。
- ・「内面」へラ記号は、地域Ⅲ・Ⅳ双方において数量的には主体を占めるものではない。地域Ⅲでは上記のように福岡市で5.6%認められるほか太宰府市で0.8%、筑紫野市で5.6%みられる。そのほかの春日市・那珂川町・大野城市では「内面」へラ記号を持つ蓋杯はみられない。
- ・地域IVでは「内面」へラ記号の割合は、地域により2.3%から14.3%と多寡はあるものの、各市町村において認められる。夜須町と朝倉町などにおいては「内面」へラ記号が10%を超える割合で認められる。
- ・このように「内面」へラ記号は、地域Ⅲでは最も北に位置する福岡市、対照的により南に位置す



第101図 博多湾沿岸部から筑後地方にかけての分布(杯 H)

る太宰府市や筑紫野市でわずかながら認められ、地理的に福岡市と太宰府市や筑紫野市の間の市町村は「内面」へラ記号の空白域となっている。一方地域Ⅳでは各市町村において組成比上の多寡はあるものの「内面」へラ記号がみられる。

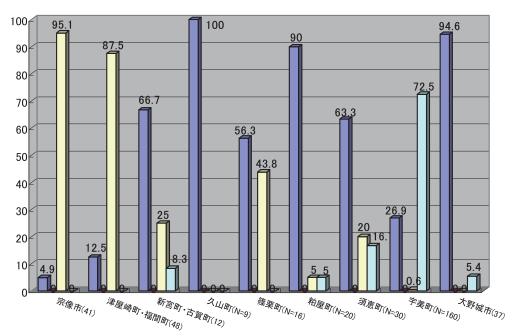
・きわめて限られた割合ではあるものの、那珂川町と太宰府市において「内・外面」両面にヘラ記号を施す資料がみられる。地域IVでは、朝倉町などを除き、「内・外面」にヘラ記号を施す資料がごく少数ではあるもののみられる。

以上の結果をまとめると以下のようになる。

- 博多湾から筑後地方にかけて地域においては、いずれの市町村でも「外面」へラ記号が中心といえる。また、「内面」へラ記号は、博多湾沿岸部である福岡市、筑紫野市から朝倉町にかけての地域というように分布のまとまりが二つに分かれる。つまり、博多湾沿岸部から筑後地方までを通じた南から北あるいは北から南へという形での「外面」/「内面」へラ記号の組成比に連続した地理的傾斜はみられないということになる。
- 「内・外面」の両面にヘラ記号を施す資料は、地域Nに加え地域Ⅲの一部に散発的に認められる。

宗像市-地域Ⅱ-大野城市にかけての様相 (第102図)

- ・新宮町・古賀市や久山町あたりから南では「外面」へラ記号が主体であり、久山町・粕屋町では「外面」にヘラ記号を施す個体が90%以上を占める。
- ・篠栗町・須恵町では、「外面」にヘラ記号を施すものが優勢である点は共通するが50~60%と 久山町などに比べ相対的に少なく、「内面」にヘラ記号を施す資料が20~40%代を占め、篠栗 町周辺において「内面」ヘラ記号の割合が若干高くなる。このような「内面」ヘラ記号の分布は、 宗像窯跡群からの連続的な分布として捉えることができるものなのか、あるいは他の供給源を想 定すべきであるのか検討を要する。この点については後述する。
- ・宇美町では不明資料が7割を超すことから、確実な傾向は把握しかねるが、「内面」・「外面」の



■外面 ■内·外面 □内面 □不明

第102図 宗像市-地域Ⅱ-大野城市にかけての分布(杯 H)

わかる資料のうちほとんどが外面であることから、「外面」へラ記号が主体であるものと推測される。

以上の結果をまとめると以下のようになる。

- 地域IIにおいては「外面」へラ記号が主体である点、宗像窯跡群により近接した久山町など当地域の北側では「内面」へラ記号がほとんど認められず、より南側に位置する篠栗町・須恵町において「内面」へラ記号が若干多い点、大野城市に最も近接する宇美町では再度「外面」へラ記号はほとんど認められない点などが特徴として挙げられる。
- 資料数の多寡にばらつきが有り、そのまま分布の実態を示すものとは即断できないが、篠栗町をピークとして隣接する粕屋町や須恵町などに向かって「内面」へラ記号の組成比が減少している可能性が考えられる。

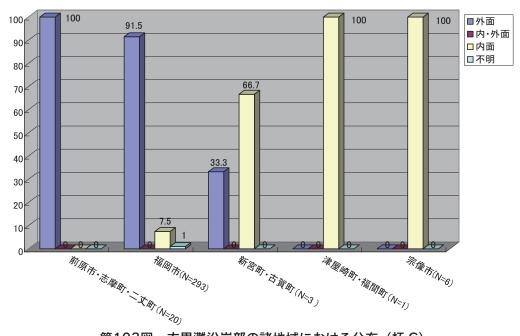
小結

杯Hにおける以上のような様相をまとめると以下のようになる。

- 「内面」へラ記号は、宗像市周辺から福岡市にかけての玄界灘沿岸部において一つの連続的な分布が認められ、東の宗像市から西の福岡市に向かって漸移的に構成比が減少する。また、地域Ⅲの南部から地域Ⅳにかけても「内面」へラ記号の分布が認められる。加えて、篠栗町を中心とする「内面」へラ記号を持つ蓋杯の分布がみられる。
- 「外面」へラ記号は、宗像市周辺の地域を除き地域 II・III・IV・Vのほとんどの地域において 主体を占める。

2) 杯 G: Ⅳ B ~ V期 (第103 · 104 · 105図)

先にみたように、ヘラ記号を施された杯 $G \cdot B$ は、杯 H に比べ少ない(第96図)。地域区分についても個別の地域の傾向を読み取るには一部の地域を除き資料的に不十分と考えられる。そのため、杯 H の場合と同様に対象地域を南北軸と東西軸に振り分け、両軸での分布様態を検討するが、



第103図 玄界灘沿岸部の諸地域における分布(杯 G)

資料数の少ない市町村については隣接する市町村で統合している。

地域Ⅰから地域Ⅴまでの各市町村におけるヘラ記号を有する杯Gの点数は以下のとおりである。

地域 I: 宗像市(6点)·津屋崎町(1点)·福間町(0点)·古賀市(0点)·新宮町(3点)

地域 II: 久山町 (6点) · 粕屋町 (5点) · 篠栗町 (4点) · 須恵町 (0点) · 宇美町 (117点)

地域Ⅲ:福岡市 (293点)·那珂川町 (100点)·大野城市 (44点)·春日市 (43点)·太宰府市 (21

点)·筑紫野市 (21点)

地域N:小郡市(249点)・夜須町(11点)・朝倉町等(杷木町・三輪町を一部含む。16点)・甘木

市 (127点)

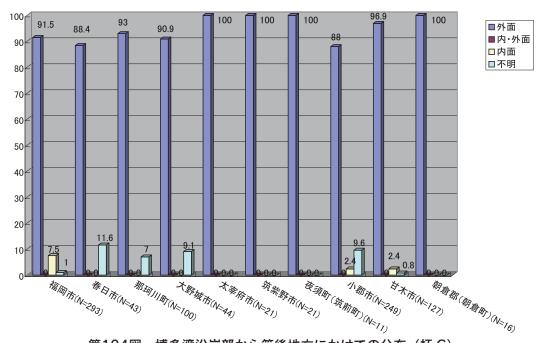
地域V:前原市(12点)·志摩町(1点)·二丈町(7点)

玄界灘沿岸部の様相 (第103図)

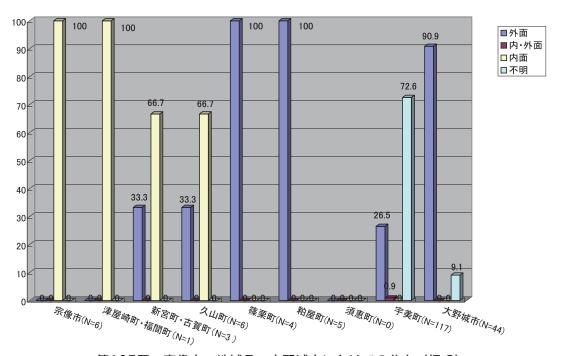
- ・東から宗像市、津屋崎町・福間町、新宮町・古賀市、福岡市、前原市・志摩町・二丈町の5つに 区分している。
- ・ 資料数が多いとはいえないものの、東の宗像市から福岡市にかけて「内面」へラ記号の割合が減少している。
- ・「外面」へラ記号は新宮町・古賀市より西の地域で次第に主体的な割合になるようである。
- ・福岡市より西側においては、今のところ「内面」へラ記号はみられない。

博多湾から筑後地方の様相 (第104図)

- ・北端である福岡市から南東端に位置する朝倉町まで、一貫して「外面」へラ記号がほとんどを占める。
- ・「内面」へラ記号は、福岡市 (7.5%)、小郡市 (2.4%)・甘木市 (2.4%) とわずかながら、福岡市と小郡市周辺において認められるが、その他の市町村ではみられない。杯Hの段階で地域 Ⅲの太宰府市や筑紫野市で少数ながらみられた「内面」へラ記号は、杯Gではみられない。地



第104図 博多湾沿岸部から筑後地方にかけての分布(杯 G)



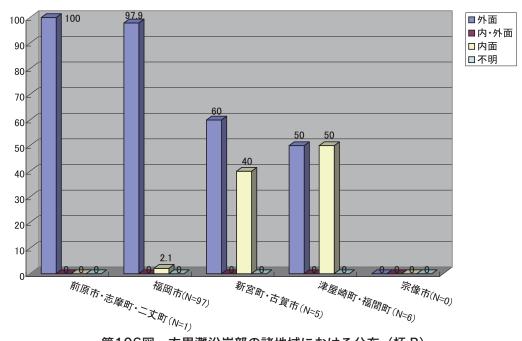
第105図 宗像市 - 地域 II - 大野城市にかけての分布(杯 G)

域 \mathbb{N} でも「内面」へラ記号の割合は減少傾向にあり、小郡市や甘木市でわずかに認められるにとどまる。

・小郡市周辺では、杯 H の段階には「内・外面」へラ記号がわずかではあるものの認められたが、 杯 G においては認められない。

宗像市-地域 || - 大野城市にかけての様相 (第105図)

・資料数が少ないことは否めないが、地域 I に最も近接する久山町において「内面」へラ記号がみ



第106図 玄界灘沿岸部の諸地域における分布(杯 B)

られる。

・篠栗町から須恵町にかけては資料が少なく不明であるが、大野城市に接する宇美町では「外面」 ヘラ記号が多くみられる。

小結

杯Gにおける傾向をまとめると以下のようになる。

- 宗像市周辺においては、資料数が全体的に少なく安定した構成比を知ることはできないが、「内 面」へラ記号がみられる点に特徴があるものといえる。
- それ以外の地域では「外面」へラ記号がほとんどを占め、地域Ⅲの一部地域や地域Ⅳでは「内 面」へラ記号が散発的に認められる。
- 3) 杯 B: VI 期以降 (第106·107·108図)

対象資料は以下のとおりである。

地域 I: 宗像市(〇点)·津屋崎町(5点)·福間町(1点)·古賀市(2点)·新宮町(3点)

地域 II: 久山町 (1点) · 粕屋町 (O点) · 篠栗町 (1点) · 須恵町 (O点) · 宇美町 (23点)

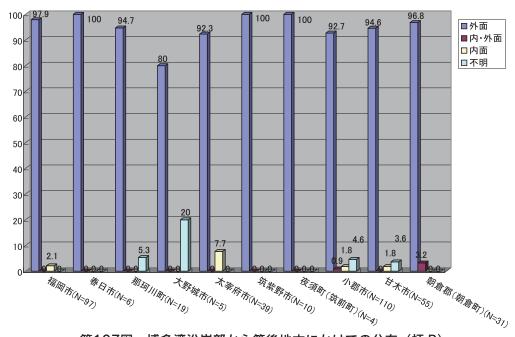
地域Ⅲ:福岡市 (97点)・那珂川町 (19点)・大野城市 (5点)・春日市 (6点)・太宰府市 (39点)・ 筑紫野市(10点)

地域N:小郡市(110点)・夜須町(4点)・朝倉町等(杷木町・三輪町を一部含む。31点)・ 甘木市 (55点)

地域V:前原市(O点)·志摩町(O点)·二丈町(1点)

玄界灘沿岸部の様相 (第106図)

- ・宗像市に隣接する津屋崎町・福間町や新宮町・古賀市において、「内面」へラ記号が認められ、 福岡市へとその割合が減少していく。
- ・このような点から、個体数が少なく実態を反映しているとはいいがたいが、東から西へ行くにつれ、



第107図 博多湾沿岸部から筑後地方にかけての分布(杯B)

「内面」へラ記号がある程度の構成比を占めるものから「外面」へラ記号主体の構成へと移行するものと考えられる。

博多湾から筑後地方にかけての様相 (第107図)

- ・大野城市以外のいずれの市町村においても一貫して「外面」へラ記号が90%以上を占める。
- ・「内面」へラ記号の個体数は杯 G に比べさらに少なくなるが、福岡市 (2.1%)、太宰府市 (7.7%)、 小郡市 (1.8%)・甘木市 (1.8%) などでみられ、福岡市と小郡市・甘木市などとの間に位置す る太宰府市で点的に認められる点がこれまでの様相と異なる。
- ・小郡市・朝倉郡においては「内・外面」へラ記号が認められる。

宗像市ー地域Ⅱー大野城市にかけての様相 (第108図)

・資料数が少なく、粕屋町・須恵町などではヘラ記号を有する杯 B が認められない。そのため組成 比の地理的推移をみることは困難である。しかし、久山町・篠栗町、大野城市に隣接する宇美町 などで「外面」ヘラ記号が認められる一方で、「内面」ヘラ記号は認められない。

小結

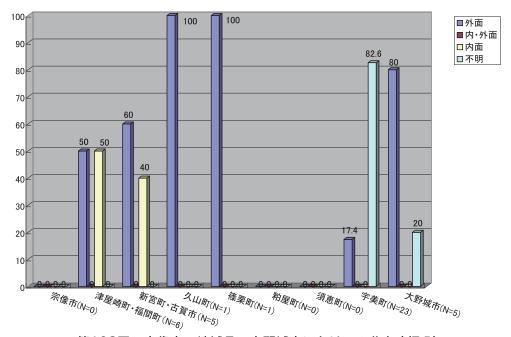
杯Bの様相をまとめると以下のとおりとなる。

- 「内面」へう記号は、数量自体は少ないが引き続き宗像市の周辺である津屋崎町・福間町において認められ、福岡市にかけて構成比を減じる可能性がある。また、より散発的あるいは点的な分布となるが小郡市周辺においても「内面」へう記号が残存する。
- 「外面」へラ記号は、地域 I を除くほとんどの地域で多くの比重を占める。

(iv)「外面」へラ記号および「内面」へラ記号の各分布からみた消費地の様相

1) 「外面」ヘラ記号の分布 (第109・111・113図)

杯 H の「外面」へラ記号の総数は2774点、杯 G は913点、杯 B は370点である。各市町村に



第108図 宗像市-地域Ⅱ-大野城市にかけての分布(杯B)

おける出土点数と総数に対する割合を図に示す。なお、市町村合併のため、行政単位として一部データを統合せざるをえない地域があった。上記の各市町村におけるへラ記号の「内面」/「外面」等の組成比を検討した単位と一部齟齬をきたすが了承されたい。具体的には、現朝倉市となっている旧甘木市と旧朝倉郡朝倉町・杷木町のデータを統合して地図上には表記してある。そのほかにも、データが相対的に少ない器種(杯 $G \cdot B$)や地域(津屋崎町・福間町、新宮町・古賀市、前原市・志摩町・二丈町など)においては統合して表記している。

- ・杯日では福岡市が分布の中心であり、福岡市より南の春日市から夜須町までの各市町村ではそれ ぞれ全体の10%未満の資料が分布している。
- ・小郡市 (11.9%)・甘木市 (14.1%) では周辺の市町村より若干高い割合で「外面」へラ記号をもつ杯日が出土している。
- ・福岡市より東側の諸市町村(地域 I・II)では、大野城市に近接する宇美町を除き1%未満と非常に分布が希薄である。
- ・以上から、杯日の段階では「外面」へラ記号は対象地域全体に分布するが、中心となるのは福岡市で、 それ以外の玄界灘沿岸部の地域では非常に限られた分布となっている。一方、春日市から地域IV にかけては、総量の10%以下の値が中心であり、若干の粗密を持ちつつ分布が広がっている。
- ・このような分布の有り方は、基本的に杯 G (第111) や杯 B (第113図) においても変化せず、 分布の中心は福岡市と小郡市周辺であり、その間の諸市町村では10%以下の分布である。玄界 灘沿岸部や牛頸窯跡群と宗像窯跡群の間に位置する地域 II においては、杯 H の様相と同様に分 布は希薄である。

2) 「内面」へラ記号の分布 (第110・112・114図)

杯 H の「内面」へラ記号の総数は238点、杯 G は44点、杯 B は13点である。

・対象地域内での杯Hの「内面へラ記号」の分布(第110図)をみると、福岡市で最も高い割合

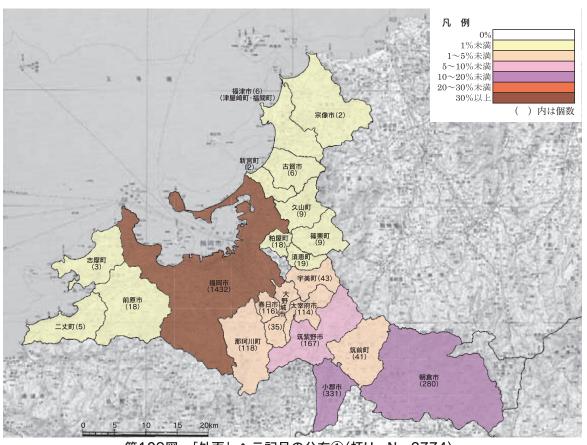
で「内面」へラ記号がみられる。

- ・宗像市から津屋崎町にかけての地域も相対的に多くの割合が分布している。加えて、小郡市とその周辺でも10%以下の割合で分布がまとまっている。また、篠栗町周辺も「内面」へラ記号の分布がみられる。これらの結果は、(iii) において行った各地域におけるへラ記号の構成比に基づく分析で述べたように、宗像から福岡市の玄界灘沿岸、小郡市周辺、篠栗町周辺という3つの分布上のまとまりを示しているものと考えることができる。
- ・続く杯 G (第112図) 以降は資料総数が減少するものの、図に示したとおり、篠栗町周辺の分布 単位が消失する以外は、宗像市から福岡市にかけての玄界灘沿岸の諸地域と小郡市周辺に分布の まとまりが認められ、基本的に分布の構造に杯 H と比べ大きな変化はみられず、分布相におけ る二極化がより鮮明になるものといえる。
- ・杯 B (第114図) の時期においては、杯 G における二極化した分布構造に大きな変化はみられない。 ただし、太宰府市で「内面」へラ記号が点的に認められる点が新たな特徴として挙げられる。 以上の結果をまとめると以下のようになる。
- 「外面」へラ記号の分布域は、対象地域全体に及ぶ。分布の中心は福岡市であり、そのほかには地域Ⅲの筑紫野市、地域Ⅳの小郡市や朝倉市に相対的に多くの割合が分布する。一方、牛頸窯跡群周辺はこれらの地域に比べ低い割合となる。また、玄界灘沿岸部の諸地域においては、対象地域の西端に位置する地域Ⅴ、また新宮町から宗像市に至る地域Ⅰ、宇美町を除く地域Ⅱでは非常に希薄な分布を示す。
- このような基本的特徴は、杯Hのみではなく、杯Gや杯Bにおいても大きく変化せず、分布の中心は福岡市や小郡市・朝倉市周辺であり、分布が希薄な地域は一貫して地域Vや地域Iから地域IIにかけての地域である。
- 「内面」へラ記号は、宗像市から福岡市にかけての地域(杯Hの段階では地域Vの一部を含む)、 篠栗町周辺、筑紫野市以南に認められる。分布の中心は宗像市周辺と福岡市である。また、小郡 市でも近隣の市町村よりも相対的に高い割合で分布がみられる。
- このような「内面」へラ記号の分布にみられる特徴は杯H以降、杯 G・杯 B において、「内面」へラ記号の空白域が拡大することにより、さらに鮮明になる。つまり、玄界灘沿岸の宗像市から福岡市にかけての地域と小郡市・朝倉市に分布が限定され、その他の地域においては、基本的に「内面」へラ記号がほとんど分布しなくなる。杯 G 以降では、杯 H の段階において篠栗町周辺に認められた「内面」へラ記号の分布が消失し、また、杯 B の段階において太宰府市に分布が比較的多くみられるようになる点を除き、基本的な分布の構造は杯 H・G・ B 間で類似したものということができる。

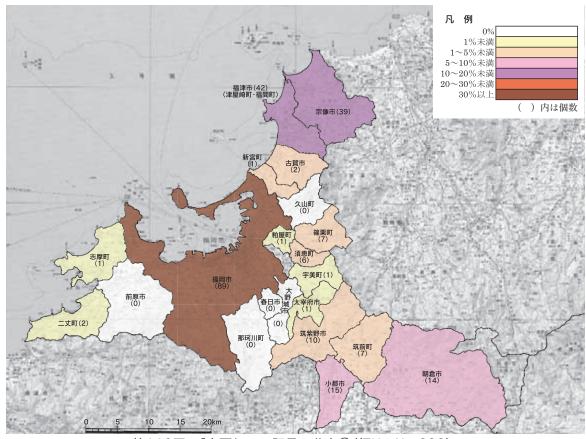
(4) ヘラ記号から見た須恵器の流通範囲

(i)消費地における様相にみられる分布のパターン

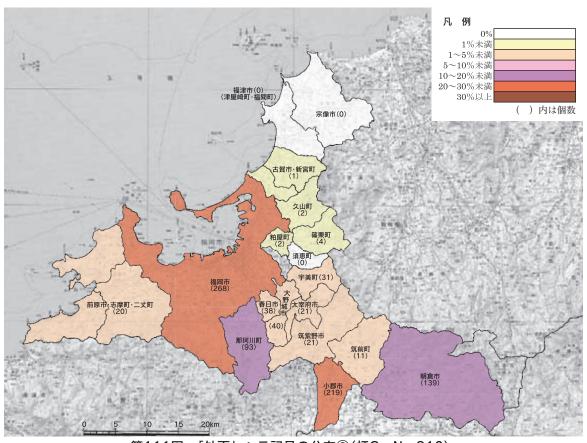
まず、各市町村における「外面」へラ記号と「内面」へラ記号の構成比の分析結果をまとめると 以下のようになる。



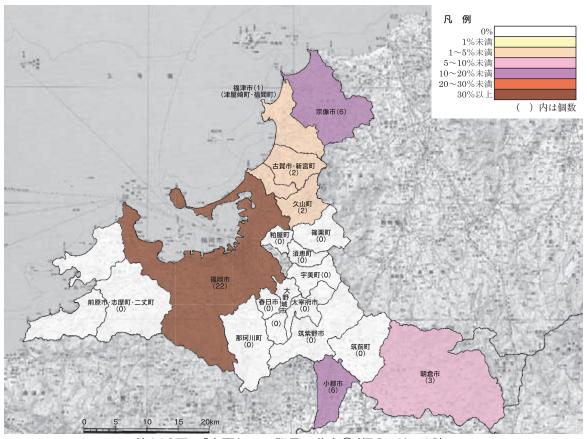
第109図 「外面」へラ記号の分布①(杯H、N=2774)



第110図 「内面」ヘラ記号の分布①(杯H、N=238)

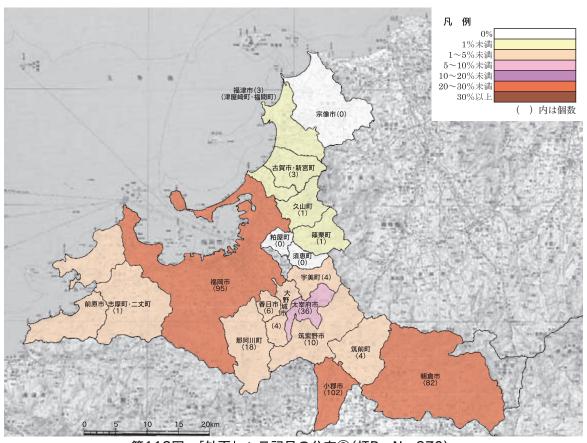


第111図 「外面」へラ記号の分布②(杯G、N=910)

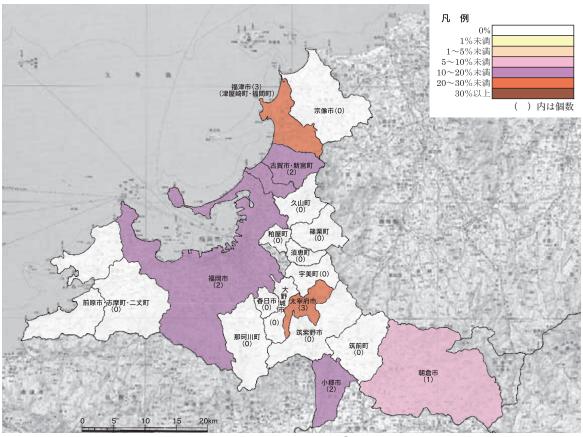


第112図 「内面」へラ記号の分布②(杯G、N=42)

- 194 -



第113図 「外面」へラ記号の分布③(杯B、N=370)



第114図 「内面」へラ記号の分布③(杯B、N=13)

地域Ⅲ、Ⅳ、Vでは、数量上の多寡はあるものの一貫して「外面」へラ記号が主体であり、「内面」へラ記号は客体的な構成比を示す。一方、地域Iにおいては、宗像市や津屋崎町・福間町など東半部では不明瞭な時期もあるが「内面」へラ記号が主体を占めるようである。その西に隣接する新宮町・古賀市では、絶対数が少なく結果の妥当性には問題も残るが、今回の結果では次第に「内面」へラ記号の組成比が増す傾向がみられた。地域IIでは、時期により様相がさまざまであるが、杯Hの段階においては篠栗を中心として「内面」へラ記号がみられ、その他の市町村では「外面」へラ記号が中心となる。杯Gの段階では、地域Iに隣接する久山町で「内面」へラ記号が主体を占めるが、その他の市町村では「外面」へラ記号が主体を占める。杯Bの段階においてへラ記号のみられる市町村ではいずれも「外面」へラ記号が主体を占める。

以上より、各地域ごとの「外面」・「内面」へラ記号の構成比からは、地域 I を除く多くの地域において「外面」へラ記号が主体的であるものといえる。一方地域 I では一貫して「内面」へラ記号の構成比が他の地域に比べ高いという特徴が継続して認められた。また、このような「外面」へラ記号と「内面」へラ記号の組成比にみられる主/従の境界は、時期により若干流動的といえるが、おおよそ地域 I の新宮町・古賀市や地域 II の久山町あたりになるものと考えられる。

一方小郡市や甘木市など「内面」へラ記号の分布が継続的に認められる地域IVや地域Ⅲの南部では、「外面」へラ記号との構成比において終始主体的になることはないようである。

対象地域全体における「外面」へラ記号、「内面」へラ記号の分布にみられる地域的な粗密についての分析結果をまとめると以下のようになる。

「外面」へラ記号の蓋杯は、福岡市から筑後地方にかけての地域=地域Ⅲ・Ⅳが主要な分布域である。中でも、福岡市と小郡市・甘木市が多くの割合を占め、その間においては低い割合しかみられない。これは、群集墳を主とする古墳の分布密度が高いことと相関した結果といえ、須恵器の供給量の地域的な多寡をある程度反映した結果と推測される。無論このような群集墳の密度の多寡を生じうる可耕地の面積なども春日市や那珂川町から筑紫野市近辺の地峡帯では福岡平野や筑紫平野と比較しておのずと限定されてくる。このような地形的な制約もその基層的な要因といえるであろう。

このような「外面」へラ記号の主要な分布地域の外縁である地域Vや地域 I・II(宇美町は地域 IIIの大野城市などの様相と近似している。)においては、「外面」にヘラ記号を施された蓋杯の流入 量自体非常に少ないものとなる。地域Vは牛頸窯跡群からみると最も西側に位置しており、また、牛頸窯跡群と宗像窯跡群の中間を占める地域ともいえる地域IIや地域 I も分布の外縁的様相を呈している。

「内面」へラ記号は、宗像窯跡群の位置する地域 I から福岡市にかけての玄界灘沿岸部が一つの分布のまとまりである。中でも中心的に分布が認められるのは福岡市、ついで宗像市(杯 B の時期は除く)である。また、内陸の地域 IV でも「内面」へラ記号の分布が認められるが、時期が新しくなるにつれ小郡市と甘木市に限定されてくる。これら2市は地域 IV において「外面」へラ記号が多く分布する地域でもある。

一方、「内面」へラ記号がみられない地域が時期を通じて拡大するという傾向がみられる。「内面」

へラ記号の分布が希薄ないしは空白である地域の一つは地域Vであり、これは「内面」へラ記号を 主に施す宗像窯跡群や小郡市苅又地区窯跡群から最も離れた縁辺部に位置することに起因するもの と考えられる。

そのほかに「内面」へラ記号の空白域は春日市-夜須町にかけての地域、つまり地域Ⅲ・Ⅳのうち福岡市と小郡市・甘木市の間の諸市町村であり、また、牛頸窯跡群と宗像窯跡群の間に位置する地域Ⅱにおいても、空白域の拡大が進む。このようなプロセスで、「内面」へラ記号の分布にみられる二極化がより鮮明になるものと考えられる。

以上のような分析結果から、「外面」へラ記号は主に福岡市、小郡市を中心としてその中間である地域Ⅲの諸市町村を主要な分布域としているものといえる。また、宗像窯跡群と牛頸窯跡群の中間に位置する地域Ⅱや地域Ⅰは「外面」へラ記号の分布が時期を問わず希薄であることから、主要な分布域の外縁ということができる。

「内面」へラ記号は、宗像市ー福岡市と小郡市・甘木市が主要な分布地域である。つまり、分布が大きく二分化している状態と考えられる。杯 H においては、これらの2つの主要な分布域のほかに、宗像窯跡群からの連続的な分布として理解しづらいが篠栗町周辺にも分布のまとまりがみられる。

このような主要分布域とその外縁あるいは分布の空白域によって構成される「外面」へラ記号、「内面」へラ記号それぞれの分布の様相には杯 H から杯 B まで対象地域全体を通じて大きな変化を見出すことはできない。

(ii) 生産地との対応関係:「内面」へラ記号の流通範囲

まず「内面」へラ記号の様相からみることとする。上記の通り、対象地域を通じた「内面」へラ記号の分布では、宗像市から福岡市に至る玄界灘沿岸の諸地域と小郡市・甘木市を主とする地域 $\mathbb N$ において、杯 $\mathbb H$ から杯 $\mathbb B$ にかけて分布が継続的に認められた。また、杯 $\mathbb H$ の段階においては、これら2つの分布範囲に加え、地域 $\mathbb H$ の篠栗町とその周辺に「内面」へラ記号の分布が認められた。

玄界灘沿岸部においては、杯Bの段階は資料が少なく判断しかねるが、少なくとも杯H・杯Gの段階においては、宗像市と福岡市に多くの「内面」へラ記号をもつ蓋杯が分布する。また、各市町村における「外面」・「内面」へラ記号の構成比から、おおよそ新宮町・古賀市あたりを境に、より西側の地域では「外面」へラ記号主体、より東側の地域では「内面」へラ記号主体という傾向がみられた。

これらの結果から、宗像市と福岡市という主要な分布地域のうち、宗像窯跡群の所在する宗像市 周辺が、「内面」へラ記号が量的に多く「外面」へラ記号との組成比においても主体的な要素であ ることから、中心的分布域とすることができよう。上記のように、各市町村の組成比にみられる西 の福岡市から東の宗像市へと漸移的に「内面」へラ記号の組成比が高くなるという点は、宗像窯跡 群では稲元日焼原窯跡群など古い窯跡をのぞき「内面」へラ記号を主に施すという特徴と整合的な 結果といえる。宗像窯跡群の出土資料として分析できた資料は杯Hのみであることから6世紀代 から7世紀初頭ごろに限られる。しかし、7世紀後半代の窯の存在についての指摘も既になされて いることから〈註12〉、消費地の分析において認められるように杯 G 以降杯 B の段階においても 宗像窯跡群における生産は継続して行われているものと考えられる。以上のような宗像窯跡群の様 相、また宗像市から福岡市にかけての玄界灘沿岸部においては「内面」へラ記号の分布を連続的に 捉えることができることなどから、 宗像窯跡群の製品がこの範囲に流通しているものと考えられる。 福岡市において量的に多くの資料が認められ、その中間である新宮町 – 津屋崎町の間で相対的 に少ない分布となっている点については、須恵器の主要な消費先である群集墳の数量的な多寡が大きな要因と考えられる。

もう一つの「内面」へラ記号の分布域である地域N(杯Hの段階には地域Ⅲ南部も含まれる)においては、小郡市における割合が継続して相対的に高い。小郡市では苅又窯跡群で6世紀後半に須恵器生産が行われており、先の分析のように「内面」へラ記号が中心であり「外面」へラ記号はほとんど認められず、「内・外面」へラ記号が若干認められるという結果であった。

苅又窯跡群ではヘラ記号を施した資料は杯Hに限られるが、消費地における「内面」ヘラ記号は杯Hより後出の杯Gや杯Bにおいても小郡市や甘木市を主として認められた。消費地での様相はこのように現状における窯の経営時期より長期に及ぶことから、杯Gや杯Bに付された「内面」ヘラ記号を全て苅又窯跡群の製品とすることはできないであろう。しかし、消費地における分布をみる限り苅又窯跡群に後続する窯跡が周辺に存在する可能性も考えられる。

また、杯日の段階に限られるが、地域IIの篠栗町を中心に須恵町などにおいて「内面」へラ記号の分布が認められた。この地域は、新宮町・古賀市を経て宗像窯跡群へ、あるいは宇美町・太宰府市・筑紫野市を経て苅又窯跡群へといたる「内面」へラ記号を蓋杯に施す二箇所の生産地の中間に位置する。そのためこれらの両窯跡群からの流入を想定すべきかと考えられる。しかし第110図からは篠栗町・須恵町をとりまく市町村である久山町や宇美町・太宰府市では分布が相対的に希薄になるようであることから、両窯跡群から連続的な地理的傾斜としてこの分布をとらえることは必ずしもできない。そのため、宗像窯跡群あるいは苅又窯跡群からの流入の可能性に加え、これらの生産地以外からの流入の可能性についても否定できない。候補となる生産地としては、「内面」へラ記号を施す杯類が生産されている、宇美町岩長浦遺跡群1号窯跡〈註13〉や飯塚市所在の井出ヶ浦窯跡群〈註14〉等をあげることができる。

以上から対象地域内においては「内面」へラ記号を付す蓋杯の分布について、主に宗像窯跡群を供給源とする玄界灘沿岸の地域、小郡市苅又窯跡群を産地とする地域Ⅲ南部(杯Hの時期)と地域Ⅳという2つの流通範囲を想定することができる。さらに杯Hの時期に限られるが、篠栗町周辺については別の生産地からの流通の存在する可能性を否定できない。しかし、現状ではいずれの窯から供給されたものであるのかは判断できない。

(iii) 生産地との対応関係:「外面」へラ記号の流通範囲

「外面」へラ記号を付す蓋杯の分布は対象地域全体に及ぶが、量的にみた場合主要な分布域である博多湾から筑後地方にかけての地域Ⅲ・地域Ⅳに宇美町を加えた諸地域と、分布が非常に希薄な地域Ⅰ・地域Ⅱ・地域Ⅴに区分できる。主要な分布域は時期を問わず6世紀後半以降7世紀代まで

継続して分布の主要な地域であり、大きな変化はみられなかった。また、その中でも福岡市と小郡市・甘木市など(これらに加え杯日の段階の筑紫野市、杯 G の段階の那珂川町も比率が若干高い)が特に多くの割合を占める地域である。これら高い割合で分布がみられる地域に挟まれた春日市・大野城市・宇美町・太宰府市や筑紫野市・那珂川町、夜須町などは、相対的に分布が希薄となる。また、これらの諸地域においては「外面」・「内面」へラ記号の構成比ではほとんどの市町村で「外面」へラ記号が80~90%の高い比率を占め、地域 I から福岡市にかけての玄界灘沿岸部において認められたような、各市町村内での「内面」/「外面」へラ記号の組成比上の優劣関係に生産地からの距離に伴う地理的傾斜が認められるということはなかった。

分析対象とした窯跡群の中では、これまで指摘されているように〈註15〉牛頸窯跡群において、杯 H から杯 B まで一貫して「外面」へラ記号がほとんどを占めるという様相であった。一方、牛頸窯跡群の位置する大野城市およびその近隣の市町村では「外面」へラ記号の分布は福岡市や小郡市・甘木市などに比べ低率であり、生産地が分布のピークをなして距離に相関して頻度が低下するという分布パターンはみられない。むしろ、生産地近隣の分布の希薄な範囲を取りまくように、若干離れた福岡市や小郡市などにおいて高い割合で分布がみられるという傾向を持つ。

このような分布にみられる特徴からは、その主要な核である福岡市、小郡市などに生産地を求め うるという可能性を全く否定できるものではないが、5世紀後半頃の新開窯跡群〈註16〉、6世紀 はじめに操業が始まる重留窯跡群〈註17〉などこれまで知られている窯跡は短期間で操業を停止 してしまう。そのため6世紀中頃以降、福岡市内に須恵器の産地を求めることは難しい。また、6 世紀後半に操業される苅又窯跡群では上記の通り蓋杯に施されるへラ記号のほとんどを「内面」へ ラ記号が占めることから、この窯跡群が「外面」へラ記号を持つ蓋杯の供給源とは考えがたい。

また、福岡市においては膨大な数の古墳が調査されており、通時的には6世紀末を前後して群集墳の小単位の数が急増する点から、造墓単位がこの時期を画期として増加するとの指摘がなされている〈註18〉。一方牛頸窯跡群では、IVA期における瓦生産の開始による瓦陶兼業、多孔式煙道窯の出現にみる窯構造の変化、窯跡数の増加、窯体規模の拡大など、他地域からの技術移入を伴う生産規模の拡大が認められ、牛頸窯跡群における一つの大きな画期とされている(市20)。つまり、群集墳の造墓単位の増加と並行するような形で、牛頸窯跡群での生産規模も拡大していると考えることができる〈註19〉。このような点から、福岡市内において多く分布する「外面」へラ記号をもつ蓋杯の多くは牛頸窯跡群を供給源とするものと考えることができよう。

このような分布の一つの中心である福岡市を含む地域Ⅲを取りまくように、西側には地域V、東側の地域Ⅱや地域Ⅰなど分布の希薄な外縁部がみられる。このような点から、地域Ⅲの福岡市を主要な流通範囲としつつ、限られた量ではあるがその外縁の諸地域にまで牛頸窯跡群の製品が流入していたものと考えることができる。

一方、地域Ⅲの南に位置する地域Ⅳの各市町村でも「外面」へラ記号は主要な構成比をなし、小郡市や甘木市を中心に高い割合で分布が認められた。へラ記号をもつ蓋杯の資料数が減少することから結果の妥当性については今後の課題であろうが、杯 G の段階以降次第に小郡市を中心に福岡市と同様の割合で「外面」へラ記号が認められるようになる。つまり、杯 H の段階では、「外面」

へラ記号を持つ蓋杯の過半数は福岡市に分布していたが、杯 G の段階になると福岡市とともに小郡市も全体の2割程度の量を出土するという結果になっている。

このような点から地域IVの一部も「外面」へラ記号の中心的な流通範囲ということができよう。この分布範囲については、先のような理由から、苅又窯跡群あるいはその後続の窯跡群があるとするならばそのような生産地に供給源を求めることは難しいと考えられる。そのため、供給源としては牛頸窯跡群を一つの有力な候補として考えることができよう。一方、地域IVは対象地域の中で最も南に位置し、また小郡市など後の筑後となる地域を含むことから、牛頸窯跡群と同様に杯「外面」にへラ記号を施す八女窯跡群からの製品の流通も考えられる。

地域IVに隣接する太刀洗町や浮羽郡の様相からこの問題についての手がかりを得ることができる。小郡市の西に位置する大刀洗町西森田遺跡〈註20〉においては、溝出土の5世紀後半と6世紀後半の須恵器を対象とした胎土分析が行われており、5世紀後半の須恵器の産地は朝倉窯と陶邑窯であり、6世紀後半の資料の多くは牛頸産という結果が出ている〈註21〉。

また、朝倉町の南に位置する旧浮羽郡吉井町所在の堂畑遺跡〈註22〉においては、器面外面に「竹管文」様のへラ記号を施した杯日がみられる。このようなへラ記号は、今回分析対象とした窯跡では牛頸ハセムシ遺跡(1- 田号窯)(市10)、小田浦遺跡群(市23)、中通 D- 1 窯跡・D- 2 窯跡(市5)などで出土している。消費地遺跡では、牛頸窯跡群に近接する春日市惣利西遺跡(4点:杯日)〈註23〉・那珂川町観音山古墳群(1点:杯日)〈註24〉、地域Nの甘木市立野遺跡(1点:杯日)〈註25〉などで散見される。八女窯跡群からの製品の流通が想定されている周辺市町村(久留米市・広川町・八女市・立花町)の様相をみると、管見にふれた限り「竹管文」様のへラ記号は認められない。また、久留米市旗原遺跡から出土した6世紀後半を中心とする須恵器に関しては、地理的に筑後川の南側である点、へラ記号の種類、器形や色調において塚ノ谷4号窯跡群出土資料と類似することが指摘されており〈註26〉、筑後川以南では牛頸産製品の流通は積極的には認められないのが現状のようである。

以上のように、地域 \mathbb{N} に隣接する地域において、牛頸産と考えられる須恵器がみられ、また牛頸窯跡群で特徴的ともいえるヘラ記号が散見されることなどから〈註27〉、地域 \mathbb{N} に流通している「外面」へラ記号を持つ蓋杯についても牛頸産のものが含まれるものといえよう。さらに、西森田遺跡出土の6世紀後半の須恵器についての胎土分析においては、牛頸産が主であり、陶邑産などはわずかということ〈註28〉を加味するならば、地域 \mathbb{N} においても「外面」へラ記号を持つ蓋杯のある程度は牛頸産である可能性が高いと考えられるであろう。

以上のように、牛頸産須恵器の流通範囲について、蓋杯にみられる「外面」・「内面」へラ記号に着目して検討を行ってきた。これまで指摘されているように、牛頸窯跡群、宗像窯跡群、苅又窯跡群それぞれの窯跡においてへラ記号の付される部位に相違がみられ、牛頸では「外面」、他の2窯跡群では「内面」へラ記号が主流を占める点を追証した。その上で、「外面」・「内面」へラ記号の分布から各生産地の製品の流通範囲について検討を試みた。牛頸窯跡産の製品については、これまで福岡平野を中心とする範囲に分布すると指摘されてきた〈註29〉。今回の分析においても、牛頸産の可能性の高い「外面」へラ記号を有する蓋杯の主要な分布範囲は福岡平野であり、また筑紫平

野にも比較的多く分布がみられる点から、これまでの指摘を一部追証するかたちとなった。

以上の分析はヘラ記号の「内面」「外面」の別に基づく検討であり、冒頭でも述べたように、須恵器全体の一部分を対象としたものであることから、須恵器の流通パターンと直接結びつけることのできるものではなく、仮説の域を出ないことはいうまでもない。今後、各窯跡群においてみられるヘラ記号の多様な変異、色調、製作上の細かなくせと消費地で出土する須恵器にみられる様相との対応関係、さらに胎土分析などによって、より総合的に製品の流通範囲の検討を行うことが課題といえよう。

- 註1. 舟山良一「第4章 牛頸窯跡群」『大野城市史』上巻 (pp.317-400) 大野城市史編さん委員会編 2005
- 註2. 久住町教育委員会『市第一遺跡・石田遺跡』 1996
- 註3. 三辻利一「大黒町遺跡出土須恵器の蛍光 X 線分析」・「光武窯出土須恵器の化学特性」、「冬野瓦窯跡 光武須恵器窯跡 調査概報』塩田町文化財調査報告書第13集(pp.49-57)佐賀県塩田町教育委員会 1996
- 註4. 前掲註1.
- 註5. 石木秀啓「牛頸窯跡群と九州の須恵器生産体制-八世紀以降を中心として-」『律令国家転換期の王権と都市 (論考編)』 (国立歴史民俗博物館研究報告) 第134集 (pp.299-353) 2007
- 註6. 山田元樹「須恵器窯業生産の様相解明にヘラ記号が果たし得る役割の検討」『九州考古学』第62号 (pp.1-15) 1988
- 註7. 前掲註1. 小郡市教育委員会『苅又地区遺跡群V』小郡市文化財調査報告書第106集 1996
- 註8. 前掲註1.
- 註9. 西弘海「七世紀の土器の時期区分と型式変化」『土器様式の成立とその背景』(pp.93-134) 真陽社 1988
- 註10. 小田富士雄「九州の須恵器」『世界陶磁全集』 2 日本古代(pp.227-233) 小学館 1979、及びV. 出土遺物の検討
- 註11. 前掲註1.
- 註12. 宗像市教育委員会『三郎丸堂ノ上 C』宗像市文化財調査報告書第50集 2001 岡田裕之「北部九州における須恵器生産の動向-牛頸窯跡群の検討を中心として-」『古文化談叢』第49集 (pp.147-175) 2003
- 註13. 宇美町教育委員会『宇美観音浦』 1981
- 註14. 飯塚市教育委員会『井出ヶ浦窯跡』立岩周辺遺跡発掘調査報告書第6集 1985
- 註15. 前掲註1.
- 註16. 小田富士雄「須恵器文化の形成と日韓交渉・総説編-西日本初期須恵器の成立をめぐって-」『古文化談叢』第24集 1991
- 註17. 福岡市教育委員会『重留遺跡-重留古墳群 C-2号墳・重留古窯址の調査-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第178集 1988
- 註18. 土井基司「横穴式石室から見た群集墳の様相-博多湾周辺地域を中心に-」『九州考古学』第67号 (pp.63-85) 1992
 - 田中良之『古墳時代親族構造の研究』柏書房 1995
 - 岡田裕之「古墳時代後期社会と須恵器生産・屯倉制-博多湾周辺地域を対象として-」『東アジアと日本:交流と変容』 九州大学21世紀 COE プログラム(人文科学) 3号(pp.63-82) 2006
- 註19. 前掲註12. 岡田 2003
- 註20. 大刀洗町教育委員会『西森田遺跡2』大刀洗町文化財調査報告書第19集 2000
- 註21. 三辻利一「西森田遺跡出土須恵器の蛍光 X 線分析」『西森田遺跡2』大刀洗町文化財調査報告書第19集(pp.68-75) 大刀洗町教育委員会 2000
- 註22. 福岡県教育委員会『堂畑遺跡II』一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第20集 2004 福岡県教育委員会『堂畑遺跡III』一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第23集 2005
- 註23. 春日市教育委員会『春日地区遺跡群Ⅲ』春日市文化財調査報告書第15集 1985

- 註24. 那珂川町教育委員会『観音山古墳群』那珂川町文化財調査報告書第8集 1982
- 註25. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告8』 1986
- 註26. 久留米市教育委員会『旗原遺跡-第2次調査-』久留米市文化財調査報告書第171 (p.72) 2001
- 註27. 八女窯跡群では、「竹管文」様のヘラ記号を施した蓋杯が少数ながらみられるとの教示を岡田より頂いた。そのため「竹管文」様のヘラ記号というだけでは、牛頸窯跡群の製品であることの確証とはなりえない。今後他の属性も加味した検討を要する。
- 註28. 前掲註21.
- 註29. 前掲註1.

2. ヘラ書須恵器

① 筑前国奈珂

⑥ 仲郡手

牛頸窯跡群では5ケ所から焼成前に漢字を刻んだヘラ書須恵器が出土している。ハセムシ窯跡群 12地点、井手4号窯跡、塚原遺跡、九州大学筑紫キャンパス内遺跡、本堂遺跡7次調査谷部である。

ハセムシ窯跡群12地点 (第115 ~ 117図) 〈註1〉

ここでは10基の窯跡が見つかり、その下に広がる灰原から出土した多くの須恵器の中の甕片に刻まれていたものである。灰原からの出土のため、焼成された窯を特定できないが $I \sim X$ 号窯跡の中でIX号窯跡が最も可能性が高いと考えられる。というのは、出土した甕は口径50cmを超えるもので、いわゆる大甕である。一方窯の方は大型と小型があり、大甕を焼けるような窯はV号窯跡とIX号窯跡だけである。出土地点がIX号窯跡の真下付近に多いこと、2つの窯跡の出土須恵器を見ると、V号窯跡は8世紀前半から中頃のもので、IX号窯跡は8世紀初頭頃から前半のものと考えられることから、IX号窯跡の可能性が高いと考えた。

文字は甕の頸部の外側に刻まれており、破片どうしで接合できたものもあり全部で10片あった。 これらのうち⑥は口縁と並行に(横向きに)書かれていたが、その他はすべて甕の口縁部に縦方向 に書かれている。欠けている部分も多かったが、次のような文字であった。

	郡手東里
	印于
	□ 呂
	乎万呂
	三人奉
	一僕
	年
2	筑紫前国奈珂郡
	手東里大神部得身
	并三人
	調大瓱一僕和銅六年
3	年調大瓱一
4	奉調大瓱一□
(5)	国奈珂郡
	里

⑦ 筑前国奈

手東里人

大(神)君百(江)

⑧ 大神君(百)江

大神マ麻呂

内椋人万呂

并三人奉

□瓱一僕和銅六年

- ⑨ 調
- 10 呂

+

内容的には「和銅六年(西暦713年)に筑前国奈珂郡手東里の大神君ら三人が調として大甕一口を納めた」ことを示しているが、奈良時代の税制を知る上で極めて貴重な発見であった。書き順は令に規定されている様式とほぼ同じである。通常調には付け札が付けられるが、ここでは実物に刻み込んでいる。書かれた内容について見ると国名郡名などの地名の後に人名があり、納めた年が記される。また、大甕は畿内では六人で一口を納めるが、その他の地方は三人で一口と規定されており、これも規定どおりである。このように古代の文献と合致する須恵器の発見は実に重要な発見であった。

井手4号窯跡(第116·117図)〈註2〉

ここの場合も灰原からの出土である。ここでは4~9号窯跡の5基が群集していて、ヘラ書須恵器が出土したのはこれらの下方に形成された灰原からであるが、5基のうち4基は小型の窯で大甕は焼けないことから、大型の4号窯跡で焼成されたと考えられたものである。報告者は共伴須恵器に8世紀中頃の土器が含まれるが、灰原出土ということから、それがヘラ書須恵器の時期を示すかは慎重に判断したいとする。5片が出土したが、そのうち3片は接合できたことから、個体数としては3個体分となる。ハセムシの場合と違って、甕口縁部の内面に水平方向すなわち横向きに書かれている。

- ① 那□
- ② 那
- ③ 那珂郡 □大神マ□ □ (養ヵ)

意味が判明するのは、那珂郡と大神部である。倉住靖彦氏は現在知られている限りでは牛頸は御笠郡に属し、那珂郡には属さないことから、那珂郡の人から注文されて生産したものであろうとされる。

塚原遺跡 (第117図) 〈註3〉

牛頸窯跡群の工人集落の1つと考えられる遺跡である。5世紀後半から6世紀前半にかけて造営





第115図 牛頸窯跡群出土へラ書須恵器(1)

- 205 -



ハセムシ12地点③ 年調大瓱



ハセムシ12地点④ 奉調大瓱



ハセムシ12地点⑤ □奈珂郡



ハセムシ12地点⑨

調

ハセムシ12地点⑦ 大(神)君百(江) 手東里人





ハセムシ12地点⑩ 呂



井手4号窯跡① 那□

第116図 牛頸窯跡群出土へラ書須恵器(2)

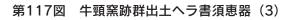
















塚原遺跡①

された古墳群に隣接して形成された集落である。時期的には6世紀中頃から9世紀前半頃までで、 ほぼ牛頸窯跡群の消長に合う。へラ書須恵器は1片のみであるが撹乱からの出土で詳細は不明であ る。土器外面であることは間違いないが、小破片のため器種は不明である。3行にわたって文字が 刻まれているが、これらの上下に文が続くことは確実である。

① 郡手□

押坂

七年

ハセムシの例からすれば、地名、人名と和銅の文字があったのではないかと想像される。集落遺跡出土であることから、手東里はここを指すのではないかという意見もある。

九州大学筑紫キャンパス内遺跡 (第117図) 〈註4〉

本遺跡は大野城市と春日市にまたがっていて、かつての米軍基地跡に九州大学の理工系の大学院 校舎が建設される際に発掘調査されたいくつかの遺跡の総称であるが、昭和56年にヘラ書須恵器 甕の小片が出土した。文字は口縁部内面に横書きされている。

① 哿郡手

と記されている。ハセムシ例から考えて那珂郡手東という文字が刻まれていたものと推測される。 哿は珂の異体字であろう。

本堂遺跡7次調査の谷部〈註5〉

調査地の谷部で出土したものである。谷部ではあるが、本来IV期に属する須恵器窯の灰原と考えられる層からである。連続斜線文を廻らす大甕の頸部に横書きしている。胴部との接合部分に近く、書きにくい場所である。

① 大神部見乃官

とあり、かなり明瞭で達筆である。共伴した須恵器や大甕頸部に連続斜線文を廻らすことなどから、 NB期(7世紀前半頃)のものと考えられる。見乃官は人名とみるのが自然のようだ〈註6〉。また、 文字は明瞭であるが、見乃万呂とか見万呂とかの誤記の可能性も考えられる。前後に文がないのは 確実なことから、ここにへラ書きした理由は明らかではない。現在報告書の刊行をめざし鋭意整理 中である。

このように大変重要な資料が見つかっている。いくつかの問題について述べてみたい。本堂遺跡 7次調査例を除き、共伴須恵器から時期が判断される場合は8世紀前半~中頃と見てよく、また、 ハセムシ以外の例もおそらく付札的な記載の一部であったとみなして良さそうである。

まず、国名だが、筑前国は筑紫国が前後に分かれたうちの1つで、文献的には筑後国が690年(『日本書紀』持統天皇四年条)、筑前国が698年(『続日本紀』文武天皇二年条)に見える。ハセムシ12地点出土須恵器には筑紫前国(ちくしのみちのくち)の表記も見える。行政区画として確立したのは701年の大宝令によってであるから、713年に筑紫前国という表記があったことは興味深い。

もっとも、大宰府史跡発掘調査において「竺志前贄駅・・・」と記した木簡が見つかっていてさら に別の表記のあったことがわかる〈註7〉。

次に奈珂郡についてである。ハセムシ例には2通り表記法がある。「奈珂郡」と「仲郡」である。 井手4号窯跡例や九州大学例では那と珂は異体字である。『続日本紀』和銅六年五月条に「畿内七 道諸国ノ郡郷名ハ好(ヨ)キ字ヲ付ケヨ」とある。牛頸村は江戸時代の文献では御笠郡に含まれて いる。一方那珂郡は福岡市から春日市や那珂川町・大野城市の一部を含む範囲を指す。牛頸が奈良 時代も御笠郡であったら、郡外に住む人が調を納めたことになる。倉住靖彦氏はそのように考えら れている〈註8〉。確かに調は国に課せられるものであるからそれでも良いのかもしれないが、特 産物ということから、やはり産地に課せられるのではないだろうか。そうすれば、牛頸は古代にお いては那珂郡であったことになる。

手東里については読み方も不明で文献にはでてこない里名である。ハセムシから北西に1,100mのところにある集落遺跡である塚原遺跡からへラ書須恵器が見つかったが、この付近を指すものであろうか。あるいは手東里を「しゅ(て)とおり」と読んで、大字牛頸に隣接する上大利や下大利など「おおり」・「おうり」という音に注目すべきであろうか。さらに、筑前国那珂郡にあった15郷のうちの1つである田来郷のことではないかとする説がある〈註9〉。手は田と音が通じ、東は来の誤記と考える説である。なお、里については国郡里制として郡の下の行政単位として使われたのは701年の大宝令施行から715年までであるので、表記方法として合うことになる。その後は国郡郷里制になる。

人名については大神君、大神部、内椋人が見える。大神部は大宝二年(702年)筑前国嶋郡川辺里戸籍に見えるが、那珂郡にも住んでいたことがわかる。本堂遺跡例では、IV期の須恵器に大神部の記載があったが、このことから、7世紀前半頃から8世紀前半まで須恵器生産に携わる(指導した)主要な氏族として大神部がいたことを示している。須恵器生産と大神部は密接な関係があると言われるが、牛頸窯跡群でもそのことが当てはまる。さらに、部民制にも問題を提起することとなった〈註10〉。考古学的に部民制を示す資料として最も古い例は、6世紀後半の島根県岡田山古墳出土の鉄剣に象嵌されていた「額田部臣」とされるが、本堂遺跡例はこれに次ぐ資料となる。

このようにハセムシ出土へラ書き須恵器は極めて貴重な発見であったが、『延喜式』の記載と比較した場合にも興味深い。『延喜式』は平安時代延喜五年(905年)に編纂に着手し、延長五年(927年)に一応の完成をみたものだが、その主計には各国が納める調の品目、量、納めるべき人数が記載されている。筑前国は調の品目の中に大甕・小甕等の須恵器を納めることになっているが、須恵器を納める国は筑前以外に備前(岡山県)・讃岐(香川県)・播磨(兵庫県)・和泉(大阪府)・摂津(大阪府)・近江(滋賀県)・美濃(岐阜県)の8カ国とされている。ハセムシ出土のヘラ書き須恵器はまさしくこの記載を裏付けたことになる。しかも『延喜式』には、畿内の国々は六人で一口の大甕で良かったが、その他の地方の国々は三人で一口の大甕を納めるように記載されているが、そのとおりのヘラ書きがなされていることになる。

なお、『延喜式』は前述のとおり10世紀前半にできたものであるが、牛頸窯跡群はほぼ9世紀前半から中頃にかけての時期には操業を終えている。従ってこの間の矛盾をどう解釈するかになるが、

考古学的成果によれば10世紀には讃岐や播磨のように盛んに須恵器を焼いている国もあるが、和泉や摂津など畿内の国々も須恵器生産をやめている。さらに『延喜式』には数多くの器種が見られるが、この時期須恵器を焼いている国々も焼く器種は甕や壺、捏ね鉢、杯など限られたものだけである。このことから、『延喜式』の記載は8世紀の状態を示しているのではないかという説がある〈註11〉。それなら実態と合うからである。『延喜式』の編纂はそれまでの律令の施行細則を示した式を集大成するとともに、文化事業的な意味も持っていたという指摘もあり〈註12〉、少なくとも須恵器の調納に関しては8世紀代のことであるとする説が的を得ている。牛頸窯跡群では8世紀後半には大甕を焼かないことから、さらに絞られ8世紀前半のこととすることができる。

- 註1. 中村浩編『ハセムシ窯跡群II』大野城市教育委員会 1989
- 註2. 池辺元明編『牛頸窯跡群II』福岡県教育委員会 1989
- 註3. 徳本洋一編『牛頸塚原遺跡群』大野城市教育委員会 1995
- 註4. 西健一郎編『九州大学埋蔵文化財調査報告第三冊』九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室 1994
- 註5. 大野城市教育委員会石木秀啓の教示による。現地説明会資料
- 註6. 坂上康俊先生、笹山晴夫先生からのご教示による。
- 註7. 倉住靖彦氏が『牛頸窯跡群II』の中で述べられている。
- 註9. 菱田哲郎「須恵器の生産者」『人と物の移動』列島の古代史4 2005
- 註10. 高橋良彦「須恵器工人の存在形態に関する基礎的検討」『須恵器生産における古代から中世への変質過程の研究』大阪 大学大学院文学研究科 2007
- 註11. 異淳一郎「都の焼物の特質とその変容」『新編古代の日本』⑥近畿 II 1991
- 註12. 虎尾俊哉『延喜式』日本歴史叢書 1974

Ⅷ-2. ヘラ書須恵器 挿図出典一覧

第115図	ハセムシ12地点①	中村浩編『ハセムシ窯跡群Ⅱ』大野城市教育委員会	1989
	ハセムシ12地点②	中村浩編『ハセムシ窯跡群Ⅱ』大野城市教育委員会	1989
第116図	ハセムシ12地点③	中村浩編『ハセムシ窯跡群Ⅱ』大野城市教育委員会	1989
	ハセムシ12地点④	中村浩編『ハセムシ窯跡群 II』大野城市教育委員会	1989
	ハセムシ12地点⑤	中村浩編『ハセムシ窯跡群Ⅱ』大野城市教育委員会	1989
	ハセムシ12地点⑥	中村浩編『ハセムシ窯跡群Ⅱ』大野城市教育委員会	1989
	ハセムシ12地点⑦	中村浩編『ハセムシ窯跡群Ⅱ』大野城市教育委員会	1989
	ハセムシ12地点⑨	中村浩編『ハセムシ窯跡群Ⅱ』大野城市教育委員会	1989
	ハセムシ12地点⑩	中村浩編『ハセムシ窯跡群Ⅱ』大野城市教育委員会	1989
	井出4号窯跡①	池辺元明『牛頸窯跡群Ⅱ』福岡県教育委員会 1989	
第117図	ハセムシ12地点®	中村浩編『ハセムシ窯跡群Ⅱ』大野城市教育委員会	1989
	井出4号窯跡③	池辺元明『牛頸窯跡群Ⅱ』福岡県教育委員会 1989	
	塚原遺跡①	徳本洋一編『牛頸塚原遺跡群』大野城市教育委員会	1995
	九大筑紫キャンパス内遺跡①	西健一郎編『九州大学埋蔵文化財調査報告書第三冊』 学埋蔵文化財調査室 1994	九州大

3. 甕

(1) はじめに

牛頸窯跡群出土の大甕は、前節における刻書須恵器の検討でみたとおり、奈良時代前半には、調として納められたものも存在したと考えられる。そして、『延喜式』等に記載のある甕は、多様に分化した器種および複数の名称があるとともに、それらの容量についても明確な規定が存在する。このことから、牛頸窯跡群における甕や大甕が、実際にこれらの規定にもとづいて製作されていたのか、という点が問題となろう。

一方で、牛頸窯跡群では、この規定が適用される奈良時代の甕および大甕はその前半期までしか ほぼ認められず、古墳時代および7世紀代までの製品が多い。そのため、古墳時代と律令期の甕に どのような違いがあるのかという点もみておく必要がある。

これらの点を明らかにするため、まず牛頸窯跡群およびその周辺遺跡から出土する甕および大甕 の法量と容量に着目して検討をおこなうこととする。

また、牛頸窯跡群において、6世紀後葉から7世紀中葉にかけてみられる中大型甕は、頸部に連続斜線文を施文することを特徴とする。このことから、先の容量による分類とともに、これらの甕の頸部文様に着目して分類をおこない、牛頸窯跡群から出土する甕の特徴について整理をおこなうこととする。

さらに、古墳時代における大甕の生産が、古墳祭祀や葬送儀礼において、どのような役割を果た したのかについても考察を加えていきたい。

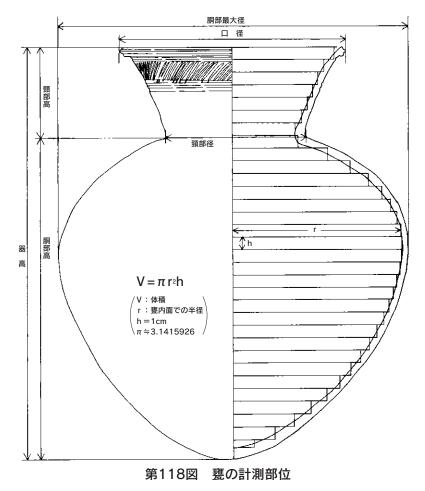
(2) 甕の容量の検討

(i)容量計測の方法と資料

まず、甕の容量について検討をおこなう。容量の測定においては、甕の中に実際に水を注ぎ、それをメスシリンダー等に汲み替えて測る方法が、もっとも正確を期せると考えられる。しかし現実的には、大甕等の多くは破片の状態で出土するため、完全に器形を復元できる資料は稀だといえよう。そして、仮に器形を復元できたとしても、大型器種にあっては、水を注いで過不足なくその容量を測定するのは困難である。よって、本報告では、基本的に実測図をもとに容量の測定を復元的に行うこととする。

図上計測の方法は、次のとおりである〈註1〉。まず、実測図上において、甕を口縁部から底部に向かって高さ(h)1cm ごとの円錐台に分割していく。次に、各円錐台の上下面における内径の平均値(r)を求め、円錐台を半径(r)、高さ(h)1cm の円柱体と見立てた上で(第118図)、 $V=\pi r^2 h (\pi=3.1415926$ とする)という式を用いて各円柱体の体積(V)を求める。そして、各円柱体の体積の総和を求めることで、甕全体の容量を導き出す。

このように、実測図上で導き出された容量は、実際の土器の測定値と誤差を生じることが予想されるが、凡そプラスマイナス10%以内の誤差であることが指摘されることからも〈註2〉、許容範囲に収まり使用可能であると考えられる。

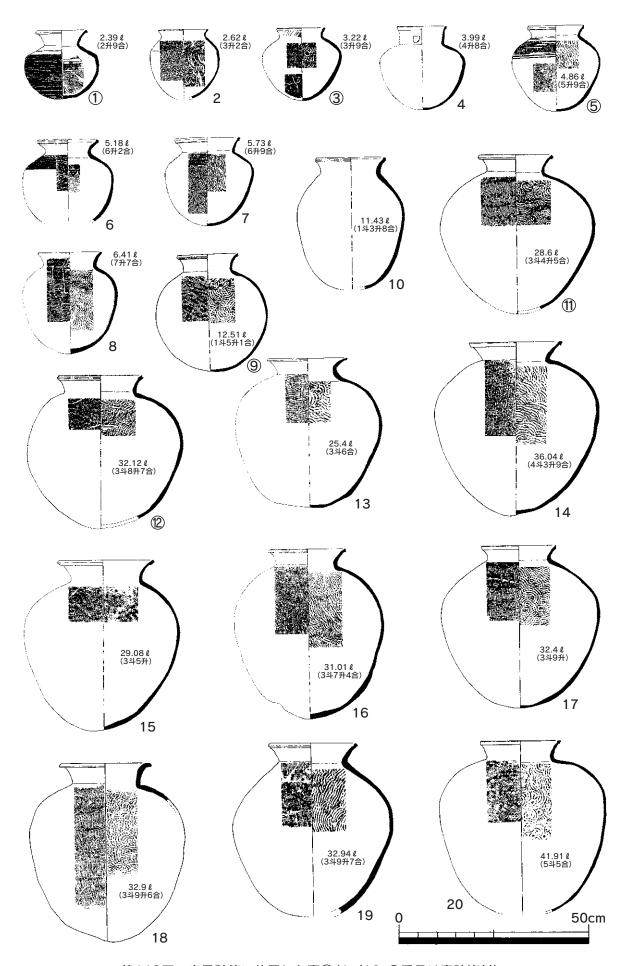


分析資料については、次 のような3つの規準を設け る。すなわち、第23表に 示すとおり、完形または完 形に近いもの、あるいは破 片であっても接合によって 多くの部位を復元でき、反 転復元等を行わなくても 計測可能なもの(◎)、実 測図上で反転復元等を行 い、全形を図上復元できる もの(○)、実測図上で全 形は復元できないが、器形 の大部分は復元でき、かつ ある程度全形を推定できる もの (△) とする。これら は、◎がもっとも信頼度が 高く、次いで○、△の順と なると認定できる。

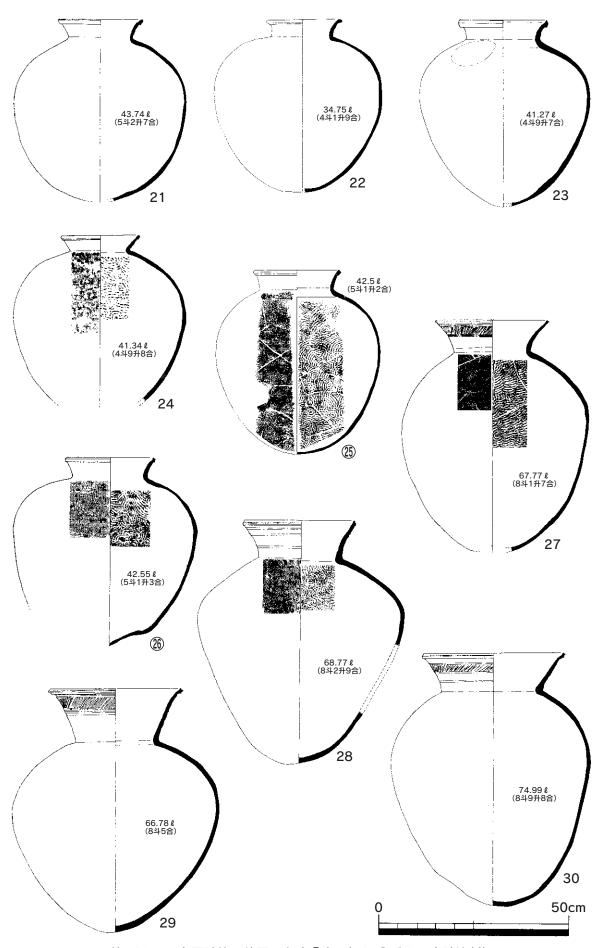
既報告の須恵器甕のうち、牛頸窯跡群をはじめ、周辺の古墳、集落等、大野城市内の遺跡より出土し、この規準を満たすものは第23表と第119~121図に示すとおり37点である。この資料を対象として分析をおこなうこととする。また、これらの良好な資料は、共伴遺物の年代等から判断して、小田編年IV期を中心とするIII A~V期、すなわち6世紀中葉~7世紀中葉のものに限定されるが、これは資料の遺存状態の問題もさることながら、牛頸窯跡群では8世紀中頃~後半以降、甕・大甕の生産がおこなわれず、小型器種を中心とする生産に変化したこと〈註3〉とも関係すると思われる。この点は、第V章の器種構成の検討においても明らかとなったところである。

(ii) 甕の法量と容量との関係

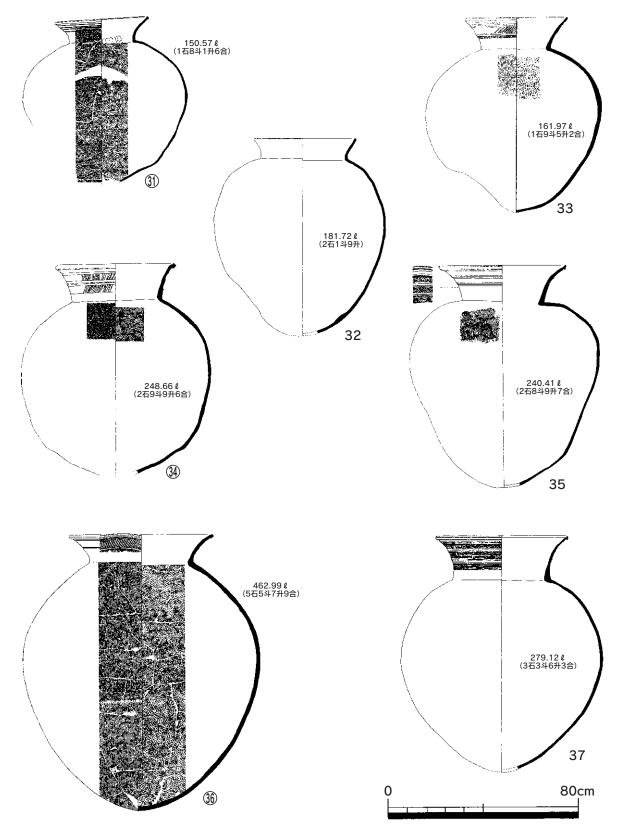
まず、対象とする資料の法量を検討した結果、口径×器高のグラフから、5種類の大きさに分けることができる(第122図)。すなわち、①口径10cm 以上20cm 未満、器高15cm 以上40cm 未満、②口径20cm 以上30cm 未満、器高40cm 以上60cm 未満、③口径30cm 以上40cm 未満、器高60cm 以上80cm 未満、④口径40cm 以上60cm 未満、器高80cm 以上100cm 未満、⑤口径60cm 以上、器高100cm 以上に分けられ、口径と器高とが比例の関係を示す。すなわち、口径が大きいほど、器高が大きいということがわかる。よって、古墳時代の甕製作において、大きさによる作り分けが行われていたこと、つまり一定の大きさをある程度目標として製作されていた可能性がある。



第119図 容量計算に使用した甕①(1/10、○番号は窯跡資料)

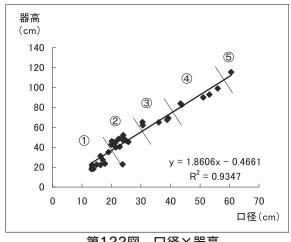


第120図 容量計算に使用した甕②(1/10、○番号は窯跡資料)

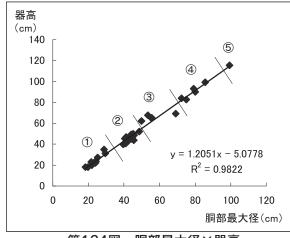


第121図 容量計算に使用した甕③(1/16、○番号は窯跡資料)

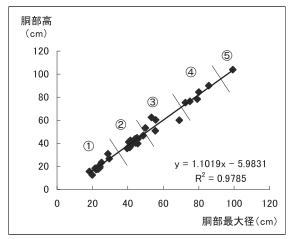
同様に、胴部最大径×胴部高(第123図)、胴部最大径×器高(第124図)の相関をみてもそれぞれ比例の関係を示し、かつ口径×器高の場合と同様、5種類程度の大きさに分けられることがわかる。すなわち、胴部最大径が大きいほど、胴部高および器高が大きいことがわかる。ただし、口



第122図 口径×器高



第124図 胴部最大径×器高



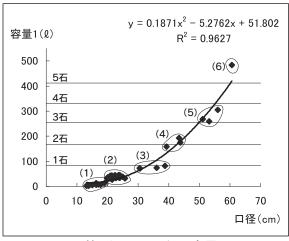
第123図 胴部最大径×胴部高

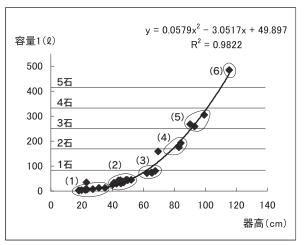
径×器高における②や③に相当する中型器種に あっては、その境界はあまり明瞭ではなく、胴 部の大きさから②と③は分けられない。このこ とから、胴部の大小によっても個体の大きさは 規定されうるが、それよりも口頸部の大小をま ず決定し、個体の大小を規定する目安として製 作された可能性が高いといえよう。

次に、甕の各部位の法量と容量との関係につ いて検討をおこなう。容量の測定は、上述の方 法でおこない、口縁部までの量(容量1)と頸

部の付け根までの量(容量2)、それぞれの結果のみを別表1に示した。ここで、容量1と容量2の いずれの計測値をとっても、各個体間の容量値の関係は相対的に同様な傾向を示すことから、口 頸部を含む法量値については容量1との関係を考え、口径×容量1 (第125図)、器高×容量1 (第 126図) について検討をおこなう (たとえば、口径×容量2、器高×容量2を試みても、各個体間 の相対的な関係に大きな差異はみられない)。同様に、口頸部を除く胴部のみの法量値については、 容量2との関係を考え、胴部最大径×容量2 (第127図)、胴部高×容量2 (第128図) について検 討をおこなうこととする。

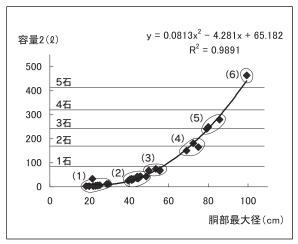
そして、口径/器高/胴部最大径/胴部高、それぞれの部位の大きさと容量との関係をみた結 果、各部位の法量と容量は、近似曲線上で高い相関を示すとともに、大きく6群のまとまりが認め られた。これらのまとまりは、先の法量の分析と比較すれば、たとえば口径×器高の関係が①口 径10cm 以上20cm 未満、器高15cm 以上40cm 未満の場合、容量1は(1)約15ℓ未満となるこ とを示している。同様に、口径×器高の関係が②のとき、容量1は(2)約15~50 ℓ 、③のとき (3) 約 $60 \sim 90 \ell$ 、⑤のとき (6) 約 480ℓ となり、④のときは (4) 約 $150 \sim 200 \ell$ と (5) 約 250~300ℓの2群に分かれるというふうに、個体間の法量と容量との大小関係は概ね対応する。 これは、胴部最大径×胴部高の関係における5群と、胴部最大径または胴部高と容量2との関係に おける6群のまとまりとの対応をみても、同様な傾向を指摘できる。

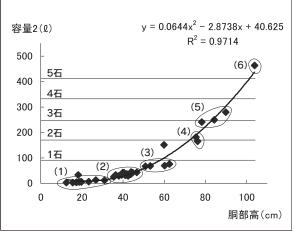




第125図 口径×容量1

第126図 器高×容量1





第127図 胴部最大径×容量2

第128図 胴部高×容量2

以上のように、牛頸周辺から出土した甕の容量からは、6種類程度の大きさに分けられ、それらは法量値からも概ね推定可能であると考えられる。そして、7世紀中葉以前の甕においても、ある一定の目標値があり、それを目安として製作されたといえよう。しかし、奈良時代以降のように規格化されたとまではいいがたい。そこで、上で算出した容量について、奈良時代の度量衡に換算して考えてみたい。

(iii) 奈良時代の度量衡との対比

奈良時代の度量衡は、10世紀に編纂された『延喜式』民部主計寮式の記載を参考にできるとともに、『正倉院文書』や木簡等にも記載がみられ、それらをもとに、大型貯蔵具を対象とした器名考証も行われている〈註4〉。一方、本報告で扱う資料のほとんどは、6世紀中葉~7世紀中葉に該当するものであり、律令期の度量衡とは異なることや、律令期には甕や大甕が器種分化し、その種類が増えることなどから、直接的な対比をおこなうのは適切とはいえない。しかし、古墳時代における大甕の大きさと律令期の度量衡にもとづく規格との間に、どのような差異があるのかを理解する上で、両者の関係を検討するのは有効であろう。なお、ここでの容量の数値は「容量2」を使用するとともに、度量衡は石・斗・升・合の単位で表し(表1)、律令期の度量衡への換算は、1升=829.89ccとする説に従うこととする〈註5〉。

さて、『延喜式』主計寮式には、「陶器」を輸調する際、左右京および畿内と、諸国(西海道は追加規定がある)それぞれについて、納めるべき各器種の口数および容量に関する記載があることは周知のとおりである。そして、容量が1石以上の器名としては「池由加」と「瓱」(各5石)、「瓼」(畿内1石2斗、諸国1石5斗)、「(小)由加」(1石)がみられる。これらの器名はいずれも大甕の範疇に含まれると考えられ、「(小)由加」および「池由加」については、平底で短頸広口の平城宮分類甕 C に相当するとされるが〈註6〉、分析資料の中には、このような形態を呈する甕はみられないことから、一般的な丸底の大甕の呼称は「瓱」または「瓼」とするのが適当と考えられる〈註7〉。ただし、同じ『延喜式』主計寮式において、筑前国で納めるべき陶器として「大甕」の器名が挙げられることから、この頃には「瓱」も「瓼」も「大甕」という呼称として包括されていたことも想定される。

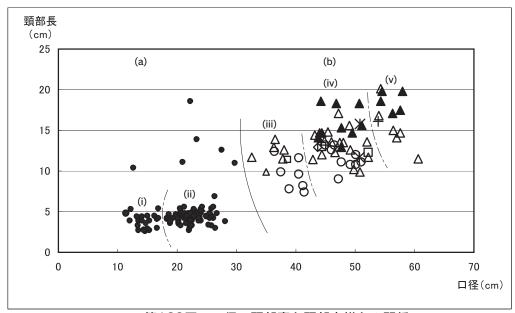
では、分析資料のうち、1石以上の中大型甕をみると、1石以上2石未満では野添窯跡群7次2号窯跡灰原出土品(第121図の31)の1石8斗1升6合 = 150.57 ℓ、後田6号墳出土品(第121図の33)の1石9斗5升2合 = 161.97 ℓ があり、2石以上4石未満では、仲島遺跡 Ⅵ・SD13出土品(第121図の32)の2石1斗9升 = 181.72 ℓ、小田浦37- I 号窯跡出土品(第121図の34)の2石9斗9升6合 = 248.66 ℓ、御陵3号墳出土品(第121図の35)の2石8斗9升7合 = 240.41 ℓ、牛頸胴ノ元古墳出土品(第121図の37)の3石3斗6升3合 = 279.12 ℓ がある。そして、最大のものとして、野添窯跡群7次2号窯跡灰原出土品(第121図の36)の5石5斗7升9合 = 462.99 ℓの大甕がある。『延喜式』の記載にしたがえば、これらのうち、5石以上の大甕が奈良時代の「瓱」の規定容量と対応する。

また、平安時代前期の『延喜式』編纂時期と近い、石坂 E 地点3号窯灰原出土の大甕(第131図の34)は、底部の多くを欠損するが、1石4斗3合=116.47 ℓ (容量1)、または1石3斗4升6合=111.67 ℓ (容量2) に復元できる。この容量は、「瓼」に近い数値であることが指摘できよう。

さらに、牛頸ハセムシ窯跡群12地区灰原からは、「大腿」の文字が刻まれた大甕片4個体分が出土したが(市10)、そのうち口径の復元できる2個体は、口径約47.0cm と口径52.6cm であり、その数値から器高は約80~100cm 程度と想定できる。これを上述した容量との関係からみると、3石(約249ℓ)~4石(約332ℓ)程度に相当すると考えられる。これは、平安時代前期の『延喜式』の規定では、5石の甕を「腿」とすることをふまえると、記載内容と実際の甕の容量との間に齟齬がみられる。これに対して、奈良時代の『正倉院文書』では、1石以上の受量(実際の使用時に入った量)がある大型貯蔵具を「腿」または「鷹」と呼称することも指摘されており〈註8〉、5石に満たない甕の場合であっても「腿」と呼んでいた可能性があろう。

このように、容量を基準として、当時の中大型甕の呼称を考えるならば、1石以上2石未満の甕が「瓼」、2石以上の甕が「瓱」に相当するといえよう。そして、『延喜式』が編纂される平安時代前期になると、筑前国で「大甕」という呼称に包括されるように、一括りの器名として捉えられた可能性が考えられる。

一方、1石未満の甕についてみると、分析資料については2斗以上のものと、2斗未満のものとに 大きく分けられ、『延喜式』における2斗以上の貯蔵具をみると、「小甕」・「酒壺」・「缶」・「瓮」・「爐



第129図 口径×頸部高と頸部文様との関係

(無段) △斜線文, □波状文, ○無文; (1段) △斜線文, □波状文, ◇無文, +その他; (2段) ▲斜線文-斜線文, * 斜線文-無文; (口径30cm未満) ●無文

登」・「着乳登」(各3斗)の名称があり、2斗未満の貯蔵具では、壺・瓶類を含むさらに多くの器名 に分けられる。

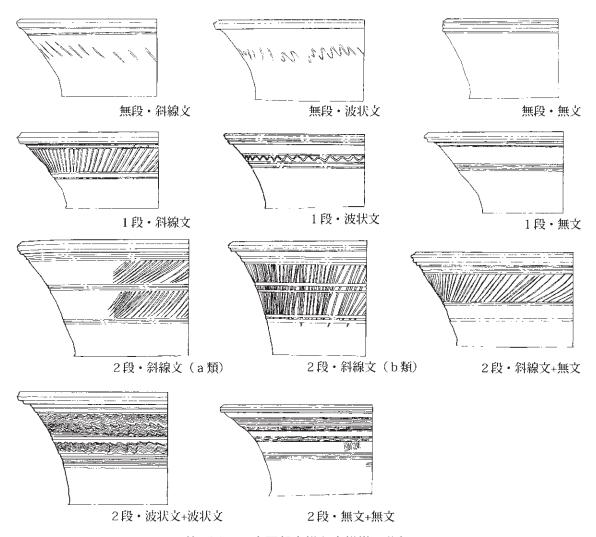
以上、分析資料における法量および容量と、甕類に関する古器名との対応関係を検討してきた。 もっとも、分析資料はそのほとんどが7世紀中葉までのものであり、直接的な対応関係を強調する ことはできない。しかし、1石以上の中大型甕とそれより小さな甕とが明瞭に区別されていたと考 えられる点からみて、古墳時代以来の甕における作り分けを基礎として、律令期にさらなる器種分 化がなされた可能性があろう。

(3) 甕の特徴と用途

(i) 甕文様の分類

ここでは、牛頸窯跡群出土の甕について、頸部とそこに施された文様の特徴などから分類を試みたい。先に検討したとおり、器形全体を復元できる甕については、口径と器高との関係から、5つに分類することができた。しかし、窯跡および灰原出土品に限定してみれば、大部分が破片の状態で出土しており、胴部形態を復元できるものは少数の個体のみである。これに対して、頸部以上では、口径を復元できる破片が一定量出土していることから、頸部を対象として検討をおこなうことができる。

まず、口径と頸部との相関について検討すると、口径30cm、頸部高7cm 付近を境として、a) 口径30cm 未満、頸部高7cm 未満の甕と、b) 口径30cm 以上、頸部高7cm 以上約20cm 未満の甕とに大きく分けられた(第129図)。ただし、口径30cm 未満であっても、頸部高が10~20cm 程度の甕がわずかにある。また、口径との関係から、a) 頸部高7cm 未満の甕については、i) 口径10cm 以上17cm 未満、ii) 口径17cm 以上30cm 未満に分けられ、b) 頸部高7~20cm 程度の



第130図 甕頸部文様と文様帯の分類

甕については、iii)口径30cm 以上42cm 未満、iv)口径42cm 以上53cm 未満、v)口径53cm 以上61cm 未満に分けられた。なお、これら i) ~ v) に該当する各甕の容量は、先の分析から 推定すると、 i)約15 ℓ 未満、 ii)25 ~ 45 ℓ 、iii)約70 ~ 160 ℓ 、iv)約175 ~ 270 ℓ 、 v)約300 ~ 500 ℓ となる。

次に、甕頸部の特徴についてみていきたい。とりわけ、牛頸窯跡群における口径30cm以上の中 大型甕の中には、頸部に文様帯をつくり、そこに連続斜線文や波状文などの文様を施すものが多く 認められる。ここでは、甕に施される文様および文様帯の特徴について分類を試みたい。

これらの文様および文様帯において、長い頸部に文様帯をつくらない無段のものと、文様帯1段のもの、2段(以上)のものに分けられる。そして、文様帯と口径および頸部高との関係をみると、文様帯が無段または1段の個体は、口径30~60cmと大小の幅はあるものの、頸部高は7cmから15cmの間に集まるのに対して、文様帯2段(以上)の個体は、口径40cm以上で、頸部高約13cmから20cmの間に集まることがわかる(第129図)。すなわち、文様帯無段または1段の個体は、頸部が低く、文様帯2段(以上)の個体は、頸部が高い傾向があることを説明できる。ただし、口径については、文様帯無段または1段の個体でも大小のヴァリエーションがあることが指摘でき

第21表 窯内における頸部文様と文様帯各分類の共伴状況

		無段				1.	段				2段	以上	:		
遺構名	時期	斜線文	波状文	無文	斜線文	波状文	無文	その他	斜 斜 a		斜無	波波	無無	その他	計
野添6号窯跡	ШA											1			1
惣利1号窯跡	III B∼IVA								2			1			3
中通C窯	III B∼IVA				1			1							2
平田F-1窯	III B∼IVA								2						2
後田45地点灰原	IVA				1				2						3
小田浦33- I 号窯跡	IVA				2				1						3
小田浦37- I 号窯跡	IVA				1				2	5					8
中通A-2窯	IVA				1										1
中通B窯	IVA				2										2
野添2次2号窯跡	IVA				1	1									2
野添4次1号窯跡	IVA				2										2
野添6次灰原	IVA				9				7						16
野添7次1号窯跡	IVA				2				1						3
後田46地点灰原	IVA~IVB				1						1				2
後田63地点灰原	IVA~IVB				2										2
小田浦38- I 号窯跡	IVA~IVB				1				1						2
春日平田東窯跡	IVA~IVB				3	1									4
神ノ前2号窯跡	IVA~IVB				1				1		1				3
小田浦28地点	IVA∼ V				2										2
惣利9号窯跡	IVA∼ V			1	2										3
月ノ浦 I 号窯跡	IVA∼ V				4										4
平田E-1窯	IVA∼ V					1	1		1						3
小田浦40-Ⅰ号窯跡	IVB				1		1								2
中通D-1窯	IVB				4	1									5
ハセムシ1-Ⅲ号窯跡上方灰原	IVB∼ V			1											1
浦ノ原4号窯跡	IVB∼ V					2	1								3
小田浦39- I 号窯跡	IVB∼ V						1								1
野添7次2号窯跡	IVB∼ V	2	1	1	13		1				1		3	1	23
大浦窯跡	V				1										1
宮ノ本4号窯跡	$V \sim VIA$			3	1	2									6
後田61-IV号窯跡下方灰原	VI~VII					1									1
後田66- I 号窯跡灰原	VI~VII					1									1
ハセムシ12地区最下段下層灰原	VI~VII		1	14											15
ハセムシ18地区灰原	VII			1											1
ハセムシ22-Ⅱ 号窯跡	VII			1											1
ハセムシ27地区灰原	VII		1												1
浦ノ原1号窯跡	VII			1											1
長者原66号窯上部土壙	VII			1											1
井手4~9号窯灰原	VII			2											2
足洗川34~37号窯灰原	VII			9											9
石坂E地点3号窯	VIII			4											4
計		2	3	39	58	10	5	1	20	5	3	2	3	1	152

よう。

このことから、中大型甕の製作に際しては、その製作工程の最初の段階において、口頸部の長さおよび容量の大きさがある程度決定されており、それと同時に、口頸部に文様帯を入れるかどうかの選択もおこなわれた可能性が高いといえよう。

一方、文様の種類をみると、文様帯が無段または1段の場合、連続斜線文、波状文、無文の大きく3種類がみられ、文様帯2段(以上)の場合、各段の文様の組み合わせにより、連続斜線文+連続斜線文、連続斜線文+無文、波状文+波状文、無文+無文の大きく4種類がみられる(第130図)。そして、連続斜線文の施文方法には、沈線を廻らせて文様帯をつくった後、その間に斜線文を施すものと、あらかじめ斜線文を施した後、沈線を廻らせて文様帯をつくるものの大きく2通りがあり、同一窯内でも方法が異なる場合がある。とりわけ、文様帯2段に連続斜線文を施す個体の場合、上の2通りの方法によって、各段にそれぞれ連続斜線文を施文するのが通常であるが(a 類)、小田浦

37-I号窯跡例のように、あらかじめ長い連続斜線文1本を施文した上で、その上下と真ん中の沈線を入れて、2段の文様に見せかけるもの(b類)もみられる。

このように、甕頸部に施される文様および文様帯の分類をおこなったが、その上で、各窯跡から出土する甕の特徴をみていくと、文様帯1段および2段の場合ともに、連続斜線文を施す個体が非常に多いことがわかる(第21表)。この連続斜線文は、 \blacksquare B 期または \blacksquare A 期に出現し、 \blacksquare B 期のものは精緻に施文で確認できる。これに対して、波状文を施す甕は少量であり、 \blacksquare A \blacksquare B 期のものは精緻に施文されるのに対して、 \blacksquare A 期以降は一本の沈線を波状に施しただけの「波状沈線」とでも呼ぶべき粗雑な施文が多くなる。このような波状文および波状沈線は、 \blacksquare 期になっても少量ながら確認できる。

また、窯内における文様帯各分類の共伴状況をみると、文様帯1段および2段の個体両方が窯跡1 基の中から確認される場合も多く、野添6次灰原ではほぼ同程度の数が認められる。一方で、小田 浦37-I号窯跡例のように、文様帯2段のものを主体とする窯跡や、野添7次2号窯跡例のように、 文様帯1段のものしか確認できない窯跡も存在する。この野添7次2号窯跡からは、連続斜線文を主 体としながらも多種多様な文様が確認されている。

なお、連続斜線文の施文方向をみると、文様帯2段の個体では、すべて左下がりの連続斜線文を施すが、文様帯1段の個体の場合、連続斜線文58点のうち、左下がりの斜線文が43点、右下がり8点、沈線と垂直方向に施すもの7点がみられる。右下がりのうちの7点は、野添7次2号窯跡から出土しており、同一の窯内における連続斜線文は、ほぼ同一の施文方向をとることが多いものの、異なる施文方向をとる場合もあったことを示している。

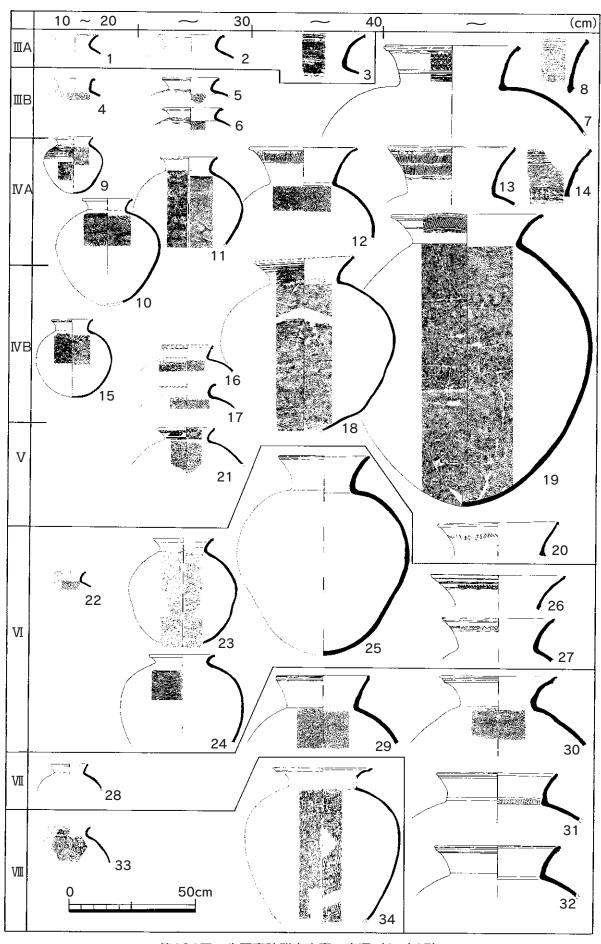
以上のように、牛頸窯跡群の甕頸部に施される文様について、大まかな傾向は把握することができた。しかし、窯内での文様の種類や施文方法をみると、同一の窯内でもヴァリエーションが存在することもわかった。これを製作に携わる工人の差とみることもできようが、口縁部形態との関係などの分析を踏まえて解釈する必要があろう。

(ii) 牛頸窯跡群における甕の変遷

以上の検討をもとに、牛頸窯跡群から出土する甕の変遷をみていくと、第131図のようになる。 ただし、甕の形態自体の型式学的検討を試みていないため、時期については従来の編年観に従って おり、詳細な甕の型式変化を把握することはできなかった。ここでは、甕の変遷を概観するにとど めておきたい。

Ⅲ A期は、野添6号窯跡出土品に限られるため、資料数は少ない。口径30cm 以上の中型甕 (2) の口頸部には、波状文を精緻に施している。これに近い時期の御陵3号墳出土品 (第121図の35) が精緻な波状文を2段に施すことからも、この時期には、頸部文様として波状文を施すのが主流であったと考えられる。Ⅲ B 期になって、連続斜線文を施す甕が出現すると推定されるが、その他に斜格子状の文様を入れる大型甕 (7) も認められる。

IVA期からV期にかけて、牛頸窯跡群における甕の出土事例は増加し、口縁部形態や文様などのヴァリエーションも多様になる。そして、容量あるいは法量の分析でみたとおり、製品を5種類



第131図 牛頸窯跡群出土甕の変遷(1/15)

程度の大きさに作り分ける状況も明瞭に認められるようになる。口縁部形態では、端部をやや厚手に幅広くつくり、沈線を $1\sim2$ 条程度巡らすものがみられるほか(13)、口唇部や文様間にボタン状に粘土を貼り付ける個体(14)もみられる。それに比べて、小型甕の多くは、口縁端部を粘土帯によって肥厚させるだけのものが多いが、面取りは丁寧におこなっている。

また、中大型甕の頸部文様をみると、連続斜線文を施文する個体が主体を占めるようになり、波 状沈線 (20) を施文する個体も少量ながらみられる。そして、頸部への施文は、VI期以降に連続 斜線文がみられなくなるものの、波状文はその後もわずかながら継続し、VII期まで認められる。

VI期における中大型甕の頸部は、無段無文のものが主流となり、口縁部も肥厚させず薄手につくるものが多くなる。波状文または波状沈線は少量みられるにすぎないが、頸部は長くつくる。VII期前半になっても、中大型甕の頸部は無段無文が続くが、牛頸ハセムシ窯跡群12地区灰原出土の大甕のように、頸部に調納と関係する文字を刻書する個体もみられる。その後、VII期後半には、甕の製作がほとんどおこなわれなくなる。

しかし、WI期になると、石坂 E 地点では再び甕の生産をおこなっている。この石坂 E 地点出土の甕は(第131図の34)、二重口縁大甕と呼ばれるもので、肥後の工人との関わりも指摘されている〈註9〉。

以上から、牛頸窯跡群から出土する甕の変遷をまとめると、次のようになる。すなわち、Ⅲ B期における連続斜線文の出現とⅣ A 期における器種の大小による作り分けを経て、Ⅵ期には頸部が無文化するとともに、器種も少なくなり、Ⅷ期後半に甕生産の終焉を迎える。その後、Ⅷ期には肥後との関係をもつ二重口縁大甕が一部で製作される。

(iii) 甕の使用状況

ここでは、主に古墳出土の甕を対象として、その用途について考えてみたい。すでに多くの研究があるように、古墳出土の須恵器については、「ヨモツヘグイ」のような葬送儀礼〈註10〉や「コトドワタシ」のような祭祀儀礼〈註11〉に使用されたと考えられている。また、実際の古墳からの須恵器の出土状況についても検討がなされ、墳丘で顕著にみられる大甕を掘り据える行為には、饗膳儀礼が含まれていたことが指摘されている〈註12〉。さらに、福岡市堤ヶ浦古墳群や大分県中津市上ノ原横穴墓群等の事例にみられるように、6世紀後半頃以降、墳丘上に甕等を単体で埋める「埋甕」とともに、甕を破砕する行為が確認されており、使用される甕には底部穿孔のものが多いことが指摘されている。また、破砕された甕片が古墳の墳丘各所や、他の古墳および横穴周辺にばら撒かれる「破砕散布」の行為も確認されている〈註13〉。

さて、大野城市内の古墳における甕の出土状況をみると(第22表)、堤ヶ浦古墳群に近接した丘陵上に位置する御陵3号墳は、墳丘東側中位付近において、Ⅲ A 期の大甕(第121図の35)が広口壺、横瓶とともに埋置された状態で出土している。いずれも底部穿孔してあり、大甕は埋甕状態で置かれた後、破砕されたとみられることから、6世紀中頃には甕を使用した祭祀儀礼がおこなわれたと考えられる(第132図)。また、胴ノ元古墳のⅢ B ~Ⅳ A 期の大甕(第121の37)は周溝埋土中から出土したが、墳丘上に置かれたものが転落した可能性もあろう。このように、Ⅴ期以前におい

第22表 大野城市内における消費地出土の中大型甕

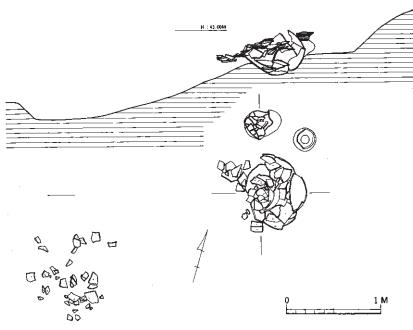
遺構	遺跡・遺構名	位置	口径 (cm)	器高 (cm)	報告書の 図番号	報告書
	御陵3号墳	墳丘東側	53.2	93	第23図	大野城市教育委員会1984『御陵古墳群』大野城 市文化財調査報告書第13集
	王城山C5号墳	墳丘北西裾	45.5	84.5	Fig.24	福岡県教育委員会1977『九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告IX』
	王城山C8号墳	西南側墳丘中	55.4	85	Fig.33-3	同上
	王城山C9号墳	西南側墳丘中	40.6	59.2	Fig.37	同 上
古	胴ノ元古墳	周溝埋土中	[56.0]	[99.2]	第10図	大野城市教育委員会1993『牛頸胴ノ元古墳』大 野城市文化財調査報告書第38集
墳	後田4号墳	羨道~墓道	40.6	[77.8]	第35図17	大野城市教育委員会1992『牛頸後田・小田浦古 墳群』大野城市文化財調査報告書第36集
	後田6号墳	墳丘	42	82.8	第55図62	同上
	後田6号墳	墳丘	[59.5]	_	第55図63	同 上
	日ノ浦1号墳	古墳	[48.0]	_	第188図4	大野城市教育委員会1994『牛頸日ノ浦遺跡群』 大野城市文化財調査報告書第42集
	日ノ浦1号墳	古墳	[37.8]	[69.0]	第189図6	同上
	日ノ浦1号墳	古墳	[42.4]	[58.2]	第189図7	同上
	仲島遺跡X	大溝SD13	38.8	67.6	第28図182	大野城市教育委員会1992『仲島遺跡X』大野城市文化財調査報告書第34集
	仲島遺跡X	大溝SD13	36	65	第28図183	
そ	塚原遺跡	SK15埋土中	[39.0]		第164図4	大野城市教育委員会1995『牛頸塚原遺跡群』大野城市文化財調査報告書第44集
0	日ノ浦遺跡	大溝	[37.2]	_	第152図200	大野城市教育委員会1994『牛頸日ノ浦遺跡群』 大野城市文化財調査報告書第42集
他	日ノ浦遺跡	大溝	[52.6]		第153図202	
	日ノ浦遺跡	大溝	38.4		第153図203	
	日ノ浦遺跡	大溝	[37.2]		第153図204	同上

て、いずれも1石を超えるような中大型甕は、墳丘上での祭祀儀礼に用いられることが多かったと みられる。

さらに、墳丘における出土位置について、王城山 C 古墳群〈註14〉の事例から考えてみると(第133図)、C5号墳では、墳丘北西裾に中大型甕、南西裾に壺を据えるが、このうち甕は、C2号墳周溝付近出土の小片が接合することから、先述した破砕散布の可能性が考えられる。同様に、C9号墳出土の中大型甕についても、その小片がC6号墳北側周溝中やC4号墳西側周溝中から出土している。これも破砕散布と考えられよう。また、C7号墳では、小型甕が北側の墳丘中から出土したほか、墓道から破砕された甕が出土しており、墳丘南裾で出土した坩は、その破片が11号墳周溝中からも出土した。そして、C8号墳の東南側墳丘中からも、据えた状態で破砕された大型甕が出土している。

このように、大甕は、埋置および破砕や、破砕散布など、古墳祭祀の中で使用されたことが確認されるが、先に検討したように、V期以前の中大型甕の口頸部において、連続斜線文や波状文などの文様が施され、装飾的要素をもっていることも、このような行為と無関係ではないだろう。

一方、大野城市内の古墳以外の遺跡において、甕が出土する状況をみると、溝や土壙などから出土する事例の多いことがわかる。すなわち、牛頸周辺では日常的に須恵器甕が使用される場合も多かったとみられる。日ノ浦遺跡20号住居跡では、住居内から小型の須恵器甕が出土している。しかし、容量が1石(約83ℓ)を超すような(口径約40cm以上の)大甕は、住居跡や集落内から



第132図 御陵3号墳·墳丘東側中位須恵器出土状況 (『御陵古墳群』1984より)

はほとんど出土しない。1石に近い容量をもつ甕が出土する事例としては、仲島遺跡の大溝 SD13から出土した、連続斜線文を施文する中型甕2個体(第121図の29・30)があり、それぞれの容量は66.78ℓと74.99ℓに算出できる。ただ、これらの甕が出土したSD13からは、移動式竈と滑石製模造品、それに馬の下顎骨や歯が出土しており、犠牲馬祭祀との関わりも指摘されている〈註

15〉。このことから、古墳時代の大甕は、日常的な貯蔵具として使用されたことは否定できないものの、主に古墳あるいは集落における祭祀儀礼のために製作された可能性が高いと考えられる。

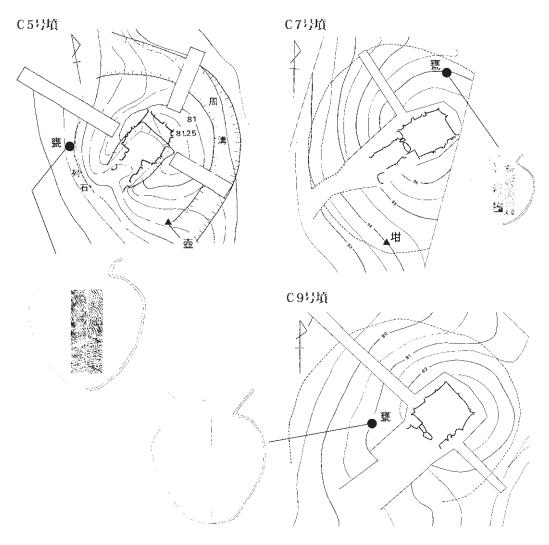
ところで、律令期になると、8世紀中頃~後半以降、牛頸窯跡群においては甕の生産が行われず、蓋杯を中心とする小型器種の生産が主体となること、8世紀後半から9世紀初頭に大宰府等で出土する二重口縁大甕は肥後産の可能性が高いということが指摘されている〈註16〉。そして、その用途は、醸造・貯蔵に使用する以外に、『延喜式』神祇八の祝詞に登場する「瓱」や、同神祇七の践祚大嘗祭の「由加」の記載にみられるように、大嘗祭等の祭祀の場において大甕の使用があったことが指摘されている〈註17〉。しかしながら、大野城市内およびその周辺の遺跡から、このような祭祀の場における大甕使用の痕跡を顕著な形で示すような遺構は確認されていない。

とはいえ、牛頸窯跡群における大甕生産は、古墳時代の段階では祭祀儀礼との関係があり、そのような関係は、律令期に至るまで継続したとみてもよかろう。

(4) おわりに

牛頸窯跡群およびその周辺遺跡から出土する甕について、容量や頸部文様、使用状況等の点から検討してきた。再度、本節の要点を整理すれば、以下の4点にまとめることができよう。

- 1. 牛頸窯跡群およびその周辺遺跡から出土する甕は、法量と容量からみて、5種類程度の大きさに分けられる。とくに、6世紀後半~7世紀前半には、甕の出土量が最も多く、大きさによる作り分けが顕著にみてとれる。
- 2. このような作り分けは、律令期の『延喜式』などにみられる古器名や容量とも対応することから、 古墳時代の甕の作り分けが、律令期の規格の基礎となった可能性も考えられる。ただし、牛頸 窯跡群では、8世紀後半以降、ほとんど甕生産をおこなっていない。
- 3.6世紀後半~7世紀前半において、牛頸窯跡群で製作された中大型甕の頸部には、文様帯を作



第133図 墳丘における甕の出土状況(王城山C古墳群、墳丘:1/200、須恵器:1/4) (『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告IX』1997より作成)

り連続斜線文を施すものが多い。しかし、7世紀後半になると頸部は無文化するようになり、8 世紀前半には、頸部に調と関係する文字を刻書する事例がみられる。

4. 牛頸周辺遺跡における大甕の出土状況をみると、古墳時代には古墳墳丘上に据え置き、破砕するなど、祭祀儀礼との関係が指摘できる。また、古代には、溝などから出土することが多く、これにも祭祀とのかかわりが想定される事例がある。このことから、大甕は通常の貯蔵などの用途もあったが、祭祀儀礼に使用するため製作される場合が多かったとみられる。

以上のように、牛頸窯跡群から出土する甕の特徴について整理をおこなってきたが、甕の形態的 特徴にもとづく型式学的な検討は今回おこなっていない。また、製作技法上の特徴、すなわち外面 のタタキ痕や内面の当て具痕などからの検討もおこなっていない。これらの点は、今後の課題とし ておきたい。

- 註1. 同様な方法は、すでに下記の論考でも試みられている。なお上村憲章氏は、トレース図面をスキャナでコンピュータ 上に取り込み、画像処理ソフトを用いて測定する方法をとるが、原理としては全く同じであると考えていい。しかし、 本報告では、より正確な数値が期待できる原図にもとづいて、容量の計測をおこなうこととする。 藤村東男「土器容量の測定-晩期縄文式土器を例として一」『考古学研究』第28巻第3号 1981 上村憲章「容量から見た甕」『瓦衣千年』森郁夫先生還曆記念論文集 1999
- 註2. 前掲註1、藤村1981文献。
- 註3. 石木秀啓「九州の須恵器生産ー特に8世紀以降を中心としてー」第7回西海道古代官衙研究会資料集 2004
- 註4. 異淳一郎「奈良時代の**瓱・瓼・正・**由加一大型貯蔵用須恵器の器名考証-」『文化財論叢II』 奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集 1995
- 註5. 篠原俊治「日本古代の枡」『平安京右京五条二坊九町・十六町』京都文化博物館報告第7集 1991 なお、現在の尺貫法では1石=10斗=180.39リットル(ℓ)とし、1斗=10升、1升=10合というふうに規定されている。
- 註6. 前掲註4. 文献
- 註7. なお、8世紀後半の宗像市三郎丸今井城遺跡では、「由加主□」の文字を刻む甕が出土している(宗像市教育委員会 1993『宗像市史』通史編・第1巻)。
- 註8. 前掲註4. 文献
- 註9. 前掲註3. 文献
- 註10. 小林行雄「黄泉戸喫」『考古学集刊』第2冊 1949
- 註11. 白石太一郎「ことどわたし考-横穴式石室の儀礼をめぐって-」『橿原考古学研究所論集』創立35周年記念 1975
- 註12. 亀田博「後期古墳に埋納された土器」『考古学研究』第23巻4号 1977
- 註13. 福岡市教育委員会『堤ヶ浦古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第151集 1987 村上久和・吉留秀敏「上ノ原横穴墓群における葬送儀礼の諸相」『上ノ原横穴墓群II』一般国道10号線中津バイパス 埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 大分県教育委員会 1991
- 註14. 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告IX』 1977
- 註15. 大野城市教育委員会『仲島遺跡VI』大野城市文化財調査報告書第20集 1987 大野城市教育委員会『仲島遺跡X』大野城市文化財調査報告書第34集 1992
- 註16. 前掲註3.
- 註17. 前掲註3.

第23表 分析資料の法量一覧

No	遺跡・遺構名	報告書	図番号	口径	器高	頸部径	胴部最 大径	胴部高	容量1 (Q)	容量2 (ℓ)	当時の度 量衡	時期	残存
1	野添窯跡群6次 灰原	第69集	20頁107	[13.9]	18. 2	[9. 4]	[19.8]	12.4	2.65	2. 39	2升9合	IVA	0
2	出口遺跡西側 斜面	第28集	13頁58	[13. 2]	[18. 1]	11.7	18.3	[15.6]	3.03	2. 62	3升2合	VII?	Δ
3	小田浦28地点 灰原	第39集	74頁101	13. 5	19.8	11.9	22	17. 3	3, 52	3. 22	3升9合	IVA \sim V	0
4	仲島遺跡X SD13	第34集	39頁172	[13. 4]	22. 1	12	23. 1	17. 4	4. 5	3. 99	4升8合	IIIB∼V	0
5	後田45地点灰 原	第33集	51頁134	15	22.6	12.8	[23. 3]	19.8	5. 18	4. 86	5升9合	IVA	0
6	日ノ浦遺跡大 溝	第42集	134頁124	16. 3	[22. 2]	11.9	24	[18.7]	5. 76	5. 18	6升2合	$IV \sim V$	Δ
7	後田7号墳周溝	第36集	71頁16	17.8	23.5	14. 1	24. 2	19.6	6. 11	5. 73	6升9合	II B∼ I VA	0
8	日ノ浦遺跡20 号住居跡	第42集	49頁6	17	27. 2	14. 2	25. 2	23.4	7. 07	6. 41	7升7合	IVA	0
9	後田63- I 号窯 跡焚口	第33集	79頁40	16. 3	31. 1	13. 1	29. 5	26. 7	13. 11	12. 51	1斗5升1 合	IVA~IVB	0
10	仲島遺跡X SD13	第34集	40頁181	[19. 0]	[35.0]	[16.0]	[28.8]	[30.9]	12.4	11. 43	1斗3升8 合	II B∼V	Δ
11	小田浦33- I 号 窯跡灰原	第35集	49頁50	20. 1	[42.5]	15. 3	41.3	37. 9	29. 71	28. 6	3斗4升5 合	IVA	Δ
12	小田浦37- I 号 窯跡焼成部	第35集	53頁54	[22.8]	[40.7]	[18.9]	41.1	36. 4	33. 66	32. 12	3斗8升7 合	IVA	Δ
13	仲島遺跡V・ 大溝	第17集	24頁121	21.5	39. 9	16.6	39. 6	35. 5	26. 28	25. 4	3斗6合	шв∼ v	0
14	日ノ浦遺跡大 溝	第42集	第154図 210	25	46.6	18	44	41.8	38. 08	36. 04	4斗3升9 合	$IV \sim V$	0
15	上園遺跡 I ・ 土坑	第18集	12頁15	25. 7	45. 4	19. 4	41.3	42.5	31. 34	29. 08	3斗5升	III A	0
16	塚原19号墳周 溝	第44集	211頁4	20.8	45. 2	16.4	40.4	41	32. 13	31. 01	3斗7升4 合	шв?	0
17	日ノ浦遺跡大 溝	第42集	第154図 206	20	[42.8]	16.8	[42.2]	[39. 3]	33. 44	32. 4	3斗9升	$IV \sim V$	0
18	仲島遺跡Ⅱ・6 区大溝	第6集	11頁31	24	47	17. 5	41.2	41.6	34. 39	32. 9	3斗9升6 合	II B∼V	0
19	日ノ浦遺跡大 溝	第42集	第154図 207	[23, 8]	[23.0]	18.4	[21.5]	[18. 2]	34. 65	32. 94	3斗9升7 合	$IV \sim V$	Δ
20	日ノ浦遺跡大 溝	第42集	第154図 208	21.4	[45.0]	17.8	44. 2	[40.4]	43. 31	41. 91	5斗5合	$IV \sim V$	Δ
21	上園遺跡Ⅱ・ SD13	第18集	19頁57	22. 5	[48.6]	17. 1	[45.7]	43. 9	45. 17	43. 74	5斗2升7 合	ша∼шв	
22	仲島遺跡VI・ 大溝	第20集	21頁84	20. 1	[46.0]	17	44.6	43.7	35. 76	34. 75	4斗1升9 合	IIIB∼V	0
23	仲島遺跡X・ SD13	第34集	40頁180	23. 9	[49.8]	19.6	[45. 2]	[44.7]	43. 37	41. 27	4斗9升7 合	IIIB∼V	0
24	日ノ浦遺跡大 溝	第42集	第154図 209	20.9	[43.8]	15.8	45.6	[39.8]	42. 35	41. 34	4斗9升8 合	$IV \sim V$	Δ
25	野添窯跡群8次 SX01	第69集	36頁186	23. 6	49. 2	19. 9	44. 1	44	44. 58	42. 5	5斗1升2 合	IV	0
26	後田45地点灰 原	第33集	53頁146	24	[52.0]	20	48.6	[46.6]	44. 27	42. 55	5斗1升3 合	IVA	0
27	日ノ浦遺跡大 溝	第42集	第154図 211	30. 6	[62. 1]	20.5	49. 9	[53. 2]	71. 34	67. 77	8斗1升7 合	$IV \sim V$	0
28	日ノ浦遺跡大 溝	第42集	第154図 212	[30. 5]	65. 4	23. 2	[55. 6]	60. 2	72. 95	68. 77	8斗2升9 合	$IV \sim V$	0
29	仲島遺跡X・ SD13	第34集	41頁183	36	65	22. 2	55. 4	50.8	74. 31	66. 78	8斗5合	II B∼V	0
30	仲島遺跡X・ SD13	第34集	41頁182	38.8	67.6	27. 2	53. 4	62.5	81. 25	74. 99	8斗9升8 合	II B∼V	0
31	野添窯跡群7次 2号窯跡灰原	第70集	36頁212	39. 3	[69. 3]	27.8	69	[59. 9]	158. 38	150. 57	1石8斗1 升6合	IVB∼V	\triangle

No	遺跡・遺構名	報告書	図番号	口径	器高	頸部径	胴部最 大径	胴部高	容量1	容量2 (Q)	当時の度 量衡	時期	残 存
32	仲島遺跡VI・ SD13	第20集	28頁130	43. 4	84	36. 6	72. 4	75. 4	192. 89	181. 72	2石1斗9 升	шв∼ V	0
33	後田6号墳	第36集	65頁62	[43.8]	[82.8]	[15.0]	[75.0]	76. 3	172. 04	161. 97	1石9斗5 升2合	IIIB∼V	
34	小田浦37- I 号 窯跡	第35集	56頁87	51.1	[90.0]	38. 3	[80.0]	[84.4]	267. 72	248. 66	2石9斗9 升6合	IVA	
35	御陵3号墳	第13集	19頁23	53. 2	93	34	79. 2	78. 2	258. 9	240. 41	2石8斗9 升7合	III A	0
36	野添窯跡群7次 2号窯跡灰原	第70集	42頁323	[60. 6]	115. 4	[43. 4]	[99.3]	103. 9	484. 2	462. 99	5石5斗7 升9合	IVB∼ V	
	胴ノ元古墳	第38集	17頁10	[56. 0]	[99. 2]	[21. 2]	[85. 6]	[89. 9]	304. 85	279. 12	3石3斗6 升3合	IIIB∼IVA	Δ

- ・[数字]は復元値または推定値。 ・「容量1」は口縁部までの容量。「容量2」は頸部付け根までの容量。 ・当時の度量衡は「容量2」をもとに算出。

第131図遺物出典

番号	遺 跡 ・ 遺 構 名	文献
1.	野添 6 号窯跡	小田富士雄・柳田康雄編『野添・大浦窯跡群』福岡県教育委員会 1970
2.	野添 6 号窯跡	小田富士雄・柳田康雄編『野添・大浦窯跡群』福岡県教育委員会 1970
3.	野添 6 号窯跡	小田富士雄・柳田康雄編『野添・大浦窯跡群』福岡県教育委員会 1970
4.	惣利1号窯跡灰原	丸山康晴・平田定幸編『春日地区遺跡群Ⅰ』春日市教育委員会 1982
5.	惣利1号窯跡灰原	丸山康晴・平田定幸編『春日地区遺跡群Ⅰ』春日市教育委員会 1982
6.	惣利1号窯跡灰原	丸山康晴・平田定幸編『春日地区遺跡群Ⅰ』春日市教育委員会 1982
7.	中通C窯	副島邦弘・舟山良一編『牛頸中通遺跡群』大野城市教育委員会 1980
8.	惣利1号窯跡灰原	丸山康晴・平田定幸編『春日地区遺跡群Ⅰ』春日市教育委員会 1982
9.	後田45地点灰原	舟山良一編『牛頸後田窯跡群』大野城市教育委員会 1991
10.	小田浦33- I 号窯跡灰原	舟山良一編『牛頸小田浦窯跡群』大野城市教育委員会 1992
11.	野添6次灰原	石木秀啓編『牛頸野添遺跡群Ⅲ』大野城市教育委員会 2006
12.	小田浦33- I 号窯跡灰原	舟山良一編『牛頸小田浦窯跡群』大野城市教育委員会 1992
13.	小田浦37- I 号窯跡灰原	舟山良一編『牛頸小田浦窯跡群』大野城市教育委員会 1992
14.	小田浦38- I 号窯跡灰原	舟山良一編『牛頸小田浦遺跡群』大野城市教育委員会 1993
15.	後田63-I 号窯跡焚口B床面	舟山良一編『牛頸後田窯跡群』大野城市教育委員会 1991
16.	小田浦38 - I 号窯跡灰原	舟山良一編『牛頸小田浦遺跡群』大野城市教育委員会 1993
17.	小田浦38 - I 号窯跡灰原	舟山良一編『牛頸小田浦遺跡群』大野城市教育委員会 1993
18.	野添7次2号窯跡灰原	石木秀啓編『牛頸野添遺跡群IV』大野城市教育委員会 2006
19.	野添7次2号窯跡灰原	石木秀啓編『牛頸野添遺跡群IV』大野城市教育委員会 2006
20.	野添7次2号窯跡灰原	石木秀啓編『牛頸野添遺跡群IV』大野城市教育委員会 2006
21.	野添7次2号窯跡灰原	石木秀啓編『牛頸野添遺跡群IV』大野城市教育委員会 2006
22.	浦ノ原4号窯跡	平田定幸・丸山康晴編『浦ノ原窯跡群』春日市教育委員会 1981
23.	宮ノ本4号窯跡灰原	山本信夫・中島恒次郎『宮ノ本遺跡Ⅱ-窯跡篇-』太宰府市教育委員会 1992
24.	後田61地点IV号窯跡下方灰原	舟山良一編『牛頸後田窯跡群』大野城市教育委員会 1991
25.	宮ノ本4号窯跡灰原	山本信夫・中島恒次郎『宮ノ本遺跡Ⅱ-窯跡篇-』太宰府市教育委員会 1992
26.	後田66-I号窯跡灰原	舟山良一編『牛頸後田窯跡群』大野城市教育委員会 1991
27.	後田61地点IV号窯跡下方灰原	舟山良一編『牛頸後田窯跡群』大野城市教育委員会 1991
28.	足洗川34~37号窯跡灰原	池辺元明編『牛頸窯跡群 I 』福岡県教育委員会 1988
29.	ハセムシ窯跡群12地区灰原	中村浩編『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ』大野城市教育委員会 1989
30.	ハセムシ窯跡群12地区灰原	中村浩編『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ』大野城市教育委員会 1989
31.	井手4号窯跡	池辺元明編『牛頸窯跡群Ⅱ』福岡県教育委員会 1989
32.	足洗川34~37号窯跡灰原	池辺元明編『牛頸窯跡群 I 』福岡県教育委員会 1988
33.	石坂E地点3号窯跡灰原	石木秀啓編『牛頸石坂窯跡群-E地点-』大野城市教育委員会 1997
34.	石坂E地点3号窯跡灰原	石木秀啓編『牛頸石坂窯跡群-E地点-』大野城市教育委員会 1997

4. 瓦生産

(1) はじめに

牛頸窯跡群ではV-3で述べたように、須恵器だけではなく6世紀末頃から7世紀前半にかけてのいわゆる初期瓦を焼成した窯跡が10基(可能性のあるものも含めると11基)知られている。これらの瓦を焼く窯では須恵器も焼いているが、焼成状況を示すものはなく、同時に焼いたものか、それぞれ別々に焼いたものか、あるいは先にどちらかを焼成しその後その焼成を完全に止めてどちらかの焼成に移行したものかという点については明確でない。焼成状態はこのように不明であるが、両者とも焼成したことは間違いないであろうことから、瓦陶兼業窯と呼んでいる。ただ、出土数が少ない場合は、野添4次2号窯跡のように、割れ口に降灰の付着が見られることから最終的に焼台として使用されたものがあり、その窯で焼成されたものか不確実なものもある。さらに、表採資料や推定を除くと9基になり、報告書の出ていないものをはずすと8基になる(V-3 第8表)。それらは、地理的には上大利地区に位置する神ノ前2号窯跡・大浦2号窯跡・野添13号窯跡・野添4次2号窯跡のグループと、牛頸地区(平野川支流域)・春日地区に位置する月ノ浦1号窯跡・小田浦28地点・小田浦79-2号窯跡・浦ノ原4号窯跡のグループの2グループに分けられる。前者を上大利グループ、後者を平野川グループと仮称する。

(2) 時期の問題

須恵器から見た窯の操業年代は第24表のようになる。このうち、小田浦28地点は窯本体が検出できず、また須恵器から見て操業期間が長い〈註1〉。浦ノ原4号窯跡も同じく長い。瓦がどの時期に焼かれたのかがわからないため、両者を除いた6基の窯跡を須恵器の編年観から古い順に並べて見て、検討してみたい。瓦の種類や技法も加味したものが第25表である。ただし、小田浦79-2号窯跡はトレンチ調査での出土で、焼成窯については不確定要素がある。この項では、便宜上神ノ前2号窯跡を神ノ前、野添4次調査2号窯跡を野添2、月ノ浦 I 号窯跡を月ノ浦、小田浦79-2号窯跡を小田浦、野添13号窯跡を野添13、大浦2号窯跡を大浦と略称して記述を進めたい。

まず、粘土紐か粘土板を使用するかについては、神ノ前と野添2が粘土紐、月ノ浦が両者、小田浦・野添13・大浦が粘土板である。模骨痕は神ノ前と野添2になく、その他にはある。

製作技法については、表面に残されている最終的な調整等を検討することになる。凹面を見ると 布目が月ノ浦・小田浦・野添13・大浦に見えて、神ノ前には見えない。凸面調整を見ると、凹面 同様月ノ浦以下の4窯跡にタタキが見えるが、神ノ前には見えない。また凹面の同心円文タタキの 有無について見ると、月ノ浦以下の4窯跡に見えて、神ノ前にはない。さらに、狭端部を見ると土 器口縁のように断面を丸く作るものが神ノ前と月ノ浦にあり、その他は角張っている。しかし、面 取りを行っている。

なお、瓦は青灰色をした須恵質のものもあるが、黄灰褐色系の土師質に焼きあがったものも多い。 次に瓦の種類を見ると、熨斗瓦が小田浦・野添13・大浦にあり、その他の窯跡では出土していない。 鴟尾は月ノ浦だけに見え、特殊である。 以上のことから、これら6基の窯跡は須恵器編年観と合わせ2つあるいは3つの段階に分けることが可能になると考える。すなわち、平瓦に布目と模骨痕が見えることは桶巻き作りの証拠であることから、本格的な瓦製作技術の導入と生産が始まったと見て、神ノ前・野添2の初期段階と月ノ浦・小田浦・野添13・大浦の確立段階の2つに分ける方法と、月ノ浦の場合は粘土板と粘土紐の両者があり、また、狭端部断面が土器のように丸いものがあることから初期段階から確立段階への過渡期としてこれを独立させて、神ノ前・野添2の初期段階、月ノ浦の過渡的段階、小田浦・野添13・大浦の確立段階の3つに分ける方法である。この場合、須恵器から見ると時期的には過渡的段階から確立段階はそれほど間を置かずに推移したものと考える。本報告書では、初期瓦についてはまだまだ検討しなければならないことが多いことから、あまり細かな設定はせず2つの段階に分ける立場を取っておきたい。また、確立段階という言葉も、あくまでも相対的に見た場合であって、暫定的な確立段階という表現の方が正しいと考える。製作された時期を確定させることは焼成状況が不明なことから困難であるが、須恵器から6世紀末頃から7世紀前半頃のどこかということになる。

(3) 検討

以上述べてきたことが的を得たものであるなら、これらの瓦陶兼業窯は位置的に上大利グループと平野川グループの2つのグループに分けられるが、須恵器の年代や瓦の種類と技法などから見ると、グループを越えておおむね発展段階的に並べることが可能であることを示している。このことから、製作に当たった工人は複数グループあったが、それぞれが独自の技術を確立するほど独立したものではなく、指導体制としては一系列的な状況を想定したい。

月ノ浦窯跡群出土瓦の整理報告を担当された栗原和彦氏はその報告書〈註2〉の中で、「私見ではあるが」、神ノ前の瓦は「土器と同じように作られた瓦で瓦製作の最も初期の段階」であり、大浦の瓦は「粘土板桶巻き作りの一応完成された技術が導入されたように見える」、月ノ浦の瓦は「大浦窯の瓦に比較すると稚拙」とされている。しかし、栗原氏は同時に「瓦の製作法を知っている技術者の集団それぞれがグループを異にしているのではないかという気がしてならない」と述べていて、時期差とは断定されていない。つまり神ノ前・月ノ浦・大浦と技術が確立していくように見えるが、年代的にも接近していることから、それぞれが別のグループで作られる可能性を説かれている。これについては前述のように地理的なグループを越えて発展段階が整理できるし、共伴須恵器もおおむねその順に考えることができることから栗原氏が言う技術確立への(ように見える)様相をそのまま時期的な違いと見ることが可能と考える。そして、牛頸窯跡群では需要に応じて瓦の生産も行ったが、消費地としての遺跡が少ないことや窯跡からの瓦の出土量を見てもこの時期にそれほど多くの需要があったわけではなく、熟練した専門の瓦工人(工人組織)は育たず、またその必要性もなかったのではないかと考える。その結果として、伝えられた技術はそれほど高まらず、不慣れなことから、瓦はそれぞれ違う集団で製作されたように見えるのではないかと考える。

これらの瓦の消費地としては福岡市の那珂遺跡〈註3〉があげられる。月ノ浦と同じ窪んだ蓮弁を持つ軒丸瓦が出土している。同遺跡は那津官家の推定地である比恵遺跡〈註4〉に隣接していて、なんらかの公的な建物で使用されたことが想定される。なお、出土瓦は生産地の様相と同様須恵質

のものもあれば土師質のものもあり〈註5〉、葺かれた状況を想像すると、美観という観点からは やや違和感がある。ただし畿内でも状況は同じらしい〈註6〉。

次にこれらの瓦製作の技術がどこから伝えられたのだろうか。牛頸窯跡群の開窯当初の須恵器は陶邑窯跡群で作られた須恵器の特徴を持つものが多いことは前述した。また、野添窯跡群7次調査で出土した陶棺は石木秀啓の検討によって近畿地方との関係が強いことが判明している〈註7〉。その他未報告ではあるが、梅頭遺跡第3次調査1号窯跡で見つかったカマド塚状遺構もやはり近畿地方との関連が考えられるものである。このようなことから、瓦の製作技法も近畿地方からの伝播が最も考えやすい。しかし、小田浦や野添13・大浦では熨斗瓦を焼いているが、近畿地方では7世紀代は平瓦を割って使用していたとのことであるから、専用の熨斗瓦は九州の方が早く焼いていたことになる。このことはすべて近畿地方からの直接的な技術指導だけではないことを物語っている。また、地理的な位置関係と彼我の当時の文化状況から朝鮮半島の影響も充分に考慮できるが、月ノ浦の軒丸瓦は瓦当の連弁部分が窪んでいて通常の突出した連弁とはまったく違っている。連弁部分が窪んだ軒丸瓦は朝鮮半島からの直接的な伝播も考えにくい。このようにすべての技術をある一ヶ所からの技術伝播と考えることは今のところ困難である。

他に月ノ浦と神ノ前に見られる狭端部断面が丸く作られる平瓦は、土器の口縁と同じような作り 方で瓦工人の直接的な指導があったら、このような現象は起きなかったと考えられる。窪んだ連弁 の軒丸瓦とともに、伝播の状況はかなり間接的な要素が強いことが推定される。

以上瓦生産について述べてきたが、牛頸窯跡群内での瓦生産は7世紀後半はきわめて少なくなり、8世紀代は大宰府政庁周辺で生産されるようになることを含め、消費地と考えられる遺跡が今のところ1ヶ所であること、牛頸窯跡群での瓦生産量はあまり多くは想定できないこと、製作技術は粘土板桶巻き作りなど一応完成するが全体に稚拙であることなどから、牛頸窯跡群での瓦生産は何らかの公的な必要性から生産されたものであるが、いわゆる瓦製作の専門工人が誕生するほど盛んになることはなく、須恵器生産の副業的な生産に留まったものと考える。

しかし、このことは牛頸窯跡群の歴史的重要性を損なうものではない。6世紀末から7世紀前半にかけて瓦生産が行われ、那津官家の所在地とされる比恵遺跡に隣接する那珂遺跡からその瓦が出土することは当時の倭政権と密接な関係があったことを類推させることになり、単なる地方窯ではなかったことの証になるからである。

以上瓦生産について述べたが、この時期の瓦は多様で、本市教育委員会担当者間でも瓦の違いが時期差かグループ差かを含め、見方に相違がある。検討からはずした小田浦28地点や浦ノ原窯跡群の瓦を含めて、より細かな検討を継続する必要があると考える。

- 註1. ただし、古手と考えるものと新しいものと考える須恵器は少ない。
- 註2. 文献:市13 『牛頸月ノ浦窯跡群』大野城市教育委員会 1993
- 註3. 下村智・荒牧宏行編『那珂遺跡4』その2 福岡市教育委員会 1992
- 註4. 柳沢一男『比恵遺跡』第8次調査概報 福岡市教育委員会 1985他
- 註5. 福岡市教育委員会久住猛雄氏より那珂遺跡115次調査出土瓦を観察させていただいた。
- 註6. 上原真人「初期瓦生産と屯倉制」『京都大学文学部研究紀要』第42号 2003
- 註7. 文献:市24 石木秀啓編『牛頸野添窯跡群IV』大野城市教育委員会 2006

第24表 瓦陶兼業窯一覧表1

						1	\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	10 24 K 45 W								
	#	1		華		朔		Ħ		米十		祥	(平	瓦)		i t
<	No.	超区名	ШВ	IVA	IVB	Λ	VI	種 類	偏多	>4€	模骨痕	凹面調整	羅鰉更记	同心円文 タタキ	狭端部 断面形	んり角
	1 神ノ前2号窯跡	上大利	*					軒丸瓦・丸 瓦・平瓦		粘土紐	なし	指ナデ	指ナデ、ハケメ	×	丸み	
- 7	2 大浦2号窯跡	上大利	_		·	1		丸瓦·平 瓦·熨斗瓦		粘土板	19 P	布目→円形 タタキ	平行タタキ、ナデ	0	面取りあり	
""	3 野添13号窯跡	上大利				1		丸瓦·平 瓦·熨斗瓦		粘土板	\$ P	布目・ ナデ・ ケズリ	平行タタキ、ナデ	0	面取りあり	平瓦凹面 糸切り痕
7.	4 野添4次調查 2 号窯跡	上大利	*					軒丸瓦		粘土紐	なし			ı		丸瓦凸面平行 タタキにカキ メ
	5 月ノ浦 I 号窯跡	牛頸 (平野川)			1			軒丸瓦・丸 瓦・平瓦・ 鴟尾		粘土紐 粘土板	\$ P	布目→ナデ	平行タタキ、格 子目タタキ、ヘ ラケズリ、ナデ	0	丸み 面取りあり	丸瓦に 竹状模骨
	6 小田浦28地点	牛頸 (平野川)	•				1	丸瓦・平 瓦・その他	窯未確認、 複数の可能 性	粘土板	\$ 9	布目→ナデ	平行タタキ、ヘ ラケズリ、ナデ	×	丸み 面取りあり	
	7 小田浦79-2号窯跡	牛頸 (平野川)	_		1			丸瓦·平 瓦·熨斗瓦		粘土板	\$ 9	布目→ナデ 平行タタキ	平行タタキ	0	面取りあり	
~	8 浦ノ原4号窯跡	奉日	_					本工		粘土板 粘土紐	\$ P	布目→当て具	平行タタキ 格子目タタ キ	0	面取りあり	

第25表 瓦陶兼業窯一覧表2

-	ł	1		盐	解			井米		扙	法 (本	瓦)		13
Vo.	無 鄭 名	超区名	ШВ	IIIB NA NB	IVB	Λ	種 類	_	模骨痕	凹面調整	四面調整	同心円文 タタキ	狭端部断面面形	んの角
	神ノ前2号窯跡	上大利	+	1			軒丸瓦・丸瓦・平瓦	粘土紐	なし	指ナデ	指ナデ、ハケメ	×	丸み	
2	野添4次調查2号窯跡	上大利	+	1			軒丸瓦	粘土紐	なし		I	ı	ı	丸瓦凸面平行ク タキにカキメ
3	月ノ浦1号窯跡	牛頸 (平野川)		,	1		軒丸瓦・丸瓦・平瓦・鴟尾 両者	声者	\$ P	布目→ナデ	平行タタキ、格子目 カタキ、ヘラケズ リ、ナデ	0	丸み 面取りあり	丸瓦に 竹状模骨
4	小田浦79-2号窯跡	牛頸 (平野川)		,	1		丸瓦・平瓦・熨斗瓦	粘土板	Q 49	布目→ナデ 平行タタキ	平行タタキ	0	面取りあり	
5	野添13号窯跡	上大利				1	→ 丸瓦・平瓦・熨斗瓦	粘土板	\$ P	布目・ ナデ・ ケズリ	平行タタキ、ナデ	0	面取りあり	平瓦凹面糸 切り痕
9	大浦2号窯跡	上大利			•	1		粘土板	99	布目→円形 タタキ	平行タクキ、ナデ	0	○ 面取りあり	

5. 窯体規模と基数の変化-生産量の推定に向けて-

(1) はじめに

これまで牛頸窯跡群においては、数多くの調査成果に基づき、窯の規模にみられる変化や操業される窯の増減について指摘がなされてきた。これらの現象には、生産組織、生産体制などの問題、あるいは須恵器の需要など消費に関わる問題が大きく関わっているものと推測される。一方で、窯体の規模や一時期に操業される窯の数は須恵器の生産量をある程度反映するものと考えることができる。無論、一窯での複数回の操業・焼成器種の組み合わせ・窯内での土器の重ね方など様々なファクターを総合的に検討したうえでなければ、各窯における生産量の把握やその通時的変化などについて議論を行うことは困難をともなう。

しかし、窯における土器の生産量を規定する上記のような様々な要素のうち、窯体規模や各時期の窯の基数などをのぞくと、考古学的に復元の困難なものが多く含まれる。このような理由から、生産量を潜在的に規定する要素のうち、発掘調査の成果に基づく再構成を相対的に行いやすい窯体規模、同時期の窯基数などを取り上げその通時的変化を把握する。

このように牛頸窯跡群における生産量の推定を行う際の前提ともなる要素に関する検討を行うにあたり、以下のように窯の築造期、窯の使用期という大きく2つの段階に分けて考えることとする。まず、窯体規模の通時的変化について検討を行うが、これは従来指摘されている窯体の小形化の過程を定量的に把握することを一つの目的として行う。また、窯サイズの規格性についても検討を行う。窯体の小形化という7世紀後半以降に認められる現象は、小形の窯に一部より大形の窯が併設されるという指摘がなされており、また、近年までの調査成果の進展に伴いこれらの窯跡においては焼成される器種に相違がみられることから器種の焼わけが行われていたとする指摘などとも関連する。窯体の築造の際にあらかじめそのような使い分けが想定されているとするならば、窯体規模にいかなる偏差が認められるのかという点は、このような須恵器焼成時の窯の使い分けに関する具体像を知る一つの情報源となりうる。

窯体を実際に使用している段階に関しては、各時期において操業されている窯の規模の全体像の推移、また操業している基数の通時的推移という2点に関して検討を行う。須恵器生産量を推定する際に関わってくる諸要因のうち上記2点に関しては、窯数と焼成部面積の総和を取り上げる。このような側面からみた生産規模の推移が、窯体規模の通時的変化とどのような関係で変遷しているのかという点を検討することにより、牛頸窯跡群における生産規模あるいは操業規模を知る一つの前提的作業になるものと考える。

(2) 窯体規模の通時的変化: 窯体水平長・最大幅と焼成部面積を用いた窯体規模の比較

(i) 目的

窯の規模についてこれまでに指摘されている7世紀後半以降に顕著にみられる小形化を定量的に 把握することを目的とする。また、窯築造の際のサイズに関する規範のあり方についても検討する。

(ii) 各窯の時期比定

対象となる窯跡には複数時期にまたがり操業されているものが少なからず含まれる。このように 窯の使用期間には長短が認められることから、各窯跡の時期比定については窯の築造時にもとづく ものと、各窯の使用期間を考慮したものの2通りを考えることができる。牛頸窯跡群あるいはその 支群ごとの各時期での操業規模等の問題を検討する場合には、後者の時期比定の方法を用いるほう が、より的確に対象時期を通じた変化の把握が可能となるものと考えられる。窯体の規模に関して は、上記の両者の時期比定それぞれにより検討することのできる問題に若干相違があるものと考え る。一つは、上記の生産規模の問題と関連するが、各窯の規模は一回に焼成可能な須恵器の量を規 定する一要素であることから、それぞれの時期の生産規模復元のため後者の時期比定にもとづく分 析を行う場合などである。もう一つは、窯の築造時における窯の形態や規模に関する規範を把握す るため、前者の時期比定による検討を行う場合を考えることができる。

以下、窯体規模の検討においては、このような2通りの時期比定を用いて検討を行うが、以下では、まず、築造時における窯体規模についての規範を把握するという目的から、各窯の築造期に 焦点を当てた時期比定にもとづく分析を行うこととする。そのため、複数時期にまたがる窯の使用 が認められる場合においては、より古い時期をもって対象資料の時期とする。

なお、各窯の時期比定はV章1節の須恵器の編年にもとづくが、Ⅲ期からV期までの古墳時代と Ⅵ期以降の7世紀後半に大別した場合の窯体規模についても同様の資料を用いて分析を行った。

(iii) 方法

窯体規模を考える際、窯体水平長、最大幅や天井高などによってそのサイズを検討する必要があるが、以下においてはある程度の資料数を確保できる窯体水平長と最大幅を用いた検討を行う。これら両者を知ることのできる窯跡を対象に、散布図にもとづく窯体規模の通時的変化をみた。資料数は第26表のとおりである。

補足的に窯跡焼成部面積の推定値にもとづく焼成部の広狭の幅についての検討も行った。窯体規模の変化を捉えるには、窯体水平長と最大幅の散布図による検討で一定の傾向を把握することが可能である。散布図に加え焼成部の広狭をみることにより、実際に須恵器の焼成が行われる空間における変化の把握も可能となる。7世紀後半以降の窯の操業については、これまでにも窯の小形化とともに、甕などの大形器種を焼成する窯と蓋杯などの小形の器種を中心に焼成する窯というように窯の使い分けの行われていた可能性が指摘されている。またあわせて、時期を経るに従い次第に甕等の生産が縮小し、小形器種の生産に比重が傾いてゆく過程が明らかにされつつある(県4:p.185)・〈註1〉。

このような窯の使い分けを想定した場合、同時期に築窯された窯の焼成部面積における規格性のあり方についての検討は、窯使用時における使い分けの問題を検討する際の基礎的な成果の一つとなりうる。このような理由により、各時期に築造された窯サイズにみられる変異の様相を把握するため、箱ひげ図を用いた焼成部床面積推定値の比較検討を行った。

各窯跡の焼成部面積については、実際には各窯跡で詳細に算出することが望ましいが、時間的な 制約上そのような作業を行いえなかった。そのため、以下のような手順による各焼成部面積の推定 値に依拠せざるをえなかった。まず、焼成部の完存する資料を対象として、焼成部長と焼成部最大 幅によって面積の概算を求めた。実際の窯の平面形態には胴の膨らむものやずん胴形のものなど様々な形態がみられるため、このような計測値による概算は実際の面積とずれを生じる。そのため、窯体構造の特徴についてこれまで指摘されている、6世紀中頃までみられるA型、6世紀末~7世紀初頭ごろまでのB型、7世紀後半以降のC型という3類型(市5)・〈註2〉に基づき、各類型に属する残存状況の比較的良好な資料を3~4基づつ抽出し、より実際の面積に近い値を算出した。このような資料について、先に算出した焼成部長×焼成部最大幅による概算との誤差の平均を求めた。この両者に見られる誤差・ずれの平均値を各窯跡資料の焼成部床面積概算値(焼成部長×焼成部最大幅)に当てはめ、より実際の床面積に近似すると想定される値を計算した。具体的には以下のとおりである。

A型:窯面積推定值=焼成部面積概算×0.77

B型:窯面積推定值=焼成部面積概算×0.94

C型:窯面積推定值=焼成部面積概算×0.83

(*焼成部面積概算=焼成部長×焼成部最大幅)

このような過程で算出された床面積はあくまで近似値でしかないが、大まかな傾向を把握するには十分であると考える。これらの値を用いて、各時期において築造された窯の規格性を把握するため、箱ひげ図を用いて解析を行った。

(iv) 結果

①窯体水平長と最大幅からみた窯体規模の推移 (第26表、第134・135図)

Ⅲ期の資料は、窯跡数自体が少なく、また完存するものに対象が限られることからⅢ B 期のみとなった。窯体水平長は $10 \sim 13.37$ m、窯体最大幅は約2m前後である。 \mathbb{N} A 期には窯体水平長 $11.5 \sim 16.5$ m、最大幅 $1.82 \sim 2.9$ m前後の範囲に収まる。窯体最大幅はほとんど変化しないが、窯体の水平長が若干長大化する傾向がみられる。続く \mathbb{N} B 期においては水平長 $10.9 \sim 13.5$ m、最大幅 $2.1 \sim 2.7$ mとなり、 \mathbb{N} A 期に比べ窯体規模がやや小さくなる。 \mathbb{N} V 期になると小形化がさらに進み、窯体水平長 $6.65 \sim 11.2$ m、最大幅 $1.76 \sim 1.83$ mとなる。

Ⅵ期以降は窯体水平長の最大値が10m以下となる点で共通しており、前時期よりさらに小形化が進んでいることがわかる。Ⅵ期からⅧ期までの窯体水平長平均値の推移をみると、Ⅵ期5.12m、Ⅷ A 期3.67m、Ⅷ B 期・Ⅷ期が約2.8mと次第に窯体の長さが小形化していることがわかる。また、Ⅵ期以降にみられる上記の変異幅の内、Ⅶ A・B 期では水平長2.5~5m、最大幅0.5~1.5m前

第26表 各時期における窯体水平長(上段)と窯体最大幅(下段)

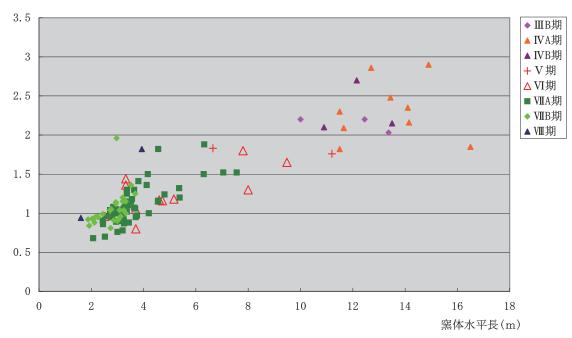
窒体水平長(m)

羔件小十天	(111)									
	ⅢB期	IVA期	IVB期	V期	VI期	VⅡA期	VIIB期	Ⅷ期	古墳時代	7世紀後半以降
最小値	10.00	11.50	10.90	6.65	2. 52	2.07	1.88	1.60	6.65	1.60
最大値	13. 37	16.50	13.50	11.20	9.48	7.56	3.68	3.93	16.50	9.48
平均値	11. 94	13.38	12.18	8.93	5.12	3.67	2.80	2.77	12.39	3. 58
資料数(基)	3	9	3	2	11	52	26	2	17	91

窒体最大幅(m)

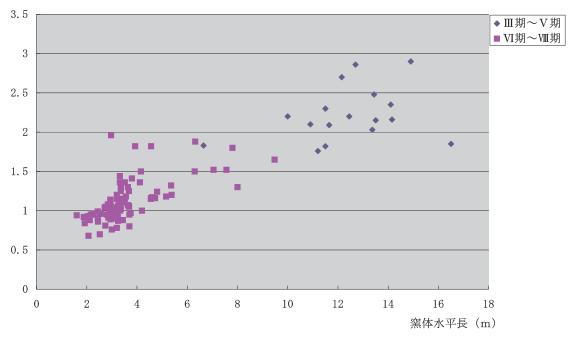
7	IIIB期	IVA期	IVB期	V期	VI期	VIIA期	VIIB期	Ⅷ期	古墳時代	7世紀後半以降
最小値	2.03	1.82	2.10	1.76	0.80	0.68	0.81	0.94	1.76	0.68
最大値	2. 20	2.90	2.70	1.83	1.80	1.88	1.96	1.82	2.90	1. 96
平均値	2.14	2.31	2.32	1.80	1.26	1.10	1.05	1.38	2. 22	1. 12
資料数(基		9	3	2	11	52	26	2	17	91

最大幅(m)



第134図 時期別にみた窯体規模(1)

窯体最大幅(m)



第135図 時期別にみた窯体規模(2)

後の範囲に比較的多くの資料がまとまり、この時期における窯体規模の均質性を伺える結果といえる(第134図)。

このように窯体水平長10m前後を境としてV期までとVI期以降の間で窯体サイズの変異の幅に差がみられる点については、散布図上のまとまりに不連続な単位が認められる点からも伺える(第134図)。このようなサイズ変異にみられる不連続なまとまりについてより明確にその傾向性を把握するため、時期を古墳時代(Ⅲ期からV期)と7世紀後半以降(VI期からⅧ期)に分けた(第135図)。Ⅲ期~V期の窯はそのほとんどが窯体水平長10m以上、窯体最大幅1.8m以上であるのに対し、VI期以降においては窯体水平長10m以下、窯体最大幅2m以下と、比較的明瞭に区分可能である。

以上から、窯体規模はⅢ B 期から IV A 期に一旦大形化するが、その後は一貫して小形化が進行するということができる。しかし、そのような小形化の過程は一律に進むものではなく、VI 期から VII A 期にかけて急速に小さなものへと変化する。このような過程は次に述べる焼成部面積の様相からもうかがうことができる。

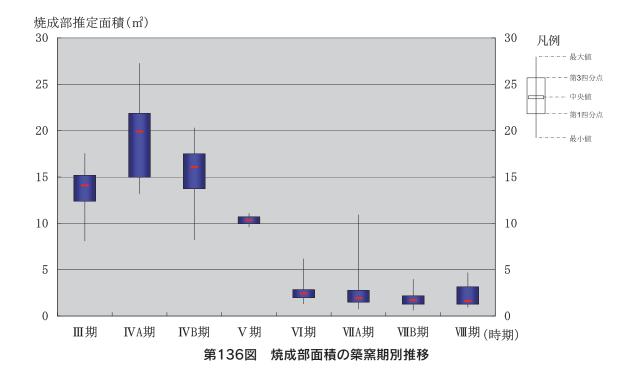
②焼成部推定面積からみた窯体規模の推移 (第136図・第27表)

Ⅲ期からIVA期にかけて、全体的に焼成部面積は広くなる。その後IVB期からV期に小形化が進み、VI期にはほとんどの窯で5㎡以下となる。このような面積の推移からもVI期を一つの大きな境として窯のサイズおよび焼成部面積が小形化することが伺える。このような画期を境にそれぞれの特徴を概観すると以下のとおりである。

VI期からVII B期までの平均値をみると、VI期2.81㎡、VII A期2.67㎡、VII B期1.83㎡、VIII B期2.41㎡であり、時期を通じて一貫して3㎡から2㎡前後であることがわかる。また、窯跡数がV期以前に比べ増加しているにも関わらず、資料の半数が含まれる第1四分点から第3四分点までの範囲は非常に狭い幅に収まっていることがわかる(第 $1\sim3$ 四分点の幅は約1㎡前後)。これは、資料数の増加にも関わらず、多くの窯跡の焼成部が非常に均一な面積であることを示している。このことは、IV期あるいは資料数が非常に限られるため断定はしかねるがV期まで〈註3〉の窯焼成部の規模のあり方にはみられない、非常に規格的な有り方を示しているものと考えることができる。もう一点

Ⅲ期 IVA期 IVB期 V期 VI期 VIIA期 ⅦB期 Ⅷ期 最小値 8.10 13. 19 8.22 9.60 1.31 0.76 0.63 0.94 最大値 17.54 27.26 20.30 11.08 6.17 10.91 3.97 4.68 平均值 13.46 19.42 15.17 10.34 2.81 2.67 1.83 2.41 第1四分点 12.37 14.96 13.75 9.97 2.00 1.49 1.29 1.28 中央値 19.90 16.08 10.34 2.45 1.95 1.73 1.62 14.10 第3四分点 2.78 15.19 21.85 17.50 10.71 2.86 2.19 3.15 資料数(基) 34

第27表 焼成部面積の築窯期別推移



の特徴としては、このように半数の資料が均質な焼成部面積であるのに、第3四分点から最大値までの幅が大きい点をあげることができる。このような傾向はⅥ期とⅦA期で特に顕著である。この点については、窯の全体的な小形化の傾向の中でも、相対的に大きな窯跡が少数認められるというこれまで指摘されてきたこと(県4)・〈註4〉を反映した結果と考えられる。

以上の焼成部面積推定値についての検討結果から、焼成部面積はNA期をピークとして、NB期以降減少してゆくが、なかでもVI期に大きく小形化しているものといえる。また、各時期の焼成部面積の変異については、NB期まで比較的変異に幅があり、VI期以降は多くの窯跡で共通性の高い面積になる点が指摘できる。また、VI期およびVIIA期においては、このような規格性の高い大半の窯跡に加え、大形の窯跡が付随するということがいえる。

(3) 窯の操業時期による規模と基数の通時的変化

(i) 目的

先にみたVI期頃以降顕著となる窯跡の小形化と、各時期で操業される窯で生産可能な須恵器の量がどのような関係にあるのかという点について一定の見通しをうることを目的とする。そのため、各時期の操業規模や生産量を推測するひとつの手がかりとして、各時期で操業されている窯跡数とそれらの焼成部面積の総和について分析を行い、牛頸窯跡群における操業規模がどのような推移を示すのかという点について検討をおこなった。

(ii) 窯跡のカウント方法

各時期における生産規模の推移を知ることが一つの目的であることから、各窯跡の時期比定は先にのべた2種のうち後者によりおこなう。そのため、複数時期にまたがる須恵器が出土している窯についてはそれぞれの時期で一基とカウントした。このような操作のため、実際の窯跡数よりも総

数が増加することとなる。

以上のような各窯の時期比定あるいはカウント方法により、各時期の窯跡数の増減と、焼成部床面積の総和の通時的推移について分析を行った。焼成部床面積の総和については、以下のとおりの手順である。まず、残存状況のよい窯跡資料から床面積の推定値(算出手順は(2)同様)を算出した上でその平均値を求めた。さらに実際には削平等により焼成部規模の不明な資料が含まれる各時期の窯跡総数と焼成部床面積平均値との積によって、焼成部床面積推定値の総和を算出した。

第28表 各時期窯数と焼成部面積

	窯基数	焼成部床面積 の総和(㎡)
ⅢA期	1	_
ⅢB期	7	94. 22
IVA期	23	434. 24
IVB期	22	407.00
V期	12	133. 44
VI期	25	79. 25
VIIA期	84	225. 96
VIIB期	56	113. 12
Ⅷ期	4	9.64
不明	22	_
合計	256	1496.87

(iii) 結果

①**窯跡の増減**(第28表・第137図)

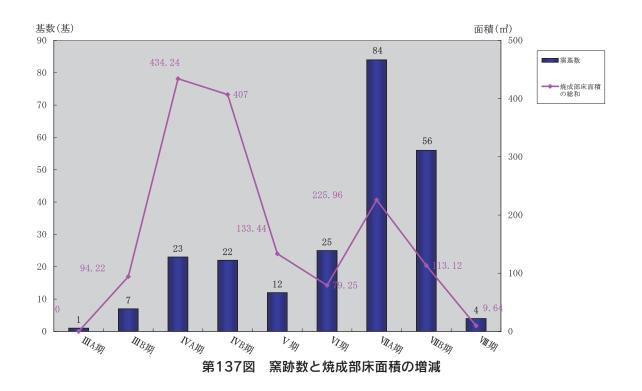
各時期の窯跡の増減をみると、Ⅲ B 期から N A 期にかけては7基から23基に増加している。その後、V 期に一旦減少したのち、VI 期に再度25基に増加する。 VII A 期になるとさらに窯跡数が急激に増加し84基に達する。 N 期あるいは VI 期に比べて約3倍程度の数に増加したことになる。その後、VII B 期には56基に減少し、VII 期にはさらに減少が著しい。

このような点から、Ⅲ期からⅣA期にかけて一旦操業される窯跡数が増加し、Ⅴ期の減少を挟んで、Ⅵ期以降窯跡数がふたたび増加に転じ、最も窯跡数が多いⅦA期以後ⅧB期までは、それまでの窯跡数の2倍から3倍近くの窯が操業されているということになる。

但し、以上の結果は、これまでに調査の行われた窯跡を対象としたものである点に留意する必要がある。IV章の窯跡の分布についての検討で述べられているとおり、平成18・19年の窯跡の分布調査により、これまで窯跡の調査された範囲よりさらに南の一帯において多くの窯跡の存在が確認されている。また、これまでにも指摘されているとおり、牛頸窯跡群の大まかな形成過程として、平野川・牛頸川の上流に向かうほど、つまり牛頸山側へ行くほど相対的に窯の年代が新しくなる点が指摘されている(市1:p.187・市23:p.6等)。このような点に加え、分布調査の成果からもVII期以降の資料が多く採集されていることから、未調査の窯の多くは7世紀後半から8世紀代のものと考えることができる。そのため窯が急速に増加するVIIA期以降の窯跡数は、ここで示したものより大幅に増加するものと考えておく必要がある。分布調査の結果にもとづくならば約150基の窯の存在が想定されていることから、仮にこれらの未調査の窯跡が全てVII期以降のものと想定するならば、VI期からVIIB期までの窯跡数は合計約315基と推測されることになる。このような点を考慮するならば、VI期ないしVIIA期以降顕著となる窯の増加の程度は第137図に示したより大きなものと想定される。

②焼成部面積の総計(第29表・第137図)

一方、焼成部床面積の総和においては(第29表最下段)、 \blacksquare B 期には100 ㎡ほどであったが、 \mathbb{N} A 期には4倍強の430 ㎡を超え、1基当たりの平均は18.88 ㎡である。 \mathbb{N} B 期では407 ㎡で若干面積の減少がみられるが、1基平均では \mathbb{N} A 期とほぼ同様の18.50 ㎡である。 \mathbb{N} B 期では値面積の総和が $79.25 \sim 133.44$ ㎡となり、おおよそ100 ㎡を前後する点で \mathbb{II} B 期の様相に近いもの



第29表 各時期における焼成部面積の推定値

	ⅢB期	IVA期	IVB期	V期	VI期	VIIA期	ⅧB期	Ⅷ期
最小値(m²)	8. 10	13. 19	8. 22	8. 22	1.31	0.76	0.63	0.94
最大値(m²)	17. 54	27. 26	27. 26	15. 59	8.22	10.91	5.55	4.68
平均面積(m²)	13. 46	18.88	18.50	11. 12	3.17	2.69	2.02	2.41
有効サンプル数(基)	4	14	8	4	15	71	46	3
全窯跡数(基)	7	23	22	12	25	84	56	4
全窯跡数×平均面積(m²)	94. 22	434. 24	407.00	133. 44	79. 25	225. 96	113. 12	9.64

^{*}有効サンプル数:実際に面積推定を行うことのできた窯跡資料数。

となる。その後、VⅡA期に225㎡ほどに増加するものの、VⅡB期には再度113㎡程度に減少する。 一基あたりの平均値では、V期まで10㎡を超えていたのがVI期以降になると3㎡前後ないしはそれ 以下となる。

以上のような窯跡数と焼成部面積の推移から、両者がおよそ逆相関していることがわかる(第137図)。窯跡数の比較的少ないⅣ期頃までは床面積の総計は相対的に大きく、Ⅷ期以降の窯跡数の増加に伴い焼成部の床面積はⅣ期に比べ減少する。つまり、Ⅳ期とⅧ期の状況を対照的に取り上げるならば、少ない基数ではあるが一基当たりの窯体規模が大きいものから、基数自体は非常に多くなるものの一基あたりの焼成面積はかなり小形化する状態へと変化しているものといえる。これらⅣ期とⅧ期の間のⅤ期・Ⅵ期をより細かくみるならば、Ⅴ期では窯跡数の減少とともに焼成部面積も減少しているが、Ⅵ期には窯が再度増加しⅣ期をこえる基数となるにもかかわらず、焼成部床面積はⅤ期より減少し80㎡弱になっていることがわかる。これは、Ⅵ期以降急激に窯の小形化が進行する一方で、窯の基数がⅧ期にみられるように急増していない点が原因といえる。つまり、窯の小形化というⅧ期まで継続して進む現象が生じつつも、Ⅶ A 期にみられるような窯の基数を増やすことで生産量の増加をはかるという現象が依然顕著になっていないものと考えることができ

^{*}全窯跡数:削平等により焼成部の面積推定が行えない窯跡資料と有効資料数との総数。

る。V期に関しては、その存続期間や年代観を含め取り扱いが難しいことはV章においても述べられているが、上記のような理解が可能であるならば、V期からVI期にかけての時期は前後する時期にみられる動態の移行的様相を呈しているものと考えることができよう。

(4) まとめ

以上の分析結果をまとめると、窯体規模の通時的推移からはIVA期をピークとして窯体の小形化が進む点を窯体水平長と窯体最大幅の有り方、焼成部面積からうかがうことができた。また、これら両属性においてはともに、VI期に急速に小形化が進む点が認められた。

以上のような結果から、V期・VI期という移行期的な時期の前後の時期であるIV期の状況とVII期の状況を単純に比較して須恵器の生産量あるいは生産規模の変化を述べることは難しい。第137図からは、IVA・B期の窯跡数とVIIA・B両期の窯跡数とでは、約3倍強の相違が認められるが、焼成部床面積の総和ではIVA・B期がVIIA・B期の約2.5倍近くとなっている。つまり、VII期以降窯数は急増するが焼成部床面積は古墳時代に比べ総合的に狭くなっているということになる。このような焼成部面積の推移が直接的に須恵器の生産量を反映するものでないことはくり返し述べたが、以上の結果は古墳時代に比べて7世紀後半においては須恵器の生産量が一見縮小したかの印象を与える。しかし、未調査の窯跡が約150基程度存在すると推定されている点、またそれらの多くがVII期を主とする窯跡である可能性が高い点については先に紹介したとおりである。焼成部床面積自体が推定値であり、未調査窯跡についての推定基数に基づく想定の妥当性については、今後の調査による検証を待つほかない。しかし、今後の見通しをうるという意味で、上記の未調査窯跡の時期や基数についての推定に基づき若干の試算を試みるならば以下のようになる。

まず、現在分布調査によって推定されている未調査の窯跡150基を全てVI期からVII B 期にかけてのものと前提した上で、上記の分析結果と総合するならば、VI期からVII B 期の窯跡の総数は約315基ということになる。次に既に調査されている同時期の窯跡の総数が165基で焼成部床面積の推定値を合計したものは418.33㎡であることから、上記の315基の焼成部床面積の総和は単純計算で約800㎡となる。この値は、現在調査済みのIV A · B 期およびV 期の窯跡焼成部床面積の総和である974.68㎡に比べやや小さい値ということになる。

先に述べたように古墳時代と7世紀後半の生産量の違いについて、今回の分析により直接結論を導くことは難しい。しかし、これまで行われている分布調査の成果等を勘案すると、古墳時代と7世紀後半の間で生産規模が大きく縮小した、あるいは逆に拡大したということはできない。須恵器生産を規定する要素のうち窯跡の規模と基数という点からは、IV期に代表される古墳時代とVII期に代表される古墳時代以後で、須恵器の潜在的な生産量に大きな相違がみられない可能性が高いということになろう。今後、今回取り扱った2つの属性以外に須恵器の生産量を規定する要素を加味した検討が望まれる。

- 註1. 石木秀啓「牛頸窯跡群と九州の須恵器生産体制-八世紀以降を中心として-」『律令国家転換期の王権と都市 (論考編)』 (国立歴史民俗博物館研究報告) 第134集 (pp.299-353) 2007
- 註2. 舟山良一「第4章 牛頸窯跡群」『大野城市史』上巻 (pp.317-400) 大野城市史編さん委員会編 2005
- 註3. V期も最大値-最小値の幅および第3四分点-第1四分点の幅ともに非常に狭い範囲に収まっているが、前後の時期と 比べて窯跡数が非常に少ないことからVI期以降のあり方と同等の評価を行うことはできない。
- 註4. 前掲註1. 文献

6. 集落と古墳

(1) はじめに

今まで須恵器とそれを焼成した窯跡について述べてきたが、牛頸窯跡群の範囲内(以後この項では「範囲内」と略称する)には工人達が住んだであろう集落と、その長達と思われる人達が葬られた墳墓がある。この項では、それらと窯跡とを総合的に検討して牛頸窯跡群の実態にせまりたい。

福岡平野から牛頸窯跡群に入るには、北から春日市域の牛頸川沿いの谷、大野城市域の平田川沿いの上大利地区の谷、太宰府市域の大佐野川沿いの佐野地区の谷がある。記述の便宜上、これらの谷を中心にして春日市の惣利遺跡群などがある地域を春日地区、大野城市の野添窯跡群や梅頭窯跡群などがある地域を上大利地区、春日地区と上大利地区の奥に当たる小田浦窯跡群や牛頸窯跡群などのある地域を牛頸地区、太宰府市の宮ノ本窯跡群などがある地域を佐野地区と呼ぶ。さらに、牛頸地区は平野川流域と牛頸川流域に分けられる。その場合はそれぞれ平野川地区と牛頸地区と呼ぶ。Nの窯跡の分布で使用したグループ名と地域的には同一地域をさす。

(2)集落

集落では、須恵器工人の村と考えて良いかどうかという観点から見ていくことになるが、その際注目する点は牛頸窯跡群操業期間である6世紀中頃から9世紀前半頃の集落であることがまず必要条件になるが、須恵器の原料である粘土を貯蔵した状況が見られるか、須恵器の出土量が多く、また土師器と比べ出土比率が高いか、生焼けや焼けひずんだ須恵器が多く見られるかというような点に注目したい。ロクロピットは現在のところ確認していない。現在範囲内で知られる集落跡は以下のようなものである(第138図)。

(春日地区)

牛頸川下流域に当たる。福岡平野から牛頸窯跡群に入るには最も北側に当たる谷を含む。牛頸川両岸に集落遺跡が散在する。牛頸窯跡群開窯前の集落もあるが、須恵器工人の村と考えられる集落もある。

円入遺跡〈註1〉

日ノ浦遺跡の北約700mの段丘上に立地し、弥生時代から歴史時代に及ぶ複合遺跡である。発掘 調査は一部しか行われていないが、竪穴住居跡7軒と溝やピットを検出した。2軒は5世紀代、も う2軒もおおよそ5世紀代、1軒が6世紀中頃、2軒が6世紀末頃から7世紀初めのものであった。 塚原遺跡の古墳が5世紀から6世紀前半のものであったことから、それらの被葬者の居住地であっ た可能性も考えられる。

惣利遺跡 (春3)

狭小な尾根や斜面に6世紀後半頃の住居跡が4軒検出された。また2号住居跡の近くで粘土が充填された径40cmの粘土ピットが見つかっている。特徴的な立地や粘土ピットから須恵器生産に密接な関係がある住居群と考えられている。

惣利西遺跡〈註2〉

惣利遺跡同様斜面を中心に立地して6~7世紀の住居跡が15軒検出された。出土遺物も瓦や筒状土製品、三足壺脚部、土製模造鏡など特異なものが含まれる。2号住居跡は1辺24mもあるなど形態も特異である。焼けひずんだ須恵器が含まれていることや5軒からは粘土塊なども見つかっていることなどから、同遺跡は須恵器工人の工房と考えられている。

惣利北遺跡〈註3〉

8世紀後半頃の竪穴住居跡が3軒検出された。1号住居跡からは亀の頭部をかたどった把手を持つ硯が出土している。

向谷南遺跡〈註4〉

牛頸川東岸に形成された集落跡で弥生時代から歴史時代にかけての住居跡が47軒検出されている。

春日平田遺跡〈註5〉

牛頸川東岸の丘陵上に形成された集落跡で、古墳時代後期の竪穴住居跡46軒と掘立柱建物1棟が検出された。尾根部近くに造られた住居は方形の大型のもので他の住居より若干早い時期に造られている。

春日平田西遺跡〈註6〉

春日平田遺跡とは谷をはさんで向かい合う斜面に形成された集落跡で、古墳時代後期の住居跡が25軒、掘立柱建物が5棟検出されている。住居跡は丘陵全体に分布し、切りあうことなく存在していることから、比較的短期間に営まれた大規模な集落と考えられている。

(上大利地区)

牛頸窯跡群開窯期の窯跡群がある地域で、これに関連する集落遺跡が見つかっている。上園遺跡と本堂遺跡である。また、それらの北には九州大学理工系の大学院があるが、建設に先立って行なわれた発掘調査によって集落が見つかっている。

上園遺跡〈註7〉

現段階で牛頸窯跡群最古の窯跡である野添6号窯跡や本堂14次1号窯跡のある丘陵下の河岸段 丘上に形成された遺跡である。7回の発掘調査を行っているが、5世紀後半から11世紀まで継続 する集落跡である。このことから、同遺跡は牛頸窯跡群開窯前に形成されていて、閉窯後も続く集 落であることがわかる。しかし、発掘調査の結果、古墳時代では6世紀中頃から後半にかけての土 器が出土したが、土師器より須恵器が圧倒的に多く、また1次調査では土坑に須恵器の中型の甕を 据えたような状態で出土したりして、窯跡群との関連を充分に推測させる。2次調査では5世紀後 半の須恵器を持つ住居跡が検出されたが、やはり6世紀中頃から後半にかけての須恵器が多かった。 このように1次・2次の発掘調査では牛頸窯跡群開窯期頃の遺物が多く出土した点が注目できる。 調査は7回実施したが、まだ全体からすれば小範囲である。

本堂遺跡〈註8〉

上大利北土地区画整理事業に伴って発掘調査を実施したもので、工事の関係から17次に分けて調査した。住居跡だけではなく、須恵器窯跡も見つかっている。地形的には上園遺跡の一段上位に立地するが、河岸段丘ではなく丘陵上である。現在順次報告書の刊行を行っているが、遺構は弥生時代前期のものから平安時代のものまである。粘土の入った土坑などが見つかっており、須恵器作りに関連する集落と考えられる。中でも1辺約10mほどの方形に廻らされた溝で囲まれた掘立柱建物は官衙や寺院を連想させるもので、この地域のなんらかの中心的な建物であることを物語っている。

九州大学筑紫地区遺跡群〈註9〉

九州大学が大野城市と春日市にわたって理工系の大学院を建設する際に発掘調査された遺跡群の総称であるが、縄文・弥生・古墳・歴史時代の遺構および遺物が見つかっている。谷部の河川跡から III B 期の須恵器などとともに木製の当て具と叩き板が出土していることから、近くに須恵器製作に関わる工人集落のあった可能性がある。さらに寺院を推定させる遺物も出土している。

(牛頸地区)

牛頸窯跡群の中心地域であり、平地部の牛頸川流域に大規模な集落遺跡が展開している。日ノ浦 遺跡と塚原遺跡である。ただし、両遺跡は連続した1つの遺跡と考えるべきものかもしれない。廃 棄土坑や住居跡から大量の須恵器が出土しており、また、住居跡から粘土が検出される場合がある など、須恵器工人の村と考えて良いと思う。

なお、牛頸川の支流として平野川が西側から流れ込むが、その流域には小田浦窯跡群や後田窯跡群、月ノ浦窯跡群などがあるが、集落跡は確認されていない。開発が進んだ地域でありおそらく今後も発見される可能性は低いと考えられる。

日ノ浦遺跡〈註10〉

牛頸川左岸の低丘陵上に立地する遺跡である。調査地は2ヶ所あり、II遺跡は弥生時代の甕棺墓や古墳、平安時代の土坑などが検出されている。取り上げるのはもう1ヶ所の方で調査面積が約5,000㎡で住居跡が23軒検出され、縄文時代晩期のもの2軒、6世紀中頃から後半のもの2軒、6世紀末から7世紀初頭頃までのもの5軒、7世紀中頃から後半のもの4軒、8世紀前半のもの5軒、同中頃のもの1軒であった。他に住居跡とは断定できないものを竪穴状遺構としたが、4基検出され、6世紀末頃から7世紀初頭のもの1基、8世紀前半のもの1基、8世紀後半のもの2基であった。また、廃棄土坑としたものが20基あり、8世紀初頭から9世紀初頭頃までのものであった。特徴の1つとして8世紀後半には明確な住居がなくなるのに対し、廃棄土坑や竪穴状遺構が継続して造られることがあげられる。また、遺跡の全体を調査したわけではないが、1時期あたりの住居

は5軒程度と春日地区の春日平田遺跡で古墳時代の住居が50軒程度検出されていることに比べ少ない。

塚原遺跡〈註11〉

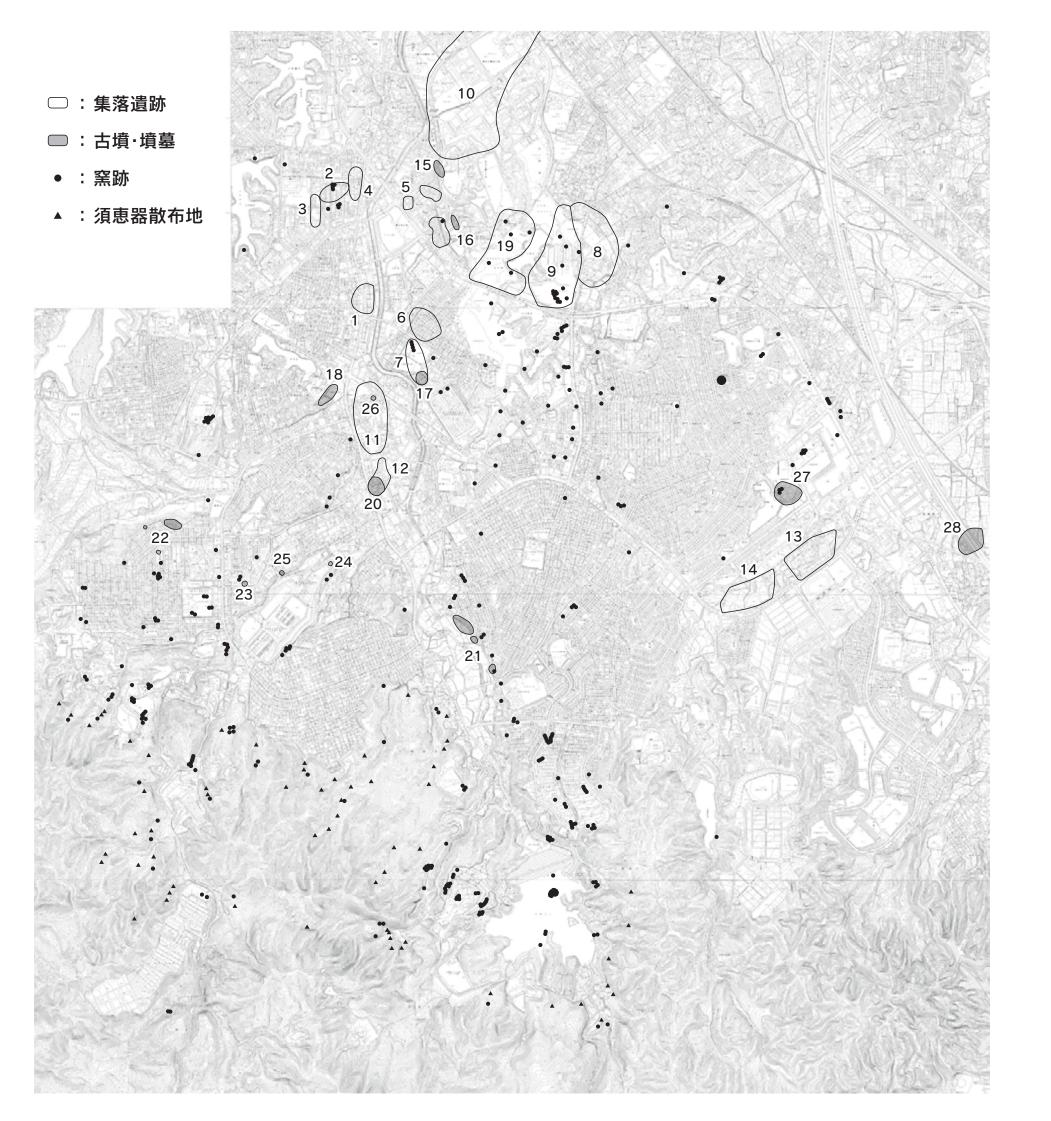
日ノ浦遺跡同様、牛頸川左岸の丘陵上に、日ノ浦遺跡の南に接するようにして位置する。本来は 連続する遺跡として捉えてかまわないものと考える。小字をとって遺跡名としたもので、調査前は 水田地帯であったが、表土を剥ぐと遺跡の南半部には5世紀後半から6世紀前半頃の古墳が多数発 見され、小字の意味を再確認した遺跡である。古墳の北側に集落が広がっていた。発掘調査で検出 された遺構は古墳30基、小石室10基、竪穴住居跡35軒、掘立柱建物7棟、廃棄土坑15基、焼土 坑13基であった。住居跡は6世紀末から7世紀初頭頃までのもの13軒、7世紀前半から中頃のも の4軒、7世紀後半のもの2軒、8世紀前半のもの3軒、8世紀後半のもの4軒であった。ただし、 8世紀後半としたもののうち確実に住居跡とできるのは1軒に留まり、同時期は竪穴住居跡の作ら れなくなる時期であった。また、掘立柱建物は確実な年代を決定することは難しいが、おおむね8 世紀後半頃のものと考えられる。2×2の総柱建物3棟、2×2、3×1の側柱建物それぞれ1棟、 4×2の側柱建物2棟であった。また、廃棄土坑は15基のうち12基の時期が判明したが、6世紀 末から7世紀初頭頃のもの1基、7世紀後半のもの2基、8世紀前半のもの1基、8世紀後半のも の7基、8世紀末から9世紀初頭のもの1基であった。ここでも日ノ浦遺跡同様、8世紀後半に竪 穴住居跡が作られなくなるのに対して、廃棄土坑が継続して作られ、また、掘立柱建物が出現する などの特徴が見られる。これら8世紀後半の遺構は調査区北側に比較的集中している。掘立柱建物 も2棟が北端部に位置する以外5棟は8世紀後半の遺構の集中する区域にあるが、遺跡の東端部で 牛頸川側にある。倉庫と考えられる建物と作業場的な建物と考えられ、須恵器集積地としての性格 を持つ遺跡と思われる。掘立柱建物が牛頸川側に建てられているのは牛頸川の水運を利用した可能 性もある。

(佐野地区)

須恵器窯跡群としては、宮ノ本窯跡群がある地区であるが、牛頸窯跡群に入るには一番南側の谷を含む一帯で、狭い谷部に大佐野川に沿って各時期の集落が確認されている。下流から4~5世紀の集落跡である殿城戸遺跡や尾崎遺跡、やや上流に6世紀後半代を中心にする集落跡である京ノ尾遺跡、さらに上流に7世紀代の集落が確認されているカヤノ遺跡などが発掘調査されている。ただし、報告書ではこの地域で須恵器工人と関連する事項の指摘はない。基本的に須恵器工人に関係する遺構はカヤノ遺跡を除いて少ない地域と考えられる。

京ノ尾遺跡〈註12〉

大佐野川の南の丘陵裾部に広がる集落遺跡で、6世紀前半に始まり、8世紀や中世後期、18世紀から現代につながる遺跡である。6世紀後半から7世紀初頭頃にかけてピークを迎え、約50軒の竪穴住居跡と7棟の掘立柱建物が見つかっている。須恵器生産に関連付けられる遺構は今のところ見つかっていない。ただ、8世紀代には小規模ながら鉄生産を行っていた痕跡を示す鉄滓が見つ



集落遺跡

- 1. 円入遺跡 2. 惣利遺跡
- 3. 惣利西遺跡
- 4. 惣利北遺跡
- 5. 向谷南遺跡
- 6. 春日平田遺跡
- 7. 春日平田西遺跡
- 8. 上園遺跡
- 9. 本堂遺跡
- 10. 九州大学筑紫地区遺跡群
- 11. 日ノ浦遺跡
- 12. 塚原遺跡 13. 京ノ尾遺跡
- 14. カヤノ遺跡

古墳·墳墓

- 15. 向谷古墳群
- 16. 平田北古墳群
- 17. 春日平田西古墳群
- 18. 春日塚原古墳群
- 19. 梅頭遺跡群
- 20. 塚原古墳群
- 21. 中通古墳群
- 22. 後田古墳群
- 23. 小田浦古墳群
- 24. 胴ノ元古墳
- 25. 月ノ浦古墳 26. 日ノ浦1号墳
- 27. 宮ノ本古墳群 28. 剣塚古墳群

かっている。

カヤノ遺跡〈註13〉

京ノ尾遺跡の上流側に位置し、7世紀後半から8世紀初頭にかけての掘立柱建物が多く検出された。直径1 mほどの土坑にまるで土のうに詰め込んだような状態で白色粘土が充填されている状況が観察された。須恵器工房に関連する遺構であろうか。牛頸窯跡群から大宰府へ抜ける通り道に当たる交通の要衝として重要な場所であった。

以上、4地区に分けて牛頸窯跡群内の集落遺跡について見てきた。この結果、佐野地区は工人に 関連する可能性のある遺構はあまり見出せなかった。他の3地区には工人集落の可能性のある遺跡 があった。

上大利地区では上園遺跡、本堂遺跡、九州大学筑紫地区遺跡群が上げられる。ただし、前2遺跡は位置的にも連続しており、本来1つの遺跡と考えて良いかもしれない。本堂遺跡は弥生時代、上園遺跡は5世紀に形成され始めた遺跡であるが、特に後者は牛頸窯跡群開窯期(6世紀中頃)の遺構もあり、須恵器生産開始前と開始後を比較してどのような変化があったのか関心を持たれる遺跡である。調査は遺跡の一部に留まっていることから詳細は不明であるが、従来からの住居群と須恵器生産開始時あるいは開始後の住居群とがどのような関係にあるかなど究明しなければならないことは多くある。また、奈良時代の住居が本堂遺跡で見つかっており、両遺跡が牛頸窯跡群操業期間中継続したものと考えられる。九州大学筑紫地区遺跡群からは須恵器甕類製作時に使用したと考えられる平行条線を刻んだ木製の叩き板と同心円を刻んだ当て具が出土しており、工人集団の集落と考えられる。

牛頸地区では日ノ浦遺跡と塚原遺跡があげられるが、これも位置関係から見ると本来は1つの遺跡ととらえてもかまわないものと考える。縄文時代の住居跡も発見されているが、6世紀以降奈良時代までの住居跡が多く見つかっている。両遺跡の特徴として、竪穴住居跡が8世紀中頃で見られなくなるが廃棄土坑などが9世紀始めあるいは中頃まで作られることと、8世紀の遺構は多いが、6世紀中頃から7世紀前半頃までの住居跡が意外に少ないという2点が上げられる。

古墳時代の住居跡はそれらの遺跡の下流側に当たる春日地区の春日平田遺跡・同西遺跡に多く見られる。これらのことから、春日地区と牛頸地区を見た場合、時期が新しくなるにつれ、大きな集落が牛頸川上流側に移っていくように見える。これは上大利地区で見られた上園遺跡と本堂遺跡が牛頸窯跡群操業期間中継続したこととは違う様相と言える。

他に春日地区の惣利遺跡群で見られた、普通は住居を造らないような急斜面に造られた住居群は その役割と造られた理由が良くわからない。このような状況は上大利地区の梅頭遺跡第2次調査で も確認された。住居跡とした斜面中の遺構からは多くの須恵器が出土しており、仕分け場の可能性 も考えられるが、わざわざ造りにくい斜面に造る理由は不明である。

(3) 古墳・墳墓

牛頸窯跡群の範囲内には古墳や墳墓も多くある。ここではそれらの状況について見てみたい(第138図)。その際、集落同様須恵器工人と関連があるかという点に注目して見ていくことになるが、現在須恵器工人と関連付けられる点としては、副葬品の中に焼けひずんだ須恵器が含まれるか、窯掘削に使用した工具と考えられる鉄製 U 字型鋤先が含まれるかという点などである。また、集落同様春日地区、上大利地区、牛頸地区、佐野地区と分けて概観したい。さらに、集落同様、牛頸地区は平野川流域と牛頸川流域に分けられる。その場合はそれぞれ平野川地区と牛頸地区と呼ぶ。牛頸窯跡群開窯前の古墳群もあるが、操業期間内に形成された古墳群を中心に述べたい。

(春日地区)

牛頸川両岸の丘陵上に4群の古墳群が形成されている。東岸では福岡平野に最も近い位置から向谷古墳群、その南に平田北古墳群、やや離れて平田西古墳群がある。西岸では平田西古墳群に相対するように春日塚原古墳群がある。春日塚原古墳群と日ノ浦1号墳、平田西古墳群は東西にほぼ一直線に並ぶ。

向谷古墳群〈註14〉

3基からなり、1号墳は4~5世紀にかけての方墳で主体部は2基の割竹形木棺でそれぞれから変形文鏡、捩文鏡が出土している。2号墳は横穴式石室を持つ円墳で須恵器・鉄鏃・丸玉・耳環などが出土し6世紀中頃のものと考えられる。3号墳はほとんど破壊され須恵器以外遺物も少なかったが、2号墳にやや遅れる時期のものとされる。

平田北古墳群〈註15〉

やはり牛頸川東岸の丘陵に立地し、3基の古墳が知られている。1号墳は円墳、2号墳は方墳であるが、主体部は竪穴式石室である。3号墳は完全に削平されていたが、竪穴系横口式石室の古墳と考えられている。出土遺物は少なく、時期は不詳であるが、石室形態から見て牛頸窯跡群開窯以前のものであろう。

春日平田西古墳群〈註16〉

丘陵上に造られた円墳3基からなる古墳群である。発掘調査されたのは2・3号墳である。石室 の石材はほとんど抜かれていたが、横穴式石室を持つ古墳で、周溝が墓道と兼ねるという特徴を持 ち、出土須恵器から6世紀中頃のものとされている。

春日塚原古墳群〈註17〉

春日地区と牛頸地区の境界付近に位置し、春日地区で唯一牛頸川西岸に位置する古墳群で、西側の山塊から伸びた丘陵上に4基と南側斜面に1基の合計5基が立地する。春日平田西古墳群とは牛頸川をはさんで相対する位置関係にある。また、両古墳群のほぼ中央に日ノ浦1号墳が位置する。春日市教育委員会によって発掘調査されているが、当初丘陵先端部の古墳は前方後円墳と思われて

いたものだが円墳とわかった。墓道は大野城市が調査した日ノ浦遺跡方向に伸びている。6世紀前 半頃形成され、7世紀前半頃まで追葬が続く古墳群である。

(上大利地区)

この地区では古墳は見つかっていない。しかし、梅頭遺跡で特異な墳墓が検出されている。また、 水城堤の近くに吉松古墳があったとされているが詳細は不明である。

梅頭窯跡群 (市24)

1次調査1号窯跡で、須恵器生産終了後、その窯の焼成部を墓として再利用している状況が認められた。床面に大きめの石(おそらく棺台)を置き、鉄刀・鉄鏃・耳環・須恵器等を副葬品として配置してあった。鉄刀には銀象嵌が見られた。時期は7世紀前半から中頃にかけてである。同じく同窯跡群2次調査1号窯跡でも焼成部から耳環と鉄鏃が見つかっていることから、同様な状況があったと推測できる。さらに同窯跡群3次調査2号窯跡では燃焼部の側壁を張りなおし、床面には覆屋を思わせるピット群、その中央には炭の広がりが観察された。近畿地方で見られるカマド塚を連想させる状況であったことから、ここで火葬した可能性が高い。カマド塚状遺構と呼んでいるが、このように梅頭窯跡群周辺では古墳を造らずに窯を再利用した特異な葬法が採用されている。3基とも7世紀前半から中ごろにかけてのもので、単次葬である。また、3基の窯跡は1つの谷をはさんで向かい合った斜面に位置している。隣の谷に入れば見えなくなり、3基の窯跡が位置する谷を出た平地部からしか見えないことになり、古墳のように視覚的効果はない。谷を出た部分は本堂遺跡2次調査地に当たるが、窯跡の時期の遺構は多くない。このように、時期的にも偏り、その前後の墓が見当たらず、内容も極めて特異ということができる。

(牛頸地区)

当地区には古墳が比較的多く見つかっている。牛頸窯跡群開窯以前の古墳として塚原古墳群、開窯後の古墳として中通古墳群、後田古墳群、小田浦古墳群、月ノ浦古墳、胴ノ元古墳、日ノ浦1号墳などが調査されている。後田古墳群、小田浦古墳群、月ノ浦古墳は平野川地区に位置する。

塚原古墳群〈註18〉

牛頸川左岸の低丘陵上に立地しており、5世紀後半から6世紀にかけての古墳が30基、小石室10基が調査された。墳丘の大部分と主体部上半が削平されていたが、竪穴系横口式石室や赤色顔料の塗られた石室などもあり、遺物も完形品の須恵器や土師器が出土している。集落の項で述べた春日地区の円入遺跡が同古墳群の北1kmにある。

中通古墳群 (市 1 · 5)

合計19基の古墳群である。中通古墳が1基やや離れて立地していて、盟主墳と考えられ、北支群14基、南支群4基から構成される。中通古墳は単室の横穴式古墳であるが、奥壁には巨石を使用していてかなりしつかりと造られている。また、赤色顔料の塗布が認められる。遺物では刀装具があるがおそらく金箔が貼られていたものであろう。北支群14基については盗掘を受けているが、

時 期 古墳群名 地区名 No. 5世紀 7世紀 6世紀 向谷古墳群(2・3号墳) 1 春日 春日平田西古墳群 春日 2 4 3 春日塚原古墳群 春日 4 |塚原古墳群 牛頸 5 中通古墳群 牛頸 6 後田古墳群 牛頸 7 小田浦古墳群 牛頸 |胴の元古墳 牛頸 月ノ浦古墳 牛頸 9 **+** |日ノ浦1号墳 牛頸 10 11 (梅頭窯跡群) 上大利 註

第30表 古墳群の使用期間

註. 梅頭窯跡群は須恵器焼成後墓として転用

遺物の中でもガラス、ヒスイ・水晶その他の装身具が大きくりっぱで見るべきものがある。南支群は中通D-1・2号窯跡の斜面下方に造られていて、墳丘盛土にそれらの灰層が認められるなど、窯築造と古墳築造の関係が興味深い。北支群で見られたような装身具類は出土しなかった。全体的に見た場合、出土須恵器に焼けひずみのあるものが見られることが特徴の1つとしてあげられる。また、後述する後田古墳群や小田浦古墳群のように窯の掘削に使用したと考えられる鉄製U字型鋤先が南支群S4号墳で出土している。6世紀後半から7世紀後半の古墳群である。

後田古墳群〈註19〉

山の中の比較的小規模な谷を見下ろす斜面に立地していて11基検出された。ただし、11号墳は他の10基の古墳と谷1つ隔てた場所に立地しており、別の群としてもかまわない状況にある。 $1 \sim 10$ 号墳が1 グループと考えられるが、10号墳だけ規模が大きく、また他と80mほど離れて立地する。これが盟主墳と考えられるが、この状況は中通古墳群と同じ様相である。主体部では、 $1 \sim 6 \cdot 10$ 号墳が通常の横穴式石室、7号墳が小型の横穴式石室、 $8 \cdot 9$ 号墳が竪穴式の小石室とバラエ

ティーに富む。特徴的なことは、遺物の中で鉄製U字型鋤先が3~6号墳の4基から出土していることである。また、7号墳周溝の一部を土坑状に広げ、土師器甑、甕、須恵器杯蓋がセットで出土したが、焼土も見られ、『古事記』に見られる黄泉戸喫を連想させるような状況であった。中通古墳群ほど装身具類は多く出土していない。6世紀後半から7世紀後半の古墳群である。

小田浦古墳群〈註20〉

牛頸川に流れ込む小河川である平野川流域に広がる谷平野を望む斜面に立地する。3基発見されたが、いずれも横穴式石室を主体部とする小円墳であった。近世以降の墓地等によって大きく改変されており、出土遺物も少なかった。2号墳からは鉄製U字型鋤先が出土した。その他の遺物は少ない。6世紀後半から7世紀後半の古墳群である。

胴ノ元古墳〈註21〉

牛頸川と平野川の合流する付近にあり、平地部に向かって、西側から伸びた丘陵先端部に単独で造られた古墳で、出土遺物から6世紀後半頃のものと考えられた。単室の横穴式石室を持ち、14×10mほどの楕円形墳である。古くから開口していたこともあり、出土遺物は少なかった。このように規模や遺物面では群内の他の古墳と比べても際立つ古墳ではないが、牛頸窯跡群の中心部にあり、牛頸地区では規模の大きい集落遺跡である塚原遺跡や日ノ浦遺跡を見下ろす位置にある単独墳であることから、牛頸窯跡群内でも地位の高い首長の墓の可能性も考えられる。

月ノ浦古墳(市5)

小田浦古墳群が立地する丘陵の平地部側に位置しており、調査時には1基のみでかつほとんど 残っていなかったものである。このように斜面に1基だけ存在するのは考えにくく、本来はあと数 基あったものだろう。出土須恵器片から7世紀前半と考えられる。

日ノ浦1号墳〈註22〉

集落遺跡である日ノ浦遺跡で見つかったもので、主体部を含めほとんどが削平されていた。出土 須恵器から6世紀後半の年代と思われる。周辺に丘陵があるにもかかわらず低地を選んでいる点が 後期古墳の立地としては珍しい。ここで見つかった土師器の甑は内面へラケズリを行なわず、内面 には粘土紐の巻き上げ痕が随所に見られるもので、器形から見てもこの辺の土器とは考えにくいも のである。日向系の土師器の可能性も考えられる。

(佐野地区)

本地域では牛頸窯跡群開窯前の宮ノ本古墳群などはあるが、操業期間内に形成された古墳群は知られていない。周辺まで範囲を広げると、大佐野川が作り出す谷部から平野へ出た部分に剣塚古墳群はか数ヶ所の古墳群がある。剣塚古墳群は京ノ尾遺跡と関係がある可能性もあり、ここでは宮ノ本古墳群と剣塚古墳群について述べたい。

宮ノ本古墳群(太2)〈註23〉

宮ノ本窯跡群と同時に発掘調査された古墳群で、古墳11基、墳墓9基が確認された。古墳は丘陵の上に並ぶ低墳丘の方墳で、主体部は箱式石棺・割竹形木棺・木蓋土坑墓などで4世紀から5世紀代の古墳とされる。墳墓は火葬墓、木棺墓などがあり、8世紀中頃~10世紀前半にかけてのものが多い。1号火葬墓から買地券が出土している。

剣塚古墳群〈註24〉

福岡県教育委員会が九州縦貫自動車道築造に伴って発掘調査を実施したもので、京ノ尾遺跡の東700mの位置にあった古墳群で新旧2時期の古墳がある。古式の古墳は方墳で5基あったが、4世紀代の古墳である。それらの古墳を利用して6世紀中葉の前方後円墳が築かれている。また、他に6世紀後半の2基の古墳(1基は円墳)が築かれていた。

以上4地区の古墳群を見てきたが、牛頸窯跡群操業期間に限れば、佐野地区では該当するものが今のところない。他の3地区はそれぞれ特徴的である。上大利地区では明確な古墳がなく、窯を利用した特異な形態の葬法が認められたし、春日地区では古墳が3基程度ずつ分散して造られていたし、牛頸地区では最大規模の10基以上の古墳群が2群認められると同時に、春日地区同様構成基数が少数の古墳群も分散しているという状況であった。古墳群は11群認められたが、牛頸窯跡群操業期間内に限ると9群になる。今便宜上10基以上を大型の古墳群、1~3基を小型の古墳群、その中間を中型の古墳群とすると、大型の古墳群が中通古墳群と後田古墳群の2群、中型の古墳群が春日塚原古墳群の1群、小型の古墳群が向谷古墳群、春日平田西古墳群、日ノ浦古墳、月ノ浦古墳群、小田浦古墳群、胴ノ元古墳の6群となる。さらに、後田古墳群の11号墳と中通古墳群の南支群を別の支群と考えると、小型の古墳群が8群となる。それぞれの使用期間は252ページに掲げている(第30表)。

また、副葬品でも違いが見られ、窯掘削工具と考えられる鉄製U字型鋤先は後田古墳群や、小田浦古墳群・中通古墳群で出土しているが、その他の古墳群では明確でない。装身具類は中通古墳群で顕著である。

(4) 集落と古墳の関係

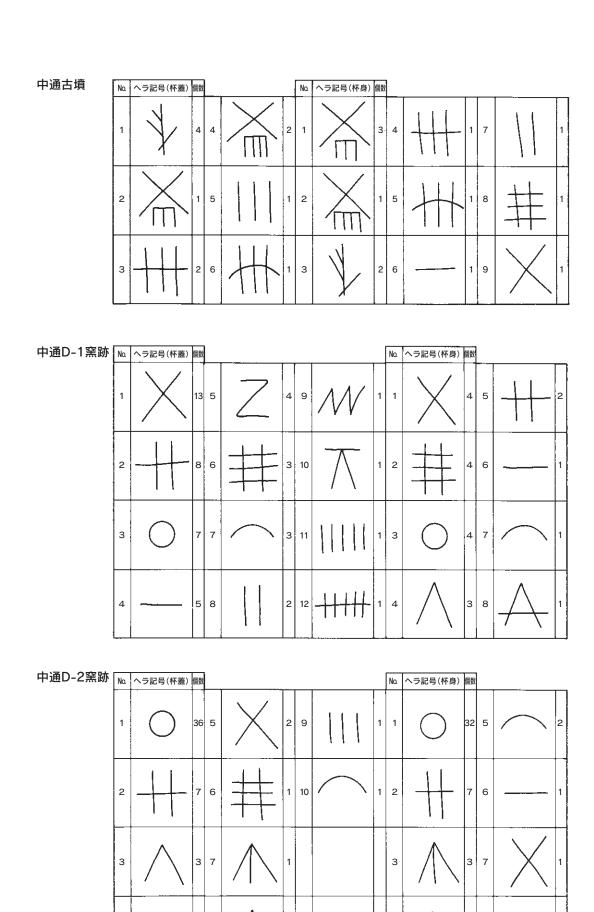
古墳群と集落遺跡の関係は明確ではないが、それらのあり方から考えられることをまとめておきたい。

春日塚原古墳群は墓道が日ノ浦遺跡方向に伸びていることから、位置関係からも相関関係がある 蓋然性が高いと考えたいが、断定はできない。現在知られている古墳時代の集落では春日平田遺跡 が最大規模であるが、同遺跡の周辺では春日平田北古墳群が3基、春日平田西古墳群が3基と小規 模な古墳群が散在する状況である。牛頸窯跡群内で最大規模の中通古墳群は19基からなり、眼下 には牛頸川が作り出す平地があるが、近辺には集落が見当たらず、塚原遺跡が最も近い集落となる。 後田古墳群は11基からなり、中通古墳群に次ぐ規模であるが、山間部に造られ、近辺に集落を形 成できるような平地はない。梅頭窯跡での特異な葬法については前述し、視覚的効果はないことを述べたが、後田古墳群の場合も近くによれば墳丘が見えるが、あまり眺望の利く場所ではない。同古墳群から最も近い集落は日ノ浦遺跡や塚原遺跡である。胴ノ元古墳は牛頸地区の中央部に位置しているが、ここから最も近い集落も塚原遺跡である。小田浦古墳群や月ノ浦古墳からも最も近い集落も塚原遺跡である。牛頸地区では、今までの発掘調査や試掘調査の結果新たに大集落が発見される可能性は低いと考えている。従って今まで述べた集落が牛頸地区のおおむねの様相を示していると考えられる。また、古墳群も同様である。集落と古墳を概観した結果、地理的な位置関係からだけでは、特定の集落と墓地とを関連付けるのはかなり難しい。しかし、上記の様相は社会的な意味から見れば、塚原遺跡や日ノ浦遺跡さらに春日平田遺跡や春日平田西遺跡などが古墳群の中心に位置していると言う事ができるのではないだろうか。この見方が許されるならば、一見グループ分けしにくく見える集落遺跡も実はいくつかの集団から形成されていて、その集団ごとに墓域を定めて古墳を造っていたということができるのではないだろうか。中通古墳群や後田古墳群を形成した集団は大きな集団ということができ、その他3基程度の古墳群を形成したのは小さな集団で、それらの集団が複数あったという見方である。

これがおおよそ正しいならば、須恵器蓋杯に多く見られるへラ記号の状況は興味深い。牛頸窯跡群では蓋杯のへラ記号は付けられる割合が他の窯跡群に比べかなり高いと考えられるが、かつて『中通古墳群 II』(1982年)の報告書の中で、中通 $D-1\cdot2$ 号窯跡のヘラ記号について述べたことがあった。6世紀末から7世紀中ごろの窯跡群であったが、D-1号窯跡では49個の蓋に12種類のヘラ記号があり、その中の1種類が13個とやや多く、4種類が4~8個、残り7種類は1~3個であった(第139図)。D-2号窯跡でも、54個の蓋に10種類のヘラ記号があり、1種類が36個と飛びぬけて多く、もう1種類が7個とやや多く、残り8種類は1~3個という状況であった。種類が多いため、記号の中には複雑なものもある。そうしないと区別が付けられなかったからであろう。古墳群と集落の関係について考えたことと、ヘラ記号の様相は似ていると言えないだろうか。古墳群は9(11)群あって規模別に分けると大型が2、中型が1、小型が6(8)群であった。ヘラ記号では種類が多いが、そのうちの1つが多く、それに次ぐものがいくつかあり、その他は少ない。両者の数は一致せず、古墳群の使用期間の問題もあるが、様相は似ていると言って良いと考える。

これが的を得たものであったら、循環論法的になるかもしれないが、ヘラ記号の役割は生産者側 の必要性のためつけられたことになる。つまり、集団の製品を仕分けする必要があったため、他の 集団のヘラ記号と違うさまざまなヘラ記号をたくさん付ける必要があったことになる。

しかし、これは春日地区と牛頸地区で言えることであり、上大利地区では古墳が見つからず梅頭 窯跡などに見られるような特異な墳墓が見つかっているなど様相を異にしている。窯跡群・集落・ 古墳群の有機的検討は今後の課題である。



第139図 中通古墳、中通D-1・D-2窯跡出土蓋杯へラ記号一覧 (『牛頸中通遺跡群II』 1982より)

3

2 8

- 註1. 丸山康晴·平田定幸編『春日地区遺跡群IV』春日市教育委員会 1986
- 註2. 同上
- 註3. 同上
- 註4. 『春日市史 上』春日市 1995
- 註5. 同上
- 註6. 同上
- 註7. 舟山良一編『上園遺跡I』・『上園遺跡II』大野城市教育委員会 1986・1987
- 註8. 石木秀啓編『本堂遺跡Ⅳ』他 大野城市教育委員会 2008
- 註9. 西健一郎編『九州大学埋蔵文化財調査報告-九州大学筑紫地区遺跡群-』第一冊~第四冊 1992~1995 横山浩一「須恵器製作用叩き締め道具の新例」『東アジアの考古と歴史』下 1987
- 註10. 徳本洋一編『日ノ浦遺跡』大野城市教育委員会 1994
- 註11. 徳本洋一編『塚原遺跡群』大野城市教育委員会 1995
- 註12. 宮崎亮一編『太宰府・佐野地区遺跡群21』太宰府市教育委員会 2006
- 註13. 太宰府市教育委員会井上信正・宮崎亮一氏によるご教示。
- 註14. 丸山康晴編『春日地区遺跡群V』春日市教育委員会 1987
- 註15. 『春日市史 上』春日市 1995
- 註16. 『春日市史 上』春日市 1995
- 註17. 『春日市文化財年報6-平成9年度-』春日市教育委員会 1999
- 註18. 徳本洋一編『塚原遺跡群』大野城市教育委員会 1995
- 註19. 舟山良一編『牛頸後田·小田浦古墳群』大野城市教育委員会 1992
- 註20. 同上
- 註21. 徳本洋一編『牛頸胴ノ元古墳』大野城市教育委員会 1995
- 註22. 徳本洋一編『日ノ浦遺跡』大野城市教育委員会 1994
- 註23. 狭川真一編『宮ノ本遺跡II-古墳・墳墓編-』太宰府市教育委員会 1987
- 註24. 石山勲編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXIV』福岡県教育委員会 1978

7. 支群設定

(1) はじめに

牛頸窯跡群では支群の設定は学史的に小字名をとって行われてきた。範囲の広い窯跡群の中でお およその位置を明らかにする点では便利であるが、考古学的な意味を持つものではない。牛頸窯跡 群の生産体制や生産構造が明らかになるような有意な支群設定が行われなければならないことは明 確である。この意味では学史的に上野精志氏が河川流域を中心に地形等を考慮して5つの支群設定 を行ったことがある。すなわち、①牛頸川下流域に当たる春日市内一帯の春日支群、②平田川両岸 の上大利支群、③牛頸川上流域の牛頸川支群、④牛頸川の支流である平野川流域の平野川支群、太 宰府市域の大佐野支群である。これは、前項の集落と古墳を述べた時に設定した4つの地域のう ち、牛頸地区を牛頸川支群と平野川支群に分けた形であって、その他の4地域は地域的に一致する。 ただし、上野氏は太宰府市に属する支群を大佐野支群としたが、本書では佐野地区とした。これは 太宰府市の報告書で使用している地域名によっている。上野氏の支群設定は、河川の流域を中心に した分け方であるが、集落と古墳の項で述べたとおり、各支群(地域)はそれぞれ特徴を見出せた ことから意味のある支群設定と考える。集落と古墳の項では、佐野地区で須恵器工人に関連する集 落は見出せなかった。窯跡の数も比較的少ないことから、佐野地区は上大利地区の工人の影響下に あると見て、1つに考えても良いかもしれない。調査した窯跡が300基を超えた現在、この項では、 前項で見た集落や古墳ともからめ、窯構造や出土遺物から同じグループと考えて良いものを抽出で きるか、そしてそれはある有意な群とできるか、今まで述べたことと重なる部分もあるが、あらた めて検討を加えてみたい。

(2)特徴的なグループの抽出

(i) 時期と規模の異なる窯跡が2基並列する窯跡群

ここで取上げるものはIV期に属する窯跡とVI期に属する窯跡が並列するものである。付録で付けたCDに群ごとの地形実測図を掲載しているが、その第14図の後田63地点の場合は I 号窯跡が大型でIV期、II 号窯跡が小型でVI期の窯跡であったが、まるで寄り添うように造られている。 I 号窯跡の窯体からは II 号窯跡の製品としか考えられない須恵器が出土している。小田浦50地点(同第18図)も同様である。さらに小田浦40地点(同第17図)の場合 I 号窯跡がIV期の大型の窯で、II 号窯跡は小型窯であった。ただし、この場合 II 号窯は築造途中で崩壊したものらしく、一度も使用していないもので遺物もない。その意味では窯跡とは呼べないものかもしれないが、おそらく同様な形で造られようとしたものと考えられることから II 号窯跡としたものである。小田浦39地点の I 号窯跡と II 号窯跡(同第20図)、小田浦79地点の3号窯跡と4号窯跡(同第21図)も同様である。以上5地点で同じ現象が見られたが、すべて、牛頸地区でも平野川流域の後田窯跡群と小田浦窯跡群内のみの現象で、他の地域では見られない。時期的にもこの時期以外見られない。

(ii) 同時期で規模の異なる窯跡からなる窯跡群

主にWIA期(8世紀前半)に見られる状況である。和銅六年銘へラ書須恵器が見つかったハセムシ12地点(CDの地形実測図第8図)では、10基の窯跡があったが、うち2基は未焼成で、残り8基のうちV号窯跡とIX号窯跡の2基が大甕を焼ける大型の窯で、残りは長さが4m以下の小型の窯であった。ここでは大型の窯で大甕などの大型製品と小型の製品の両者、小型の窯で食器等の小型製品を焼き分けている。このような状況はハセムシ窯跡群内の18地点(同第4図)、20地点(同第5図)、22地点(同第9図)、井手窯跡群A-3地区(同第25図)、足洗川窯跡群C地区(同第31図)などで見られる。これらも牛頸地区それも牛頸川上流地域に限って見られる状況である。そして、この時期を最後にして8世紀後半は基本的に大甕が生産されなくなる。ただし、おおむね9世紀前半から中葉頃と考えている石坂窯跡群E地点では肥後系統の大甕が焼かれる。これは編年の項でも述べたとおり極めて異質な窯跡群である。

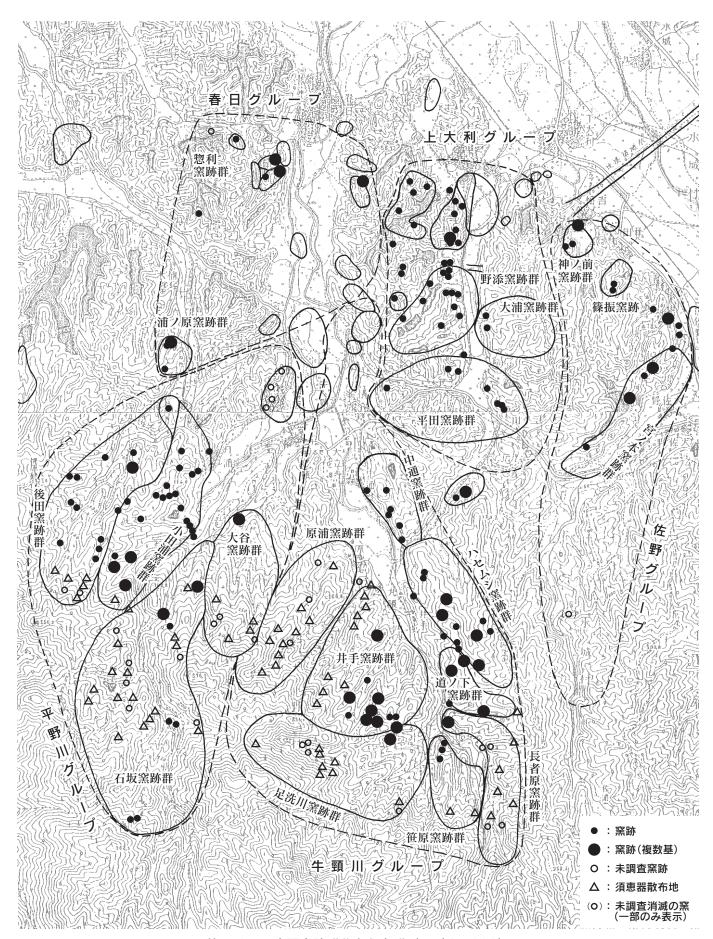
(iii) 排煙孔の形状に違いがある窯跡

牛頸窯跡群では、当初は単孔で焼成部床面の傾斜のまま排煙されるものから(傾斜煙道)、6世紀末頃に傾斜は同じだが、単孔から多孔式に変わり、さらに7世紀中頃から直立煙道タイプに変わっていく。そして、7世紀後半は多孔式煙道と直立煙道が並存し、8世紀代は直立煙道に変わることを述べた。しかし、直立煙道といわれるものの角度を良くみると、燃焼部側に内傾するものや反対に外側に外傾するものがある。まず7世紀後半のハセムシ27号窯跡の排煙孔は単孔で燃焼部床面の傾斜のままである。7世紀後半以降で外傾する角度が10度を超えるものをピックアップすると、佐野地区の長浦窯跡(15°)、神ノ前第4号窯跡(20°)、宮ノ本10号窯跡(15°)、向佐野1号窯跡(10°)、春日地区の浦ノ原7号窯跡(25°)、同8号窯跡(25°)、牛頸地区牛頸川流域の道ノ下14号窯跡(15°)、ハセムシ6ー皿号窯跡(40°)、井手X-1号窯跡(10°)、同2号(25°)、長者原65号窯跡(10°)、同68号窯跡(28°)となる。10度程度は機能的に問題なく無視していいのかもしれないが、外傾度の大きなものもあり一概に直立煙道とは言えないことに気づく。比較する窯跡数に違いがあってこれも確定的には言えないが、このように7世紀後半以降で煙道が外傾する窯跡数に違いがあってこれも確定的には言えないが、このように7世紀後半以降で煙道が外傾する窯跡は上大利地区と牛頸地区平野川流域には見当たらない(p.155 第11表参照)。

(iv) ヘラ書須恵器出土窯跡群

既述のように、牛頸窯跡群では5地点でヘラ書須恵器が出土しているが、窯跡からの出土としてはハセムシ窯跡群12地点、井手窯跡群A-4号窯跡の2地点である。しかも、ハセムシ12-IX号窯跡と井手窯跡群A-4号窯跡は窯の形態・規模・床面傾斜などもよく似ており、設計も同じ可能性があった。きわめて関係の深い窯と思われた。

これらは前述の「時期は同じであるが、規模の違う窯跡からなる群」と同様牛頸地区それも牛頸川上流地域に限って見られる状況である。



第140図 牛頸窯跡群分布と支群(1/25,000)

(v) 瓦陶兼業窯

既述のように瓦を焼成していた須恵器窯跡は可能性のあるもの1基を含め11基になるが、表採資料や推定を除くと9基になる。そして、分布図に示すとおり、位置的には神ノ前2号窯跡・大浦2号窯跡・野添13号窯跡・野添4次2号窯跡と月ノ浦I号窯跡・小田浦28地点・小田浦79-2号窯跡・大谷窯跡・浦ノ原4号窯跡の2グループが見られる。前者は佐野地区と上大利地区に属し、後者は春日地区と牛頸地区平野川流域地区に属する。中心は上大利地区と牛頸地区の平野川流域地区の比較的狭い範囲である。牛頸地区の牛頸川流域地区では見つかっていない。

(3) 検討

以上、5つの視点からグループの抽出に努めてみたが、それぞれ特色あるグループを抽出できたと思う。そして、上野氏が河川流域を中心に設定したグループと良く整合し理解しやすい状況であった。このことから、上野氏が行ったグループ設定が地理的だけではなく、歴史的にも意味を持つグループ設定であることを示すと考える。このことから上野氏設定のグループを踏襲することとしたい。ただ、各窯跡を呼称する時は、学史的に小田浦窯跡群や後田窯跡群などのような従来の小字を使用した支群名・窯跡名を使うのがわかりやすいことから、これも今までどおり使用する。この結果第140図に示したような窯跡群分布図ができる。ただし、どちらも「支群」とするとわかりにくいので、小字名を使用したものを「…支群」、河川を中心にしたものを「…グループ」とすることを提唱したい。

註1. 上野精志「福岡県小田浦窯跡の調査」『考古学ジャーナル』No.146 1978 文献:市14『小田浦遺跡群』1993

Ⅸ. 総括−牛頸窯跡群の占める位置−

1. はじめに

前章までに牛頸窯跡群における発掘調査成果のまとめを行った。この章ではそれらを受けて牛頸 窯跡群が歴史上に占める位置について検討してみたい。まず、前章までのまとめはそれぞれ分量が 多くなっていることから、視点を変革期を中心に据えてあらためて簡潔に述べたい。次に周辺だけ ではなく、九州一円の須恵器窯跡群の分布状況から須恵器生産の様相を概観し、牛頸窯跡群が持つ 歴史的位置付けについて検討したい。

2. 牛頸窯跡群における須恵器生産

牛頸窯跡群は現在の知見では、上大利地区の本堂遺跡14次調査1号窯の操業開始そして野添6号窯跡の操業開始をもって須恵器生産を開始した。その時期は6世紀中頃あるいはややさかのぼる6世紀前半のある時期と言える。福岡平野及びその周辺では、朝倉窯跡群の初期須恵器生産や新開窯跡、重留窯跡などでの須恵器生産が行われており、牛頸窯跡群の開窯はそれらに比べ遅いと言える。また、周辺でも裏ノ田窯跡群や岩長浦窯跡群など散発的に須恵器生産が行われていて、決してここ1ヶ所で須恵器生産が行なわれていた訳ではないことが判明している。しばらくは窯の数もそれほど増えず生産が続けられた。開窯当初の須恵器は蓋杯に同心円文当て具痕があるなど、陶邑窯跡群との関係が深いものと考えられる。

6世紀後半~末頃(III B期の終わり頃~IV A期頃)になると、最初の画期が訪れる。排煙部が単孔から多孔式になり、そこに弧状の溝が付くようになる。多孔式煙道と言われる排煙部の形態は現在のところ牛頸窯跡群でのみ見られるもので、朝鮮半島と瓦窯の関係が説かれている以外その系譜は明らかではない。多孔式煙道は7世紀前半をとおしてすべての窯に採用される。この時期は排煙部形態以外にも特徴が見られ、窯の平面プランが寸胴タイプのものも現れるし、規模も大きくなり、数も大幅に増える。最大規模の窯が作られるのもこの時期である。また、須恵器も法量、ヘラケズリなどの技法に多様なものがみられるようになり、分類しにくくなる。さらに須恵器窯で瓦も焼成するものが現れる。神ノ前窯跡群や月ノ浦窯跡群の軒丸瓦は無文あるいは蓮弁が窪むなど他に類例を見ないもので、これも百済との関係などが言われるが系譜は明らかではない。消費地としては、那津官家の所在地とされる比恵遺跡に隣接する那珂遺跡が知られていて、倭政権との関わりが推測できる。ただし、需要の少なさからか瓦は稚拙で専門の瓦工人が成立した可能性は低い。この時期には少ないながら陶棺も焼成されている。製法から吉備地方よりも近畿地方との関係が推測できた。このように窯構造上も生産の上からも画期として捉えられるのは6世紀後半~末頃であるが、幅をやや広くとって6世紀後半から7世紀はじめは全国的に見ても須恵器生産の変革期ととらえられている〈註1〉。

次の画期は7世紀中頃とすることができる。窯構造としては、直立煙道が登場し、規模が縮小し、

平面プランでは寸胴タイプが減り、胴張りタイプやバラエティーに富むものになる。ただし、多孔式煙道はすぐ消滅せず、少数ながら7世紀いっぱいは存続し、直立煙道と並存する。窯の規模も縮小し長さが3~4mほどになってしまうが、大甕を焼成する場合は長さ7mほどの窯を造り、焼き分ける場合がある。

また、この時期には須恵器そのものにも大きな変化が見られる。いわゆる古墳時代的な器種が減り、大きさも極小になり、次には高台付きの杯いわゆる杯Bをはじめ皿や鉄鉢など奈良時代に普遍的になる器種が登場してくるからである。なお、いわゆる杯Gや杯Bの場合、牛頸窯跡群ではつまみのない蓋が見られるが、近畿地方では基本的にない現象である。

奈良時代になると蓋杯の蓋からかえりが消滅するなどの製品上に変化が見られるが、生産の画期とできるのは8世紀半ば頃と考える。8世紀前半で大甕の生産を止めてしまうからである。ただし、製品的には、法量分化が最も進み編年しにくい時期となり、7世紀中頃の画期に比べて大きな変化が見えにくい。これ以後牛頸窯跡群は徐々に衰退に向かい始める。製品の特徴として、7世紀後半以降8世紀を通して高台の付かない杯(杯A)が極めて少ない。

8世紀から9世紀にかけての時期から9世紀前半頃は窯が激減し操業停止に至る時期である。大 宰府でもこれ以後の須恵器はほとんど見られなくなり、あっても肥後産などになる。

3. 九州の須恵器生産

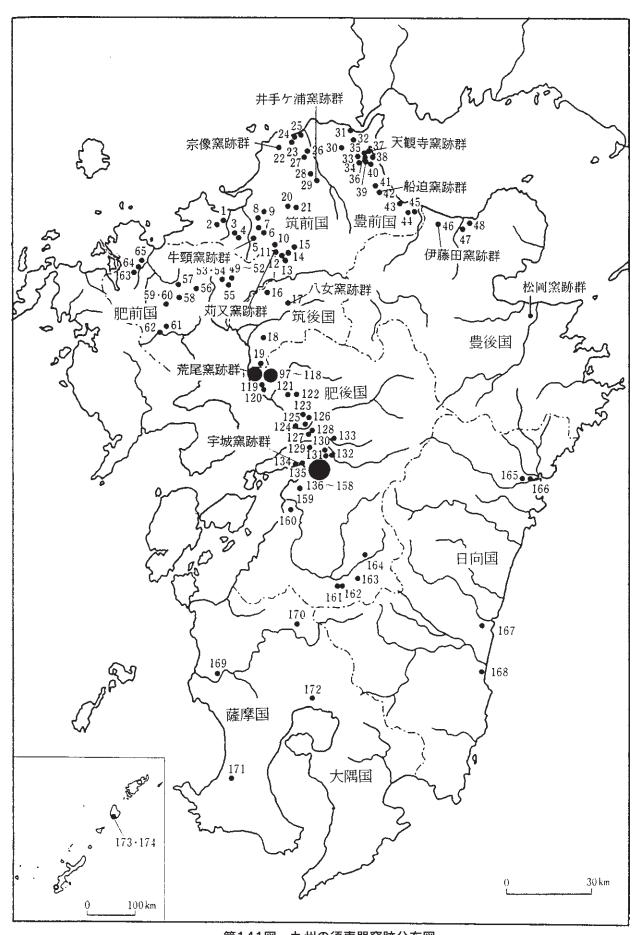
ここでは、牛頸窯跡群と九州の他の須恵器窯跡群との比較を行ないたい。このため、九州の須恵器窯跡群の様相について概観する。この点では舟山が『須恵器集成図録』第5巻西日本編(雄山閣出版1996)、同補遺編(1998)や窯跡研究会第2回シンポジューム『須恵器窯の技術と系譜』(1999)などで述べ、また石木秀啓が窯跡研究会第3回シンポジューム『須恵器窯の技術と系譜2』(2004)及び「牛頸窯跡群と九州の須恵器生産体制」『国立歴史民俗博物館研究報告』134(2007)で述べていることと重なる部分が多くなる。しかし、本書の性格上あらためてまとめてみたい。8世紀後半以降は石木秀啓の論考に拠る部分が多くなる。なお、上記の報告・論文は県ごと、あるいは旧国など地域ごとに記述したが、ここではなるべく時間軸に沿って空間的に広く見てみたい。牛頸窯跡群では窯構造上も生産器種の上でも7世紀中頃が大きな画期であったが、九州全体の須恵器生産という観点から見ると、鹿児島県など南部で本格的な須恵器生産が開始されるなど8世紀半ばで大きな変化が見られる。このことから、それ以前と以後で分けて述べたい。なお、地域を示す場合は律令体制成立以前でも律令時代の旧国名を使用したい。国名と現県名との対比は下記のとおりである。

筑前 - 福岡県北西部筑後 - 福岡県南部豊前 - 福岡県東部と大分県の北部の一部豊後 - 大分県北部を除く全域肥前 - 佐賀県と長崎県全域肥後 - 熊本県

日向-宮崎県全域 大隅-鹿児島県東部 薩摩-鹿児島県西部

(1) 8世紀中頃までの須恵器生産

当該時期のうち特に古墳時代の窯跡は肥後中部から豊前北部すなわち熊本県中部から大分県北部



第141図 九州の須恵器窯跡分布図 (『窯跡研究会 第2回シンポジウム発表要旨集』1999より)

以北に限られ、いわゆる南九州では発見されていない。

北部九州では初期須恵器の時期から生産が行なわれている。筑前地方では福岡県朝倉窯跡群と総 称される小隈窯跡群、山隈窯跡群、八並窯跡群と、筑紫野市の隈西小田窯跡群があり、豊前地域で は居屋敷窯跡が知られている。

小隈窯跡群 (筑前: 筑前町、第141図14) 〈註2〉

保護のための確認調査以外発掘調査は行われていないが、2基知られている。甕の口縁部に施される波状文が特徴的である。陶邑編年 $I-1\sim4$ (T K73 ~23)頃の遺物が採集されている。比較的少数の窯跡群で長く継続しない。

山隈窯跡群 (筑前: 筑前町、第141図13) 〈註3〉

小隈窯跡群の南西約1km に位置し、1989年に九州大学によって部分的な発掘調査が行われ4 基確認されている。甕、壺、有蓋高杯、無蓋高杯、器台、腿、樽型腿、甑、手づくね把手付小壺、ジョッキ形土器、糸巻き形の手づくね土器、円筒埴輪などが出土している。小隈窯跡群同様陶邑 I – 1 ~ 4 (T K 73 ~ 23) 頃のみに操業されたものと考えられる。

八並窯跡群 (筑前: 筑前町、第141図15) 〈註4〉

小隈窯跡群の北北東4 km に位置していて3基確認されているが、発掘調査はされていない。やはり陶邑 I-1 (TK73) 頃の須恵器が採集されている。

隈西小田窯跡群 (筑前:筑紫野市、第141図10) 〈註5〉

小隈窯跡群の北西 5 km に位置し、2 n所で 5基の窯跡が発掘調査されている。8地点 1 号窯跡の残りが良く、全長 9 m、最大幅 2 mを測る地下式の窯である。側壁は窯体前面に出る部分でほぼ直角に開き前庭部が長方形状を呈する。時期については出土須恵器から、3基がおおむね $I-1\sim2$ (TK73 ~216)、1基が $I-3\sim5$ (TK208 ~47) 頃とされる。

居屋敷窯跡(豊前:みやこ町、第141図41)〈註6〉

この時期の窯跡は以上筑前と豊前で発見されているが、それぞれの窯跡群では窯数が1~5基程度と少なく、かつ長く継続しないことが特徴としてあげられる。また、朝倉窯跡群出土須恵器が加耶地域の陶質土器に似ていることや、同窯跡群近くの渡来人の墓と想定されている朝倉市(旧甘木市)の古寺・池の上墳墓群出土土器〈註7〉、あるいは居屋敷窯跡出土のスタンプ文のある特異な甕などの存在から、陶邑窯跡群からの一元的な技術移転ではなく、朝鮮半島の人々との直接的な交流によって生産が行なわれた可能性が考えられる〈註8〉。

次に田辺昭三氏が、須恵器生産が陶邑から地方へ波及する最初の拡散期とされたTK23型式頃の時期の窯跡として〈註9〉、福岡市の新開窯跡、佐賀市の神籠池窯跡が知られている。その次の時期(TK47頃)の窯が宗像市の宗像窯跡群の1支群である日焼原窯跡群の1号窯跡や福岡市重留窯跡である。

新開窯跡 (筑前:福岡市、第141図2) 〈註10〉

1971年日本考古学協会生産技術特別委員会窯業部会の事業として小田富士雄氏らによって 1 基発掘調査された。操業はより古い時期までさかのぼる可能性があるが、中心は小田氏編年の I B期 $(I-3\sim5)$ (T K 208 \sim 47) である。表採資料は II-1 (M T 15) まで含まれることから、他に $2\sim3$ 基ある可能性も指摘されている。

神籠池窯跡 (肥前:佐賀市、第141図49) 〈註11〉

帯隈山神籠石の列石下方にある窯であるが、発掘調査はされておらず、池周辺で須恵器が表採されていることから知られる窯である。従って基数なども不明である。須恵器は蓋杯、無蓋高杯、器台などがあり、小田氏編年の I B期($I-3\sim5$)(T K $208\sim47$)のものである。ただし、この池からはより新しい須恵器も表採できる。

稲元日焼原1号窯跡(宗像窯跡群)(筑前:宗像市、第141図22)〈註12・13〉

宗像市には3ヶ所に分かれて多くの須恵器窯跡群があり、総称して宗像窯跡群と呼んでいる。最も多いのが孔大寺山から南西に伸びた丘陵に展開する窯跡群で、それぞれ稲元日焼原窯跡群、須恵須賀浦窯跡群などと、大字や小字を使用して窯跡名としている。時期的にはこの稲元日焼原1号窯跡(5世紀末頃~6世紀初め頃)を最古に7世紀中頃までの窯があると考えられているが、沖ノ島の奈良時代の供献須恵器は地理的にはこの地で焼かれた可能性が高いと考えるので、奈良時代の窯跡も発見される可能性はある。また、総数は100基を超えると推定されており、筑前地方のみならず、九州全域からみても牛頸窯跡群に次ぐ規模の窯跡群である。日焼原1号窯跡は4基並存していたうちの1基で宗像窯跡群でも最も古い窯跡である。地下式の窯跡で須恵器は小田編年のII期とされる。陶邑編年ではI-5(TK47)からII-1(MT15)頃に当たると考えられる。

なお、同窯は溝を附設するが、九州ではもちろん、出雲の門生山根1号窯跡〈註14〉とともに 溝を付ける最も古い例となる。また、蓋杯に付けられるへラ記号は日焼原窯跡群のものは外面に付 けられるが、それ以後の窯では他の遠賀川流域の窯と同様に内面になり、なんらかの規制が想定で きる。

重留窯跡(筑前:福岡市、第141図1)〈註15〉

福岡市教育委員会によって発掘調査されたが、地下式の窯で平面プランは胴張りで全長9m、最大幅2.5mの大きさである。出土した蓋杯は陶邑 I - 5 (T K 47) に近く、高杯は長脚化が始まっていて II - 1 (M T 15) に近い。小田編年では II 期に分類される。付近に他の窯は知られていない。この時期の窯跡群は以上筑前と肥前で発見されているが、前代同様各窯跡群は基本的に少数の窯で構成され、長く継続しないものが多い。しかし、宗像窯跡群はこれ以後7世紀中頃までは継続して操業される。従って、九州地域須恵器生産の画期の1つとして考えられると思う。

次の時期は牛頸窯跡群が開窯する6世紀前半から中頃にかけての時期並びに6世紀後半頃であるが、この時期は前代と比較して非常に多くの場所で窯が築かれるようになる。

裏ノ田窯跡群(筑前:太宰府市、第141図6)〈註16〉

朝鮮式山城として有名な大野城跡の西側山麓に形成された窯跡群で大小2基から成る。1号窯跡が大きく6世紀中頃から7世紀初頭頃まで操業され、2号窯跡は小さく7世紀前半から中頃のもの

と考えられる。どちらにも溝が附設されていた。大小時期の違う窯のあり方は牛頸窯跡群の西部で 見られた様相に似ている。

雉子ケ尾窯跡群 (筑前:大野城市、第141図7)

裏ノ田窯跡群の北約900m に位置し、2基検出されている。胴張りプランで溝は附設されていない。2基とも6世紀後半(ⅢB期)のものである。

岩長浦窯跡群 (筑前:字美町、第141図8) 〈註17〉

2基発見され、胴張りプランで両者とも溝を持つ。ⅢA期~ⅢB期にかけてのもので、6世紀中頃から後半にかけての時期のものである。

野間窯跡群 (筑前:岡垣町、第141図23)〈註18〉

玄界灘近くに位置し、稲元日焼原窯跡群との距離は約6.3kmである。地下式の窯が3基発掘調査されたが、1・3号の2基は胴張りの平面プランで溝を持つ。2号窯跡は直立煙道タイプを示し溝は持たない。須恵器はⅢB期、ⅣA期のものであることから、6世紀後半から6世紀末~7世紀初め頃と考えられる。

古門窯跡群 (筑前:鞍手町、第141図26)〈註19〉

古月窯跡群に含まれ、6基見つかったが保存されたため完掘したものはない。地下式で胴張りプランを持つ。3号窯跡は長さ17m、幅3mもある大きなものである。蓋杯内面に同心円当て具痕を残すものがあるが、外面に平行タタキ痕を残すものがある。ⅢB期からⅣA期にかけての須恵器が出土しており、野間窯跡群と同様な時期と考えられる。

井手ケ浦窯跡群 (筑前:飯塚市、第141図29) 〈註20〉

飯塚市教育委員会によって4地点9基の窯跡が確認されていたが、発掘調査されたのは6基であった。しかし、今年度福岡県教育委員会によってさらに4基発掘調査された。合わせて10基調査されたことになるが、確認されている窯があと3基あり、さらに数基ある可能性もある〈註21〉。ⅢB期からⅣB期のものであったが、Ⅵ期の須恵器も出土していることからその時期の窯も想定できる。これらのことから、同窯跡群は6世紀後半から7世紀初頭頃を中心に操業を行なう15基程度の須恵器窯跡群と考えられる。窯体は地下式の窯で基本的には胴張りプランで溝を持つものである。なお、ここからは三足壺が出土している。

野間窯跡群、古門窯跡群、井手ケ浦窯跡群は遠賀川流域地域にある窯跡群で、その製品はヘラ記号が蓋杯内面に記されること、塵などに台付きのものが見られること、樽形の横瓶が見られること、さらに杯蓋の天井部と体部の境の沈線などが残ることなど、地域的特徴の強い製品を焼成する窯跡群が展開する。

八女窯跡群 (筑後:八女市、第141図17) 〈註22〉

筑紫国造磐井の墓とされる岩戸山古墳をはじめ石人山古墳などが造られる八女丘陵の東端部と言える場所に形成される窯跡群で、1968年から1971年までに小田富士雄氏らによって10基の窯跡が発掘調査された。ⅢA期からⅧ期までつまり6世紀前半~中頃から8世紀まで継続する窯跡群である。ⅢA期の中尾谷1~3号窯跡は胴張りで長大である。ⅢB期の塚ノ谷4号窯跡は長大であるが寸胴プランであり、溝を附設する。V期~ⅥA期の塚ノ谷1号窯跡はわずかに胴張りで焼成部上

位が削りだしによって7段の階段状になっている。VIB~VIC期の塚ノ谷2号窯跡は竪坑を掘った後スサ入り粘土で天井を架けて埋め戻すいわゆる半地下式の構造である。九州地域では豊前を除いてきわめて珍しい。VII期の菅ノ谷1号窯跡は地下式で全長5.2m、最大幅1mを測る。塚ノ谷1・2・4号窯跡は半地下式であることが窯構造面から見て最大の特徴である。塚ノ谷1号窯跡の階段状の床面も九州ではあまり見られない特徴である。また、今のところ基数がどれほどのものか不明であるが、6世紀中頃から8世紀まで継続して須恵器生産が行なわれ、その製品は肥後地域でも見られるなど、筑後の拠点的窯跡群として重要である。

苅又窯跡群(筑後:小郡市、第141図11)〈註23〉

ニュータウン造成に伴って、小郡市教育委員会が1990(平成2)~1993(平成5)年に発掘調査したもので、近接した4地区で7基の窯が見つかっている(第142図下)。1基は操業前の空焚き段階で崩壊したと考えられたもので、実際に須恵器焼成を行ったのは6基であった。すべて地下式で胴張りプランを呈し溝を持つものであった。床面の重なりは基本的になく焼成回数は少ない。時期的には小田編年Ⅲ B期にほぼ収まることから6世紀後半頃の短期間の操業と言える。製品を見ると蓋杯内面のナデ調整に八角形状にナデている場合や、ヘラ記号がすべて蓋杯内面に付けられることなど消費地で見分ける際の指標になるものがある。これらの特徴から供給範囲が想定しやすく、おおむね三国丘陵内2.5kmの範囲と考えられている(第142図上)。この範囲内には装飾古墳として有名な五郎山古墳がある。報告者は首長墳の五郎山古墳と周辺の群集墳にそれぞれ副葬品として供給されている状況は、須恵器生産が首長を頂点とした地域的なまとまりの中で行なわれていたことを示唆していると指摘している。また、弧状の溝について、九州ではそれまで排水溝としてきたことに対し作業路として積極的な論を展開している。さらに、燃焼部には天井がなかった可能性にも言及していて問題提起を行なっている。ただし、製品は福岡市タカバン塚出土品〈註24〉にも苅又製と考えられる内面にへラ記号を持ち黒味がかった蓋杯もあり、それが正しいなら部分的には遠くまで運ばれたものもあったことを考えておかなければならないだろう。

天観寺山窯跡群(水晶山系窯跡群)(豊前:北九州市、第141図37)〈註25〉

東に周防灘を望む独立丘陵上に立地していて、10基の窯跡が1956、1970そして1974年(昭和49年)にわたって小田富士雄氏らによって発掘調査された。さらに2基以上はあったものと推定されている。地下式で長さ10m前後、最大幅 $1.6 \sim 2.3$ m程度の規模であった。調査された10基のうち8基が1V期(6世紀末から7世紀前半)、2基が1V期(1世紀前半から中頃)のもので比較的短期間の操業である。 1 区12号窯跡は12 V期のものとされるが、それ以前の傾斜煙道タイプのものであるのに対し、直立煙道を採用している。時期的には牛頸窯跡群とあまり変らない時期と考えるが、長さは依然長大なままである。製品を見ると11 V期ですでにヘラケズリしない蓋杯が多く見られることや甕口縁部の文様がヘラによる斜線文と波状文が見られ、波状文がなくならないことが特徴として上げられる。

船迫窯跡群(豊前:築城町、第141図42)〈註26〉

船迫窯跡群は堂がえり窯跡群、茶臼山東窯跡群、宇土窯跡群の総称である。茶臼山東窯跡群は6 世紀後半の須恵器窯跡4基、7世紀中頃の瓦陶兼業窯1基からなる。瓦陶兼業窯は地下式で溝を持 つ。堂がえり窯跡群は4基知られるが、1・2号窯跡は豊前国分寺の瓦を焼成した窯であり、3・4号窯は6世紀末~7世紀初頭頃に須恵器を生産した後に7世紀後半に再利用して瓦を焼成した窯で、窯の使用期間を考える際の1つのモデルとなるものと考えられる。4号窯跡は地下式で焼成部上部に階段状に浅い溝を掘り込んでいる。工房も見つかり(堂がえり遺跡)国の史跡と指定されている。宇土窯跡は1基が確認されている。従って船迫窯跡群では須恵器窯が8基確認されていることになる。

向野山窯跡群(豊前:苅田町、第141図38)〈註27〉

2基あったが、応急的な調査であったため、全容は不明である。窯体内から蓋杯のセットが22 出土したが、正位のものと逆転したものが半数づつあった。IVA期(6世紀末から7世紀初頭頃) のものとされ、蓋杯の逆転現象がこの時期にすでに見られることが注目された。

照日窯跡群(豊前:新吉富村、第141図44)〈註28〉

大分県境に近い位置であり、4基発掘調査されたが、3基がⅢB期で6世紀後半の須恵器窯、1基が7世紀後半の瓦陶兼業窯であった。6世紀後半のものは地下式で寸胴タイプの平面形を呈し、溝を附設するものである。

伊藤田窯跡群(豊前:中津市、第141図46)〈註29〉

6世紀後半に開窯し、8世紀後半から9世紀まで操業を継続したとされる窯跡群で70基ほどの規模と推定されている。九州内では牛頸窯跡群の約500基、宗像窯跡群と荒尾窯跡群の約100基に次ぐ規模の窯跡群で豊前では最大の窯跡群である。九州内では地下式が多いのに対し、半地下式の窯の多いのが最大の特徴であろう。6世紀後半から7世紀初頭頃までは寸胴タイプのものが多く、7世紀前半頃に胴張りのものが現れるようである。蓋杯のヘラ記号が内外両面に付けられるものがあって製品面の特徴となっている。

平原窯跡群(肥前:吉野ヶ里町、第141図55)〈註30〉

早稲隈山地区の発掘調査において確認されたものであるが、灰原のみの調査で窯構造等詳しいことはわからない。写真図版で掲載された遺物から6世紀後半から7世紀はじめの頃の窯と推定できる。肥前では珍しい。

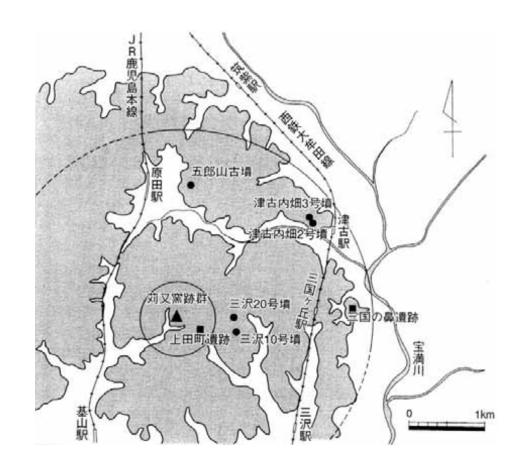
宇城窯跡群 (肥後:不知火町他、第141図134) 〈註31〉

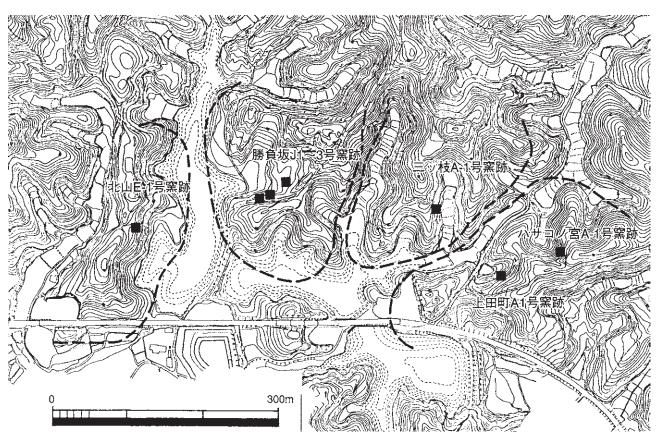
肥後でもっとも早く開窯する窯跡群で、その時期は6世紀後半頃とされている。また、9世紀まで継続して操業される。窯場として約20ヶ所30~40基が知られている。元米ノ山窯跡は1967年に地元の宇土高校郷土史研究クラブによって調査されている。全長12m、焼成部幅1.8mを図る。蓋杯の中には天井部と体部の境目に明瞭な沈線を施す蓋もあり、時期を示している。

荒尾窯跡群 (肥後:荒尾市)

8世紀後半に生産が盛んになるが、開窯は6世紀後半とされる。なお、8世紀代の項であらためて述べたい。

以上主に6世紀代に開窯する窯跡群を概観したが、前代に比べ飛躍的に窯場が増える。ただし、 筑前、筑後、豊前、肥前、肥後など九州北半分の地域である。この時期の窯跡群を見ると、2基程 度の小規模な窯跡群、苅又窯跡群・天観寺山窯跡群・船迫窯跡群などのように10基あるいはそれ





第142図 苅又窯跡群分布図並びに供給範囲図 (『苅又窯跡群V』1996より)

よりやや多い程度の窯跡群も現れる。ただし、これらは短期間のみの操業に終わるものがほとんどである。さらに宗像窯跡群・牛頸窯跡群・伊藤田窯跡群などのように長く継続する大規模な窯跡群の3種類の窯跡群が見られる。大規模な窯跡群は宗像窯跡群が5世紀末か6世紀はじめ、牛頸窯跡群が6世紀前半から中頃、伊藤田窯跡群が6世紀後半と開窯時期は少しずつ違っている。また、宇城窯跡群も大規模な窯跡群の可能性がある。

次に7世紀後半以降に開窯する窯跡群を見たいが、前代からの大規模窯跡群が操業を継続していて7世紀後半に開窯する窯跡群は少ない。8世紀代になると、それまで須恵器窯が見られなかった地域特に九州南部で多くなる。

7世紀後半に開窯する窯跡群は豊前でいくつかの窯跡群が推定されている。また、天観寺山窯跡群は水晶山系窯跡群に含まれるが、操業を停止して半世紀以上空白期間を経て7世紀末葉に生産が再開される(朽網原池窯跡)。他に肥前で当該期の窯跡が見つかっている。

四郎丸窯跡(豊前:豊前市、第141図43)〈註32〉

ブドウ園で須恵器と窯壁破片が採集されたため窯の存在が推定されたものである。おおむね7世 紀末~8世紀初頭頃のものであろう。円面硯が見つかっている。

山田東窯跡群(豊前:新吉富村、第141図45)〈註33〉

照日窯跡群の東150mに位置する窯跡群で一連のものと考えても良い。7世紀後半の創建とされる垂水廃寺とそこへ瓦を供給した友枝瓦窯跡の近くである。3基確認され、そのうちの1・2号窯跡が7世紀後半から8世紀とされる。

野森窯跡(豊前:宇佐市、第141図48)〈註34〉

1973年に小田富士雄氏らによってトレンチ調査が行なわれた。7世紀後半代の瓦陶兼業窯と推定されている。

向野山窯跡群(肥前:北方町、第141図60)〈註35〉

3基見られるが、遺物は採集遺物である。7世紀末頃から8世紀中頃のものと考えられる。 以上7世紀後半に開窯する窯跡群は少ない。

(2) 8世紀中頃以降の須恵器生産

8世紀から9世紀には前述のとおり、九州南部でも須恵器生産が始まる。筑前では牛頸窯跡群などの大窯跡群が操業を継続するが、小規模な窯跡群も若干見られる。

八尋窯跡(筑前:鞍手町、第141図27)〈註36〉

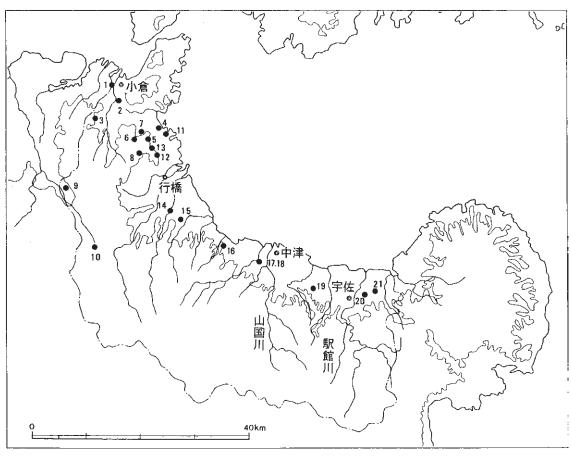
全長2.73m、幅1.15mの小型の窯跡が1基鞍手町教育委員会によって発掘調査された。8世紀中頃のものとされている。

広江窯跡(筑前:直方市、第141図28)〈註37〉

八尋窯跡の南東6.5km に位置し、1基市教育委員会によって発掘調査された。8世紀後半から 9世紀初頭頃とされる。

水晶山系窯跡群(豊前:北九州市)〈註38〉

トギバ窯跡群 (第141図36)、洗子窯跡群 (同33)、籾ノ粉池窯跡群 (同30)、御祖神社裏窯跡



	遺跡名	所 在 地	遺物	時 代	備考
1	到津都町窯跡	北九州市小倉北区到津都町町2丁目	須恵器	不明	未調査消滅
2	東宮ノ尾窯跡	北九州市小倉北区東宮ノ尾	須恵器	不明	未調査
3	籾ノ粉池窯跡群	北九州市小倉南区大字能行	須恵器・瓦塔	奈良~平安	一部調査
4	天観寺山窯跡群	北九州市小倉南区大字宇土	須恵器・土錘	古墳	調査消滅
5	トギバ窯跡群	北九州市小倉南区大字朽網字トギバ	須恵器・瓦塔	奈良末~平安	一部調査半壊
6	洗子窯跡	北九州市小倉南区大字宇土字御祖山	須恵器	平安	未調査
7	御祖神社窯跡	北九州市小倉南区大字宇土字御祖山	須恵器·瓦塔·硯	平安	未調査
8	山方里窯跡群	北九州市小倉南区大字山方里	須恵器・瓦塔	平安	未調査
9	天 郷 窯 跡	田川郡赤池町大字上野字天郷	須恵器	不明	
10	号四郎窯跡	田川郡川崎町大字田原	須恵器	奈良	未調査、採集
11	向野山窯跡	京都郡苅田町若久町3丁目	須恵器	古墳	調査消滅
12	莊 原 池 窯 跡	京都郡苅田町大字尾倉字荘原	須恵器	古墳	未調査消滅
13	殿川窯跡	京都郡苅田町大字南原	須恵器	奈良~平安	未調査消滅
14	居屋敷窯跡	京都郡豊津町大字徳永	須恵器	古墳	調査保存·半壊
15	船迫窯跡群	築上郡築城町大字船迫	須恵器・瓦	古墳~奈良	一部調査
16	四郎丸窯跡	豊前市大字船入	須恵器・硯	白鳳~奈良	
17	山田窯跡群	築上郡新吉富村大字安雲字照日	須恵器・瓦	古墳~奈良	調査消滅
18	照日窯跡群	築上郡新吉富村大字安雲字照日	須恵器・瓦	古墳~奈良	調査消滅
19	伊藤田窯跡群	大分県中津市三保区伊藤田	須恵器・瓦	古墳~奈良	一部調査
20	新 池 窯 跡	大分県宇佐市大字蜷木	須恵器	古墳	
21	野 森 窯 跡	大分県宇佐市大字西大堀	須恵器・瓦	白鳳	調査

第143図 豊前の須恵器窯跡分布図 (『照日遺跡群』1995より)

(同35)、山方里窯跡群 (同34) などからなる。古墳時代に操業された天観寺山窯跡群が操業を停止したあと、7世紀末に再開されるが、8世紀後半以降操業する窯が多い。これらの窯では瓦塔が生産されていたことが特徴としてあげられる。

松岡窯跡群(豊後:大分市)〈註39〉

豊後ではじめて見つかった須恵器窯跡群である。豊後地方ではこの時期集落等で見つかる土器について須恵器と土師器の割合は1:5程度といわれており、もともと須恵器は少ない。松岡窯跡群では全長7mほどの窯が4基調査された。半地下式であることが牛頸窯跡群などと大きく違う点である。また、器種構成が窯によって大きく異なっている。8世紀中頃から後半の時期とされる。2・3号窯跡からは円面硯が、1号窯跡からミガキを施した蓋と高台付の杯が出土している。

不動滝窯跡(肥前:佐賀市、第141図51)〈註40〉

発掘調査されていないので詳細は不明であるが、8世紀の須恵器が採集されていて窯の存在が推 定されている。

牧窯跡群 (肥前:北方町、第141図59) 〈註41〉

1976年に発掘調査され、3基確認されている。瓶子が多く出土している。

荒尾窯跡群 (肥後:荒尾市他) 〈註42〉

肥後最大の須恵器窯跡群であるが、発掘調査例が少なくまだ不明な点も多いが、6世紀後半には開窯し(大和窯)、8世紀後半から9世紀前半に生産のピークを迎え、規模としては60ヶ所100基ほどと推定されている。福岡県境に位置し、福岡県側の大牟田市域で発掘調査された窯跡もあり、旧国を越えた地域で1つの窯場を持つ異例の窯跡群である。牛頸窯跡群が衰退を始める8世紀後半以降隆盛期を迎えるようだが、荒尾市教育委員会によって発掘調査された皮籠田A窯跡は、8世紀代でも小型化せず、また、燃焼部が一旦下がり焼成部になるとまた上がりだすというように牛頸窯跡群の窯構造とはかなり異なっている。製品としても蓋杯に輪状つまみがあるが、これも牛頸窯跡群ではほとんど見ないものである。このように時期的には牛頸窯跡群と交代するように見えても窯構造、製品ともにあまり連続性が感じられない。むしろ9世紀代の牛頸窯跡群石坂E地点窯跡群出土須恵器に二重口縁の大甕や椀などに肥後の影響が感じられる。9世紀代の北山浦A号窯跡は焼成中に天井が崩壊したため製品がそのままの状態で発見された。焼成部に7段の段が作られ、下段に大型壺、その後方に小型壺、さらに後方に盤や皿を置いていた。壺の底部外面に同心円当て具痕が付けられるのが特徴である。

植木窯跡群 (肥後:植木町、第141図122)〈註43〉

鈴麦窯跡群で3基の窯跡が確認され、9世紀前半頃とされる。

下り山窯跡群 (肥後:人吉市、第141図162) 〈註44〉

9基の窯跡が確認された。分布状態から2地区に分けられている。また時期的にも大きく2時期があり、 I 期は8世紀後半から9世紀にかけての時期、II 期は $11 \sim 12$ 世紀頃とされる。もっとも実年代は論者によってやや違う。

苺田窯跡群(日向:延岡市、第141図165)〈註45〉

日向でも北部に位置する窯跡群で、2基確認されている。1基発掘調査され、10世紀を下らな

い時期とされている。

下村窯跡群(日向:宮崎市、第141図167)〈註46〉

旧佐土原町にある窯跡群で、主に灰原から多くの須恵器が出土している。小型の半地下式の窯であったとのことである。直線的に外に開く杯が多く、その終わりごろには充填高台も見られる。8世紀から10世紀のものと考えられている。

松ケ迫窯跡 (日向:宮崎市、第141図168) 〈註47〉

2基発掘調査されているが、さらに存在する可能性がある。窯は3m前後の小型のものである。 1号窯跡を8世紀後半から9世紀初頭、2号窯跡を8世紀中頃とされる。

鶴峰窯跡(薩摩:薩摩川内市、第141図169)〈註48〉

薩摩国府近くにあり、3基確認されたが、2基は瓦窯、1基が須恵器窯であった。8世紀前半代とされる。3号窯跡は燃焼部と焼成部の境に分焔柱、焼成部と煙道の境に支柱を持つ。

岡野窯跡群(大隅:菱刈町、第141図170)〈註49〉

窯跡4基と灰原が確認された。燃焼部と直立煙道の境に直径18cmの支柱を持つ。8世紀末から 9世紀初頭頃とされる。

以上主に8・9世紀代の九州南部の須恵器生産の様相を見たが、窯場が非常に少ないことが特徴としてあげられる。庭児島県万の瀬川上流の中岳山麓には須恵器窯が多く分布するようだが、発掘調査はなされていない。確認された窯跡は半地下式が多いようだ。また、支柱や分焔柱などがやや目に付く。支柱は山口県陶窯跡群にも見られるが、北部九州には知られていない。

4. まとめ

以上、牛頸窯跡群の須恵器生産と九州内のその他の須恵器窯跡群のあり方を概観した。九州内では牛頸窯跡群開窯前の初期須恵器の時代から須恵器生産が始められている。筑前南部地域の朝倉窯跡群や隈西小田窯跡群、豊前の居屋敷窯跡が知られるが、いずれも1~数基程度で操業期間も短い。朝鮮半島南部との関わりが想定された。次に5世紀後半すなわち陶邑 I - 4 (T K 2 3) 頃のいわゆる陶邑窯跡群から地方への拡散期には筑前の新開窯跡群、肥前の神籠池窯跡が操業を行うが、これも小規模短期間の生産である。これにやや遅れて5世紀末から6世紀初頭にかけての時期に筑前の宗像窯跡群が開窯する(I - 5、T K 47頃)。そしてこの宗像窯跡群は以後操業を継続し、7世紀半ばまでの操業が確認されている。前述のように8世紀代の操業も想定できる窯跡群で総基数は100基を超えると考えられている。長期継続する窯跡群の登場は九州における須恵器生産史の1つの画期とできる。筑前の中央部では6世紀前半頃に重留窯跡群が操業するが、これは継続しない。

6世紀半ばから後半にかけての時期には、操業を長期継続して大規模窯跡群といわれる窯跡群が 開窯する。まず筑前では牛頸窯跡群が6世紀中頃(あるいは前半)、筑後で八女窯跡群が同じ頃、 豊前南部の伊藤田窯跡群が6世紀後半に開窯する。豊前北部の天観寺窯跡群も6世紀末ころの開窯 であるが、7世紀前半から中頃まで操業を行った後生産を停止する。水晶山系窯跡群の1つとされ るが再開後は窯場が集中せず天観寺窯跡群とは様相を異にすると考えられる。これらのことから天 観寺窯跡群と再開後の窯跡群を他の長期継続する窯跡群とは分けて考えることが可能と思う。

6世紀から7世紀頃は旧国ごとに違った様相を見せる。筑前の福岡平野およびその周辺では岩長浦窯跡群や裏ノ田窯跡群など2基程度の小規模窯跡群と苅又窯跡群などのように10基程度の中規模窯跡群、そして牛頸窯跡群のような大規模窯跡群が見られる。小規模と中規模の窯跡群は基本的に短期間の操業で、福岡平野周辺の場合は牛頸窯跡群に収斂されるかのような状況を呈することになる。便宜的にこれらを小規模短期操業窯跡群、中規模短期操業窯跡群、大規模長期操業窯跡群と呼ぶことにする。この分類から筑前の遠賀川流域を見ると野間窯跡群などの小規模短期操業窯跡群と宗像窯跡群のような大規模長期操業窯跡群に分類できる。ただし、井手ケ浦窯跡群はやや基数が多くなる可能性と期間も長くなる可能性があり、中間的な様相を示すものかもしれないが、今は中規模短期操業窯跡群に入れておきたい。7世紀後半以降の宗像窯跡群の様相がまだ不明で、宗像窯跡群に収斂されるのかは発掘調査が進まないとわからない。

筑後は中央部に基数は不明ながら大規模長期操業窯跡群の八女窯跡群があり、北部に中規模短期 窯跡群の苅又窯跡群がある。八女窯跡群の古墳時代の製品は筑後に留まらず肥後でも見られ、流通 範囲の広さが注目される。

豊前はやや様相を異にしている。北部に中規模短期操業窯跡群の天観寺窯跡群があり、南部に大規模長期窯跡群の伊藤田窯跡群があり、その中間地帯に小規模短期操業窯跡群が点在する状況となる。

肥後は古墳時代では荒尾窯跡群と宇城窯跡群が操業を行なう。しかし、荒尾窯跡群では6世紀代の操業開始といわれるがその後しばらくは状況が明確ではない。

豊後、日向、薩摩、大隅は古墳時代の窯跡は知られていない。

8世紀それも中頃以降になると宗像窯跡群のように様相がはっきりしないものもあるが、九州北部域の大規模長期操業窯跡群は引き続き操業を続けながらも終息に向かうようになる。しかし、九州南部ではむしろこの頃から須恵器生産が始まる。

筑前の牛頸窯跡群は窯が小型化しつつも、操業を継続しているが、8世紀中頃を境に大甕を生産 しなくなる。そして9世紀前半~中頃で操業を停止する。また、八尋窯跡群や広江窯跡群のような 小規模短期操業窯跡群がわずかに見られる。

筑後は八女窯跡群が続くがやはり終息に向かう。荒尾窯跡群の支群的な大牟田市域の窯跡群が生産を行うが、荒尾窯跡群は牛頸窯跡群や八女窯跡群などとは逆に生産が活発になる。

豊後は8世紀中頃から後半代の松岡窯跡群が知られるのみである。

肥前は基本的に窯場が少なく、不動滝窯跡そして牧窯跡群が知られるのみで、散発的に須恵器生産を行うだけである。

肥後は北部の荒尾窯跡群が前述のとおり8世紀後半から9世紀にかけて最も生産が盛んになる。 また、植木窯跡群や球磨窯跡群など小規模な窯跡群が生産を開始する。南部の下り山窯跡群などは さらに11・12世紀頃にも操業を行なう。

日向、薩摩、大隅はこの時期須恵器生産を行うようになるが、発掘調査例が少ないこともあり、 詳細な状況が判明しない。網田龍生氏や石木秀啓は肥後の影響が強いと指摘する〈註50〉。肥後の 影響は、石坂E地点窯跡群のように牛頸窯跡群にも及んでいる。

以上まとめたが、九州の須恵器生産については8世紀中頃以前と以後では大きな違いが見られた。 8世紀中頃以前特に古墳時代では九州北部でのみの生産である。5世紀代は小規模短期操業窯跡群だけが知られるが、5世紀末になると大規模長期操業窯跡群が形成され始める。まず筑前の宗像窯跡群が最も早く5世紀末から6世紀初頭頃、次いで同じく筑前の牛頸窯跡群が6世紀前葉ないし中頃、筑後の八女窯跡群もほぼ同じ頃、豊前の伊藤田窯跡群が6世紀後半頃、肥後の宇城窯跡群も6世紀後半頃である。

先に宗像窯跡群の開窯期を九州における操業を長期継続する窯跡群の登場ということから1つの 画期と考えられるとしたが、牛頸窯跡群が開窯する6世紀前葉から中頃の時期をさらに大きな画期 と考えたい。その理由は多方面から論証しなければならないが、ヘラ記号の付けられる位置からも 推定できるのではないかと考える。6世紀前葉の政治上の大きなできごとは527~528年に筑紫 国造磐井が新羅と手を結び反乱を起こしたことと、536年那津官家が設置されたことである。須恵 器の年代観から言えば宗像窯跡群の開窯はこれらの前の出来事であるし、牛頸窯跡群の開窯はその 後のことである。宗像窯跡群では日焼原窯跡群の1号窯跡が最初の窯であるが、これを含めてここ ではヘラ記号が蓋杯の外面に付けられるが、その後の時期では内面に付けられる。牛頸窯跡群では すべて蓋杯では外面に付けられる。両窯跡群ともその後も操業を継続するが、宗像窯跡群のヘラ記 号の位置の変換はまるで規制されたかのごとくである。牛頸窯跡群の周縁部と言っても良い中規模 短期操業窯跡群とした苅又窯跡群や遠賀川流域の窯跡群の場合でもへラ記号は内面に付けられる。 宗像地域は国家の祭祀場と言われる沖ノ島があり、後代の7世紀後半には胸形の君徳善が娘の尼子 郎女を皇后とするなど強力な豪族宗像氏が支配した地と考えられるが、ヘラ記号についてはより大 きな政治的な権力によって規制された可能性を考えたい。九州北部の須恵器生産が再編成されたと 言える。このことから先に宗像窯跡群の開窯によって、九州北部に継続して操業される窯跡群が登 場し画期と考えられるとしたが、6世紀前半から中頃にかけての方がより大きな画期と言える。も ちろんへラ記号で歴史的な事柄に踏み込めるかという疑問も大きいのだが、その可能性を考えた。

牛頸窯跡群以外にも6世紀代には筑後の八女窯跡群、豊前の伊藤田窯跡群、肥後の宇城窯跡群などが操業を開始する。また、6世紀は全国的に見ても大規模な窯跡群が操業を開始する。『須恵器集成図録』第1~6巻〈註51〉によれば、備前の邑久窯跡群、北陸の小松窯跡群(南加賀窯跡群)、東海地方の湖西窯跡群、美濃須恵窯跡群、尾北窯跡群、関東の南比企窯跡群などがあげられる。大規模窯跡群の開窯は陶邑窯跡群で5世紀、猿投山西南麓窯跡群や千里窯跡群も5世紀代の窯跡が知られるが、6世紀は全国的に見ても1つの画期としてとらえられる。

牛頸窯跡群操業開始後の画期は6世紀後半~7世紀始めにみられた。多孔式煙道や溝付き窯の採用、そして窯の最大化、瓦陶兼業窯の登場などである。この時期は宇野隆夫氏によれば全国的に見ても新しく成立する窯跡群と衰退する窯跡群とがあり、須恵器生産の再編が行なわれ推古朝の画期と呼ばれる大きな変画期である〈註52〉。牛頸窯跡群ではこの後7世紀前半をとおして大規模に操業を続け、周辺にあった小・中規模の窯跡群はまるで牛頸窯跡群に収斂するように姿を消していく。

牛頸窯跡群の次の画期は直立煙道の採用などによる窯構造の変化と須恵器が古墳時代的なものか

ら律令時代的なものへと変わる7世紀中頃である。須恵器の変化はやはり猿投山西南麓窯跡群を除き全国的な動向と機を一にするものである。7世紀後半そして8世紀前半も筑前国では牛頸窯跡群以外ほとんど窯場が見られない。一国一窯体制といわれるような状況を見せている。また、須恵器の供給範囲はヘラ記号の検討などから古墳時代は福岡平野中心で比較的狭い範囲が想定されたが、奈良時代は国を越えて肥後・豊後などに広がる。

また、8世紀後半から牛頸では大甕を焼かなくなる。窯構造や須恵器の変化はつかみにくいが、この時期は九州南部でも須恵器生産が始まるなど九州での画期と考えられる。全国的にみても8世紀中頃以降に開窯する窯跡群は多い。関東の南多摩窯跡群、東北地方の須江窯跡群・大戸窯跡群・瀬谷子窯跡群などである。政権に近い場所より遠距離にあるところで生産を開始するのは九州北部と南部の関係に似ている。

そして牛頸窯跡群は9世紀前半あるいは中頃には操業を停止する。他の窯跡群を見ると湖西窯跡群や邑久窯跡群が9世紀前半、陶邑窯跡群や小松窯跡群(南加賀窯跡群)・南比企窯跡群・南多摩窯跡群が10世紀など、9~10世紀にかけて操業を停止する窯跡群が多い。

このように牛頸窯跡群は1つの地域窯の様相に留まらず、全国的な須恵器生産の動向と密接な関係が見られる。また、開窯は筑紫国造磐井の反乱終結後あるいは那津官家の設置後の時期に近いが、そうであれば当時の政治状況を反映することになる。さらに開窯期の須恵器は蓋杯内面の同心円文当て具痕の存在などから陶邑窯跡群の影響が考えられるが、前述した当時の倭政権との政治的関係を物語るものであることも充分考えられる。そしてその後近畿地方の影響を受けた陶棺も生産されていることなど関係が続くことがわかる。さらにはまだ明らかではないが、多孔式煙道は朝鮮半島の影響を受けた可能性があること、初期瓦は畿内よりやはり朝鮮半島の影響を考えた方が良いと思われることなど、近畿地方だけではなく朝鮮半島〈註53〉など多元的な影響を受けた可能性を持つ窯跡群であることがわかる。

遺物面では、多くの貴重な須恵器などが出土しているが、特にヘラ書き須恵器をあげたい。部民制を示す資料として6世紀後半とされる松江市の岡田山1号古墳出土鉄刀に次ぐ7世紀前半に編年される「大神部」と刻まれた大甕が本堂遺跡から出土している。同じくハセムシ窯跡群からは奈良時代の租庸調制を示し、和銅六年と製作年代のわかるヘラ書き須恵器が見つかっている。当時の様式に則った書式であることも重要である。

このように牛頸窯跡群は6世紀から9世紀にかけての日本史を語る上で、九州に留まらず全国的に見てもきわめて重要な生産遺跡である。

- 註1. 菱田哲郎『古代日本国家形成の考古学』京都大学学術出版会 2007 p.102など
- 註2.『甘木市史資料』考古編 1984他
- 註3. 九州大学考古学研究室「山隈窯跡群の調査」『九州考古学』第65号 1990
- 註4.『甘木市史資料』考古編 甘木市 1984
- 註5. 『筑紫野市史』資料編(上)考古資料 筑紫野市 2001
- 註6. 副島邦弘編『居屋敷遺跡』福岡県教育委員会 1996

- 註7. 橋口達也編『池の上墳墓群』甘木市教育委員会 1979
 - 同 『古寺遺跡群』甘木市教育委員会 1982
- 註8. 酒井清治「須恵器のはじまり」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集 2004
- 註9. 田辺昭三『須恵器大成』1981
- 註10. 小田富士雄「須恵器文化の形成と日韓交渉・総説編」『古文化談叢』第24集 1991 中村勝「福岡市新開窯跡群とその資料」『福岡考古』第15号 1991
- 註11. 『帯隈山神籠石とその周辺』 佐賀県教育委員会 1967
- 註12. 伊崎俊秋編『稲元日焼原』宗像市教育委員会 1989
- 註13. 自木英敏編『三郎丸堂ノ上C』宗像市教育委員会 2001
- 註14. 丹羽野裕「門生山根1号窯跡の構造について」『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡』島根県教育委員会 1998
- 註15. 横山邦継編『重留遺跡』福岡市教育委員会 1988
- 註16. 酒井仁男編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 X Ⅶ』福岡県教育委員会 1977
- 註17. 平ノ内幸治編『宇美観音浦』宇美町教育委員会 1981
- 註18. 橋口達也編『野間窯跡群』福岡県教育委員会 1982
- 註19. 上野精志編『古門窯跡』福岡県教育委員会 1973
- 註20. 島田光一『井手ケ浦窯跡』飯塚市教育委員会 1985
- 註21. 飯塚市教育委員会島田光一氏のご教示による
- 註22. 小田富士雄他『塚ノ谷窯跡群』八女市教育委員会 1969 同『管の谷窯跡群』1971、『中尾谷窯跡群』1970、『立山山窯跡群』1971
- 註23. 中島達也·佐藤雄史編『苅又地区遺跡群』 I ~ V 小郡市教育委員会 1995·1996
- 註24. 吉留秀敏編『タカバン塚古墳』福岡市教育委員会 1993
- 註25. 小田富士雄編『天観寺山窯跡群』北九州市埋蔵文化財調査会 1977
- 註26. 高尾栄市『船迫窯跡群』築城町教育委員会 1988
- 註27. 小田富士雄編『天観寺山窯跡群』北九州市埋蔵文化財調査会 1977
- 註28. 池辺元明編『照日遺跡群』新吉富村教育委員会 1995
- 註29. 栗焼憲児編『伊藤田城山窯跡群』中津市教育委員会 1985 小林昭彦編『中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告(4)伊藤田窯跡群』 大分県教育委員会 1992
- 註30. 桑原幸則編『早稲隈山』神埼町教育委員会 1997
- 註31. 『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』熊本県教育委員会 1980 網田龍生「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『先史学・考古学論究Ⅳ』龍田考古会 2003
- 註32. 小田富士雄編『天観寺山窯跡群』北九州市埋蔵文化財調査会 1977
- 註33. 小田富士雄編『天観寺山窯跡群』北九州市埋蔵文化財調査会 1977 飛野博文·杉原敏之編『牛頭天王遺跡垂水高木遺跡』新吉富村教育委員会 1994
- 註34. 小田富士雄編『天観寺山窯跡群』北九州市埋蔵文化財調査会 1977
- 註35. 小田富士雄編『天観寺山窯跡群』北九州市埋蔵文化財調査会 1977
- 註36. 古後憲浩・池ノ上富恵・曲田千秋編『八尋遺跡群』鞍手町教育委員会 1994
- 註37. 『広江窯跡』 直方市教育委員会 1994
- 註38. 小田富士雄編『天観寺山窯跡群』北九州市埋蔵文化財調査会 1977 小田富士雄・下原幸裕編『豊前・トギバ窯跡の調査』福岡大学人文学部考古学研究室 2007
- 註39. 池辺千太郎「豊後の須恵器松岡窯跡の調査」第124回九州古文化研究会発表資料 2002
- 註40. 『帯隈山神籠石とその周辺』 佐賀県教育委員会 1967
- 註41. 『北方町史』北方町 1985
- 註42. 山田元樹編『久福木・立山遺跡Ⅲ・勝立・善徳5号窯跡』大牟田市教育委員会 1994 坂井・山田・中村編『片平窯跡』大牟田市教育委員会 2004 石木秀啓「牛頸窯跡群と九州の須恵器生産体制」『国立歴史民俗博物館研究報告』134 2007

網田龍生「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『先史学・考古学論究Ⅳ』龍田考古会 2003

- 註43. 『生産遺跡基本調査報告書 II』 熊本県教育委員会 1980
- 註44. 出合宏光「下り山窯跡の研究」肥後考古学会 2004
- 註45. 小田富士雄「延岡市苺田窯跡」『宮崎県文化財調査報告書』第26集 1983
- 註46. 木村明史編『下村窯跡概要報告書 I 』佐土原町教育委員会 1992
 - 同 『下村窯跡報告書〈基礎資料編〉』佐土原町教育委員会 1996
- 註47. 秋成雅博「宮崎市松ヶ迫窯跡について」宮崎考古学会 第48回例会資料 2004
- 註48. 小田富士雄・河口貞徳「鶴峰窯跡の調査」『薩摩国府跡・国分寺跡』鹿児島県教育委員会 1975
- 註49. 青崎和憲·宮田英二「岡野古窯跡群」『菱刈町埋蔵文化財発掘調査報告書』(1) 1983
- 註50. 石木秀啓「牛頸窯跡群と九州の須恵器生産体制」『国立歴史民俗博物館研究報告』134 2007
- 註51. 中村浩他編『須恵器集成図録』第1~6巻 雄山閣出版 1995~1997
- 註52. 宇野隆夫「推古朝変革論」『北陸古代土器研究』第3号 1993
- 註53. 亀田修一氏によれば、須恵器にも朝鮮半島の影響を受けたものが見られるとのことである。

X. 窯跡保存への経過と今後の取り組みについて

1. 経過

牛頸に須恵器の窯跡があることは、研究史で述べたように大正年間に中山平次郎氏によって知られていたが、昭和の初めには当時の村長も認識していたことが日記によってわかる。昭和7年(1932)、当地は大野村と称していたが、地域代表2人が村役場を訪れた際に、山上高太郎村長は自分の出身地である牛頸で見つかる祝部土器の歴史的事実を話して聞かせ、訪問者を羨ませがらせたという記載がある〈註1〉。昭和6年にその村長がぽっかりと開いた窯跡の前で記念撮影した写真が残されている。その窯跡は城の山窯跡と言い、現在もそのまま残されている。今でも牛頸の山々に流れる谷川沿いには須恵器の散布が見られ、地元の人もいつの時代のものかは知らないまでも須恵器の存在は知っていることから、おそらくかなり昔から地元では知られていたものであろう。

その後昭和30年代に小田富士雄氏や福岡県教育委員会の発掘調査が行われ、その重要性が確認されるようになる。本市教育委員会が独自に発掘調査を実施するようになったのは昭和54年度(1979)からである。このころから県営ダム、土地区画整理事業、民間の団地開発など大規模な開発に伴う発掘調査が増大し、発掘調査例が爆発的に増える。しかし、保存される窯はほとんどなく、調査後消滅する場合が多かった。開発側とも保存協議を行ったが、牛頸窯跡群で見つかる窯跡は山の上位斜面に位置する場合が多く、保存するためにはかなり広い面積を要し、開発側の同意を得ることが難しく保存がなかなか実現しなかった。本市教育委員会と市は壊されるばかりではなく、窯を保存しその活用を図ることを目指したが、活用のためには行きやすい場所でなくてはならないということから適当な場所が見つからなかった。

しかし、昭和57~61年に行われた県営牛頸ダム建設に伴う発掘調査では70基の窯跡が調査されたが、地元から何らかの文化財保護関係施設の要望を受けた福岡県はダム記念館を建設し、1室を須恵器の展示と調査写真の展示室に充て、今に続いている。

また、平成7年には牛頸の山中に春日市が野外キャンプ場を造成した。その時発掘調査した石坂 窯跡群E地点は牛頸窯跡群最後の窯跡群として本書でも何回か取り上げたが、その重要性を理解し た春日市によって、露天ではあるが、科学的処理を実施した上で保存できた。

本市では、小田浦窯跡群79地点の取り組みを行った。牛頸地区内にある平野中学校の生徒増のため分離校を造ることになり、平成6・7年に開発公社による土地買収が行われた。ここは前述のとおり窯跡が良好な状態で残っていると推定された場所であったことから、学校教育課と協議を行い、窯の存在は敷地の端の方に推定できることから、校庭の隅にでもいいから保存し、学校教育だけでなく社会教育面でも活用してほしいと強く要望をした。しかし、予測していた生徒数は意外に伸びず中学校建設は中止になり、窯跡のある一帯については保存整備する方向性が示された。この頃文化庁から牛頸窯跡群を国史跡として考慮していいとの意向が示され一気に保存整備の気運が盛り上がった。

また、同じ頃牛頸窯跡群に含まれる上大利地区の一部で南と北に分かれて土地区画整理事業が行

われ、平成12年から埋蔵文化財発掘調査も大規模に実施された。その結果窯跡をはじめ須恵器生産に関する新たな知見も多く得られ、残存状況の良い窯跡も発見された。それらの内、窯を墓に再利用した梅頭窯跡1次1号窯跡が関係者の努力によって保存が決まり、平成16年3月には覆屋が完成し、平成19年春の周辺工事完了とともに常時見学できるようになった。そして19年11月に市指定史跡として告示された。

他には春日市域においては7世紀中頃から後半の山田寺系の瓦を焼く窯であるウトグチ窯跡が土地区画整理事業地内で見つかり、その重要性から保存され平成2・3年に覆屋建設と周辺整備を行い、常時一般公開を行っている〈註2〉。煙道が多孔式で牛頸窯跡群にしか見られない構造であるところから、他の須恵器窯跡群とはやや離れているものの牛頸窯跡群と密接な関係のある窯跡である。平成19年度には福岡県指定史跡になっている。

以上のように、発掘調査した窯は300基を超え、そのほとんどが消滅してしまったが、関係者の 努力によって一部が保存公開されている。

2. 今後の取り組みについて

今回行った山間部の分布調査によって、まだ多くの須恵器窯跡があることがわかった。IVで述べたように窯の確認箇所が25地点を数え、その他の散布地も加えれば150基以上あると言っても過言ではないと考えられる。発掘調査した窯跡が300基を超えたことから、牛頸窯跡群の窯の総数は500基とみても良い。ただ基数が多いだけでなく、前章で述べたように九州にとどまらず全国的に見ても古代史を語る上でなくてはならない遺跡である。

大野城市では、平成3年に市民の貴重な水源である水源涵養地区をはじめ、大野城市の良好な自然環境の確保を総合的に推進するため「大野城市自然環境保護条例」を制定し、条例の目的を達成するため自然環境保護区域を指定できるとした。そして牛頸ダム周辺の広い範囲が第1種自然環境保護区域に指定されている。また、当該区域に指定された土地の地権者から土地の買取りの申し出があった場合は必要があると認める時は買取りすることができるとした。

第1種自然環境保護区域と須恵器窯跡のある地域とは一部重なり合っている。他にも牛頸の緑地は市が行っているトラスト運動によって一部公有地化されている。窯跡の残されている場所は良好な自然環境が保全されている地域でもあり、文化財保護と自然環境保護は車の両輪のように協力していくことが必要である。

日本最大の領恵器窯跡群は大阪府陶邑窯跡群であり、2番目は愛知県猿投山西南麓窯跡群であろうが、牛頸窯跡群は規模においてそれらに次ぐものであり、まだ住宅地南部の山間部の広い範囲に150基以上が残されていると考えられる。このことから残っている窯跡の保存整備活用を図ることは大野城市のみならず日本にとって必要なことと考える。今後は国史跡の指定を受け、最大限の調査研究を行い、多くの人の憩いの場としてあるいは学習の場として保存整備活用を図っていくことが必要になると考える。

整備活用に当たっては、関係する諸機関、学識経験者そして広く市民の声も聞いて方針を定める

ことが重要である。

現状では、梅頭窯跡は覆屋を建設し外からいつでも見学できるようにしている。周辺は池と緑地を取り込んだ公園と住宅地になり散歩がてらの見学者も多い。

小田浦窯跡群79地点は確認調査によって5基の窯跡を確認しているが、多孔式煙道が残る窯跡 や瓦陶兼業窯が見つかっている。土のう等により埋め戻して保存しているが、市名の由来ともなっ ている大野城跡や市街地が一望できる好立地であることから、それを活かした整備計画が必要であ る。

梅頭窯跡も小田浦窯跡群79地点の3号窯跡を除いては古墳時代の窯跡である。奈良時代の窯跡は小型化して、古墳時代とは違っている。このことから、あるいは奈良時代の窯跡も調査の上公開することも研究検討したい。その他の窯跡は基本的には現状保存が望ましいと思われる。ただし、窯がどのような場所に造られているかを知ってもらうため、散策コースを設ける必要があるだろう。牛頸にはキャンプ場や牛頸ダム周辺の憩いの森があって多くの人でにぎわっている。これらを考慮した回遊コースを設定し、季節季節の草花や木々を鑑賞しながら古代の土器生産の場を訪ねてもらい悠久の歴史と古代人の智恵や息吹を感じてもらえるような保存管理計画を策定していくことが肝要である。

註1. 舟山良一「文化財保護行政のあゆみ」『大野城市史』下巻第8章第6節 大野城市 2004

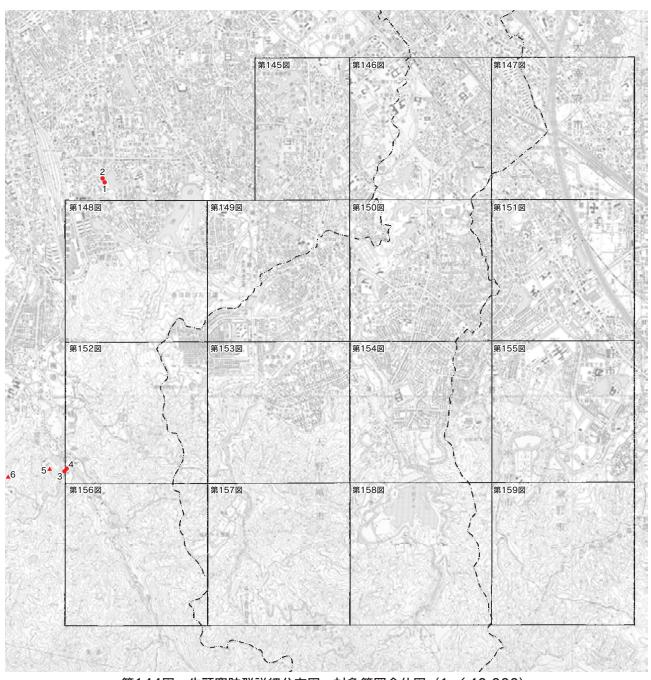
註2. 中村昇平・森井千賀子編『ウトグチ遺跡 B 地点』春日市教育委員会 2004

付. 大谷窯跡群について

牛頸窯跡群1支群の大谷窯跡群の4基は昭和43年(1958)に福岡県教育委員会の依頼を受けた国士舘大学大川清先生によって発掘調査されたものである。2基ずつ並列した窯跡2群があり、そのうち3号窯跡は排煙口が上下3孔ずつ合わせて6孔開けられているというきわめて珍しい形態の窯跡であった。大川先生は栃木県子砂子町に日本窯業史研究所を設立され、出土遺物を含めて発掘調査成果品をそちらに移された。本来であれば、当時の開発者、それが無理なら福岡県教育委員会あるいは本市が整理費用を負担して発掘調査報告書を作成していただくものであろうが、諸般の事情により、未整理のまま年月が過ぎた。大野城市は平成16年に市史を刊行したが、この機会に概要報告をしていただこうと、その数年前に担当者が窯業史研究所に大川先生をお訪ねしたことがあった。先生にはそのお願いを快諾していただいたが、時間が足りず、それは実現しなかった経緯がある。その後大川先生は他界され、発掘調査成果品がどうなるか心配していたが、今回総括報告書作成に当たり、ぜひ報告を実現したいと考え、窯業史研究所に連絡を取ったところ、先生が生前発掘調査された遺跡の成果品については、地元市町村の都合がつけばすべて返還する方針であることをお聞きした。このため、予算の目途がたった時点で返還の依頼を行い、遺物、写真、図面等発掘調査成果品はすべて本市に返還していただいた。現在の理事長の菅間智代氏や実務の労をとっていただいた水野順敏氏に深く感謝したい。

このように40年ぶりに「里帰り」した須恵器、写真、図面であるが、残念ながら今回の報告書に詳細を載せることは時間的に無理であった。6孔あけられた3号窯跡の写真のみは本書の最後に掲載できたが、報告書刊行のための整理作業は今後行なうことになる。牛頸窯跡群を理解する上で貴重な資料であることから鋭意取り組みを行ないたい。

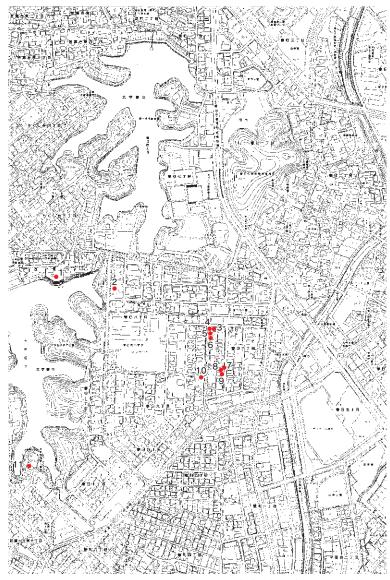
なお、この機会に3号窯跡の年代について少し述べておきたい。というのも、多孔式煙道であることから当初はIV期頃と考えていたが、一度窯業史研究所に伺った時見せてもらった土器類はVI期の蓋にかえりのついたものが主流を占めていた。このため、7世紀後半の多孔式煙道の最後の姿と考えるようになったのだが、返還された図面や須恵器を見ると、検討が必要のようである。というのも3号窯跡は4号窯跡と接近して造られており、灰原の遺物は両窯のものが混ざった状態であり、VI期の須恵器とIV期の須恵器が見られ、窯と須恵器の関係を整理してみる必要があることがわかったためである。また、6孔も上下3孔ずつ横に並ぶが、それぞれ下端が3孔とも整然と並んでおり、一度に機能していた可能性と、始め下段の3孔が機能し、それが埋められて上に3孔開けられた可能性もある。以上から大谷3号窯跡の年代は整理後明らかにしたい。



第144図 牛頸窯跡群詳細分布図・対象範囲全体図(1/40,000)

番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
1		ウトグチ窯跡群	1 号窯跡		春日市教育 委員会	0	春日市教育委員会2004『ウト グチ遺跡B地点』		
2		同上	2 号窯跡		同上	0	同上		
3		地別当遺跡群	1 号窯跡	1996年	那珂川町教 育委員会		那珂川町教育委員会1997『地 別当遺跡群』	無し	
4		同上	2 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
5		未設定	名称未設定	未調査				無し	地別当池の対岸. 東向き斜面に黒い土あり. 地元住民による須恵器の拾得. 8c.
6		未設定	名称未設定	未調査				無し	火葬場の近く. 焼け歪みの須恵器表採. 窯が付近にある可能性. 7c後半~8 c 初.

[◎]は窯跡実測図があり、残存良好なもの。○は窯跡実測図があり、残存やや良なもの。△は窯跡実測図があり、残存不良なもの。 ×は窯跡実測図のないもの。「須」は須恵器の実測図のみあるもの。



第145図 牛頸窯跡群詳細分布図(1)(1/10,000)

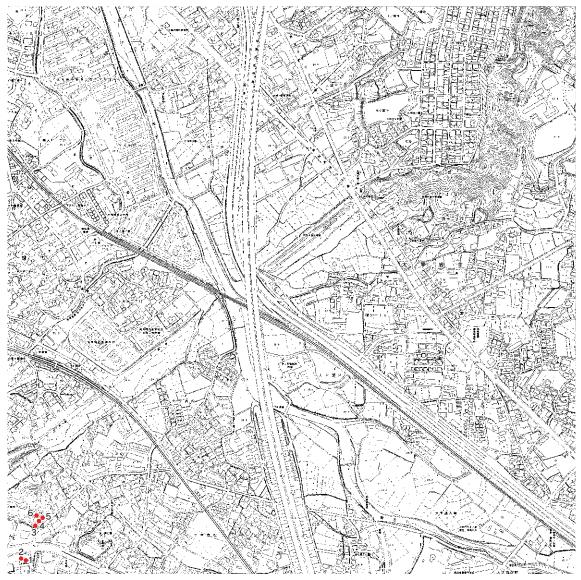
番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
1	春日支群	大牟田池窯	大牟田池窯	未調査					
2	春日支群	惣利窯跡群	1 号窯跡	1978年11月~ 79年2月	春日市教育委員会		春日市教育委員会1982『春日地区遺跡 群 I 』		
3	同上	同上	2 号窯跡 (灰原)	1980年1月~9月	同上	須	春日市教育委員会1983『春日地区遺跡 群Ⅱ』	無し	
4	同上	同上	3 号窯跡 (灰原)	同上	同上	須	同上	無し	
5	同上	同上	4 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
6	同上	同上	5 号窯跡	同上	同上	Δ	同上	無し	
7	同上	同上	6 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
8	同上	同上	7 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
9	同上	同上	8 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
10	同上	同上	9 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
11	同上	大牟田窯			春日市教育委員会		未報告(『春日市史』上)	無し	8c



第146図 牛頸窯跡群詳細分布図(2)(1/10,000)

番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
1	春日支群	春日平田 北遺跡群	1 号窯跡	1982年	春日市教育委 員会		未報告(『春日市史』上)	無し	8 c代
2	同上	同上	2 号窯跡	同上	同上		同上	無し	8 c代
3	同上	同上	3 号窯跡	同上	同上		同上	無し	8 c代
4	同上	同上	4 号窯跡	同上	同上		同上	無し	8 c代
5	同上	同上	5 号窯跡	同上	同上		同上	無し	8 c代
6	同上	同上	6 号窯跡	同上	同上		同上	無し	8 c代
7	同上	同上	7 号窯跡	同上	同上		同上	無し	8 c代
8	同上	同上	8 号窯跡	同上	同上		同上	無し	8 c代
9	同上	同上	9 号窯跡	同上	同上		同上	無し	8 c代
10	同上	同上	10号窯跡	同上	同上		同上	無し	8 c代
11	同上	同上	11号窯跡	同上	同上		同上	無し	8 c代
12	同上	同上	12号窯跡	同上	同上		同上	無し	8 c代
13	同上	同上	13号窯跡	同上	同上		同上	無し	8 c代
14	同上	同上	14号窯跡	同上	同上		同上	無し	8 c代

番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
15	春日支群	春日平田 北遺跡群	15号窯跡	1982年	春日市教育委 員会		未報告(『春日市史』上)	無し	8 c代
16	同上	同上	16号窯跡	同上	同上		同上	無し	8 c代
17	同上	同上	17号窯跡	同上	同上		同上	無し	8 c代
18	同上	同上	18号窯跡	同上	同上		同上	無し	8 c代
19	上大利 支群	梅頭遺跡群	第4次調査 1 号窯跡	2005年6月~ 11月	大野城市教育 委員会		未報告	有り	
20	同上	同上	第3次調査 1号窯跡	2003年	同上		未報告 (『大野城市史』)	無し	8 c前半
21	同上	同上	第3次調査 2号窯跡	2003年	同上		同上	有り	
22	同上	同上	第2次調査 1号窯跡	2002年	同上		同上	有り	
23	同上	同上	第1次調査 1 号窯跡	2001年11月 ~2002年2月	同上	0	大野城市教育委員会2007『牛頸梅頭遺跡群I-第1次調査-』	有り	
24	上大利 支群	野添遺跡群	第6次調査 灰原	2003年5月~ 8月	大野城市教育 委員会	×	大野城市教育委員会2006『牛頸野添遺 跡群Ⅲ-第6・8次調査-』	有り	
25	上大利 支群	本堂遺跡群	第3次調査 窯跡	2003年3月	大野城市教育 委員会・大谷 女子大学	0	大野城市教育委員会2003『牛頸本堂遺跡群I-第3次調査-』	有り	
26	同上	同上	第8次調査 1号窯跡	2004年8月~ 2005年3月	大野城市教育 委員会		『大野城市の文化財』第38集	無し	8c代
27	同上	同上	第14次調査 灰原	2005年8月~ 11月	同上		未報告	有り	
28	同上	同上	第7次調査 灰原	2001年11月 ~2002年2月	同上		同上	有り	
29	同上	同上	第5次調査 1号窯跡	2003年	同上	Δ	大野城市教育委員会2005『牛頸本堂遺跡群Ⅲ-第5次調査(第2冊)-』	無し	
30	同上	同上	第5次調査 4号窯跡	同上	同上	Δ	大野城市教育委員会2004『牛頸本堂遺跡群Ⅱ-第5次調査(第1冊)-』	無し	
31	同上	同上	第5次調査 5号窯跡	同上	同上	Δ	同上	無し	
32	同上	同上	第5次調査 2号窯跡	同上	同上	Δ	同上	無し	
33	同上	同上	第5次調査 3号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
34	同上	同上	第5次調査 5-Ⅱ号窯跡	同上	同上	Δ	同上	無し	
35	同上	同上	第5次調査 6号窯跡	同上	同上	0	大野城市教育委員会2005『牛頸本堂遺跡群Ⅲ-第5次調査(第2冊)-』	無し	
36	同上	同上	第5次調査 7号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
37	同上	同上	第5次調査 8号窯跡	同上	同上	Δ	同上	有り	
38	同上	同上	第5次調査 9号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
39	同上	同上	第13次 1号窯跡	2005年5月~ 7月	大野城市教育 委員会		『大野城市の文化財』第38集	無し	8 c中頃
40	上大利 支群	出口窯跡	出口窯跡	未調査				不明	『石坂C』報告書中遺 跡分布図にドットあり 番号5.
41	上大利 支群	天神田窯跡	天神田窯跡	未調査				不明	昭和45年大野城市遺跡 分布図にドットあり番 号73.
42	上大利 支群	矢倉窯跡	矢倉窯跡	未調査				不明	福岡県による水城調査 時周辺分布調査の際, 窯跡発見.



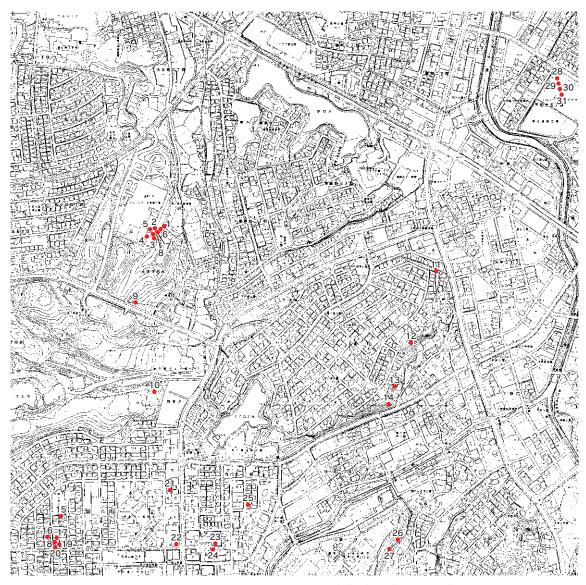
第147図 牛頸窯跡群詳細分布図(3)(1/10,000)

番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
1	佐野支群	神ノ前窯跡群	第1号窯跡	1978年10月 ~11月	太宰府町教育委員会・ 福岡県教育委員会		太宰府町教育委員会1979『神ノ前 窯跡』	有り	
2	同上	同上	第2号窯跡	同上	同上	Δ	同上	有り	
3	同上	同上	第3号窯跡	2001年	太宰府市教育委員会	Δ	太宰府市教育委員会2005『太宰 府・吉松地区遺跡群 1 』	無し	
4	同上	同上	第4号窯跡	同上	同上	Δ	同上	無し	
5	同上	同上	第5号窯跡	同上	同上	Δ	同上	無し	
6	同上	同上	名称未設定	未調査			同上	不明	神/前調査時に周辺測 量で窯跡らしき窪み発 見.



第148図 牛頸窯跡群詳細分布図(4)(1/10,000)

番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
1	平野川支群	後田窯跡群	63- I 号窯跡	1986年2月 ~3月	大野城市 教育委員会	0	大野城市教育委員会1991『牛頸後田窯跡群』	有り	
2	同上	同上	63-Ⅱ号窯跡	1986年2月 ~3月	同上	0	同上	無し	
3	同上	同上	46地点	1986年2月 ~10月	同上	須	同上	有り	



第149図 牛頸窯跡群詳細分布図(5)(1/10,000)

番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
1	春日支群	浦ノ原窯跡群	1 号窯跡	1977年12月 ~78年3月	春日市教育委 員会	0	春日市教育委員会1981『浦ノ原窯 跡群』	無し	
2	同上	同上	2 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
3	同上	同上	3 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
4	同上	同上	4 号窯跡	同上	同上	0	同上	有り	
5	同上	同上	5 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
6	同上	同上	6 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	未使用
7	同上	同上	7 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
8	同上	同上	8号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
9	同上	同上	2次調査窯跡	1997年8月~ 9月	同上	0	春日市教育委員会1999「6浦の原 窯跡群 (2次調査)」『春日市埋 蔵文化財年報6平成9年度』	無し	8c前半

番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
10	平野川 支群	小田浦窯跡群	小田浦28地点	1986年10月	大野城市教育 委員会	灰原	大野城市教育委員会1993『牛頸月 ノ浦窯跡群』	有り	
11	平野川 支群	畑ヶ坂窯跡群		未調査		崩壊?		不明	『牛頸地区遺跡群 I 』の 報告書中周辺遺跡分布図 に記載あり18番.
12	同上	同上		未調査				不明	『牛頸地区遺跡群 I 』の 報告書中周辺遺跡分布図 に記載あり15番.
13	同上	同上		未調査				不明	『牛頸地区遺跡群 I 』の 報告書中周辺遺跡分布図 に記載あり10番.
14	同上	同上		未調査				不明	『牛頸地区遺跡群 I 』の 報告書中周辺遺跡分布図 に記載あり9番.
15	平野川 支群	後田窯跡群	45- I 窯跡	1986年 9 月 ~10月	大野城市教育 委員会	0	大野城市教育委員会1991『牛頸後 田窯跡群』	有り	
16	同上	同上	61-V 号窯跡	1986年4月 ~5月	同上	0	同上	無し	
17	同上	同上	61-Ⅱ号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
18	同上	同上	61-Ⅲ号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
19	同上	同上	61- I 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
20	同上	同上	61-IV号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
21	平野川 支群	小田浦窯跡群	33- I 号窯跡	1983年11月 ~86年2月	大野城市教育 委員会	0	大野城市教育委員会1992『牛頸小 田浦窯跡群』	有り	
22	同上	同上	34- I 号窯跡	同上	同上	Δ	同上	無し	
23	同上	同上	37- I 号窯跡	同上	同上	0	同上	有り	
24	同上	同上	37-Ⅱ号窯跡	同上	同上	0	同上		未使用
25	平野川 支群	月ノ浦窯跡群	I 号窯跡	1982年5月~ 6月	大野城市教育 委員会	須	大野城市教育委員会1993『牛頸月 ノ浦窯跡群』	有り	
26	平野川 支群	胴ノ元窯跡群		未調査		半壊	「山腹、道路により寸断1基確認、 1基未確認」と『牛頸地区遺跡群	不明	『牛頸地区遺跡群 I 』の 報告書中周辺遺跡分布図 に記載あり2番.
27	同上	同上		未調査		1 194	Ⅰ』の報告書中に記載あり.	不明	『牛頸地区遺跡群 I 』の 報告書中周辺遺跡分布図 に記載あり2番.
28	春日支群	春日平田西 遺跡	1 号窯跡	1983年~ 1984年	春日市教育委 員会		未報告	不明	『春日市史』・『春日地 区遺跡群VI』に記載あり.
29	同上	同上	2号窯跡	同上	同上		未報告	不明	『春日市史』・『春日地 区遺跡群VI』に記載あり.
30	同上	同上	3 号窯跡	同上	同上		未報告	不明	『春日市史』・『春日地 区遺跡群VI』に記載あり.
31	同上	同上	4 号窯跡	同上	同上		未報告	不明	『春日市史』・『春日地 区遺跡群VI』に記載あり.



第150図 牛頸窯跡群詳細分布図(6)(1/10,000)

番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
1	春日支群	春日平田南窯跡	春日平田南窯跡	1984年	春日市教育 委員会		春日市史編さん委員会1995『春日 市史』上	不明	
2	牛頸川支群	華無尾窯跡群				消滅		不明	『牛頸石坂窯跡』C地点の周辺遺跡分布図にドットあり.
3	同上	同上				消滅		不明	同上
4	上大利支群	春日平田東窯跡	春日平田東窯跡	1985年4月~ 5月	春日市教育 委員会		春日市教育委員会1991『春日地区 遺跡群VI』	有り	
5	上大利支群	野添遺跡群	第7次1号窯跡	2003年8月~ 12月	大野城市教 育委員会	Δ	大野城市教育委員会2006『牛頸野 添遺跡群IV-第7次調査-』	有り	
6	同上	同上	第7次2号窯跡	同上	同上	Δ	同上	有り	
7	上大利支群	野添窯跡群	第10号窯跡	1969年10月	福岡県教育 委員会		福岡県教育委員会1970『野添・大 浦窯跡群』	不明	未調査・消滅
8	同上	同上	第9号窯跡	同上	同上	0	同上	有り	
9	同上	同上	第8号窯跡			消滅	同上	不明	昭和41年〜44年間に採土工事によ り消滅.
10	同上	同上	第7号窯跡			消滅	同上	不明	同上
11	同上	同上	第6号窯跡	1969年10月	福岡県教育 委員会	Δ	同上	有り	
12	巨上	同上	第5号窯跡	巨	同上	須	同上	無し	
13	同上	同上	第4号窯跡	同上	同上	須	同上	無し	
14	同上	同上						不明	『平田E』の報告書中周辺窯跡分 布図にドットあり14番・『平田 F』の報告書中周辺窯跡分布図に 野添11号窯跡と表記。

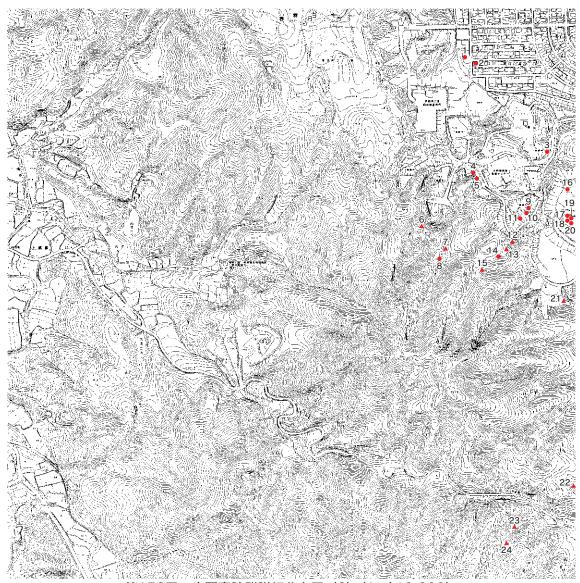
番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
15	上大利支群	野添遺跡群	第2次2号窯跡	2002年1月~ 2月	大野城市教 育委員会	0	大野城市教育委員会2004『牛頸野 添遺跡群 I - 第2・3次調査-』	無し	1号は欠番.
16	同上	同上	名称未設定窯跡	未調査	17 33 424		Market A No. of Character	有り	2次調査中に踏査で窯と確認.
17	同上	同上						不明	『平田E』の周辺遺跡分布図に ドットあり13番.
18	上大利支群	野添窯跡群	11号窯跡	1986年8月~ 9月	大野城市教 育委員会	Δ	大野城市教育委員会1987『野添窯 跡群』	有り	1 / 1 0 / 10 m.
19	同上	同上	12号窯跡	同上	同上	0	同上	有り	
20	同上	同上	13号窯跡	同上	同上	Δ	同上	有り	
21	上大利支群	野添遺跡群	第4次2号窯跡	2002年4月~	大野城市教 育委員会	0	大野城市教育委員会2005『牛頸野 添遺跡群Ⅱ-第4・5次調査-』	有り	
22	上大利支群	谷蟹窯	谷蟹窯跡	未調査				不明	近年土砂崩れにともない灰原確 認.
23	上大利支群	野添窯跡群	1 号窯跡	未調査				不明	
24	同上	同上	2 号窯跡	未調査				不明	
25	上大利支群	野添遺跡群	第4次1号窯跡	2002年4月~ 10月	大野城市教 育委員会	×	大野城市教育委員会2005『牛頸野 添遺跡群Ⅱ-第4・5次調査-』	有り	以前の野添窯跡群3号窯と同一.
26	同上	同上	第4次3号窯跡	2002年4月~ 10月	同上	須	同上	無し	
27	上大利支群	大浦窯跡群	1 号窯跡	1968年6月	福岡県教育 委員会	Δ	福岡県教育委員会1970『野添・大 浦窯跡群』	有り	
28	同上	同上	2号窯跡	同上	同上	Δ	同上	有り	
29	同上	同上	4号窯跡	未調査		消滅		不明	『平田F』報告書中周辺遺跡分布 図には3号窯と記載.
30	同上	同上	5号窯跡	未調査		消滅		不明	『平田F』報告書中周辺遺跡分布 図には4号窯と記載.
31	上大利支群	平田窯跡群	平田F-1窯跡	1981年11月 ~12月	大野城市教 育委員会	Δ	大野城市教育委員会1982『牛頸平 田窯跡-F地点-』	有り	
32	同上	同上	平田E-試掘9地点	1980年12月	同上		大野城市教育委員会1981『牛頸平 田窯跡-E地点-』	不明	試掘調査により少量ながら須恵器 片採集.
33	同上	同上	平田E-試掘8地点	同上	同上	須	同上	有り	試掘調査により接合できる杯出 土.
34	同上	同上	平田E-2窯跡	1980年12月 ~81年1月	同上	須	同上	有り	
35	同上	同上	平田E-1窯跡	同上	同上	Δ	同上	無し	
36	同上	同上	平田窯					不明	『平田E』の報告書中周辺窯跡分布図にドットあり5番.
37	同上	同上	平田D-1窯	1979年12月 ~80年1月	大野城市教 育委員会	0	大野城市教育委員会1980『牛頸平 田窯跡-D地点-』	有り	
38	同上	同上	平田C窯跡					不明	『平田E』の報告書中周辺窯跡分布図にドットあり3番.
39	同上	同上	A地点第1号窯跡	1972年8月~ 9月	坂詰秀一	0	坂詰秀一編1974『筑前平田窯跡』	有り	
40	同上	同上	B地点2号窯跡	同上	同上	Δ	同上	無し	
41	同上	同上	B地点1号窯跡	同上	同上	Δ	同上	有り	
42	同上	同上	B地点3号窯跡	同上	同上	Δ	同上	無し	
43	上大利支群	大浦窯跡群	3号窯跡	未調査		消滅		不明	
44	牛頸川支群	東浦窯跡群	仮1号窯跡	1968年12月	国士舘大学		未報告	不明	
45	同上	同上	仮2号窯跡	同上	同上		同上	不明	
46	同上	同上	仮3号窯跡	同上	同上		同上	不明	
47	同上	同上	仮4号窯跡	未調査	同上			不明	確認のみ未調査.
48	牛頸川支群	中通窯跡群				消滅	大野城市教育委員会1980『牛頸中 通遺跡群』	不明	昭和48年8月〜昭和50年8月間に地 元土地所有者自らの手による採土 により消滅.
49	同上	同上				消滅	同上	不明	同上
50	同上	同上				消滅	同上	不明	同上
51	上大利支群	平田窯跡群		未調査		消滅		不明	『筑前平田窯跡』周辺遺跡分布図 中に平田南窯跡として記載あり.



第151図 牛頸窯跡群詳細分布図(7)(1/10,000)

番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
1	佐野支群	尊田窯跡	尊田窯跡	未調査				不明	『太宰府市史』考古資料編収録巻末分布図に ドットあり番号59.
2	佐野支群	篠振窯跡群	1 号窯跡	1985年	太宰府市教 育委員会	Δ	太宰府市教育委員会1987『篠振遺跡』	無し	
3	同上	同上	2 号窯跡	同上	同上	Δ	同上	無し	
4	佐野支群	長浦窯跡	長浦窯跡	1973年12月	福岡県教育 委員会	0	福岡県教育委員会1975『九州縦貫自動 車道関係埋蔵文化財調査報告VI』	無し	
5	佐野支群	向佐野窯跡群	1号窯跡	1973年12月	福岡県教育 委員会		福岡県教育委員会1975『九州縦貫自動 車道関係埋蔵文化財調査報告VI』	無し	
6	同上	同上	2号窯跡	同上	同上	須	同上	無し	
7	同上	同上	3 号窯跡	同上	同上	須	同上	無し	
8	佐野支群	日焼窯跡群	7 sx200	2003年12月~2004 年7月	太宰府市教 育委員会	0	太宰府市教育委員会2005『太宰府・佐 野地区遺跡群20』	無し	

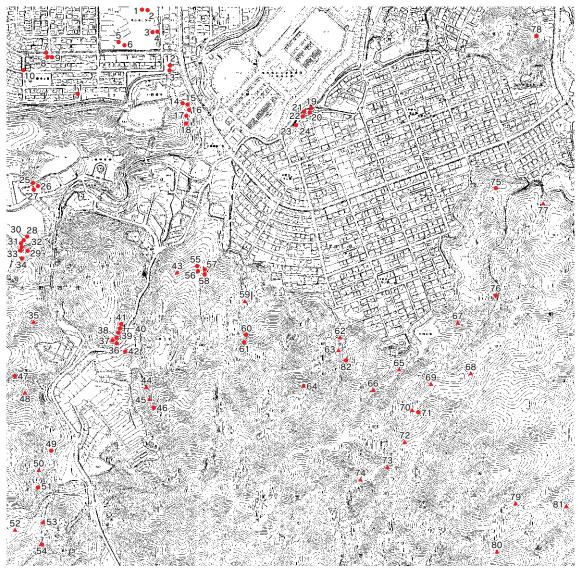
番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
9	佐野支群	日焼窯跡群	7 sx105	2003年12月~2004 年7月	太宰府市教 育委員会	Δ	太宰府市教育委員会2005『太宰府・佐 野地区遺跡群20』	無し	
10	佐野支群	宮ノ本窯跡群	10号窯跡	1991年10月~12月	太宰府市教 育委員会	0	太宰府市教育委員会1991『太宰府・佐 野地区遺跡群IV』		
11	同上	同上	7 号窯跡	1984年7月~10月	同上	×	× 太宰府市教育委員会1992『宮ノ本遺跡 A II - 窯跡篇-』		
12	同上	同上	8号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
13	同上	同上	6 号窯跡	同上	同上	Δ	同上	無し	
14	同上	同上	5 号窯跡	同上	同上	Δ	同上	無し	
15	同上	同上	4号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
16	同上	同上	3号窯跡	1979年9月~12月	同上	Δ	太宰府町教育委員会1980『宮ノ本遺 跡』	無し	
17	同上	同上	2号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
18	同上	同上	1号窯跡	同上	同上	Δ	同上	無し	
19	同上	同上	9号窯跡	1988年4月~5月	同上	Δ	太宰府市教育委員会1991『太宰府・佐 野地区遺跡群Ⅱ』	無し	
20	佐野支群	吉松象頭窯跡	吉松象頭窯跡	未調査		破壊	福岡県教育委員会1975『九州縦貫自動 車道関係埋蔵文化財調査報告VI』	不明	表採資料として報告あり.



第152図 牛頸窯跡群詳細分布図(8)(1/10,000)

番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
1	平野川支群		66- I 号窯跡	1986年6月~7月	大野城市教 育委員会	0	大野城市教育委員会1991『牛頸後田窯跡群』	無し	en J
2	同上	同上	65- I 号窯跡	1986年7月~8月	同上	0	同上	有り	
3	同上	同上	77地点1号窯跡	2003年4月	同上		『大野城市の文化財』第36集	無し	焼却場
4	同上	同上	78地点1号窯跡	2001年	同上		未報告		焼却場
5	同上	同上	78地点 2 号窯跡	同上	同上		同上		焼却場
6	同上	同上	22-14地図9地点		同上	須恵器表採	踏査	無し	高杯杯部表採. 8 c
7	同上	同上	22-14地図6地点		同上	須恵器表採	同上	無し	大甕片表採. 8 c前
8	同上	同上	22-14地図7地点		同上	灰原	同上	無し	灰原:非常に大きく斜面上 に盛り上がる.8c
9	同上	同上	76地点灰原(仮 1号)	2001年11月~2002 年1月	同上		概要報告より		

番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
10	平野川支群	後田窯跡群	76地点灰原(仮2 号)	2001年11月~2002 年1月	大野城市教 育委員会		概要報告より		
11	同上	同上	76地点3号窯跡	同上	同上		『大野城市の文化財』第34集	無し	焼却場. 8 c後半
12	同上	同上	22-14地図10地点		同上	須恵器表採	踏査	無し	蓋杯表採. 8 c
13	同上	同上	22-14地図11地点		同上	須恵器あり	同上	無し	灰原. 8 c
14	同上	同上	22-14地図12地点		同上	灰原?	同上	無し	灰原?.8 c
15	同上	同上	22-14地図13地点		同上	須恵器表採	同上	無し	高杯表採. 8 c
16	同上	同上	69地点4号窯跡	1996年10月~12月	同上		未報告	無し	霊園造成. 7c後半~末
17	同上	同上	75地点 I 号窯跡	1999年11月~12月	同上		同上	無し	同上. 8 c後半
18	同上	同上	75地点Ⅱ号窯跡	1999年11月~12月	同上		同上	無し	同上. 8 c後半
19	同上	同上	75地点Ⅲ号窯跡	1999年11月~12月	同上		同上	無し	同上. 8c後半
20	同上	同上	75地点IV号窯跡	1999年11月~12月	同上		同上	無し	同上. 8c後半
21	同上	同上	22-14地図14地点	2007年4月23日	同上	須恵器片	踏査	無し	杯蓋・杯身多数
22	平野川支群	石坂窯跡群	22-17地図7地点	2007年4月24日	大野城市教 育委員会	須恵器あり	踏査	無し	小片のみ
23	同上	同上	22-17地図 1 地点 (旧11地点)		同上	須恵器片	同上	無し	範囲の上流側が多く破片 大. 窯の位置不明. 8 c
24	同上	同上	22-17地図 2 地点 (旧12地点)		同上	黒色土器1 点のみ	同上	無し	8 c

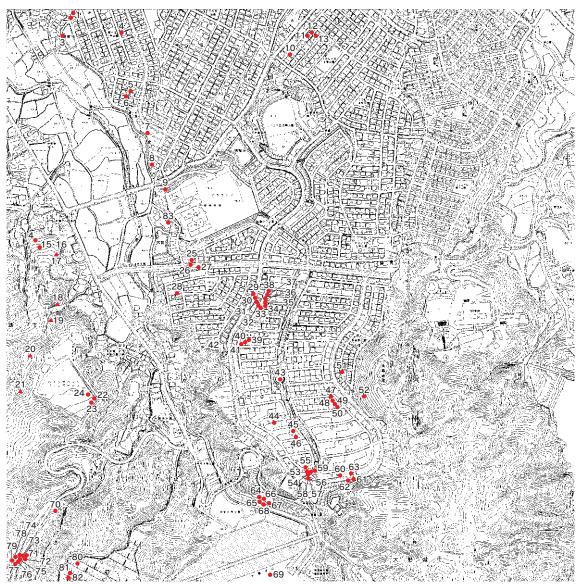


第153図 牛頸窯跡群詳細分布図(9)(1/10,000)

番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
1	平野川支群	小田浦窯跡群	38地点 I 号窯跡 (旧A地点1号窯 跡)	1976年10月~ 77年2月	大野城市教育委員会他	0	大野城市教育委員会1977『大野城市の文化財』第9集. 坂詰寿・上野精志1978「福岡県 小田浦窯跡の調査」『考古学ジャーナル』146. 大野城市教育委員会1993『牛頸小田浦遺跡群』	有り	
2	同上	同上	38地点Ⅱ号窯跡 (旧A地点2号窯 跡)	1976年10月~ 77年2月	同上	○空だき	同上		未使用
3	同上	同上	50- I 号窯跡	1984年11月~ 85年2月	同上	0	大野城市教育委員会1992『牛 頸小田浦窯跡群』	有り	
4	同上	同上	50-Ⅱ 号窯跡	同上	同上	Δ	同上	有り	
5	同上	同上	39地点Ⅱ号窯跡 (旧B地点2号窯 跡)	1976年10月~ 77年2月	同上	0	大野城市教育委員会1977 『大野城市の文化財』第9集. 坂詰 秀・上野精志1978 「福岡県 小田浦窯跡の調査」『考古学ジャーナル』146. 大野城市教育委員会1993『牛頸小田浦遺跡群』	無し	
6	同上	同上	39地点 I 号窯跡 (旧B地点1号窯 跡)	同上	同上	0	同上	有り	
7	平野川支群	後田窯跡群	59- I 号窯跡	1986年2月~10 月	大野城市教 育委員会	0	大野城市教育委員会1991『牛 頸後田窯跡群』	無し	
8	同上	同上	59-Ⅱ 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
9	同上	同上	59-Ⅲ号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	

番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
10	平野川支群	後田窯跡群	60- I 号窯跡	1986年3月	大野城市教 育委員会		大野城市教育委員会1991『牛 頸後田窯跡群』	有り	VII 3
11	平野川支群	小田浦窯跡群	57- I 号窯跡	1983年11月~	大野城市教	須	大野城市教育委員会1992『牛	無し	
12	同上	同上	40-Ⅱ号窯跡	86年2月 1985年12月~	育委員会 同上	Δ	頸小田浦窯跡群』 同上		未使用
13	同上	同上	40- I 号窯跡	86年2月 同上	同上	0	同上	有り	
				2004年3月~			大野城市教育委員会2007『牛		m to the
14	同上	同上	79地点2号窯跡	2006年3月	同上	0	頸小田浦窯跡群Ⅱ-79地点の調査-』	有り	保存目的
15	同上	同上	79地点1号窯跡	同上	同上	0	同上	有り	同上
16	同上	同上	79地点4号窯跡	同上	同上	0	同上	有り	同上
17	同上	同上	79地点3号窯跡	同上	同上	0	同上	有り	同上
18	同上	同上	79地点5号窯跡	同上	同上	×	同上	無し	同上
19	平野川支群	大谷窯跡群	(仮) 4号窯跡	1968年12月	国士舘大学			不明	『大野町の文化財』 第2集1971に概要.
20	同上	同上	(仮)3号窯跡	同上	同上		同上	不明	同上
21	同上	同上	(仮) 1号窯跡	同上	同上		同上	不明	同上
22	同上	同上	(仮)2号窯跡	同上	同上		同上	不明	同上
23	同上	同上		未調査				不明	
24	同上	同上		未調査				不明	
25	平野川支群	後田窯跡群	68地点3号窯跡	1996年10月~ 12月	大野城市教 育委員会		未報告	無し	霊園造成. 7c後半~
26	同上	同上	68地点1号窯跡	同上	同上		同上	無し	同上. 7 c後半~末
27	同上	同上	68地点2号窯跡	同上	同上.		同上	無し	同上. 7c後半~末
28	同上	同上	70地点2号窯跡	1999年1月~3 月	同上		同上	無し	同上. 8 c中~後半
29	同上	同上	70地点1号窯跡	同上	同上		同上	無し	同上. 8c中~後半
30	同上	同上	70地点6号窯跡	同上	同上		同上	無し	同上. 8c中~後半
31	同上	同上	70地点3号窯跡	同上	同上		同上	無し	同上. 8c中~後半
32	同上	同上	70地点4号窯跡	同上	同上		同上	無し	同上. 8c中~後半
33	同上	同上	70地点5号窯跡	同上	同上		同上	無し	同上. 8 c中~後半
34	同上	同上	71地点1号窯跡	同上	同上		同上	無し	同上. 8 c後半
35	平野川支群	石坂窯跡群	22-14地図3地点		大野城市教 育委員会	須恵器表採	踏查	無し	杯身2点表採:谷沢部 に須恵器杯身2点あ り.周辺に陥没痕灰 原なし.遺物量少. 8 c
36	同上	同上	D地点 O-A窯跡	1989年	同上		未報告	無し	奈良
37	同上	同上	D地点 O-B窯跡	同上	同上		同上	無し	奈良
38	同上	同上	D地点1窯跡	同上	同上		同上	無し	奈良
39	同上	同上	D地点2窯跡	同上	同上		同上	無し	奈良
40	同上	同上	D地点3窯跡	同上	同上		同上	無し	奈良
41	同上	同上	D地点4窯跡	同上	同上		同上	無し	奈良
42	同上	同上	D地点 5 窯跡	1990年5月~6 月	同上		同上	無し	8 c
43	同上	同上	22-15地図12地点 (旧a地点)		同上	須恵器表採	踏查	無し	谷底に灰原の流れの ような2次堆積の土あ り、遺物少量、8 c
44	同上	同上	22-15地図23地点	2007年4月23日	同上	須恵器片	同上	無し	杯蓋・杯身・甕:遺 物採集8c後半
45	同上	同上	22-15地図24地点	同上	同上	須恵器片	同上	無し	杯蓋. 8 c 中~後半
46	同上	同上	22-15地図25地点	同上	同上	灰原	同上	無し	灰原?2次堆積層. 8 c後半
47	同上	同上	22-14地図1地点		同上	灰原・器種 色々 (採 集)	同上	無し	杯身・蓋・皿・長頸 壺・鉢・盤・短頸壺 表採:灰原が見えた のは1ヶ所. その灰原 より上流にも散布. 範囲広い. 8 c
48	同上	同上	22-14地図2地点		同上	須恵器表採	同上	無し	身・蓋・皿表採:囲 んだ範囲より上もあ る可能性.8 c

番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
49	平野川支群	石坂窯跡群	22-17地図9地点	2007年4月24日	大野城市教 育委員会	灰原	踏查	無し	尾根の先端斜面・須 恵器多数. 8 c
50	同上	同上	22-17地図8地点	同上	同上	須恵器あり	同上	無し	谷上流から流れてき た可能性あり.8c
51	同上	同上	22-17地図6地点	同上	同上	灰原	同上	無し	杯蓋・杯身 川のそ ば倒木痕に須恵器多 数.8c中
52	同上	同上	22-17地図 5 地点 (旧15地点)		同上	須恵器	同上	無し	杯身・蓋2点のみ. 8 c
53	同上	同上	22-17地図 4 地点 (旧14地点)		同上	須恵器片多 数	同上	無し	杯身・蓋・鉄鉢:複数基あり.8c
54	同上	同上	22-17地図 3 地点 (旧13地点)		同上	灰原・須恵 器	同上	無し	杯蓋・甕or壺:草多 く範囲確定不能. 上 流から流れてきた可 能性. 8 c
55	同上	同上	F地点1号窯跡	2005年6月~8 月	同上		未報告	無し	7 c後半~8 c初
56	同上	同上	F地点 2 号窯跡	同上	同上		同上	無し	7 c後半~8 c初
57	同上	同上	F地点 3 号窯跡	同上	同上		同上	無し	7c後半~8c初
58	同上	同上	F地点 4 号窯跡	同上	同上		同上	無し	7 c後半~8 c初
59	同上	同上	22-15地図9地点		同上	須恵器	踏査	無し	杯蓋. 奈良
60	同上	同上	22-15地図10地点		同上	灰原	同上	無し	杯蓋・杯身. 奈良
61	同上	同上	22-15地図11地点		同上	灰原	同上	無し	杯蓋・杯身. 奈良
62	平野川支群	大谷窯跡群	22-15地図13地点		大野城市教 育委員会	須恵器あり	踏查	無し	平野台から山に上が る道に砕石とともに あり、細片散布、8 c?
63	同上	同上	22-15地図14地点	2007年6月	同上	須恵器あり	踏査・試掘	無し	2007年6月試掘調査 結果. 奈良・8 c
64	同上	同上	22-15地図16地点		同上	窯壁	踏查	無し	2ヶ所あり. 径10cm 位の窯壁片が谷部内 にあり. 単独の出 土. 8 c
65	同上	同上	22-15地図21地点		同上	須恵器	同上	無し	杯身・杯蓋:灰原は 不明(黒色土はある が須恵器は含まれな い).遺物は多量散 布,範囲広く多数. 8 c
66	同上	同上	22-15地図22地点		同上	須恵器あり	同上	無し	杯身・蓋・甕:灰原 不明. 急斜面. 8 c
67	牛頸川支群	城窯跡群	22-15地図19地点		大野城市教 育委員会	須恵器	踏査	無し	蓋杯・壺. 8c後
68	牛頸川支群	原浦窯跡群	22-15地図4地点		大野城市教育委員会	須恵器片	踏査	無し	甕. 奈良
69	同上	同上	22-15地図3地点		同上	須恵器片	同上	無し	甕. 奈良
70	同上	同上	22-15地図1地点		同上	須恵器片	同上	無し	甕. 8 c
71	同上	同上	22-15地図2地点		同上	灰原・須恵 器片	同上	無し	杯蓋・身・甕採集. 7 c 後半~8 c
72	同上	同上	22-18地図2地点		同上	須恵器片	同上	無し	・ 杯身・窯壁:遺物採集.8c
73	同上	同上	22-18地図7地点		同上	須恵器片	同上	無し	甕・杯蓋. 奈良前半
74	同上	同上	22-18地図8地点		同上	須恵器片	同上	無し	杯蓋・鉢. 8 c
75	牛頸川支群	城窯跡群	22-15地図20地点		大野城市教 育委員会	灰原	踏査	無し	8 c
76	同上	同上	22-15地図18地点		同上	灰原・須恵 器表採	同上	無し	蓋杯・大甕:遺物多量.7c末~8c前
77	同上	同上	22-15地図17地点		同上	須恵器あり	同上	無し	8 c
78	牛頸川支群	城の山窯跡	城の山窯跡	未調査			『大野城市史』下巻に写真掲 載		中通遺跡群の報告書 中周辺遺跡分布図に ドットあり27番
79	牛頸川支群	井手窯跡群	22-18地図4地点		大野城市教 育委員会	須恵器片	踏査	無し	杯. 8 c 前
80	同上	同上	22-18地図5地点		同上	須恵器片	同上	無し	長頸壺. 8 c 前半
81	同上	同上	22-18地図45(旧 8)地点	2007年4月23日	同上	須恵器あり		無し	杯身・高杯各1点. 別 地点からの流れ込み の可能性. 8 c
82	平野川支群	大谷窯跡群	名称未設定	2007年6月	大野城市教 育委員会	灰原	試掘調査	無し	砂防ダム建設に伴う 試掘調査.8 c



第154図 牛頸窯跡群詳細分布図 (10) (1 / 10,000)

番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
1	牛頸川支群	中通窯跡群				消滅	大野城市教育委員会1980『牛 頸中通遺跡群』	不明	昭和48年8月〜昭和50年8月間 に地元土地所有者自らの手に よる採土により消滅.
2	同上	同上				消滅	同上	不明	同上
3	同上	同上	C窯	1979年5月~9月	大野城市教育委員会 · 福岡県教育委員会	Δ	同上	有り	
4	同上	同上	B窯	同上	同上	0	同上	有り	
5	同上	同上	A-2窯	同上	同上	0	同上	有り	
6	同上	同上	A-1窯	同上	同上	Δ	同上	有り	
7	同上	同上	D-2窯	1979年11月~12 月・1981年3月	大野城市教育委員会	0	大野城市教育委員会1980『牛頸中通遺跡群』. 大野城市教育委員会1981『牛頸中通遺跡群Ⅱ』	有り	
8	同上	同上	D-1窯	1979年11月~12 月・1981年3月	同上	0	同上	有り	
9	牛頸川支群	ハセムシ窯跡 群						不明	大浦・野添・中通などの各報 告書でドットあり.
10	上大利支群	上平田窯跡群	1号窯跡	1972年2月~4月	福岡県教育委員会	×	大野城市教育委員会1980『牛 頸中通遺跡群』	無し	
11	同上	同上	2 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
12	同上	同上	3号窯跡	同上	同上	×	同上	無し	

14 牛 ^業 15 16	大利支群 類川支群 同上 同上	上平田窯跡群 原窯跡群 同上 同上	4号窯跡	1972年2月~4月 未調査	福岡県教育委員会	×	大野城市教育委員会1980『牛 頸中通遺跡群』	無し	
15	同上	同上		未調査					i e
16	同上							不明	『中通遺跡群』の報告書中周 辺遺跡分布図に3基あり、土 取りで灰原の一部を残すのみ と記載。
		同上	2号窯跡	未調査				不明	同上
17	同上			未調査				不明	同上
	IN J.	同上		2007年4月23日	大野城市教育委員会	須恵器 片	踏查	無し	蓋杯・窯壁:近所の住人による須恵器表採地点の教示、 が一トボール場の西に隣接した丘陵に散布、周囲の地形は 位変を受け不明。これまでの えられてきた原窯跡所在の丘 陵斜面と異なるため別ドット を付す、7初~7後。
18 牛頭	頸川支群	原浦窯跡群	22-15地 図8地点		大野城市教育委員会	須恵器 片	踏査	無し	甕. 8 c
19	同上	同上	22-15地 図7地点		同上	須恵器 片	同上	無し	奈良
20	同上	同上	22-15地 図6地点		同上	須恵器 片	同上	無し	杯身・杯頸. 8 c
21	同上	同上	22-15地 図5地点		同上	須恵器 片	同上	無し	8 c
22 牛薯	頸川支群	井手窯跡群	1号窯	1988年1月~2月	大野城市教育委員会	0	大野城市教育委員会1989『牛 頸井手窯跡群』	無し	
23	同上	同上	2号窯	同上	同上	0	同上	無し	
24	同上	同上	3号窯	同上	同上	Δ	同上	無し	
25 牛頭	頸川支群	ハセムシ窯跡 群	1-Ⅲ号窯 跡	1987年11月~88年 10月	大野城市教育委員会· 大谷女子大学	× 須	大野城市教育委員会1989『牛 頸ハセムシ窯跡群Ⅱ』	有り	
26	同上	同上	1- I 号窯 跡	同上	同上	Δ	同上	不明	
27	同上	同上	1-Ⅱ号窯 跡	同上	同上	0	同上	有り	
28	同上	同上	7- I 号窯 跡	同上	同上	0	同上	無し	
29	同上	同上	12-IX号窯 跡	同上	同上	0	同上	無し	
30	同上	同上	12-Ⅷ号窯 跡	同上	同上	Δ	同上	無し	
31	同上	同上	12-Ⅶ号窯 跡	同上	同上	0	同上	無し	
32	同上	同上	12-VI号窯 跡	同上	同上	0	同上	無し	
33	同上	同上	12-X 号窯 跡	同上	同上	Δ	同上	無し	
34	同上	同上	12-V 号窯 跡	同上	同上	0	同上	無し	
35	同上	同上	12-IV号窯 跡	同上	同上	0	同上	無し	
36	同上	同上	12-Ⅲ号窯 跡	同上	同上	0	同上	無し	
37	同上	同上	12-Ⅱ号窯 跡	同上	同上	Δ	同上	無し	
38	同上	同上	12- I 号窯 跡	同上	同上	0	同上	無し	
39	同上	同上	6-Ⅲ号窯 跡	同上	同上	0	同上	無し	
40	同上	同上	6-Ⅱ号窯 跡	同上	同上	0	同上	無し	
41	同上	同上	6- I 号窯 跡	同上	同上	0	同上	無し	
42	同上	同上	6B- I 号窯 跡	同上	同上	×	同上	不明	
43	同上	同上	27号窯	1992年9月~11月	同上	0	大野城市教育委員会1993『牛 頸ハセムシ窯跡群Ⅲ』	無し	
44	同上	同上	29- I 号窯	同上	同上	0	同上	無し	
45	同上	同上	26-Ⅱ号窯	同上	同上	0	同上	無し	
46	同上	同上	26- I 号窯	同上	同上	0	同上	無し	
47	同上	同上	22-IV号窯 跡	1987年11月~88年 10月	同上	0	大野城市教育委員会1989『牛 頸ハセムシ窯跡群Ⅱ』	無し	
48	同上	同上	22-Ⅲ号窯 跡	同上	同上	0	同上	無し	

番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
49	牛頸川支群		22-Ⅱ号窯 跡	1987年11月~88年 10月	大野城市教育委員会· 大谷女子大学	0	大野城市教育委員会1989『牛 頸ハセムシ窯跡群Ⅱ』	無し	
50	同上	同上	22- I 号窯 跡	同上	同上	0	同上	無し	
51	同上	同上	23- I 号窯 跡	同上	同上	0	同上	無し	
52	同上	同上	28号窯	1992年9月~11月	同上	0	大野城市教育委員会1993『牛 頸ハセムシ窯跡群Ⅲ』	無し	
53	同上	同上	18- I 号窯	1987年7月~8月	同上	0	大野城市教育委員会1988『牛 頸ハセムシ窯跡群 I 』	無し	
54	同上	同上	18-Ⅱ号窯	同上	同上	Δ	同上	無し	
55	同上	同上	18-Ⅲ号窯	同上	同上	0	同上	無し	
56	同上	同上	18-V号窯	同上	同上	0	同上	無し	
57	同上	同上	18-VI号窯	同上	同上	0	同上	無し	
58	同上	同上	18- Ⅶ 号窯	同上	同上	Δ	同上	無し	
59	同上	同上	18-Ⅷ号窯	同上	同上	0	同上	無し	
60	同上	同上	19- I 号窯	同上	同上	0	同上	無し	
61	同上	同上	20- I 号窯	同上	同上	Δ	同上	無し	
62	同上	同上	20-Ⅱ号窯	同上	同上	Δ	同上	無し	
63	同上	同上	20-Ⅲ号窯	同上	同上	0	同上	無し	
64	牛頸川支群	道ノ下窯跡群	K地区14号 窯跡	1983年6月	福岡県教育委員会	0	福岡県教育委員会1988『牛頸 窯跡群 I 』	無し	
65	同上	同上	K地区15号 窯跡	同上	同上	0	同上	無し	8 c 前半
66	同上	同上	K地区16号 窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
67	同上	同上	K地区17号 窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
68	同上	同上	K地区18号 窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
69	同上	同上	J地区50号 窯跡	1985年8月	同上	0	同上	無し	
70	牛頸川支群	井手窯跡群	A-2地区3 号窯跡	1982年11月	福岡県教育委員会	須	福岡県教育委員会1988『牛頸窯跡群I』	無し	
71	同上	同上	A-3地区9 号窯跡	1983年1月	同上	0	同上	無し	
72	同上	同上	A-3地区8 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
73	同上	同上	A-3地区7 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
74	同上	同上	A-3地区4 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
75	同上	同上	A-3地区5 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
76	同上	同上	A-3地区6 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	6号窯は確認のみ, 工事区域 外のため未調査.
77	同上	同上	22-18地図 1地点		大野城市教育委員会	灰原 (窯 跡)	踏査	無し	窯跡?遺物採集,番号10の県 調査A-3地区6号窯の可能性あり、8 c
78	同上	同上	22-18地図 44(旧7) 地点	2007年4月23日	同上	灰原	灰原	無し	蓋杯・甕・壺・窯壁 斜面の 倒木痕より多数出土(番号10 県調査A-3区6号窯灰原の可能 性あり). 8 c
79	同上		22-18地図 43(旧6) 地点	同上	同上	須恵器あり	灰原?	無し	蓋杯多数、灰原の2次堆積の 可能性(番号11 22-18地図 1地点の斜面下に位置し灰原 の可能性あり)、8 c
80	同上	同上	B-4地区49 号窯跡	1984年12月~1985 年5月	福岡県教育委員会	0	福岡県教育委員会1989『牛頸 窯跡群 II 』	無し	
81	同上	同上	B-4地区47 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
82	同上	同上	B-4地区48 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
83	牛頸川支群	ハセムシ窯跡 群		2008年	大野城市教育委員会	灰原	踏査	無し	

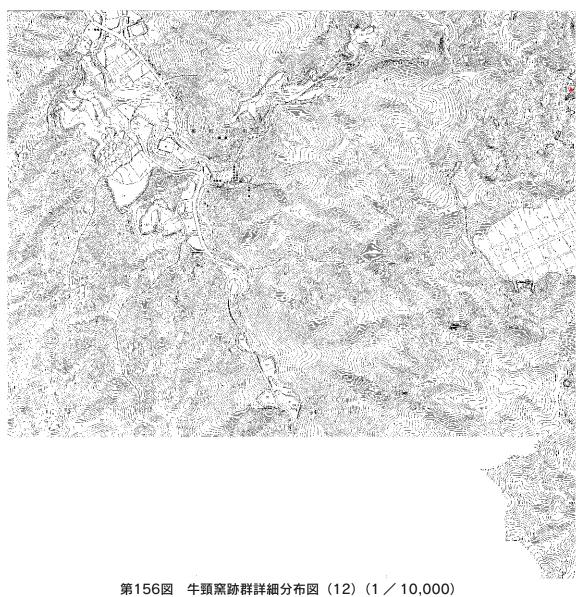
◎は窯跡実測図があり、残存良好なもの。○は窯跡実測図があり、残存やや良なもの。△は窯跡実測図があり、残存不良なもの。 ×は窯跡実測図のないもの。「須」は須恵器の実測図のみあるもの。



第155図 牛頸窯跡群詳細分布図(11)(1/10,000)

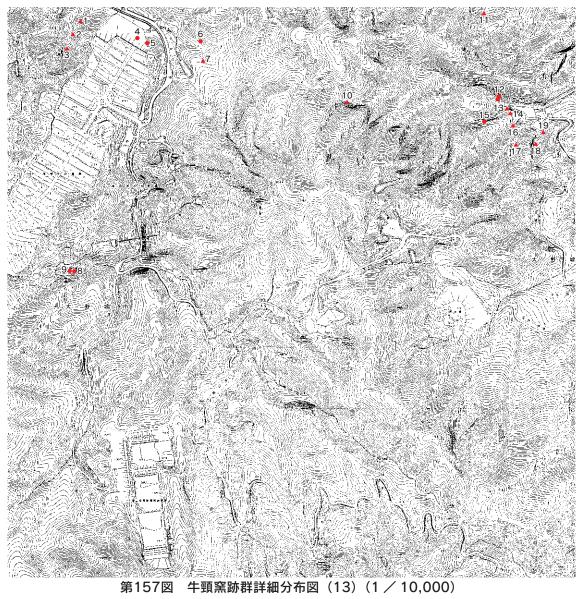
	番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
	1	佐野支群	野口窯跡群		未調査					2基以上『太宰府・佐野地区遺跡群
Ī	2	同上	同上		同上					Ⅲ』分布図にドットあり番号34.

◎は窯跡実測図があり、残存良好なもの。○は窯跡実測図があり、残存やや良なもの。△は窯跡実測図があり、残存不良なもの。※は窯跡実測図のないもの。「須」は須恵器の実測図のみあるもの。



番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
1	平野川支群	石坂窯跡群	22-17地図13地点	2007年4月26日	大野城市教育委員会	須恵器・土 師器あり	踏査	無し	杯身 谷全体が土砂崩 れ.8c代

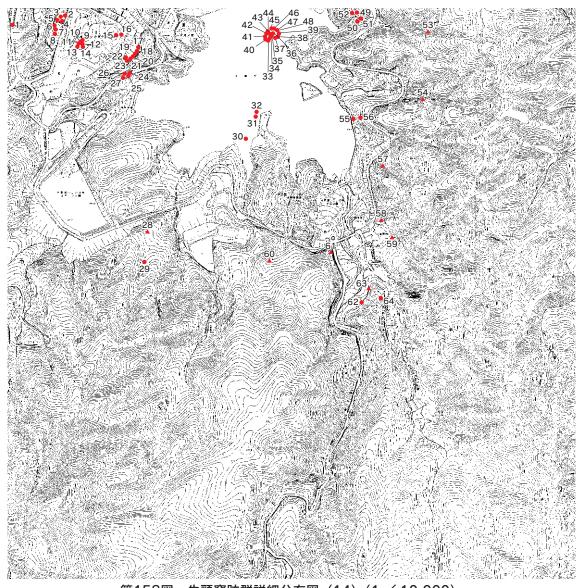
◎は窯跡実測図があり、残存良好なもの。○は窯跡実測図があり、残存やや良なもの。△は窯跡実測図があり、残存不良なもの。※は窯跡実測図のないもの。「須」は須恵器の実測図のみあるもの。



番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
1	平野川支群	石坂窯跡群	22-17地図10地 点	2007年4月24日	大野城市教 育委員会	須恵器あり	踏査	無し	短頸壺・甕あり ややロー リングを受ける. 8 c
2	同上	同上	22-17地図11地 点	同上	同上	須恵器あり	同上	無し	土師器・須恵器 (蓋) ローリングを受ける.8 c
3	同上	同上	22-17地図12地 点	同上	同上	須恵器あり	同上	無し	杯蓋. 8 c
4	同上	同上	C地点1号窯跡	1983年2月~3月	同上	0	大野城市教育委員会 1985『牛頸石坂窯跡-C 地点-』	無し	
5	同上	同上	C地点2号窯跡	同上	同上	須	同上	無し	
6	同上	同上	22-18地図9地 点		同上	灰原・須 恵器表採	踏査	無し	杯身・杯蓋・皿・大甕. 奈 良
7	同上	同上	22-18地図 26(旧17)地点		同上	須恵器小 片表採	同上	無し	クリークで表採. 8 c
8	同上	同上	E地点3号窯跡	1995年5月~7月	同上	0	大野城市教育委員会 1997『牛頸石坂窯跡-E 地点-』	無し	
9	同上	同上	E地点 2 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	

番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
10	牛頸川支群	足洗川窯跡群	22-18地図 14(旧5)地点		大野城市教 育委員会	須恵器表 採	踏查	無し	小片. 7 c 後半
11	牛頸川支群	井手窯跡群	22-18地図6地 点		大野城市教 育委員会	須恵器片	踏查	無し	須恵器片. 8 c
12	牛頸川支群	足洗川窯跡群	22-18地図 11(旧2)地点		大野城市教 育委員会	須恵器あり	踏查	無し	須恵器焼台:厚さ4~50cm 幅5~6m風倒木によりえぐ れた穴から露出.8 c
13	同上	同上	22-18地図 10(旧1)地点		同上	須恵器表 採	同上	無し	8 c
14	同上	同上	22-18地図 17(旧8)地点		同上	須恵器あり	同上	無し	大甕(外:擬格子・内同心 円文). 8 c
15	同上	同上	22-18地図 18(旧9)地点		同上	灰原・須 恵器あり	同上	無し	大甕(外:擬格子・内同心 円文). 8 c
16	同上	同上	22-18地図 21 (旧12) 地点		同上	須恵器あり	同上	無し	須恵器小片:沢のえぐれた 面に黒い土露出.8 c
17	同上	同上	22-18地図 22(旧13)地点		同上	須恵器あり	同上	無し	小片. 8 c
18	同上	同上	22-18地図 24(旧15)地点		同上	須恵器あり	同上	無し	大甕片:丘陵斜面に大甕あり.8c
19	同上	同上	22-18地図 23 (旧14) 地点		同上	須恵器あり	同上	無し	8 c 後

◎は窯跡実測図があり、残存良好なもの。○は窯跡実測図があり、残存やや良なもの。△は窯跡実測図があり、残存不良なもの。×は窯跡実測図のないもの。「須」は須恵器の実測図のみあるもの。



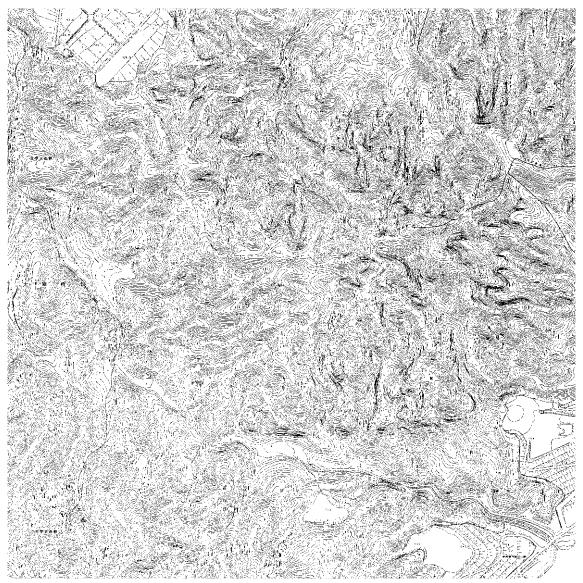
第158図 牛頸窯跡群詳細分布図 (14) (1/10,000)

番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
1	牛頸川支 群	井手窯跡 群	A-1地区1 号窯跡	1982年10月	福岡県教育 委員会	0	福岡県教育委員会1988『牛頸窯跡 群 I 』	無し	
2	同上	同上	B-4地区 46号窯跡	1984年12月~ 1985年5月	同上	0	福岡県教育委員会1989『牛頸窯跡 群Ⅱ』	無し	
3	同上	同上	B-4地区 43号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
4	同上	同上	B-4地区 44号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
5	同上	同上	B-4地区 45号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
6	同上	同上	B-4地区 41号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
7	同上	同上	B-4地区 42号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
8	同上	同上	B-4地区 40号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
9	同上	同上	B-2地区 23号窯跡	1984年7月	同上	0	福岡県教育委員会1988『牛頸窯跡 群 I 』	無し	
10	同上	同上	B-2地区 24号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	

番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
11	牛頸川支 群	井手窯跡 群	B-2地区 25号窯跡	1984年7月	福岡県教育 委員会	©	福岡県教育委員会1988『牛頸窯跡 群 I 』	無し	
12	同上	同上	B-2地区 26号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
13	同上	同上	B-2地区 27号窯跡	同上	同上	©	同上	無し	
14	同上	同上	B-2地区 28号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
15	同上	同上	B-1地 区29号窯 跡	1983年11月~ 1984年4月	同上	0	福岡県教育委員会1989『牛頸窯跡 群Ⅱ』	無し	
16	同上	同上	B-1地 区33号窯 跡	同上	同上	0	同上	無し	
17	同上	同上	B-1地 区21号窯 跡	同上	同上	©	同上		遺物出土せず.
18	同上	同上	B-1地 区20号窯 跡	同上	同上	0	同上	無し	
19	同上	同上	B-1地 区19号窯 跡	同上	同上	0	同上	無し	
20	同上	同上	B-1地 区30号窯 跡	同上	同上	0	同上	無し	
21	同上	同上	B-1地 区31号窯 跡	同上	同上	0	同上	無し	
22	同上	同上	B-1地 区32号窯 跡	同上	同上	0	同上	無し	
23	同上	同上	B-1地 区22号窯 跡	同上	同上	0	同上	無し	
24	牛頸川支 群	足洗川窯 跡群	C地区34 号窯跡	1983年11月~ 1984年9月	福岡県教育 委員会	0	福岡県教育委員会1988『牛頸窯跡群 I 』	無し	
25	同上	同上	C地区35 号窯跡	同上	同上	Δ	同上	無し	
26	同上	同上	C地区36 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
27	同上	同上	C地区37 号窯跡	同上	同上	Δ	同上	無し	
28	同上	同上	22-18地 図34(旧 25)地点		大野城市教 育委員会	須恵器あり	踏查		杯:谷の上位まで遺物あり.
29	同上	同上	22-18地 図35(旧 26)地点		同上	灰原	同上		黒い土が谷中にあり、周辺に 灰原があると考えられる.
30	牛頸川支 群	笹原窯跡 群	M2地区69 号窯跡	1986年5月	福岡県教育 委員会	0	福岡県教育委員会1989『牛頸窯跡 群 II』	無し	
31	同上	同上	M1地区51 号窯跡	1985年10月	同上	0	同上	無し	
32	同上	同上	M1地区52 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
33	牛頸川支 群	長者原窯 跡群	I地区53 号窯跡	1986年4月	福岡県教育 委員会	0	福岡県教育委員会1989『牛頸窯跡 群 II 』	無し	
34	同上	同上	I地区54 号窯跡	同上	同上	Δ	同上	無し	
35	同上	同上	I地区55 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
36	同上	同上	I地区56 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
37	同上	同上	I地区57 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
38	同上	同上	I地区58 号窯跡	同上	同上	Δ	同上	無し	
39	同上	同上	I地区59 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
40	同上	同上	I地区60 号窯跡	同上	同上	Δ	同上	無し	窯が削られており、遺物無 し.

番号	支群名	窯跡群名	窯跡名	調査年月日	調査主体	状態	報告書	杯Hの有無	備考
41	牛頸川支 群	長者原窯 跡群	I地区61 号窯跡	1986年4月	福岡県教育 委員会	Δ	福岡県教育委員会1989『牛頸窯跡 群II』	無し	
42	同上	同上	I地区62 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
43	同上	同上	I地区63 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
44	同上	同上	I地区68 号窯跡	同上	同上	Δ	同上	無し	
45	同上	同上	I地区64 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
46	同上	同上	I地区66 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
47	同上	同上	I地区65 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
48	同上	同上	I地区67 号窯跡	同上	同上	©	同上	無し	
49	牛頸川支 群	道ノ下窯 跡群	G地区10 号窯跡	1983年5月	福岡県教育 委員会	Δ	福岡県教育委員会1988『牛頸窯跡 群 I 』	無し	
50	同上	同上	G地区11 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
51	同上	同上	G地区12 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
52	同上	同上	G地区13 号窯跡	同上	同上	0	同上	無し	
53	牛頸川支 群	長者原窯 跡群	22-19地 図13地点		大野城市教 育委員会	須恵器片	踏査	無し	杯身2採集. 奈良
54	同上	同上	22-19地 図9地点		同上	須恵器片	同上	無し	8 c
55	同上	同上	22-19地 図10地点		同上	灰原・須恵 器片	同上	無し	灰原・須恵器片. 8 c
56	同上	同上	22-19地 図11地点		同上	灰原・須恵 器片	同上	無し	灰原・須恵器片. 8 c
57	同上	同上	22-19地 図12地点		同上	須恵器片	同上	無し	須恵器片. 8 c
58	同上	同上	22-19地 図7地点		同上	須恵器片1 点	同上	無し	須恵器片1点.8 c
59	同上	同上	22-19地 図6地点		同上	須恵器片1 点	同上	無し	8 c
60	牛頸川支 群	笹原窯跡 群	22-18地 図41(旧 32)地点		大野城市教 育委員会	須恵器あり	踏查	無し	短頸壺肩部. 8 c
61	同上	同上	22-19地 図8地点		同上	須恵器片多 数	同上	無し	杯身. 8 c
62	同上	同上	22-19地 図1地点		同上	灰原・須恵 器片	同上	無し	灰原・須恵器片. 8 c
63	同上	同上	22-19地 図2地点		同上	灰原・須恵 器片	同上	無し	灰原・須恵器片. 8 c
64	同上	同上	22-19地 図3地点		同上	灰原・須恵 器片	同上	無し	灰原・須恵器片.

◎は窯跡実測図があり、残存良好なもの。○は窯跡実測図があり、残存やや良なもの。△は窯跡実測図があり、残存不良なもの。 ×は窯跡実測図のないもの。「須」は須恵器の実測図のみあるもの。



第159図 牛頸窯跡群詳細分布図 (15) (1/10,000)

【牛頸窯跡群調査関係文献】

番号	編著者	報告書名	シリーズ	発行元	発行年
市1	副島邦弘・舟山良一	牛頸中通遺跡群	第4集	大野城市教育委員会	1980
市2	舟山良一	牛頸平田窯跡-D地点-	第5集	大野城市教育委員会	1980
市3	舟山良一	牛頸平田窯跡-E地点-	第7集	大野城市教育委員会	1981
市4	舟山良一	牛頸平田窯跡-F地点-	第8集	大野城市教育委員会	1982
市5	舟山良一	牛頸中通遺跡群Ⅱ	第9集	大野城市教育委員会	1981
市6	舟山良一	牛頸石坂窯跡-C地点-	第14集	大野城市教育委員会	1985
市7	舟山良一	野添窯跡群	第22集	大野城市教育委員会	1987
市8	中村浩	牛頸ハセムシ窯跡群 I	第23集	大野城市教育委員会	1988
市9	向直也	牛頸井手窯跡群	第29集	大野城市教育委員会	1989
市10	中村浩	牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ	第30集	大野城市教育委員会	1989
市11	舟山良一	牛頸後田窯跡群	第33集	大野城市教育委員会	1991
市12	舟山良一	牛頸小田浦窯跡群	第35集	大野城市教育委員会	1992
市13	舟山良一	牛頸月ノ浦窯跡群	第39集	大野城市教育委員会	1993
市14	舟山良一	牛頸小田浦遺跡群	第40集	大野城市教育委員会	1993
市15	中村浩	牛頸ハセムシ窯跡群Ⅲ	第41集	大野城市教育委員会	1993
市16	石木秀啓	牛頸石坂窯跡-E地点-	第49集	大野城市教育委員会	1997
市17	中村浩	牛頸本堂遺跡群 I - 第3次調査-	第61集	大野城市教育委員会	2003
市18	石木秀啓	牛頸野添遺跡群 I -第2·3次調査-	第62集	大野城市教育委員会	2004
市19	中村浩	牛頸本堂遺跡群Ⅱ-第5次調査(第1冊)-	第64集	大野城市教育委員会	2004
市20	石木秀啓	牛頸野添遺跡群Ⅱ-第4・5次調査-	第66集	大野城市教育委員会	2005
市21	中村浩·石木秀啓	牛頸本堂遺跡群Ⅲ-第5次調査(第2冊)-	第68集	大野城市教育委員会	2005
市22	石木秀啓	牛頸野添遺跡群IV-第7次調査-	第70集	大野城市教育委員会	2006
市23	林潤也	牛頸小田浦窯跡群Ⅱ-79地点の調査-	第73集	大野城市教育委員会	2007
市24	石木秀啓	牛頸梅頭遺跡群 I - 第1次調査-	第60集	大野城市教育委員会	2007
県1	小田富士雄・柳田康雄	野添・大浦窯跡群	第43集	福岡県教育委員会	1970
県2	川述昭人	九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告VI		福岡県教育委員会	1975
県3	池辺元明	牛頸窯跡群I	第80集	福岡県教育委員会	1988
県4	池辺元明	牛頸窯跡群Ⅱ	第89集	福岡県教育委員会	1989
春1	平田定幸・丸山康晴	浦ノ原窯跡群	第11集	春日市教育委員会	1981

春2	丸山康晴・平田定幸	春日地区遺跡群 I	第12集	春日市教育委員会	1982
春3	丸山康晴・平田定幸	春日地区遺跡群Ⅱ	第14集	春日市教育委員会	1983
春4	平田定幸	春日地区遺跡群VI	第21集	春日市教育委員会	1991
春5	平田定幸	春日市埋蔵文化財調査年報6		春日市教育委員会	1997
太1	酒井仁夫	神ノ前窯跡	第2集	太宰府町教育委員会	1979
太2	山本信夫	宮ノ本遺跡	第3集	太宰府町教育委員会	1980
太3	狭川真一	篠振窯跡群	第11集	太宰府市教育委員会	1987
太4	中島恒次郎	太宰府·佐野地区遺跡群 Ⅱ	第17集	太宰府市教育委員会	1991
太5	山本信夫・中島恒次郎	宮ノ本遺跡Ⅱ−窯跡篇−	第10集	太宰府市教育委員会	1992
太6	狭川真一	太宰府·佐野地区遺跡群IV	第21集	太宰府市教育委員会	1993
太7	井上信正	太宰府・吉松地区遺跡群1	第77集	太宰府市教育委員会	2005
太8	下山覚・松崎卓郎・ 平島義孝・小石龍信	太宰府・佐野地区遺跡群20	第80集	太宰府市教育委員会	2005
そ1	坂詰秀一	筑前平田窯跡		雄山閣出版	1974

図 版



(1) 牛頸窯跡群遠景



(2) 試掘調査状況



(1) 小田浦40 - [号窯跡出土須恵器



(2) 日ノ浦遺跡 SK20出土須恵器



(1) 月ノ浦 [号窯跡出土軒丸瓦



(2) 野添7次2号窯跡出土陶棺



(1) 中通 A-2号窯跡



(2) 同窯跡排煙部と溝



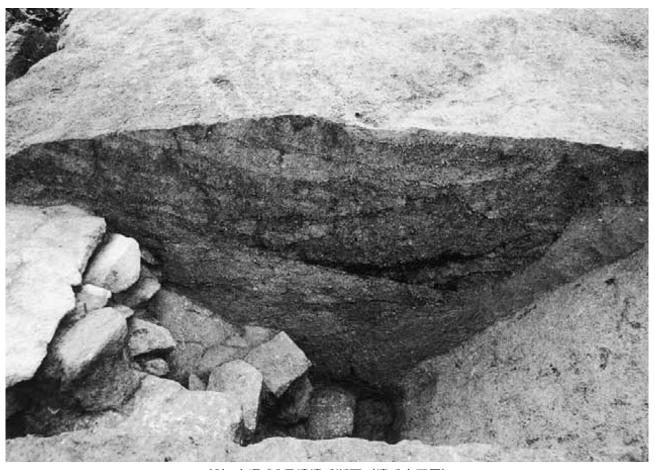
(1) 中通 B 窯跡



(2) 同窯跡排煙部



(1) 中通 D 地点気球写真(窯跡と古墳)



(2) 中通 S3号墳墳丘断面(墳丘内灰層)



(1) 平田 D 窯跡全景



(2) 同窯跡最終床面と焼台



(1) 平田 D 窯跡床面断面



(2) 同窯跡(上部より地下式窯の様子)



(1) 平田 D 窯跡灰原蓋杯配置状況



(2) 同(蓋とした須恵器甕片除去後)



(1) 後田63地点窯跡検出状況



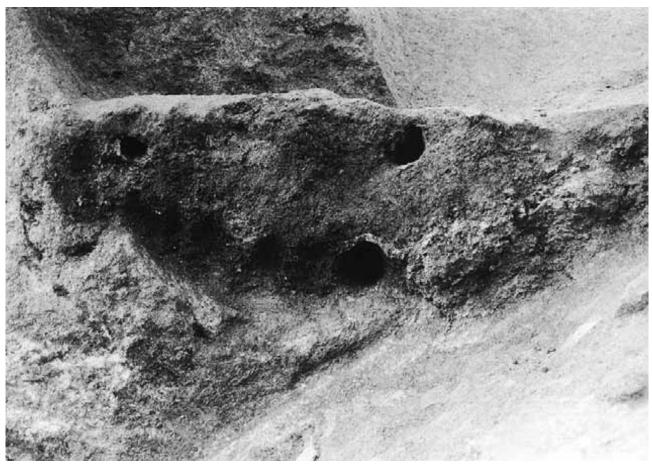
(2) 後田63 - I 号窯跡側壁工具痕



(1) 小田浦37 - I 号窯跡



(2) 同窯跡床面断面



(1) 小田浦37 - I 号窯跡構築材の痕跡を示す穴(窯尻部分壁面)



(2) 小田浦33 - I 号窯跡構築材の痕跡を示す穴(壁面)



(1) 小田浦40 - [号窯跡



(2) 小田浦40 - I 号窯跡側壁補修痕



(1) 後田60 - [号窯跡全景



(2) 同遠景



(1) 石坂窯跡群 E 地点全景



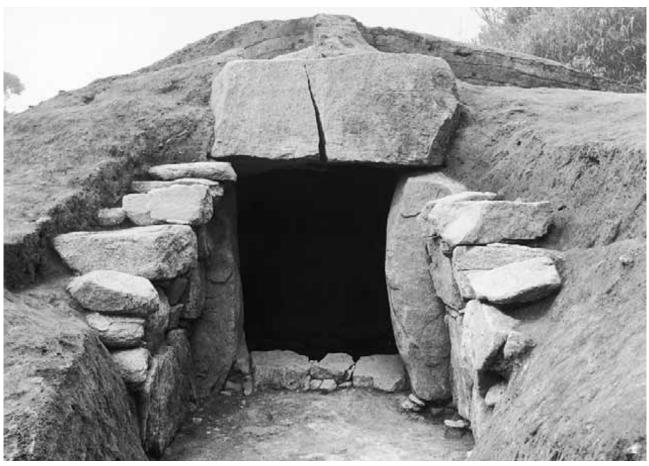
(2) 本堂5次6号窯跡



(1) 塚原5号墳



(2) 同全景



(1) 中通古墳石室



(2) 同遺物出土状況



(1) 後田2号墳



(2) 同遺物出土状況



(1) 日ノ浦遺跡 SK13



(2) 日ノ浦遺跡 SK16



(1) 塚原遺跡



(2) 同2号掘立柱建物



(1) 大谷3号窯跡左側壁



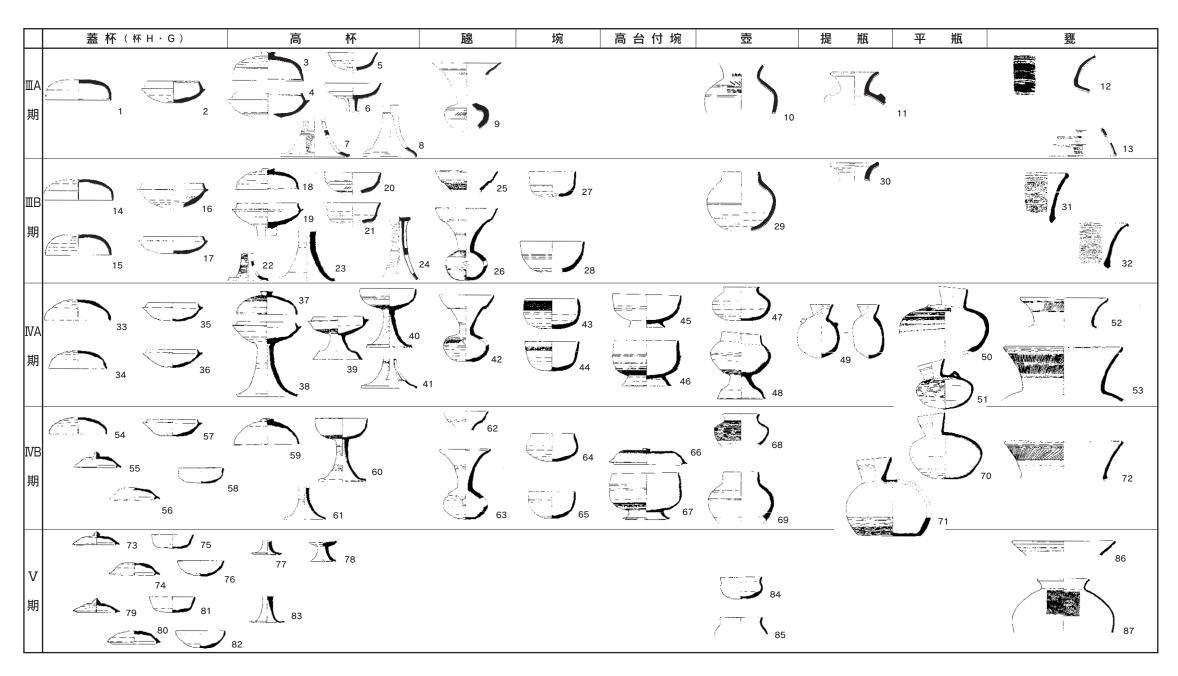
(2) 大谷3号窯跡右側壁



(1) 大谷3号窯跡排煙部 (内側から)



(2) 大谷3号窯跡排煙部(外側から)



(出土遺構一覧)

ⅢA期 1~13

IIIB期 14~17·20·21·24·29·30 18·19·22·23·25·28 26·27·31·32

IVA期 33~42·45·48·52 43·44·46·47·49 50 51 53

野添6号窯跡

野添9号窯跡 野添12号窯跡 惣利1号窯跡

後田63-I号窯跡 小田浦38-I号窯跡 後田45-I号窯跡 野添2次SB01 小田浦37-I号窯跡

IVB期 54·57·59·60·66·67·70~72 55·56·58·61~65·68·69

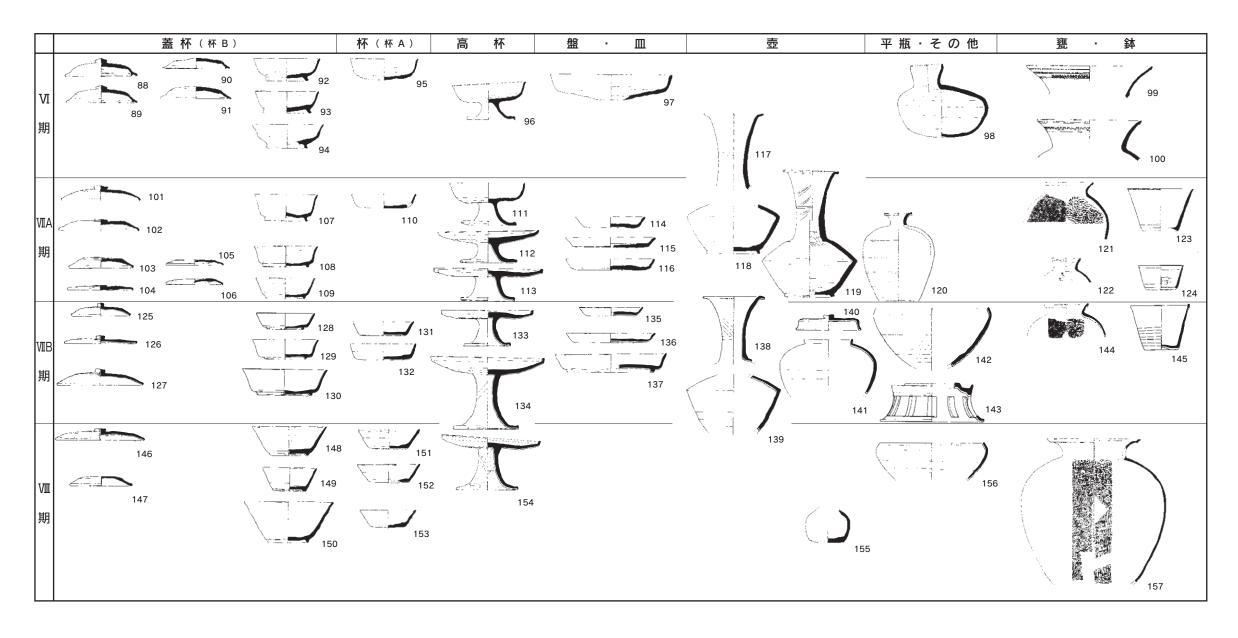
小田浦50-I号窯跡 後田60-I号窯跡

※杯A·B·G·Hは独立行政法人奈良文化財研究所の分類を準用している。

※各時期について、表の上位にあるものが古く下位のものが新しいと考えるものを配置するようにしたが、すべてではない。

※IVB期の杯Hと杯Gは並存する。

※V期の蓋杯については並存すると考える。



(出土遺構一覧)

※杯A·B·G·Hは独立行政法人奈良文化財研究所の分類を準用している。

※各時期について、表の上位にあるものが古く下位のものが新しいと考えるものを配置するようにしたが、すべてではない。

※VIIB期の杯Bの場合は並存すると考える。

報告書抄録

ふりがな	うしくびかまね	あとぐん										
書名	牛頸窯跡群											
副書名	総括報告書											
巻次	Ι											
シリーズ名	大野城市文化則	:野城市文化財調査報告書										
シリーズ番号	第77集	7.7集										
編著者名	舟山良一・石川	山良一・石川健										
編集機関	大野城市教育	野城市教育委員会										
所在地	〒816-8510 ネ	畐岡県大野城市	曙町二	丁目2看	番1号	電話(92 (501)	2211				
発行年月日	2008年3月31日											
ふりがな 所収遺跡名		がな 生地		ード 遺跡番号	北緯。/ "	東経。/ "	調査期間	調査面積	調査原因			
うしくびかまあとぐん 牛頸窯跡群	ふくおかけんおおのじょ 福岡県大野城市	うしうしくび・かみおおり お牛頸・上大利										
所収遺跡名	種別	主な時代	主な	€遺構	主な	遺物		特記事項	ĺ			
牛頸窯跡群	須恵器窯跡群	須恵器窯跡群 古墳・奈良 窯跡 須恵器										
要約	括報告書であ 上と想定され	ら中頃にかけて ある。発掘調査 いることから50 遺跡や墳墓を含む	した基 0 基を	数が300 超える窯	基を超え 跡群と	こるが、 考えられ	未調査の いる。本幸	ものが19	50基以 は、関			

大野城市文化財調查報告書 第77集

牛 頸 窯 跡 群

-総括報告書 I -

平成20年3月31日

発 行 大野城市教育委員会

福岡県大野城市曙町2-2-1

印 刷 大道印刷株式会社

春日市日の出町6丁目23番地

